静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第234集

中屋遺跡

（第二東名No.130地点）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市－2

（第1分冊）

2010

中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第234集

中屋遺跡

（第二東名No.130地点）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市－2

（第1分冊）

2010

中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

本書は、浜松市浜北区に所在する中屋遺跡の発掘調査報告書です。第二東名高速道路の建設に伴って行われた浜松市内の発掘調査では、すでに刊行しました大門西遺跡・大平遺跡に次ぐ、２冊目の報告書となります。

中屋遺跡では、溝と土塁で囲まれた大規模な施設や、国内で初めての出土となる中世螺鈿鞍など、当初予想だにしなかった数多くの発見があり、マスコミに大きく取り上げられたこともあって、調査中から話題となってきました。

本書では、調査によって発見された遺構や遺物を報告するとともに、それらを検討することで得られた新たな知見も提示されています。例えば、当研究所が誇る高度な保存処理技術によってよみがえった螺鈿鞍には、螺鈿装飾に加えて覆輪が装着されていた痕跡が確認されていますし、溝と土塁で囲まれた大規模な施設については、瓦などの分析から寺院である可能性が高いという見解が示されています。そして、数百年におよぶ遺跡の盛衰や集落の移り変わりなど、現在の地割りにつながる各時代の土地利用の様子も明らかになっています。

中屋遺跡の調査は端緒についたばかりですが、個別の遺構・遺物の分析にとどまらず、様々な視点から地域の歴史の一端を明らかにできたことが、今回の調査の大きな成果であるといえます。

現在この地域では、産業や自然、史跡、文化財といった地域資源つなぐ散策コース「遠州山辺の道」の整備事業が進められており、中屋遺跡もそのルートの一つとなっています。中屋遺跡では、現在でもいくつかの場所で土塁の高まりなどをみることができますが、本書にまとめた成果は、訪れた方が遺跡の姿をより具体的にイメージいただける内容になっていると思います。

今回得られた多くの成果は、猛暑や極寒のなかでも日々地道な調査に取り組んだ調査担当者、限られた期間の中で膨大な遺物や記録に向き合った報告書執筆者、そして作業に携わった多くの作業員諸氏の労苦の賜物といわねばなりません。最後に、調査に多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様、中日本高速道路株式会社、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会をはじめとする多くの方々に、心から御礼申し上げます。

平成 22 年 12 月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　　石田　彰

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第234集

中屋遺跡

目次

〔第1分冊〕

第1章　調査の方法と経過 …… 1

1　調査に至る経緯 …… (及川) 2
2　調査の体制 …… (武田) 4
3　調査の方法 …… (武田) 5
4　調査の経過 …… (武田) 7

第2章　位置と環境 …… 15

1　遺跡の位置 …… (武田) 16
2　地理的環境 …… (足立) 17
3　歴史的環境 …… (足立) 20

第3章　中世～近世 …… 25

1　概要 …… (武田) 26
2　大溝・土塁 …… (武田) 32
3　溝 …… (武田) 80
4　河川 …… (武田) 123
5　掘立柱建物 …… (溝口) 174
6　小穴 …… (溝口) 220
7　井戸 …… (溝口) 229
8　土坑 …… (溝口) 239
9　埋葬遺構
（1）埋葬方法と年代 …… (足立) 276
（2）遺構と遺物 …… (武田) 277
10　包含層・攪乱出土遺物 …… (溝口) 306

〔第２分冊〕

第４章　古代 …… 323

1　概要 ……（武田） 324
2　竪穴建物 ……（武田） 326
3　掘立柱建物 ……（武田） 347
4　小穴 ……（武田） 385
5　土坑 ……（武田） 389
6　溝 ……（武田） 397
7　包含層・攪乱出土遺物 ……（武田） 400

第５章　保存処理 …… 405

1　瓜文螺鈿鞍の保存処理 ……（西尾） 406
2　金属製品の保存処理 ……（大森） 416

第６章　理化学的分析 …… 417

1　出土木製品の樹種 ……（小川・鈴木三男） 418
2　鉄滓の金属学的調査 ……（大澤・鈴木瑞穂） 449

第７章　総括 …… 457

1　中屋遺跡出土瓜文螺鈿鞍について ……（小松） 458
2　中世瓦 ……（武田） 464
3　中世土器・陶磁器について ……（溝口） 475
4　中世の墨書土器 ……（武田） 480
5　まとめ ……（足立） 491

図版 / 抄録

例　言

1．本書は、静岡県浜松市浜北区根堅に所在する中屋遺跡の発掘調査報告書である。
2．本報告書では、基本的に平成22年4月現在の市区町名で記し、必要に応じて旧市町村名を併記している。なお、所属については、当時の所属機関名を記している。
3．第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、市町村単位にて実施している。浜松市では本報告書が2冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浜松市－2」とした。
4．本報告書は「第1分冊」と「第2分冊」によって構成されている。
5．調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中まで日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度まで文化課）の指導のもと、 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
6．現地調査・資料整理の期間と担当者については、第1章に別記した。
7．本報告書の執筆は、及川司、武田寛生、足立順司、溝口彰啓、西尾太加二、大森信宏（以上、当研究所）、小川とみ（東北大学植物園）、鈴木三男（東北大学植物園）、大澤正己（九州テクノリサーチ）、鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ）、小松大秀（東京国立博物館）がおこなった。
8．各章・節・項の執筆者は、目次に名前を明記した。
9．本書で掲載した写真のうち、遺構写真は各調査担当者と富樫孝志、井鍋誉之が、遺物写真は杉山すず代が、作業状況写真等は各調査担当者が撮影した。
10．木製品と金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
11．螺鈿鞍の復元イラストは、西尾太加二が作成した。
12．現地調査においては、小和田哲男氏（静岡大学）、中井均氏（米原町教育委員会）、向坂鋼二氏（当研究所評議員）、村田修三氏（大阪大学）に調査指導を賜った。
13．整理作業においては、上原真人氏（京都大学）、小松大秀氏（東京国立博物館）、藤澤良祐氏（愛知学院大学）に調査指導を賜った。
14．基準点測量・グリッド杭の打設および空中写真撮影、空中写真測量は、株式会社フジヤマに委託して実施した。
15．出土木製品の樹種同定は、鈴木三男氏（東北大学植物園）に依頼して実施した。
16．鉄滓の金属学的分析は、株式会社九州テクノリサーチに委託して実施した。
17．本書の編集は、武田寛生がおこなった。
18．註・引用・参考文献については、各章または各節の文末に記した。
19．各調査の概要は、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
20．発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。
21．現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々から助言・協力を賜った。記して深謝の意を表する。（順不同・敬称略）

浅野啓介、新井榛名、太田好治、大林元、大谷宏治、小野正敏、片山一道、加藤理文、河合修、久野正博、柴田稔、鈴木京太郎、中川律子、八賀晋、本田祐二、松井一明、森郁夫。

凡　例

1．座標は平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。
2．グリッド（方眼）は、1の座標を用いて設定している。グリッドの一辺は10ｍとし、アルファベット（Ａ～）と算用数字（１～）を用いて、その位置を表示している。東西方向が西から１・２…、南北方向が北からＡ・Ｂ…と設定している。
3．方位については、1の座標による方位（座標北）を基準として表示している。
4．発掘遺構は、遺構の種別を示す次の記号と、一連の番号の組合せにより表記した。

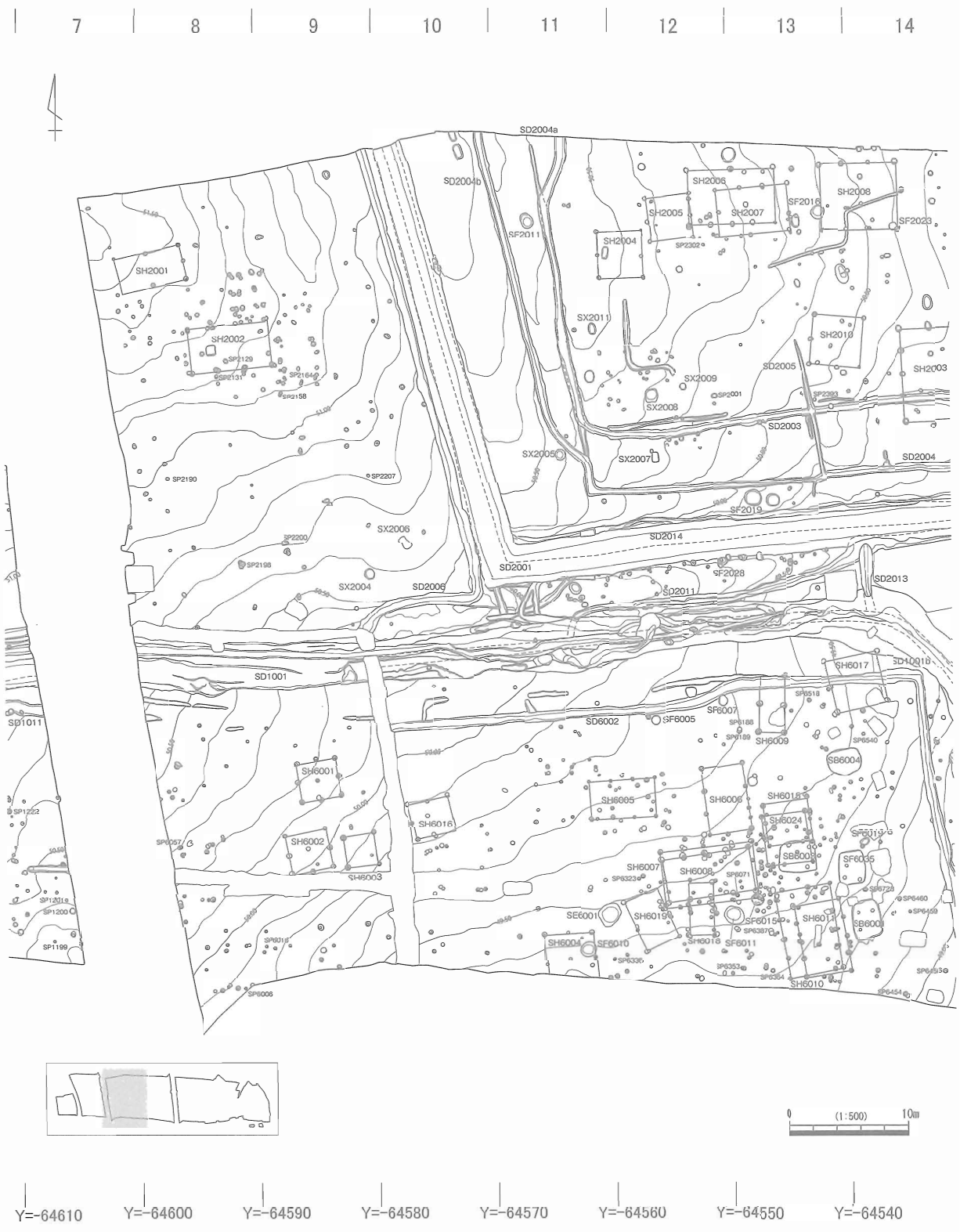
SA　土塁　　SB　竪穴建物　　SD　溝　　SE　井戸　　SF　土坑
SH　掘立柱建物　　SR　河川跡　　SP・P　柱穴・小穴　　SX　その他

5．遺構番号は、遺構種類ごとの通し番号としている。番号は、基本的に現地調査で付されたものをそのまま使用したが、遺構種類が変更されたものについては、新たに別の番号を付している。また、現地調査では調査区ごとに通し番号が付与されていたため、本報告書では上一桁に調査区名を付した４桁の番号で表示して区別した。
6．遺物番号は、種類・出土遺構・挿図の別に関わらず、すべて通し番号を付している。
7．図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図中に表記している。
8．遺物の実測図の縮尺は、土器・陶磁器類は１：３、瓦は１：４、呪符木簡と笹塔婆は１：２、木杭・矢板は１：８、漆椀は１：３、他の木製品は１：４、金属製品（銭貨を除く）は１：２を基本とし、各図にスケールを付した。
9．銭貨の拓本は、すべて１：１で掲載している。
10．周辺の地形図については、国土地理院「二万五千分の一地形図（平成19年発行）」および浜北市「二千五百分の一地形図（平成３年発行）」を複写・加筆して使用した。
11．土器・陶磁器の分類・編年に関しては、主に以下の文献に依拠した。

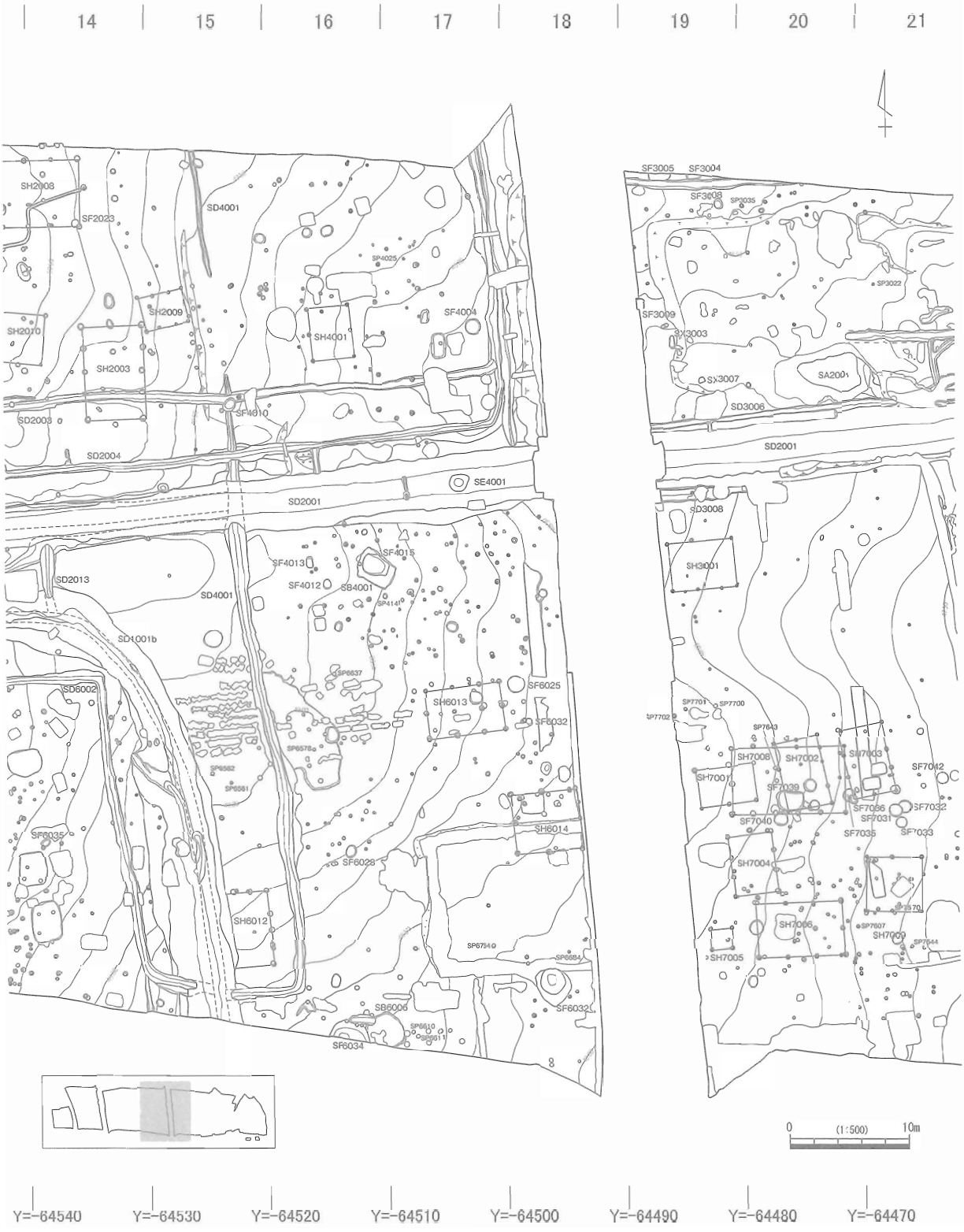
松井一明 1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究 25』静岡県考古学会
中野晴久 1994「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要 第３号』三重県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
菊川町教育委員会 2000『横地城跡総合調査報告書　資料編』
瀬戸市 1998『瀬戸市史　陶磁史篇六』
鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器の出現から消滅　補遺・論考編』
浜松市文化協会 1998『梶子北遺跡　遺物編（本文）』

図面１　　遺構配置図（１）

-2
-1
1
2
3
4
5
6
7
B
C
D
E
F
G
H
I
J
SR1001
SD1003
SD1004
SX1005
SX1006
SX1007
SF1004
SH1001
SE1001
SH1003
SH1004
SH1002
SF1025
SH1005
SP1129
SP1132
SE5001
SH5003
SH5001
SH5002
SP5018
SD1001
SF1018
SD1011
SD1013
SD1010
SX1008
SH1007
SH1008
SD1014
SH1010
SH1006
SF1012
SH1011
SD1008
0
(1:500)
10m
Y=-64690
Y=-64680
Y=-64670
Y=-64660
Y=-64650
Y=-64640
Y=-64630
Y=-64620
Y=-64610


7
8
9
10
11
12
13
14
SD2004a
SD2004b
SH2001
SH2002
SH2004
SH2005
SH2006
SH2007
SH2008
SH2010
SF2011
SF2016
SF2023
SX2011
SX2009
SX2008
SD2005
SH2003
SD2003
SX2005
SX2007
SD2004
SF2019
SD2014
SP2190
SP2207
SX2006
SP2200
SP2198
SX2004
SD2006
SD2001
SF2028
SD2011
SD2013
SD1001
SD1011
SH6017
SD10018
SF6007
SF6005
SD6002
SH6009
SB6004
SH6001
SH6005
SH6006
SH6015
SH6024
SH6016
SH6002
SH6003
SH6007
SH6008
SB6008
SF6035
SE6001
SH6019
SF6015
SH601
SB6001
SH6004
SF6010
SH6018
SF6011
SH6010
0
(1:500)
10m
Y=-64610
Y=-64600
Y=-64590
Y=-64580
Y=-64570
Y=-64560
Y=-64550
Y=-64540

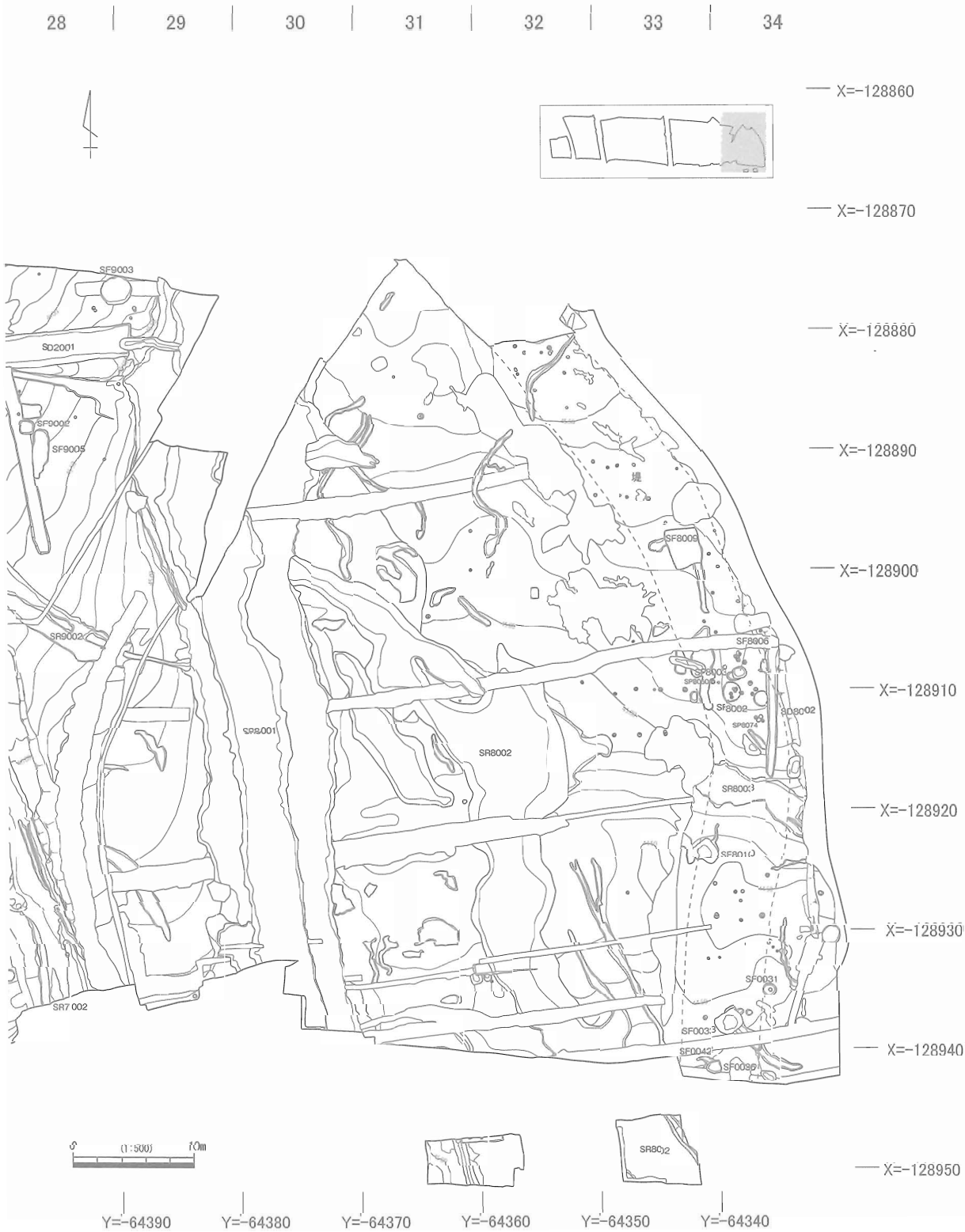
図面３　遺構配置図（３）


14
15
16
17
18
19
20
21
SH2008
SF2023
SD4001
SH2009
SH2010
SH2003
SD2003
SD2004
SF4010
SH4001
SF4004
SE4001
SD2001
SF4013
SF4015
SF4012
SB4001
SD2013
SD4001
SD1001b
SD6002
SF6035
SH6013
SF6025
SF6032
SH6014
SF6028
SH6012
SB6005
SF6034
SF3005
SF3004
SF3008
SF3009
SX3003
SX3007
SA2001
SD3006
SD2001
SD3008
SH3001
SH7008
SH7002
SH7003
SH7001
SF7039
SF7042
SF7032
SF7040
SF7031
SF7035
SF7033
SH7004
SH7006
SH7009
SH7005
0
(1:500)
10m
Y=-64540
Y=-64530
Y=-64520
Y=-64510
Y=-64500
Y=-64490
Y=-64480
Y=-64470

遺構配置図（4）　図面４

21
22
23
24
25
26
27
28
SD3016
SD3002
SD3001
SD3013
SX3008
SX3001
SX3007
SX3002
SX3006
SD3014
SF3031
SD3009
SA2001
SA2001
SD2001
SF3030
SF9002
SF9005
SF3001
SH3003
SF3014
SF3019
SX3005
SH9002
SF3024
SH3002
SH9004
SF3012
SF3028
SF3029
SF3017
SH7003
SF7042
SF7029
SH7007
SH7012
SH7014
SF7019
SF7005
SF7006
SF7026
SH7010
SF7021
SH7013
SF7047
SF7036
SF7032
SF7031
SF7033
SF7035
SH7009
SH7016
SH7011
SF7011
SF7007
SF7009
SF7010
SF7014
SR7002
SF7025
SD3001
SF7015
0
(1:500)
10m
Y=-64470
Y=-64460
Y=-64450
Y=-64440
Y=-64430
Y=-64420
Y=-64410
Y=-64400

図面５　　遺構配置図（５）


28
29
30
31
32
33
34
X=-128860
X=-128870
X=-128880
X=-128890
X=-128900
X=-128910
X=-128920
X=-128930
X=-128940
X=-128950
SF9003
SD2001
SF9002
SF9005
SR9002
SR8001
SR8002
SR7 002
SF8009
SF8006
SF8003
SF8002
SD8002
SR8003
SF0031
SF0033
SF0042
SF0036
SR8002
(1:500)
10m
Y=-64390
Y=-64380
Y=-64370
Y=-64360
Y=-64350
Y=-64340

第１章　調査の方法と経過

１．調査に至る経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和 62 年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第 28 回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜から東海市に至る延長約 270 ㎞の第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては、東西に貫く形となり、その延長は約 170 ㎞である。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年 12 月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月 24 日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月 17 日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月 11 日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成４年８月 27 日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成４年９月 29 日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在にについての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月 18 日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は 136 箇所、調査対象総面積が 1,453,518 ㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年 11 月 19 日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成６年には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は 133 箇所、調査対象総面積は 1,286,756 ㎡となっている。

平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取り扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第１回の協議が平成７年 12 月 13 日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取り扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組している。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成８年９月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成８年９月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo.94地点、浜北市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地において確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成９年１月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により、平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年９月２日日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査の実施に関する打ち合わせ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年３月５日付で協定変更を行っている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査は、中日本高速道路株式会社東京支社に引き継がれている。

第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜松市、富士宮市、裾野市、富士市の教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

浜松市（旧浜松市と旧浜北市）内における、確認調査を必要とする対象地点とその範囲の選定は、静岡県教育委員会の指導のもと、浜松市教育委員会及び、浜北市教育委員会が行った。その後、路線範囲の変更、側道やサービスエリアなどの本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡所在の再確認によって、対象地点範囲の変更や新たな対象地点の追加が行われた。最終的に、浜松市域では、本線およびサービスエリア建設範囲内で10箇所、工事用道路建設範囲内で２箇所の対象地点が選定された。この内、周辺の発掘調査や分布調査などによって、周知の遺跡となっていたのは、５地点である。その他の７地点については、周知の遺跡を含まないが、踏査や周辺環境等の検討の結果、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

なお、調査を必要とする対象地点には、静岡県内で通し番号による地点名が付けられており、浜松市域において対象となった10地点については、No.129～139地点となっている。ただし、いずれも確認調査の着手前に付けられたため、周知の遺跡を含んでいなかった地点に関しては、必ずしも地点名と遺跡の範囲とが合致していない。本書で報告する中屋遺跡の範囲は、No.129地点と130地点の２地点が相当する。また、No.130地点については、中屋遺跡以外にも篠場瓦窯、上海土遺跡、大門西遺跡、寺海土遺跡、中通遺跡の５遺跡が含まれている。

２．調査の体制

中屋遺跡に関する調査体制は、表１の通りである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）は、日本道路公団静岡建設局における各工事事務所の範囲に合わせて「工区」を設定し、各工区単位で調査体制が組織されている。そのため、表１は浜松工区として組織された体制の一部となっている。

中屋遺跡の確認調査および本調査（以下、現地調査）は、浜松市浜北区尾野の浜北現地事務所を拠点にして、平成 10 ～ 17 年に実施した。

本事業については、現地調査を優先するという方針から、浜松工区における全遺跡の現地調査が終了した後に、整理作業を実施している。本遺跡の資料整理および報告書作成作業は、袋井市小山の袋井整理事務所において、平成 19 ～ 22 年度に実施した。ただし、出土遺物の洗浄、注記、写真の整理･収納、各種台帳作成などの基礎的な整理作業の一部については、現地調査と並行して浜北現地事務所で実施している。

出土遺物の保存処理作業については、金属製品は静岡市駿河区谷田の当研究所本部、木製品は静岡市清水区江尻台町の清水整理事務所において実施した。

なお、本書では、資料整理の「調査担当者」（表１）と「執筆・編集者」（例言）が一致していない。この点に関しては、「４．調査の経過」において、その経緯を記している。

表１　調査体制

		H11 年度	H12 年度	H13 年度	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度	H22 年度
総務部（総務課）	所　長	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	清水 哲	天野 忍	石田 彰
	副所長	山下 晃	山下 晃	山下 晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫					
	常務理事	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	清水 哲	清水 哲	天野 忍	石田 彰
	部長	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫				
	次長					鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村 享	松村 享
	課長					鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村 享	松村 享
	専門監											稲葉保幸
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸				
	総務担当者	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秋博	鈴木秋博	中鉢京子	中鉢京子				中鉢京子
	部長	佐藤達夫	佐藤達夫	佐藤達夫	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川憲久				
	次長	佐野五十三	及川 司	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳	及川 司	及川 司	及川 司	
				及川 司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	
	課長	及川 司	及川 司	及川 司	足立順司	足立順司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川 司	及川 司	及川 司	中鉢賢治
調査部（調査課）	工区主任		西田光男	加藤理文								
	係長								富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志
	事業担当								中鉢京子	中鉢京子	中鉢京子	
		西田光男	西田光男	水野功太郎	水野功太郎	水野功太郎	高見健司	武田寛生	藤井光広	平塚智久	平塚智久	武田寛生
			梶葉良久	佐野和道		佐野和道	佐々木和也	伊藤嘉孝				足立順司
	調査担当者			小川和彦		高見健司	中谷哲久	高見健司				
						筒井 京	筒井 京	佐々木和也				
						白鳥直樹	武田寛生	筒井京				
									西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	
	保存処理										大森信宏	
		第１次確認	第１次調査	第２次調査	第３次調査	第４次調査	第５次調査	第６次調査	資料整理	資料整理	資料整理	資料整理
	備　考		第２次確認	第３次確認		第４次確認		第７次調査	保存処理	保存処理	保存処理	
				第３次調査		第５次調査		第８次調査				

3．調査の方法

（1）確認調査

中屋遺跡の確認調査は、実施可能な条件が整い委託者からの要請があった範囲について、平成11年から4次にわたって実施されている。

実施にあたっては、得られる情報量が多いことなどから、トレンチを掘削して調査することを基本とした。トレンチの掘削は、重機の進入が容易なことから、表土や耕作土等は重機で掘削する方法を用いた。ただし、この場合においても、遺物包含層の掘削や遺構を精査する作業については、人力によってその把握に努めた。調査区のトレンチを掘削する際には、主として土層の確認と遺構の発見に力を注いだ。土層については、各トレンチ四方の壁の土層断面を検討し、その高さや土色、土質などを記録した。遺物や遺構が発見された箇所においては、遺物包含層や遺構面の確定に努めた。

出土遺物は、出土した層位と位置を確認し、記録した上で取り上げることを基本とした。しかし、まとまって出土した場合や、遺構の性格を示している遺物が出土した場合などについては、本調査を実施することを前提に、出土位置に残すこととした。

現地での記録図面は、調査区全体図（トレンチ配置図）が1/200、土層断面図や柱状図は1/10を基本として作成した。その際の測量基準点は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭、第2次調査以降は本調査の基準杭を使用した。記録写真には、作業工程撮影用と併行して35mm判カラーネガを用いた。

（2）本調査

本調査は、現道や河川等の工事が及ばない範囲を除く、東西約360m、南北約80mを範囲とする。ただし、代替施設の設置が困難な宅地への進入路や水道管など、調査によって住民の生活に影響が及ぶと想定される範囲や、調査における安全確保が困難な狭小な場所については、遺跡の状況について検討を行った上で、静岡県教育委員会の指導の下、一部調査範囲から除外している。調査は、実施可能な条件が整い委託者からの要請があった範囲について、大きく8次に分けて実施している。そのため、条件によって調査次ごとに工程は多少異なるが、基本的な調査の方法については変わらない。

調査に際しては、基準点測量およびグリッド杭の設置を委託して行った。中屋遺跡におけるグリッドは、大グリッドと小グリッドからなっている。大グリッドは一辺10mの正方形で、第2次調査の範囲の北西隅にあたる座標（X=－128850　Y=－64670）を起点として、北から南へA・B・C…、西から東へ1・2・3…と、アルファベットと数字の組み合わせによって表記している。ただし、遺跡の範囲が明らかでない段階にグリッドを設定したため、起点の西側になってしまった範囲については、－1と－2の数字を付加することとした。小グリッドは、1つの大グリッドを4分割した5m四方の正方形で、大グリッドと組み合わせてA1－NWなどと記している。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行によって、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、中屋遺跡の発掘調査はすべて日本測地系に基づいている。そのため、本書の平面座標は、世界測地系であることを明示したものを除き、すべて日本測地系で表記している。

発掘調査は、まず調査区の設定を行った。そして、作業員棟・簡易トイレなどの設置とともに、重機による表土除去を開始した。ほとんどの部分については重機によって表土除去作業を行ったが、第5次調査では土塁の残存する可能性が想定されたため、一部表土から人力による掘削作業を行っている。

その後、重機による表土除去が完了した範囲から、人力によって遺構検出面までの掘削作業を開始した。調査区のほとんどの部分では、表土・盛土除去後、まもなく遺構検出面（地山）に達した。また、盛土等がなされていて、現地表面から深く掘り下がる部分については、安全確保のための土留め施設を

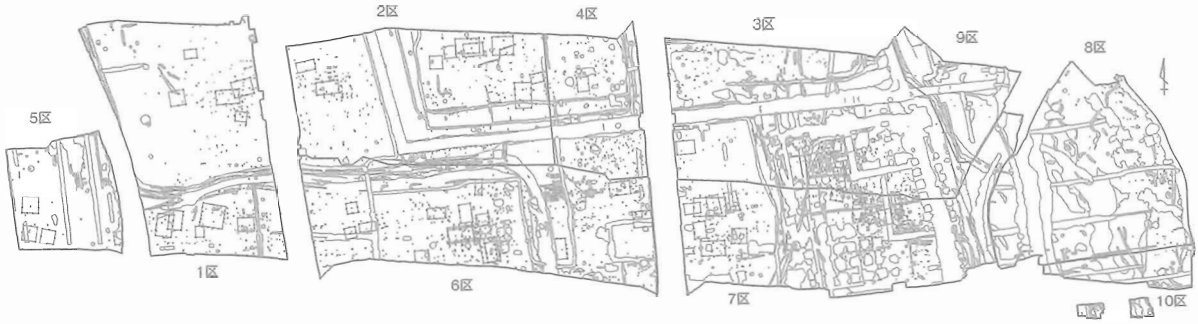


図１　中屋遺跡区割り図

設置した。なお、表土除去以降の作業を円滑に進めるため、重機と人力による作業を一部並行して行っている。遺構検出面に達した場所については、随時、遺構の検出作業を行った。検出された遺構は、まず遺構の半分を掘削し、土層断面によって埋土の状態を観察・記録した後に、全体の掘削を行った。ただし、柱穴とみられる遺構については、まず上層を数cm掘り下げて柱痕跡の有無を平面的に確認した。柱痕跡が確認されたものは、その部分を一段深く掘り下げ、図や写真の記録を行った後に、遺構の半分を掘り下げた。

発見された遺構には、すべて調査中に遺構番号を付した。ただし、各調査次ごとに１番から番号を付した結果、遺構番号が一部重複することとなったため、本報告に際して全ての遺構について、先頭に調査区（図１）の番号（10区については０）を付した４けたの遺構番号に改めている。また、遺構の種類ごとに１から番号を付しているため、遺構の種別を変更したものについては、新たに番号を付している。

遺構から出土した遺物については、出土状況図の作成または、出土地点の三次元座標を計測した上で取り上げることを基本とした。ただし、土砂とともに流入したとみられる遺物については、基本的に層位ごとに取り上げている。包含層出土の遺物については、遺物が集中するなど特別な場合を除いて、５m四方の小グリッドごとに取り上げた。

現地の記録図面としては、空中写真測量によって、設定したグリッドに沿って、100分の１縮尺の地形測量図と20分の１縮尺の遺構図を作成した。また、特に細部の記録が必要なものについては、10分の１縮尺の記録図面を作成した。遺構の現地記録写真の撮影は、６×７判（モノクロ）と35㎜判（カラーリバーサル）を用い、全景写真等については４×５判も一部使用した。作業工程の撮影には35㎜（カラーネガ）を使用した。空中写真撮影及び空中写真測量と、遺物出土状況図の一部については、委託にて実施した。

（３）資料整理・報告書作成

中屋遺跡に関わる資料整理および報告書作成作業は、平成19年度から開始した。なお、出土遺物の洗浄・注記や台帳作成等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行われていた。

作業としては、土器の分類・仕分け、接合、拓本、実測作業や、遺構図面の修正・編集、各図の版組・トレース作業、遺物の写真撮影、原稿執筆などを行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。遺物の写真撮影は、４×５判（モノクロネガ・カラーリバーサル）、６×７判（モノクロネガ・カラーリバーサル）を用いて、当研究所写真室において行った。出土した木製品と金属製品の保存処理作業については、当研究所保存処理室が実施した。鉄滓の成分分析については、委託により実施した。

木製品の樹種同定については、東北大学植物園の鈴木三男氏に依頼した。

4．調査の経過

（1）現地調査

中屋遺跡の現地調査（確認調査・本調査）は、工事の工程や道路の付け替えが必要であるなどの事情により、複数回に分けて行われている。また、基本的には地点を単位として調査が実施されているため、130 地点に含まれる他の遺跡とともに調査が行われた場合もある。

以下、多少複雑ではあるが、本事業以外の浜北市教育委員会による調査も含め、調査次数ごとに現地調査の経過について記すことにする。

第 1 次確認調査（期間：平成 12 年 3 月 2～8 日　調査名：No.129 地点確認調査）

中屋遺跡における最初の調査である第 1 次確認調査は、平成 12 年 3 月 2 日から実施した。踏査の際に遺物は採取されていないが、70 × 40 cm程の大きさの平らな石が祀られていることや、周辺の地形がやや高くなっていること等から、墳墓が存在する可能性があるとして、石の周囲の 108 ㎡が確認調査の

図２　中屋遺跡の調査範囲

対象となった（No.129 地点）。

調査では、石の周囲に４本のトレンチを設定し、重機によって表土や耕作土を除去した後に検出面（地山）と壁面において、遺構の有無について確認作業を行った。調査の発端となった石に関しては、耕作土中に浮いた状態であり、遺構として認識することはできなかったが、石の東側において溝や小穴、銭貨が埋納された墓が発見され、遺跡が周囲に展開していることが明らかとなり、その範囲は 129 地点の調査対象範囲外にも及ぶことが確実となった。

第１次調査（期間：平成 12 年９月 29 日～ 10 月 31 日　調査名：No.129 地点本調査）

第１次確認調査の結果を受け、翌年の平成 12 年９月 29 日から、129 地点の対象範囲全域（108 ㎡）について本調査を実施した。調査では、第１次確認調査で検出されていた墓（SX2008）や溝（SD2003）などの他、新たに１基の墓（SX2009）や柱穴とみられる小穴が多数発見された。遺構を完掘し、図や写真等による記録を行った後、10 月 31 日に埋め戻し作業を実施した。

第２次確認調査（期間：平成 12 年９月 29 日～ 12 月４日　調査名：No.130 地点確認調査その１）

第１次確認調査において、129 地点の調査対象範囲外にも遺跡が広がることが明らかになり、早急に遺跡の範囲を特定することが必要となった。そのため、第１次調査と並行して、調査可能な場所の多い 129 地点の西側について確認調査を実施した。なお、中屋遺跡に関するこれ以降の調査については、調査対象範囲が未確定となっていた 130 地点の調査として取り扱っている。

確認調査は、129 地点から西へ約 300 ｍまでの範囲を対象とした。調査の結果、約 150 ～ 200 ｍ西に遺構や遺物が確認されない範囲が存在し、その西と東には遺跡が展開していることが明らかとなった。なお、西側の遺跡については、現在寺海土遺跡となっている。一部未調査の部分も残ったが、この確認調査によって、中屋遺跡の範囲の西側については、ほぼ特定することが可能となった。

第２次調査（期間：平成 13 年５月 17 日～ 10 月 26 日　調査名：No.130 地点Ⅰ期）

第２次確認調査の結果を受け、平成 13 年５月 17 日より、第１次調査区の周囲について本調査を実施した。対象となったのは、ほぼ路線の北半分で、用地の収去が完了していた南北約 40 ｍ・東西約 70 ｍの範囲である。なお、第２次調査区の中央に位置する第１次調査区は、すでに調査が完了した範囲であったが、作業の効率性等の観点から、第２次調査区とともに掘削して埋め戻した土を除去することとした。

重機によって表土・耕作土を除去した後、遺構の検出作業を行うと、まもなく第１次調査区の西側と

図３　重機による表土除去（第２次調査）

図４　作業風景（第２次調査）

南側に大規模な溝（SD2001）の存在が確認された。直線的に掘られた溝は、調査区の南西でやや鈍角に屈曲し、北側と東側は調査区外へと続いていた。さらに、調査区の北壁において、溝の東側（内側）に土塁の痕跡が発見されたことにより、鎌倉期の方形居館の可能性が想定され、注目されることとなった。また、本遺跡は、当初「（仮称）千杭遺跡」と呼称されたが、区画の中心が字中屋に位置することが判明したことから、浜北市教育委員会との協議を行い、「（仮称）中屋遺跡」と改められた。

10～11月には、現地において小和田哲男氏（静岡大学）、向坂鋼二氏（当研究所評議員）、中井均氏（米原町教育委員会）、村田修三氏（大阪大学）による調査指導が行われ、10月25日には近隣の浜北市立赤佐小学校の4年生を対象に遺跡見学会が実施されている。

なお、第2次調査区については、10月26日に作業を終了しているが、日本道路公団との協議の上、埋め戻しは実施せず、東側も含めた溝の全体写真を撮影する（第4次調査）までの間、完掘時の状態を保持することにした。

第3次確認調査（期間：平成13年9月13日～平成14年1月30日　調査名：№130地点範囲確認調査）

第2次調査によって、大規模な溝が第2次調査区の東に延びることが判明するとともに、東へ約600mの地点において古代のものとみられる布目瓦が採取されたため、№130地点の東側の範囲を確定させることが急務となった。そのため、一部第2次調査と並行して、範囲の確定していた市道岩水寺駅前線から約600m東までの範囲を対象に確認調査を実施した。

調査の結果、一部削平によって遺跡が失われていた部分はあるものの、ほぼ全域に遺跡が展開することが判明した。なお、これらの遺跡は、現在大門西遺跡、上海土遺跡、篠場瓦窯となっている。

中屋遺跡に関しては、第2次調査で発見された溝（SD2001）の延長上に位置するように、複数のトレンチが設定された。調査の結果、溝の延長であると推定される遺構が、東西約90mの範囲で検出され、第2次調査区で発見されたものを含めると、東西180m以上の規模におよぶことが明らかとなった。溝はさらに東へと続いていたが、東側のトレンチで河川跡（SR8001）とみられる遺構が南北方向に検出されたことから、溝は河川跡に注ぎ込んでいるものと推定された。河川跡では、その両岸に多数の木杭が遺存することから、護岸施設が存在する可能性が高いことが明らかとなった。

遺跡の範囲に関しては、浜北市教育委員会との協議により、東へ約300mの県道岩水寺停車場線付近まで遺跡が連続して存在するものの、東側は古代を中心とする遺跡であることから、第2次調査区から約190m東に位置する溜池の堤跡までの範囲を中屋遺跡として扱うこととなった。これにより、本事業における中屋遺跡の調査範囲の東側が確定された。

図5　調査指導（第2次調査）

図6　作業風景（第3次確認調査）

第３次調査（期間：平成13年11月５日～平成14年７月18日　調査名：No.130地点Ⅰ期）

平成13年11月に重機による表土除去が行われたものの、第３次確認調査を優先して実施したため、人力による調査が開始されたのは、平成14年１月28日からであった。周辺に排土置き場を確保することができなかったため、調査区を２分割し、まず北半の調査を実施し、終了後に北側を埋め戻して残る南半の調査を行った。

調査の結果、調査区の西端では南北溝（SR1001）が、中央やや南側では調査区を横断する東西溝（SD1001）が検出された。調査当時は、鎌倉時代の遺物を多数含んでいたことから、第２次調査の大溝（SD2001）と同時期の溝である可能性も想定され、その関連性が注目された。

浜北市教育委員会による確認調査（期間：平成14年６月20日～７月10日、10月14日～24日）

第２次調査と第３次確認調査により、鎌倉時代の大規模な施設の存在が明らかになったことを受けて、施設の規模等を明らかにするため、本事業の調査対象地の北側において、浜北市教育委員会による確認調査が実施された（浜北市教委 2003『中屋遺跡確認調査報告書』）。

調査では、16ヶ所にトレンチが設定され、西辺の続きとみられる溝に加え、約210ｍ北側に北辺とみられる東西溝の存在が確認されている。設定されたトレンチでは東辺の溝は確認できなかったものの、この調査により、溝によって囲繞された施設が、南北210ｍにもおよぶ大規模なものであることが明らかとなった。

また、この調査では、溝の規模の把握に重点が置かれたこともあって、施設の性格に関連するような明確な遺構は確認されなかったが、瓦が出土していることから、寺院関連施設の存在する可能性も提起されている。

第４次確認調査（期間：平成15年４月14日～10月31日　調査名：No.130地点確認調査その３）

それまで用地買収等の事情によって調査に着手できなかった、約26,000㎡の範囲を対象に実施された。

中屋遺跡に関しては、第３次調査区の西側の一部が対象となった。調査の結果、東側の一郭において遺跡の存在が認められた。第２次確認調査で、この北側と西側には遺跡の存在が認められなかったことから、本事業における中屋遺跡の対象範囲は、この確認調査によりすべて確定した。

第４次調査（期間：平成15年12月18日～平成16年１月26日　調査名：No.130地点Ⅵ期）

県道岩水寺停車場線の移設に関連して、移設場所に相当する県道の南側の範囲が対象となった。しかし、調査に着手したところ、２ｍ以上の深度があることに加え、宅地への進入路の確保が必要であり、

図７　作業風景（第３次調査）

図８　作業風景（第５次調査）

県道から引き込まれている配管も使用中であるなど、制約条件が多く、実際に掘削が可能な範囲はごく一部に留まった。

調査の結果、溝状の遺構（SR8002）が検出されたものの、調査区が狭いこともあり、その年代や性格については判然としなかった。

第５次調査（期間：平成16年１月26日～平成17年３月22日　調査名：№130地点Ⅸ期）

第４次調査の終了後、第５次調査に着手した。第５次調査の対象となった範囲は、第２次調査で発見された大溝（SD2001）の続きと、溝が注ぎ込むとみられた河川跡（SR8001）を中心とした、東西約190ｍの範囲である。

調査は、まず河川跡の周辺について、重機による表土除去を行ったが、それに並行して大溝の北側に数本のトレンチを設定し、土塁の残存状況の把握を行った。その結果、残存する土塁とともに、確認調査では発見できなかった大溝の東辺の一部が検出された。大溝の東辺は、確認調査においてトレンチが設定できなかった、市道根堅23号線の直下に位置していた。当初市道部分については、道路の付け替え工事が行われた後に調査を実施する予定であったが、日本道路公団と協議を行い、第５次調査において周辺とともに調査を実施することとなった。これによって、区画の四周すべての位置と規模が判明し、区画の南西端から河川に向かって排水溝が設けられる構造であることが明らかになった。

調査が進行した平成16年12月には、河川跡（SR8001）の護岸施設の解体中に、黒漆塗りの鞍が組み上げられた状態のまま発見され、鞍の下に呪符木簡の存在も確認された。なお、季節柄、凍結によって遺物が毀損する恐れがあったため、出土状況の撮影と基準となる点の測量を行った後、翌日には当研究所保存処理室によって、周囲の土ごと切り取り、図化と解体作業については室内で実施した。

図９　小学生発掘体験

図10　小学生現地見学

図11　記者発表（第５次調査）

図12　現地説明会（第５次調査）

年が明けた１月には、現地にて小和田哲男氏（静岡大学）、中井均氏（米原町教育委員会）、村田修三氏（大阪大学）による調査指導が行われている。出土した鞍は、その良好な遺存状態から貴重な遺物として注目されたが、１月23日に小松大秀氏（九州国立博物館設立準備室）に実見いただいた結果、鞍には螺鈿が施されていたことが判明し、国内初の螺鈿鞍の出土例であることが明らかとなった。

これらの調査成果を受け、２月３日に報道関係者に現地と出土遺物を公開し、２月５日には現地説明会を実施している。現地説明会には、新聞やテレビで大きく取り上げられたこともあり、県内外から700名以上の参加者があった。

第６次調査（期間：平成17年４月18日～平成17年６月６日　調査名：No.130地点ⅩⅡ期）

当事業における現地調査の最終年度となったが、多くの調査対象範囲には排土や構造物が存在し、調査に着手できない状況であったため、まずは調査条件の整っていた、第４次確認調査において遺跡が確認された範囲についての調査を実施した。

調査は比較的順調に進行し、ほぼ軸を揃えて建ち並ぶ３棟の掘立柱建物や井戸等が検出された。

第７次調査（期間：平成17年６月１日～平成18年３月22日　調査名：No.130地点ⅩⅡ期）

北側の側道工事を早期に着手したいとの要請から、６月より大門川付近の調査に着手する予定であったが、川の付け替え工事が遅延していたため、周辺の調査を先行して実施した。そして、川の付け替え工事が完了した７月には、大門川付近の調査にも着手し、９月末には調査を終了している。その後、一

表２　発掘調査の公開

内　容	開催年月日	参　加　者	人数	備　考
遺跡見学	H13年10月25日	浜北市立赤佐小学校４年生	123名	
体験発掘・遺跡見学	H16年８月10日	小学生	19名	浜松市立篠原公民館主催
遺跡見学	H16年12月20日	浜北市立赤佐小学校６年生	110名	
報道公開	H17年２月３日	報道関係者	－	新聞・テレビで報道
現地説明会	H17年２月５日	一般	700名	
体験発掘・遺跡見学	H17年６月28日	浜松市立初生小学校６年生	98名	
遺跡見学	H17年８月24日	「みて、みてハイウェイ」参加者	90名	日本道路公団主催
遺跡見学	H17年10月16日	地元住民	50名	赤佐７区町内会主催
遺跡見学	H17年10月20日	浜松市立浜北北部中学校１年生	４名	
体験発掘・遺跡見学	H17年10月27日	浜松市立積志小学校６年生	10名	
報道提供	H17年３月14日	報道関係者	－	新聞・テレビで報道
現地説明会	H17年３月18日	一般	220名	

図13　作業風景（第７次調査）

図14　現地説明会（第７次調査）

部埋め戻しを行った上で作業員棟の移設を行い、残る西側の部分と付け替えが完了した県道の部分の調査に着手した。

調査では、第２次調査で発見された東西溝（SD1001）の続きが検出され、第３次調査区から約 70 m 東の地点において、南へ向かって屈曲していることが確認された。この溝については、第３次調査では大溝（SD2001）と同時期である可能性も指摘されていたが、比較的豊富に出土した遺物から、大溝（SD2001）とは時期が異なる中世後期の溝であることが明らかとなった。

また、この調査では複数の竪穴建物が検出され、古代の集落も展開していることが確実となった。それまでも古代の遺物が出土することは認識されていたものの、遺構が判然としなかったこともあり、大半の遺構は中世以降のものであろうとみられていた。特に出土遺物の乏しい掘立柱建物の年代については、再検討を迫られることとなった。

調査がほぼ完了した、平成 18 年３月に報道提供を行い、新聞等によって調査成果が報道された。また、３月 18 日には現地説明会を開催し、地元住民を中心に約 220 名が参加した。また、これ以外にも、表２のように遺跡見学や体験発掘を実施している。

そして、平成 18 年３月 22 日には第８次調査が終了し、約 24,000 ㎡を対象に平成 12 年３月から６年以上にわたって行われた、当事業における中屋遺跡の現地調査がすべて完了した。

（２）資料整理

前述のように、出土遺物の洗浄・注記や台帳作製等の基礎整理作業については、現地調査終了後に随時行われていたが、中屋遺跡の資料整理が本格的に開始されたのは、平成 19 年 11 月からである。

当遺跡に関しては、出土品・記録類共に多量であり、複数年度におよぶ作業となることから、担当者

図 15　注記作業

図 16　接合作業

図 17　復元作業

図 18　実測作業

表3　出土品・写真の公開

内　容	期　間	名　称	主催・会場など	備　考
写真提供	H18年4月	『木簡研究』28号	木簡学会	呪符木簡
展示	H19年2～3月	「里帰りした新浜松市の埋蔵文化財」	浜松市博物館	
展示	H19年6月～H20年2月	「発掘された日本列島2007」	全国7会場	文化庁主催
報道公開	H20年11月	「螺鈿鞍について」	当研究所	新聞・テレビで報道
展示	H20年11月	「中屋遺跡出土螺鈿鞍特別展示」	当研究所本部	
写真提供	H20年12月	『浜松の遺跡2』	浜松市	
展示	H21年6～7月	「地下に眠る浜松の至宝」	浜松市博物館	

が異動する可能性も考慮して、基本的に年代又は遺構種別に作業を実施することとなった。なお、整理作業中においても、出土遺物や写真等については、表3のように随時公開した。

平成19年度は、主に大規模な溝（SD1001･2001）と河川跡（SR8001）について、整理作業を実施した。いずれも異なる担当者によって、数回に分割して調査されていることもあり、層位の把握に苦慮したが、層位の統一を計り、遺物等を層位毎に検討することが可能となった。

平成20年度については、主に中世～近世の掘立柱建物や土坑、埋葬遺構等を対象に、出土品の分類･仕分け、接合、復元、実測、版組、トレース等の作業を実施した。作業を進めると、比較的多くの瓦が出土していることが、徐々に明らかとなった。瓦については、現地調査の時からその出土は認識されていたが、全体の数量が把握できなかったこともあり、ごく少量であろうとの想定がなされていた。これにより、居館跡とみられてきた遺跡の性格について、再検討する必要性が生じることとなった。

平成21年度は、中世～近世の溝や包含層出土遺物と、古代の遺構に関して整理作業を行った。9月11日には藤澤良祐氏（愛知学院大学）、10月19日には小松大秀氏（東京国立博物館）、12月2日には上原真人氏（京都大学）による調査指導が行われている。分類・仕分け、接合、復元、実測、トレース等については、比較的順調に作業が実施された。

当遺跡は、遺構そのものの数が多い上に、年代の特定が困難なものも多かったことから、整理作業の最終段階である12月に、遺構の年代や遺物の時期などの確認を行った。その結果、再検討の余地があることが明らかになった。そのため急遽、整理作業計画の変更と調査体制の再編成を行い、修正を行うこととなった。また、その修正に伴い、全ての遺構と遺物を対象に、時期判定や切り合い関係などを再検討し、全体での整合を図った。その後、原稿及び図面の修正を行うとともに、必要な図面を追加し、細部においても矛盾のないことを繰り返し確認した。この作業によって、原稿の執筆・編集にも相当な時間を費やしたが、平成22年度に入り、原稿の完成に漕ぎ着けた。

図19　版組作業

図20　トレース作業

第２章　位置と環境

１．遺跡の位置

浜松市は、静岡県西部に位置し、東は天竜川を挟んで磐田市と、西は浜名湖西岸の湖西市と接している。平成17年に周辺の２市・８町・１村と合併し、平成19年には政令指定都市となって７つの行政区が置かれている。このため、中屋遺跡の所在地は、調査開始時には浜北市であったが、現在は浜松市浜北区となっている（図21）。

中屋遺跡は、静岡県浜松市浜北区根堅の、天竜浜名湖鉄道岩水寺駅の北側に位置する。南北は岩水寺駅前から国道362号線までの約330ｍ、東西は大門川から荒巻川付近までの約300ｍが、遺跡の範囲となっている（図22）。

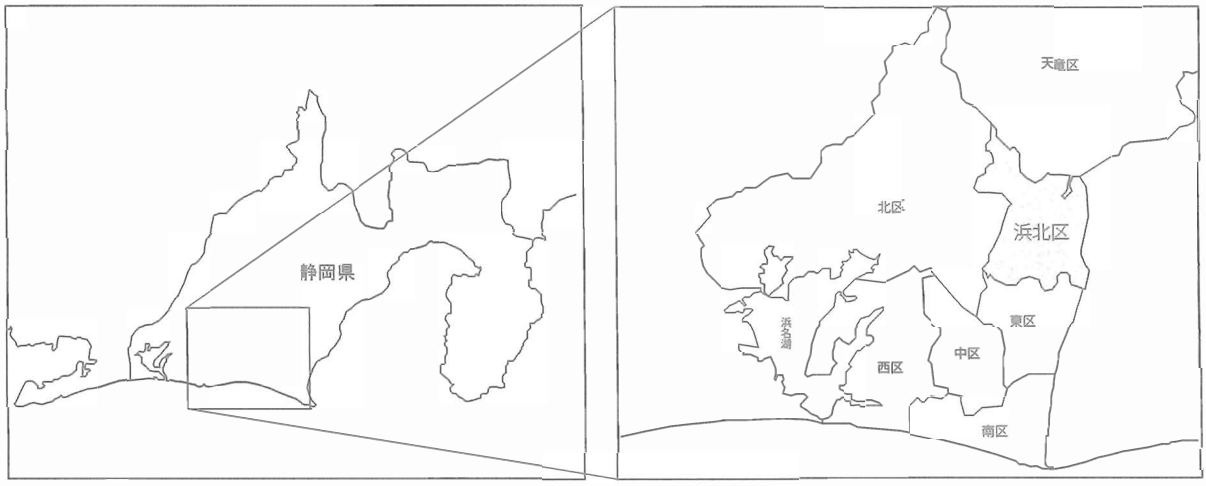


図21　浜北区の位置

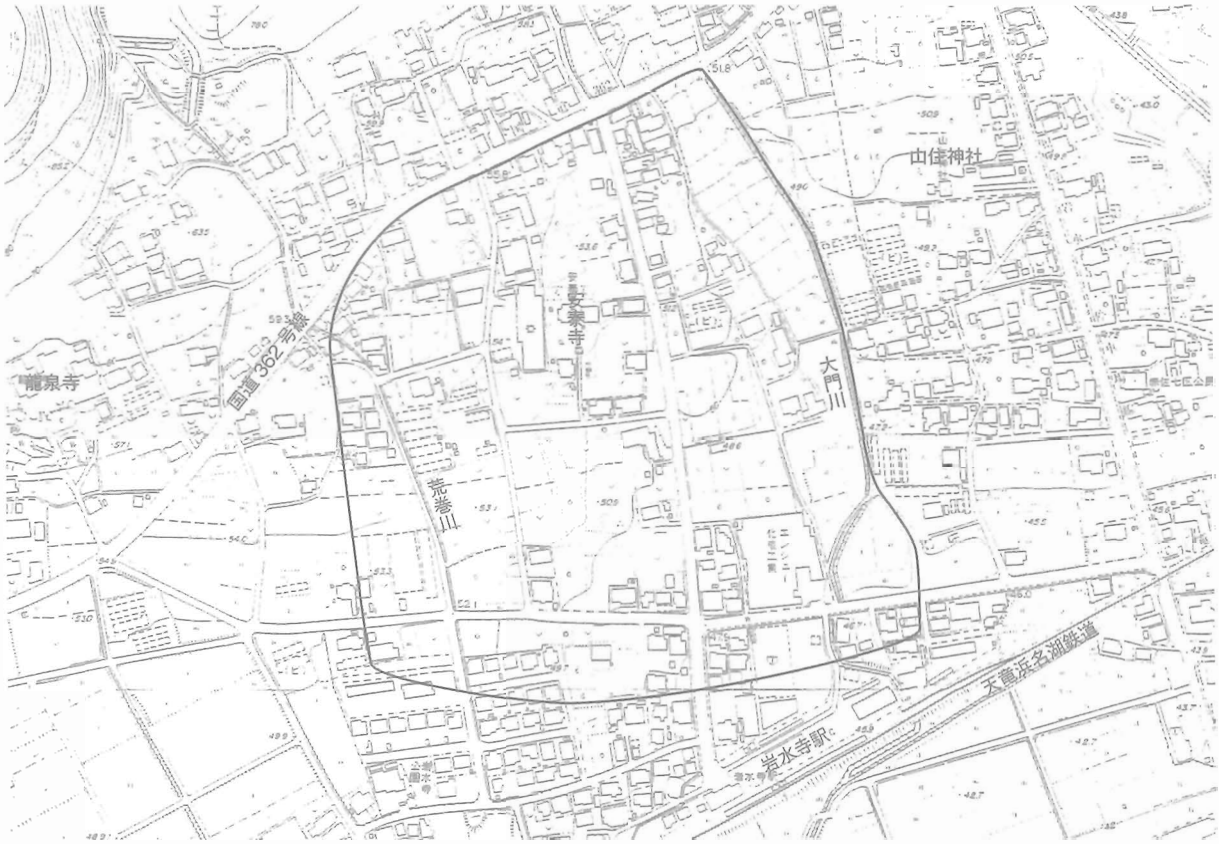


図22　中屋遺跡位置図（１：5,000）

2．地理的環境

村から区へ　中屋遺跡の位置する浜松市浜北区根堅は浜北区北東部にあたり、平成の大合併によって政令都市浜松市ができるまで浜北市根堅と呼ばれた地域である。その浜北市も昭和31(1956)年に浜名町、北浜村、中瀬村、赤佐村、龕玉村が5町村が合併してできた市である。合併当時の北浜村、中瀬村、赤佐村、龕玉村は農村であり、浜名町は周辺の農村部を背景とした商工＋農業の町であった。このことは当時の浜北市が、中核的な都市があって、それ以外の町村が合併し成立した行政市ではなく、同じような規模の村が町制を施いていた浜名町と合併した、という実情であった。

その後、企業誘致もすすみ、また浜北市が浜松市の衛星都市に位置づけられるような通勤圏となったことから、それに伴って他市域から移り住む人口も飛躍的に増加し、かっての農村の姿は、現在の浜北区の郊外に留めているにすぎない。遺跡のある根堅についても、今では周辺に畑や山林が残る集落景観であるが、浜北市の推移を示すように、急速に住宅区域となっている。

市域東側に流れる天竜川では、古くから人々は舟運を利用していたが、近代にはいると、本格的にいかだや帆船によって、南信濃や北遠江の森林から切り出された木材や久根鉱山や峰之沢鉱山から産出した鉱石を搬送した。明治末に、浜松と西鹿島まで現在の遠州鉄道が敷設されたことも、この地域の近代化に大きな役割を果たし、現在も通勤・通学の足としてその役割を担っている。

周辺の景観　明治23・24（1890・1891）年、大日本帝国陸地測量部の作成した2万分の1の地形図「龕玉村」・「二俣町」（以下、「2万分の1地形図」）には、明治前期までの集落景観が描写されている（図23)。それによると、中屋遺跡周辺の景観は、次のように整理できる。

遺跡の北部には静岡県森林公園や岩水寺にある丘陵が広がる。この丘陵には南北方向にいくつかの開析谷があり、遺跡はこの開析谷の延長部分にあたる。さらに開析谷からの押し出しによって形成された小規模な扇状地上に位置するため、周辺よりやや高い微高地を形成している（註1)。つまり中屋遺跡は開析谷からの沢が水源となる水場付近の、やや高燥の場という土地条件である。

遺跡の西部と南部は旧天竜川の河跡にあたる谷底平野が広がるが、水田地帯となっている。これはさらに南部の天竜川の堆積物から成る、「浜北面」と呼ばれる低位段丘によってふさがれている。この低位段丘は、新原や東原と呼ばれる黒ボク地帯であり、「2万分の1地形図」では大半が針葉樹林地帯であり、そのほかは畑地帯となっている。このなかの新原集落は、広い領域に散居集落が点々と分布する景観を呈している。

遺跡の東1.7kmには天竜川が流れていたが、西鹿島から広い平野を造り太平洋に注いでいる。「2万分の1地形図」には西鹿島と上島の間に広い河道があり、上島は天竜川の中州であることが明瞭である。この河道は氾濫時には天竜川の乱流によって流路となり、文字通り上島は天竜川に浮かぶ「島」となる。このように削られず残った扇状地の一部は、天竜川の中に微高地として島状に残り、そこに集落が営まれたことが上島以外に、上小島や中野などに認められる。

江戸時代の天竜川　2万分の1よりさらに古い延宝6（1678）年前後に制作された「青山御領分絵図」(浜松市 1976）には、天竜川の本流は磐田原台地裾部を現行の二俣東街道に沿って南へ流れていた。現在の一雲斉川はその名残りであろう。現在の天竜川の中には「青山御領分絵図」に村の規模を縮小したり、流路の中に消えた細島が描かれている。

柴本村と中瀬村の間には河道があって、中瀬村は文字通り天竜川の広い浅瀬である様相が明瞭に描かれている。この河道は「満水ノ時ハ川」とあり、長島村（現在の永島）と油一色村の間を流れ、本流に

合流していた。同時にこの河道の西側に200戸の塊村の柴本村（赤佐から於呂）が南北に続くが、これはこの河川の造った自然堤防上に位置する。この柴本村は江戸時代の本村であって、『遠淡海地志』には本沢村は柴本（元とも書く）村の枝郷であり、御馬ヶ池村は柴本新田とある。

赤狭郷と郡　10世紀前半に記された『倭名類聚鈔』には、麁玉郡の郷名に「三宅ミヤケ　碧田アヲタ　覇多ハタ　赤狭アカサ」とあり、4郷から成っていた。中屋遺跡の範囲も『倭名類聚鈔』段階では麁玉郡赤狭郷の範囲とされるが、近世段階の麁玉郡は「堀谷村　大平村　灰木村　宮口村　新原村」ときわめて小規模な範囲を郡としており、近世段階では中屋遺跡の範囲は豊田郡安泰寺村の範囲である。つまり豊田郡に属し、麁玉郡には属していなかった。

さらに赤狭郷とは雲岩寺村　安泰寺村　岩水寺村　尾野村　柴本村の5村からなり、「赤蛇五ヶ村」と呼称されていた。『遠江国風土記伝』によれば、赤蛇とは赤狭が寛文以後誤って記されたものという。この範囲が赤狭郷の範囲と考えられていたこととなろう。

律令制下の郡境は大郡を分割することによって変わることがあるが、郡境を政治的に改変されたと考えるよりも、山・川など目に見える自然的な境界に基づいたものとされる。この赤狭郷の帰属は、天竜川の流路変更によって豊田郡に変わったとみることが自然であろう。

図23　明治期の地形図（1：40,000）　「明治23年二万分の1地形図」（大日本帝国陸地測量部）を縮小・加筆

ではいつ頃のことであろうか。今のところこの問題に回答できる資料はない。もともと11世紀になると、律令制下の郡郷制は変化し、郡中の徴税責任単位が、国衙から郷へ直結するようになり、郷、保、名、村、その他で構成されるようになった。そのため文書にも「遠江國○○郡○○郷」という記載はほとんどなくなり、かろうじて神仏に提出する願文や表白文などに正式の「遠江國○○郡○○郷」の記載があるのみである。そのため該当する資料には当たれなかった。ただし遺跡周辺の長上郡と豊田郡には、つぎのような例がある。

遠江州長上郡美薗郷高畠村・・・愛知県養寿寺雲板

遠江國豊田郡高薗郷萩原・・・・長野県法全寺梵鐘

遠江州豊田郡高薗郷・・・・・・山梨県蓮華寺鰐口（註２）

これら中世後期の銘文から美薗郷高畠村が長上郡に属していたこと、高薗が豊田郡に属していたことが判明する。上記２例の郡郷村は、のちの近世段階における郡の帰属と一致することから、中世後期と近世の郡境は、ほぼ同様であったと推定できる。

『倭名類聚鈔』における郷の表記は、養寿寺雲板銘のように、美薗郷の下に高畠村という村名が刻まれている。このように村が分立し中世的再編が認められた。中世的郷村制は中世後期には確実に存在するが、それを全国的な傾向からこの地域においても、中世前期までさかのぼらせることも許されよう。中屋遺跡の属した郡郷は天竜川の乱流の結果、中世のある時期に豊田郡へと変更したと考えられるが、その要因となった天竜川の氾濫は、郡郷の変更以上に生活そのものに大きな打撃を与えたことが想像される。

図24　中屋遺跡の周辺

３．歴史的環境

ここでは平安中期から戦国期までの文献資料に登場する記述と周辺に分布する遺跡にふれながら、中屋遺跡の歴史的環境を概観してみたい。

麁玉郡　中屋遺跡周辺は、『倭名類聚鈔』の麁玉郡赤狭郷に比定できる。赤狭郷は「アカサ」の読みが、後世そのまま郷名として残っているので、その比定地には異論の余地はない。

麁玉郡を構成するそれ以外の郷、「三宅ミヤケ　碧田アヲタ　覇多ハタ」をどこに比定するかについて、『遠江国風土記伝』を著した内山真龍は、「三宅ミヤケは今の宮口なり、碧田アヲタは今の阿多古十八村なり、覇多ハタは今の半田村なり」とした。読みの類似をその比定地としての根拠としたこの内山説は、今日でも踏襲されている。

しかし、この説については、その郷名の読みと比定地のあざなにいささか乖離があり、「三宅ミヤケ　碧田アヲタ　覇多ハタ」の３郷の所在地は、今のところ明確ではなく、今後の課題とすべきであろうと考えている。

浜松カントリークラブ
勝坂山Ⅰ遺跡
勝坂山古墳群
勝坂山墳墓群
泉古墳群
北谷遺跡
岩水寺
浜北区
根堅
大内Ⅰ遺跡
大内Ⅱ遺跡
大内Ⅲ遺跡
大内Ⅳ遺跡
大内Ⅴ遺跡
大内Ⅵ遺跡
大内Ⅶ遺跡
大内Ⅷ遺跡
大内Ⅸ遺跡
大内Ⅹ遺跡
大内Ⅺ遺跡
大内Ⅻ遺跡
大内ⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅧ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅨ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅠ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅡ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅢ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅣ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅤ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅥ遺跡
大内ⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅩⅦ遺跡
大内ⅩⅩ

宮口と浜北古窯跡群　『倭名類聚鈔』の時代、中屋遺跡に隣接する宮口には、浜北古窯跡群が存在する。この古窯跡群は、９世紀末に始まる灰を釉薬とした灰釉陶器を焼造する窯が存在し、当初、宮口吉名から生産が始まり、地点をかえ12世紀末～13世紀初頭の山茶碗生産まで続く。

宮口は鎌倉時代末、宮口郷と呼ばれ、荘園が立券されていた様子はなく、遠江の国司と守護を掌握していた北条一門の所領であった（奥富1980）ことから、国司の権限のおよぶ国衙領の可能性が高い（足立他1982）。

岩水寺　赤狭郷にある岩水寺（図26）は、寺伝によれば、行基が薬師堂を建立したことを始まりとする古刹で、宗派も法相宗から天台宗、今の真言宗へと変えていったとされる。岩水寺とはいくつかの子坊や神社も含む一山組織の寺号である。

現在、門前にある山住神社（図27）は神仏分離の以前には、山王大権現であった。この山王大権現とは天台宗および延暦寺の鎮守であり、明治初期まで山王信仰が残っていることは、ある時期まで岩水寺の一山組織の中に、真言宗とともに天台教義がしばらく残っていたと考えられ、両密体制がとられていたと推定される。

赤佐郷　鎌倉時代の赤狭については史料は認められないものの、『遠江国風土記伝』には、この岩水寺についての興味深い伝説が収録されている。その伝説とは執権北条時頼の廻国伝説にちなむもので、岩水寺の僧侶が、権勢をほしいままにしていたため、旅の僧侶に身をやつしていた執権北条時頼が、それをとがめる意味で岩水寺の所領を召し上げたというものである。

時頼の廻国伝説を分析した佐々木馨の見解によれば、この伝説は祈願寺と関係し、真言密教と臨済禅を中心とする「武家的体制仏教」に改宗することであった（佐々木1997）。時頼の廻国伝説の分布は、北条氏の得宗領と関係するという豊田武の見解（豊田1976）から、赤狭郷は得宗領であった可能性を指摘する意見がある。しかしながら当該期の遠江は、国司と守護が北条一門で占められ、その後の没官領にも赤佐郷は認められない。佐々木の見解を受け、守護であり壇越でもあった北条氏が岩水寺を「武家的体制仏教」に改宗したため、時頼の廻国伝説が生まれたと考えられる。

また、江戸時代の地誌に赤狭郷は赤狭庄と記されているところから、荘園として赤狭の地が成立していたという見解がある。しかしながら中世中・後期の文書には次のようにあり、「赤佐」か「赤佐郷」とある。

図26　岩水寺

図27　山住神社

暦応三（1340）年「瑠璃山年録残編裏書」の鋳鐘の「大工赤座郷孫三郎」
貞治三（1364）年「霊山寺梵鐘銘」の「大工赤佐住道阿」（静岡県 1992）
永禄三（1560）年「大宝寺文書」「赤佐郷大宝寺領」
永禄十一（1568）年「瀬戸文書」中「赤佐次郎左衛門名」（静岡県 1994）
このことから赤狭は荘園ではなく、郷の記載から国衙領の可能性が高い。

赤佐氏と奥山氏　建治元(1275)年、京都六条八幡宮再建の割り当てを記した「六条八幡宮造営注文」には、伊豆・駿河・遠江の御家人の一部が判明する。そのなかに「赤佐左衛門跡　五貫」とあり、御家人赤佐左衛門の跡職（家督や遺領）から五貫文の負担すること（静岡県 1996）になっていた。この赤佐氏とは、のちの彦根藩井伊氏の一門である奥山氏のこととされる。

奥山氏については、初代が赤佐三郎俊直と称し承元三（1209）年に亡くなっていること、二代が赤佐左衛尉共俊で寛元四（1246）年になくなっていること、三代は新左衛門共明で弘安二（1279）年になくなっていること、四代左衛門太郎朝清は井伊奥山氏を称し、正和元（1312）年になくなっていることが「奥山家古代記」(引佐町古文書研究生 1973) に記されている。輩行名では赤佐氏初代が赤佐三郎を称し、井伊氏が太郎を称していることから、井伊氏三男を創立した家門といえる。

「六条八幡宮造営注文」中の赤佐氏の仮名が「赤佐左衛門」であり、赤佐二代の仮名とほぼ一致すること、三代とされる人物が「新左衛門」と称していることから、家名を踏襲したとみることができる。よって奥山家系図や「奥山家古代記」ように、南北朝期に苗字の地を離れ、赤佐から奥山（北区奥山）へ移住し、赤佐氏から奥山氏へと変貌を遂げたと考えられる。おそらく中屋遺跡や赤佐郷の消長にとって大いなる事件であったと思われる。想像の域を出ないが、本宗家井伊氏が南朝方となって足利氏に敵対して衰退し、14 世紀後半には奥山氏がその代わりに足利方井伊氏の代表となって、井伊保に入ったものと推定したい。天文十八（1549）年、宮口興覚寺に寺領を寄進した井伊朝光は（静岡県 1994）、本名の「朝」の通字から奥山氏の一族と考えるならば、この段階にも赤佐氏の所領の一部が宮口に残っていたのであろうか。

鋳物師と「赤佐御寺」　赤佐には梵鐘・鰐口などを鋳造する鋳物師がいたことが、「大工赤佐住道阿」などの金石文より判明する。この鋳物師の動向については別に述べているので（足立 2010）割愛するが、14 世紀中葉から 16 世紀前葉までその存在が確認できる。

明徳四（1393）年の深井瑞勝陳状（東寺百合文書さ函）本家役未進の名に、「赤佐御寺御預」とある（静岡県 1992）。これは赤佐の某寺が村櫛荘の名田についての年貢を納める役割を担っていたことである。

同様に康正元（1455）年の蒲御厨の年貢未進の文書（静岡県 1992）にある「赤佐方」とは、赤佐の寺社や人物が蒲御厨に入作していたことで、寺社や人物がこの年貢を未進していたことである。赤佐が村櫛荘の一部や蒲御厨の一部に入っていたことではない。蒲御厨に関連し、永禄三（1560）年蒲御厨代官松井氏今川氏真発給文書にある松井氏被官に、別所源太郎なる人物がいる（静岡県 1994）。これについて、菊池武雄は赤佐の住人としている（菊池 1953）が、後述のように雲岩寺村がもともと別所村と称していたことから、このように推定されたと考えられる。妥当性も含め今後の課題としたい。

中世墳墓　岩水寺の東側丘陵に、勝栗山と呼ばれる丘陵がある。この斜面には、平安末から鎌倉期の蔵骨器が多数発見され（池谷 1968）、また戦国時代を中心とする石塔も出土した。勝栗山丘陵の斜面には、古代末から中世の大規模な墓域が存在したこと推定される。古代末から中世前期における火葬された人物は、きわめて限られた階層とされることから、その火葬骨を収める蔵骨器の存在は、勝栗山墳墓がこ

の地域の上級階層（御家人や僧侶）の墳墓であったことを物語っている。それとともに、岩水寺の関与も想像されるが、今のところ推定の域を出ない。

中世の石塔が岩水寺境内や安泰寺、竜泉寺、大宝寺、興覚寺など中屋遺跡の北側丘陵にそった寺院などから発見されている。その中でもっとも古いとされる、14世紀代の大屋敷墳墓の石塔（図28）はもともとの造立場所に完全な形で残されていると考えられる。それ以外の石塔は部材が多く、周辺にあった石塔が各寺院に寄せ集められ、供養されたものもあろう。それにしても、各村々に供養塔が建てられていたこととなる。

安泰寺と雲岩寺　近世、赤狭郷は雲岩寺村、安泰寺村、岩水寺村、尾野村、柴本村の5村からなり、「赤蛇五ヶ村」と呼称されていた。雲岩寺村と安泰寺村、岩水寺村は、村名に寺名を付している。

中屋遺跡の範囲は、江戸時代には村高57石、12戸からなる安泰寺村のうちであった。この村はもともと岩水寺村入会であった。

村名となった臨済宗の安泰寺（図30）は、石高54石、付属する安泰寺地蔵堂の石高3石と、村高は2ヶ寺に納められた。なお安泰寺地蔵堂は「岩水寺境内ニアリ、真言」（『遠淡海地志』）と、岩水寺と深く関係していた。安泰寺の建立が応永年中と伝わっているが、この地蔵堂の存在からその前身に岩水寺の子坊があり、安泰寺はそれを改宗した可能性が高い。

中屋遺跡の西北にある村高109石、18戸の雲岩寺村は、安泰寺村と同様に岩水寺村入会であった。村名となった雲岩寺とは、「旧名は別所村、後に寺号を負う」（『遠江国風土記伝』）とあるように、曹洞宗竜泉寺（図31）の前身の寺号である。竜泉寺への改名は、慶長十九（1614）年と伝えられている。

図28　大屋敷墳墓

図29　安泰寺石塔

図30　安泰寺

図31　竜泉寺

雲岩寺は、大隅国生まれの洞巌玄鑑が明徳四（1393）年に開いたとされる（『遠江国風土記伝』）。この玄鑑は豊後泉福寺で修行し、遠江に来ている。応永元（1394）年には短期間で、豊後泉福寺に戻り、応永十六（1409）年に亡くなっている人物である（禅学大辞典編纂所 1978）。したがって雲岩寺は、育成した弟子達によって維持されたと考えられる。江戸時代には末寺 20 宇というから、玄鑑は短期間の滞在で大きな足跡を残したことになろう。

ところで竜泉寺には２口の雲板があった（久保 1967）。一つは天正年中の銘の雲板であり、「当寺二世千巌舜鶴」の頃の雲板とされる、それ以上のことは不明である。２口目の雲板は慶長廿一年六月銘があったとされるが、慶長は二十年七月に改元されているので、おそらく慶長二十（1615）年六月には、どちらかの錯誤があろう。

「当寺二世千巌舜鶴」とあるが、明徳四（1393）年の開山から 200 年以上も年を経て二世はあり得ず、大源派の千巌舜鶴によって中興され二世となったと考えられる。ただし洞巌玄鑑を開山一世とし、本人を二世とした可能性が高い。すると雲岩寺から竜泉寺への寺号の変更は、再興によるものと推定される。慶長二十（1615）年六月の銘をもつ雲板も、このために用意されたのであろう。

それにしても遠江の大源派の進出は、庶民層までの取り込む葬式の荘厳化により大いなるものがある。隣接する大宝寺も曹洞宗であり、竜泉寺の末寺も周辺にあった。中世後期から戦国期に、中屋遺跡に隣接する岩水寺から北西側の丘陵裾部は、浜北区においても寺院と石塔が集中する地域である点は、葬式と供養の荘厳化の影響であろう。このような点は、中屋遺跡の性格を考える上で考慮すべき点であろう。

註

1．『浜北市史上巻』1989 の「浜北市地形分類」によれば、中屋遺跡周辺は沖積錐・崖錐とされる。「竜玉村 二万分の１」では、遺跡周辺は、岩水寺丘陵から南北方向に開析谷末端と小規模な扇状地が読み取れる。

2．法全寺梵鐘は大和鋳物師の作である。蓮華寺鰐口は赤佐の鋳物師藤原秋長の作、養寿寺雲板は藤原秋長が仲介し納めた。別に秋長は鰐口を鋳造している。なおこの鰐口と雲板については（足立 2010）で詳細にふれた。

引用・参考文献

菊池武雄　1953「戦国時代の権力構造」『歴史学研究 166』

久保常晴　1967『仏教考古学研究』

池谷和三　1968『静岡県遠江地方に於ける中世蔵骨器の研究』

引佐町古文書研究生　1973『引佐町史料 第四集』

浜松市　1976『浜松市史 二』

豊田武　1976『英雄と伝説』

禅学大辞典編纂所　1978『禅学大辞典』

奥富敬之　1980『鎌倉北条氏の基礎的研究』

足立順司他　1982『静岡県湖西市東笠子（HK）第 27 地点発掘調査報告書』

静岡県　1992『静岡県史 資料編中世Ⅱ』

静岡県　1994『静岡県史 資料編中世Ⅲ』

静岡県　1996『静岡県史 資料編中世Ⅳ』

佐々木馨　1997『執権時頼と廻国伝説』

足立順司　2010「鋳物師の本貫」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要　第 16 号』

第３章　中世～近世

１．概要

（１）中世前期（図 32）

大溝・土塁　調査区中央北側では、大溝（SD2001）と土塁（SA2001）が検出されている。大溝は東西端で北へ向かってコの字形に屈曲しており、施設の四周を囲繞する大規模な区画溝とみられる。幅は平均約 3.5 m、深さは平均約２mで、南辺は長さ 160 mの規模となっている。南東隅からは、東に向かって排水溝が設けられており、26 m東に位置する河川（SR8001）に接続している。

土塁は、削平により大部分が失われていたが、南東部では比較的良好に遺存していた。土塁は、溝の上端から幅約５m、高さが築造時の地表面から約 30 cmの規模で検出された。西面土塁は、平面的には検出できなかったが、調査区の北壁において、その存在が確認された。掘り込み地形や版築は確認できず、地表面に基盤層の土を盛り上げることにより築かれている。

いずれも、出土遺物等から、12 世紀後半～末頃の時期に築かれたものと推測される。

河川跡　調査区の東側では、南に向かって流れる河川跡（SR8001）が確認されている。河川としては、古代からその流れが認められるが、中世前期にはその両岸に護岸施設が築造される。護岸施設は、基底部に打ち込んだ木杭を芯材とし、粘土をブロック状に混ぜた土を積み上げて築いている。一部横に寝かせて置かれた枝材なども確認されており、基底部には構造材も敷設されていたものとみられる。

また、護岸施設では、螺鈿鞍と呪符木簡、ヤダケの束が埋納された状態で発見されている。螺鈿鞍は、組紐は失われていたが、組み上げられた状態で出土している。螺鈿自体は消失していたが、大小２種類の瓜文が 25 ヶ所に施されている。中世の螺鈿鞍の出土としては、国内で初めての事例となる。呪符木簡は重ねられた状態で、合計５枚出土している。符籙＋呪句（「急々如律令」）という文字構成を基本とし、４枚には「春」「夏」「秋」「冬」の文字が加えられている。

土層や出土遺物等から、護岸施設が築かれた時期は、13 世紀の中頃と推測される。

図 32　中世前期の遺構配置図（１：1200）

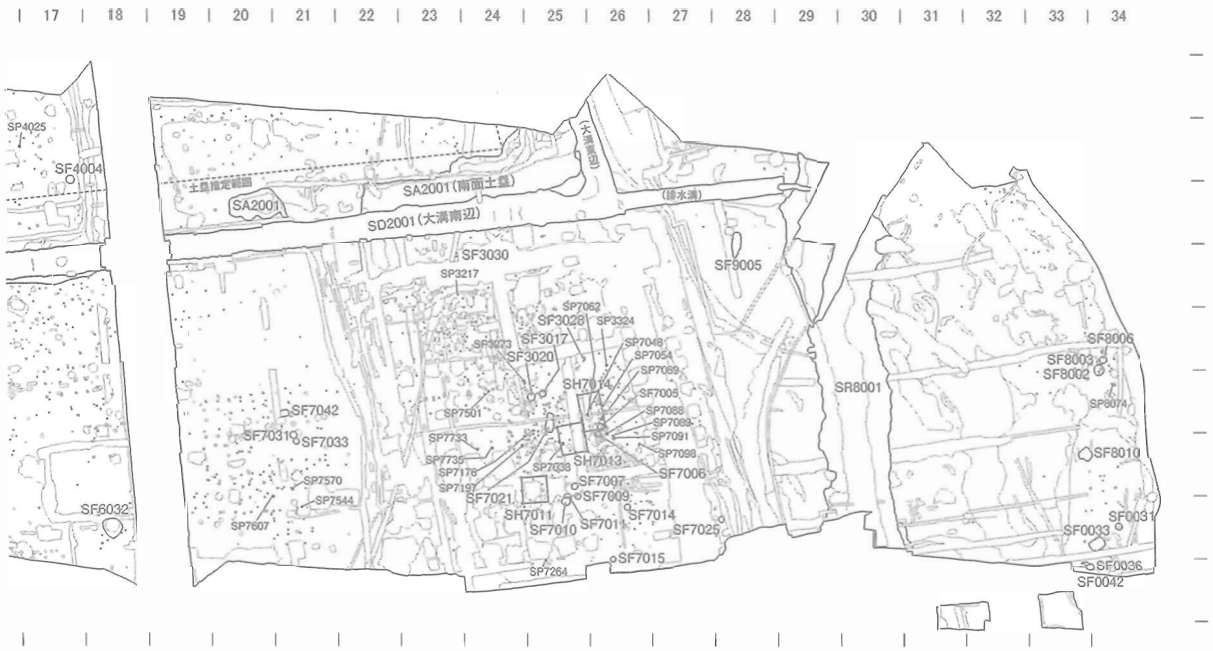
掘立柱建物　掘立柱建物は、北西部と南東部で確認されている。北西部では、３棟（SH1001・1004・2002）発見されており、主軸方位はＮ－５～７°－Ｗとほぼ揃う。南東部では、３棟（SH7011・7013・7014）認められている。すべての建物が同時期ではなく、SH7014はSH7013の廃絶後に建てられている。建物の規模は、SH1004と2001が建床面積25～30㎡とやや大きいが、他はほとんどが20㎡以下の小型の建物となっている。

また、柱穴とみられる小穴にも、中世前期の遺物が出土するものがいくつか検出されている。小穴は、建物が確認される北西部や南東部の他に、南側中央部にも認められる。建物としては認識できないが、この周囲にも中世前期の掘立柱建物が存在した可能性がある。

井戸　井戸は、調査区東側で２基（SE1001・5001）検出されている。いずれも、井戸枠等の施設は発見されていない。SE1001は直径2.1ｍの円形で、深さは現存で2.1ｍとなっている。周囲には掘立柱建物が検出されており、これらの住人によって使用されたものと推測される。SE5001は、やや離れた位置にあり、周囲から同時期の遺構は検出されていない。また、深さも検出面からは１ｍ程度となっている。この周辺については、削平によって遺構が失われている可能性も考えられる。

土坑　土坑は、合計30基検出されており、その多くは掘立柱建物や小穴の分布範囲に認められる。調査区の東端にも集中しているが、これらについては、河川（SR8001）の東側に位置していることから、東に隣接する大門西遺跡に関連する遺構とみた方がよいであろう。また、大溝（SD2001）により区画された内部でも、３基（SF2016・2023・4004）確認されている。

遺物　中世前期の遺物としては、山茶碗を中心に比較的豊富に出土している。この時期の遺物は、後世の遺構にも多く含まれている。山茶碗以外の遺物としては、渥美・常滑産の陶器や伊勢型鍋、土師質土器皿（かわらけ）などがある。また、瓦も比較的広い範囲から出土しており、遺跡の性格を反映する遺物として注目される。



（２）中世後期（図 33）

大溝・土塁　大溝（SD2001）は、中世前期を通じて底面から 50 ㎝程の堆積しかみられないが、後期になると壁面が崩落するなど、急速に埋没していく。また、この時期の埋土からは、被熱した瓦が出土している。内部の瓦葺き建物が焼失し、施設が衰退していった様子が伺える。大溝は、16 世紀までには、ほぼ埋没している。

土塁（SA2001）の状態については不明な点が多いが、SD2003 や SD3014、SD3013 などの溝は、土塁の内側に沿って巡らされていたとみてよい。少なくとも中世後期の段階までは、大部分が残存していたものと推測される。

河川跡　調査区東側の河川（SR8001）では、中世前期に築かれた護岸施設が、この段階にその大部分が削られてしまっている。また、河川の東側には、河岸が決壊して河川が氾濫した痕跡（SR8002・8003）も確認される。そのような状態ではあるが、護岸施設が修築された様子は認められない。

調査区の西端では、現在の「荒巻川」とほぼ同じ位置に河川跡（SR1001）が検出されている。調査区の西端に河岸がわずかに検出されたのみであるが、河川には溝 SD1001 が取り付くものとみられる。形成された時期については不明瞭であるが、出土遺物や SD1001 の年代から、少なくとも 15 世紀にはこの位置に流れていたものと推測される。現在整理作業中であるが、西側の寺海土遺跡でも、同じ谷を起源とするとみられる中世前期の河川跡が検出されており、河川が遷った時期については、今後あわせて検討する必要があろう。

掘立柱建物　中世後期になると、北西部と南東部に加えて、南側や大溝の区画内にも掘立柱建物が認められるようになり、確認できる数も増える。検出された掘立柱建物は、合計 27 棟である。SH7008 のように建床面積が 50 ㎡を超えるものもみられるが、ほとんどは 30 ㎡前後の規模の建物となっている。位置が重複する建物が複数あり、ほぼ同じ位置に複数の柱穴がみられるものなど、建て替えが確認できる建物も認められることから、集落が一定期間継続して営まれていた様子がうかがえる。

図 33　中世後期～近世初期の遺構配置図（１：1200）

溝　大溝（SD2001）の南西側に、新たに大規模な溝（SD1001）が開削される。15 世紀に水路として開削された溝と推測されるが、16 世紀後半には大半が埋没して窪みに近い状態となっており、実際に水路として機能したのは比較的短期間であったとみられる。

溝としては、この他に、先述のように SD2003 と SD3013・3014 が、土塁の内側に巡らされる。

井戸　この時期の井戸は、2 基（SE4001・SE6001）検出されている。SE4001 は、大溝（SD2001）の埋没後、16 世紀頃に掘られている。この頃にも、土塁はある程度残存しているとみられることから、井戸を利用する主体は、SH3001 などの南側の住人であると推測される。SE6001 については、周囲に建物が集中していることから、これらの住人が利用する井戸とみてよいであろう。

土坑　土坑は、ほぼ全域で確認できるが、やはり建物の周囲に多く認められる。比較的小規模なものが多いが、SF1025 や SF6035 のように、大規模なものもいくつか確認されている。

埋葬遺構　この時期になると、埋葬遺構が築かれるようになる。埋葬遺構は、北西部に 2 基（SX1006・1007）、南西部に 1 基（SX1008）、土塁で囲まれた区画の南西隅に 2 基（SX2008・2011）検出されている。いずれも木棺墓・桶棺墓または直葬墓であり、火葬墓はみられない。溝などに近い、いわば区画の隅に埋葬されている。副葬品は、六道銭のみのもの（SX1006・2008・2011）と、それに土師質土器皿が加わるもの（SX1007・1008）とがみられる。

遺物　山茶碗が生産されなくなることもあり、一部貿易陶磁や瀬戸美濃製品が出土しているが、一旦は土器の出土量が大幅に減少する。瀬戸美濃製品に関しては、古瀬戸前・中期には、ほぼ壷・瓶類や神仏具に限られている。15 世紀以降については、内耳鍋や瀬戸美濃製品、初山・志戸呂といった在地窯の製品など、多くの土器・陶器が確認されている。また、河川跡（SR8001）では、一部曲物などの木製品も出土している。

（３）近世（図 34）

溝　この時期には、区画溝とみられる、幅１ｍ以内の細い溝が数多く掘られている。土塁の内側では、前代の溝の位置を少しずつずらしながら、SD2004・3013・3009・3006 などの溝が掘られている。いずれも、時代を追うごとに土塁の方へ位置を移しており、徐々に土塁が高さを失っていった様子が見て取れる。南西部では、近世にはほぼ埋没していた SD1001 に沿って、溝（SD1011、10110、1008）が掘られている。一部分を再利用しながら、少しずつ位置をずらしており、継続して溝が使用されていたことが分かる。これらのうち SD2004・3006・1008 は、いずれも 18 世紀に掘られており、最終的には 19 世紀まで機能している。

他の溝は、いずれも 18 世紀に掘られている。大溝（SD2001）は、この時期すでに埋没しているが、ほぼ沿うように SD2014・2011・2006 が設けられ、同様に SD1001 には上面から新たに SD1001b が掘られている。これら、前代の遺構に重複する区画溝の存在は、埋没してもなお地境が踏襲されていたことを物語る。また、これらに接続する、SD4001 や SD6002 など、新たな区画溝も同時に設定されている。

井戸　東側で１基（SE3001）検出されている。しかし、この井戸は、18 世紀までには廃絶してしまっている。多くの区画溝が掘られる 18 世紀以降のものは検出されていない。

建物跡　近世の明確な建物跡は、検出されていない。しかし、比較的多くの遺物が出土していることから、建物が一切存在しなかったとは考え難い。井戸が１基しかみられないことから、数としては多くはないであろうが、基本的には建物構造が、遺構として残存しにくい礎石建物へ変化しているものとみた方がよいであろう。

土坑　合計６基（SF2011・3004・3005・7026・7036・7039）検出されている。出土遺物が少なく、年代の特定できないものも多いが、明確なものはいずれも 18 ～ 19 世紀の遺構である。

図 34　近世の遺構配置図（１：1200）

埋葬遺構　中世後期から続いて埋葬遺構が築かれており、合計15基検出されている。埋葬方法は、中世後期にみられた木棺墓・桶棺墓または直葬墓に加えて、荼毘墓もみられる。副葬品としては、土師質土器皿や六道銭のほか、キセルや火打ち金も副葬されるようになる。

埋葬場所は、中世後期にみられた北西部（SX1005）や土塁の南西隅（SX2005･2007･2009）に加えて、SD2006の南東隅（SX2006･2004）やSD3009の南西隅（SX3001･3002･3006～3009）、その西側（SX3003･3004）や南側（SX3005）にも広がっている。なお、埋葬遺構が築かれた時期は、18世紀前半までであり、それ以降のものは確認されていない。

河川跡　東側を流れるSR8001は、河床が高くはなっているが、17世紀前半までは川の流れが確認できる。しかし、17世紀中頃には周囲に堤が築かれて、周辺一帯が溜池となる。この溜池は、「千杭池」と呼ばれ、昭和14年まで残っていたとされる。遺構としての調査は行わなかったが、調査区の東端には堤も残存していた。

SR8001の西側には、SR7002とSR9002が検出されている。いずれも、常時水流のある河川ではなく、大溝（SD2001）の埋没後に雨水によって形成された自然流路とみられる。このうち、SR7002は、17世紀中頃に埋め立てられており、溜池を築く際に造成されている可能性が高い。SR9002については、溜池に注ぎ込む形になっていたものとみられる。

調査区の西側を流れるSR1001については、近世の段階には遺構としてはほとんど認識できない。ただし、西側には現在でも「荒巻川」が流れており、おそらくは今とほぼ同じ位置を流れていたものと推測される。

遺物　溝などから、瀬戸美濃製品や京・信楽製品、肥前産の磁器などが出土している。時期としては、18世紀後半から19世紀にかけてのものが大半となっている。また、SR8001からは、笹塔婆や漆椀、曲物、指物などの木製品も出土している。

２．大溝・土塁

SD2001・SA2001（図 35 ～ 77、図版４～８・17 ～ 20・55 ～ 60・63・77 ～ 80）

調査区の北側で、東西端で北に向かってコの字形に屈曲する、東西 160 ｍにも及ぶ大規模な溝（SD2001）が検出されており、その内側には土塁（SA2001）の存在も確認されている。

この溝の延長部分は、平成 14 年度に実施された浜北市教育委員会による範囲確認調査で検出されており、南北 210 ｍの規模のやや台形の区画の存在が推定（浜北市教委 2003）されている。また、溝や土塁の推定地には、現地形においても一部土地の起伏が確認できる。

今回調査対象となった範囲は、主にこの区画の南辺部分に相当する。

図 35　大溝位置図

SD2001の西辺は、南西隅から北へ38ｍの長さで検出されている。底面は南に向かって傾斜しており、北側に比べて南端では約50㎝低い。規模は幅約3.2ｍ・深さ約1.4ｍで、主軸は真北より約15°西に傾く。南端では東に向かって明確に屈曲しており、直線的な区画を意識していたことがみて取れる。底面は平

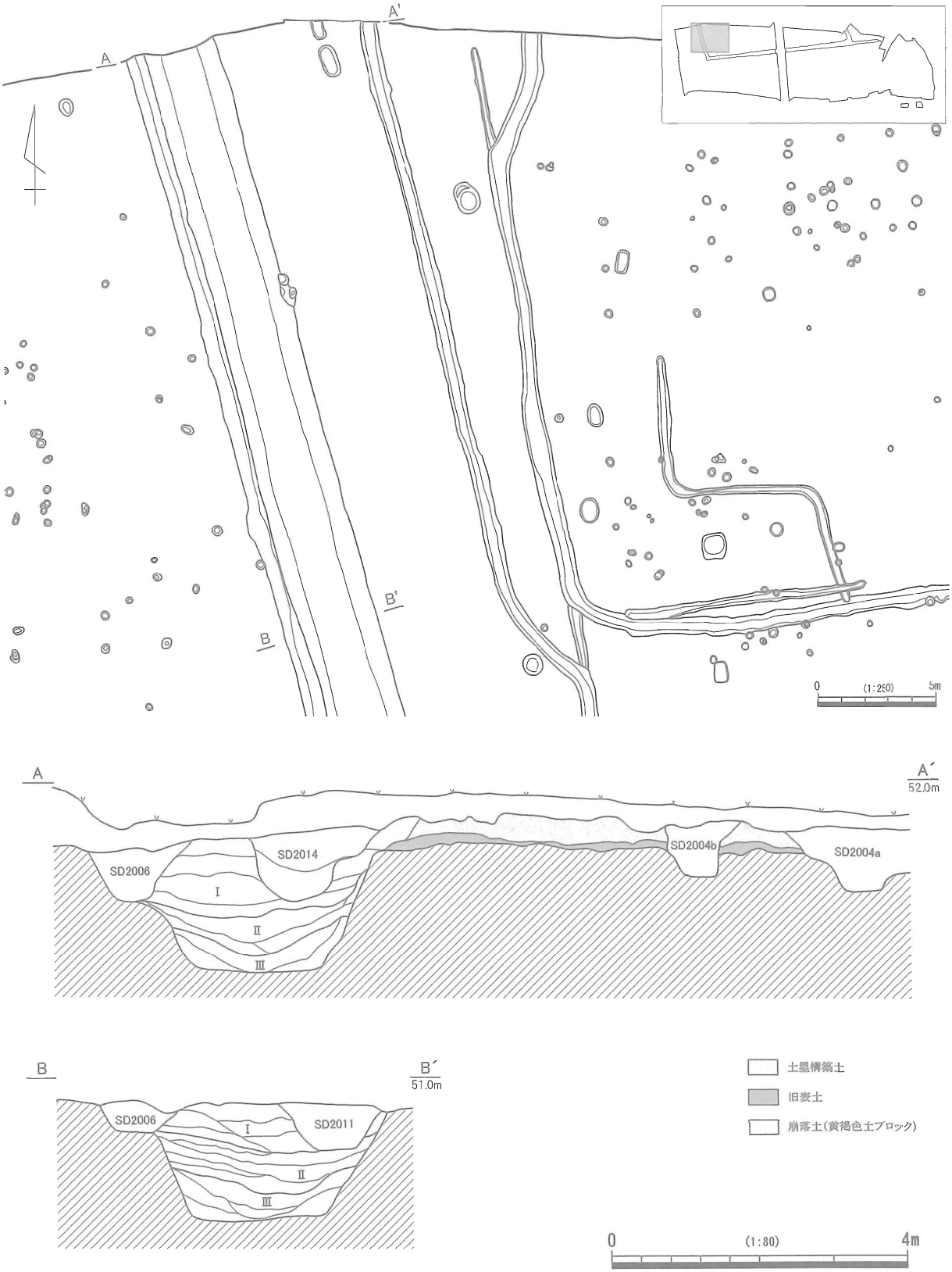


図36　大溝・土墨実測図（1）

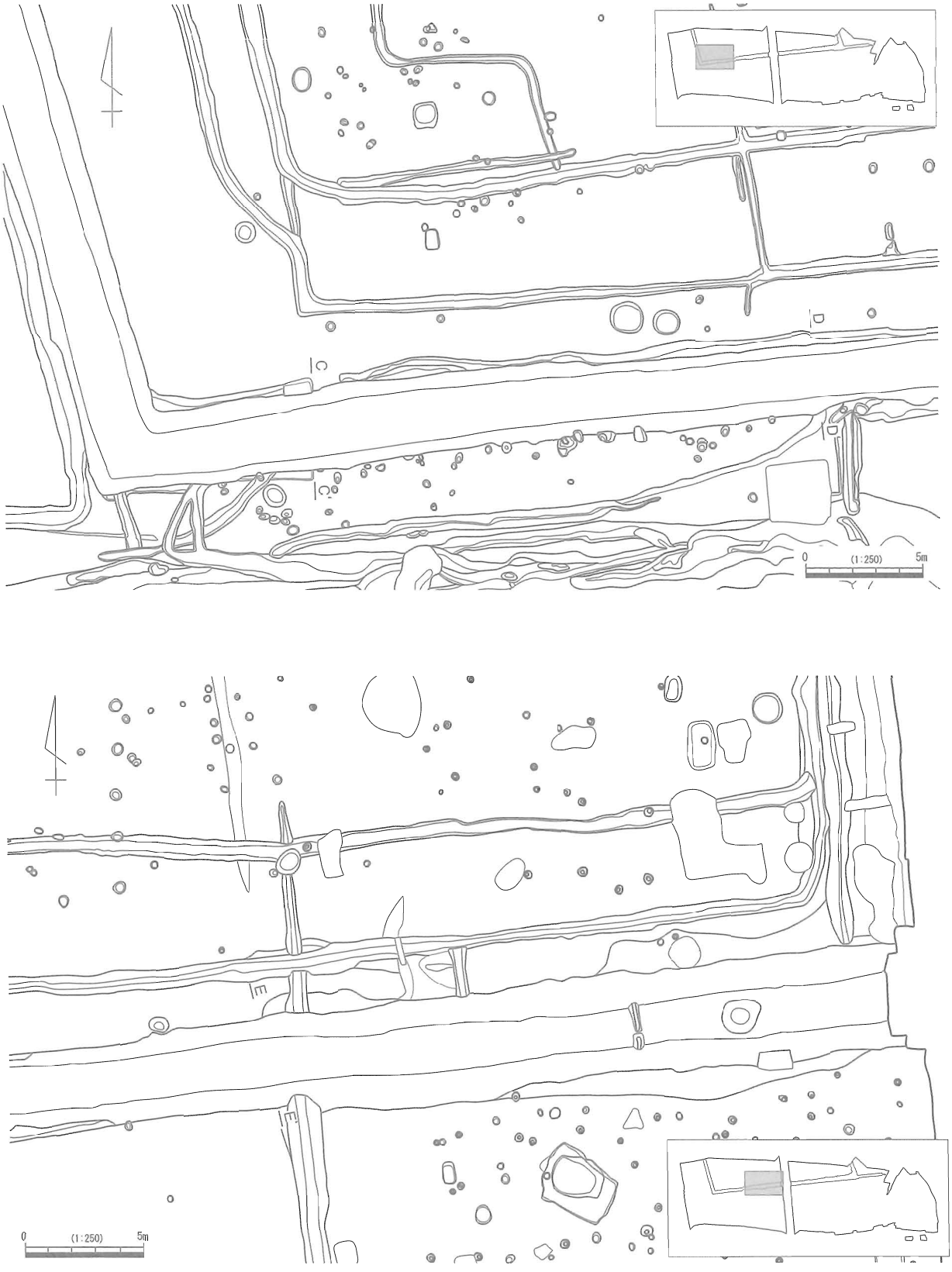


図 37　大溝・土塁実測図（２）

坦で、側面は斜め上方へ直線的に立ち上がる。

西面土塁については、平面的に検出することができなかったが、調査区の北壁においてその存在が確認されている（図36･A-A'）。確認された土塁は、溝の上端から5.7ｍの幅で残存し、東端はSD2004によっ

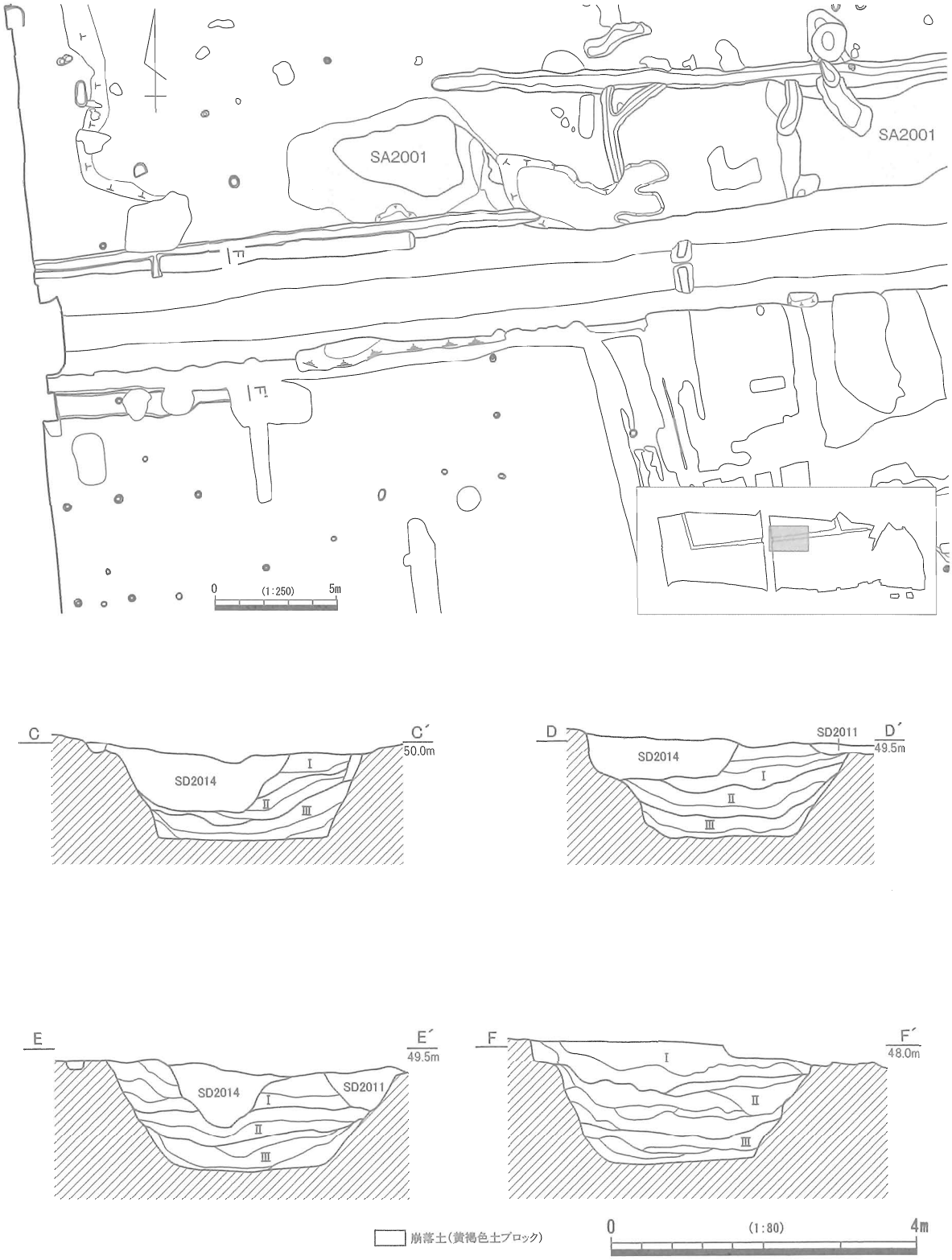


図 38　大溝・土塁実測図（3）

て失われている。高さは約 30 ㎝残存し、暗褐色土の旧地表面に基盤層の黄褐色土を積み上げて構築されている。築土は数層に分けられるものの、さほど強固には叩き締められておらず、溝の開削による排土を突き固めた程度のやや簡易な構造となっている。

南辺大溝は、中央の現道部分を除き、ほぼ全域が調査されている。溝の長さは総延長にして約 160 m

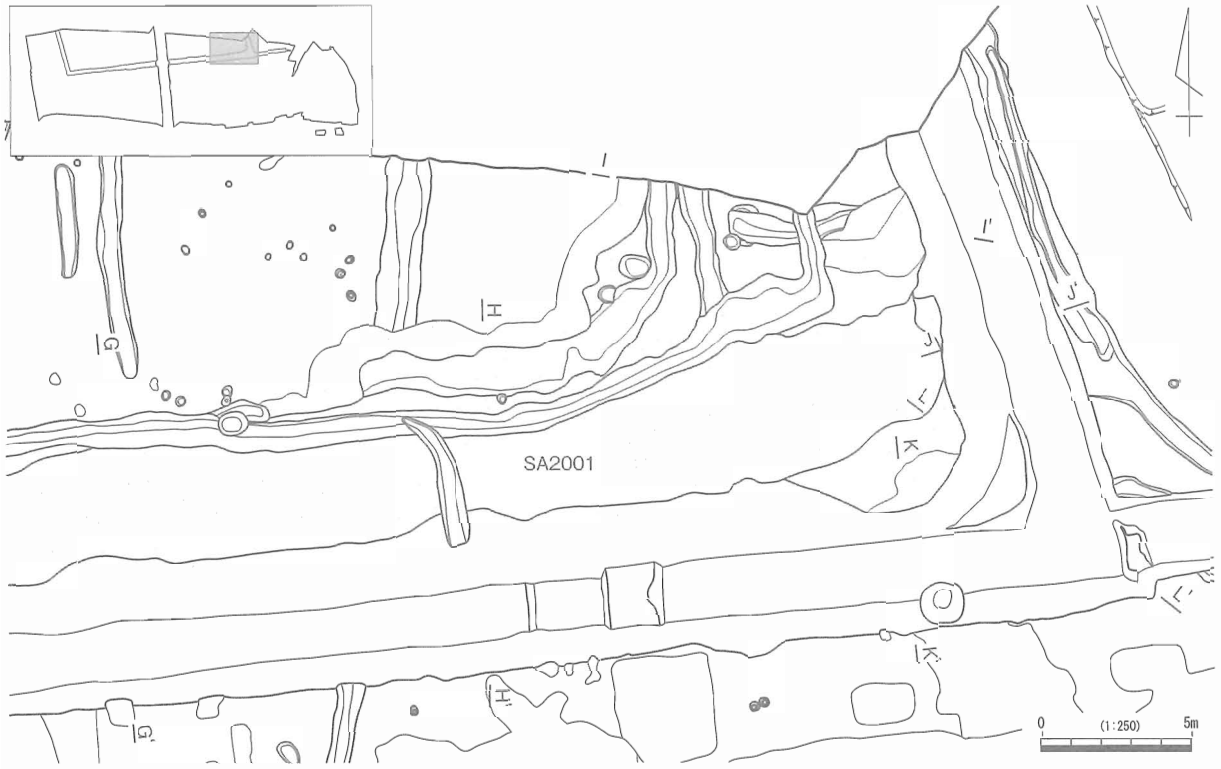


図 39　大溝・土塁実測図（４）

にも及び、蛇行せずほぼ一直線に掘られている。残存状況は場所によって異なるものの、幅は平均 3.5 m前後である。底面は東に向かって傾斜しており、東端は西端より約 3.4 m低い。東西の軸は正方位に対し、東側で約６° 北へ傾く。西辺大溝との角度は 99° であり、僅かに鈍角となっている。底面は基本的に平坦であるが、中央付近の２ヶ所では、土堤状の高まりが検出されている（図 37・38）。この高まりは、幅 45 cm・高さ 15 cmの規模で残存しており、中央部は水口状に空いている。これらの施設は、基盤層を削り出してつくられていることから、溝の開削当時に意図して設けられているとみて間違いない。急激な水流による、底面や壁面の開析を防ぐ機能を有したものと推測される。

南面土塁は、西側については面的に捉えられておらず不明であるが、東側では広範囲で検出されている（図 38 ～ 40）。残存状況の良好な東端の部分で、溝の上端から幅約５m、高さが旧地表面から約 30 cm残存する。北側が削平によって失われているため、当初の幅や内側の溝の有無については明らかでない。構築土は、基本的に西面土塁と同様で、版築や掘り込み地形は確認できない。上面からは、溝 SD3009・3013・3014 や埋葬遺構など、後世の遺構が掘り込まれている。

東辺大溝は、南東隅から北へ 18 m検出されている（図 39）。底面は平らで南に向かって傾斜し、南側は北側に比べて約 50 cm低い。幅は、側面の崩落によりやや広がってはいるが、約 3.7 mである。深さは約２m残存している。主軸は、真北より 19° 西と、西辺大溝よりも大きく西に傾いている。南辺大溝との角度は 77° であり、鋭角となる。また、南東隅に関しては、溝の内側が大きく崩落しているためやや丸くなってはいるが、崩落を免れた底部付近の形状から、西辺大溝と同様に明瞭に屈曲していたとみて間違いない。

東面土塁は、上面から多くの遺構が掘り込まれており、残存状況はよくない（図 39・40）。調査区北端で溝の上端から約８mの幅で検出されているが、構築土については部分的に確認できるのみであり、旧地表面から 10 cm程度の高さしか残存しない。西側の部分については、削平により失われている。

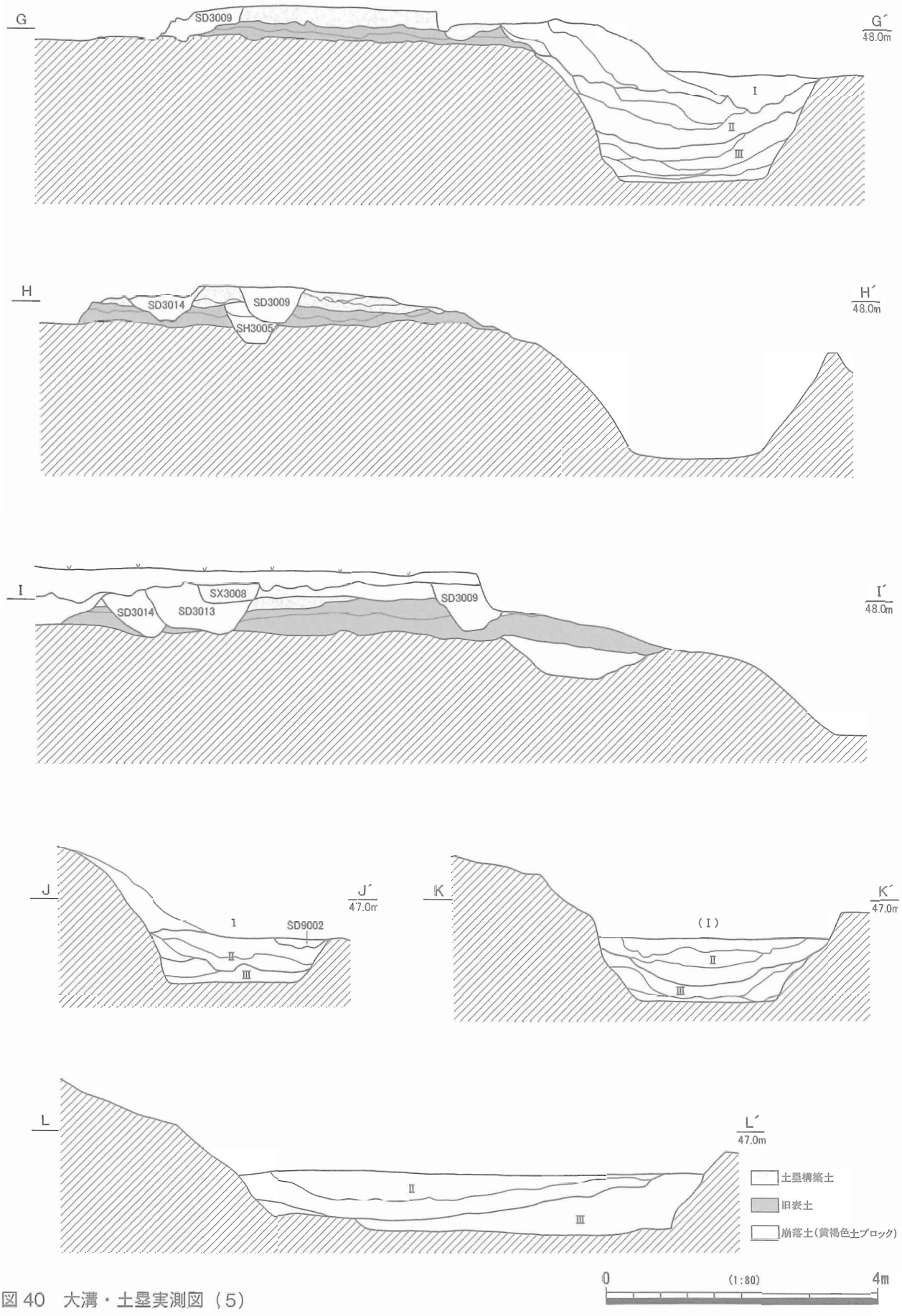


図 40　大溝・土塁実測図（5）

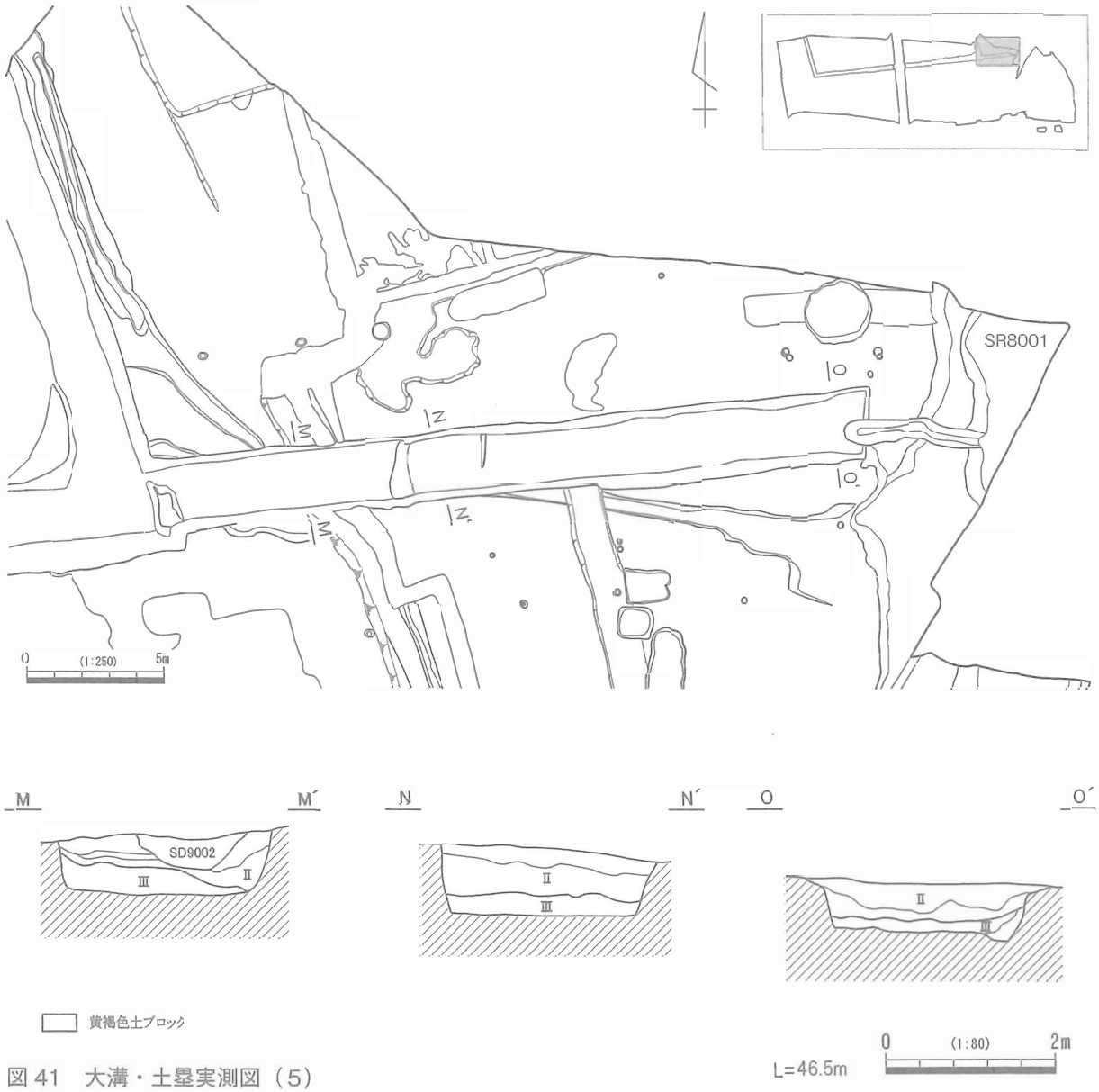


図41　大溝・土塁実測図（5）

また、区画の南東隅には、雨水を河道SR8001に排出するための排水溝が取り付く（図41）。排水溝は、南側東西溝とほとんど角度を違えず、東へ向かって一直線に延びる。長さは東西26mで、上面の幅は2.5mである。全体的に削平されている部分が多いが、平均70cm程度の深さが残存する。中央には土堤状の高まりが設けられている。同様の施設は西端でも確認でき、水口は北側に設けられている。この場所は水が最も集中する部分であり、これらが急激な水流による開析を防ぐための施設であることを如実に示している。

排水溝の先端は、幅25cmの細い溝となり、河道へと注ぎ込んでいる。先端部は他の溝と大きく異なり、直線的な形態ではなく、底面も水流によって削られ大きく波打っている。後述するように、河道に護岸施設が建設されていることからも、敢えて排水口の幅を狭めているのは、河川への急激な排水を防ぐ目的があったものと推測される。

SD2001の埋土は、基本的に外部から流入した暗褐色土と壁面などの崩落土によって構成されているが、大きくⅠ～Ⅲ層に分けることができる。

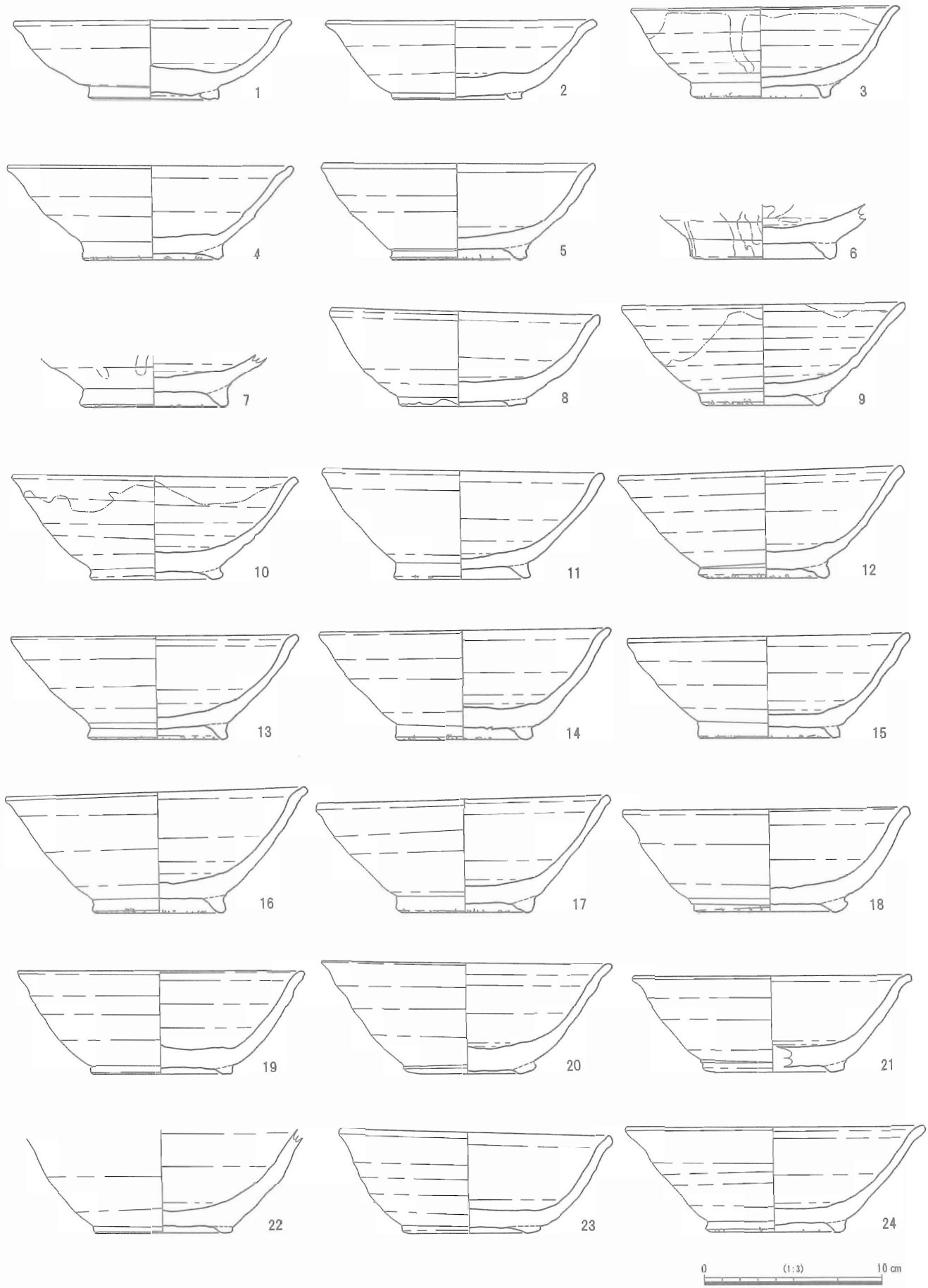


図 42　大溝Ⅲ層出土遺物（1）

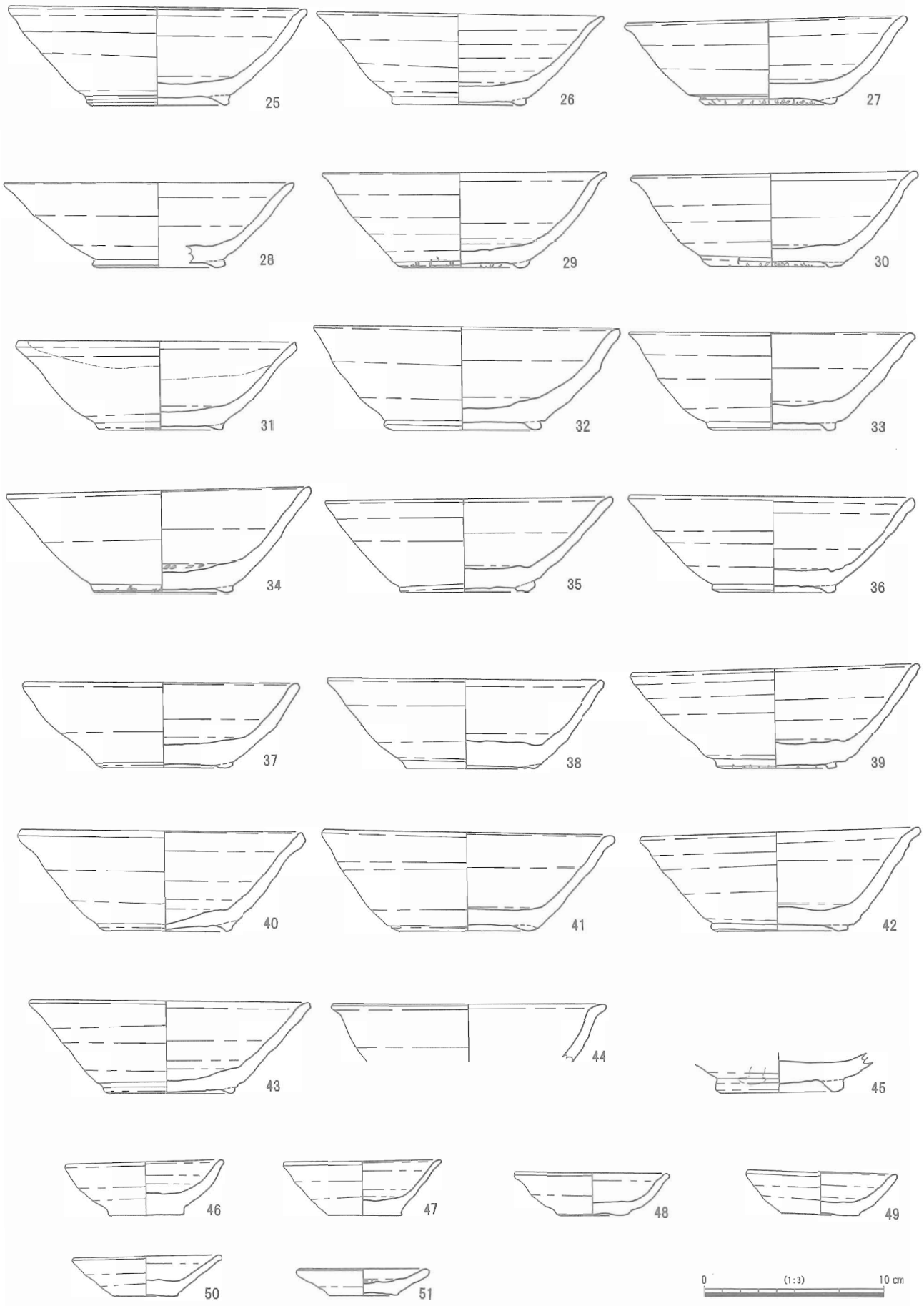


図 43　大溝Ⅲ層出土遺物（２）

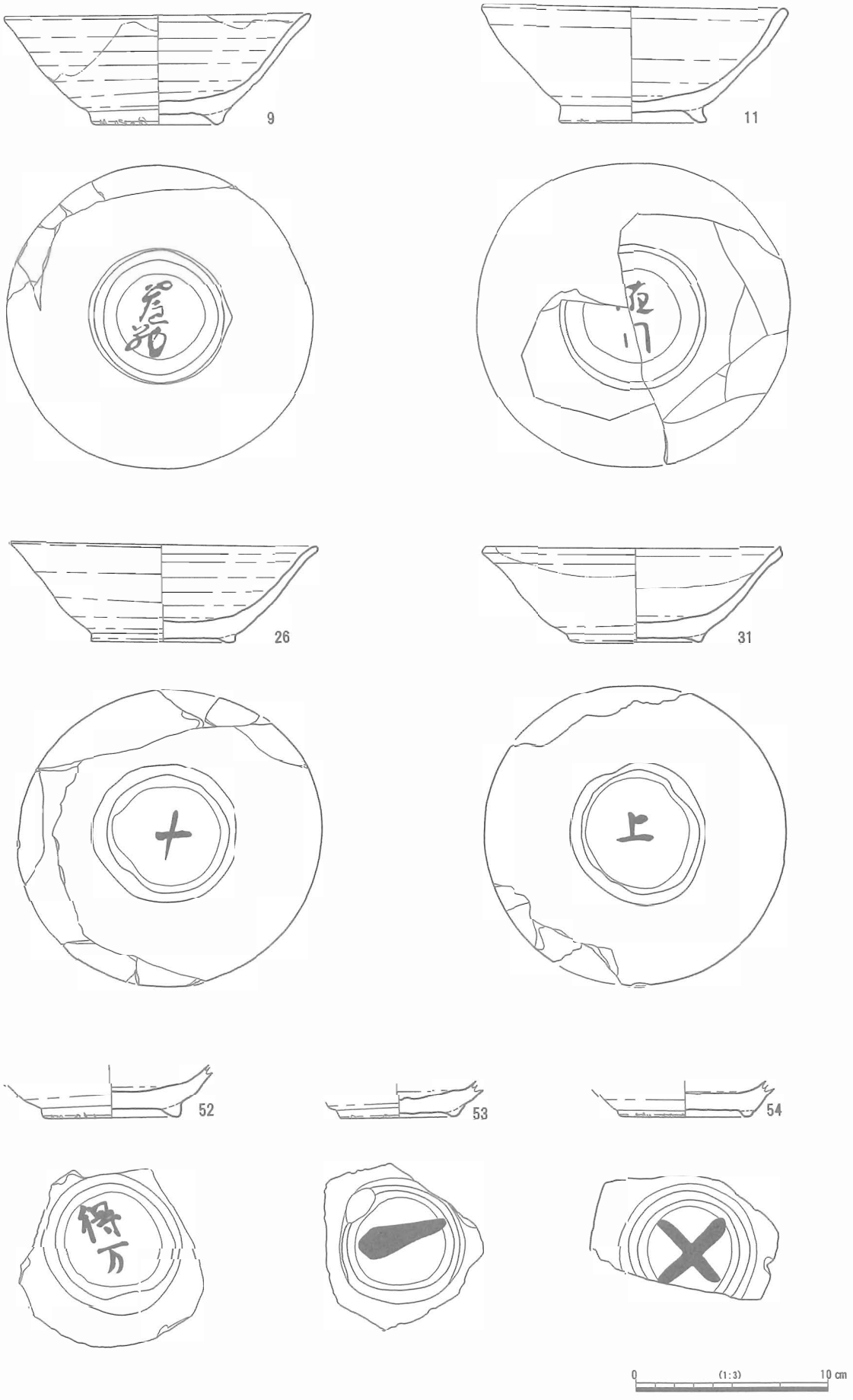


図 44　大溝Ⅲ層出土遺物（3）

Ⅲ層は最下層の埋土で、底面から50㎝程堆積している。大半が暗褐色土であるが、部分的に崩落土とみられる黄褐色土も確認される。遺物としては、山茶碗や土師質土器皿、伊勢型鍋などが出土している。

１～54は山茶碗である。１～45・52～54は碗であり、53は知多産とみられるが、他は渥美・湖西産である。46～51は小皿である。いずれも渥美・湖西産である。また山茶碗には、底部外面に墨書が残存するものも出土している。9は「蔵納」、11は「腋門」、26と54は「十」、31は「上」、52は「得万」、53は「一」と判読できる。時期としては、Ⅰ－２期からⅢ－２期までみられる。55と56は貿易陶磁で

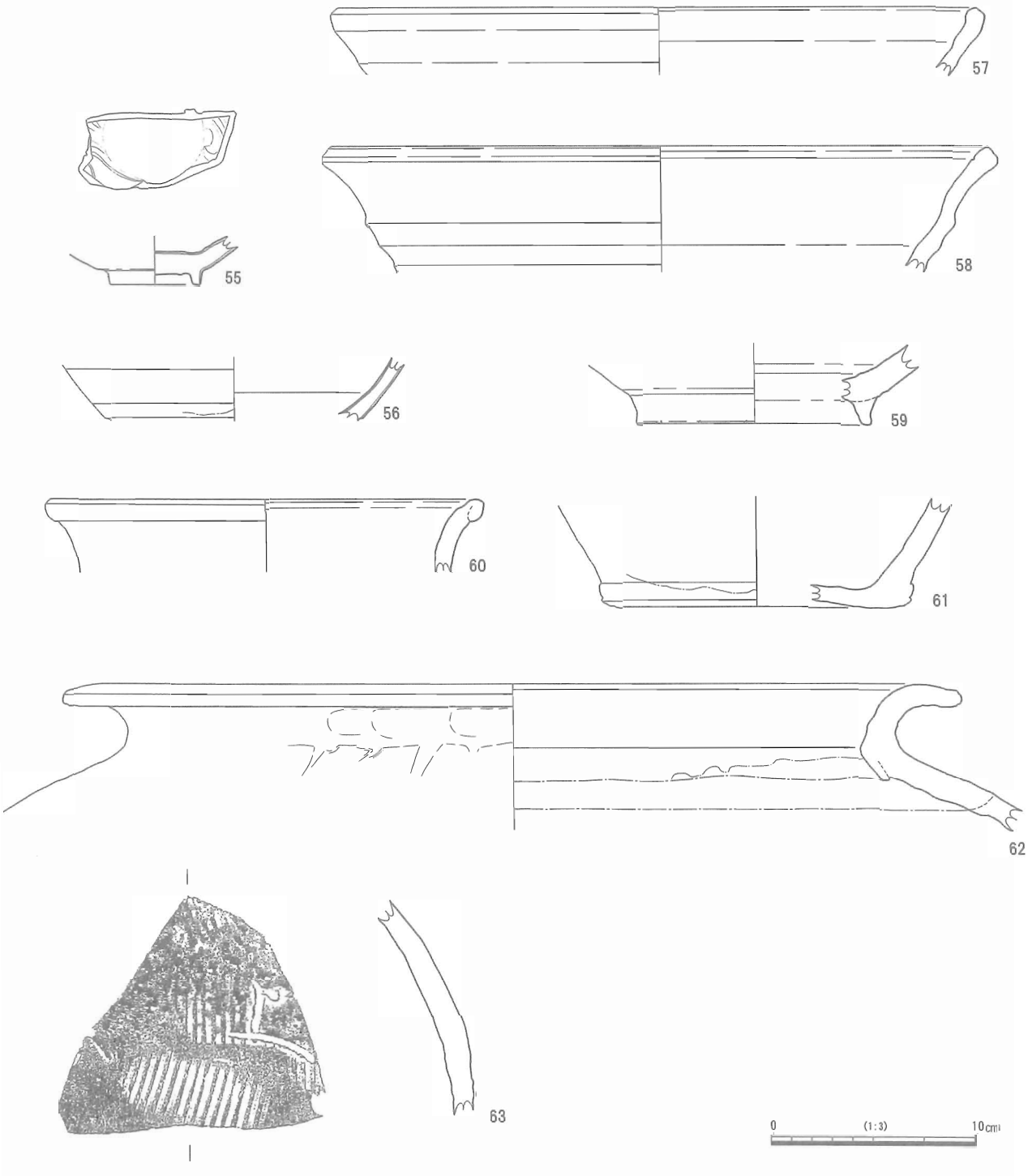


図45　大溝Ⅲ層出土遺物（４）

あり、55が青磁の碗、56が白磁の碗である。57～59は、知多産の片口鉢である。いずれも器壁は厚く、胎土は粗い。60は、渥美産の小型壺である。61～63は、渥美産の甕で、63にはヘラ書きで「上」の字が認められる。いずれも13世紀前半のものである。

64～72は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。口径12㎝前後の中型品が大半であるが、64のような口径8㎝前後の小型品や、66のような口径15㎝前後の大型品も出土している。いずれも、口縁部には強いヨコナデ調整が施されている。73～81は、ロクロ成形の土師質土器皿である。口径8～9㎝の小型品がほとんどであるが、81のような大型品も確認される。底部には糸切り痕が明瞭に残り、非

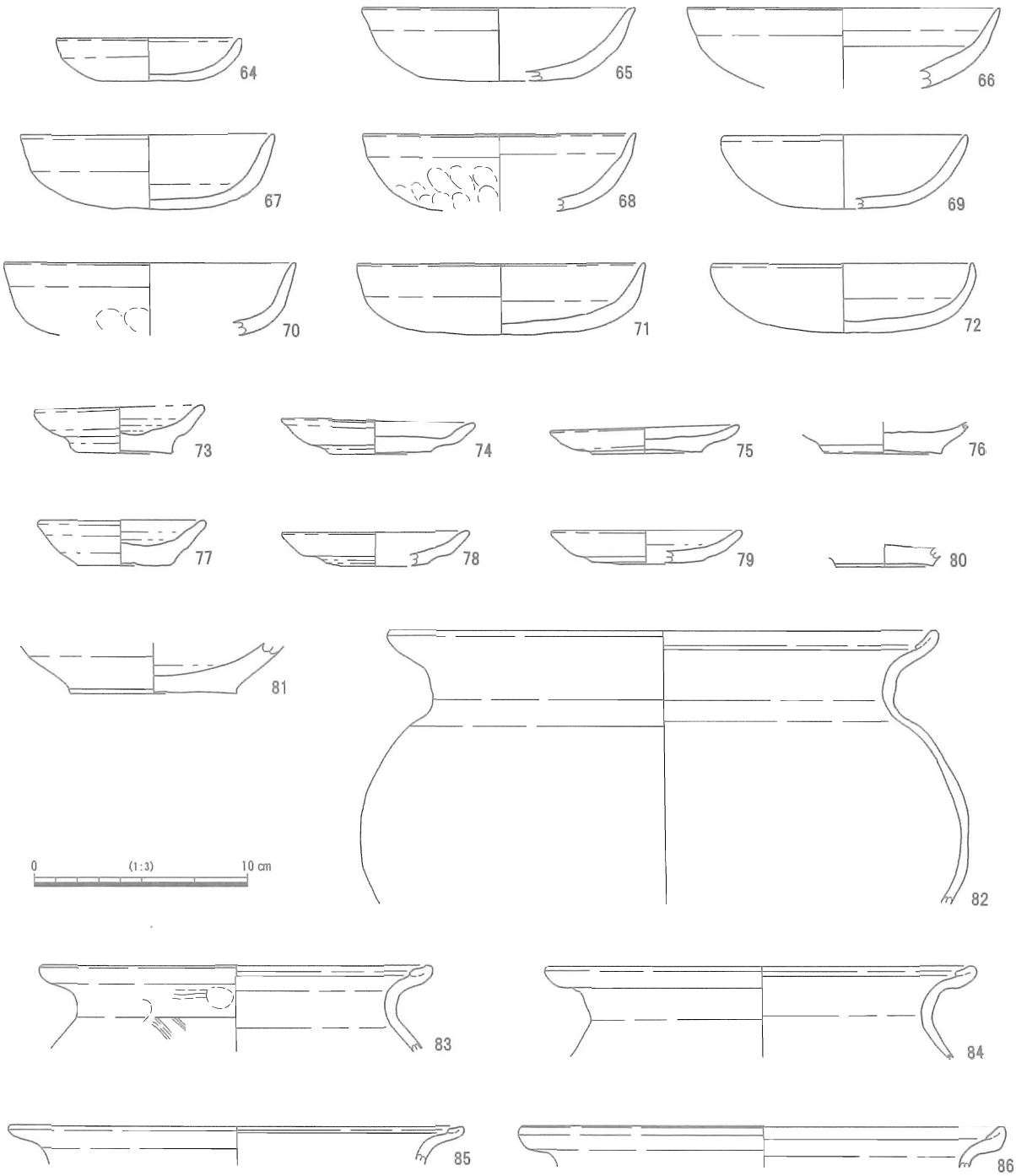


図46　大溝Ⅲ層出土遺物（5）

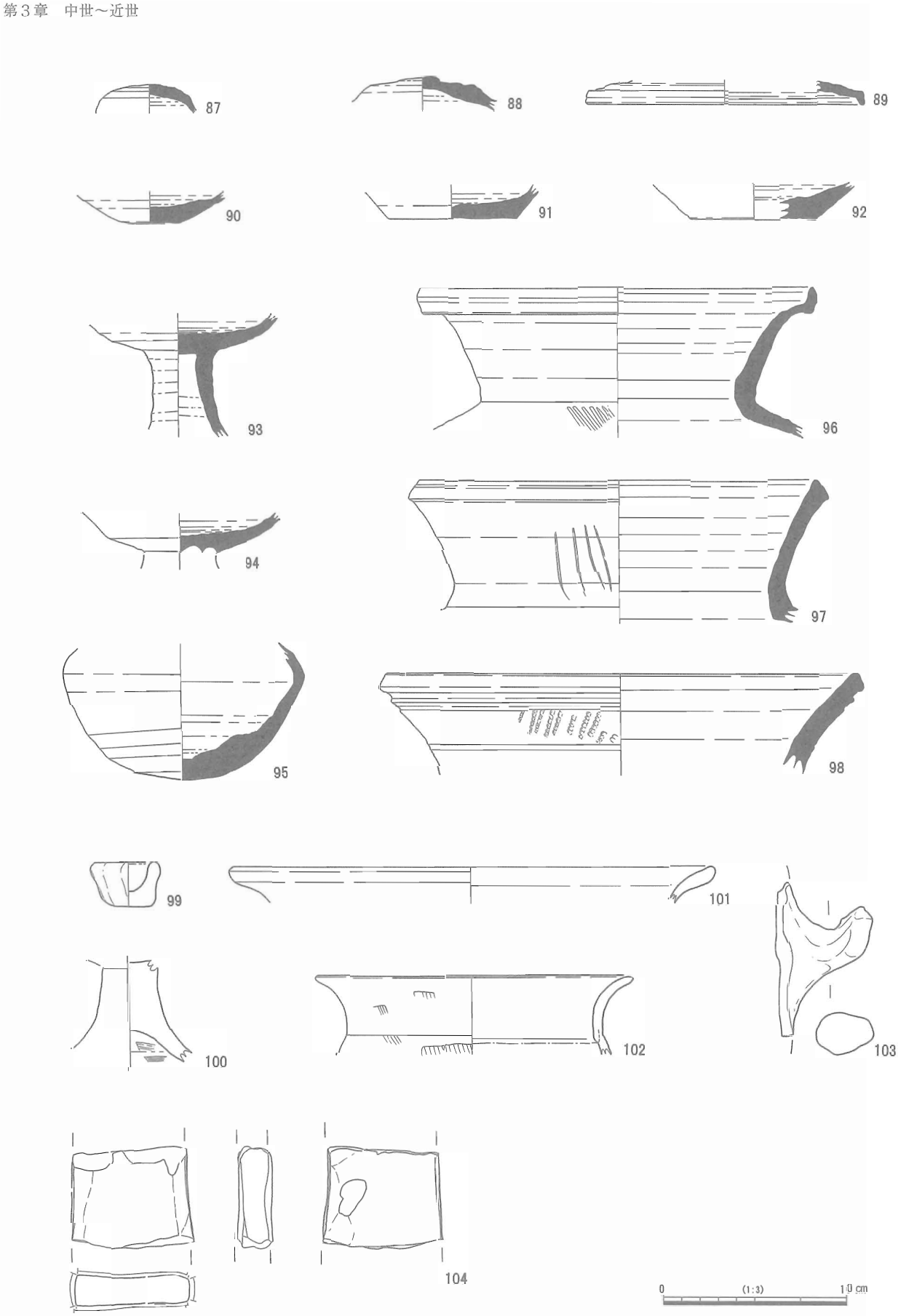


図 47　大溝Ⅲ層出土遺物（6）

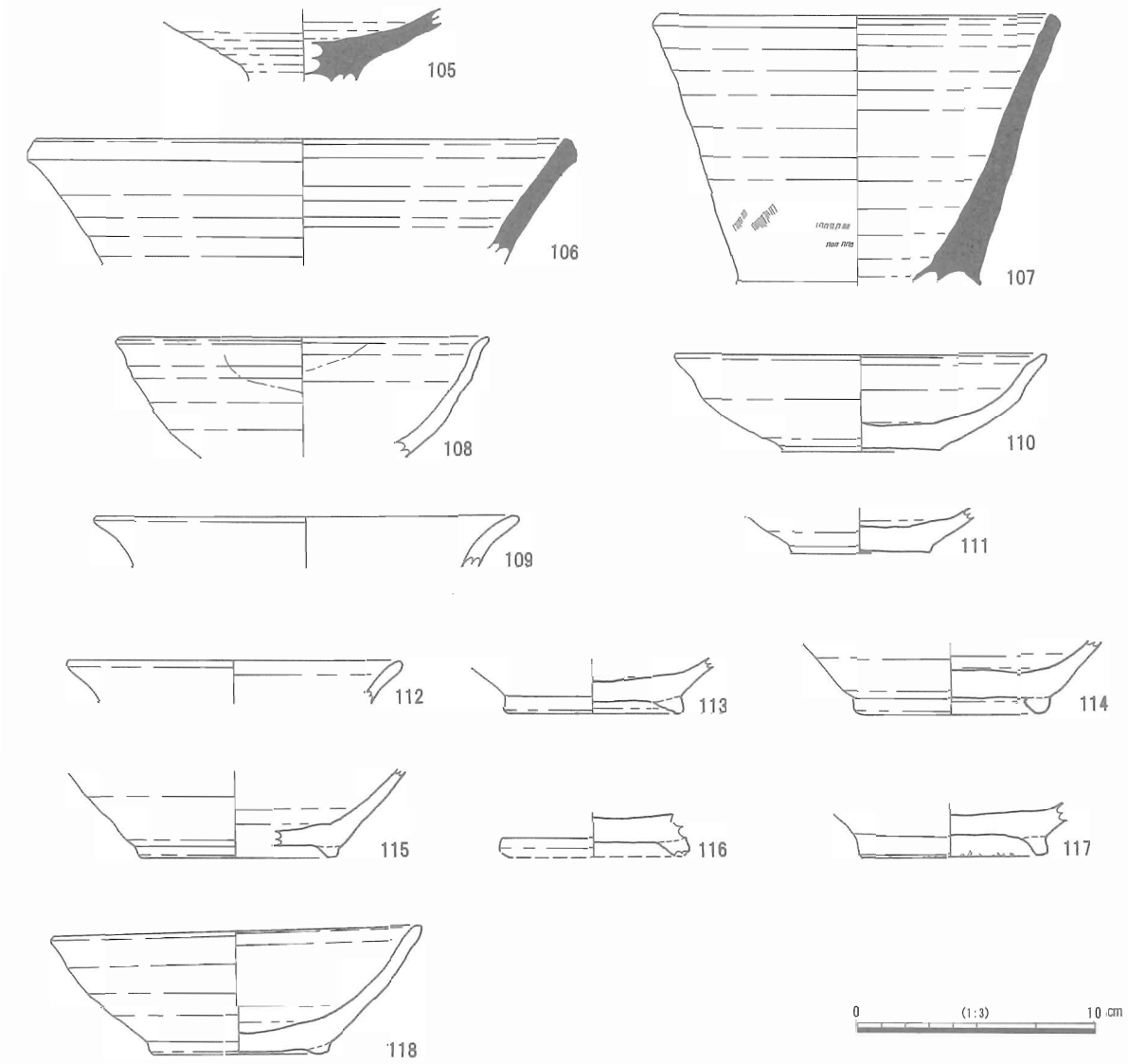


図 48　大溝Ⅲ層（南東隅崩落土）出土遺物

ロクロ成形に比べて胎土のやや粗いものが多い。82 ～ 86 は伊勢型鍋である。口縁部の折り返し部分にのみヨコナデ調整が施されており、頸部と体部の境は明瞭に屈曲するなど、12 世紀後半から 13 世紀前半にかけての形態を呈している。Ⅲ層からは、これらの他に須恵器（87 ～ 98）や土師器（100 ～ 103）、土製品（99）なども出土しているが、いずれも古代のもので、混入遺物とみてよい。このように、Ⅲ層出土遺物の年代は、13 世紀の後半頃までに限られているといえる。

また、前述のように区画の南東隅では、大規模な崩落土の堆積が確認されている。この崩落土は、Ⅲ層を攪拌するような形で堆積しており、掘り直しの痕跡は認められない。排水溝の入り口を塞いだまま放置されていることから、区画内の施設の廃絶または衰退した姿を示すものとして捉えることができる。崩落土中からは、須恵器や灰釉陶器、土師器、山茶碗が出土している。105 ～ 107 は須恵器、108 は灰釉陶器、109 は土師器の甕である。これらはいずれも古代のものであり、旧地表面などに含まれていた混入遺物とみてよい。110 と 111 は、ロクロ成形の土師質土器皿である。比較的浅いつくりで、底部には糸切り痕が明瞭に残る。皿というよりは、碗に近い形態を呈している。112 ～ 118 は山茶碗である。いずれも、Ⅱ期からⅢ－１期にかけてのものである。

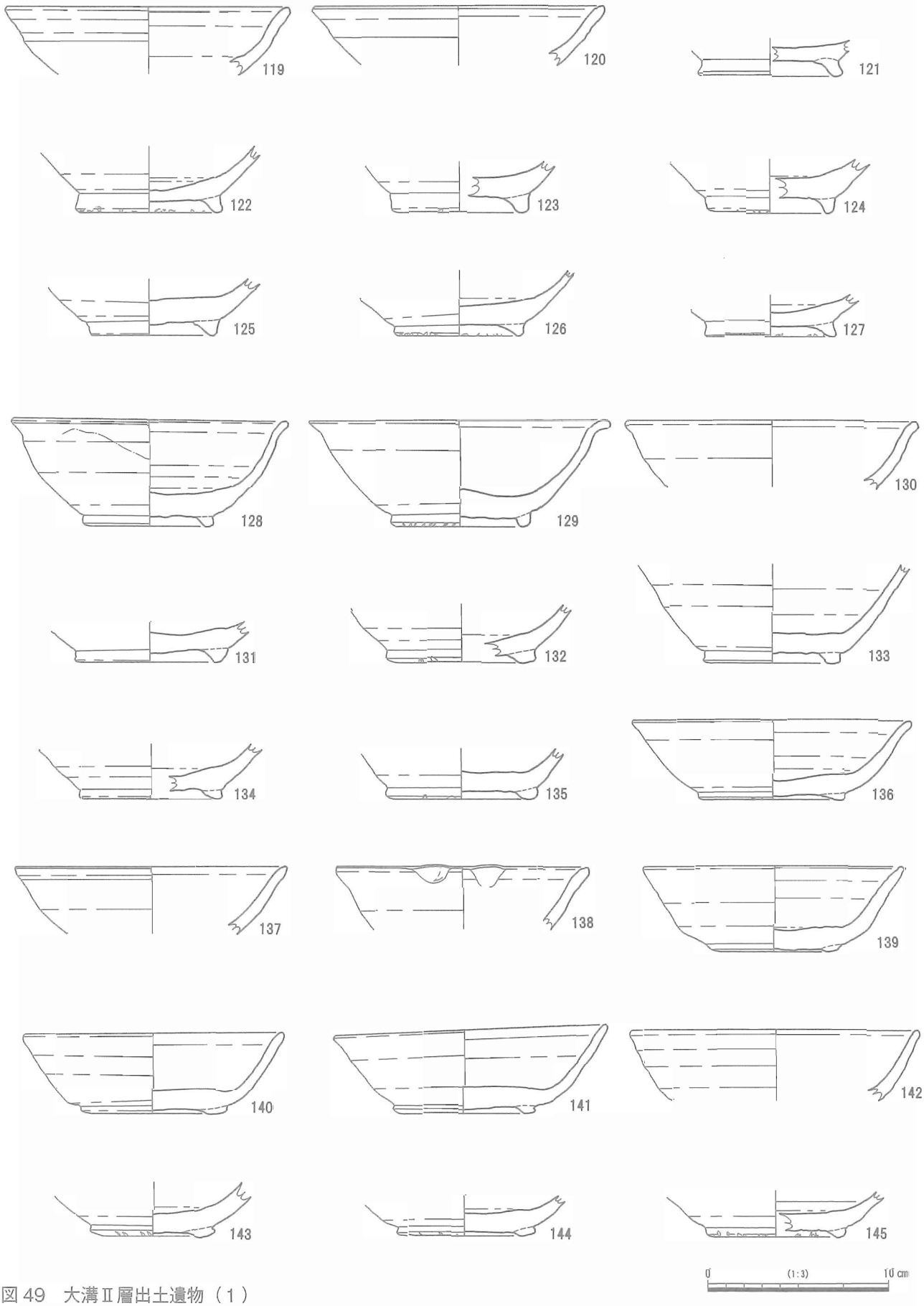


図 49　大溝Ⅱ層出土遺物（１）

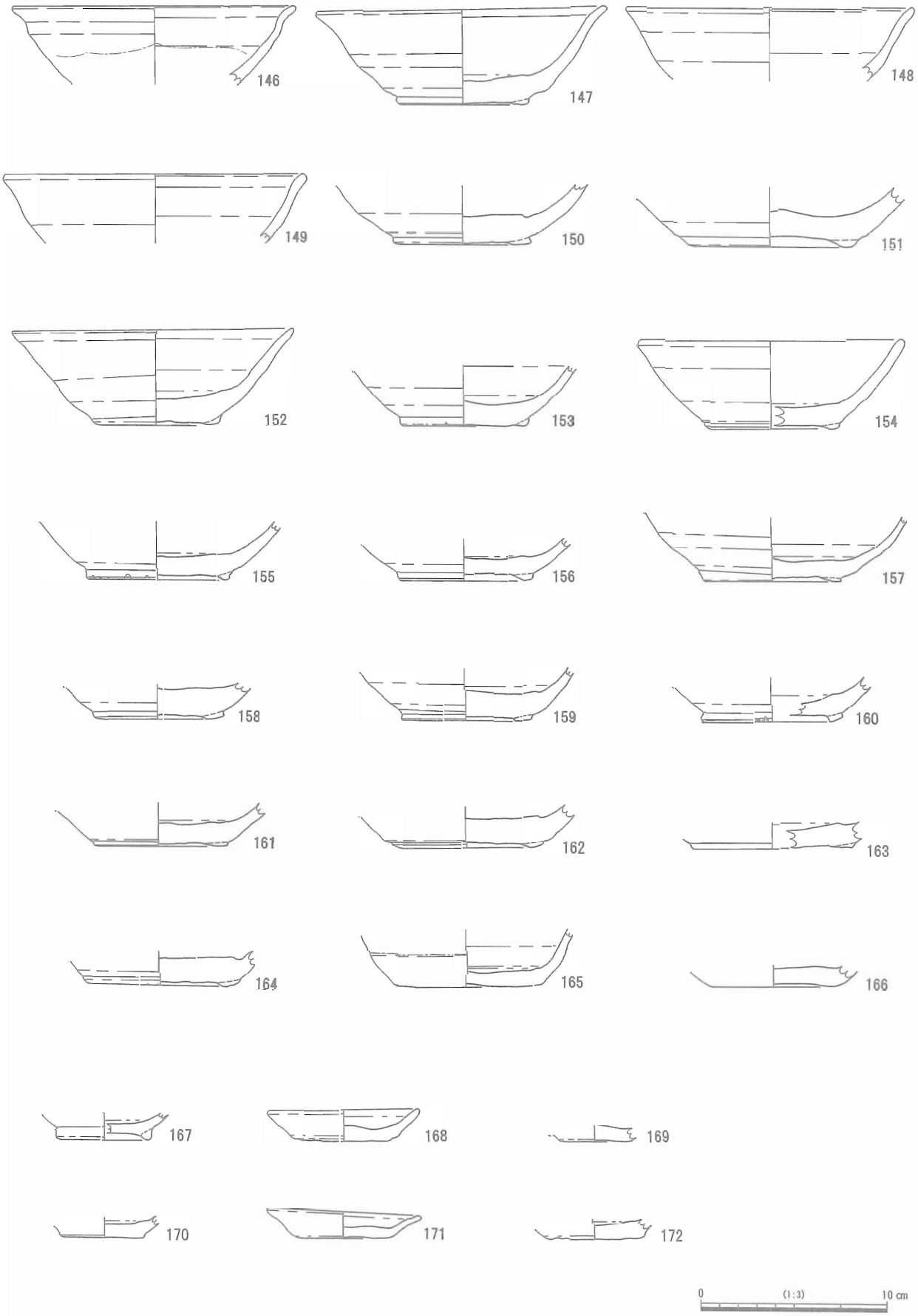


図 50　大溝Ⅱ層出土遺物（2）

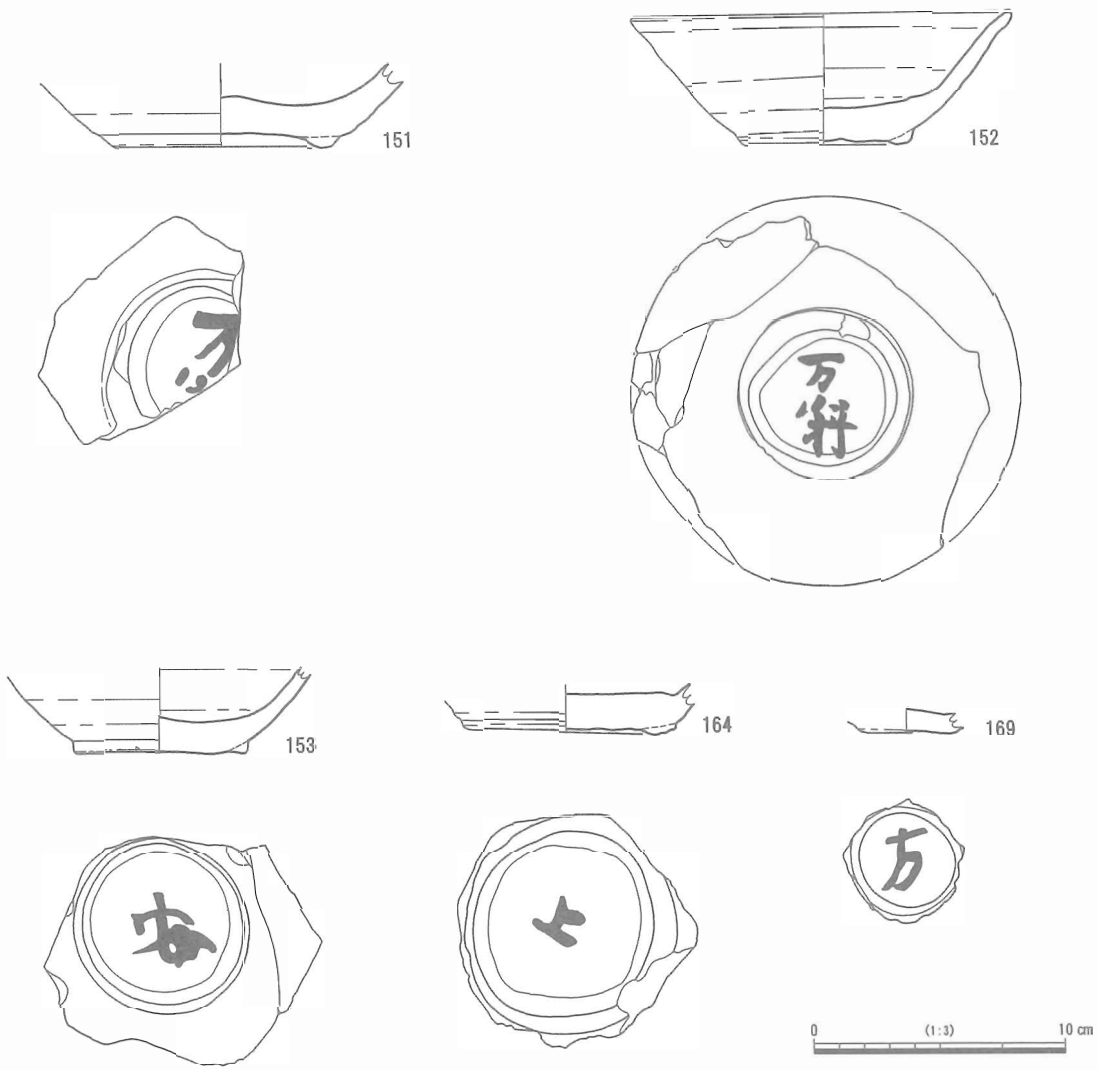


図 51　大溝Ⅱ層出土遺物（３）

Ⅱ層は、平均 40 ～ 50 ㎝程度の厚さで、Ⅲ層の上に堆積している。暗褐色土を主体とするが、一部に壁面の崩落土とみられる黄褐色土の堆積もみられる。また、Ⅱ層の上半には、後世の溝の底部が達している場所も認められる。遺物は、Ⅲ層と同様に土器・陶磁器類が中心ではあるが、Ⅲ層に比べて明らかに破片資料が多い。また、Ⅱ層からは瓦も出土している。

119 ～ 172 は山茶碗である。119 ～ 166 は碗、167 は小碗、168 ～ 172 は小皿である。いずれも、渥美・湖西産の製品である。Ⅲ層と比べると完形資料が少ない傾向にあり、137・150・154 などのように、表面や断面に、二次焼成による煤の付着が認められるものも出土している。時期としては、Ⅲ層と同様に、Ⅱ期からⅢ－２期のものまでであり、Ⅲ－３期のものは含まれていない。

また、山茶碗には、墨書の残存するものも認められる。151 は「万□（料か）」、152 は「万料」、153 は「安」、164 は「上」、169 は「万」と読める。いずれも、Ⅲ－２期に相当する山茶碗で、墨書は底部外面に記されている。

173 ～ 176 は片口鉢である。176 は知多産で、他は渥美・湖西産の製品である。12 世紀後半から 13 世紀前半のものである。177 は常滑産の甕で、13 世紀後半のものである。178 は渥美産の壺である。179 と 180 は古瀬戸製品である。179 は中期の平碗、180 は前Ⅱ期の四耳壺である。181 の擂鉢は、大窯

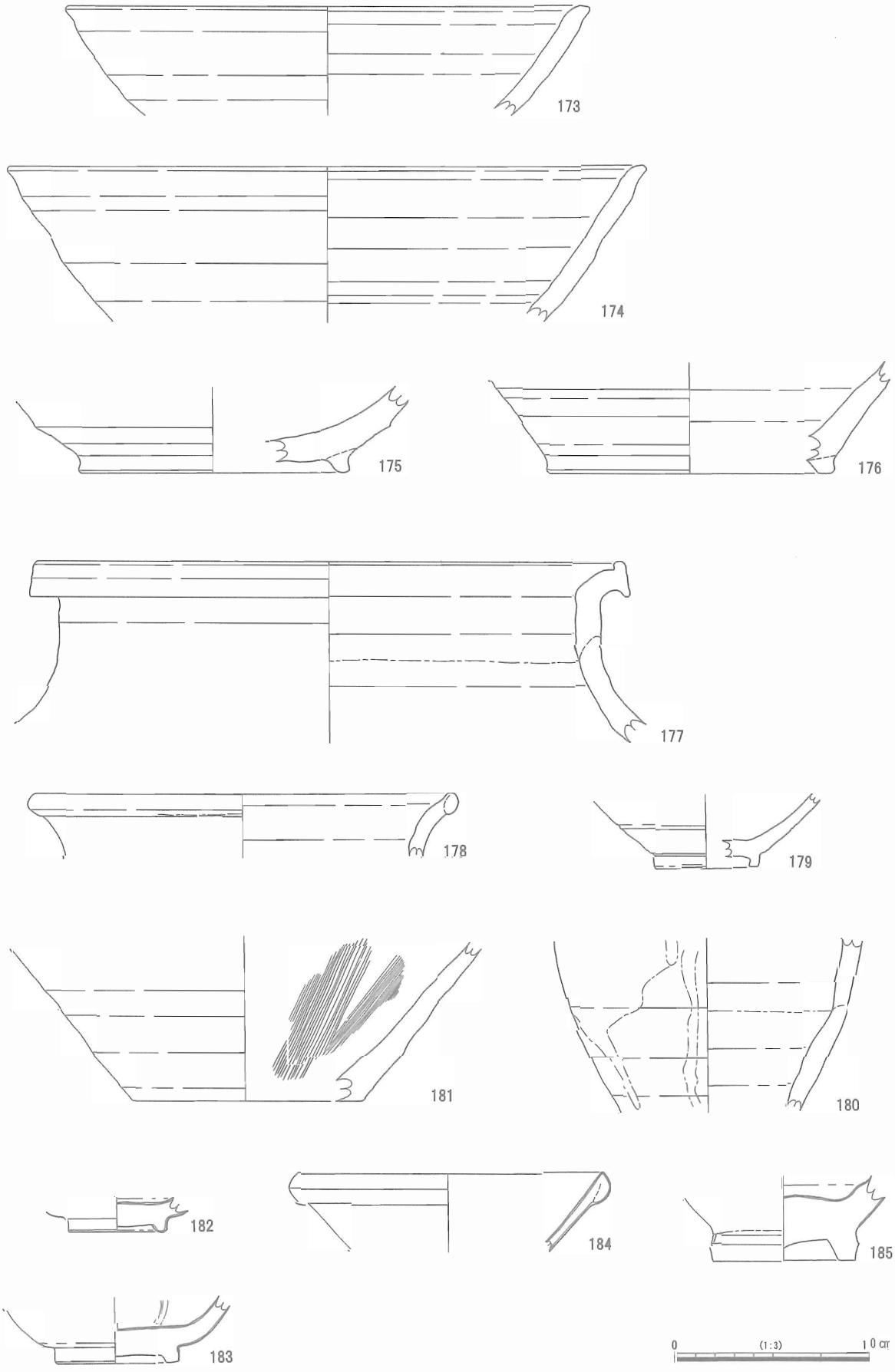


図 52　大溝Ⅱ層出土遺物（4）

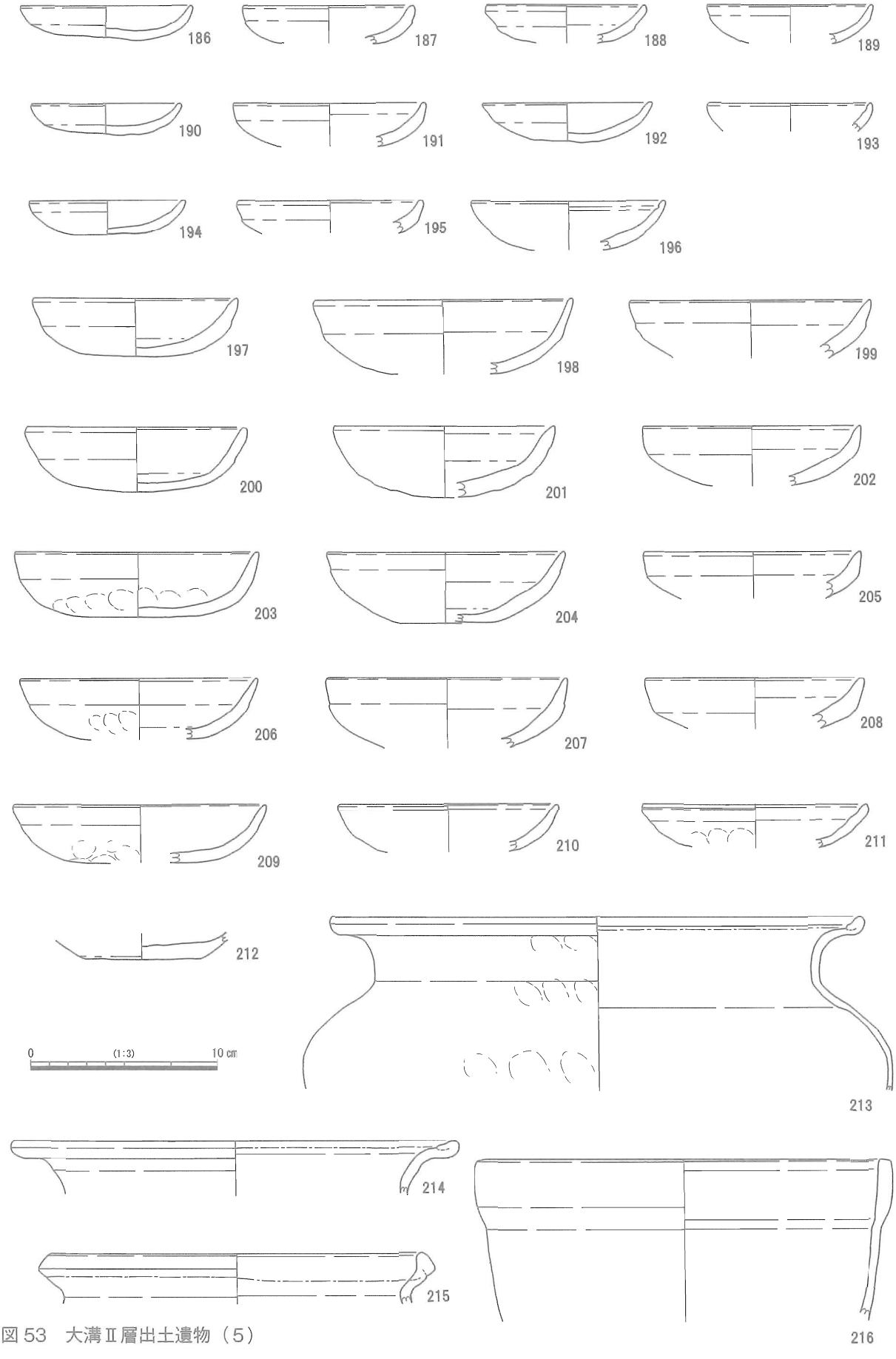


図 53　大溝Ⅱ層出土遺物（５）

期の瀬戸・美濃製品である。調査時にはⅡ層の遺物として取り上げられているが、後世の溝に伴う遺物である可能性が高い。182～185は貿易陶磁である。182と183は青磁の碗、184は白磁の碗、185は白磁の四耳壺である。183には、二次焼成の痕跡が認められる。

186～211は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。口径8～9cmの小型品と、12～13cmの中型品が出土している。中型品は、Ⅲ層でみられたような、厚手のつくりで、口縁部に強いヨコナデ調整を施す坏型のものが大半である。ただし、一部には210や211のように浅く皿型で、薄手のつくりのものも認められる。210は、口縁部のヨコナデ調整も不明瞭となっている。212はロクロ成形の土師質土器皿である。底部には、糸切り痕が明瞭に残っている。Ⅱ層では、非ロクロ成形の土師質土器皿が圧倒的に

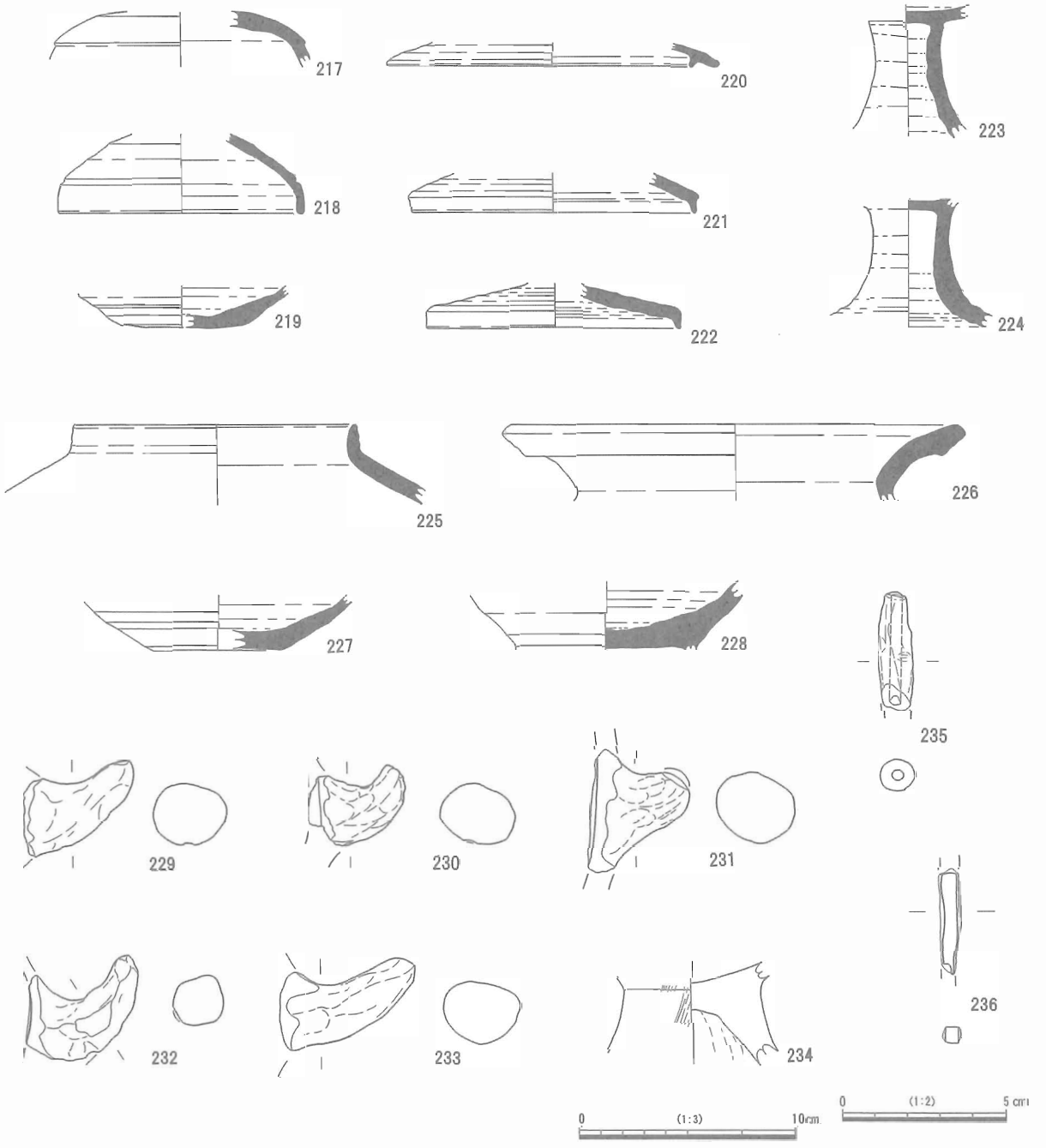


図54　大溝Ⅱ層出土遺物（6）

多く、ロクロ成形のものはごく少量みられる程度である。

213と214は、伊勢型鍋である。口縁の折り返し部にはナデ調整が施され、外面には多量の煤が付着している。215はくの字形内耳鍋であり、216は内彎形内耳鍋である。Ⅱ層では、この他に半球形内耳鍋や羽付釜の破片も出土している。しかし、点数的にはわずか数点程度であることから、これらの内耳鍋は、後世の溝に伴う遺物が混入している可能性が高い。

また、Ⅲ層と同様に、須恵器（217～228）や土師器（229～234）など、古代に属する遺物も出土している。235は土錘、236は釘と思われる鉄製品であるが、時期については特定できない。

Ⅱ層では、土器類の他に、瓦も比較的豊富に出土している。237は塼である。形態から敷塼とみてよい。破片であるが、２辺の側面が残存しており、幅が26㎝であることがわかる。煤が付着し、胎土も部分的に赤く変色するなど、二次的な被熱の痕跡が明瞭に残る。裏面にはヘラ状工具による調整痕が明瞭に残っているのに対し、表面は風化による摩滅が認められる。238は軒丸瓦の丸瓦部である。瓦当面が欠失しているため、瓦当文様については知り得ない。丸瓦先端は無加工で、瓦当への入りは浅い。凹凸両面には、接合粘土が残っている。今回の調査では、これ以外に塼と軒丸瓦は出土していない。

239～261は丸瓦である。いずれも破片資料であり、完形のものは出土していない。

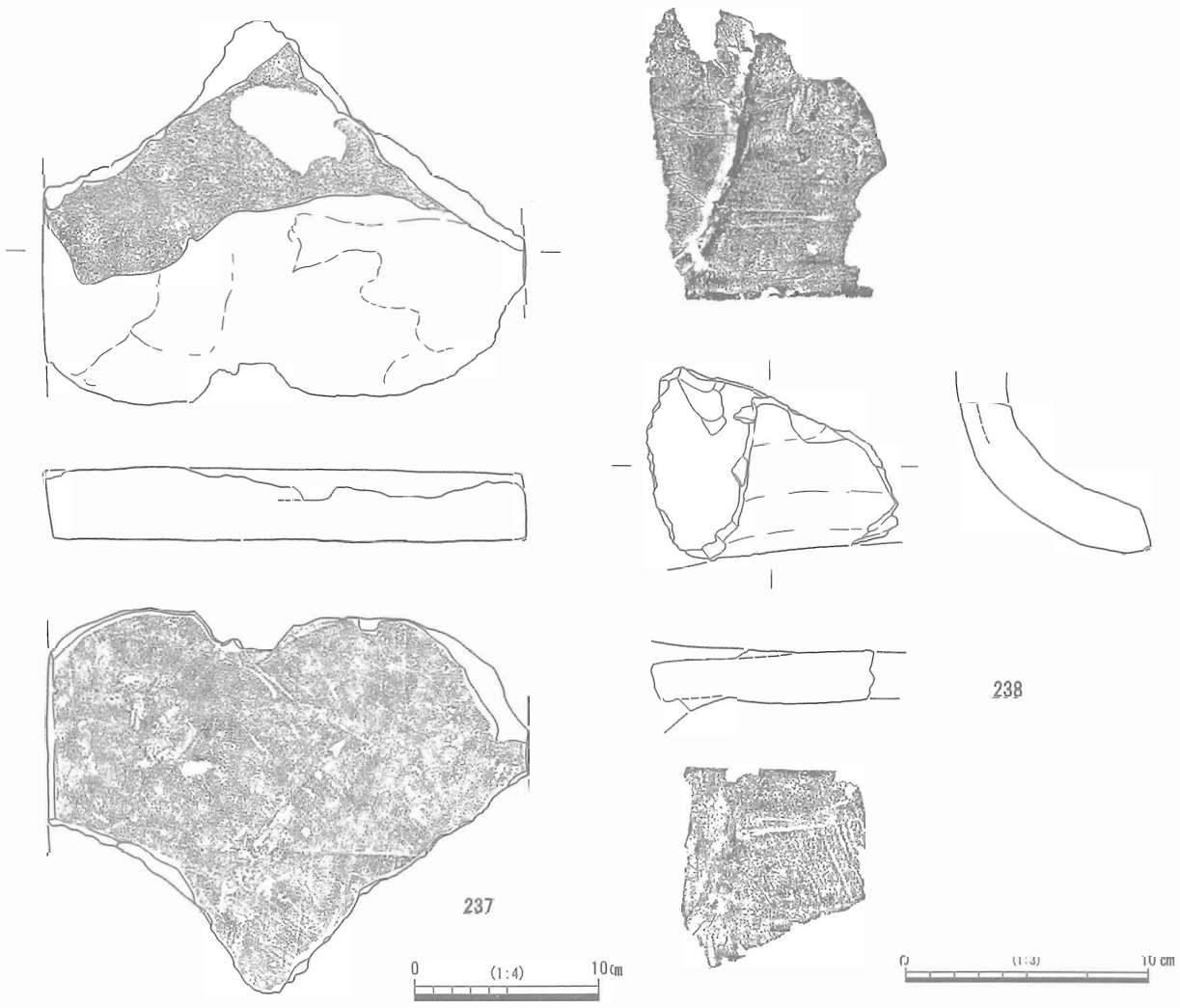


図55　大溝Ⅱ層出土塼・軒丸瓦

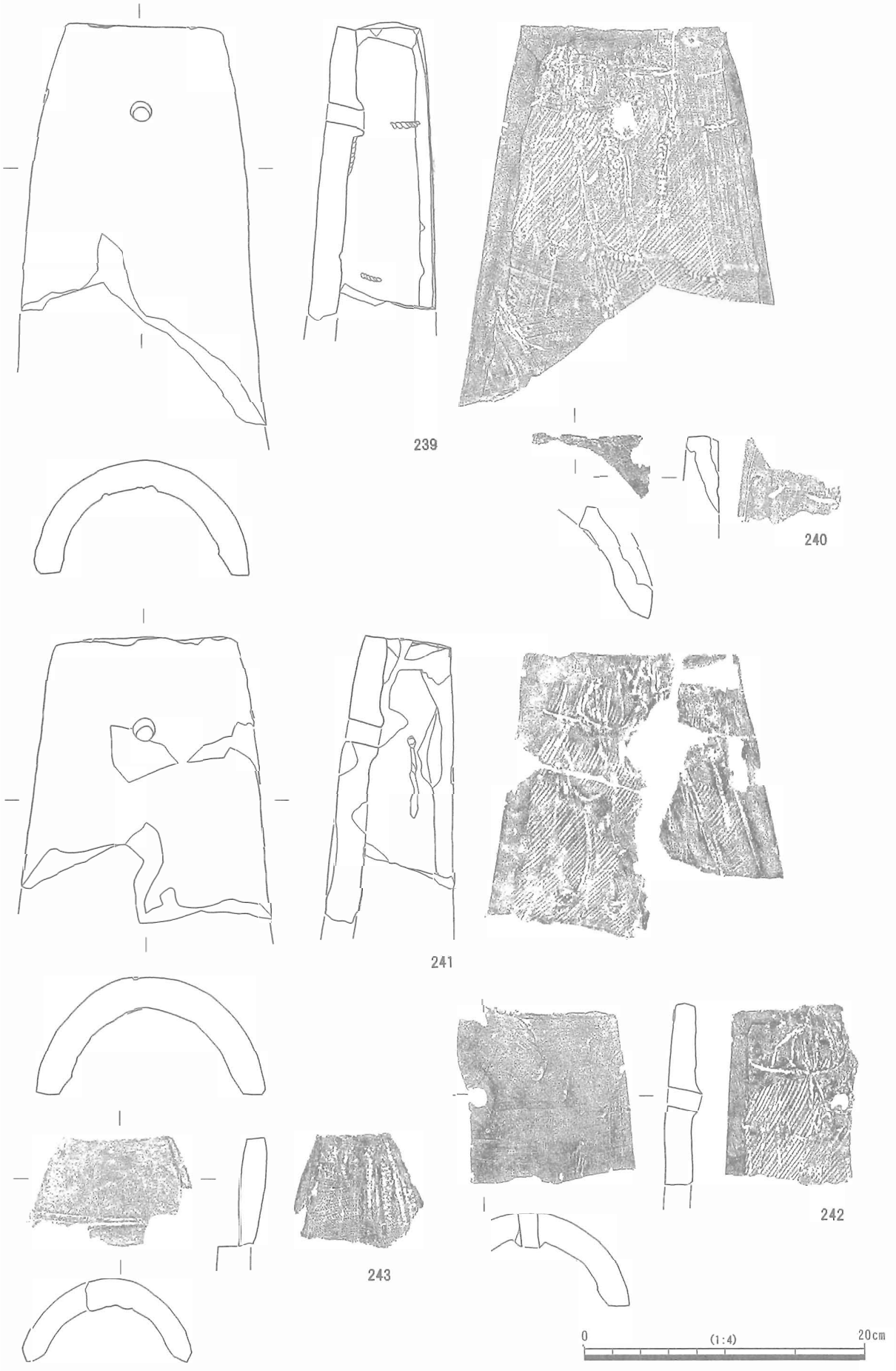


図 56　大溝Ⅱ層出土丸瓦（1）

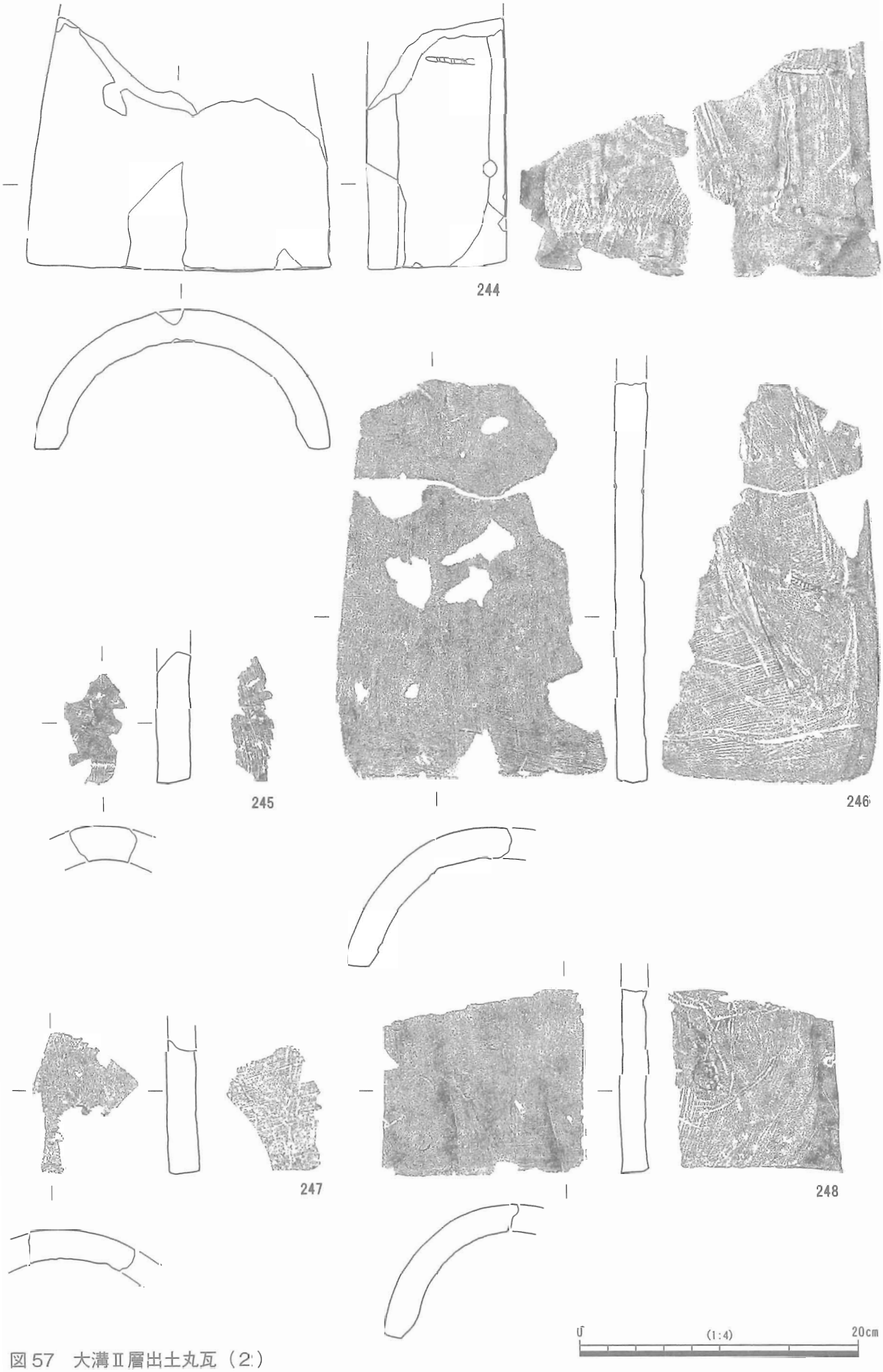


図 57　大溝Ⅱ層出土丸瓦（2）

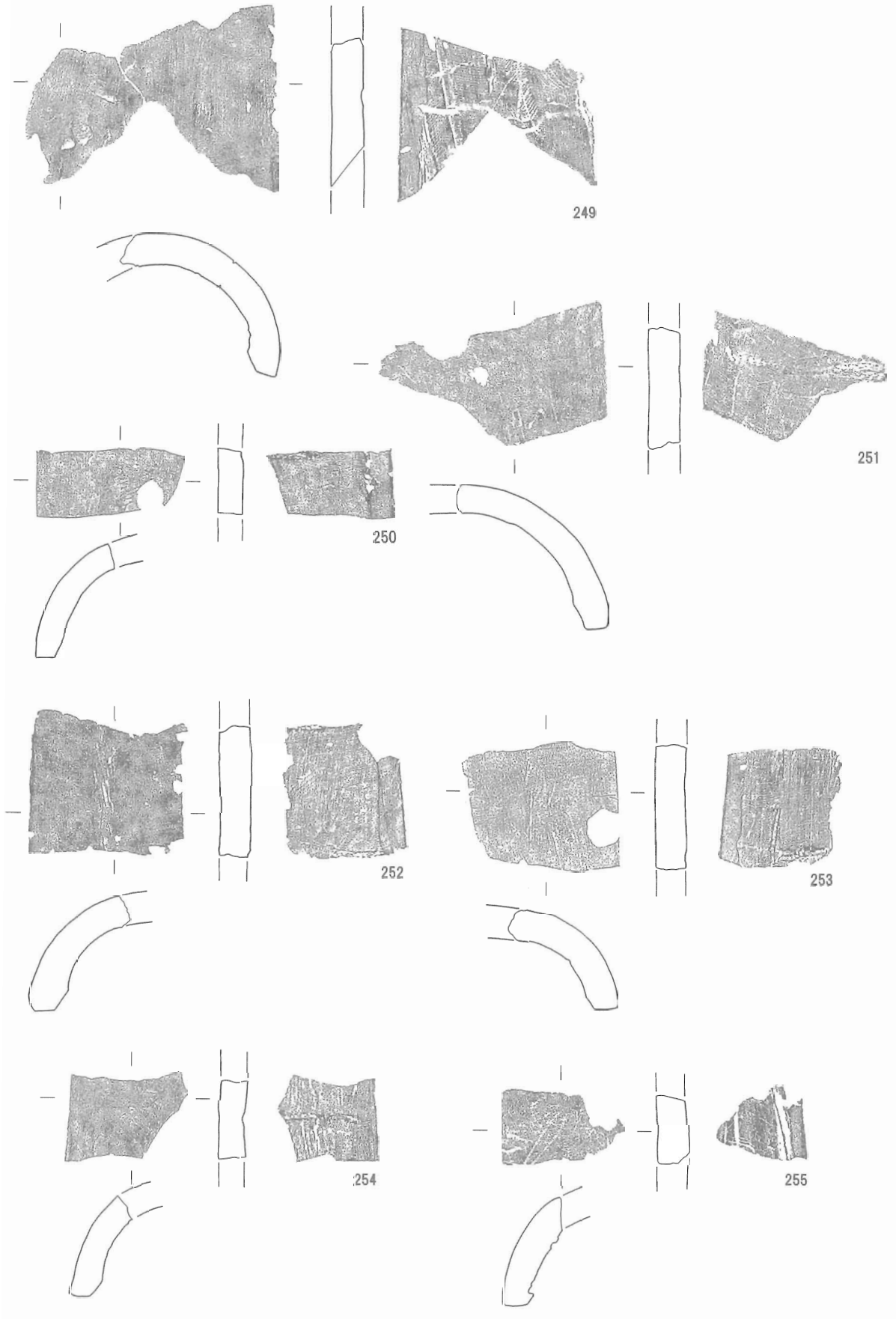


図 58　大溝Ⅱ層出土丸瓦（3）

239 ～ 242 は、無段式（行基式）の丸瓦の狭端部である。239 と 241 は両側端が残存しており、側端幅は 239 が 11.5 ㎝、241 が 13 ㎝となっている。狭端から６～７㎝の場所には、直径 1.5 ㎝程の釘穴が穿たれており、凸面側の穴の周囲はヘラ削りによって平らに仕上げられている。凸面は全体に丁寧なナデ調整が施されているが、部分的に縄叩きの痕跡が認められる。凹面は、布目と吊り紐痕が残る。布に隠れている部分を１とした時の布から出た部分の吊り紐比率は、最も痕跡が明瞭に残る 239 では 0.9 となっている。いずれも、凹面の側端と狭端側には面取り調整が施されている。243 は有段式（玉縁式）の丸瓦である。段部は残存しないが、狭端に向かって急激に幅が狭まっている点や、段部付近で凸面側に反っている点、布を大きく絞っている点などから識別できる。無段式に比べて、布目は粗い。頂点近くまで残っているが、釘穴は認められない。

244 ～ 248 は、広端部の破片である。両側端の残る 244 でみると、広端幅は 22 ㎝もあり、非常に大型の丸瓦であることがわかる。凹面には、布目と吊り紐痕が残る。246 では吊り紐比率は 0.6 となって

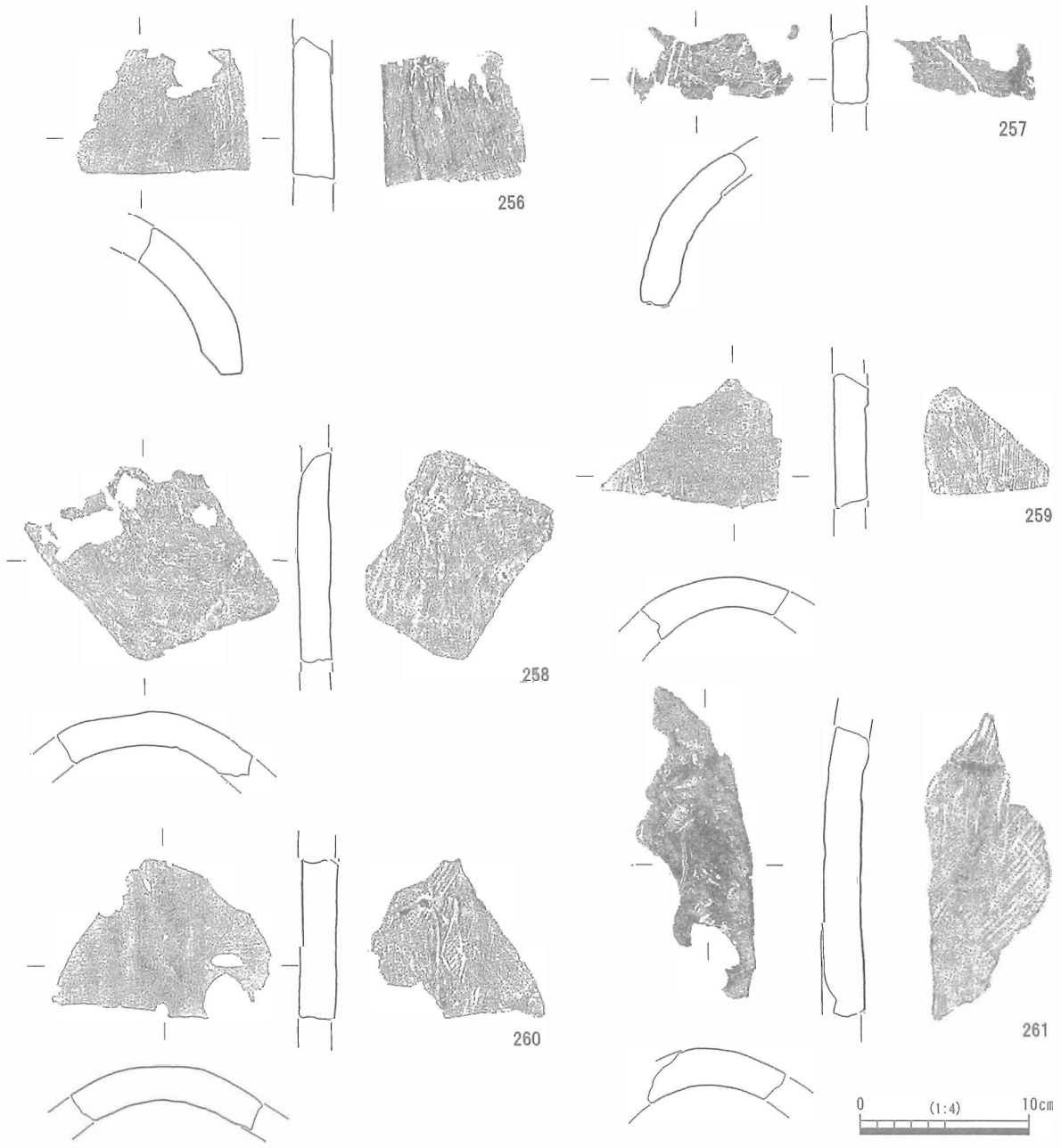


図 59　大溝Ⅱ層出土丸瓦（4）

いる。いずれも、凹面側端には面取り調整が施されている。244・247・248の広端面には、離れ砂の付着が明確に認められる。

249～257は、側端部の残る破片、258～261は端部の残らない破片である。いずれも凸面は、丁寧にナデ調整され、部分的に縄叩きの痕跡が確認される。凹面には布目と吊り紐痕が残り、254には離れ砂の付着も認められる。249の布に隠れている部分を1とした時の吊り紐比率は、0.8となっている。256と258には、断面に煤が付着し、二次的な被熱の痕跡が顕著である。

262～291は平瓦である。262～268は、凸面に縄叩きが残るものである。いずれも、やや軟質で橙白色の色調を呈している。凹面には布目が明瞭に残る。側板痕が認められず、湾曲の緩いことから、凸型台成形による一枚作りであると推測される。凹面の側端及び広端には、幅の狭い面取りが施されている。263には、表面と断面に煤が付着し、二次的な被熱の痕跡が顕著にみられる。凸面にのみ、離れ砂の使用が認められる。

269～277は、縦長斜格子の叩き目が残るものである。硬質のものと軟質のものがある。269～273には、格子の中に「大」に字がみられる。離れ砂は、凸面のみにみられるものと、凹凸両面にみられるものがある。凸面のみに離れ砂がみられるもの（269・274）の凹面には、布目が残る。凹凸両面に離れ砂が付着するもの（270～273・275～277）の凹面には、布目はみられない。270・272には、斜格子の転写が明確に認められる。274には釘穴が穿たれており、凸面の釘穴の周囲は平らに削り調整されている。276の凸面側端には、凹型台の痕跡が明確にみられ、凹面の調整時に凹型台が使用されたことがわかる。凹面の面取り調整は、狭端と側端に施されているが、広端には認められない。

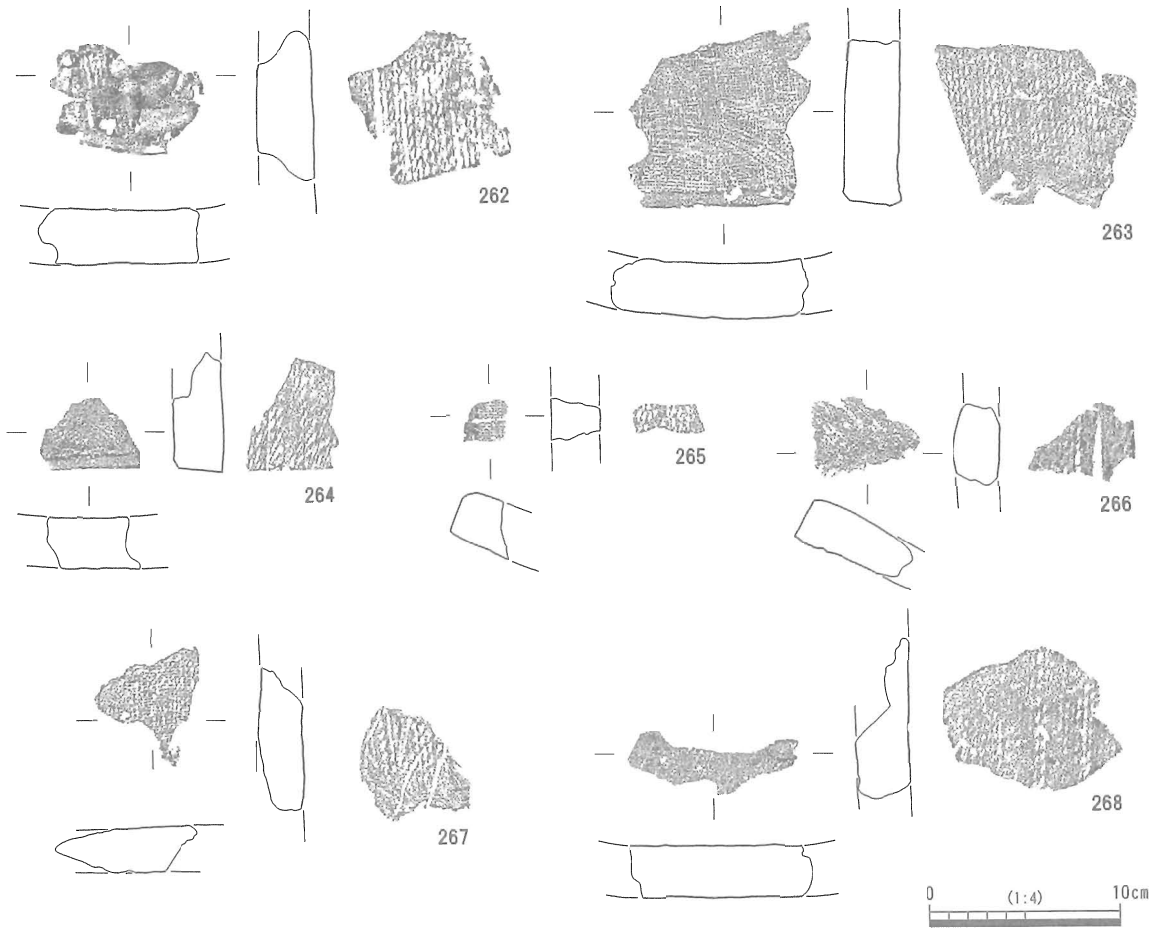


図60　大溝Ⅱ層出土平瓦（1）

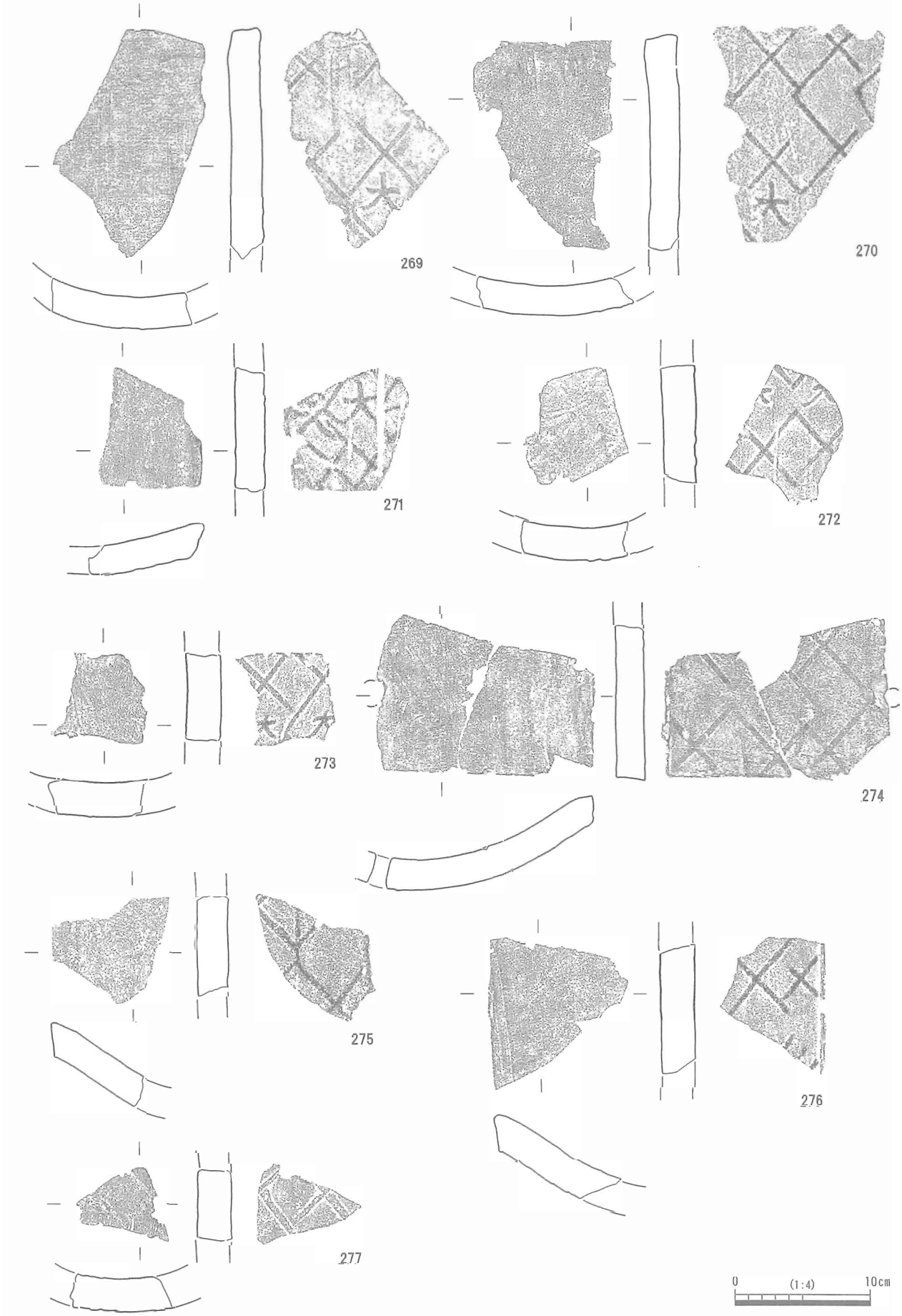


図 61　大溝Ⅱ層出土平瓦（2）

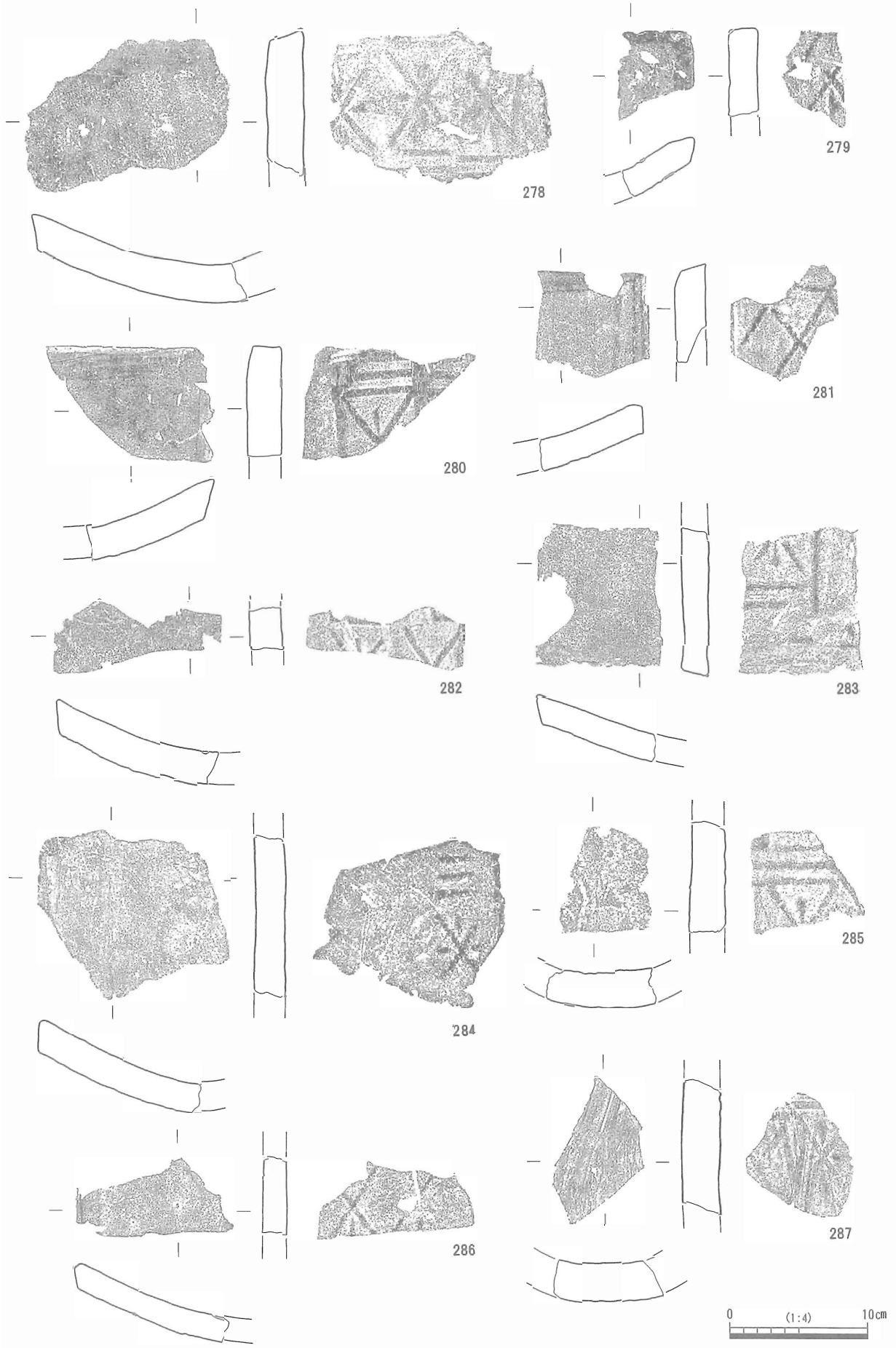


図62　大溝Ⅱ層出土平瓦（3）

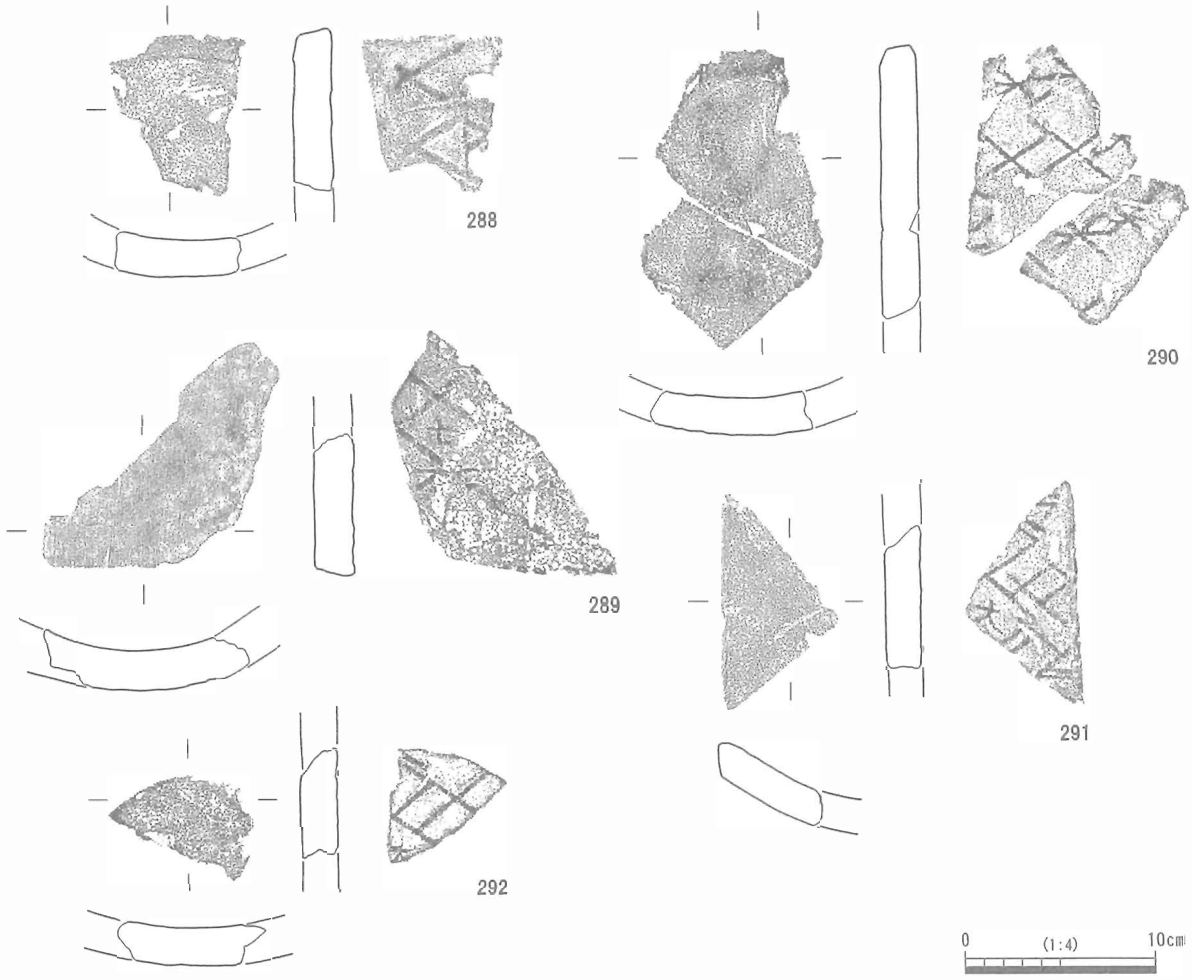


図63　大溝Ⅱ層出土平瓦（4）

278～287は、斜格子と横線の叩き目が残るものである。斜線の交差部には、剣菱形の文様が十字に配されている。恐らくは、格子の部分を花弁に見立てた、花菱文の変化形であると推測される。焼成は、硬質のものと軟質のものとがみられる。凹面の面取り調整は、狭端と側端にはみられるが、広端には施されていない。278～286には、凹凸両面に離れ砂が付着している。278の凹面には、やや不明瞭ではあるが、斜格子の転写が確認できる。287は、離れ砂が凸面にのみ付着している。凹面の大部分はナデ調整されているが、布目の痕跡がわずかに確認できる。278と284には、断面に煤が付着しており、二次的な被熱の痕跡が明瞭である。281の凸面側端には、凹型台の痕跡が残る。

288～292は、横長斜格子の叩き目が残るものである。ただし、格子の線を詳細にみると、288と289は太く、290～292は細い。同じ横長斜格子ではあるが、異なる叩き板である可能性が高い。いずれも軟質で、色調は灰白色を呈している。凹面の面取り調整は、狭端と側端にはみられるが、広端には施されていない。289と291には、格子内に「大」の字がみられる。291の「大」は、裏文字になっている。289の凹面には布目がみられる。部分的に離れ砂も付着しているが、凸面ほどは顕著でない。他のものには、凹凸両面に離れ砂の付着が認められる。

このように、瓦には被熱の痕跡を残すものがあり、これらを所用した瓦葺き建物が火災により焼亡したことがうかがえる。また、瓦はⅡ層全体から出土しているが、詳細にみるとⅡ層の最下層、つまりはⅡ層とⅢ層との境付近からの出土も確認できる。これは、Ⅲ層の堆積後さほど間を置かず瓦が廃棄されたことを物語っており、瓦葺き建物の廃絶時期を示すものとして注目される。

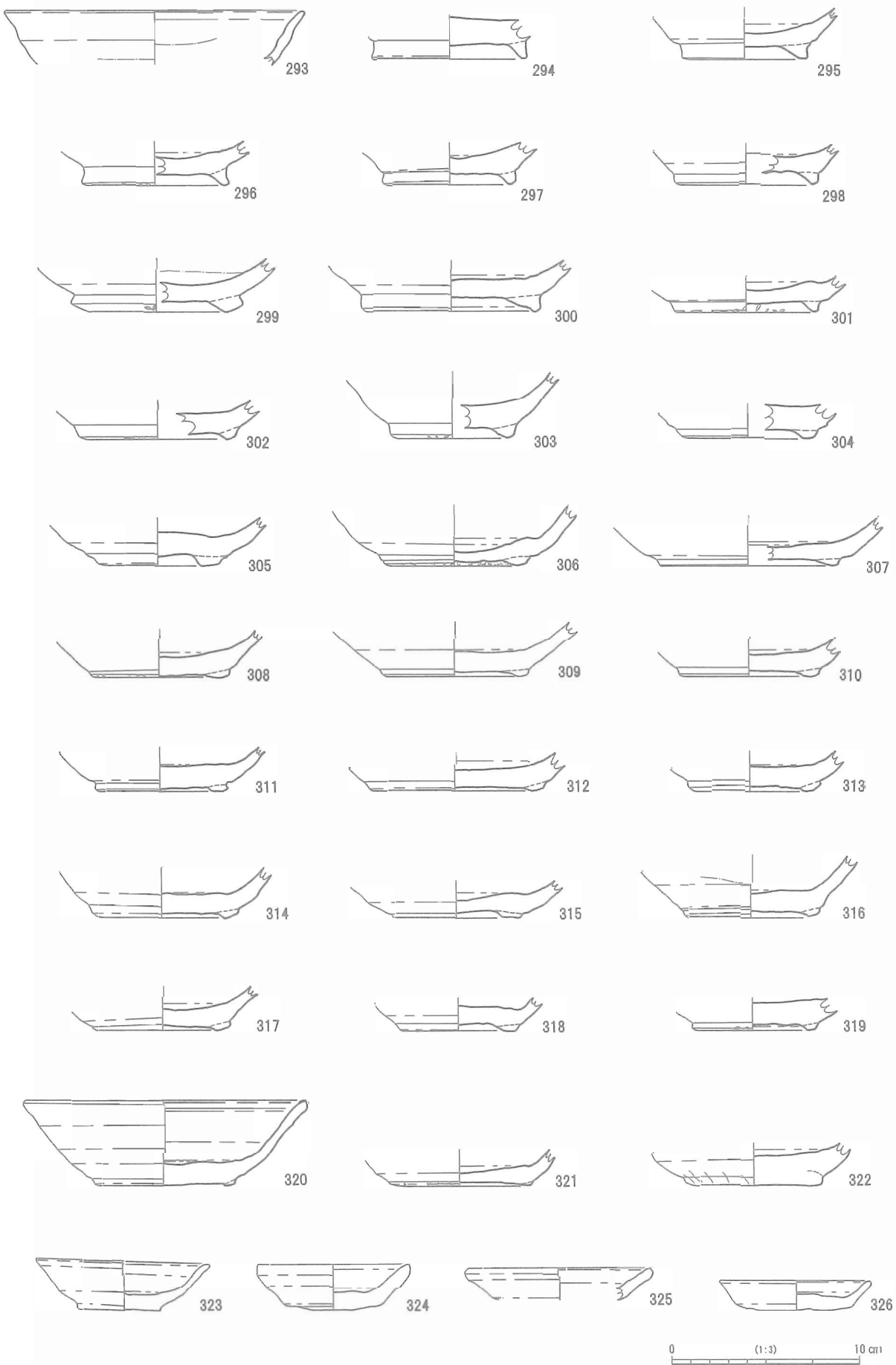


図 64　大溝Ⅰ層出土遺物（1）

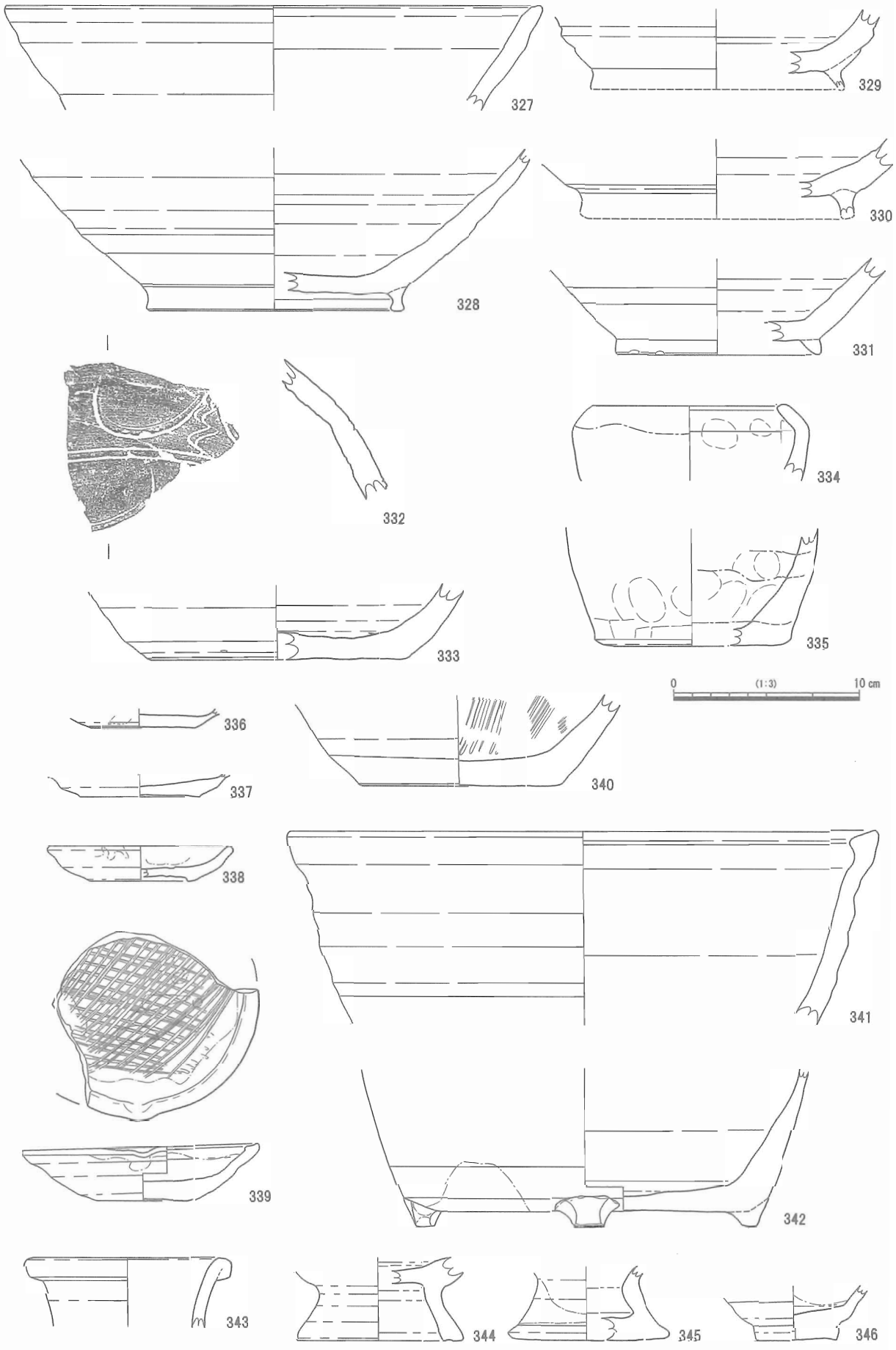


図 65　大溝Ｉ層出土遺物（2）

Ⅰ層は暗褐色土を主体とする、最上層の埋土である。後世の溝が掘り込まれており、攪乱によって失われている部分も多い。これらは、いずれも近似した暗褐色土の埋土であり、検出作業は非常に困難な状況であった。Ⅰ層の遺物として取り上げられているものの中にも、後世の溝の遺物が相当量混入しているものと推測される。

293～326は山茶碗である。310には、表面と断面に被熱の痕跡が認められる。東遠産とみられる297を除き、いずれも渥美・湖西産の製品である。破片のものが大半で、完形品は出土していない。時期としては、Ⅰ期からⅢ－２期までみられるが、Ⅲ－１・２期のものが多い。

327～331は片口鉢である。327は渥美産、その他は知多産の製品とみられる。いずれも13世紀代のもので、内面に使用の痕跡が顕著にみられる。332は渥美産の壺である。体部の破片で、蓮弁文が線刻されている。小穴SP2119から出土した破片と接合している。333は鉢の底部である。334と335は常滑産の製品で、334は片口鉢の口縁部、335は壺の底部である。336と337は、古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の瀬戸美濃産の緑釉小皿である。338は、初山窯産の内禿皿である。339・340・342は、古志戸呂窯産の製品である。339は卸皿で、340は擂鉢、342は大型の筒型容器または桶である。341は内耳鍋で、二次焼成によるものか、胎土は赤褐色を呈している。343は瀬戸美濃産の四耳壺で、古瀬戸前Ⅱ～Ⅲ期のものである。344と345は、瀬戸美濃産の花瓶である。344は古瀬戸中Ⅳ期、345は古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期のものである。346は古志戸呂窯産の仏供である。

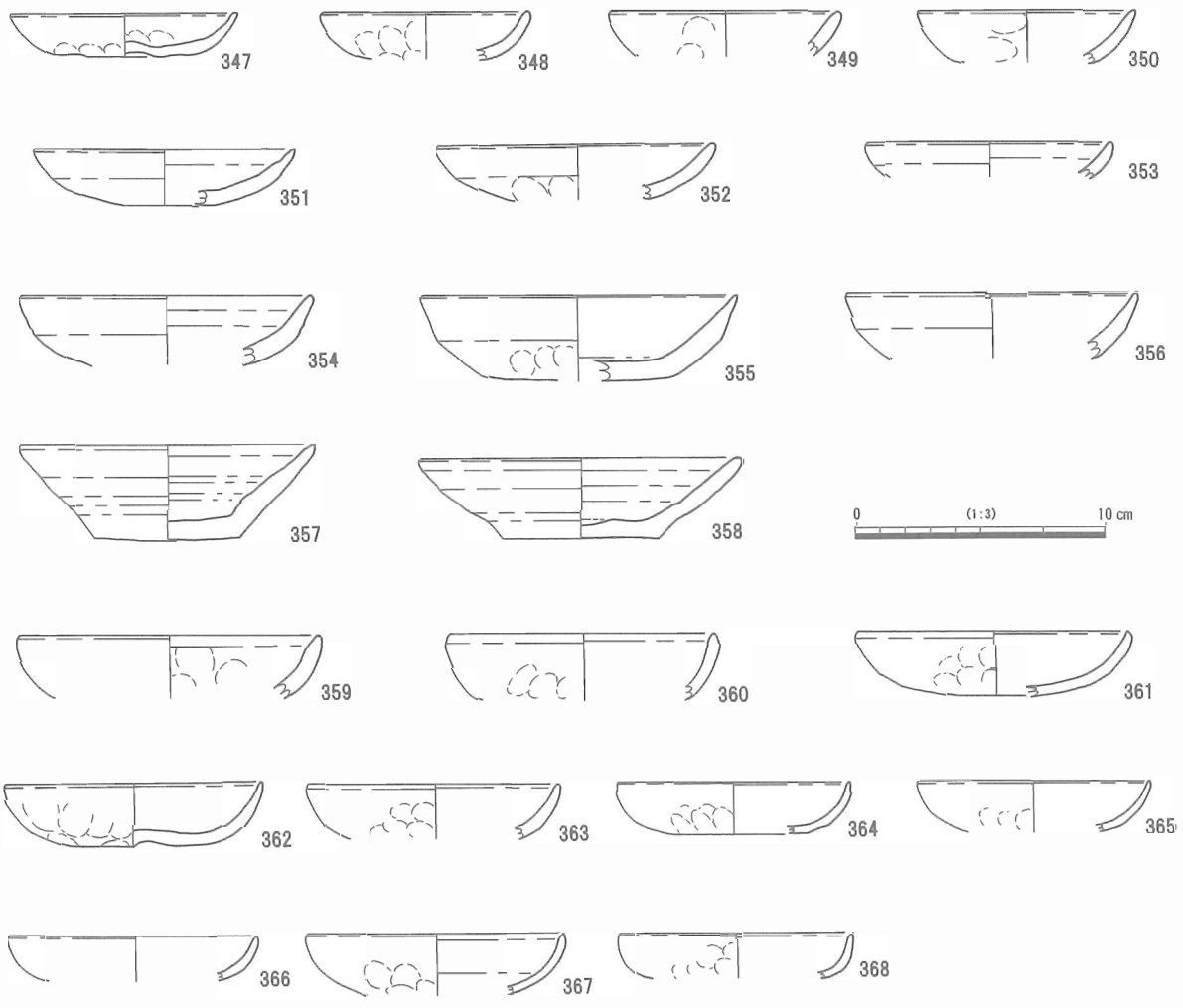


図66　大溝Ⅰ層出土遺物（３）

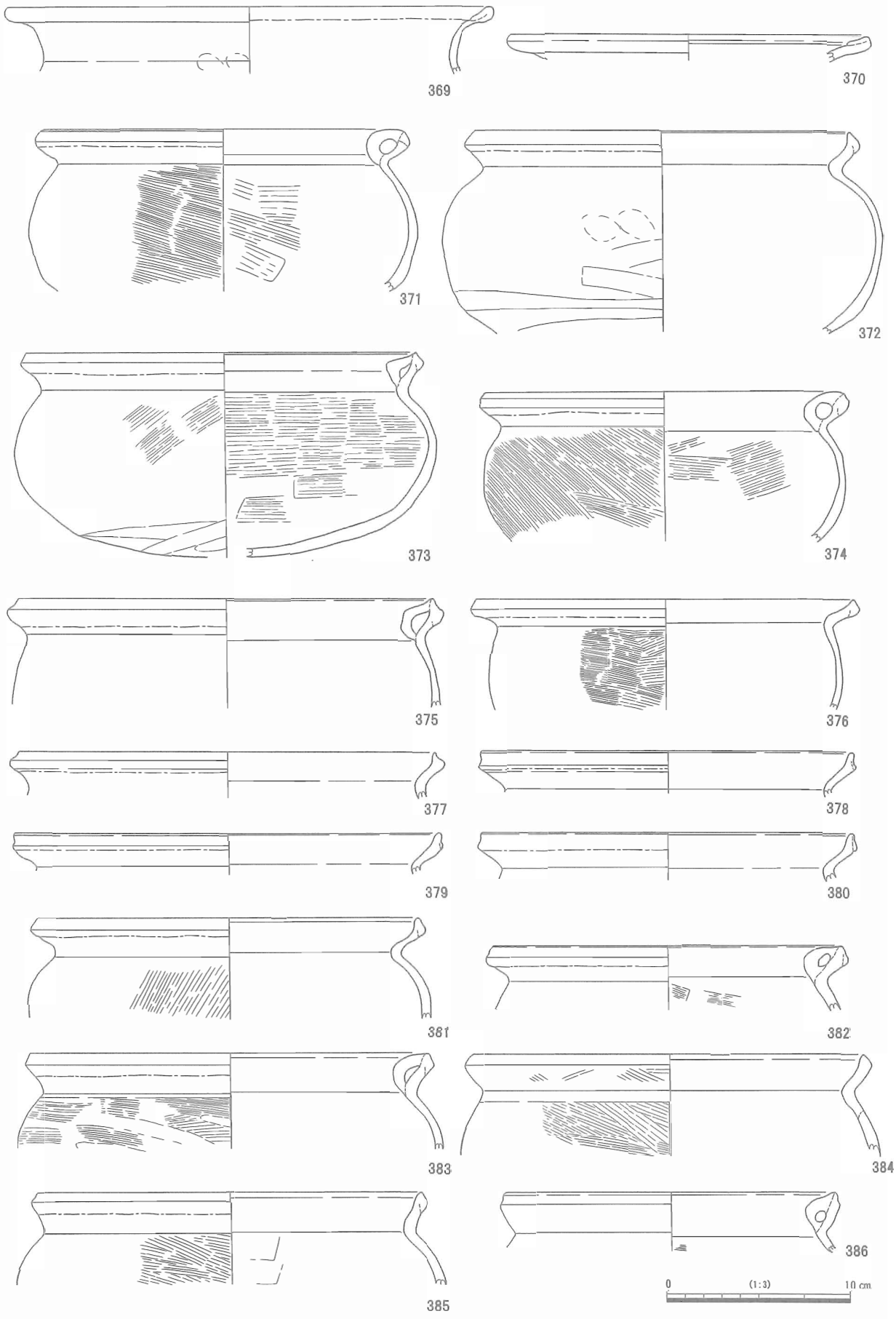


図 67　大溝Ｉ層出土遺物（４）

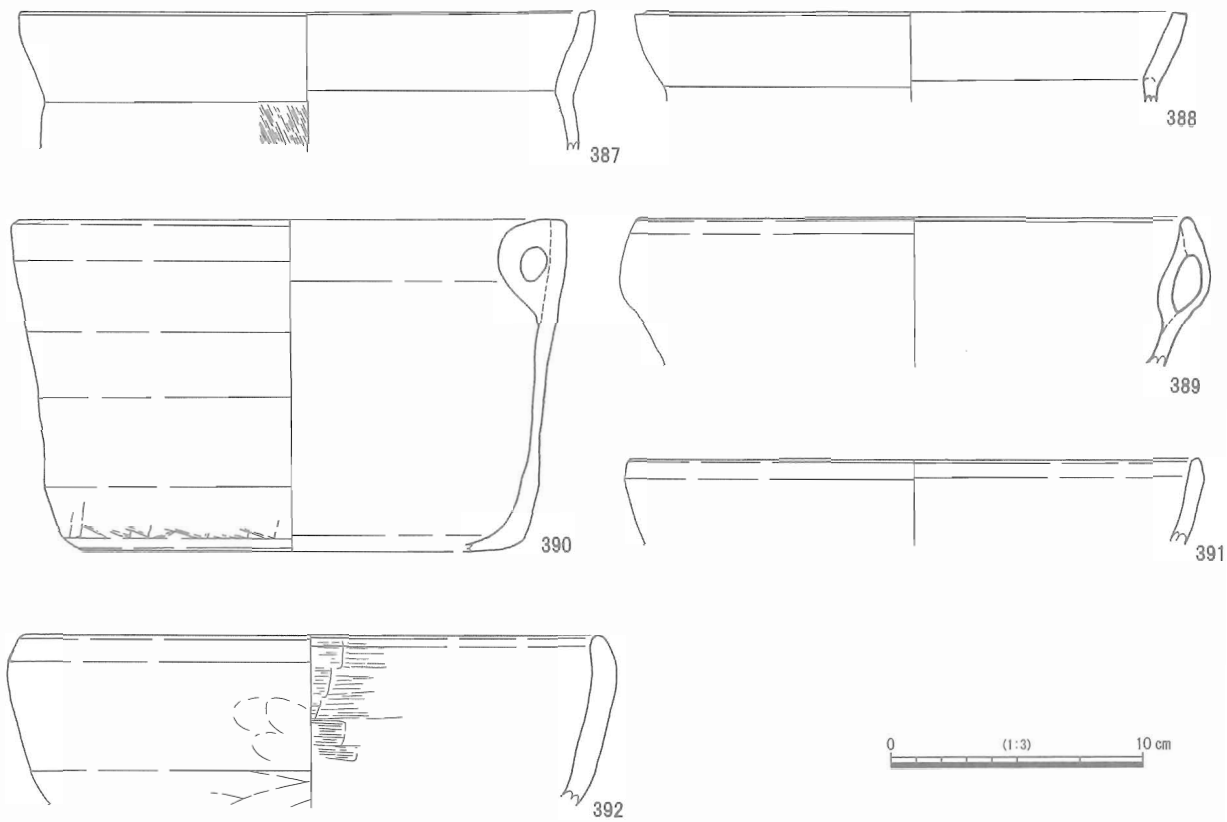


図 68　大溝Ⅰ層出土遺物（5）

347 ～ 368 は土師質土器皿である。非ロクロ成形のもの（347 ～ 356・359 ～ 368）と、ロクロ成形のもの（357・358）とがみられる。347 ～ 350 は、直径 8 ～ 9 ㎝程の小型のものである。焼成は軟質で、いずれも表面の摩滅が著しく調整は不明瞭である。351 ～ 353 は、口径 10 ～ 11 ㎝のやや浅い形態のもので、口縁部にはヨコナデ調整が明瞭に残る。354 ～ 356 は、口径 13 ㎝前後のもので、坏型の形態を呈している。厚手のつくりで、口縁部にはヨコナデ調整が施されている。357・358 は、ロクロ成形のものである。Ⅰ層においても、非ロクロ成形のものが主体を占めており、ロクロ成形のものはわずかに確認できる程度である。359 ～ 368 は、焼成が比較的硬質で、口縁部にヨコナデ調整が施されていないものである。これらについては、後世の溝に伴う遺物であると推測される。

Ⅰ層では、Ⅱ・Ⅲ層に比べて煮炊用土器が多く出土している。この中でも、くの字形内耳鍋（371 ～ 386）が、他の煮炊用土器に比べて数量の上で圧倒的に多い。外面の調整は、外面上方までハケ目調整されるものが大部分を占めているが、372 や 375 のように指オサエやナデ調整を施すものも少量確認できる。内耳鍋としては、他に内彎形（387 ～ 389）や半球形（391・392）のものも出土しているが、数は少ない。また、確実なものは 1 点だけであるが、平底で桶形を呈する内耳鍋（390）も確認される。このタイプの内耳鍋は、信濃や甲斐での分布が知られているが、この地域での出土は極めて稀である。個別に分離することは困難であるが、これら出土数の少ない内耳鍋については、後世の溝に伴う遺物の可能性が高いとみた方がよいであろう。

393 ～ 396 は志戸呂窯の製品で、393 は小皿、394 は香炉、395 と 396 は天目茶碗である。397 は瀬戸窯産の天目茶碗で、登窯 3 ～ 4 小期のものである。398 は美濃窯産の尾呂茶碗で、登窯 5 ～ 6 小期のものである。399 ～ 426 は、主に 18 世紀後半から 19 世紀にかけての陶磁器である。その大半は、瀬戸美濃製品である。器種としては、腰錆湯呑（399 ～ 402）、小中（403）、筒形湯呑（405）、箱形湯呑（406・

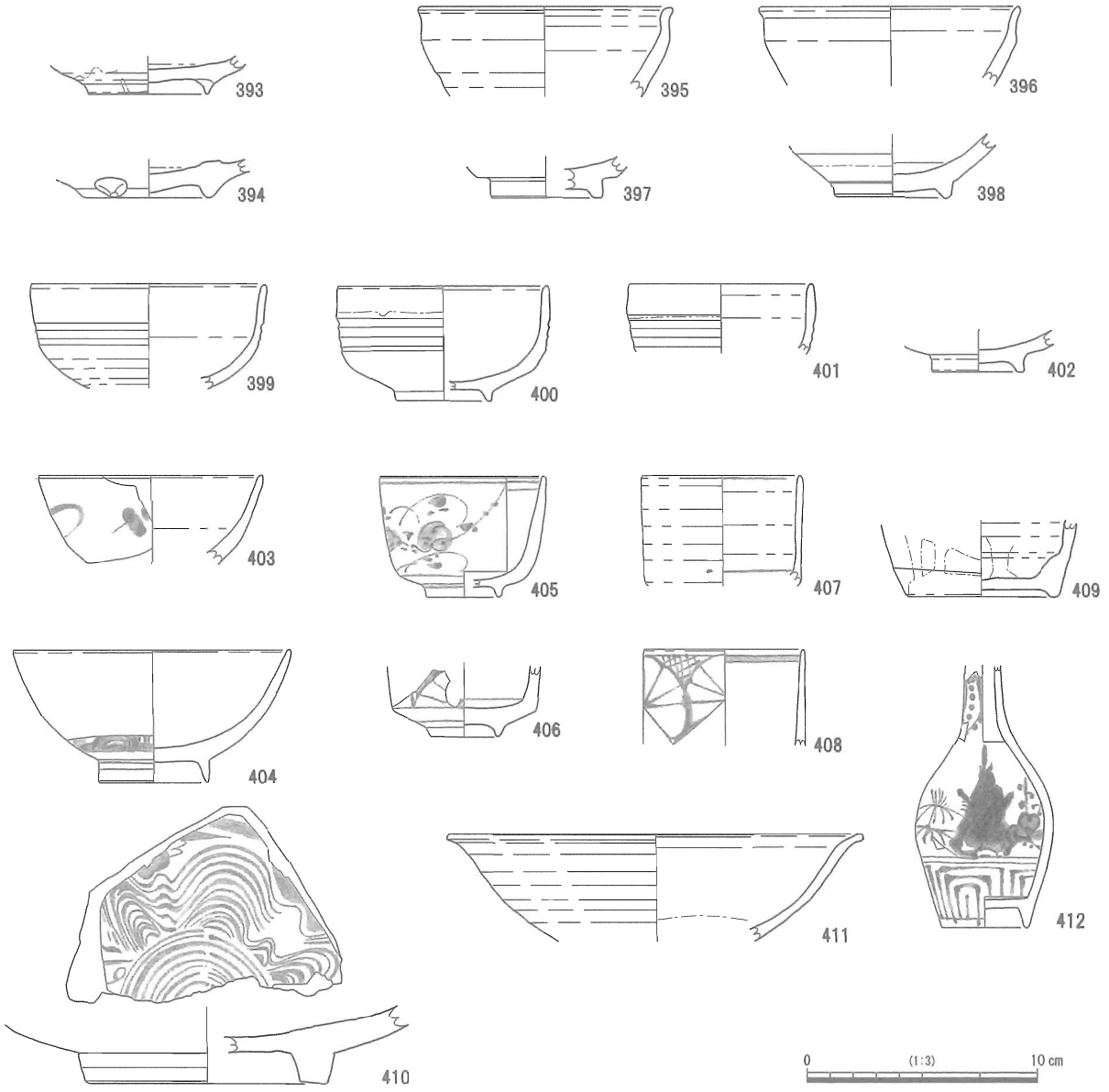


図 69　大溝Ⅰ層出土遺物（6）

407）、徳利（409）、折縁輪禿鉢（411）、小瓶（412）、片口（413 ～ 418）、練鉢（419）、筒形香炉（420）、擂鉢（421・422）、灯明皿（423）、秉燭（424）、瓶掛（425）、土瓶（426）などがみられる。また、肥前の磁器染付（404・408）や唐津の刷毛目皿（410）など、瀬戸・美濃以外の製品も少量ではあるが出土している。

点数は少ないが、金属製品も出土している。427 は鉄滓である。いわゆる椀形滓で、直径 10 ㎝程度の小型のものである。後世の溝に伴うものの可能性もあり、年代については明確でない。428 は簪の耳掻き部分である。金銅製で表面には鍍金が残り、魚子状の細かな彫金が施されている。429 は用途不明の銅製品である。幅１㎝程度の小型品で、両端は欠損しており、内部は中空となっている。この２つの銅製品については、後世の溝に伴う遺物である可能性が高い。

土器については、Ⅱ・Ⅲ層と同様に、須恵器（430・432 ～ 439）や灰釉陶器（431）、土師器（440 ～ 442）、土錘（443）といった、古代の遺物も出土している。

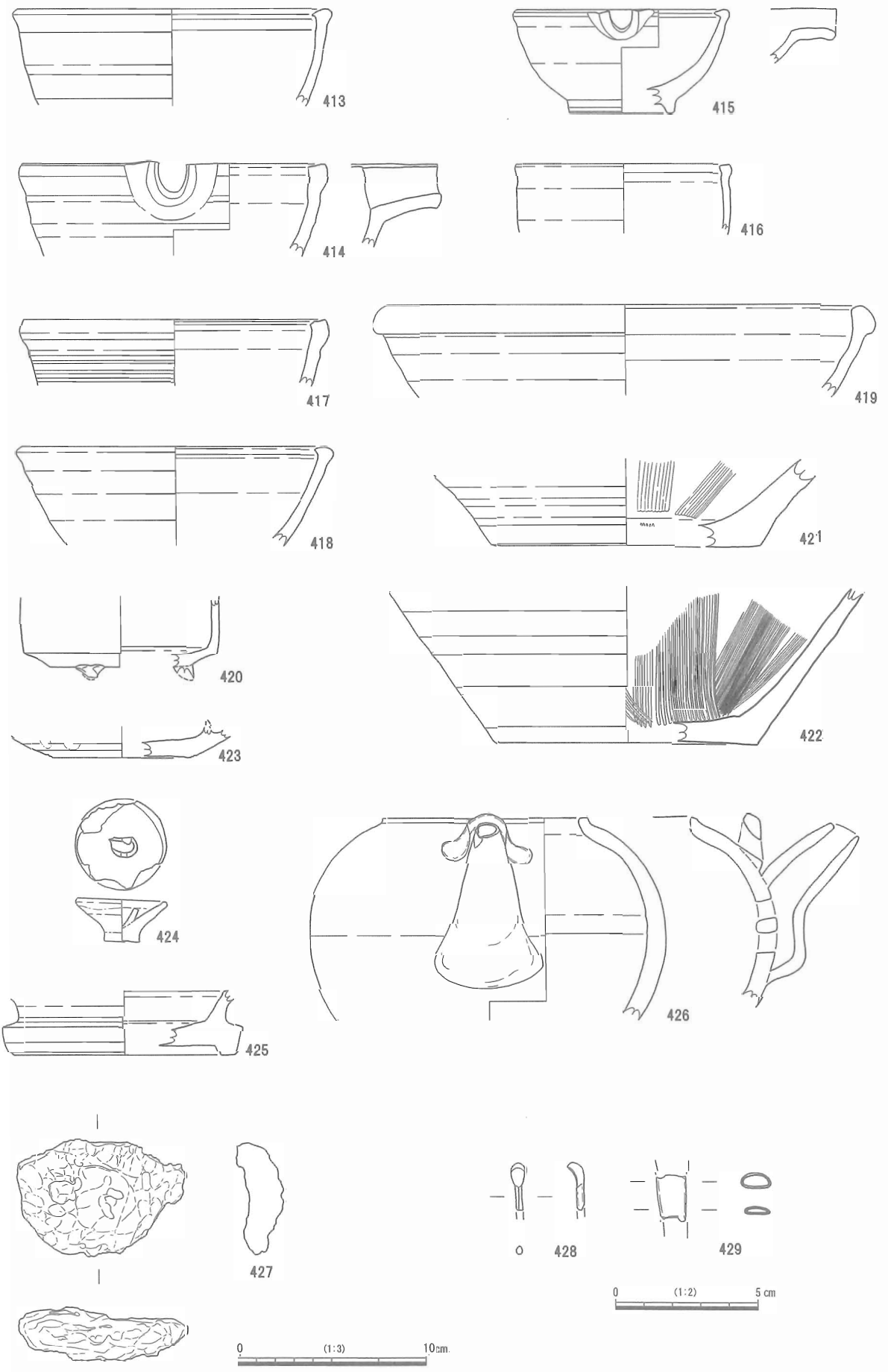


図 70　大溝Ⅰ層出土遺物（7）

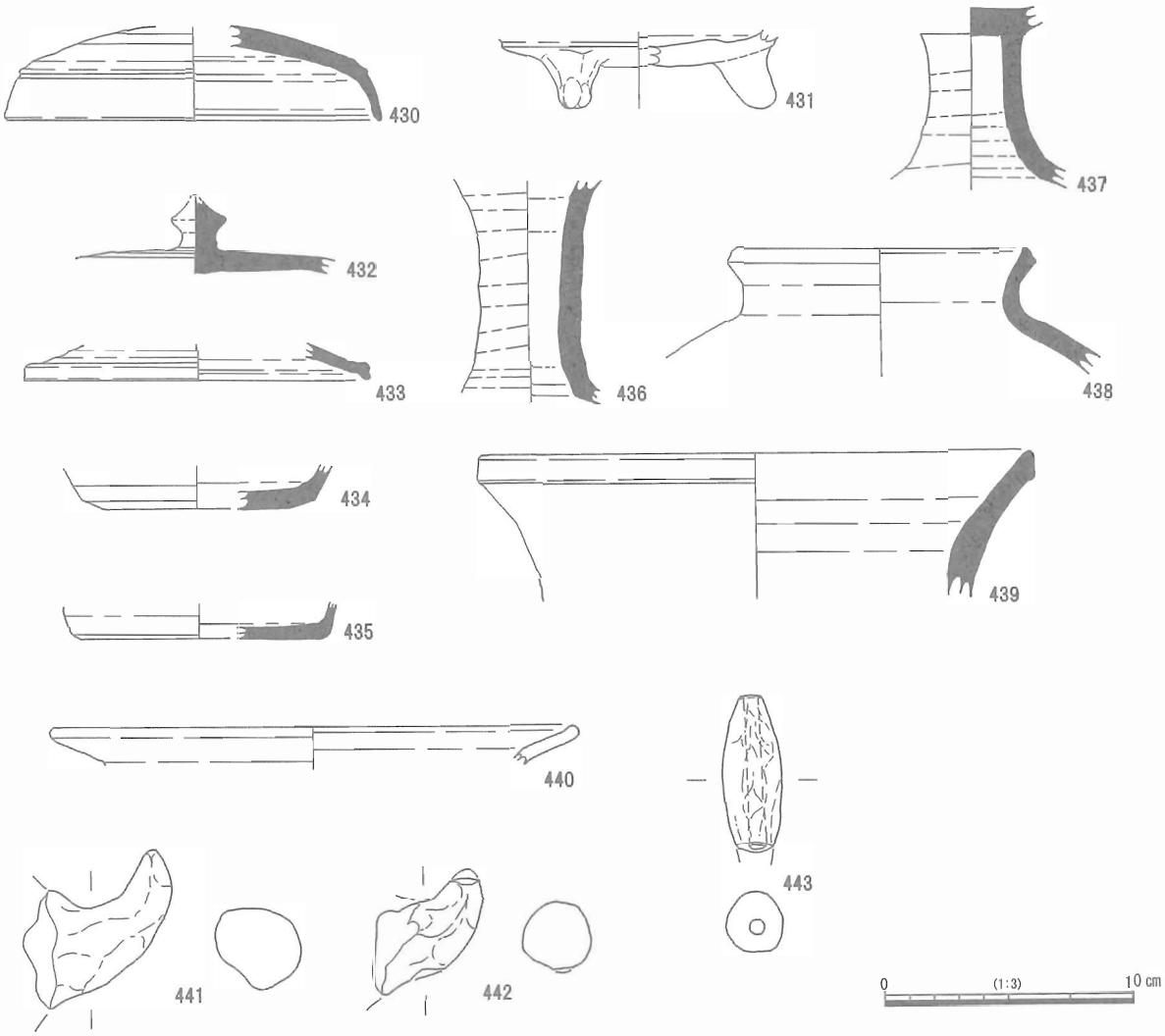


図 71　大溝Ⅰ層出土遺物（8）

Ⅱ層の半分程度の数量ではあるが、Ⅰ層でも瓦が出土している。444 ～ 470 は丸瓦である。いずれも破片資料であり、完形のものは出土していない。444 ～ 446 は狭端部の破片である。凸面はナデ調整が施され、凹面には布目と吊り紐痕がみられる。444 は無段式（行基式）の丸瓦であり、狭端から約６cm の所には釘穴が穿たれている。二次的な被熱が顕著で全体が黒く変色している。445 と 446 は、狭端面は残存していないが、釘穴が穿たれていることから狭端側の破片であることがわかる。447 ～ 451 は、広端部の破片である。凸面はナデ調整が施されており、凹面には布目が残り、部分的に離れ砂の付着も認められる。凹面の側端と広端には、面取り調整が施されている。広端面には離れ砂の付着が認められる。452 ～ 457 は、側端部が残る破片である。凹凸面の調整は上記のものと同様で、453 には縄叩き痕、455 には布綴じ痕が認められる。綴じ目はぐし縫いされている。458 ～ 461 は端部の残らない破片である。459 には粘土板の接合痕、460 には縄叩き痕が認められる。

462 ～ 470 は、４区において「大溝内攪乱」として取り上げているものである。しかし、出土品を見る限り現代のものは全く含まれておらず、すべてが攪乱であったとは考えにくい。土層などの記録が一切残されていないため、今となっては検証する術を持たないが、恐らくは、上面にみられた攪乱を十分に検出しないまま、攪乱として大きく掘り下げてしまったのであろう。これらは、ほぼⅠ層に相当する

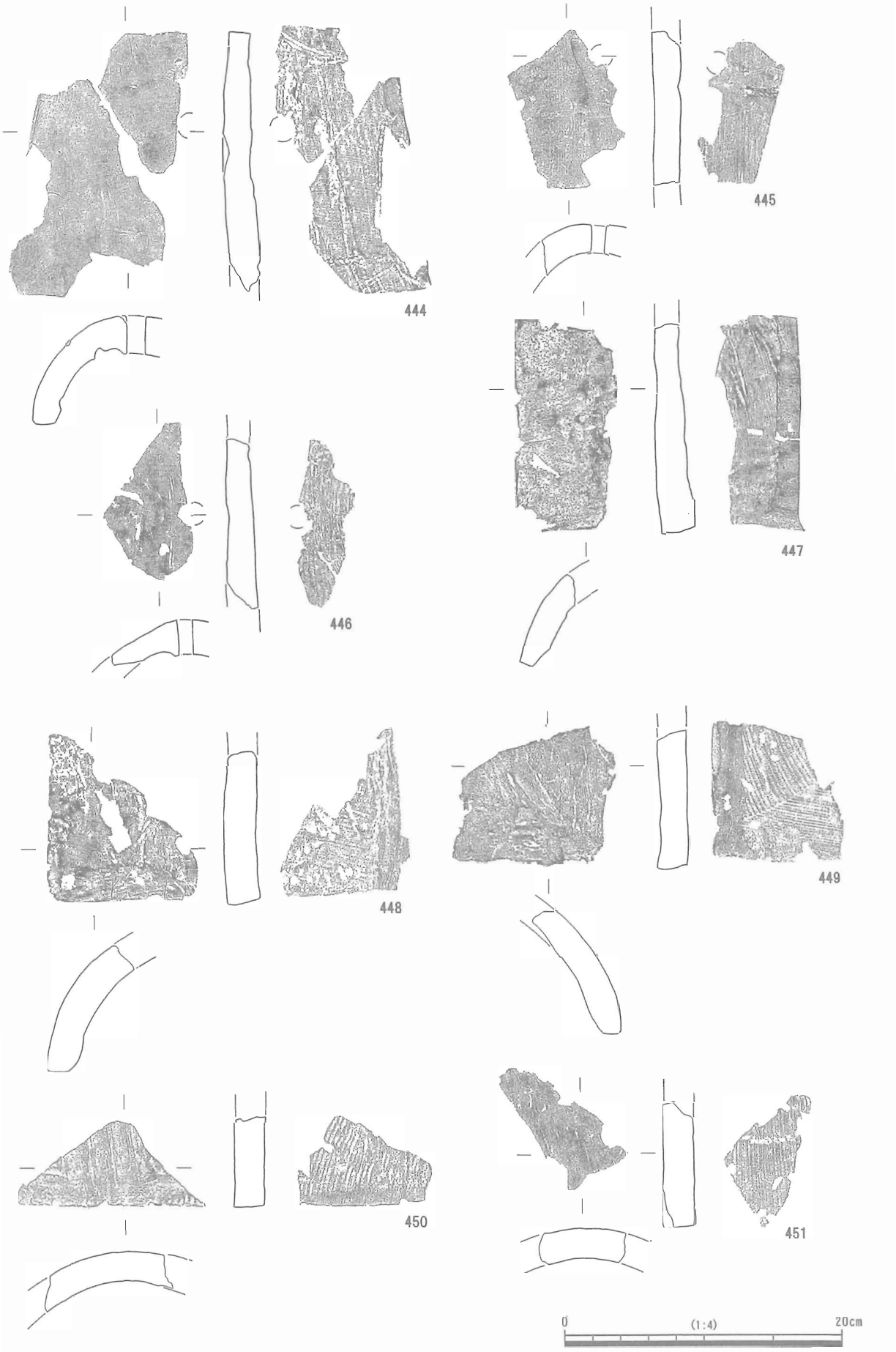


図 72　大溝Ⅰ層出土丸瓦（1）

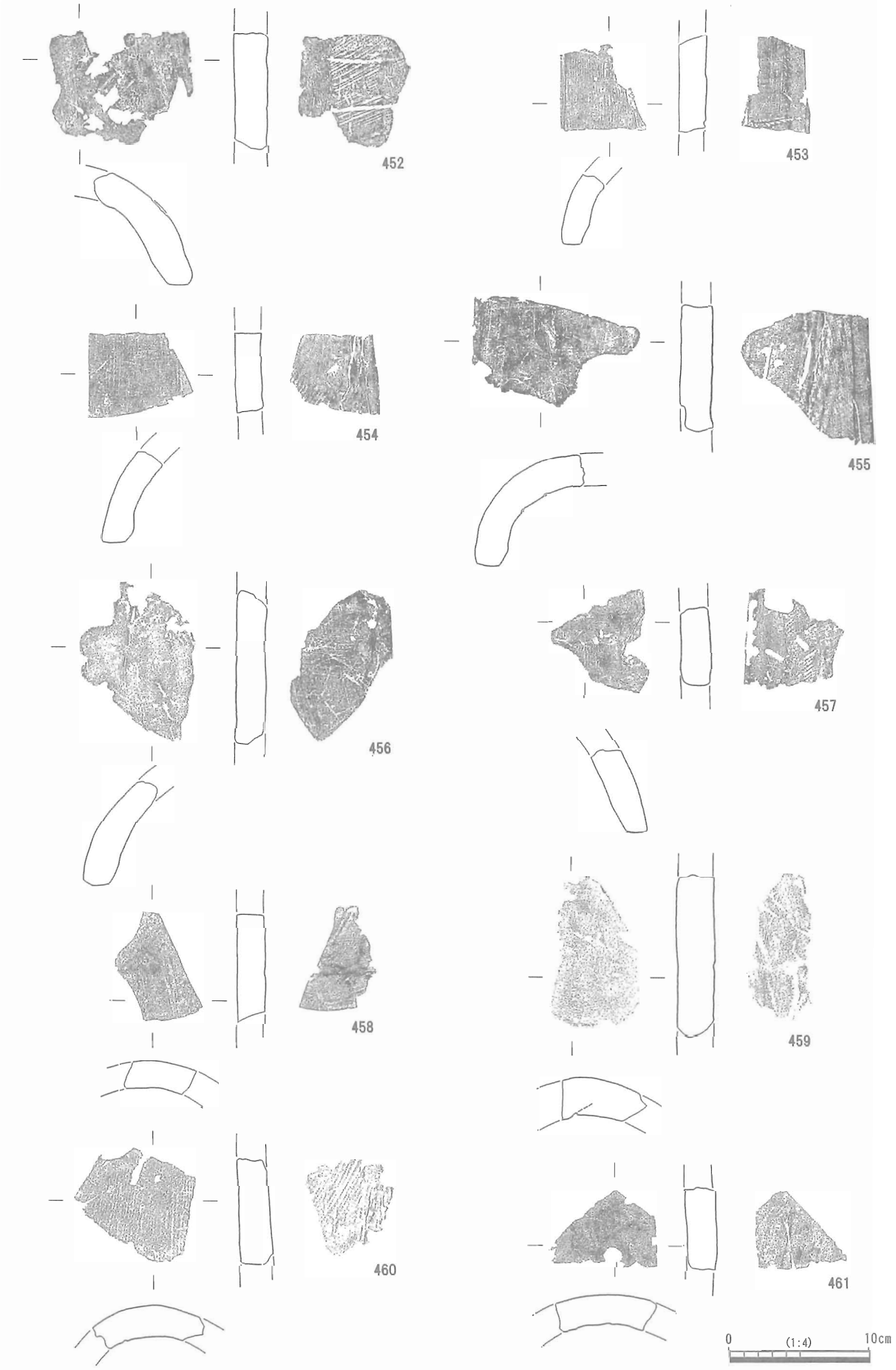


図 73　大溝Ｉ層出土丸瓦（2）

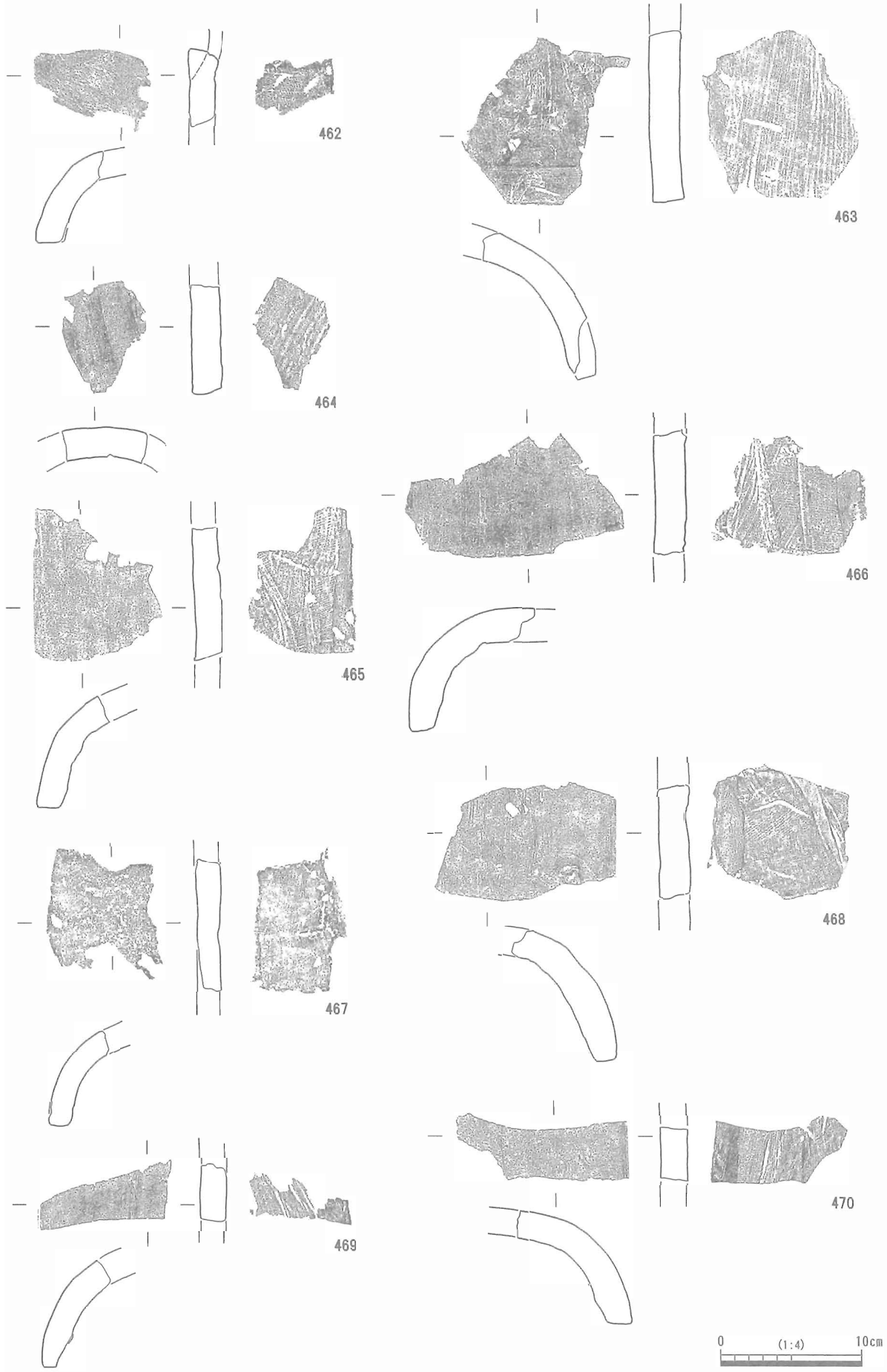


図 74　大溝Ⅰ層出土丸瓦（3）

高さから出土しており、基本的にはⅠ層出土の遺物として捉えてよいと推測される。

462 は有段式（玉縁式）の段部である。焼成は軟質で、灰白色の色調を呈している。凹面には粗い布目が残る。Ⅰ層出土の丸瓦で、有段式として認識できる資料はこの１点のみである。463 と 464 は、広端部の破片である。凸面にはナデ調整が施され、凹面は布目と粘土板の糸切り痕が残る。広端面には離れ砂の付着が認められる。465 ～ 470 は、側端部の破片である。凸面にはナデ調整が施され、凹面は布目と吊り紐痕が残る。466 の吊り紐痕の比率は、１：１となっている。

471 ～ 477 は平瓦である。このうち、472 と 477 は、「大溝内攪乱」として取り上げられている４区出土の遺物である。471 と 472 は、縦長斜格子の叩き目が残るものである。凹凸両面に離れ砂が付着する。473 ～ 477 は、縦長斜格子＋横線の叩き目が残るものである。離れ砂が凹凸両面に付着しており、477 には二次的な被熱の痕跡が顕著にみられる。476 は横長斜格子の叩き目が残るもので、凹凸両面に離れ砂が付着している。

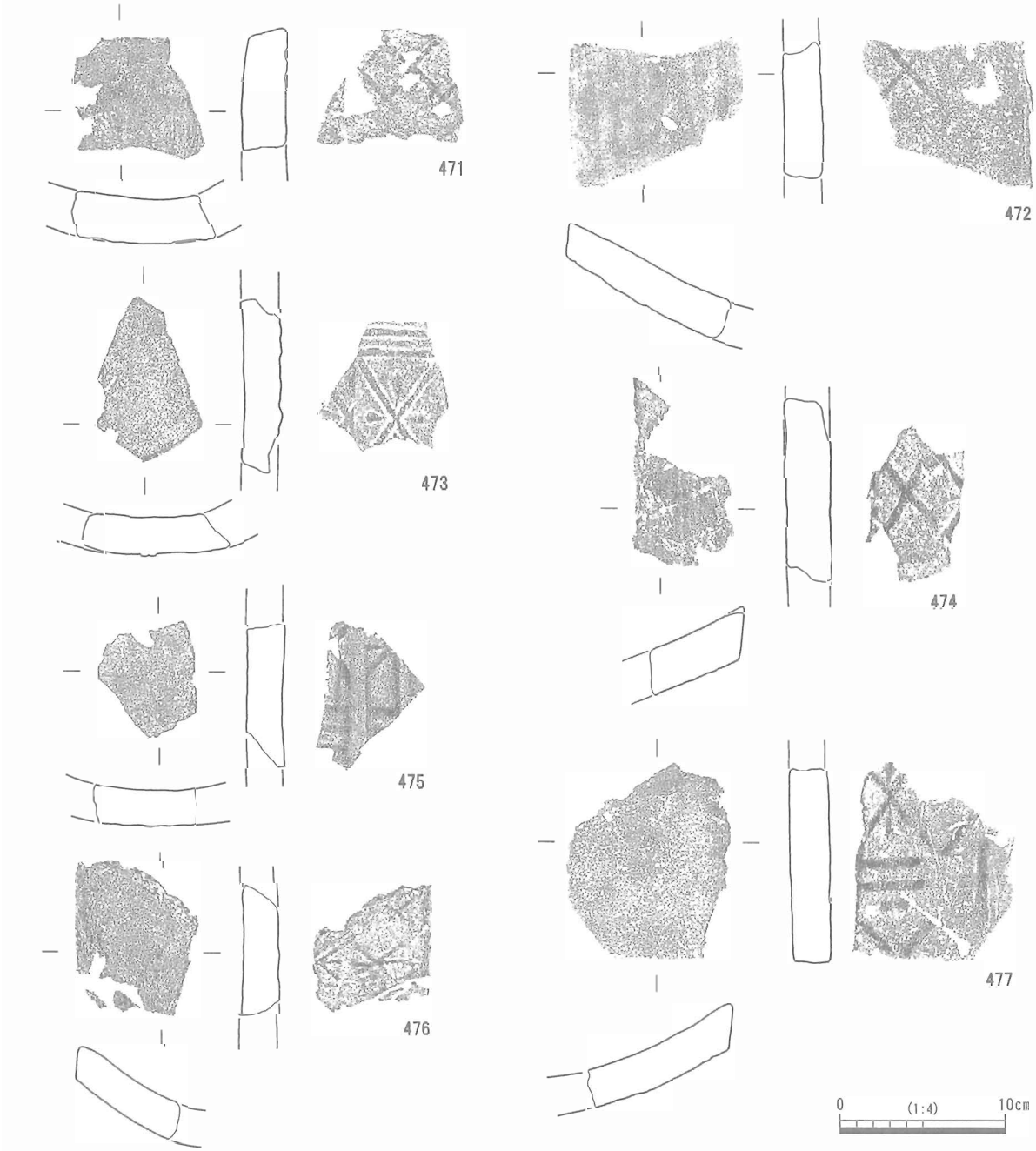


図 75　大溝Ⅰ層出土平瓦

このように、Ⅰ層として取り上げられている遺物には、後世の溝の遺物が混在しているため、大溝の埋没した年代がやや不明瞭な状況になってしまっている。これに関しては、後述するSE4001の年代が参考になる。SE4001は、大溝が埋没した後に構築された井戸であり、その廃絶年代は16世紀後葉と推測される。SE4001の使用期間については明確でないが、少なくともⅠ層の年代がこれを降ることはないとみて間違いない。このような観点で、今一度Ⅰ層出土の遺物を概観すると、内耳鍋においてくの字形のタイプが圧倒的に多く、中でも外面をハケ目調整する比較的古式のものが多数を占めていることが見て取れる。大溝は、16世紀までにほぼ埋没していたものと推測される。

大溝に比べて、土塁の構築土から出土した遺物は少ない。図化できたのは、わずかに5点（478～482）である。478と479は須恵器、480と481は土師器である。482は山茶碗の小碗で、Ⅰ－2期のものである。図化したものの他にも、小破片が十数点出土しているが、いずれも須恵器や土師器といった古代の遺物である。また、土塁構築土の直下の旧表土中からも、いくつか遺物が出土しているが、これも須恵器（484～489）や土師器（490～496）といった、古代の遺物に限られている。土塁の築造時期については、遺物が乏しいため不明瞭ではあるが、482の出土から12世紀後半以降であることは確実といえる。

以上のような調査結果から、大溝（SD2001）と土塁（SA2001）については、次のようにまとめられる。

まず、大溝については、各土層の年代が、最下層にあたるⅢ層は13世紀の後半頃までに、Ⅱ層は13世紀末から14世紀代、最上層のⅠ層はほぼ15世紀代に位置付けられる。溝が開削された時期については、多少不明瞭な部分はあるが、遺物の出土が確認される12世紀の後半～末頃と推測される。

溝は東西160ｍにもおよぶ大規模なものであるにもかかわらず、蛇行したり角度を違えることなく一直線に掘られている。さらに、排水溝の取り付く南東隅に向かって全体をわずかに傾斜させ、底部には水流による開析を防ぐための土堤状の施設も設けられている。これらの点は、設計から施工まで体系的な管理の下、比較的短期間に集中して工事が行われたことを示している。

東南隅では、壁面の大規模な崩落が確認されている。崩落土はⅢ層を攪拌するような状態で、上面にはⅡ層が堆積していることから、Ⅱ層が堆積し始める前後に崩落したものと推測される。年代としては、13世紀末頃であろうか。崩落土は排水溝の入り口部分を塞いでいるが、明確な掘り直しなどは行われず放置されているような状況である。内部の施設が、廃絶または著しく衰退していたものと推測される。

土塁は、大部分が削平されており、良好に残存する場所でも、基底部が約30㎝の高さ残る程度であった。内側の裾が削平されているため正確な規模については不明であるが、残存する規模から幅は5ｍ以上あったものと推測される。版築状の構造は認められず、締まりもさほど強固ではないため、溝の掘削土を突き固めた程度のものとみられる。幅広であることを考慮すると、溝の深さと同程度ないしはそれ以下の高さであったと推測される。なお、構築土中からは、12世紀後半の遺物が出土している。

今回調査を実施した範囲は、溝と土塁の部分を除くと、施設内のわずか5％程度に過ぎない。そのため、内部の施設についてはほぼ未解明の状態といえる。ただし、出土遺物などから一部推定することは可能である。大溝のほぼ全域からは、比較的まとまった量の瓦が出土しており、施設内には瓦葺きの建物が存在していたとみてよい。瓦は、大溝のⅢ層では1点も出土していないが、Ⅱ層の最下層からの出土が確認できる。瓦葺き建物の廃絶時期は、Ⅱ層の比較的早い段階の13世紀末頃である可能性が高い。また、被熱の痕跡が明確に残る瓦も出土しており、火災によって焼失していることがわかる。

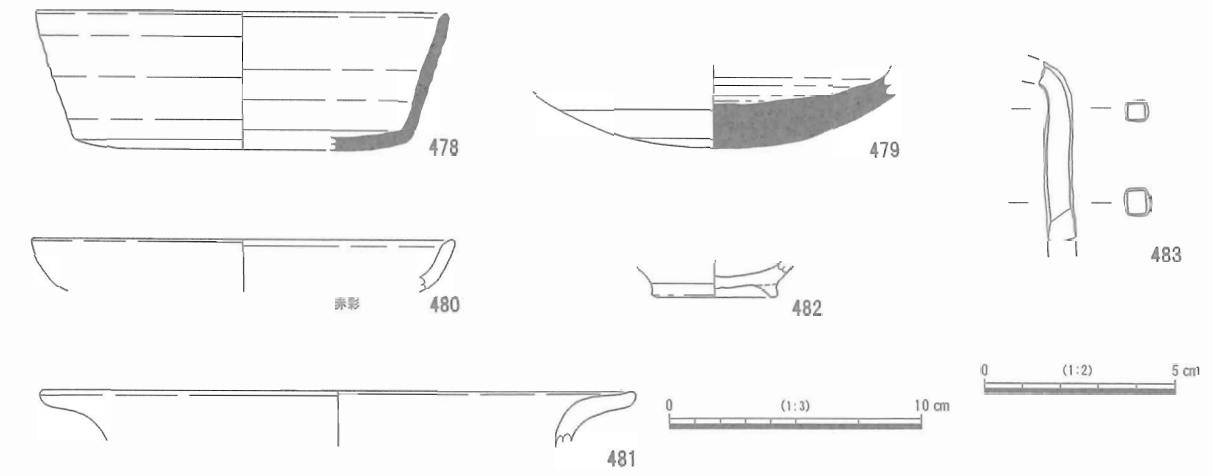


図 76　土塁構築土出土遺物

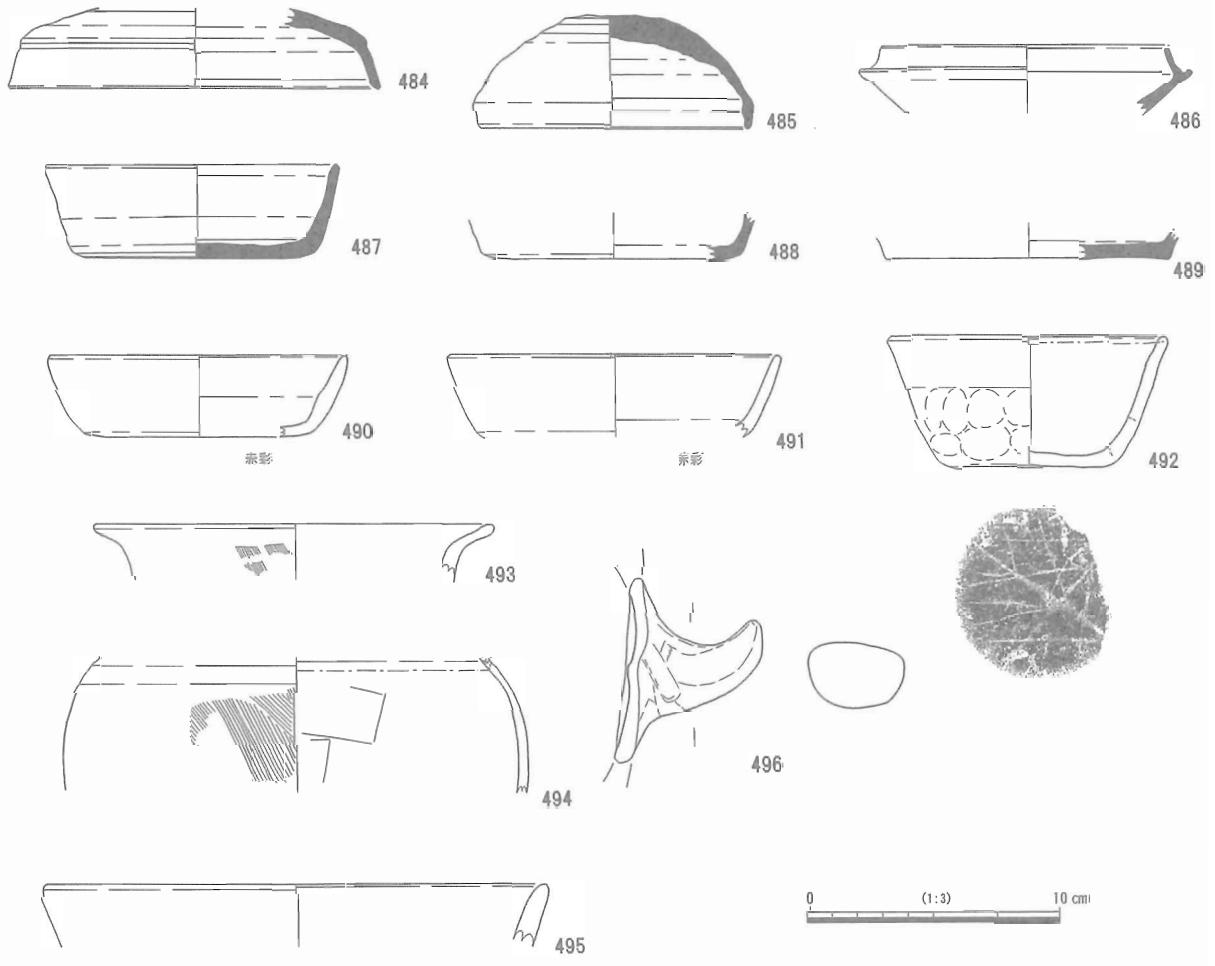


図 77　旧表土（土塁築造前）出土遺物

表４　大溝・土墨出土 土器・陶磁器観察表（１）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.6)		4.4	6.6	口縁～底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
2	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(14.9)		4.4	6.6	口縁～底部 1/6	内面・自然釉	灰白	
3	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	14.9		5.1	7.1	口縁～底部 1/2	自然釉	灰白	
4	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	16.0		5.3	7.3	口縁～底部 2/3	自然釉	灰白	
5	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	(15.2)		5.4	7.2	口縁～底部 1/6		灰	
6	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－２				7.5	底部のみ	自然釉	灰白	
7	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－２				7.6	底部 1/2	外面・自然釉	灰白	
8	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.0)		5.3	5.8	口縁～底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
9	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－２	15.8		5.7	6.2	ほぼ完形	漬け掛け	灰白	墨書「蔵納」
10	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－２	15.7		5.7	6.7	口縁～底部 3/4	漬け掛け	灰白	
11	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－２	(15.4)		6.1	7.2	口縁～底部 1/4		灰白	墨書「旅門」
12	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	(15.9)		6.1	6.5	口縁～底部 1/5		灰	
13	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	15.9		5.8	7.3	口縁～底部 1/4	内面・自然釉	灰	
14	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	16.2		6.1	7.0	ほぼ完形		灰白	
15	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	15.8		5.8	7.5	口縁～底部 1/2		灰	
16	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	16.7		6.8	7.0	口縁～底部 1/2		灰白	外面煤付着
17	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	16.4		6.4	7.0	口縁～底部 1/4		灰白	
18	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.9		5.8	7.7	ほぼ完形		灰白	
19	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.9)		5.8	(7.2)	口縁～底部 1/4		褐灰	
20	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	16.2		6.2	5.7	口縁～底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
21	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.5)		5.4	(6.4)	口縁～底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
22	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				7.2	体部～底部		灰白	
23	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.1)		5.7	6.4	ほぼ完形		灰白	
24	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	16.8		5.9	7.0	ほぼ完形		灰	
25	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	16.4		5.5	7.2	ほぼ完形		灰白	
26	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.8)		5.7	7.0	口縁～底部 2/3	自然釉	灰白	墨書「十」
27	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.3		4.7	6.9	ほぼ完形		灰白	
28	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.9)		4.7	(6.2)	口縁～底部 1/4		灰白	
29	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.5)		5.3	6.2	口縁～底部 1/2		灰白	
30	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２	15.6		5.2	6.4	口縁～底部 4/5		灰白	
31	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.4		4.9	6.2	口縁～底部 3/4		灰白	墨書「上」
32	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	16.8		5.7	7.9	口縁一部欠損		灰白	
33	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.5		5.4	6.3	口縁～底部 1/2		灰白	
34	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(16.5)		5.7	7.4	口縁～底部 1/2		灰白	
35	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.7		5.2	6.8	完形		灰白	
36	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.7		5.3	5.9	ほぼ完形	内面・自然釉	灰白	
37	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２	14.8		4.7	6.8	完形	内面・自然釉	灰白	
38	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２	15.1		4.9	7.0	ほぼ完形		灰白	
39	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.9)		5.6	5.8	口縁～底部 1/2		灰白	
40	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.5		5.5	6.6	口縁～底部 1/4		灰白	
41	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.9		5.5	7.2	ほぼ完形		灰白	
42	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.3		5.5	6.7	完形		灰白	外面煤付着
43	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.3		5.1	6.7	完形		灰	
44	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.8)				口縁～体部 1/20		灰白	
45	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				6.3	底部のみ	外面・自然釉	灰白	
46	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ	8.5	3.9	3.0		ほぼ完形	内面・自然釉	灰白	
47	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ	8.5	4.0	3.0		口縁～底部 1/4		灰白	
48	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ－１	8.4	3.5	2.3		ほぼ完形		灰白	
49	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ－１	8.1	3.9	2.3		ほぼ完形	自然釉	灰白	
50	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ－１	7.9	3.2	2.2		完形	内面・自然釉	灰白	
51	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ－２	(7.0)	(3.7)	1.5		口縁～底部 1/3		灰白	
52	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				6.6	底部のみ		灰白	墨書「得万」
53	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	知多	５型式				5.8	底部のみ		灰白	墨書「一」
54	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				6.5	底部のみ	外面・自然釉	灰白	墨書「十」
55	SD2001	Ⅲ層	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	A2 か A4 類				4.1	底部 1/2	青磁	オリーブ灰 / 灰白	
56	SD2001	Ⅲ層	貿易陶磁	白磁碗		不明					体部	白磁	灰白	
57	SD2001	Ⅲ層	中世陶器	片口鉢	常滑	５型式	(31.0)				口縁部 1/12		灰白	
58	SD2001	Ⅲ層	中世陶器	片口鉢	常滑		(32.0)				口縁部 1/16		灰白	
59	SD2001	Ⅲ層	中世陶器	片口鉢	常滑					(11.2)	高台部 1/8		灰	
60	SD2001	Ⅲ層	中世陶器	小型壺	湿美		(20.6)				口縁部 1/12		灰	
61	SD2001	Ⅲ層	中世陶器	甕	湿美			(13.3)			底部 1/4		にぶい黄橙	
62	SD2001	Ⅲ層	中世陶器	甕	湿美		(40.0)				口縁～頸部 1/8		黄灰	
63	SD2001	Ⅲ層	中世陶器	甕	湿美						体部一部		黄褐 / 浅黄	
64	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	8.6	3.9	1.9		ほぼ完形		灰白	
65	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	12.7)	6.1)			口縁～底部 1/2		灰白	
66	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	14.7)				口縁部 1/4		灰白	
67	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	11.8	3.9	3.5		完形		灰白	
68	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	12.6)				口縁部 1/4		灰白	内面に煤付着
69	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	11.4)	3.5)			口縁～底部 1/2		灰白	
70	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	13.6)				口縁部 1/8		灰白	
71	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	13.4)	7.0)	3.35		口縁～底部 1/6		灰白	
72	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	12.2	3.0	3.3		ほぼ完形		灰白	
73	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ	7.8	4.5	2.2		口縁～底部 2/3		浅黄	口縁に煤付着
74	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ	9.0	4.7	1.6		口縁～底部 2/3		浅黄橙	
75	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ	8.7	4.9	1.2		口縁～底部 2/3		浅黄橙	
76	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ		5.4			底部のみ		灰白	
77	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ	7.7	4.2	2.1		ほぼ完形		浅黄橙	
78	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ	(8.7)	(4.7)			口縁～底部 1/3		浅黄橙	
79	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ	(8.8)	(5.2)			口縁～底部 1/4		浅黄橙	
80	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ		4.6			底部のみ		灰白	
81	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	皿		ロクロ		7.7			底部 1/2		褐灰 / 淡黄	
82	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	伊勢鍋			(25.6)				口縁～体部 1/3		にぶい橙	外面に煤付着
83	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	伊勢鍋			(18.0)				口縁部 1/20		浅黄橙	外面に煤付着
84	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	伊勢鍋			(20.0)				口縁部 1/12		浅黄橙	
85	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	伊勢鍋			(21.1)				口縁部 1/20		浅黄橙	外面に煤付着

表５　大溝・土塁出土 土器・陶磁器観察表（２）

No	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
86	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	伊勢鍋			(22.4)				口縁部 1/12		にぶい褐	外面に煤付着
87	SD2001	Ⅲ層	須恵器	坏蓋				3.0			天井部 3/4		灰白	
88	SD2001	Ⅲ層	須恵器	坏蓋				5.6			天井部のみ		灰白	
89	SD2001	Ⅲ層	須恵器	坏蓋			(15.0)				口縁～体部 1/10		灰白	
90	SD2001	Ⅲ層	須恵器	坏身				3.2			底部のみ		灰	ヘラ記号
91	SD2001	Ⅲ層	須恵器	壺				(7.0)			底部 1/4	自然釉	灰	
92	SD2001	Ⅲ層	須恵器	壺				(6.9)			底部 1/4		灰	
93	SD2001	Ⅲ層	須恵器	高坏						基部 4.1	坏調部～脚部	自然釉	黄灰	
94	SD2001	Ⅲ層	須恵器	高坏						基部 4.0	坏調部～（基部）		灰	
95	SD2001	Ⅲ層	須恵器	壺				3.8			肩部～底部		灰白	
96	SD2001	Ⅲ層	須恵器	甕			(21.2)				口縁～頸部 1/4	自然釉	灰白	
97	SD2001	Ⅲ層	須恵器	壺			(21.6)				口縁～頸部 1/4	自然釉	灰白	頸部にヘラ記号
98	SD2001	Ⅲ層	須恵器	甕			(25.6)				口縁部 1/12	外面・自然釉	灰白	刺突文
99	SD2001	Ⅲ層	土製模造品	碗			(3.2)	1.9	2.4		口縁～底部 1/2		浅黄橙	
100	SD2001	Ⅲ層	土師器	高坏						基部 3.0	脚部のみ		浅黄	
101	SD2001	Ⅲ層	土師器	甕			(26.0)				口縁部 1/20		にぶい黄橙	
102	SD2001	Ⅲ層	土師器	小壺			(17.0)				口縁～頸部 1/8		浅黄橙	
103	SD2001	Ⅲ層	土師器	鍋							把手のみ		明赤褐色	
104	SD2001	Ⅲ層	石製品	砥石			現存長 5.6	幅 6.5	厚さ 1.9					
105	SD2001	Ⅲ層	須恵器	高坏						基部 (4.6)	坏部 1/2		灰	
106	SD2001	Ⅲ層	須恵器	甕			(22.2)				口縁部 1/10	内面・自然釉	灰白	
107	SD2001	Ⅲ層	須恵器	鉢			(16.4)				口縁～体部 1/2	内面・自然釉	灰白	
108	SD2001	Ⅲ層	灰釉陶器	碗			(15.3)				口縁～体部 1/8	漬け掛け	灰白	
109	SD2001	Ⅲ層	土師器	壺			(17.6)				口縁部 1/14		橙 / 灰	
110	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	Ⅲ		ロクロ	(15.5)	6.6	4.0		口縁～底部 1/2		浅黄	
111	SD2001	Ⅲ層	土師質土器	Ⅲ		ロクロ		5.8			底部 5/6		浅黄	
112	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(13.9)				口縁部 1/36		灰白	
113	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				6.9	底部のみ		灰白	
114	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅱ				(6.6)	体部～底部 1/2	自然釉	灰白	
115	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅱ				(7.6)	体部～底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
116	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１					底部のみ		灰白	
117	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅱ				7.1	底部 3/4		灰白	
118	SD2001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１	15.3		5.2	6.5	口縁一部欠損	自然釉	灰白	
119	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(15.6)				口縁部 1/10		灰白	
120	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(16.0)				口縁部 1/4		灰白	
121	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅱ				(7.2)	底部 1/2	自然釉	灰白	
122	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				(7.5)	体部～底部		灰白	
123	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				(6.7)	底部 1/4		灰白	
124	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅱ				(6.3)	体部～底部 1/5		灰白	
125	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				6.5	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
126	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				6.5	体部～底部	内面・自然釉	灰白	
127	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				6.9	底部のみ		灰白	
128	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅱ	(15.0)		5.8	6.3	口縁～底部 1/8	自然釉	灰白	
129	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅱ	16.3		5.8	6.8	口縁一部欠損	内面・自然釉	灰白	
130	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(15.9)				口縁部 1/10		灰白	
131	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				7.2	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
132	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				(6.6)	底部 1/5	内面・自然釉	灰白	
133	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				6.8	体部～底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
134	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				(7.4)	体部～底部 1/4		灰白	
135	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				7.4	底部のみ		灰白	
136	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２	(15.2)		4.3	7.6	口縁～底部 1/2		灰白	
137	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(14.9)				口縁部 1/8		灰白	
138	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(13.8)				口縁部 1/6		灰白	
139	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２	(14.3)		4.6	6.0	口縁～底部 1/8	自然釉	灰白	
140	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２	(14.1)		4.4	6.4	口縁～底部 1/12		灰白	
141	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２	14.9		4.5	6.7	口縁～底部 1/4		灰白	
142	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(15.9)				口縁部 1/12		灰白	
143	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				(6.2)	底部 1/4		灰白	
144	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				5.9	底部のみ		灰白	
145	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				(6.7)	底部 1/3		灰白	
146	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗			(15.0)				口縁～体部 1/6	漬け掛け	灰白	
147	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１	(15.4)		5.2	6.3	口縁～底部 1/3	自然釉	灰白	
148	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(15.2)				口縁～体部 1/12	自然釉	灰白	
149	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西		(16.0)				口縁部 1/6		灰白	
150	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				5.9	底部のみ		灰白	内面にスス付着
151	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				(7.9)	底部 1/3		灰白	墨書「万□」
152	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２	(14.8)		5.1	5.8	口縁～底部 1/3		灰白	墨書「万得」
153	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				6.5	体部～底部 1/3		灰白	墨書「安」
154	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２	(14.0)		4.8	(6.5)	口縁～底部 1/8		灰白	内面にスス付着
155	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				7.3	底部のみ		灰白	
156	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				5.4	底部のみ		灰白	
157	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				7.0	体部～底部 1/8		灰白	
158	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				5.3	底部のみ		灰白	
159	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				5.5	底部のみ		灰白	
160	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				5.7	底部 2/3		灰白	
161	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				5.0	底部のみ		灰白	
162	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－１				5.7	底部のみ		灰白	
163	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				(7.9)	底部 1/4		灰白	
164	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２				7.1	底部のみ		灰白	墨書「上」
165	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２		(8.0)			底部 1/2	自然釉	灰白	無高台
166	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿黄湖西	Ⅲ－２		6.4			底部 2/3		灰白	無高台
167	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	小碗	湿黄湖西	Ⅰ－２				(4.4)	底部 1/2		灰白	
168	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿黄湖西	Ⅲ－２	(8.0)	5.0	1.7		口縁～底部 1/4	自然釉	灰白	
169	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿黄湖西	Ⅲ－２		4.0			底部のみ		灰白	墨書「万」
170	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿黄湖西	Ⅲ－２		4.5			底部のみ	内面・自然釉	灰白	

表6　大溝・土墨出土 土器・陶磁器観察表（3）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
171	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2	8.0	5.3	1.4		口縁～底部 2/3	内面・自然釉	灰白	
172	SD2001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ		5.4			底部 1/2		灰白	
173	SD2001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西		(26.6)				口縁部 1/6		灰白	
174	SD2001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西		(32.9)				口縁部 1/8		灰白	
175	SD2001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西	Ⅰ期				(13.6)	底部 1/4		灰白	
176	SD2001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	知多	5 型式				(14.0)	高台部 1/4		灰黄	
177	SD2001	Ⅱ層	中世陶器	甕	常滑		(30.0)				口縁部 1/10		灰赤 / 赤褐	
178	SD2001	Ⅱ層	中世陶器	壺	湿美		(21.4)				口縁部 1/12		黒 / 灰白	
179	SD2001	Ⅱ層	施釉陶器	平碗	瀬戸美濃	中期				(4.9)	底部 1/3		浅黄 / 浅黄橙	
180	SD2001	Ⅱ層	施釉陶器	四耳壺	瀬戸美濃	前期Ⅱ					体部 6/1		灰白	
181	SD2001	Ⅱ層	施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	大窯２～３		(11.9)			体部～底部 1/6		赤灰 / 浅黄橙	
182	SD2001	Ⅱ層	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類				4.7	底部のみ	青磁	オリーブ灰 / 灰白	
183	SD2001	Ⅱ層	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	A2 か A4 類				(5.4)	体部～底部 1/2	青磁		二次焼成
184	SD2001	Ⅱ層	貿易陶磁	白磁碗		Ⅳ類	(15.7)				口縁部 1/12	白磁	灰白	
185	SD2001	Ⅱ層	貿易陶磁	白磁四耳壺						(6.4)	底部 1/3	白磁	明緑灰 / 灰白	
186	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	9.1	4.3	1.7		完形		灰白	
187	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.0)				口縁部 1/6		灰白	
188	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.4)	(3.3)			口縁部 1/8		浅黄橙	
189	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.5)				口縁部 1/6		灰白	
190	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	7.9	3.98	1.6		完形		灰白	
191	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/15		灰白	
192	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	9.0	3.1	2.0		ほぼ完形		灰白	
193	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)				口縁部 1/10		灰白	
194	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	8.2	3.5	1.8		ほぼ完形		灰白	
195	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁部 1/12		灰白	
196	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)	(3.7)			口縁～底部 1/6		灰白	
197	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.8)	(5.2)	3.1		口縁～底部 1/8		灰白	
198	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(14.0)				口縁部 1/6		灰白	
199	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)				口縁部 1/6		灰白	
200	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)	6.5	3.5		口縁～底部 1/2		灰白	
201	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.1)	(5.4)	3.3		口縁～底部 1/4		灰白	
202	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.5)	(3.1)			口縁～底部 1/4		灰白	
203	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	13.3	5.0	3.4		ほぼ完形		灰白	
204	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)	(5.0)			口縁～底部 1/3		灰白	
205	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁部 1/4		灰白	
206	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)	(5.6)			口縁～底部 2/3		灰白	
207	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.5)				口縁部 1/5		灰白	
208	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)	(6.4)			口縁～底部 1/8		灰白	
209	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.4)	(6.0)			口縁～底部 1/3		浅黄橙	
210	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/8		浅黄橙	
211	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部 1/10		灰白	
212	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	皿		ロクロ		(6.2)			底部 1/4		灰白	
213	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	伊勢鍋			(28.3)				口縁～胴部 1/4		にぶい橙 / 浅黄	外面に煤付着
214	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	伊勢鍋			(23.4)				口縁部 1/12		浅黄橙	
215	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.8)				口縁部 1/12		にぶい黄橙	外面に煤付着
216	SD2001	Ⅱ層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.2)				口縁～体部 1/16		浅黄橙	外面に煤付着
217	SD2001	Ⅱ層	須恵器	坏蓋							体部 1/4		黄灰	
218	SD2001	Ⅱ層	須恵器	坏蓋			(11.2)				口縁～体部 1/6		灰	
219	SD2001	Ⅱ層	須恵器	坏身							体部～底部 1/4		灰	
220	SD2001	Ⅱ層	須恵器	坏蓋			(15.2)				口縁部 1/12	外面・自然釉	灰白	
221	SD2001	Ⅱ層	須恵器	坏蓋			(13.1)				口縁部 1/10		灰白	
222	SD2001	Ⅱ層	須恵器	坏蓋			(11.6)				口縁部 1/4	外面・自然釉	黄褐 / 灰白	
223	SD2001	Ⅱ層	須恵器	高坏			基部径 3.5				基部～脚部		灰	
224	SD2001	Ⅱ層	須恵器	高坏			基部径 4.0				基部～脚部		灰白	
225	SD2001	Ⅱ層	須恵器	壺			(13.0)				口縁部 1/8	自然釉	灰黄	
226	SD2001	Ⅱ層	須恵器	壺			(20.5)				口縁～頸部 1/8		灰白	
227	SD2001	Ⅱ層	須恵器	壺				(5.8)			体部～底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
228	SD2001	Ⅱ層	須恵器	壺							底部 2/3		灰白	
229	SD2001	Ⅱ層	土師器	甑							把手のみ		橙	
230	SD2001	Ⅱ層	土師器	甑							把手のみ		橙	
231	SD2001	Ⅱ層	土師器	甑							把手のみ		にぶい橙	
232	SD2001	Ⅱ層	土師器	甑							把手のみ		にぶい褐色	
233	SD2001	Ⅱ層	土師器	甑							把手のみ		橙	
234	SD2001	Ⅱ層	土師器	台付壺			基部径 6.3				基部～脚部		淡黄	
235	SD2001	Ⅱ層	土製品	土錘			現存長 5.4	最大幅 1.6					淡黄	
236	SD2001	Ⅱ層	鉄製品	釘？			長 3.25	幅 0.6	厚さ 0.5					
293	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.8)				口縁部 1/16		にぶい黄 / 灰黄	
294	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(7.9)	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
295	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.0	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
296	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(7.2)	底部 1/4		灰白	
297	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	東遠江	Ⅲ－2				6.7	底部のみ		灰	
298	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.1)	底部 1/4		灰白	
299	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.4)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
300	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				9.0	底部 3/4	内面・自然釉	灰白	
301	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				7.4	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
302	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.4)	底部 1/3		灰白	
303	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(5.8)	底部 1/6	内面・自然釉	灰白	
304	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.1)	底部 1/6	内面・自然釉	灰白	
305	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				4.6	底部 2/3	内面・自然釉	灰白	
306	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.8	底部のみ		灰白	
307	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(9.0)	底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
308	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.6	底部のみ		灰白	
309	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				7.0	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
310	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.5)	底部 1/2		灰白	
311	SD2001	Ⅰ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.1	底部 1/2		灰白	

表7　大溝・土塁出土 土器・陶磁器観察表（4）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
312	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(8.3)	底部 1/2		灰白	
313	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				5.9	底部のみ		灰白	
314	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.7	底部のみ		灰白	
315	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(6.6)	底部 1/2		灰白	
316	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.5	底部のみ	外面・自然釉	灰白	
317	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.2	底部のみ		灰白	
318	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(5.9)	底部のみ		灰白	
319	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				5.9	底部のみ		灰白	
320	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2	14.9		4.5	6.7	口縁～底部 1/2	目然釉	灰白	
321	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.6	底部のみ		灰白	
322	SD2001	I層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.2	底部のみ		灰	
323	SD2001	I層	山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅲ－2	(9.1)	4.4	2.6		口縁～底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
324	SD2001	I層	山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅲ－1	(8.0)	(4.6)	2.5		口縁～底部 1/3		灰白	
325	SD2001	I層	山茶碗	小皿	遠美湖西		(9.6)				口縁部 1/8		灰白	
326	SD2001	I層	山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅲ－2	(7.9)	(6.3)	1.6		口縁～底部 1/4		灰白	
327	SD2001	I層	中世陶器	片口鉢	遠美		(28.7)				口縁部 1/8		黄灰	
328	SD2001	I層	中世陶器	片口鉢	知多	5型式か				(13.4)	体部～底部 1/3		灰黄	
329	SD2001	I層	中世陶器	片口鉢	知多						高台部 1/5		灰白	高台端部欠損
330	SD2001	I層	中世陶器	片口鉢	知多						高台部 1/5	内面・自然釉	灰白	高台端部欠損
331	SD2001	I層	中世陶器	片口鉢	知多					(10.7)	高台部 1/4	自然釉	灰白	
332	SD2001	I層	中世陶器	壺	遠美						体部一部		黄灰	遠弁文
333	SD2001	I層	中世陶器	片口鉢	東遠			(14.3)			底部 1/4		灰白 / 明褐灰	
334	SD2001	I層	中世陶器	片口鉢	常滑		(10.3)				口縁部 1/4		灰赤	
335	SD2001	I層	中世陶器	壺	常滑			(10.6)			胴部～底部 1/6			
336	SD2001	I層	施釉陶器	緑釉小皿	瀬戸美濃	後期Ⅰ～Ⅱ		5.6			底部のみ		浅黄	
337	SD2001	I層	施釉陶器	緑釉小皿	瀬戸美濃	後期Ⅰ～Ⅱ		(6.4)			底部 1/2		浅黄	
338	SD2001	I層	施釉陶器	内禿皿	初山		(9.8)	(5.0)	1.9		口縁～底部 1/6		暗褐 / 黄灰	
339	SD2001	I層	施釉陶器	卸皿	古志戸呂		(12.5)	5.1	2.9		口縁～底部 1/3		にぶい橙	
340	SD2001	I層	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂			11.0			底部のみ		橙	
341	SD2001	I層	施釉陶器	内耳鍋	瀬戸美濃	後期Ⅳ	(31.0)				口縁部 1/12		にぶい橙	
342	SD2001	I層	施釉陶器	筒形容器か	古志戸呂					(18.4)	胴部～底部 1/2		にぶい橙	
343	SD2001	I層	施釉陶器	四耳壺	瀬戸美濃	前期Ⅱ～Ⅲ	(9.8)				口縁部 1/3		浅黄	
344	SD2001	I層	施釉陶器	花瓶大	瀬戸美濃	中期Ⅳ				(7.8)	高台部 1/4		浅黄 / 浅黄	
345	SD2001	I層	施釉陶器	草式花瓶	瀬戸美濃	後期Ⅲ～Ⅳ古		(8.2)			底部 1/2		オリーブ / 灰白	
346	SD2001	I層	施釉陶器	仏供	古志戸呂	後期Ⅳ古		4.3			底部のみ		にぶい橙	
347	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.1)	(4.1)	1.7		口縁～底部 1/2		灰白	
348	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.2)				口縁部 1/6		灰白	
349	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.1)				口縁部 1/11		灰白	
350	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)				口縁部 1/8		灰白	
351	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)	(3.4)			口縁～底部 1/6		灰白	
352	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁部 1/9		灰白	
353	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.75)				口縁部 1/8		灰白	
354	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.5)				口縁部 1/5		灰白	
355	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)	(7.2)			口縁～底部 1/4		灰白	
356	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/6		灰白	
357	SD2001	I層	土師質土器	皿		ロクロ	(11.6)	(5.8)	3.8		口縁～底部 1/2		浅黄橙	
358	SD2001	I層	土師質土器	皿		ロクロ	(12.8)	(6.2)	3.2		口縁～底部 1/2		浅黄	
359	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.9)				口縁部 1/8		浅黄橙	
360	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.8)				口縁部 1/8		灰白	
361	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.7)	(7.0)			口縁～底部 1/10		浅黄	
362	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	10.2	5.2	2.5		口縁一部欠損		灰白	
363	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.1)	(7.0)			口縁～体部 1/6		にぶい黄橙	
364	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.7)	(5.4)			口縁～底部 1/4		灰白	
365	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部 1/8		浅黄橙	
366	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)	(6.0)			口縁～底部 1/6		にぶい黄橙	
367	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/8		浅黄橙	
368	SD2001	I層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.4)	(5.4)			口縁～底部 1/8		浅黄橙	
369	SD2001	I層	土師質土器	伊勢鍋			(26.1)				口縁部 1/6		浅黄	内・外面に煤付着
370	SD2001	I層	土師質土器	伊勢鍋			(19.5)				口縁部 1/20		浅黄橙	
371	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.2)				口縁～体部 1/8		灰白	外面に煤付着
372	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.4)				口縁～体部 1/2		浅黄橙	外面に煤付着
373	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	21.3				口縁～体部		浅黄橙	外面に煤付着
374	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.0)				口縁～体部 2/3		浅黄	外面に煤付着
375	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(22.6)				口縁部 1/6		浅黄	
376	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.6)				口縁～体部 1/10		浅黄橙	外面に煤付着
377	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(22.7)				口縁部 1/20		浅黄	
378	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.2)				口縁部 1/12		灰白	外面に煤付着
379	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(23.0)				口縁部 1/10		浅黄	外面に煤付着
380	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.2)				口縁部 1/10		浅黄橙	外面に煤付着
381	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.8)				口縁部 1/5		浅黄橙	外面に煤付着
382	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(18.8)				口縁部 1/20		にぶい橙	外面に煤付着
383	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.7)				口縁～肩部 1/4		浅黄	
384	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.3)				口縁～肩部 1/4		灰白	外面に煤付着
385	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.9)				口縁～肩部 1/8		灰白	
386	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(17.8)				口縁部 1/10		灰白	外面に煤付着
387	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.9)				口縁部 1/4		灰白	外面に煤付着
388	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(20.9)				口縁部 1/24		浅黄橙	外面に煤付着
389	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.2)	(17.2)			口縁～底部 1/2		浅黄	外面に煤付着
390	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.8)				口縁部 1/12		にぶい黄橙	
391	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		半球形	(22.4)				口縁部 1/16		黒褐	内・外面に煤付着
392	SD2001	I層	土師質土器	内耳鍋		半球形	(23.4)				口縁部 1/20		浅黄橙	
393	SD2001	I層	近世陶器	小皿	志戸呂					(5.0)	底部 1/3	漬け掛け	にぶい褐	つけ高台
394	SD2001	I層	近世陶器	香炉	志戸呂					5.1	底部 2/3		浅黄 / にぶい黄褐	
395	SD2001	I層	近世陶器	天目茶碗	志戸呂		(10.7)				口縁～体部 1/8		赤黒 / にぶい黄橙	
396	SD2001	I層	近世陶器	天目茶碗	志戸呂		(11.2)				口縁部 1/12		灰オリーブ / 灰黄	

表8　大溝・土壙出土 土器・陶磁器観察表（5）

No	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
397	SD2001	I層	近世陶器	天目茶碗	瀬戸	登3～4				(4.7)	底部1/2		灰白 / 黒	
398	SD2001	I層	近世陶器	尾呂茶碗	美濃	登5～6				4.6	底部のみ		明黄褐 / 灰白	
399	SD2001	I層	近世陶器	腰錆湯呑	瀬戸美濃	登8～9	(10.0)				口縁～体部1/8		にぶい赤褐 / 灰白	
400	SD2001	I層	近世陶器	腰錆湯呑	瀬戸	登8～9	(9.0)		4.9	(4.1)	口縁～底部1/4		黒褐 / 灰白	
401	SD2001	I層	近世陶器	腰錆湯呑	瀬戸	登8～9	(7.8)				口縁部1/8		灰白	
402	SD2001	I層	近世陶器	腰錆湯呑	瀬戸美濃	登9				3.9	底部のみ		灰褐 / 灰白	
403	SD2001	I層	近世陶器	小中	瀬戸美濃	登8～9	(9.6)				口縁～体部1/6			
404	SD2001	I層	近世磁器	染付茶碗	肥前		(11.9)		5.7	4.6	口縁～底部1/3		灰白	
405	SD2001	I層	近世陶器	筒形湯呑	瀬戸	登11	(7.0)	5.2	(3.2)		口縁～底部1/2			
406	SD2001	I層	近世陶器	箱形湯呑	美濃	登10				(2.8)	胴部下～底部		灰白	
407	SD2001	I層	近世陶器	箱形湯呑	瀬戸美濃	登10	(6.8)				口縁～体部1/4			
408	SD2001	I層	近世磁器	染付茶碗	肥前		(6.8)				口縁～体部1/4		灰白	
409	SD2001	I層	近世陶器	徳利	瀬戸美濃	登7			6.4	底部のみ				
410	SD2001	I層	近世陶器	刷毛目皿	唐津					(10.1)	底部1/2		にぶい赤褐 / 灰白	
411	SD2001	I層	近世陶器	折縁輪禿鉢	瀬戸美濃	登7	(17.8)				口縁～体部/12		灰白	
412	SD2001	I層	近世陶器	磁器小瓶	瀬戸	登10～11				(3.8)	口縁部欠損		灰白	
413	SD2001	I層	近世陶器	片口	瀬戸美濃	登7	(16.3)				口縁～体部1/5		黄褐 / 灰白	
414	SD2001	I層	近世陶器	片口	美濃	登8	(16.0)				口縁部1/3		黄褐 / 灰黄	
415	SD2001	I層	近世陶器	片口	瀬戸美濃	登8	(11.0)		5.5	(5.4)	口縁～底部1/3		にぶい黄 / 灰白	
416	SD2001	I層	近世陶器	片口	美濃	登8	(11.2)				口縁部1/8		黄褐 / 浅黄	二次焼成
417	SD2001	I層	近世陶器	片口	美濃	登8	(16.0)				口縁部1/10		黄褐 / 灰白	
418	SD2001	I層	近世陶器	片口	瀬戸美濃	登7	(16.2)				口縁～体部1/6		にぶい黄 / 灰白	
419	SD2001	I層	近世陶器	練鉢	瀬戸美濃	登10	(25.2)				口縁部1/10		浅黄 / 灰白	
420	SD2001	I層	近世陶器	筒形香炉	美濃	登7					体部～底部1/6		褐 / 灰白	
421	SD2001	I層	近世陶器	擂鉢	志戸呂			(14.4)			底部1/8		赤灰	
422	SD2001	I層	近世陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登		(13.8)			胴部下～底部		にぶい赤褐	
423	SD2001	I層	近世陶器	灯明皿	美濃	登8～9	(7.4)				底部1/4		にぶい橙 / 暗オリーブ褐	
424	SD2001	I層	近世陶器	乗燭	瀬戸	登10～11	4.6	1.9	2.2		口縁1/2欠損	○		
425	SD2001	I層	近世陶器	瓶掛	瀬戸美濃	登8～9				(11.7)	底部1/4		緑釉 / 灰白	
426	SD2001	I層	近世陶器	土瓶	瀬戸美濃	登11	(10.5)				口縁～体部1/2		赤褐 / 灰白	
430	SD2001	I層	須恵器	坏蓋			(15.0)	(13.0)			口縁～天井部1/8		灰	
431	SD2001	I層	灰釉陶器	三足盤				(10.6)		(7.9)	底部1/5		灰白	
432	SD2001	I層	須恵器	坏蓋							天井部のみ		灰白	
433	SD2001	I層	須恵器	坏蓋			(13.9)				口縁部1/10		灰白	
434	SD2001	I層	須恵器	坏身				(7.2)			底部1/6		灰白	
435	SD2001	I層	須恵器	坏身				(9.5)			底部1/5		灰黄	
436	SD2001	I層	須恵器	壷・瓶類							口頸部	自然釉	灰白	
437	SD2001	I層	須恵器	高坏			基部径4.3				基部～脚部		灰白	
438	SD2001	I層	須恵器	短頸壷			(11.7)				口縁～頸部1/5	外面・自然釉	灰白	
439	SD2001	I層	須恵器	甕			(22.1)				口縁部1/6		灰白	
440	SD2001	I層	土師器	甕			(21.0)				口縁部1/12		にぶい黄橙	
441	SD2001	I層	土師器	鍋							把手のみ		浅黄	
442	SD2001	I層	土師器	鍋							把手のみ		にぶい黄褐	
443	SD2001	I層	土製品	土錘			長6.35	幅2.3					浅黄	
478	SA2001	構築土	須恵器	坏身			(16.2)	(13.4)	5.5		口縁～体部1/6		灰黄	
479	SA2001	構築土	須恵器	甕							底部のみ		灰白	
480	SA2001	構築土	土師器	坏			(16.6)				口縁部1/12		にぶい黄橙	赤彩
481	SA2001	構築土	土師器	甕			(23.2)				口縁部1/16		褐灰 / にぶい黄橙	
482	SA2001	構築土	山茶碗	小碗	渥美湖西	I－2				4.4	底部1/3		灰白	
484	SA2001	旧表土	須恵器	坏蓋			(14.6)				口縁～体部1/5		灰	
485	SA2001	旧表土	須恵器	坏蓋			(10.6)	(2.1)	4.45		口縁～底部1/8		灰	
486	SA2001	旧表土	須恵器	坏身			(11.3)				口縁～体部1/12		灰白	
487	SA2001	旧表土	須恵器	坏身			(11.7)	9.65	3.75		口縁～底部1/5		灰オリーブ	
488	SA2001	旧表土	須恵器	坏身				(9.7)			底部1/6		灰黄	
489	SA2001	旧表土	須恵器	坏身				(11.2)			底部1/6		灰黄	
490	SA2001	旧表土	土師器	坏身			(11.8)	(9.1)	3.25		口縁～底部1/14		浅黄橙	
491	SA2001	旧表土	土師器	坏身			(13.1)				口縁～体部1/12		浅黄橙	
492	SA2001	旧表土	土師器	碗			(10.9)	(6.0)	5.25		口縁～底部1/3		灰白	
493	SA2001	旧表土	土師器	甕			(15.7)				口縁部1/16		にぶい黄色	
494	SA2001	旧表土	土師器	甕							胴部～体部1/10		橙	
495	SA2001	旧表土	土師器	壷			(19.7)				口縁部1/10		浅黄橙	
496	SA2001	旧表土	土師器	鍋							把手のみ		浅黄橙	

３．溝

SD1001（図 78 ～ 91、図版 27・52・62・63・79・80）

１区から６区にかけて位置する大規模な溝である。SD1001 は、開削当初の溝（SD1001a）の埋没後に、新たな溝（SD1001b）が掘り直されており、時期の異なる２条の溝が重複して存在している。

溝はＬ字形の形態を呈しており、１区の西端から東へ約 120 ｍの地点において、南に向かって直角に

図 78　SD1001 実測図（１）

近いかたちで屈曲している。全体的には南または東に向かって傾斜しており、溝の底面は凹凸が激しく、細い溝状に深く抉れた部分が多数確認されている。また、埋土には全体的に砂が多く含まれており、砂層の堆積も認められる。これらの点は、恒常的に水流があったことを示しており、SD1001は水路として開削された溝である可能性が高い。なお、西側については、調査区外のため明らかになっていないが、位置関係から河川SR1001と接続しているものとみてよい。溝の西端がやや北側へ向かって屈曲し、SR1001と鋭角に接合していることからも、河川から水を引き込むことを意図して開削されたことを示していよう。

埋土は、大きく上・中・下の3層に分けられる。

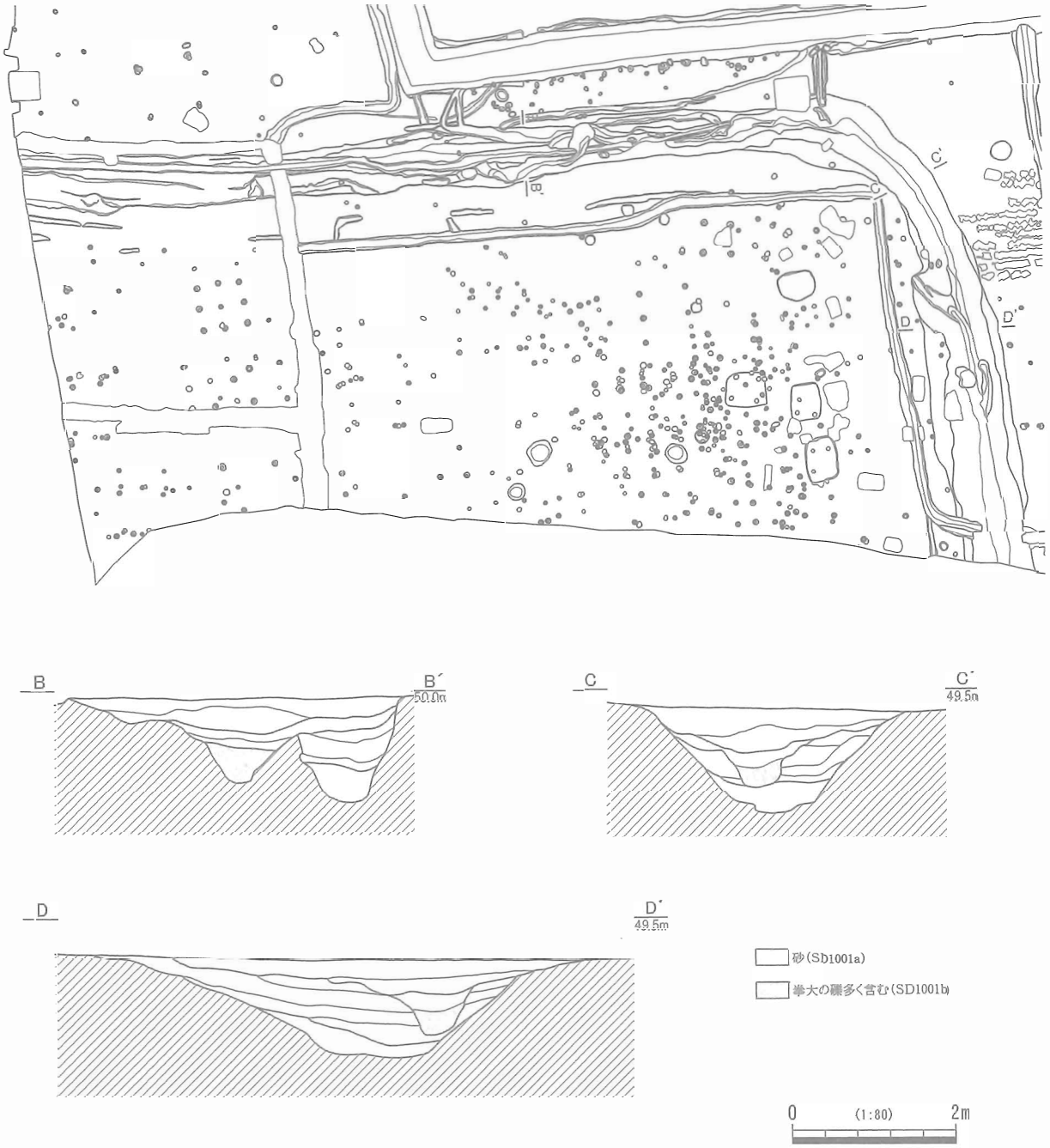


図79　SD1001実測図（2）

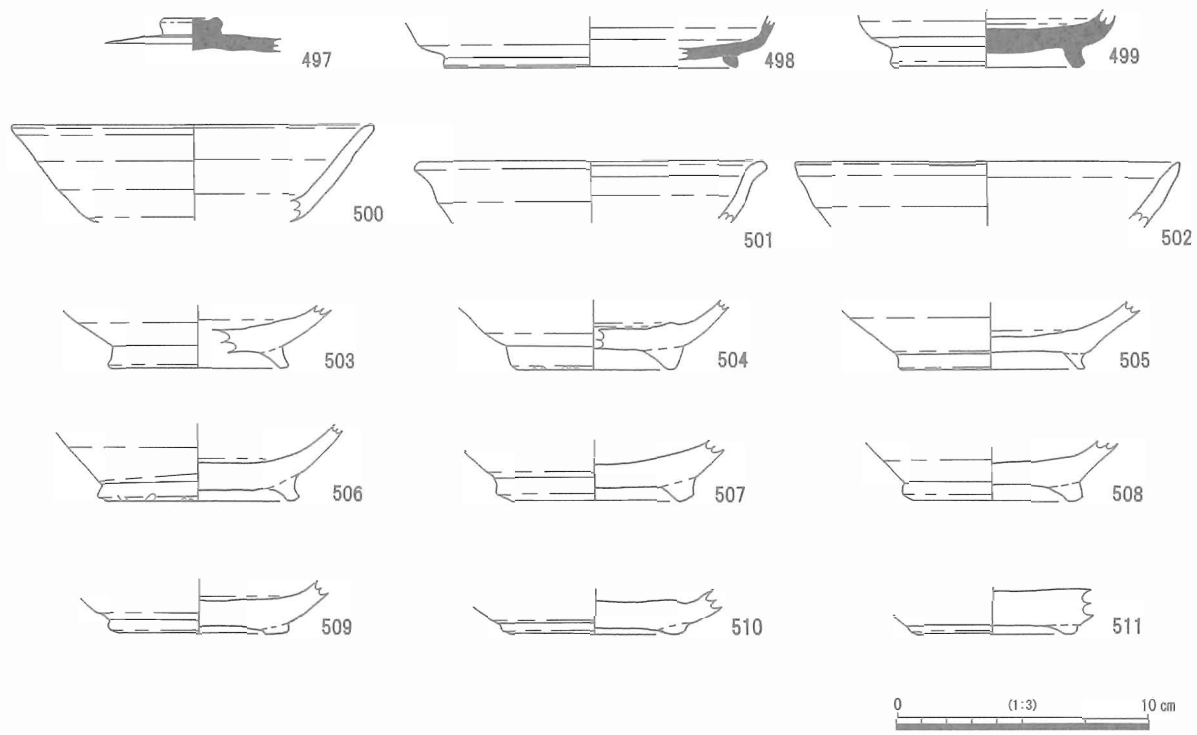


図 80　SD1001 下層出土遺物（１）

下層は、最下層の主に砂が堆積する層であり、場所によって差はあるが、概ね底面から 30 ㎝程度の厚さで堆積している。遺物としては、須恵器や山茶碗、陶器、磁器、内耳鍋などが出土している。

497 ～ 499 は須恵器である。図化したものは３点であるが、甕などを中心に一定量の出土が認められる。500 ～ 511 は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品で、Ⅰ期からⅢ期までみられるが、他の遺構と同様に、Ⅲ期のものがその大半を占めている。すべて破片資料であり、完形または全形の分かるような資料は出土していない。この須恵器と山茶碗は、明らかに周辺から混入した遺物である。

512 は瀬戸美濃産の天目茶碗で、古瀬戸後期のものである。513 は貿易陶磁である。白磁の小皿で、陶器質の胎土にやや黄みがかった釉薬が施されており、高台はアーチ状に抉られている。明代のものである。514 と 515 は渥美産の壺である。514 には弧状の刻線、515 には蓮弁文が施されている。516・517 は常滑産の製品である。516 は壺または甕、517 は 15 世紀代の片口鉢である。518 と 519 は古瀬戸の擂鉢で、口縁部付近は部分的に欠損してはいるものの、大半の破片が残っている。いずれも後Ⅳ期新段階のものである。520 は古志戸呂窯産の擂鉢である。軟質で土師質にちかい焼き上がりとなっており、518 や 519 と同様に欠損部が少ない。521 は土師質土器皿である。軟質で、比較的光景の大きい中型品である。下層において土師質土器皿は、小破片を含めてもごくわずかしか出土していない。

522 は伊勢型鍋である。523 ～ 531 は、くの字形内耳鍋であり、外面にハケ目調整を施すものと、ナデ調整のものとが確認できる。図化したもの以外にも、多量に出土している。532 と 533 は、内彎形内耳鍋である。下層の出土遺物全体でも、内彎形内耳鍋であることが分かる破片は、この２点のみであり、くの字形内耳鍋との数量の差は歴然としている。534 ～ 539 は羽付釜である。体部は屈曲部から斜め下方へ広がっており、なで肩の形状を呈しているものとみてよい。口縁部の形状は、丸く仕上げるものと、上方を強くなでるものがみられる。羽付釜については、図示したもの以外にも一定量の出土が認められ

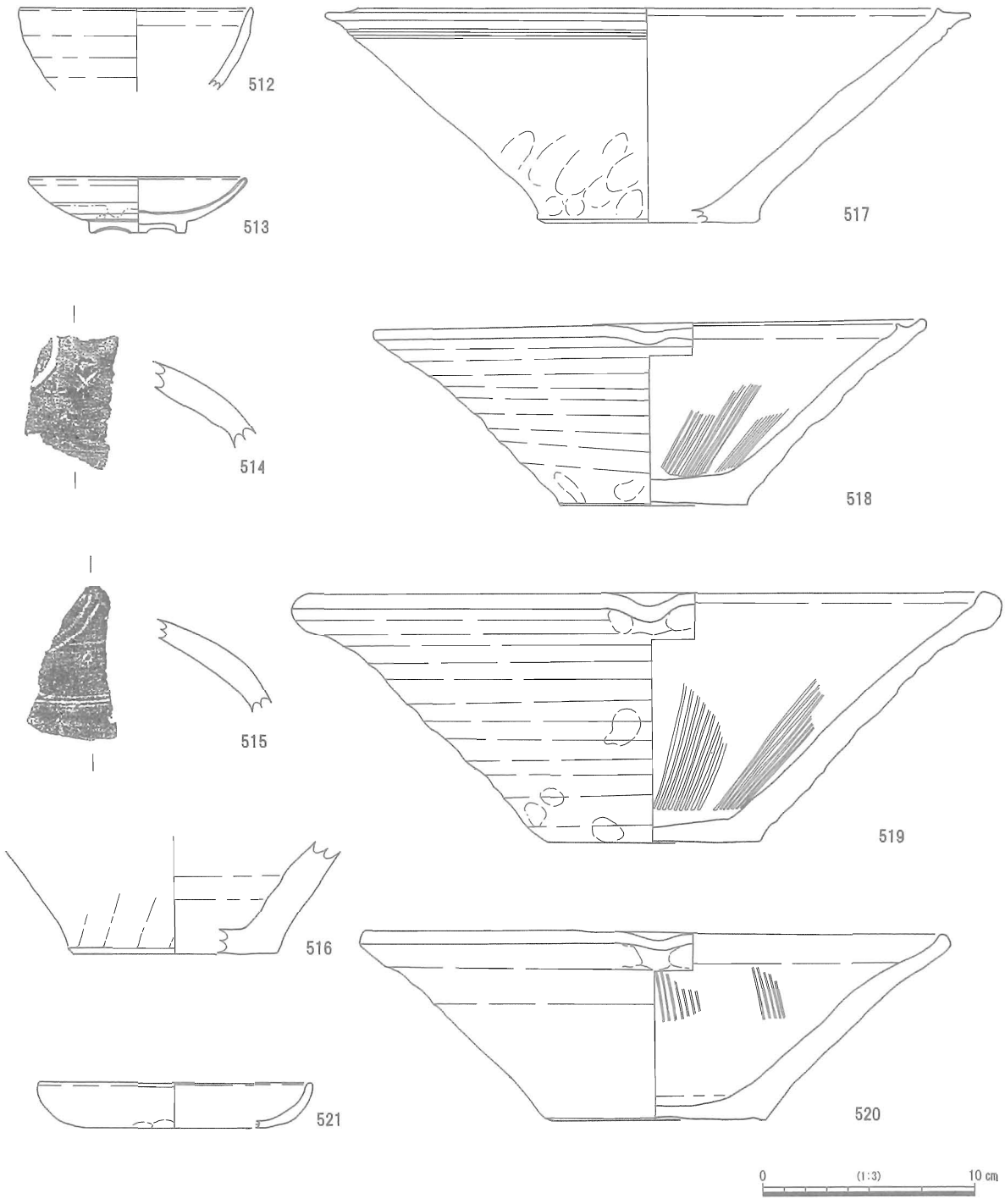


図 81　SD1001 下層出土遺物（2）

る。540 は鉄滓であり、いわゆる椀形滓の形状を呈している。化学分析の結果、鍛錬鍛冶滓で、始発原料は砂鉄の可能性が高いと推定されている。

SD1001 の下層は、周辺から流入した遺物が多く、水流による攪拌も受けているため、長期間の遺物が混在している状況にある。ただし、須恵器や山茶碗などの遺物を除くと、15 世紀から 16 世紀にかけての遺物にほぼ限られている。中でも残存状況のよい擂鉢など、15 世紀後半の遺物が比較的まとまって出土していることから、SD1001 は 15 世紀に開削された溝であると推測される。

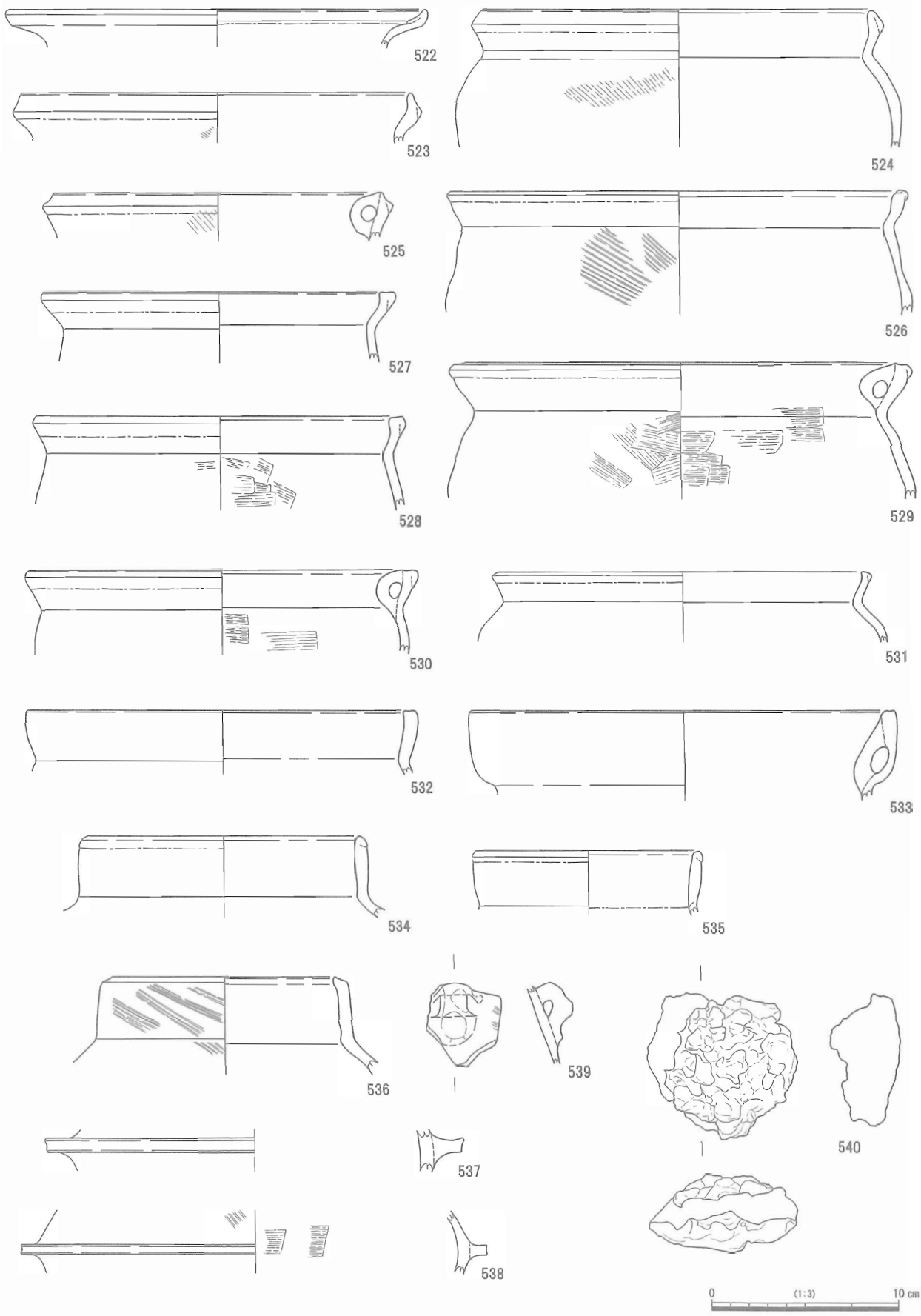


図 82　SD1001 下層出土遺物（3）

中層は、下層の上に 40 ～ 50 ㎝程の厚さで堆積している。主に暗褐色土が堆積する土層であり、この時期に水流が大きく減少していたことを示している。なお、中層には、埋没後に新しく掘削された溝（SD1001b）が一部到達しているが、調査時には中層出土遺物として取り上げられており、SD1001b に伴う遺物が一部混在してしまっている状況にある。

541 ～ 552 は須恵器である。須恵器に関しては、下層と同様に、図示した以外にも甕類を中心に多数出土している。553 と 554 は灰釉陶器、555 は土師器の甕である。

556 ～ 570 は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品で、558 はⅡ期のものであるが、他はすべてⅢ期のものである。図化したもの以外にも多量に出土しているが、すべて破片資料であり、完形品の出土は確認できない。古代の遺物や山茶碗については、周辺からの混入した遺物とみてよい。571 は瀬戸美濃産の擂鉢である。下層で出土している擂鉢と同じ、古瀬戸の後Ⅳ期新段階のものである。572 は瀬戸窯産の秉燭である。他の遺物とは年代が大きく降る 19 世紀のものであることから、中層に掘り込まれた新しい溝（SD1001b）に伴う遺物とみて間違いない。573 と 574 はロクロ成形の土師質土器皿である。橙褐色の色調を呈する軟質のものである。575 ～ 577 は非ロクロ成形の土師質土器皿である。

578 ～ 587 はくの字形内耳鍋で、下層と同様に図化したもの以外にも多数出土している。体部外面にハケ目調整を施すものと、ナデ調整を施すものの両者がみられる。内耳鍋としては内彎形のものも出土しているが、明確に判別できるものとしては、588 と 589 の２点のみである。この点も、下層における状況と共通したあり方を示しているといえる。

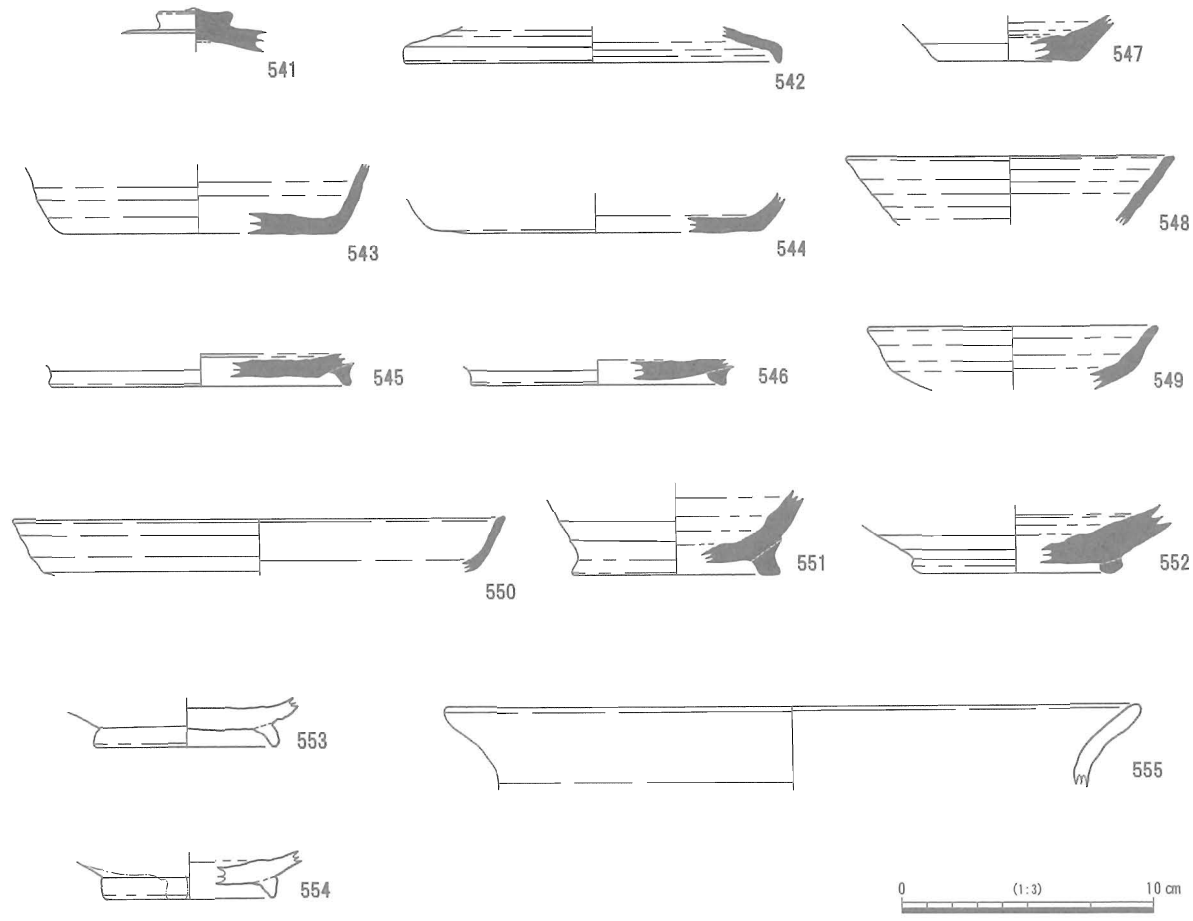


図 83　SD1001 中層出土遺物（１）

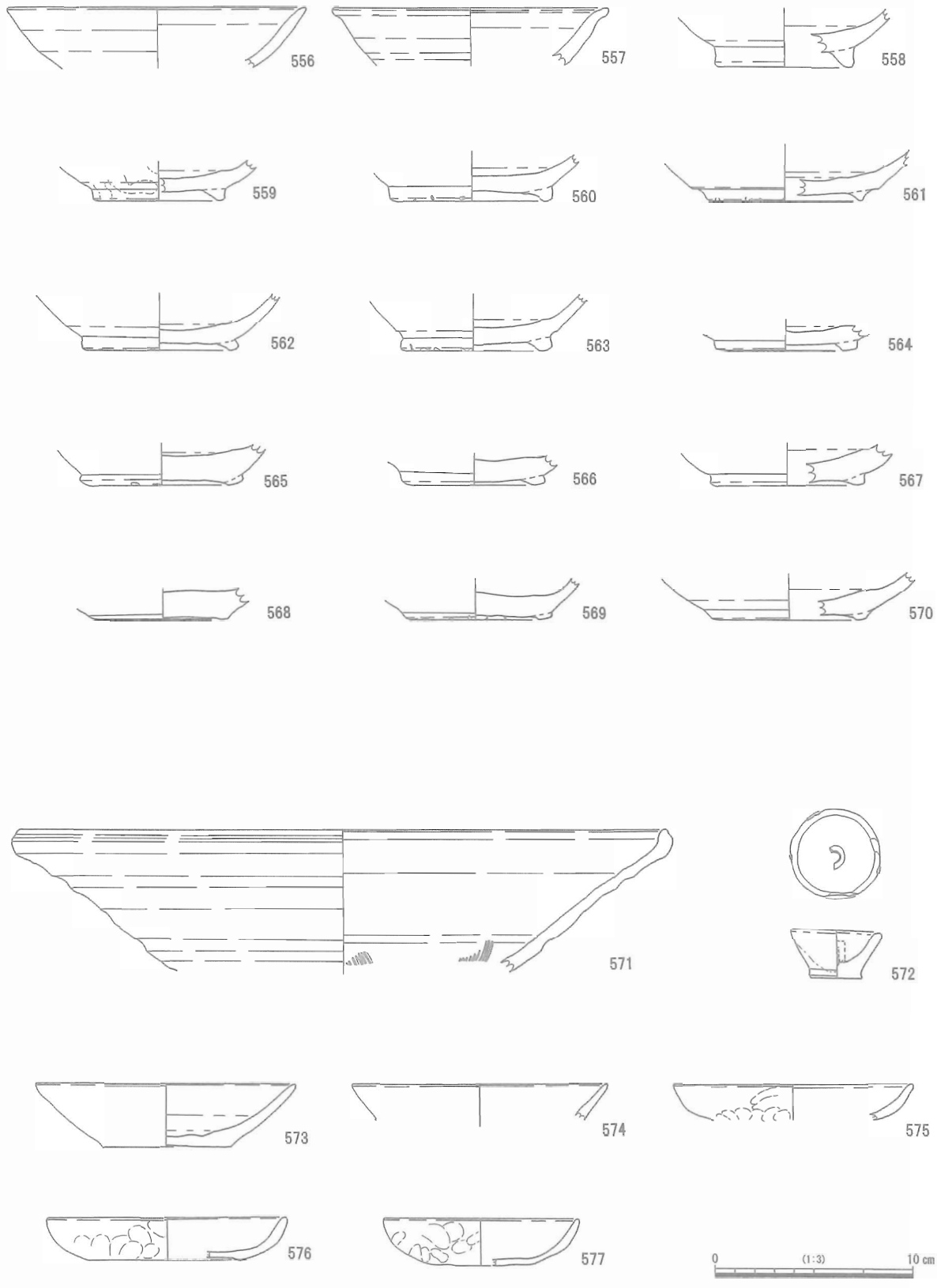


図 84　SD1001 中層出土遺物（2）

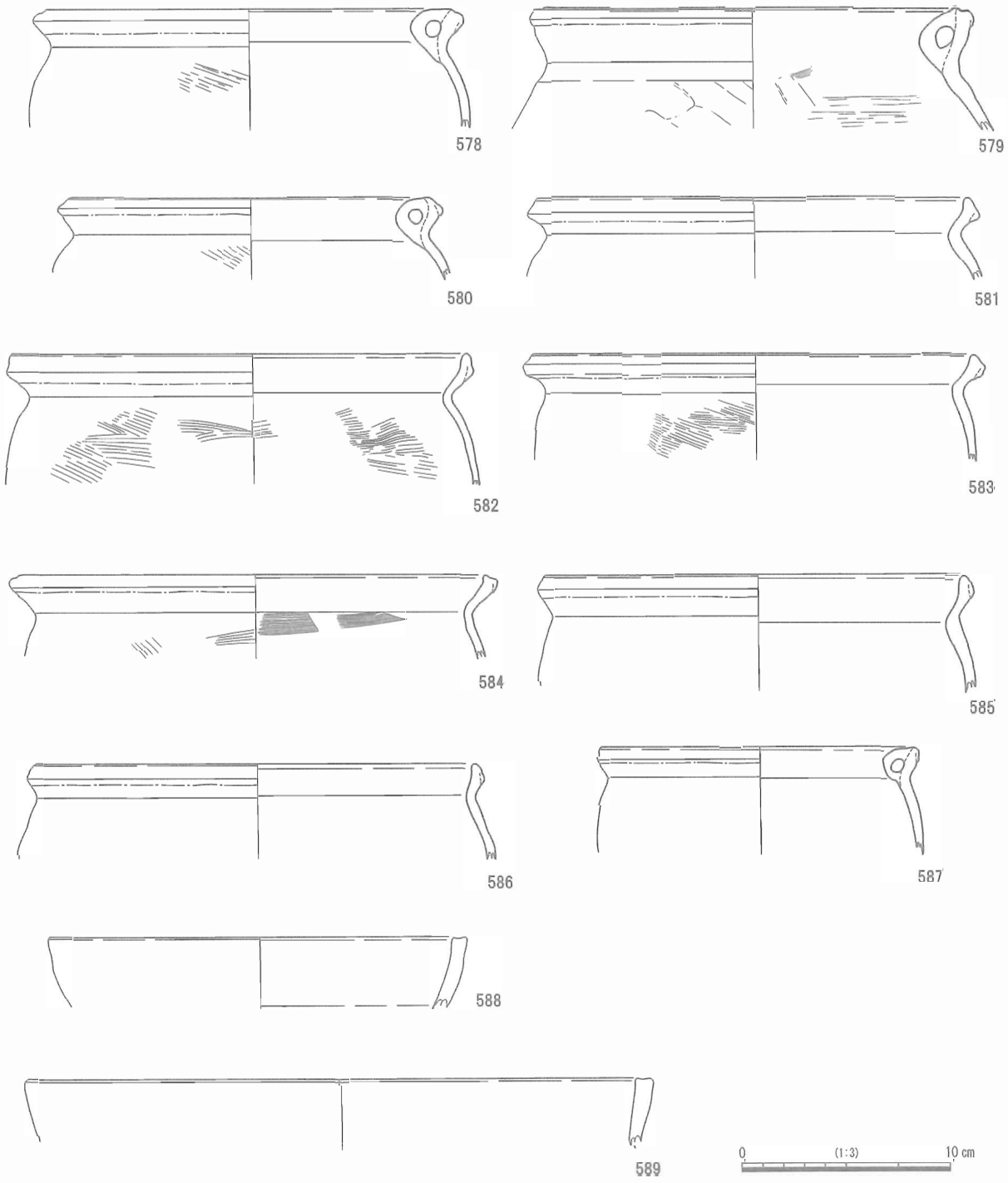


図 85　SD1001 中層出土遺物（３）

590 ～ 601 は羽付釜であり、いずれも体部はなで肩で、球形に近い形態を呈するものである。口縁部の形状は、丸く仕上げるものと、上方に強いナデ調整が施されるものとがみられる。体部外面の上半には、ハケ目調整が明瞭に残る。羽付釜に関しても、下層と同様に多数の出土が確認される。いずれも、16 世紀前半までの時期のものである。

このように、中層における遺物の構成や年代は、下層とほとんど差がない状況にあり、水流が減少し、

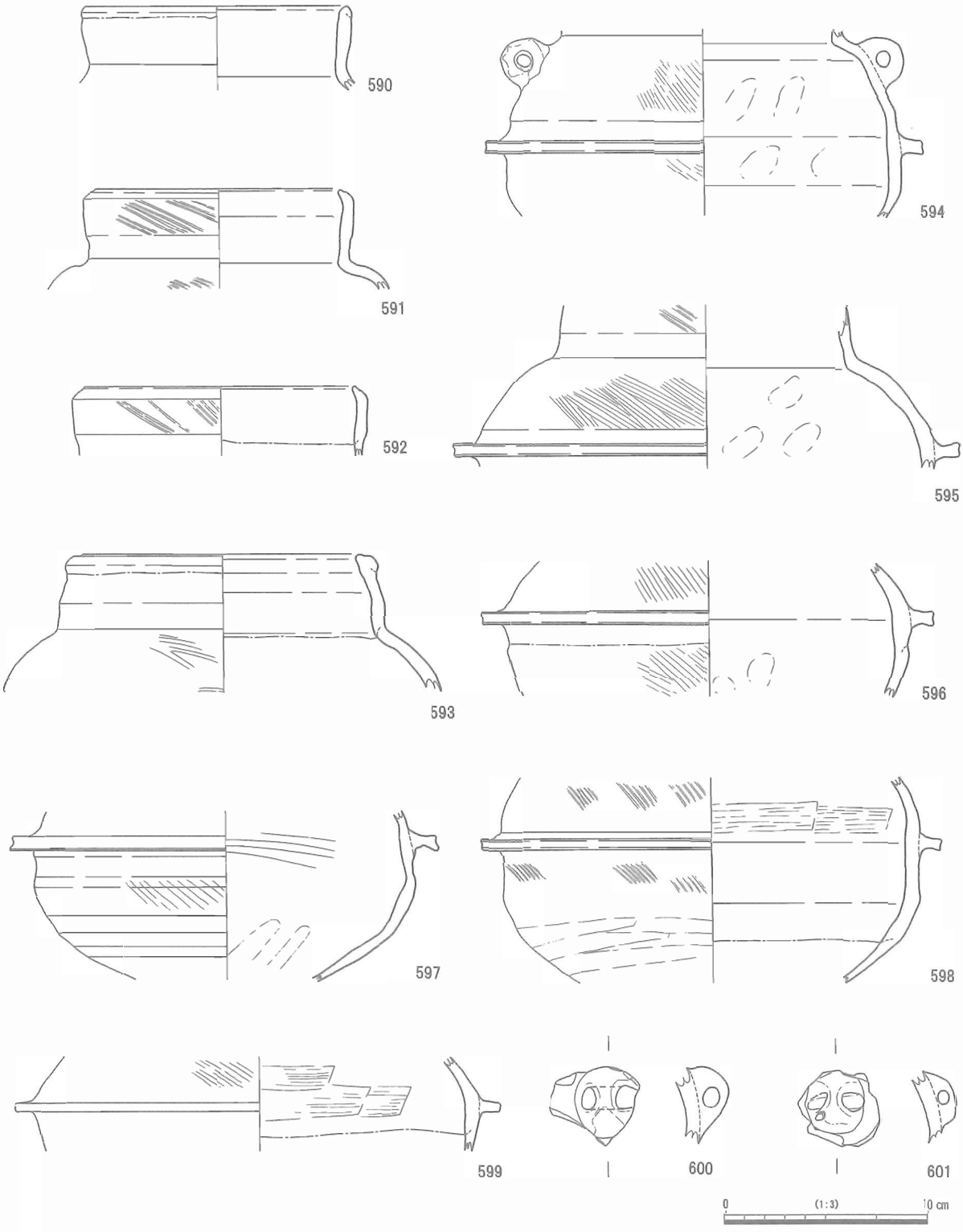


図86　SD1001 中層出土遺物（4）

水路としての機能が失われた後に、比較的短期間で埋没したことが伺える。内彎形内耳鍋の出土が少ないことなどからみて、SD1001a については、16 世紀中頃にはその大半が埋没し、浅い窪み状になっていたものと推測される。

上層は、暗褐色土を主体とする、検出面（地山面）から 40 ～ 50 ㎝程の深さまでの堆積土である。南北溝では SD1001a の最上層も一部含んではいるが、大半は重複する位置に新たに掘られた溝 SD1001b の埋土である。SD1001b の断面形状は、SD1001a の端から緩やかに下がった後、逆台形にさらに一段深くなる形状を呈している。一段深くなっている部分に限ると、SD1001b は幅約 80 ㎝・深さ 40 ～ 50 ㎝程の規模にとなっている。最下層には、小礫を多く含んだ土の堆積が確認されている。

602 ～ 612 は須恵器である。土器以外の遺物としては、円面硯（610）が出土している。被熱の痕跡が明瞭で、部分的に赤褐色に変色している。今回の調査によって中屋遺跡から出土した円面硯は、この 1 点のみである。613 と 614 は灰釉陶器である。613 の体部外面には、漆とみられる茶褐色の塗料の付着が認められる。

615 ～ 635 は山茶碗である。知多産とみられる 635 を除き、他はすべて渥美湖西産の製品である。Ⅱ期のものもみられるが、やはりⅢ期のものが大多数を占めている。636 ～ 640 は、山茶碗の小碗および小皿である。いずれも渥美湖西産の製品である。641 は知多産の片口鉢である。642 は貿易陶磁の青磁碗である。見込みには、片切り彫りによる文様が認められる。

643 は古瀬戸の平碗で、後Ⅳ期古段階のものである。644 ～ 646・649・651 は、瀬戸美濃産の製品である。644 は小中、645 と 656 は広東茶碗、649 は秉燭、651 は半胴である。これらは、いずれも 18 世紀後半から 19 世紀のものである。647 は肥前産の磁器である。磁器染付の小碗で、口縁部には雨降文が施されている。18 世紀前半のものである。648 は初山窯産の内禿皿である。653 は壺形の瓦質製品で

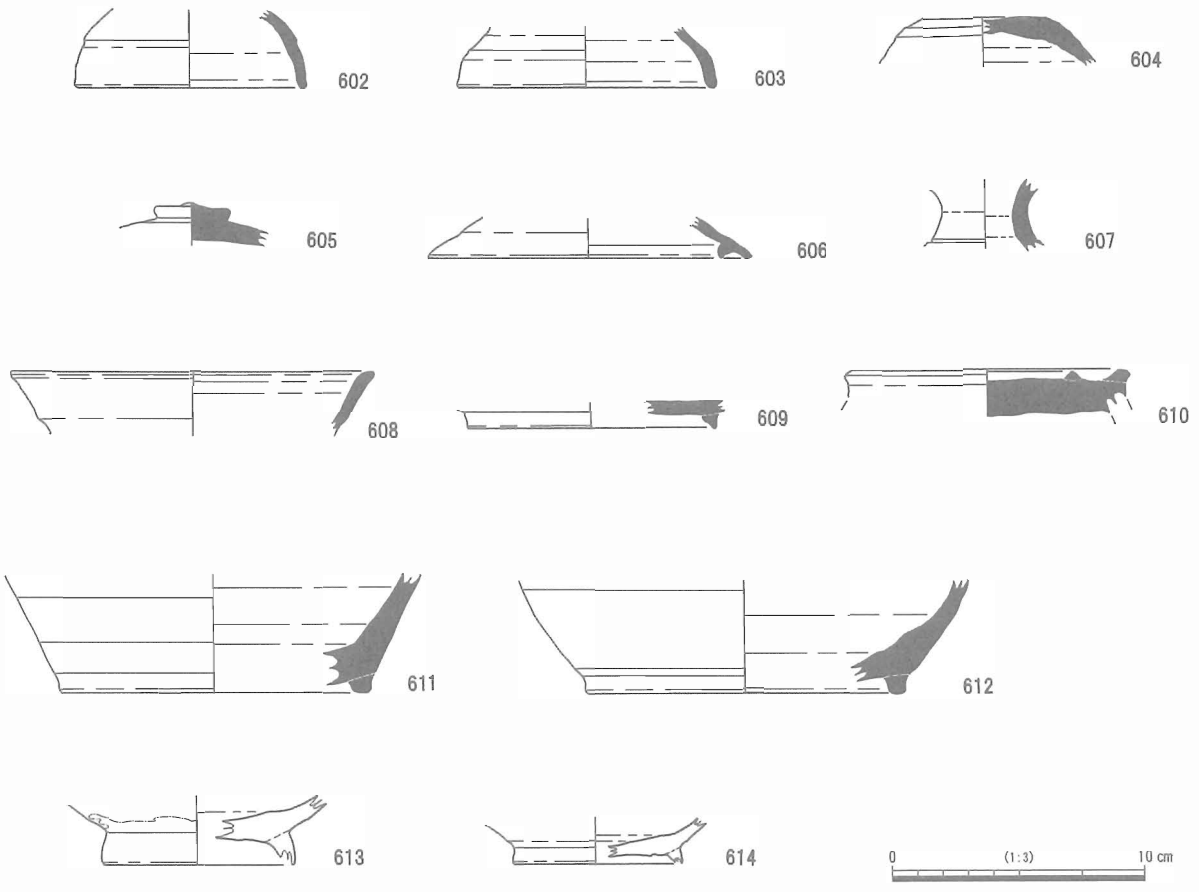


図 87　SD1001 上層出土遺物（1）

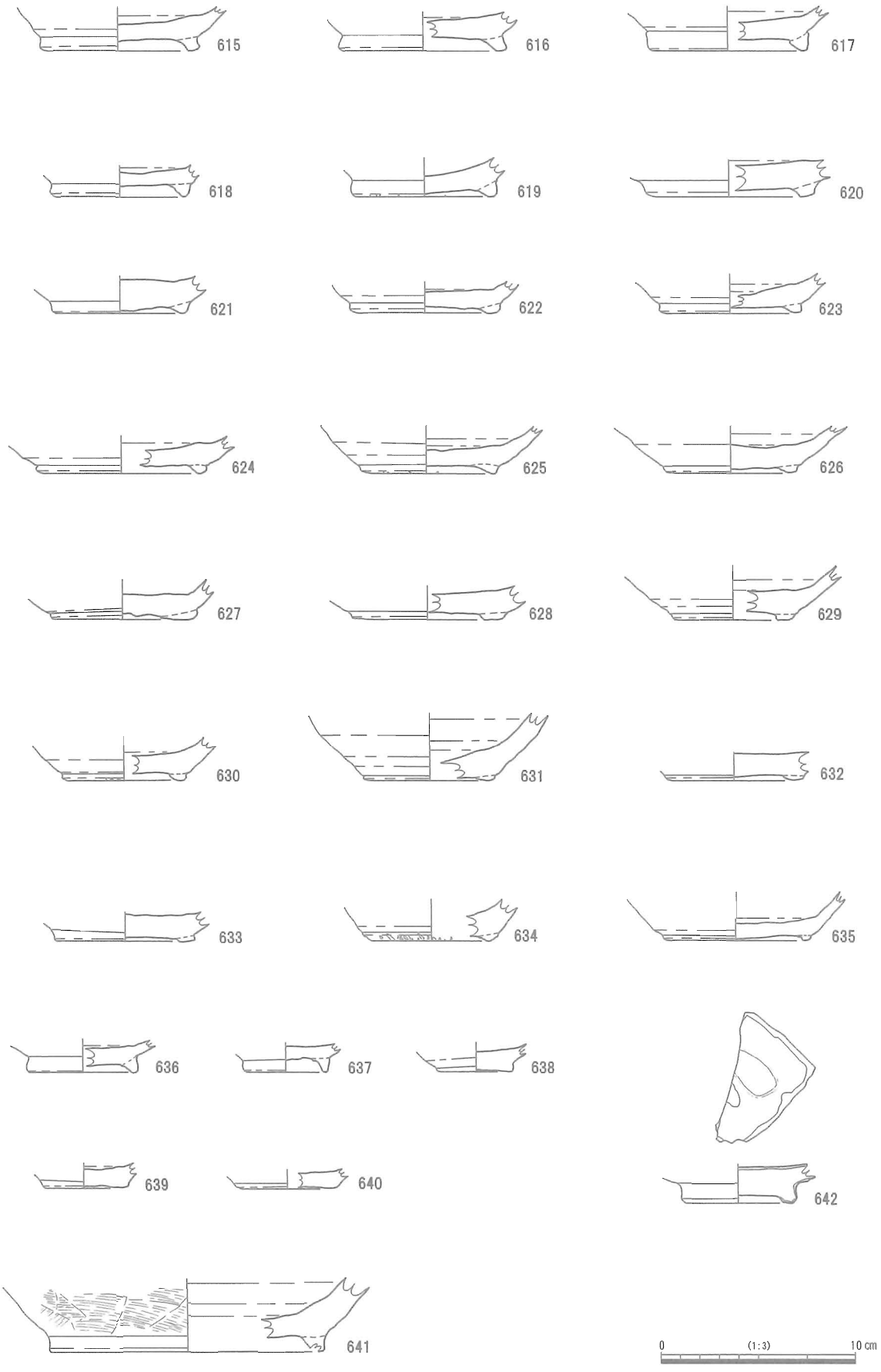


図88　SD1001 上層出土遺物（2）

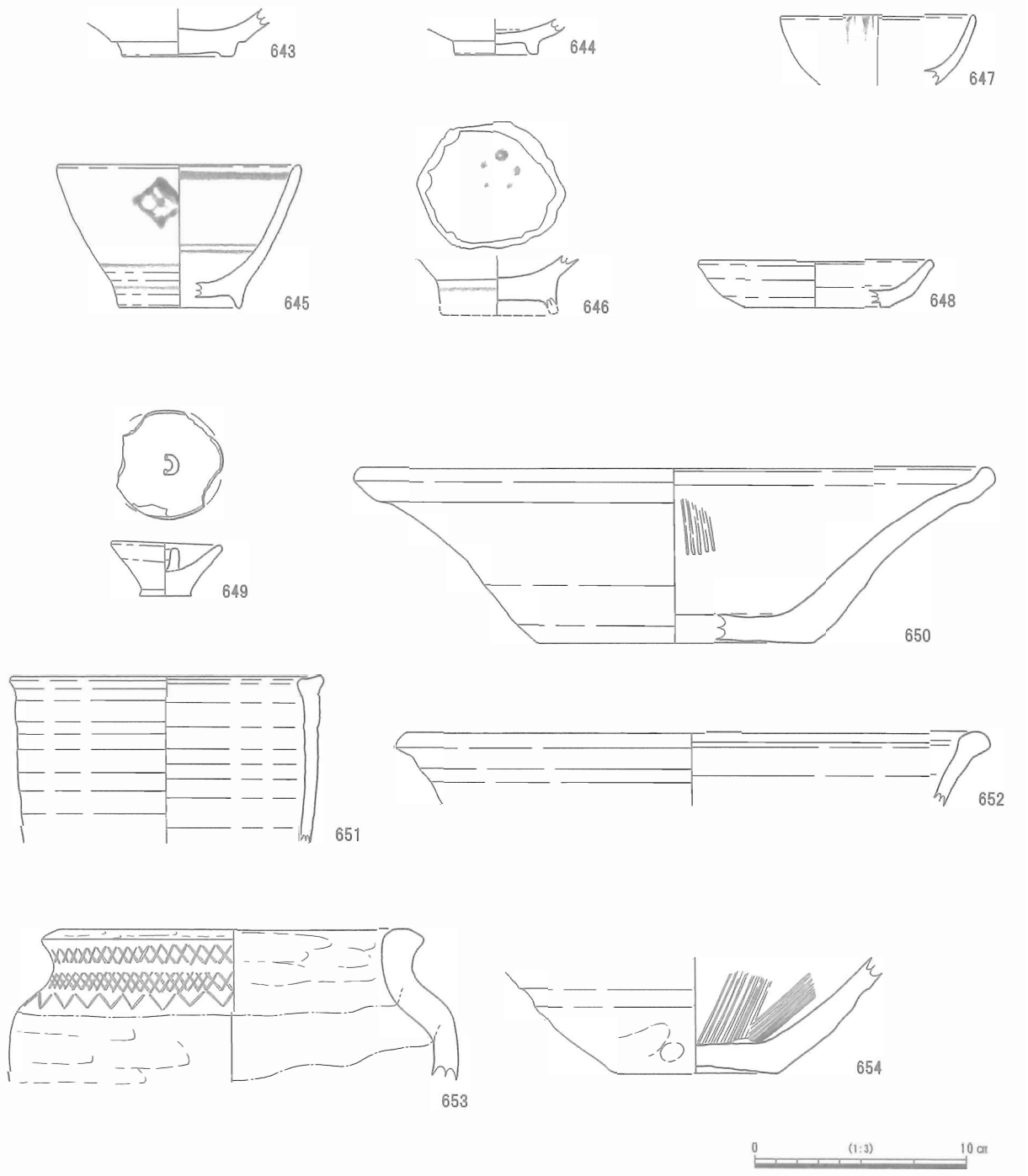


図 89　SD1001 上層出土遺物（3）

ある。口縁部には格子文と鋸歯文が線刻されており、赤彩も確認できる。650 は古志戸呂窯産の擂鉢である。非常に軟質のものとなっている。652 は瀬戸窯産の擂鉢で、19 世紀後半のものである。654 は、古瀬戸後Ⅳ期新段階の擂鉢である。

655 ～ 660 は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。下・中層に比べて、出土数は多い。655 と 660 は比較的硬質であるが、他はいずれも軟質のものである。661 はロクロ成形の土師質土器皿である。662 ～ 668 は内耳鍋である。下・中層と比べると、上層では内彎形内耳鍋が多く出土している。669 ～ 672 は羽付釜である。

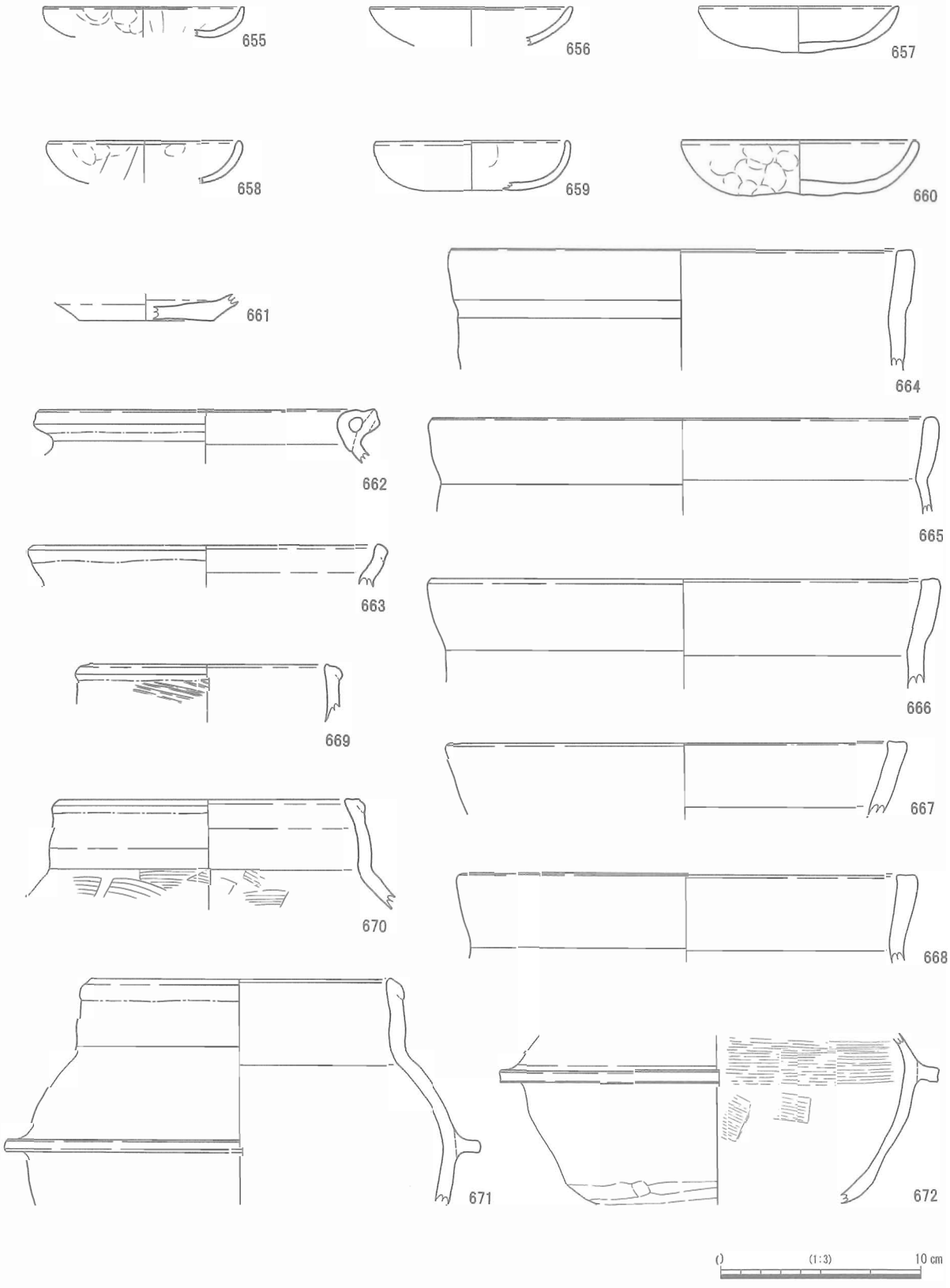


図90　SD1001 上層出土遺物（4）

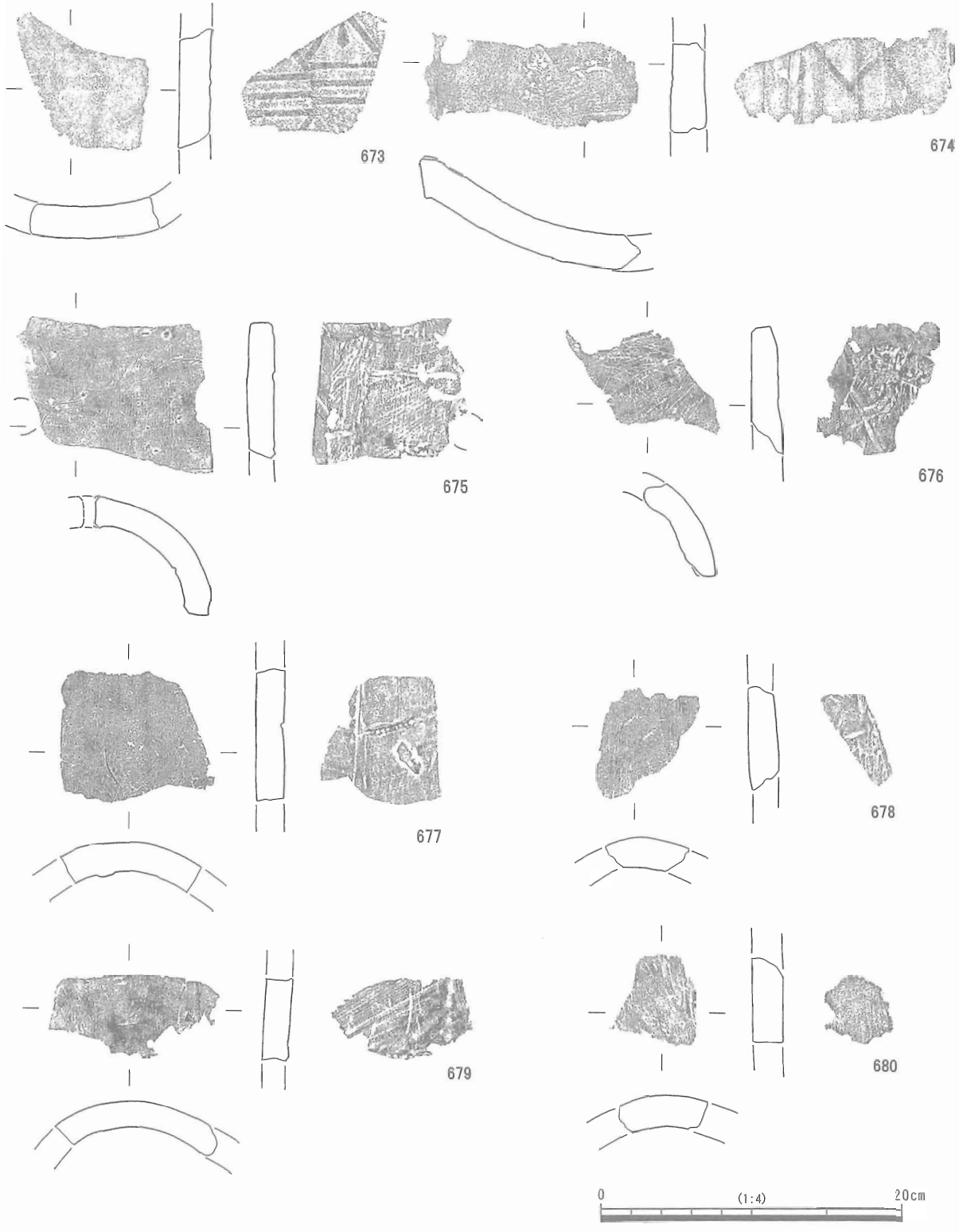


図91　SD1001 出土瓦

このように、上層出土遺物の下限年代は19世紀後半であり、当然これは、新たに掘られた溝SD1001bの下限年代を示している。近世のものに限ってみれば、18世紀後半以降の遺物が大半となっていることから、SD1001bは接続するSD6002やSD4001と同時期の、18世紀後半から19世紀にかけて機能していた溝であると推測される。

また、SD1001からは、土器や陶磁器以外に、瓦も出土している。これらの瓦は、大溝SD2001などで出土しているものと同じ特徴を有しており、中世の瓦とみて間違いない。

673と674は平瓦である。673は、凸面に縦長斜格子＋横線の叩き目がみられ、凹凸面両面に離れ砂が付着している。凹面には叩き目の転写が明瞭に認められる。674の凸面の叩き目は、ナデ調整が施されているため不明瞭であるが、縦長斜格子がわずかに確認できる。凹凸両面に離れ砂が付着している。２点ともに上層から出土している。675～680は丸瓦である。675と676は狭端部の破片である。675は中層から、676は下層から出土しているが、676については出土位置からSD1001bに伴う可能性が高いと推定される。いずれも、凸面にはナデ調整が施され、凹面には布目と吊り紐痕がみられる。63には、狭端から７cmの場所に釘穴が穿たれている。677～680は端部の残らない破片であり、679は上層から、677・678・680は下層から出土している。678と680には、表面に煤の付着が認められる。

なお、図化したもの以外の遺物としては、最上層から桟瓦も出土している。この地域の村落における桟瓦の普及時期については、桟瓦自体が遺物として扱われることが稀なこともあり、いまだ不明な点が多い。中屋遺跡においては、遺構としては認識できないが、少なくとも19世紀後半頃までには、桟瓦葺きの建物が存在していたことがわかる。

以上のように、SD1001は、時期の異なる二つの溝（SD1001a･SD1001b）が重複している。SD1001aは、西側の河川SR1001から水を取り込んだ、水路とみられる大規模な溝であり、主に15～16世紀に機能している。SD1001bは、SD1001aの埋没後、おそらくは浅い窪みとなっていた場所に、新たに掘られた区画溝である。周囲の他の区画溝と同様に、18世紀後半から19世紀にかけて機能していたものとみられる。

SD1008（図78・92・93、図版29）

１区に位置する溝で、東西溝と南北溝がＴ字形に連結している。場所によってやや異なるが、幅は平均80cm・深さは約50cmの規模である。土層断面（図78）から、SD1001の埋没後に掘られていることが分かる。東・西・南側は調査区外へと続いているが、５・６区では検出されていない。ただし東側の６区では宅地の擁壁による攪乱が延長線上に位置しており、ほぼ同じ位置に溝が続いていた可能性が高いと推測される。

遺物は比較的豊富に出土している。681～683・686は瀬戸美濃製品である。681と682は17世紀後半の丸碗、683は18世紀後半の尾呂茶碗、686は19世紀前半の筒形湯呑である。684と685は、肥前窯産の磁器染付の皿である。684には、見込みにコンニャク判の五弁花、外裏に崩れた渦福文がみられる。ともに18世紀後半のものである。687は19世紀の瀬戸窯産の火鉢である。688は瓦質の火鉢である。浅い筒形のもので、体部にある２本の沈線の間に菊花文がスタンプされている。689は19世紀の瀬戸窯産の擂鉢である。690も擂鉢で、17世紀の志戸呂窯産の製品である。

出土した遺物の年代は、周辺から流入した遺物も含まれているためやや幅がみられるが、SD1001の埋没後に堆積した土層を掘り込んでいることや、18世紀後半から19世紀の遺物が大半を占めていることから、SD1008は主に18世紀後半から19世紀に機能していた溝であると推測される。

SD1010・1011（図78・92・93）

SD1008に隣接する溝である。SD1010と1011はSD1008に、そしてSD1011はSD1010に切られていることが確認されている。SD1010は1区を東西に横断して、西側でSD1008に接している。SD1008の東端とはほぼ一直線上になることから、SD1010を一部やや北側にずらして掘り直した溝が、SD1008であると推測される。SD1011は、深い部分でも10㎝程度と浅いため、部分的に確認されている程度である。1区では東西約9ｍの長さで確認されており、未調査部分を挟んだ6区でも1ｍ程ではあるが、続きとみられる部分が検出されている。

遺物については、SD1010からわずかに出土している程度である。691は土師質土器皿で、比較的硬質のものである。図化できたのはこの1点のみであるが、他に古瀬戸後期とみられる盤類や内耳鍋の破片が出土している。

SD1010は、SD1001の埋没後に設けられていることから、16世紀の後半以降のものであることは確実である。ただし、西側の溝の位置を踏襲する形でSD1008が掘られていることを考慮すると、さほど年代が離れているとは考えにくい。遺物が乏しいため、厳密な年代については明確にし得ないが、SD1008が掘られる直前の18世紀前半頃までは機能していた可能性が高い。掘られた年代も、これに近い時期であると推測される。SD1011は、土層断面（図78）をみるとSD1010とは掘り込み面が1層異なっており、年代がやや離れていることがわかる。遺物が出土していないため正確な年代については不明であるが、16世紀から17世紀頃のものであろうか。

SD1013（図92・93）

SD1010と重複する形で検出されている溝状遺構である。深さは10㎝程度と浅く、SD1010に切られている。L字形に近い形で屈曲しており、東西と南北方向に約2ｍの長さで検出されている。

遺物としては、内耳鍋が出土している。692と693はくの字形内耳鍋である。692は、体部外面はナデ調整、内面はハケ目調整が施されており、非常に薄手のつくりとなっている。693は表面の摩滅が著

図92　SD1008・1010・1011・1013実測図

しいが、体部外面にハケ目調整がみられる。図化したもの以外にも破片が出土しているが、口縁部の形状が判別できるものは、いずれもくの字形内耳鍋である。年代的にやや不明瞭な部分はあるが、概ね16世紀代の遺構とみてよいであろう。

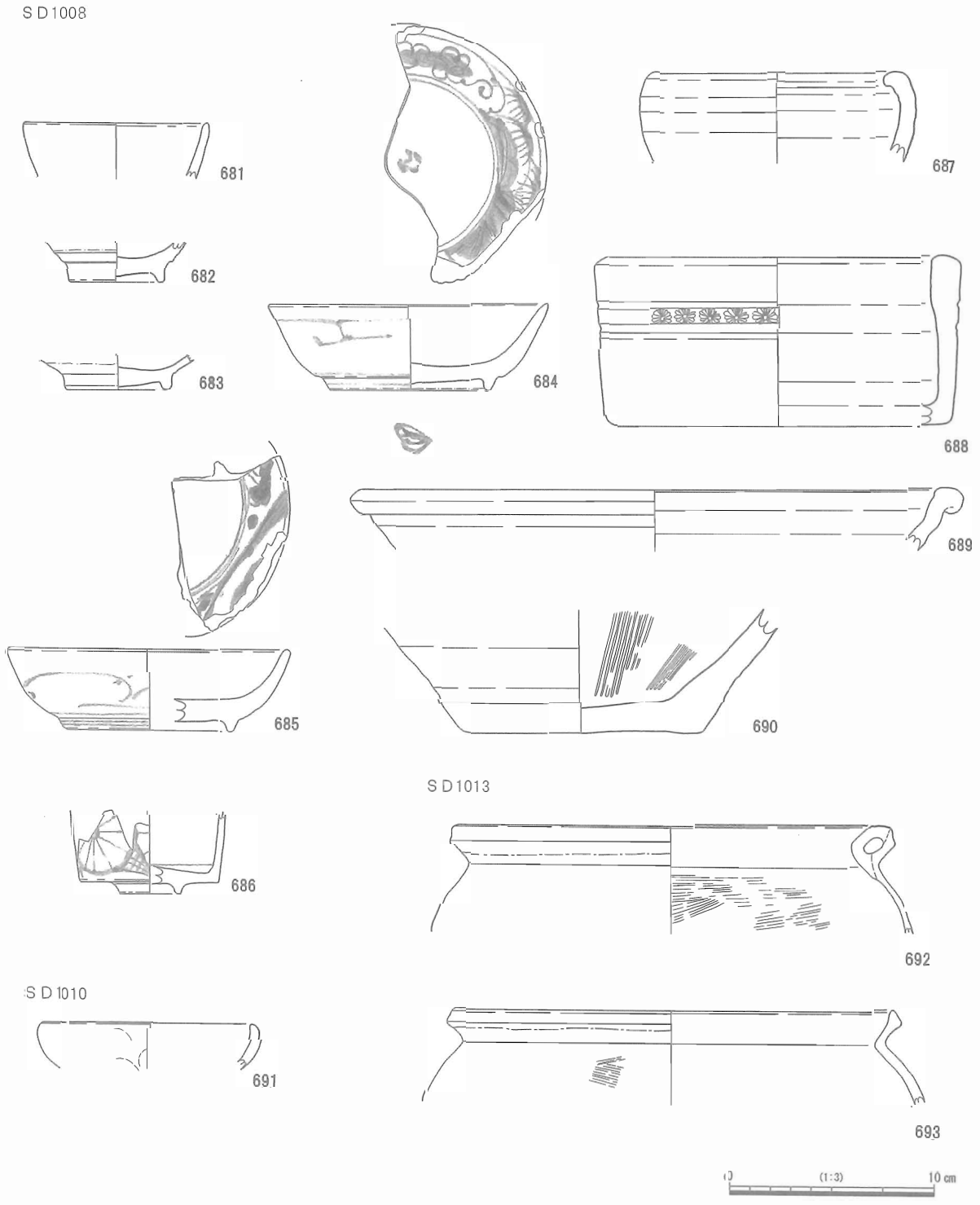


図 93　SD1008・1010・1013 出土遺物

SD1003（図 94）

1 区の北西隅に位置する溝である。SD1003 は、幅 40 ㎝・深さ 10 ㎝の小規模な溝で、南北に約 3 m の長さで検出されており、北側は調査区外へと続いている。SD1003 から出土した遺物は、土師質土器皿（694）の小片 1 点のみである。694 は復元径が 8.4 ㎝と小型で、薄手のつくりとなっている。

遺構の年代を特定することは困難であるが、土師質土器皿がいずれも比較的硬質のものであることなどから、中世後期から近世の溝であると推測される。

SD1004（図 94）

SD1004 は、SD1003 の約 2.5 m東側に位置する溝である。遺構の残存状況はよくなく一部切れてはいるが、L 字形に掘られた溝とみられる。長さは東西約 4.5 m・南北約 5 mで、深さ約 5 ㎝と底部がわずかに残存する程度である。

埋土からは、土師質土器皿や内耳鍋などが出土している。695 は土師質土器皿であり、中型でやや厚手のつくりのものである。この他に内耳鍋や土師質土器皿が数点出土しているが、いずれも図化できない小片である。

出土遺物が乏しいため、遺構の年代を特定することは困難であるが、土師質土器皿がいずれも比較的硬質のものであることなどから、SD1003 と同様に SD1004 は中世後期から近世の溝であると推測される。

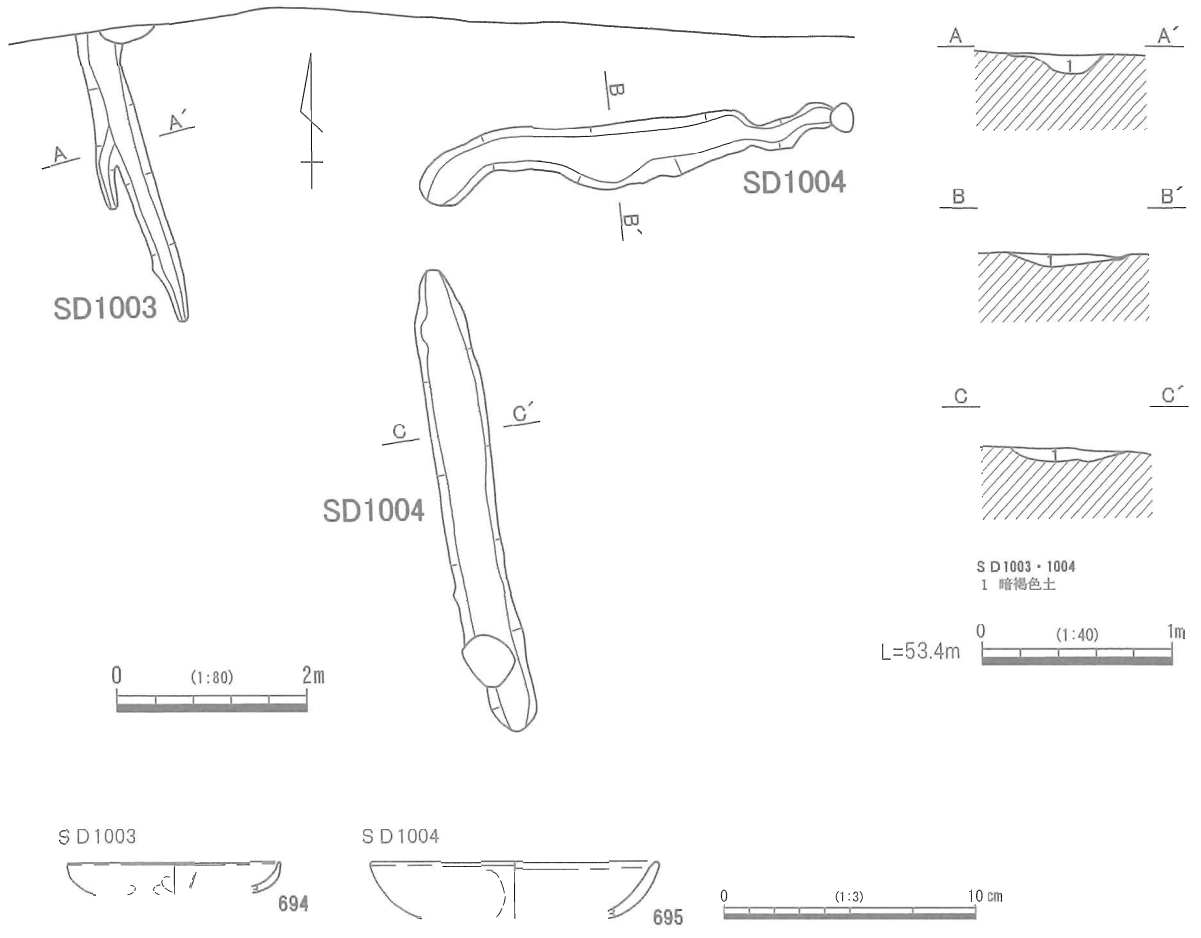


図 94　SD1003・1004 実測図、出土遺物

SD2003（図 95・96、図版４・29）

SD2003 は、大溝 SD2001 の 7.2 ～８m内側に設けられている溝である。残存状態が場所によって異なるが、幅平均 1.2 m・深さ 40 cmの規模で、総延長にして 86 m検出されている。大溝 SD2001 に平行するかたちで掘られているが、北側では一部北東に向かって屈曲する部分が認められる。東側は SD2004 によって失われているが、東端において北に屈曲する様子が確認されていることから、SD2004 と重複する場所に溝が巡っていたものと推測される。

遺物としては、土師質土器皿や内耳鍋などが出土している。697 ～ 701 は、非ロクロ成形の土師質土器皿で、比較的硬質のものである。口縁部にヨコナデ調整はみられない。702 ～ 705 は、内彎形内耳鍋である。他に、混入遺物ではあるが、古瀬戸の平碗（696）も１点出土している。これらの遺物から、SD2003 は 17 世紀頃にはほぼ埋没していたものと推測される。

SD2003 は、大溝 SD2001 に平行する点や溝が掘られた位置などから、当時残存していた土塁の裾に巡らされていた可能性が高く、この頃までは土塁がある程度の幅を持って残存していたものと推測される。

SD2004（図 95・96、図版４・29）

大溝 SD2001 と SD2003 の間に位置し、東西溝の両端が北へ向かって曲がるコの字形の溝である。西側南北溝については、南西隅から北へ直進する SD2004a の埋没後、西へ３m程の位置に SD2004b が新たに掘られている。東西溝および東側南北溝は、SD2004b に伴う溝であり深さも共通する。土層断面

図 95　２・４区 SD 実測図・断面図

にも切り合い関係が認められないことからみて、SD2004a 段階の東西溝と東側南北溝は、ほぼ同じ位置を掘り下げて新たな溝が設けられたため、失われたものと推測される。

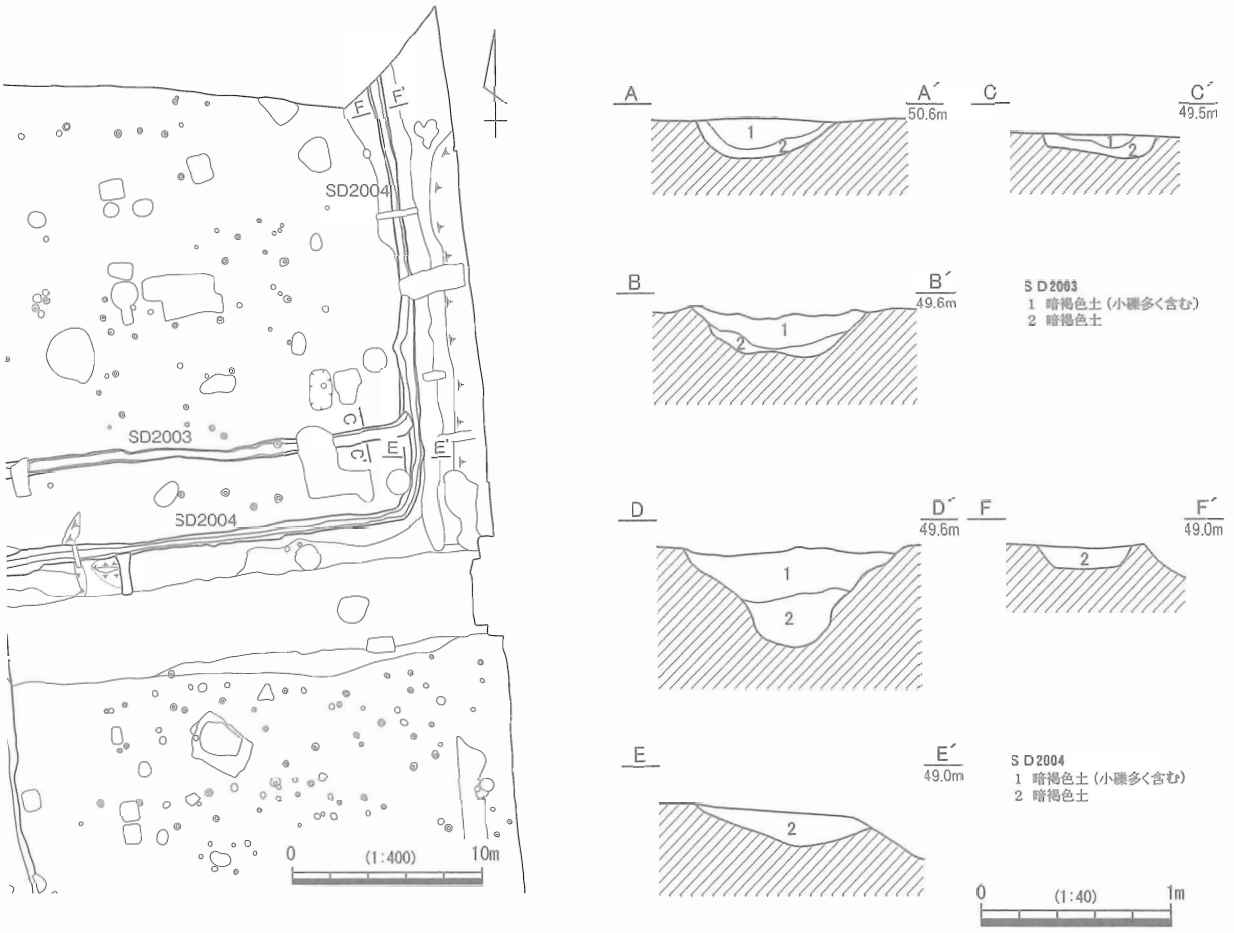
遺物としては、陶磁器類や土師質土器皿などが出土しているが、いずれも SD2004b 段階の溝に伴うものである。706 ～ 712 は土師質土器皿である。非ロクロ成形のもので、いずれも口径８～９cmの小型品である。713 は肥前の磁器染付の碗である。714 ～ 717 は瀬戸窯産の製品で、714 は小中、715 は秉燭、716 と 717 は擂鉢である。これらの遺物から、SD2004b は 18 世紀から 19 世紀頃まで機能していたことがわかる。SD2004a については、遺物が出土していないため明確でないが、SD2003 の付け替えとみられることから、概ね 17 世紀から 18 世紀にかけての溝と推測される。南面土塁については、この頃ほとんど高さを失っていたとみてよいであろう。

SD2005（図 95、図版４）

SD2004 の東側南北溝から、約 20 m東に位置する南北溝である。幅は約 40 cm、深さは平均 20 cm程であるが、北に向かって徐々に浅くなる。南北に約 12 m検出されており、南端は SD2004 に取り付く。SD2003 との切り合い関係については、記録がなく不明である。遺物は出土していないが、SD2004 に取り付くことから、これと同時期の溝である可能性が高い。

SD2006（図 95）

大溝 SD2001 の埋没後、西辺大溝の西端に沿って掘られている溝である。大溝 SD2001 の南西隅付近



で西に曲がり、10ｍ程でさらに南に向きを変える。その先は攪乱によって失われているが、後述のように同時期の溝であるSD6002もこの攪乱に取り付いていることから、現状では宅地の擁壁の基礎によって破壊されているが、ほぼ同じ位置に南北溝が続いていた可能性が高い。幅は約１ｍで、深さは平均50㎝程残存し、南へ向かって傾斜している。

大溝内において面的に把握されていないこともあり、SD2006に伴うことが明確な遺物は、19世紀の緑釉土瓶とみられる破片１点のみである。明確な遺物は乏しいが、後述のSD2014と同様に、18世紀から19世紀にかけての溝であると推測される。

SD2011（図95・97、図版４）

大溝SD2001から南へ約３ｍに位置する、幅約90㎝・深さ約50㎝の東西溝である。溝は中央でやや北へ曲がり、東半部は大溝SD2001の南端に沿って掘られている。大溝内については、面的に検出されていないため不明な点も多いが、SD4001より東の土層では確認できないことから、SD2014と同様にSD4001に取り付くものと推測される。

明確な遺物としては、山茶碗（723）や土師質土器皿（724）、くの字形内耳鍋（725）、古志戸呂窯産の擂鉢（726）などが出土している。また、図化したもの以外では、型紙刷りの染付など近代の陶磁器も出土しており、一部近代まで残っていたことがわかる。明確な遺物は乏しいが、さほど長期間使用されていたとは考えにくく、主に18世紀から19世紀頃に機能した溝であると推測される。

SD2013（図95・96、図版４・29）

大溝SD2001とSD1001の間に検出されている南北溝である。幅約１ｍ・深さ約50㎝の規模で、南北に約4.4ｍ検出されている。北側ではSD2011、南側では前述のSD1001bに接合する。

遺物は少ないが、瀬戸美濃産の陶磁器が出土している。718は磁器染付の端反り碗、719は尾呂茶碗、720は片口の高台部、721と722は擂鉢である。これらは、いずれも18世紀から19世紀にかけてのものである。SD2013の年代についても、同様の時期とみてよい。

SD2014（図36・38・95・97、図版29）

大溝SD2001の埋土に掘り込まれている溝である。SD2001の西辺と南辺の内側に、ほぼ沿うような形で掘られており、４区との境界付近までその存在が確認されている。面的には確認できていないが、恐らくは４区との境界に通る溝SD4001に取り付くものと推測される。幅約15㎝・深さ約10㎝の規模で、断面は逆台形（図36・38）となっている。

遺物は中世・近世のものに加えて、一部近代のものまで出土している。727～729は山茶碗、734は常滑産の甕、735は古志戸呂窯産の擂鉢、741と742は丸瓦である。これらは、明らかにⅠ層から混入した中世の遺物である。730・731は非ロクロ成形の土師質土器皿である。比較的硬質で、薄手のつくりとなっている。中世末から近世にかけてのものであろう。736～739は瀬戸美濃窯産の製品である。739は擂鉢、737と738は丸碗で、いずれも18世紀のものである。739は灯明皿で、19世紀後半のものである。740は18世紀の肥前の香炉である。743は鉄鎌である。基部が欠損しているが、恐らくは有茎式の曲刃鎌であろう。この他に、図化できない小片ではあるが、近代の磁器が出土している。

先述のように、大溝SD2001のⅠ層として取り上げられている近世の遺物の多くは、このSD2014とSD2006に伴う遺物であると推測される。これらを含めて考えると、SD2014の遺物は、18世紀から19世紀にかけてのものが大半を占めている。SD2014は、主に18世紀から19世紀に機能し、一部近代まで名残として残っていたものと推測される。

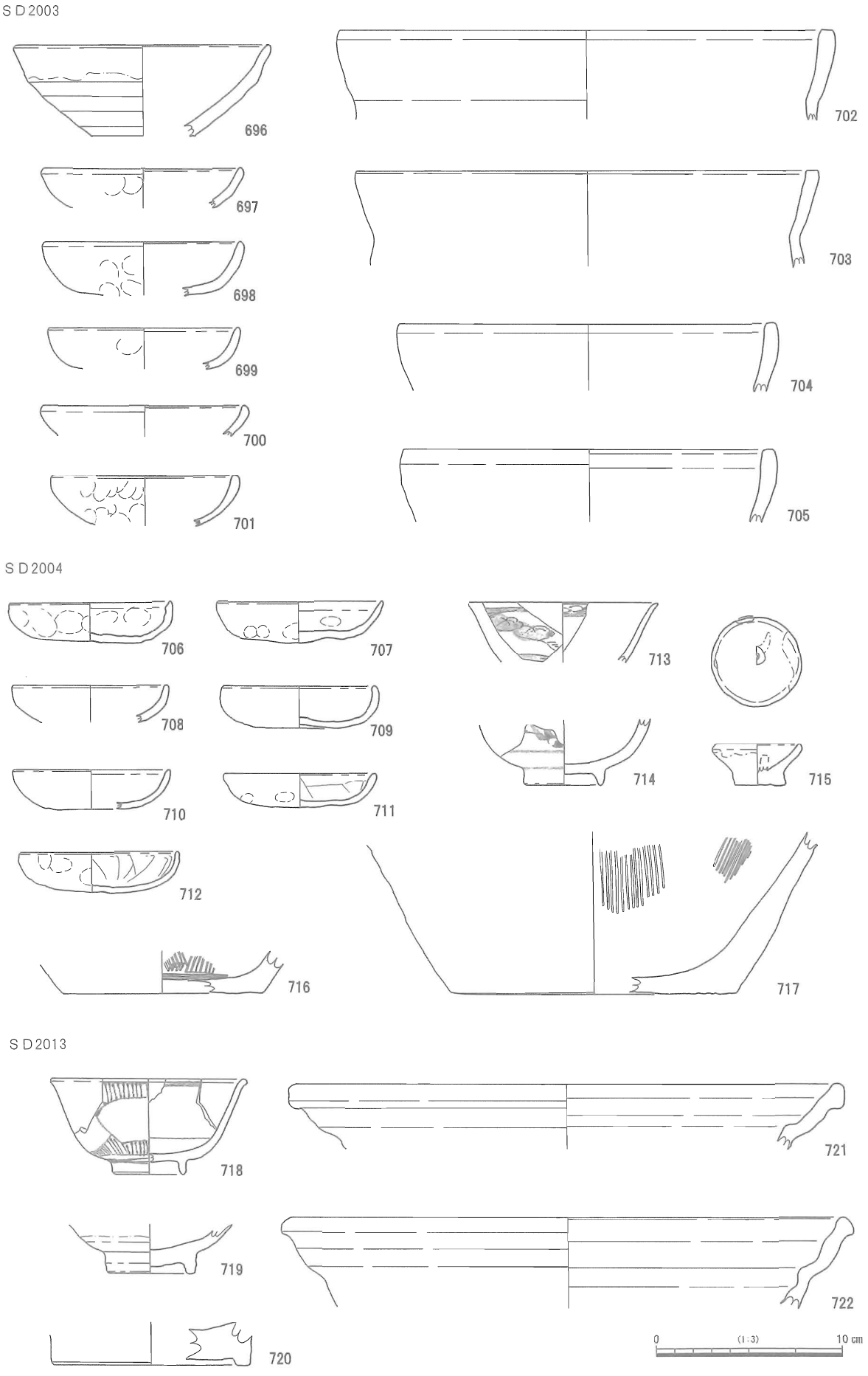


図 96　SD2003・2004・2013 出土遺物

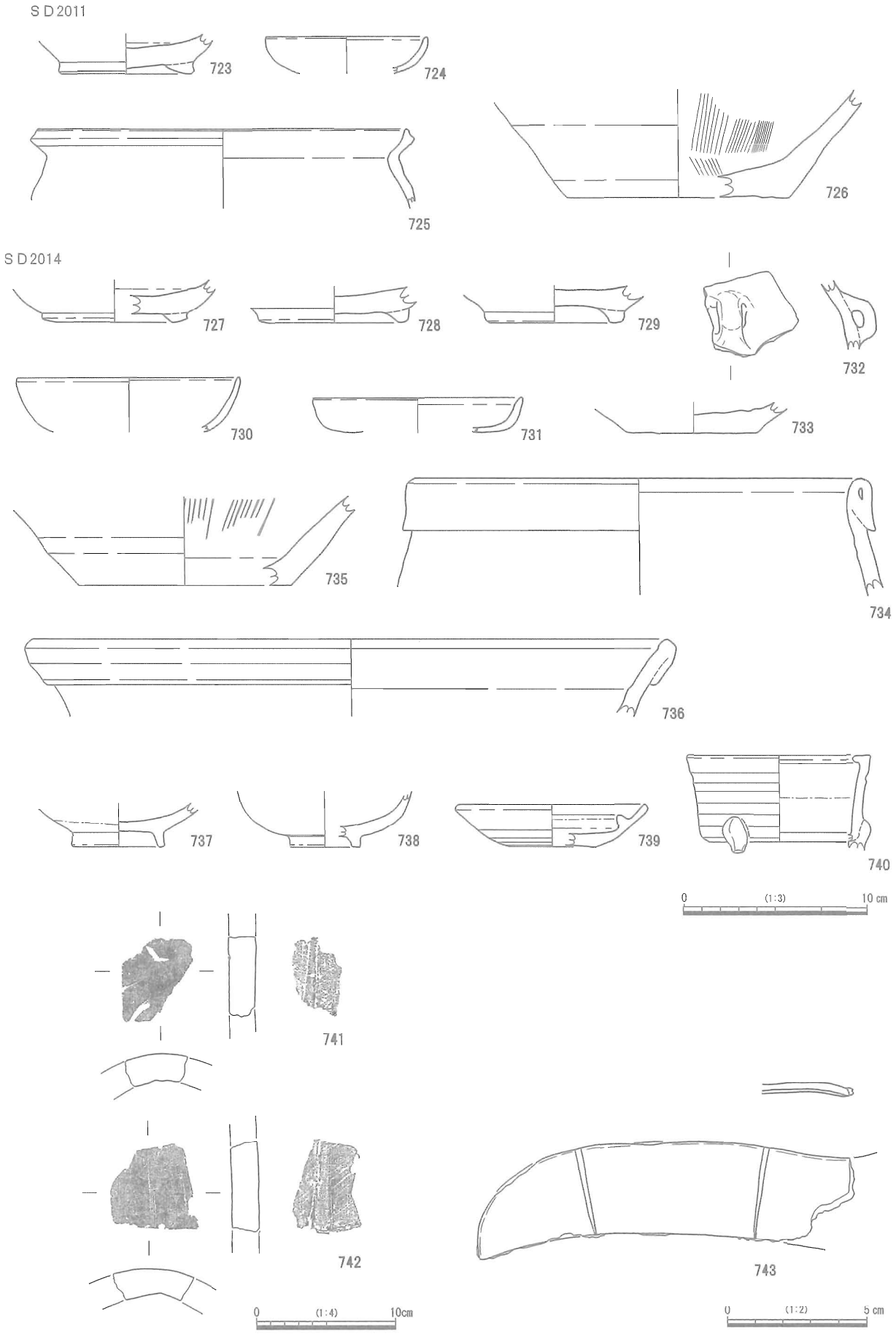


図97　SD2011・2014出土遺物

SD3009・3013・3014（図 40・98・99、図版 5・28・79）

いずれも、３区の土塁 SA3001 の周辺に所在する溝である。

SD3014 は、逆Ｌ字形に掘られた溝で、西側は削平によって失われているが、屈曲部を中心に総延長にして約 15m 検出されている。底面は比較的平坦で、遺存状況によって異なるが、良好に残る部分での上端の幅は 1.3m 程となっている。調査区北壁の土層断面（図 40）において、SD3013 に切られていることが確認されている。遺物は非常に乏しく、小破片を含めても十数点程しか出土していない。744 は土師器甕の底部である。745 はロクロ成形の土師質土器皿とみられる。口縁部の小破片で、比較的硬質な焼きとなっている。図化できたのはこの２点のみであるが、この他に非ロクロ成形の土師質土器皿や、内彎形とみられる内耳鍋の破片などが出土している。

SD3013 は、SD3014 の東側に検出されている南北溝である。幅約 60 ㎝・深さ約 40 ㎝で、側面は比較的直立気味に立ち上がる。遺構検出時に SD3009 に切られることが確認されているが、SD3013 に向かって SD3009 が屈曲していることから、SD3009 とほぼ同じ場所に東西溝を有した逆Ｌ字形の溝であった可能性が高い。また、埋没後には埋葬遺構 SX3008 が設けられている。746 は山茶碗、747・748 はくの字形内耳鍋である。749 ～ 751 は土師質土器皿で、749 と 750 は軟質のものであるが、751 は比較的硬質のものである。これらの他に、17 世紀前半のものとみられる美濃窯産の徳利も出土している。

SD3009 は、SD3013 の東側に設けられている逆Ｌ字形の溝である。先述のように、SD3013 を改修してつくられた溝とみられる。幅 80 ㎝・深さ約 50 ㎝の規模で、総延長にして約 50 m検出されている。残存する規模に比べて遺物は乏しく、破片を含めても十数点程度しか出土していない。752 は山茶碗、753 は瀬戸美濃産の擂鉢である。754 は半球形の内耳鍋で、口縁部は丸く仕上げられ、比較的浅いつくりのものとなっている。755 は丸瓦で、二次的な被熱の痕跡が顕著にみられる。756 は平瓦である。凸面には縄叩き、凹面には布目が認められる。凸面にのみ、離れ砂が少量付着している。

年代については、全体的に遺物が乏しく不明瞭な部分はあるが、各遺構の切り合い関係から SD3014、SD3013、SD3009 の順であることは明らかである。また、SD3013 については、17 世紀後半頃とみられ

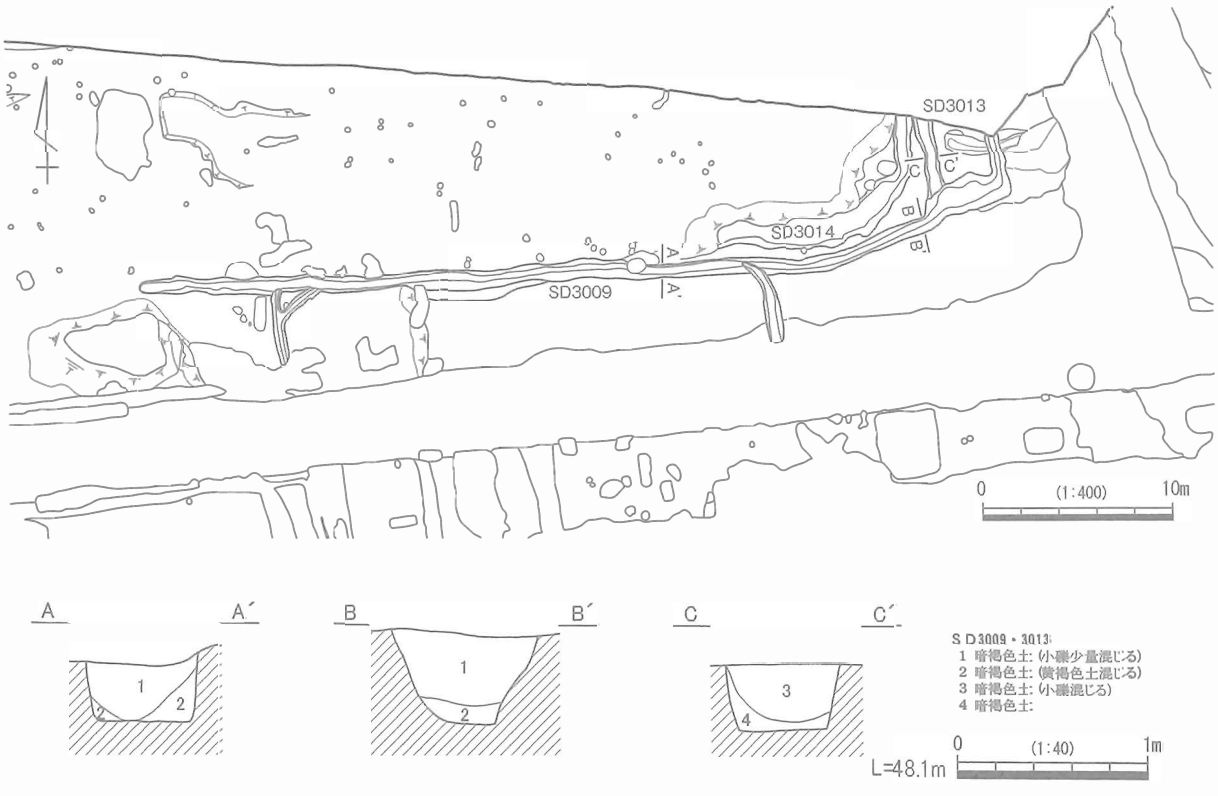


図 98　SD3009・3013・3014 実測図

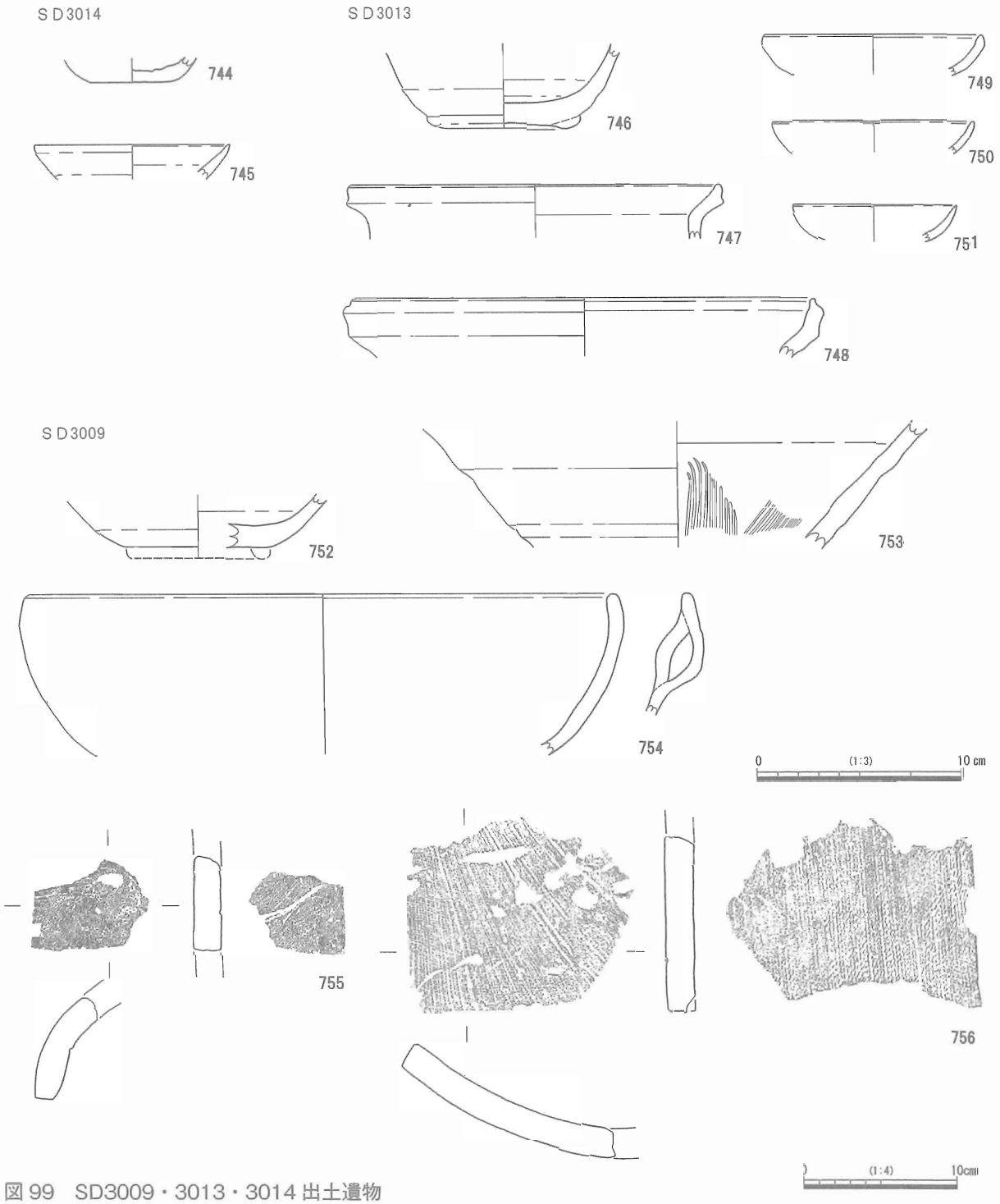


図 99　SD3009・3013・3014 出土遺物

るSX3008が埋没後に設けられていることから、それまでには埋没していたと考えてよい。これらの点と出土遺物の年代から、SD3014は16世紀後半、SD3013は17世紀前半、SD3009は17世紀後半を中心とする時期の溝であると推測される。

SD3006・3008（図100、図版５）

３区の南西部に、大溝SD2001に平行して設けられている東西溝である。

SD3006は大溝SD2001の北側に位置し、東西に約20ｍの長さで検出されている。深さは10㎝程と

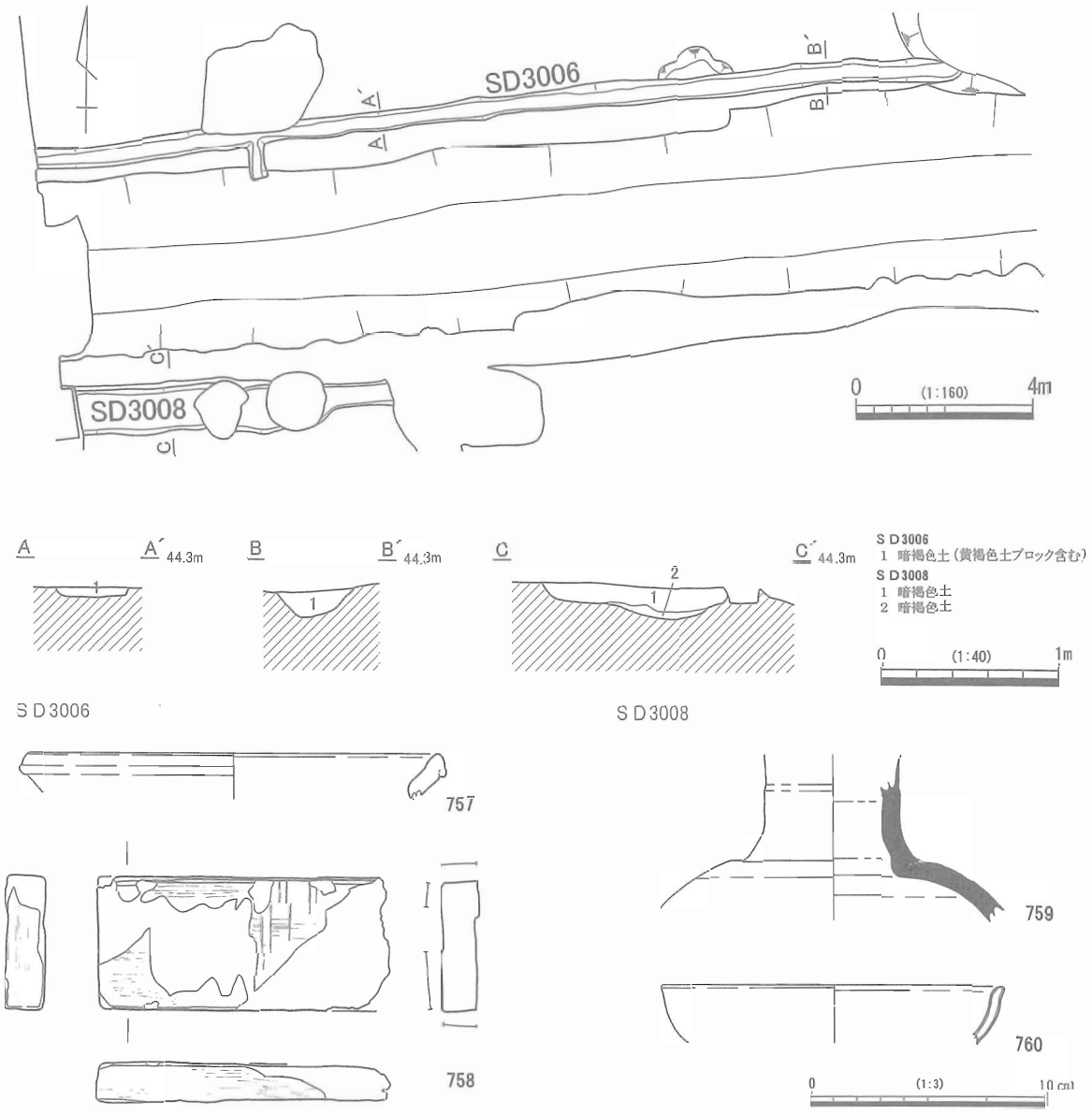


図 100　SD3006・3008 実測図、出土遺物

浅く、東へ向かって傾斜している。西側は調査区外へと続き、東側は攪乱によって失われているが、土塁 SA3001 までは至っていない。遺物は破片も含めて、7 点しか出土していない。757 は内耳鍋の口縁部、758 は砥石である。他には須恵器坏が 1 点、土師器甕が 1 点、土師質土器皿とみられる破片が 3 点出土している。

SD3008 は大溝 SD2001 の南側に位置する溝で、調査区西端から約 7 mの長さが確認されている。深さは 15 cm程と浅い。東側は攪乱で失われており、続きは判然としない。遺物は 2 点出土しているのみである。759 は須恵器のフラスコ瓶である。760 は肥前産とみられる近世の青磁である。

遺物が乏しい上に細片がほとんどであるため、遺構の年代については決め手に欠く状況ではあるが、ともに東側の様相が判然としない点が注目される。SD3006 と SD3008 の間は、調査前は道路（市道根堅 24 号線）となっており、道路はちょうど SD3006 の東端付近で南へ向かって折れている。現代のものが出土しなかったために、遺構として捉えられてはいるものの、現代の道路に伴う溝の可能性も否定しきれない。いずれにせよ、近世後期以降の溝である可能性が高いとみてよいであろう。

SD4001（図 101 ～ 104、図版４・28）

３区と４区の境に位置する南北溝である。溝は、北側の調査区端から南へ約 72 m延び、西へ向かってほぼ直角に屈曲した後 SD1001 に接合する。北半は底部付近が残る程度となっており、一部検出されなかった部分もある。断面は逆台形で、南半では幅約 90 cm・深さ約 60 cmの規模となっている。底面は平坦で、南及び西に向かって緩やかに傾斜する。土層には掘り直しの痕跡が認められる部分もあるが、溝の全域には及んでいない。全面的な改修ではなく、崩落した部分を復旧した程度のものとみてよいであろう。

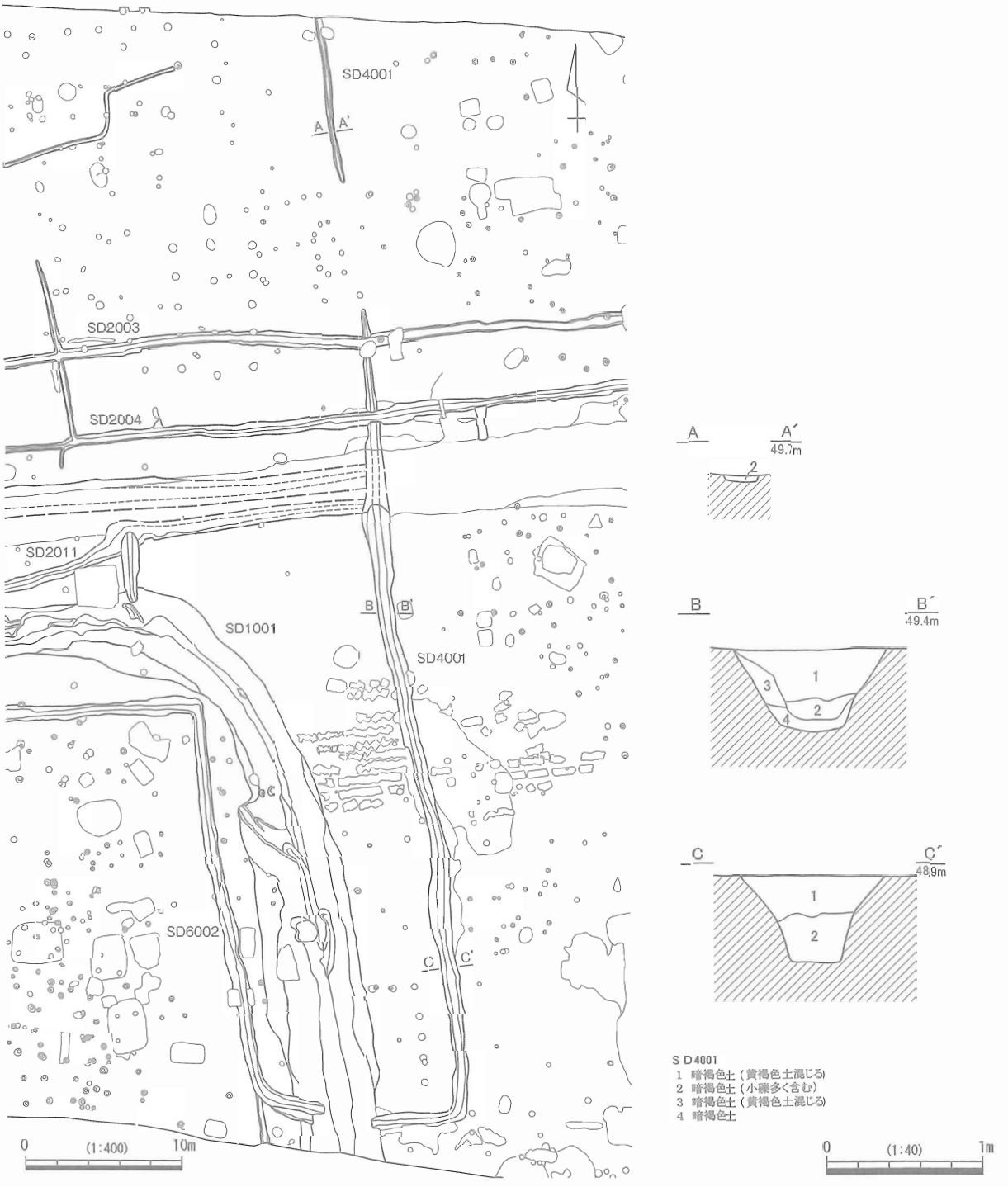


図 101　SD4001 実測図

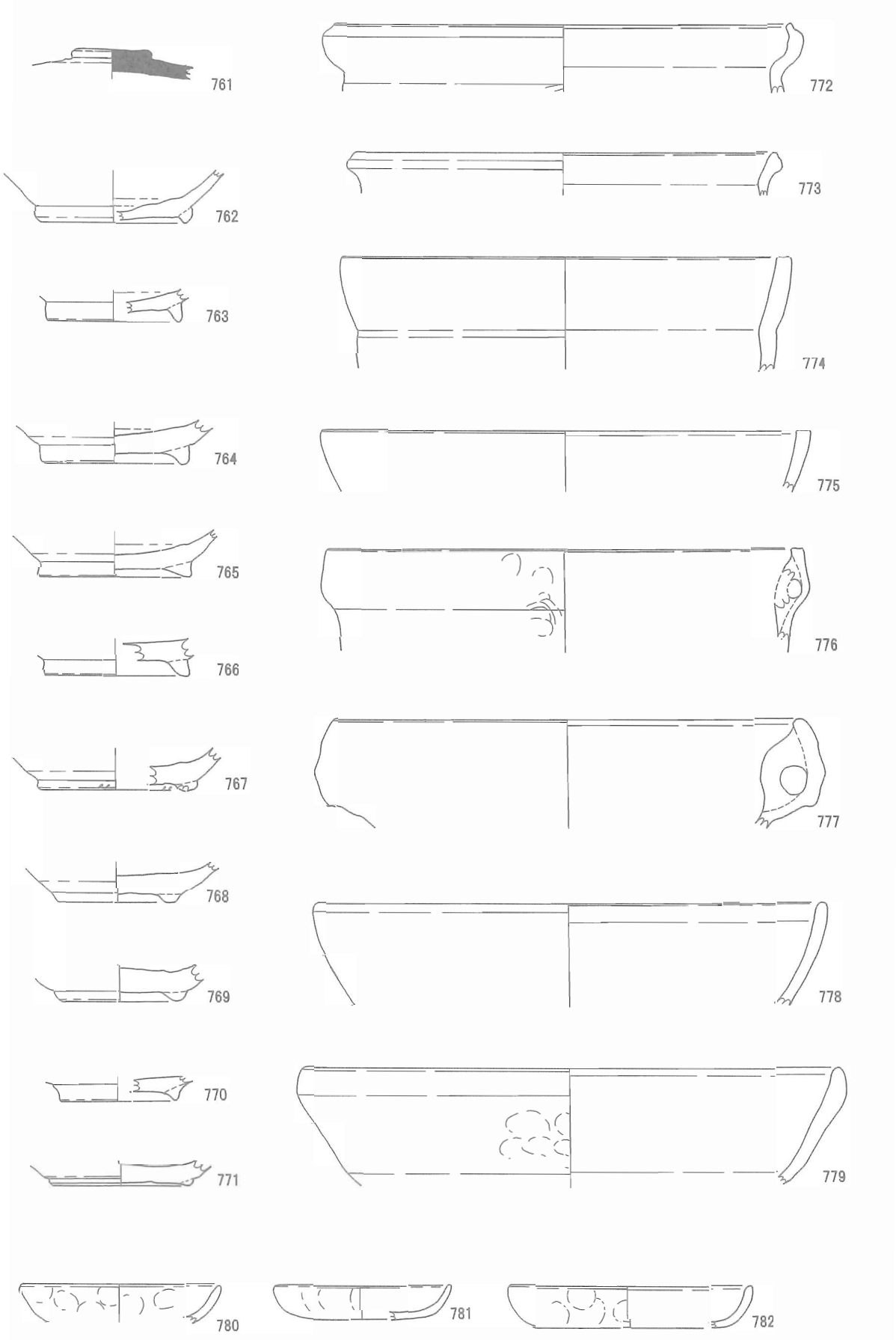


図 102　SD4001 出土遺物（1）

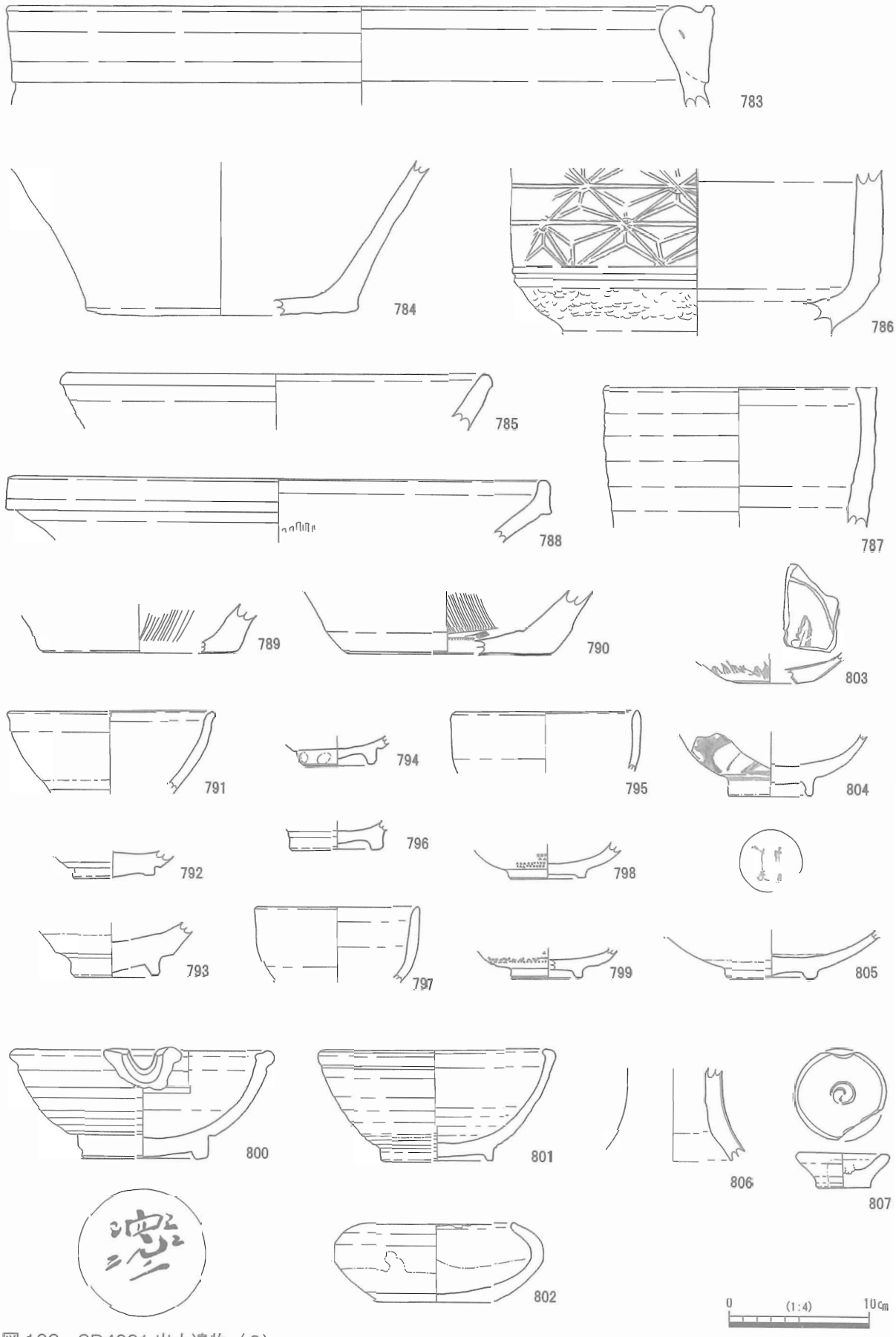


図 103　SD4001 出土遺物（2）

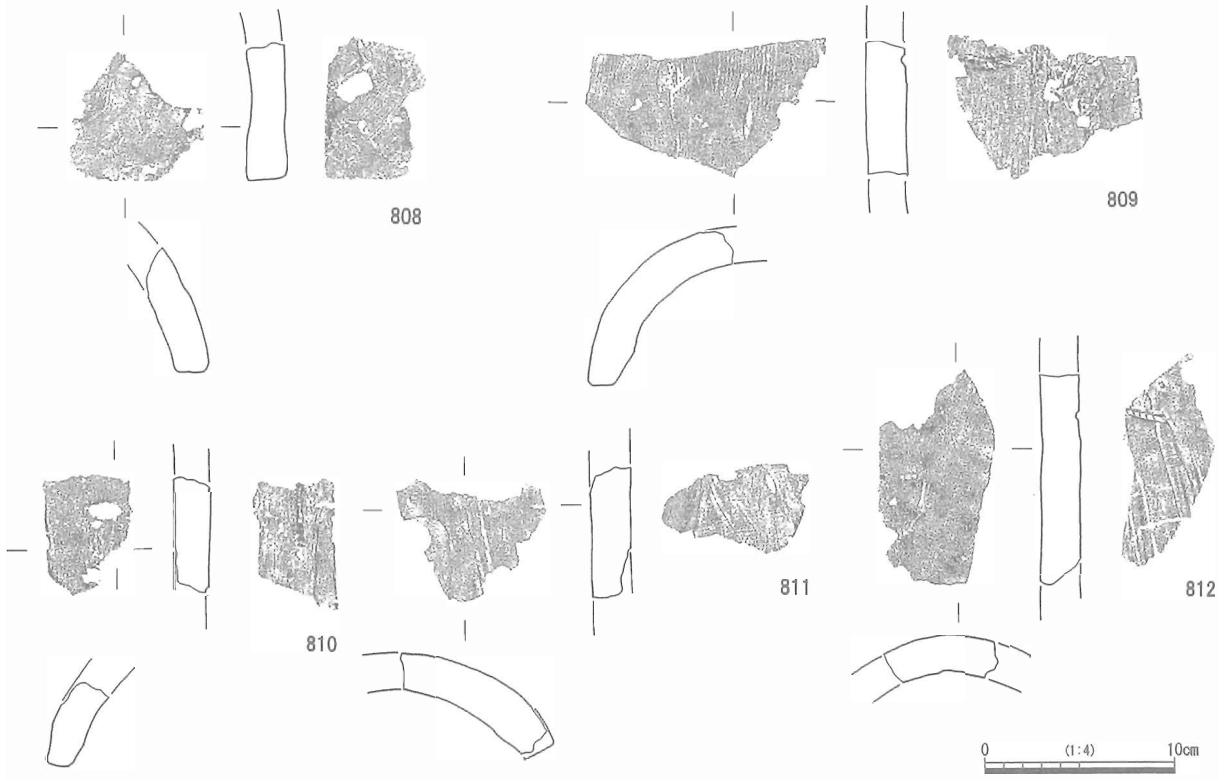


図 104　SD4001 出土遺物（3）

遺物は、須恵器や土師器といった古代の土器から、近世の陶磁器まで比較的豊富に出土している。761 は須恵器の蓋、762 と 763 は灰釉陶器、764 ～ 771 は山茶碗、772 ～ 779 は内耳鍋である。780 ～ 782 は土師質土器皿である。いずれも浅く、比較的硬質な焼きのものである。

783 ～ 785 は常滑産の製品である。783 と 784 は甕で、785 は片口の口縁部であろう。788・791・792 は初山窯の製品で、788 は擂鉢、791 と 792 は天目茶碗である。789 と 790 は擂鉢で、789 は古志戸呂窯産、790 は瀬戸美濃産の製品である。786 は瓦質の火鉢であり、体部に線刻で花文とみられる幾何学的な文様が施されている。787 は匣鉢である。796 と 802 は志戸呂窯産の製品で、796 は丸碗、802 は小鉢である。793 ～ 795・797 ～ 801・807 は、瀬戸美濃産の製品である。793 は天目茶碗、794 と 795 は尾呂茶碗、797 は灰釉丸碗、798 と 799 は鎧茶碗、800 と 801 は片口である。800 の底部外面には墨書が残されている。文字としては判読できないが、「二」または「ム」のような記号が配されている。807 は燭である。803 は貿易陶磁の皿で、破片ではあるが、内外面には染付がみられる。804 ～ 806 は肥前産の製品である。804 は磁器染付の碗で、見込みには蛇の目釉剥ぎ、底裏には大明年製銘がみられる。805 は青緑釉の皿で、見込みには蛇の目釉剥ぎが施されている。806 は青磁の瓶である。

また、点数は少ないが瓦も出土している。808 ～ 812 はいずれも丸瓦であり、凸面には全面にナデ調整が施され、凹面の側端と広端側は幅広に面取りされている。808 は広端部の破片で、広端面には離れ砂が付着している。809 ～ 811 は側端部の破片で、809 には一部縄叩きの痕跡が確認できる。また、809 と 812 には吊り紐痕がみられる。これらの特徴は、大溝 SD2001 などから出土しているものと共通する。

周辺から混入した遺物も多いが、出土遺物の下限の年代は 19 世紀後半である。18 世紀代の遺物についても一定量出土していることから、SD4001 は 18 世紀から 19 世紀にかけての時期を中心に機能した溝であると推測される。

SD8002（図 105）

8区の東端に位置する南北溝である。溜め池の堤の下層で検出されている。幅は約 90 cmで、長さは約 11 m検出されている。北側は攪乱で失われており、南側は徐々に浅くなり確認できなくなっている。深さは 15 cm程度と浅い。

周辺から様々な遺物が流入しており、須恵器から山茶碗、古瀬戸製品、土師質土器皿、内耳鍋など幅広い年代のものが出土している。813 は土師質土器皿である。口縁の復元径が 11 cmの中型品で、やや硬質の焼きとなっている。814 ～ 816 は古瀬戸製品である。814 は天目茶碗、815 と 816 は卸皿で、いずれも古瀬戸後期のものである。817 は内彎形の羽釜である。818 は内彎形内耳鍋であり、口縁部の長さが短いタイプのものである。819 は祥符元宝、820 は嘉祐通宝、821 は元祐通宝である。出土遺物から、SD8002 は主に 15 世紀から 16 世紀にかけて機能した溝であると推測される。

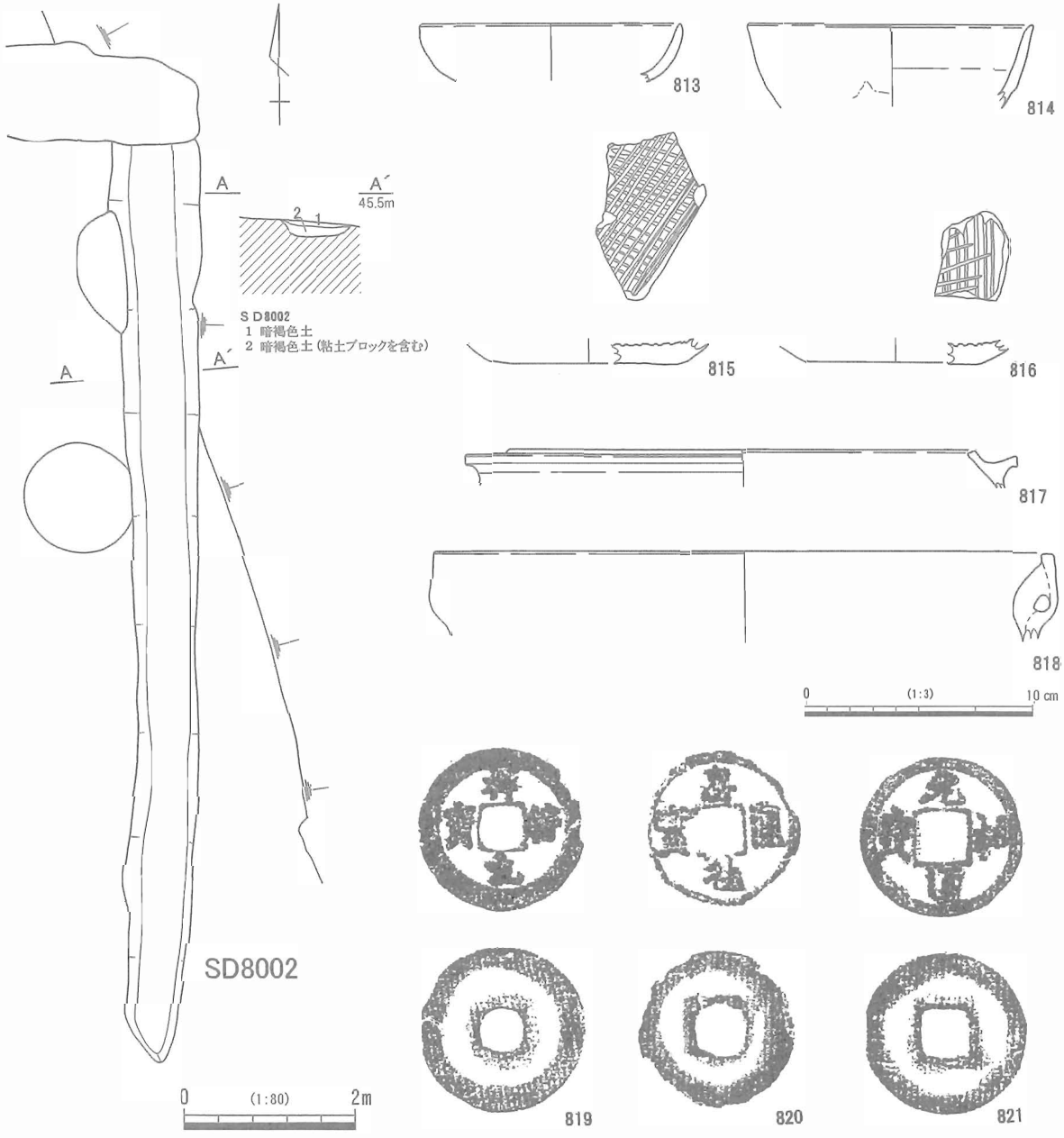


図 105　SD8002 実測図・出土遺物

SD6002（図 106 ～ 111、図版 28・52）

6 区の中央北側を鍵の手状に設けられている溝である。溝は、宅地の擁壁による攪乱から東へ向かい、東に約 45 mの場所でほぼ直角に屈曲して南へ方向を変える。さらに、南へ 25 mの場所において再び屈曲して東に向かう。平面的に確認することはできなかったが、東端は同時期の溝である SD1001b に連結していたとみてよいであろう。また、西側は、擁壁の攪乱によって失われているが、これに取り付くような形で溝が消えている

幅は 0.8 ～ 1 mで、深さは 40 ～ 60 ㎝残存する。断面は底面が平らの逆台形を呈し、全体が東または南に向かって傾斜している。土層において掘り直しの痕跡がみられる部分もあるが、全体には及んでいないことから、SD4001 と同様に大規模な改修ではなく、埋没した部分の補修や底ざらい程度のものであったと推測される。

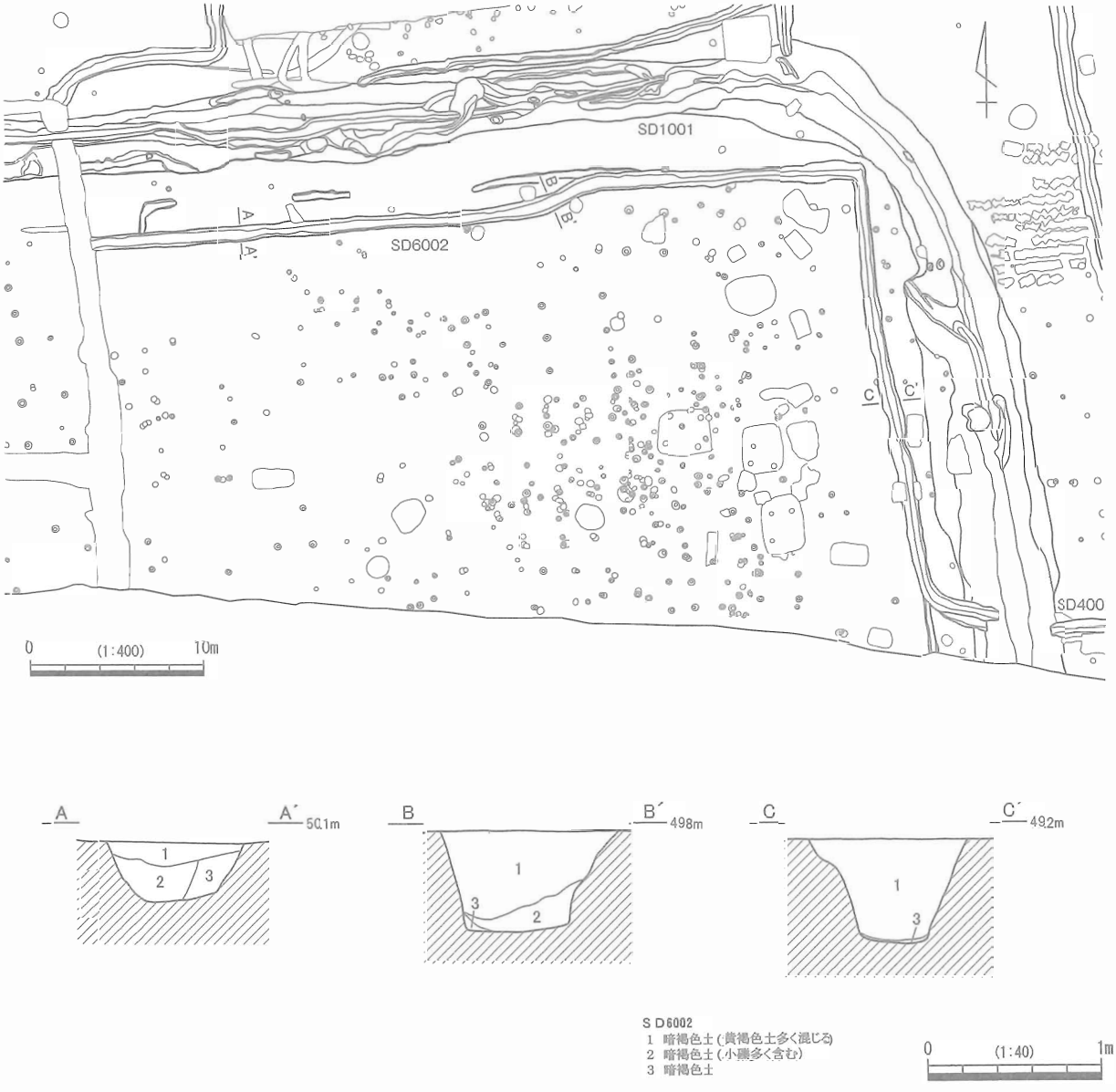


図 106　SD6002 実測図・断面図

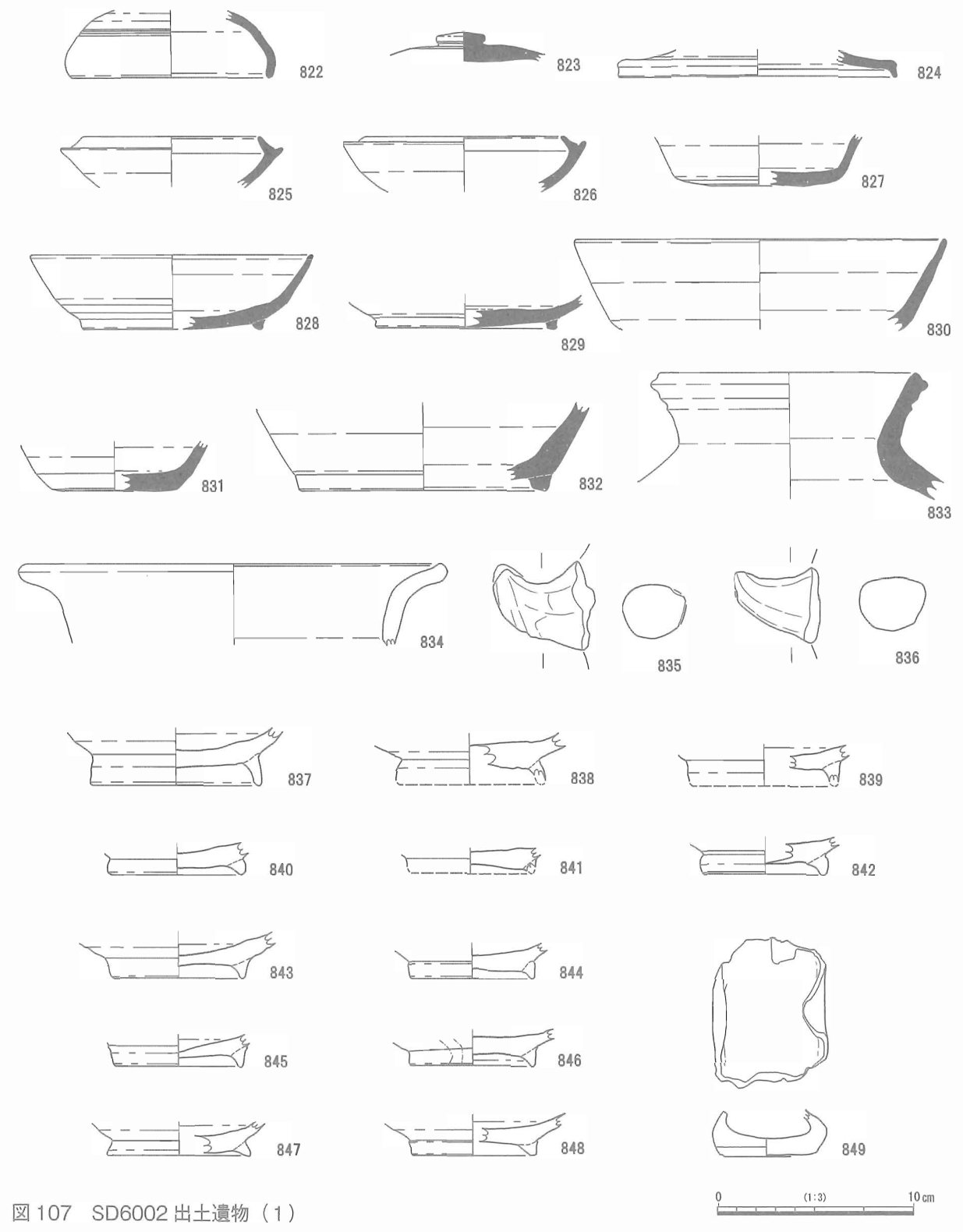


図 107　SD6002 出土遺物（１）

遺物は多量に出土しており、分量はポリコンテナ６箱以上にもなる。822 ～ 833 は須恵器、834 ～ 836 は土師器である。図示したものは SD6002 から出土した遺物のごく一部であり、実際は甕類などを中心に、須恵器と土師器が全体の約３分の１を占めている。837 ～ 849 は灰釉陶器で、ほとんどが浜北窯産の製品とみられる。第４章でも述べているように、中屋遺跡において灰釉陶器の出土は少ないが、SD6002 では比較的まとまって出土している。

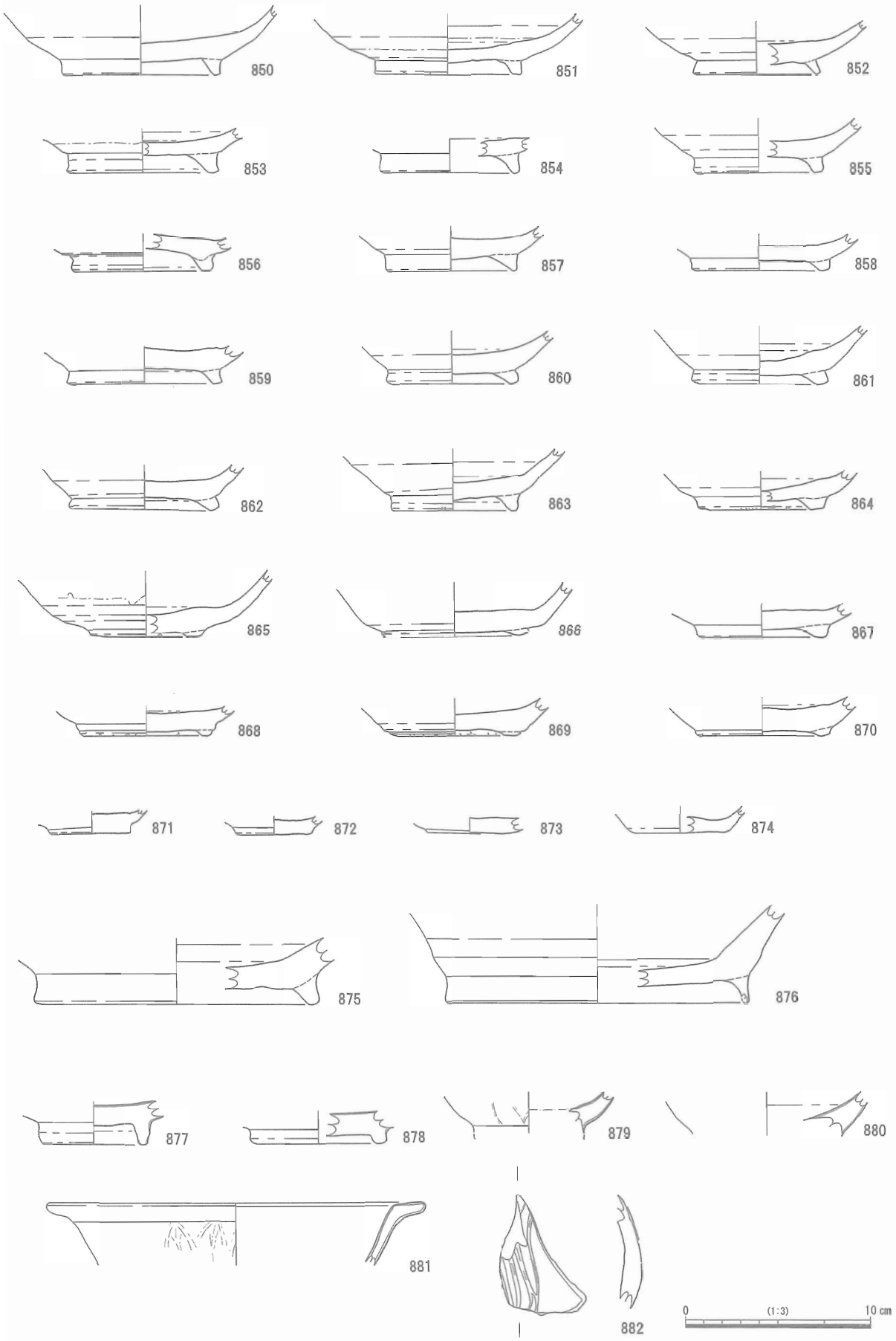


図 108　SD6002 出土遺物（2）

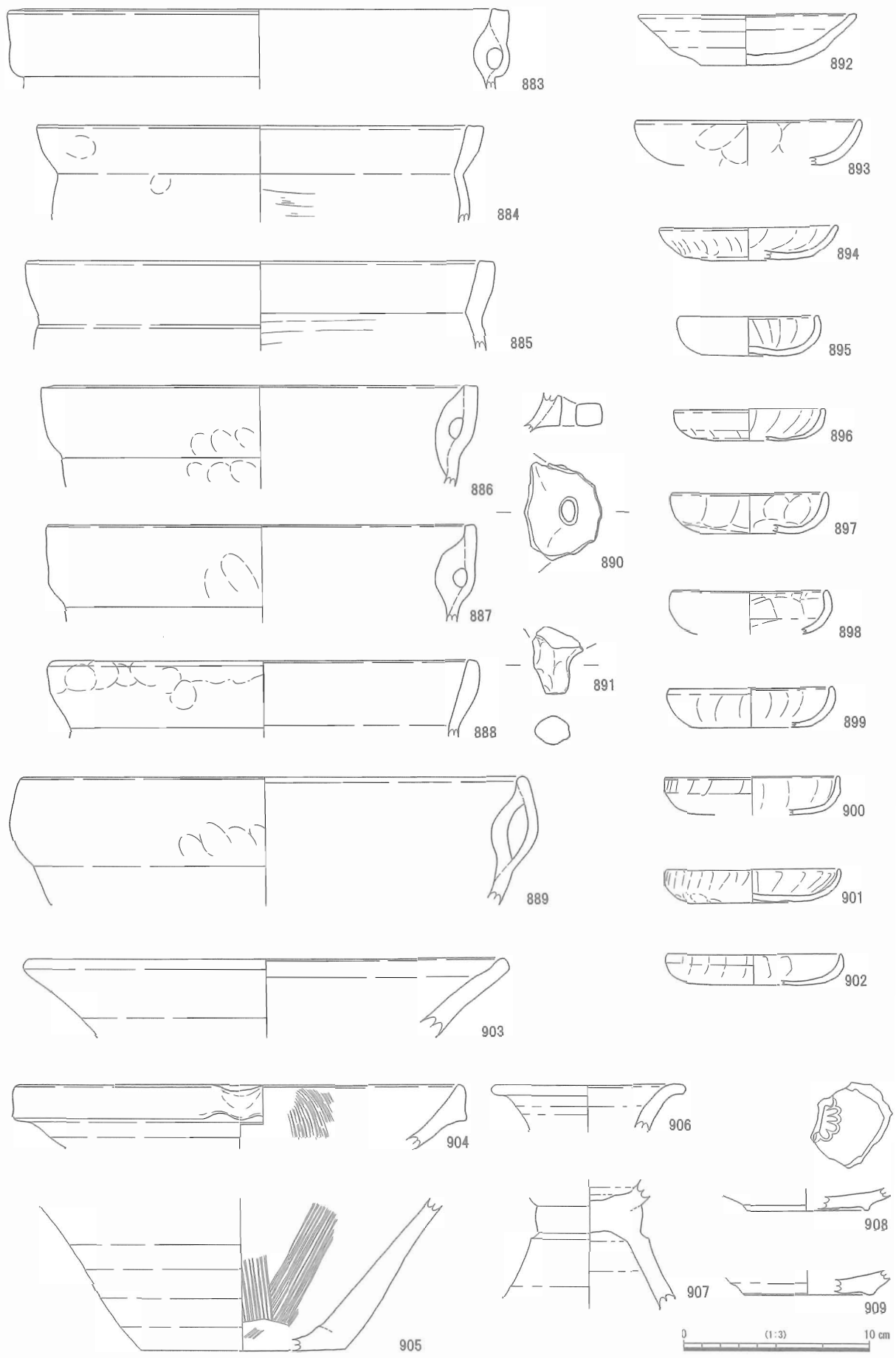


図 109　SD6002 出土遺物（３）

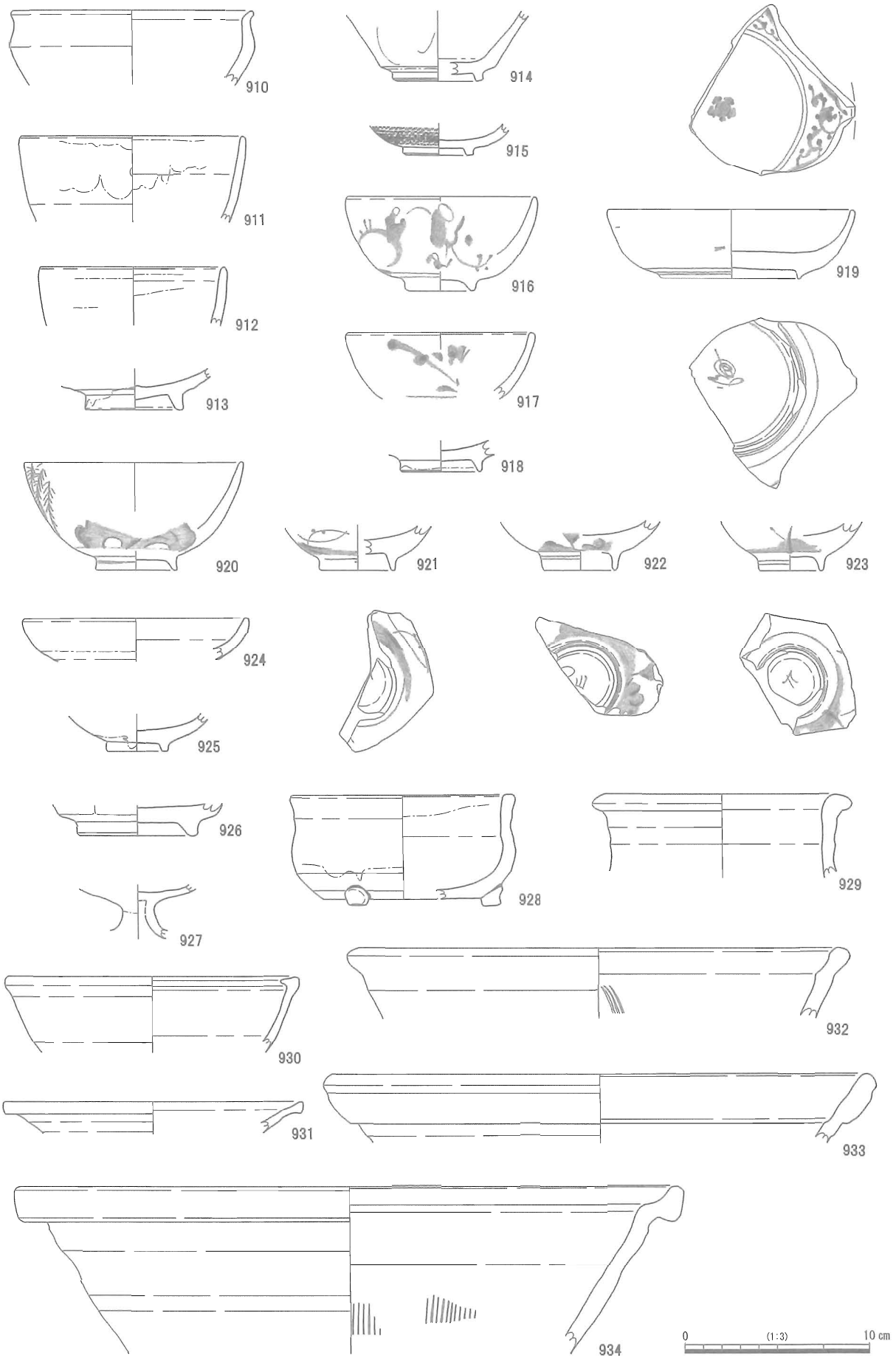


図 110　SD6002 出土遺物（4）

850 ～ 870 は山茶碗である。東遠産の 856 を除き、他はすべて渥美湖西産である。時期としては、Ⅲ期のものが大半を占めている。871 ～ 874 は山茶碗の小皿で、いずれも渥美湖西産のものである。875 と 876 は、渥美湖西産の片口鉢である。877 ～ 881 は青磁の碗である。881 は青磁の盤で、攪乱から出土している 2019 と同一個体であると推測される。882 は古瀬戸中期の瓶子の破片で、外面には草葉文とみられる文様が認められる。

883 ～ 889 は内耳鍋で、図化したものはいずれも内彎形であるが、くの字形や半球形のものも出土している。890 は羽釜もしくは羽無釜の外耳で、下面にはススの付着が認められる。891 は羽無釜の足で

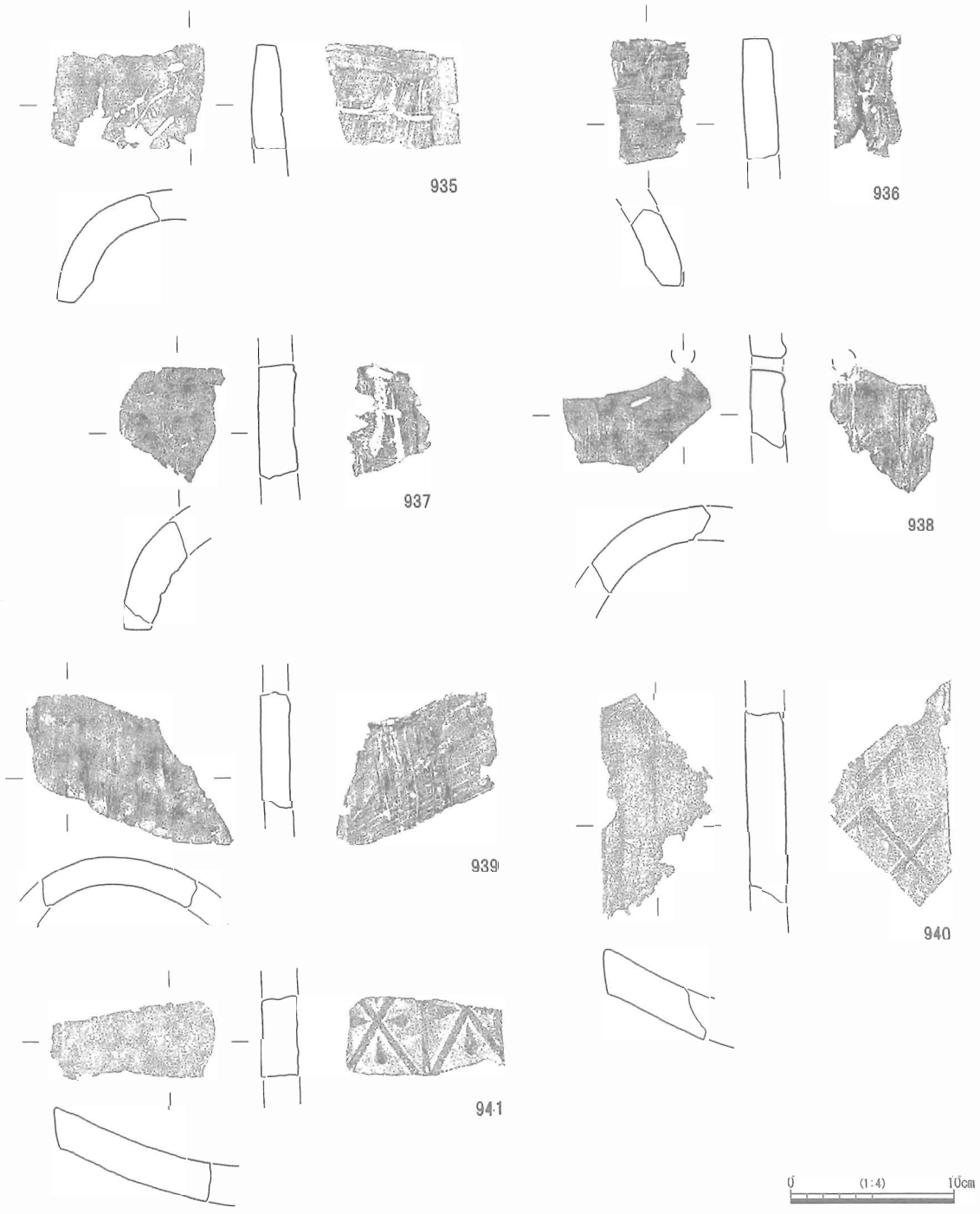


図 111　SD6002 出土遺物（５）

あろう。892は、ロクロ成形の土師質土器皿である。893～902は非ロクロ成形の土師質土器皿で、いずれも比較的硬質の焼きとなっている。893はやや厚手で口径も大きいが、他は口径7～9㎝の小型品である。904と905は、古瀬戸後期から大窯期にかけての瀬戸美濃産の擂鉢である。906と907は、古志戸呂窯産の花瓶である。908と909は、瀬戸美濃産の丸皿である。大窯1～2期のもので、908の見込には菊花文が施されている。

910～918は、瀬戸美濃産の碗類である。910は天目茶碗、911～913は尾呂茶碗、914は柳茶碗、915は鎧湯呑、916～918は小中である。919～923は肥前の磁器染付である。919は皿であり、内面には蛸唐草文が描かれている。見込にはコンニャク判の五弁花、底裏には渦福字銘がみられる。920～923は碗である。921～923の底裏には、大明年製の崩れとみられる銘が認められる。924～927は、瀬戸美濃産の製品である。924は摺絵皿、925は梅文皿、926は向付、927は仏餉具である。928と929は志戸呂窯産の製品で、928は香炉、929は茶壺である。930～934は、瀬戸美濃産の鉢類である。930は片口、931は折縁輪禿鉢、932～934は擂鉢である。

また、土器や陶磁器に比べて数は少ないものの、瓦も出土している。935～939は丸瓦である。いずれも凸面はナデ調整されており、叩き目は残らない。935と936は狭端部の破片であり、凹面には細い吊り紐痕が認められる。935の布に隠れている部分を1とした時の吊り紐比率は、ほぼ1：1となっている。938も狭端に近い部分の破片であり、釘穴の存在が確認できる。940と941は平瓦で、凹凸両面に離れ砂の付着が認められる。940には縦長斜格子、941には縦長斜格子＋横線の叩き目が残る。これらの瓦の特徴は、大溝SD2001から出土している瓦と共通している。なお、この他に瓦としては、桟瓦も数点出土している。

SD6002では、周辺から混入した遺物が多量に含まれているため、古代以降の様々な遺物が出土しているが、18世紀以降のものが大半を占めており、出土遺物の年代の下限は19世紀である。よって、SD6002は、主に18世紀後半から19世紀にかけて機能した区画溝であるとみてよい。

SD6002は、東側は同時期の溝であるSD1001bと接合しており、西側は攪乱にあたって消える。この攪乱は、宅地の擁壁の基礎が埋設されていた部分である。コンクリートの基礎が深くまで至っており、遺構としては認識できなかった。しかし、SD6002と同様に、SD2006においてもこの攪乱に接続するような形となっていることから、ほぼ同じ位置に近世の溝が存在していた可能性が高いと推測される。

表9　溝出土 土器・陶磁器観察表（1）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
497	SD1001	下	須恵器	坏蓋							つまみ部分		灰	
498	SD1001	下	須恵器	坏身						(11.4)	底部 1/6		灰白	
499	SD1001	下	須恵器	坏身						(7.2)	底部 1/4		灰白	
500	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1	(14.2)				口縁～体部 1/8	外面・自然釉	淡黄	
501	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西		(13.5)				口縁部 1/16	自然釉	灰白	
502	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西		(15.2)				口縁部 1/16		灰白	
503	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅱ				(6.8)	底部 1/6	内面・自然釉	灰白	
504	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅱ				(6.0)	底部 1/4		灰白	
505	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 1/2	内面・自然釉	灰黄	
506	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				7.2	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
507	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				(6.6)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
508	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				(6.2)	底部 1/2		灰白	
509	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				6.3	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
510	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				6.5	底部のみ		灰白	
511	SD1001	下	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				(5.8)	底部のみ		灰白	
512	SD1001	下	施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	後期	(10.8)				口縁部 1/5		黒 / 灰白	
513	SD1001	下	貿易陶磁	白磁皿		Ｂ群	(10.0)		2.6	(4.4)	口縁～底部 1/4	白磁	淡黄	
514	SD1001	下	中世陶器	壷	遠賀湖西						肩部破片	外面・自然釉	灰白	連弁文
515	SD1001	下	中世陶器	壷	遠賀湖西						肩部破片		暗オリーブ / 灰白	連弁文
516	SD1001	下	中世陶器	壷か甕	常滑			(9.6)			底部 1/6		にぶい橙	
517	SD1001	下	中世陶器	片口鉢	常滑	10 型式	(27.2)	(9.8)	10.0		口縁～底部 1/6		にぶい橙	
518	SD1001	下	施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	後期Ⅳ新	25.6	8.8	8.5		口縁～底部 3/4		にぶい赤褐 / 灰白	
519	SD1001	下	施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	後期Ⅳ新	(29.4)	13.0	8.2		口縁～底部 1/3		浅黄橙	
520	SD1001	下	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂		27.0	10.4	8.8		口縁～底部 3/4		浅黄橙	
521	SD1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)	(8.4)			口縁部 1/10		浅黄橙	
522	SD1001	下	土師質土器	伊勢鍋			(22.2)				口縁部 1/20		浅黄橙	
523	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.8)				口縁部 1/6		灰白	
524	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.8)				口縁部 1/8		灰白	外面に煤付着
525	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(17.5)				口縁部 1/16		灰白	
526	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(24.0)				口縁部 1/8		灰白	外面に煤付着
527	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(18.5)				口縁部 1/10		浅黄橙	
528	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.4)				口縁部 1/6		明淡黄	
529	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(23.0)				口縁部 1/5		浅黄橙	外面に煤付着
530	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.4)				口縁部 1/9		灰白	外面に煤付着
531	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.3)				口縁部 1/8		明淡黄	外面に煤付着
532	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(20.2)				口縁部 1/16		灰白	
533	SD1001	下	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.2)				口縁部 1/24		黄橙	外面に煤付着
534	SD1001	下	土師質土器	羽釜			(14.5)				口縁部 1/8		灰白	
535	SD1001	下	土師質土器	羽釜			(11.9)				口縁部 1/8		灰白	
536	SD1001	下	土師質土器	羽釜			(11.8)				口縁部 1/5		灰白	
537	SD1001	下	土師質土器	羽釜							羽部 1/6		灰白	
538	SD1001	下	土師質土器	羽釜							羽部 1/8		灰白	
539	SD1001	下	土師質土器	羽釜							環のみ		灰白	
540	SD1001	下	鉄滓											
541	SD1001	中	須恵器	坏蓋							つまみ部分	外面・自然釉	灰白	
542	SD1001	中	須恵器	坏蓋			(14.8)				口縁部 1/8		灰白	
543	SD1001	中	須恵器	坏身				(10.4)			体部～底部 1/4		灰白	
544	SD1001	中	須恵器	坏身				(13.0)			底部 1/8		灰白	
545	SD1001	中	須恵器	坏身						(11.8)	底部 1/10		黄灰	
546	SD1001	中	須恵器	坏身						(10.0)	底部 1/4		灰白	
547	SD1001	中	須恵器	坏身				(5.6)			底部 1/3		黄灰	ヘラ記号
548	SD1001	中	須恵器	坏身			(12.9)				口縁部 1/10		灰	
549	SD1001	中	須恵器	高坏			(11.3)				口縁部 1/6		淡黄	
550	SD1001	中	須恵器	皿・盤			(19.3)				口縁部 1/12		灰	
551	SD1001	中	須恵器	壷				(8.0)			底部 1/4		灰白	
552	SD1001	中	須恵器	壷						(7.3)	底部 1/3	内面・自然釉	灰	
553	SD1001	中	灰釉陶器	碗						6.8	底部のみ		灰黄	
554	SD1001	中	灰釉陶器	碗						(6.6)	底部 1/3	自然釉	灰黄	
555	SD1001	中	土師器	壷			(27.4)				口縁部 1/14		灰白	
556	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西		(14.9)				口縁部 1/10		灰白	
557	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西		(13.7)				口縁部 1/10	外面・自然釉	灰黄	
558	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅱ				(6.6)	底部 1/3		灰白	
559	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				(5.9)	底部 1/4		灰黄	
560	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				7.4	底部 2/3		灰白	
561	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				(7.6)	底部 1/3		にぶい黄橙	
562	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				(7.2)	底部のみ		灰白	
563	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－1				6.8	底部のみ		灰白	
564	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				(5.8)	底部のみ		灰白	
565	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				(6.8)	底部 2/3		灰白	
566	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				6.0	底部のみ		灰	
567	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				(6.8)	底部 1/3		灰白	
568	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				6.4	底部のみ		灰白	無高台
569	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				6.4	底部のみ		灰白	
570	SD1001	中	山茶碗	碗	遠賀湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
571	SD1001	中	施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	後期Ⅳ新	(32.3)				口縁～体部 1/7		灰褐 / 浅黄橙	
572	SD1001	中	近世陶器	香炉	瀬戸美濃		4.4	2.5	2.4		口縁一部欠損		灰白	
573	SD1001	中	土師質土器	皿		ロクロ	(12.9)	6.4	3.2		口縁～底部 1/12		浅黄橙	外面に煤付着
574	SD1001	中	土師質土器	皿		ロクロ	(12.7)				口縁部 1/8		にぶい橙	
575	SD1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)				口縁部 1/8		にぶい黄橙	
576	SD1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)	(7.4)			口縁～底部 1/4		浅黄橙	
577	SD1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.7)	(5.0)			口縁～底部 1/3		灰白	
578	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.0)				口縁部 1/8		明淡黄	外面に煤付着
579	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.4)				口縁部 1/4		灰白	
580	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(17.0)				口縁部 1/7		灰白	外面に煤付着
581	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.4)				口縁部 1/8		明淡黄	

表10　溝出土 土器・陶磁器観察表（2）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
582	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.6)				口縁部 1/4		淡黄	外面に煤付着
583	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.9)				口縁部 1/8		灰白	外面に煤付着
584	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(22.0)				口縁部 1/6		浅黄橙	
585	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.9)				口縁部 1/8		灰白	
586	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.8)				口縁部 1/8		淡黄	外面に煤付着
587	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(14.9)				口縁部 1/3		灰白	外面に煤付着
588	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(19.2)				口縁部 1/16		灰白	内外面に煤付着
589	SD1001	中	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(29.0)				口縁部 1/12		浅黄橙	
590	SD1001	中	土師質土器	羽釜			(12.9)				口縁部 1/6		灰白	
591	SD1001	中	土師質土器	羽釜			(12.0)				口縁部 1/8		灰白	
592	SD1001	中	土師質土器	羽釜			(13.3)				口縁部 1/4		灰白	
593	SD1001	中	土師質土器	羽釜			(13.4)				口縁部 1/6		灰白	
594	SD1001	中	土師質土器	羽釜							体部 1/6		灰白	
595	SD1001	中	土師質土器	羽釜							頸部～羽部 1/6		灰白	
596	SD1001	中	土師質土器	羽釜							体部 1/8		灰白	外面に煤付着
597	SD1001	中	土師質土器	羽釜							羽部～底部		灰白	外面に煤付着
598	SD1001	中	土師質土器	羽釜							体部～底部 1/3		灰白	外面に煤付着
599	SD1001	中	土師質土器	羽釜							羽部 1/4		灰白	外面に煤付着
600	SD1001	中	土師質土器	羽釜							環のみ		灰白	
601	SD1001	中	土師質土器	羽釜							環のみ		灰白	
602	SD1001	上	須恵器	坏蓋			(8.8)				口縁部 1/10		黄灰	
603	SD1001	上	須恵器	坏蓋			(10.1)				口縁部 1/8		灰黄	
604	SD1001	上	須恵器	坏蓋				4.9			髄頂部のみ		灰	ヘラ記号
605	SD1001	上	須恵器	坏蓋							つまみ部分	外面・自然釉	淡黄	
606	SD1001	上	須恵器	坏蓋			(12.6)				口縁部 1/6	外面・自然釉	灰黄	
607	SD1001	上	須恵器	壺			頸部径 3.4				頸部のみ	内面・自然釉	灰白	
608	SD1001	上	須恵器	坏身			(14.2)				口縁部 1/12		灰白	
609	SD1001	上	須恵器	坏身						(9.7)	底部 1/6		灰白	
610	SD1001	上	須恵器	円面硯			(10.6)				1/2		灰白	
611	SD1001	上	須恵器	壺						(11.8)	胴部～底部 1/6	内面・自然釉	灰	
612	SD1001	上	須恵器	壺						(12.3)	底部 1/8	内面・自然釉	灰白	
613	SD1001	上	灰釉陶器	碗							底部 1/4		灰黄	外面に漆
614	SD1001	上	灰釉陶器	碗							底部 1/4	内面・自然釉	灰白	高台端部欠損
615	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				7.3	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
616	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(7.8)	底部 1/3		灰白	
617	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.7)	底部 1/3		灰白	
618	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.6	底部のみ		灰白	
619	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 1/6		灰白	
620	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.2)	底部 1/2		灰白	
621	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.4)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
622	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.4)	底部 1/2		灰白	
623	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.6)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
624	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.8)	底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
625	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.3	底部 2/3	内面・自然釉	灰白	
626	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				5.9	底部のみ	内面・自然釉	灰黄	
627	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.8	底部のみ		灰黄	
628	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.1)	底部 1/4		灰白	
629	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(5.6)	底部 1/3		灰白	
630	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ				(5.7)	底部 1/2		灰白	
631	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.0)	体部～底部 1/5		灰白	
632	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.2)	底部 1/5		灰白	
633	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.5	底部のみ		灰白	
634	SD1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.0)	底部 1/4	内面・自然釉	灰黄	
635	SD1001	上	山茶碗	碗	知多	5型式				(7.0)	底部 1/4		灰黄	
636	SD1001	上	山茶碗	小碗	東遠	Ⅰ－2				(5.2)	底部 1/2		灰白	
637	SD1001	上	山茶碗	小碗	湿美湖西	Ⅰ－2				(4.0)	底部のみ		灰白	
638	SD1001	上	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		3.9			底部のみ	内面・自然釉	浅黄	
639	SD1001	上	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.4			底部のみ		灰白	
640	SD1001	上	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－1		(4.6)			底部 1/4		灰白	
641	SD1001	上	中世陶器	片口鉢	知多	6型式					底部 1/4		灰白	高台端部欠損
642	SD1001	上	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	A2群				(5.4)	底部 1/2	青磁	オリーブ灰／灰白	見込みに線刻
643	SD1001	上	施釉陶器	平碗	瀬戸美濃	後期Ⅳ古				5.2	底部のみ		淡黄／オリーブ	
644	SD1001	上	近世陶器	小中	瀬戸美濃	登8～9				(3.8)	底部 1/2		灰白	
645	SD1001	上	近世陶器	広東茶碗	瀬戸美濃	登11	(11.4)		6.7	(5.5)	口縁～底部 1/5		灰白	
646	SD1001	上	近世陶器	広東茶碗	瀬戸美濃	登10					底部のみ		灰白／淡黄	高台端部欠損
647	SD1001	上	近世磁器	染付碗	肥前		(9.1)				口縁～体部 1/22		灰白	
648	SD1001	上	施釉陶器	内禿皿	初山		(10.8)			(6.1)	口縁～底部 1/4		暗赤褐	
649	SD1001	上	近世陶器	乗燭	瀬戸美濃	登10～11	(5.0)	2.3	2.4		口縁 1/2 欠損		灰白／浅黄	
650	SD1001	上	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂		(29.4)	(13.0)	8.2		口縁～底部 1/6		浅黄橙	
651	SD1001	上	近世陶器	半胴	瀬戸美濃	登8	(14.4)				口縁～体部 1/4		にぶい褐／淡黄	
652	SD1001	上	近世陶器	擂鉢	瀬戸	登11	(26.8)				口縁部 1/20		にぶい赤褐／灰白	
653	SD1001	上	瓦質土器	壺形			(16.0)				口縁～肩部 1/4		黄灰	格子文・赤彩
654	SD1001	上	施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	後期Ⅳ新		(8.0)			胴部～底部 1/3		にぶい赤褐／浅黄橙	
655	SD1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)	(7.0)			口縁～底部 1/8		浅黄橙	
656	SD1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/6		灰白	
657	SD1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)	(6.0)			口縁～底部 1/3		浅黄橙	
658	SD1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.6)	(5.6)			口縁～底部 1/4		灰白	
659	SD1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)	(4.8)			口縁～底部 1/5		灰白	
660	SD1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	11.6	6.5			口縁～底部 1/2		淡黄	
661	SD1001	上	土師質土器	皿		ロクロ		(6.7)			底部 1/2		浅黄橙	
662	SD1001	上	土師質土器	内耳鍋		くの字形	16.8				口縁部 1/12		灰白	
663	SD1001	上	土師質土器	内耳鍋		くの字形	17.0				口縁部 1/12		にぶい橙／黄褐	
664	SD1001	上	土師質土器	内耳鍋		内彎形	22.9				口縁部 1/8		淡黄	外面に煤付着
665	SD1001	上	土師質土器	内耳鍋		内彎形	24.6				口縁部 1/24		明淡黄	
666	SD1001	上	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(25.0)				口縁部 1/16		淡黄	内外面に煤付着

表 11　溝出土 土器・陶磁器観察表（３）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
667	SD1001	上	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.5)				口縁部 1/12		淡黄	煤付着
668	SD1001	上	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.8)				口縁部 1/6		淡黄	煤付着
669	SD1001	上	土師質土器	羽釜			(11.9)				口縁部 1/4		灰白	
670	SD1001	上	土師質土器	羽釜			(14.9)				口縁部 1/6		灰白	
671	SD1001	上	土師質土器	羽釜			(15.0)				口縁～羽部 1/4		灰白	外面煤付着
672	SD1001	上	土師質土器	羽釜							羽部～胴部 1/4		灰白	外面煤付着
681	SD1008		近世陶器	丸碗	瀬戸美濃	登３～４	(8.8)				口縁部 1/14	鉄釉	褐 / にぶい黄橙	
682	SD1008		近世陶器	丸碗	瀬戸美濃	登４				(4.4)	底部 1/2	灰釉	浅黄 / 灰白	
683	SD1008		近世陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登７				(5.0)	底部 7/8	灰釉	黄褐 / 灰白	
684	SD1008		近世磁器	染付皿	肥前		(13.4)		(4.15)	(7.7)	1/3		明緑灰 / 灰白	五弁花・渦福字銘
685	SD1008		近世磁器	染付皿	肥前		(13.4)		(3.9)	(7.9)	口縁～底部 1/4		灰白 / 灰白	
686	SD1008		近世陶器	筒形湯呑	瀬戸美濃	登 10				(3.0)	体部～底部 1/2		明緑灰 / 灰白	
687	SD1008		近世陶器	火鉢	瀬戸	登８～９	(11.7)				口縁～体部 1/8	鉄釉	黒褐 / 灰白	
688	SD1008		瓦質土器	火鉢			(16.0)	(15.0)			口縁～体部 1/4		暗青灰	菊花文
689	SD1008		近世陶器	擂鉢	瀬戸	登	(28.2)				口縁部 1/28		暗褐 / 浅黄	
690	SD1008		施釉陶器	擂鉢	志戸呂			(11.8)			体部～底部 1/4		にぶい橙	
691	SD1010		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.1)				口縁部 1/18		浅黄	
692	SD1013		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.6)				口縁部 1/3		灰白	外面にスス付着
693	SD1013		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.2)				口縁部 1/10		灰白	
694	SD1003		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.3)				口縁部 1/10		浅黄橙	
695	SD1004		土師質土器	皿		非ロクロ	(11.2)				口縁部 1/18		浅黄橙	
696	SD2003		施釉陶器	平碗	瀬戸美濃	後期Ⅳ新	(13.6)				口縁～体部 1/4	灰釉	浅黄 / 灰白	
697	SD2003		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.5)				口縁部 1/8		淡黄	
698	SD2003		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.5)				口縁部 1/6		淡黄	
699	SD2003		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/8		浅黄橙	
700	SD2003		土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁部 1/16		灰白	
701	SD2003		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁部 1/8		浅黄橙	
702	SD2003		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(26.5)				口縁部 1/24		橙	外面に煤付着
703	SD2003		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(24.8)				口縁部 1/16		灰白	外面に煤付着
704	SD2003		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(20.2)				口縁部 1/24		灰白	外面に煤付着
705	SD2003		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(19.9)				口縁部 1/20		浅黄	
706	SD2004		土師質土器	皿		非ロクロ	8.6	6.4	1.9		完形		浅黄	
707	SD2004		土師質土器	皿		非ロクロ	9.0	5.4	2.2		完形		にぶい黄橙	
708	SD2004		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.1)				口縁部 1/4		浅橙	
709	SD2004		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)	(7.0)	(2.25)		1/4		浅黄	
710	SD2004		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.4)				口縁部 1/4		浅黄	
711	SD2004		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.1)	(6.1)	(1.8)		1/2		にぶい黄橙	
712	SD2004		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.3)	6.15	2.1		1/2		浅黄	
713	SD2004		近世磁器	染付碗	肥前						口縁～体部 1/16		灰白 / 灰白	
714	SD2004		近世陶器	小中	瀬戸	登９	(10.0)	4.0			体部～底部 1/3		灰白 / 灰白	
715	SD2004		近世陶器	乗燭	瀬戸	登 10～11	4.4	2.6	2.2		ほぼ完形	灰釉	灰白 / 灰白	
716	SD2004		近世陶器	擂鉢	瀬戸	登		(10.6)			底部 1/6		にぶい黄褐	
717	SD2004		近世陶器	擂鉢	瀬戸	登		(15.4)			体部～底部 1/12		明赤褐 / 淡黄	
718	SD2013		近世陶器	端反碗	瀬戸美濃	登	(10.3)		(5.15)	(3.6)	1/3		灰白	
719	SD2013		近世陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登６～７				(4.1)	底部 1/3	鉄釉	暗赤褐 / にぶい黄橙	
720	SD2013		近世陶器	片口	瀬戸美濃	登８～９				(10.3)	底部 1/5	灰釉	淡黄	
721	SD2013		近世陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登９	(29.0)				口縁部 1/12		にぶい赤褐	
722	SD2013		近世陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登９	(29.7)				口縁部 1/12		赤褐	
723	SD2011		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(6.8)	底部 1/4		灰白	
724	SD2011		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.6)				口縁～体部 1/5		灰白	
725	SD2011		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.0)				口縁部 1/10		浅黄	外面に煤付着
726	SD2011		施釉陶器	擂鉢	古志戸呂			(12.0)			体部～底部 1/4		こぶい橙	
727	SD2014		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(6.4)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
728	SD2014		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				7.0	底部のみ		灰白	
729	SD2014		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				6.6	底部のみ		灰白	
730	SD2014		土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁～体部 1/6		灰白	
731	SD2014		土師質土器	皿		非ロクロ	(11.2)				口縁～底部 1/5		灰白	
732	SD2014		土師質土器	羽釜							環のみ		淡黄	
733	SD2014		土師質土器	皿		ロクロ		7.3			底部		浅黄橙	
734	SD2014		中世陶器	甕	常滑		(24.3)				口縁部 1/12		灰赤	
735	SD2014		施釉陶器	擂鉢	古志戸呂			(11.5)			底部～体部 1/8		にぶい橙	
736	SD2014		近世陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登９	(34.5)				口縁部 1/16		褐 / にぶい黄橙	
737	SD2014		近世陶器	丸碗	瀬戸美濃	登５～６				(4.8)	底部 1/2	灰釉か	灰白	
738	SD2014		近世陶器	丸碗	瀬戸美濃					(3.7)	体部～底部 1/4	鉄釉と灰釉か	オリーブ黄 / 暗灰黄	
739	SD2014		近世陶器	灯明皿	瀬戸美濃	登 11	(10.0)	(4.4)	(2.3)		口縁～底部 1/3	灰釉か	灰白 / 灰白	
740	SD2014		近世磁器	香炉	肥前		(9.6)				口縁～体部 1/3	青磁	明緑灰 / 灰白	
744	SD3014		土師器	甕				3.8			底部		浅黄橙	
745	SD3014		土師質土器	皿		非ロクロ	9.5)				口縁部 1/16		浅黄橙	
746	SD3013		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ-2				(5.8)	底部 2/3		灰白	
747	SD3013		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(17.8)				口縁部 1/18		灰白	
748	SD3013		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(22.2)				口縁部 1/12		にぶい黄橙	外面に煤付着
749	SD3013		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁部 1/20		浅黄橙	
750	SD3013		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.7)				口縁部 1/8		灰白	
751	SD3013		土師質土器	皿		非ロクロ	(7.9)				口縁部 1/13		浅黄橙	
752	SD3009		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２					底部 1/2		灰黄	高台部欠損
753	SD3009		施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	後Ⅳ新～大１					体部 1/4		灰褐	
754	SD3009		土師質土器	内耳鍋		半球形	(28.9)				口縁部 1/8		橙	外面に煤付着
757	SD3006		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(17.3)				口縁部 1/16		灰白	
759	SD3008		須恵器	フラスコ瓶							頸部	自然釉	灰白	
760	SD3008		近世陶器	青磁	肥前		(14.4)				口縁部 1/16	青磁	明緑灰	
761	SD4001		須恵器	坏蓋							つまみ部分のみ		浅黄	
762	SD4001		灰釉陶器	碗						(7.5)	底部 1/2		にぶい黄橙	
763	SD4001		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(6.8)	底部 1/4	自然釉	灰黄褐	
764	SD4001		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部 2/3		灰白	
765	SD4001		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(7.8)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	

表12　溝出土 土器・陶磁器観察表（4）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径(cm)	残存率	釉薬	色調	備考
766	SD4001		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－1				(7.5)	底部 1/4		灰白	
767	SD4001		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－1				(7.8)	底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
768	SD4001		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－2				6.05	底部		灰黄	
769	SD4001		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ				(6.1)	底部		灰白	
770	SD4001		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－2				(5.8)	底部 1/3		灰黄	
771	SD4001		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－2				(7.1)	底部 1/4		灰白	
772	SD4001		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(24.0)				口縁部 1/12		淡黄	
773	SD4001		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(22.2)				口縁部 1/10		明黄褐	
774	SD4001		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.3)				口縁部 1/12		浅黄橙	外面に煤付着
775	SD4001		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(25.8)				口縁部 1/16		橙	外面に煤付着
776	SD4001		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(25.2)				口縁部 1/12		灰白	外面に煤付着
777	SD4001		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(24.5)				口縁部 1/8		浅黄橙	外面に煤付着
778	SD4001		土師質土器	内耳鍋		半球形	(26.8)				口縁～体部 1/12		にぶい黄橙	
779	SD4001		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(28.2)				口縁～体部 1/14		浅黄橙	
780	SD4001		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁部 1/6		灰白	
781	SD4001		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.3)	(6.4)	(1.75)		口縁～底部 1/6		灰白	
782	SD4001		土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)				口縁部 1/8		にぶい黄橙	
783	SD4001		中世陶器	甕	常滑		(37.6)				口縁部 1/12		にぶい赤褐	
784	SD4001		中世陶器	甕	常滑			(14.6)			体部～底部 1/4		にぶい黄褐	
785	SD4001		中世陶器	片口	常滑		(22.5)				口縁部 1/12		にぶい赤褐	
786	SD4001		瓦質土器	火鉢							体部 1/4		灰	
787	SD4001		施釉陶器	擂鉢	志戸呂		(14.6)				口縁～体部 1/5		にぶい褐	
788	SD4001		施釉陶器	擂鉢	初山		(28.2)				口縁部 1/24		極暗赤褐	
789	SD4001		施釉陶器	擂鉢	古志戸呂			(10.6)			底部 1/3		浅黄橙	
790	SD4001		施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	大窯２～３		(11.5)			底部 1/6		褐灰 / 灰白	
791	SD4001		施釉陶器	天目茶碗	初山		(10.7)				口縁～体部 1/5	鉄釉	灰褐 / にぶい黄橙	
792	SD4001		施釉陶器	天目茶碗	初山					4.2	底部 7/8	鉄釉	灰赤・黒褐 / 灰白	
793	SD4001		近世陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登３～４				4.2	体部～底部	鉄釉	黒褐 / 灰白	
794	SD4001		近世陶器	鬼呂茶碗	瀬戸美濃					3.4	底部	灰釉	オリーブ褐 / 灰白	
795	SD4001		近世陶器	鬼呂茶碗	瀬戸美濃			(9.8)			口縁部 1/10	灰釉	暗褐 / 灰白	
796	SD4001		施釉陶器	丸碗	志戸呂					4.7	底部	鉄釉	黒 / 淡黄	
797	SD4001		近世陶器	灰釉丸碗	瀬戸美濃			(8.5)			口縁～体部 1/5	灰釉	灰白 / 灰白	
798	SD4001		近世陶器	鉄茶碗	瀬戸美濃	登９				4.0	底部	灰釉と鉄釉か	灰白・黒 / 灰白	
799	SD4001		近世陶器	鉄茶碗	瀬戸美濃	登９～10				3.6	底部 1/2	鉄釉	オリーブ褐 / 灰白	
800	SD4001		近世陶器	片口	瀬戸美濃	登９	(13.4)		5.8	5.85	1/4	灰釉	明黄褐 / 灰白	皿雪
801	SD4001		近世陶器	片口	瀬戸美濃	登８	(11.7)		5.9	5.8	1/3	灰釉	明黄褐 / 淡黄	
802	SD4001		施釉陶器	小鉢	志戸呂		(8.0)	(6.2)	(4.15)		1/4	鉄釉か	浅黄 / にぶい赤褐	
803	SD4001		貿易陶磁	染付皿		C 群		(3.4)			底部 1/4		明緑灰 / 灰白	
804	SD4001		近世磁器	染付茶碗	肥前					4.3	体部～底部 1/4	蛇の目釉剥ぎ	灰白	「大明年製」
805	SD4001		近世磁器	染付茶碗	肥前					(3.7)	体部～底部 1/2	蛇の目釉剥ぎ	暗緑灰 / 灰白	
806	SD4001		近世磁器	青磁瓶	肥前						頸部 1/4	青磁	明緑灰 / 灰白	
807	SD4001		近世陶器	乗燭	瀬戸美濃	登10～11	4.5	2.6	1.85		1/4	灰釉	灰白	
813	SD8002		土師質土器	皿		非ロクロ	(7.4)				口縁部 1/8		淡黄	
814	SD8002		施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	後期	(12.4)				口縁部 1/9	鉄釉	赤黒 / にぶい橙	
815	SD8002		施釉陶器	卸皿	瀬戸美濃	後期		(8.0)			底部 1/4		橙	
816	SD8002		施釉陶器	卸皿	瀬戸美濃	後期		(7.6)			底部 1/5		灰白	
817	SD8002		土師質土器	羽釜			(20.6)				口縁部 1/20		灰白	
818	SD8002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(27.2)				口縁部 1/14		灰白	
822	SD6002		須恵器	坏蓋			(10.0)				口縁～体部 1/5		灰	
823	SD6002		須恵器	坏蓋							つまみ部分のみ		灰黄	
824	SD6002		須恵器	坏蓋			(14.0)				口縁部 1/10	外面・自然釉	灰白	
825	SD6002		須恵器	坏			(8.4)				口縁～体部 1/10		灰	
826	SD6002		須恵器	坏			(9.4)				口縁～体部 1/6		灰	
827	SD6002		須恵器	坏				(7.2)			底部 1/4		灰白	
828	SD6002		須恵器	坏			(14.2)			(9.0)	口縁～底部 1/3		黄灰	
829	SD6002		須恵器	坏						(8.9)	底部 1/6		灰白	
830	SD6002		須恵器	坏			(18.7)				口縁～体部 1/6		淡黄	
831	SD6002		須恵器	壺				(6.4)			底部 1/2		灰白	
832	SD6002		須恵器	壺						(12.2)	底部 1/5		灰白	
833	SD6002		須恵器	壺			(12.9)				口縁～頸部 1/3	自然釉	灰白	
834	SD6002		土師器	甕			(21.1)				口縁部 1/9		にぶい橙	外面に煤付着
835	SD6002		土師器	甑							把手のみ		浅黄橙	
836	SD6002		土師器	甑							把手のみ		にぶい橙	
837	SD6002		灰釉陶器	碗						(8.5)	底部 1/3		灰黄	
838	SD6002		灰釉陶器	碗							底部 1/4		浅黄	高台端部欠損
839	SD6002		灰釉陶器	碗							底部 1/4		黄灰	高台部欠損
840	SD6002		灰釉陶器	碗						(6.6)	底部 1/4		灰白	
841	SD6002		灰釉陶器	碗							底部 1/4		灰白	高台端欠損
842	SD6002		灰釉陶器	碗						(6.1)	底部 1/2		灰白	
843	SD6002		灰釉陶器	碗						(6.4)	底部 1/2		灰白	
844	SD6002		灰釉陶器	碗						(6.0)	底部 1/4		灰黄	
845	SD6002		灰釉陶器	碗						(6.3)	底部 1/2		浅黄	
846	SD6002		灰釉陶器	碗						6.1	底部		灰白	
847	SD6002		灰釉陶器	碗						(7.2)	底部 1/3		灰白	
848	SD6002		灰釉陶器	碗						(6.0)	底部 1/4		灰白	
849	SD6002		灰釉陶器	耳皿				4.6			底部		にぶい黄橙	
850	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅰ－2				(7.9)	体部～底部 1/2	自然釉	灰白	
851	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－1				(7.7)	体部～底部 1/2	自然釉	灰白	
852	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅱ				(6.4)	体部～底部	内面・自然釉	灰白	
853	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅱ				(7.3)	底部 1/2		灰白	
854	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部 1/6		灰黄	
855	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅱ				(6.2)	体部～底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
856	SD6002		山茶碗	碗	東濃	Ⅱ				(7.2)	底部 1/4		灰白	
857	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－1				(5.8)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
858	SD6002		山茶碗	碗	濃美湖西	Ⅲ－1				6.6	底部		灰白	

表13　溝出土 土器・陶磁器観察表（5）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
859	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.4)	底部 1/4	内面・自然釉	灰黄	
860	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.3	体部～底部		灰白	
861	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.3	体部～底部		灰白	
862	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				7.45	底部		灰白	
863	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.4	体部～底部	内面・自然釉	灰黄	
864	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(5.4)	底部 1/4		灰白	
865	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(4.4)	体部～底部 1/2	自然釉	灰白	
866	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部		灰黄	
867	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.2)	底部 1/2		灰白	
868	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.4)	底部 1/2		浅黄橙	
869	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.2)	底部 1/2		灰黄	
870	SD6002		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.4)	底部 1/2	内面・自然釉	浅黄	
871	SD6002		山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.3			底部	内面・自然釉	灰白	
872	SD6002		山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.1			底部		灰黄	
873	SD6002		山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.5			底部	内面・自然釉	灰白	
874	SD6002		山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		(4.7)			底部 1/3		灰黄	
875	SD6002		中世陶器	片口鉢	湿美湖西	Ⅰ期				(14.1)	底部 1/5		灰白	
876	SD6002		中世陶器	片口鉢	湿美湖西	Ⅰ期				(15.9)	底部 1/4	外面・自然釉	灰白	
877	SD6002		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	D1 群				5.2	底部 2/3	青磁	明緑灰 / 灰白	端反碗
878	SD6002		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 群				(6.5)	底部 1/4	青磁	暗オリーブ灰 / 黄灰	
879	SD6002		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B2 群					体部片	青磁	オリーブ黄 / 灰白	
880	SD6002		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	A2 群					体部片	青磁	オリーブ灰 / 灰白	
881	SD6002		貿易陶磁	青磁盤		Ⅲ類	(19.7)				口縁部 1/12	青磁	明緑灰 / 灰白	
882	SD6002		施釉陶器	瓶子Ⅱ類	瀬戸美濃	中期Ⅰ～Ⅲ					体部片	灰釉	オリーブ黄 / 灰白	
883	SD6002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(25.4)				口縁部 1/7		浅黄橙	外面に煤付着
884	SD6002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(23.8)				口縁部 1/4		浅黄橙	
885	SD6002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(23.7)				口縁部 1/7		にぶい橙	
886	SD6002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.1)				口縁部 1/12		にぶい黄橙	外面に煤付着
887	SD6002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(23.0)				口縁部 1/16		にぶい黄橙	
888	SD6002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.2)				口縁部 1/5		浅黄	
889	SD6002		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(27.5)				口縁部 1/16		にぶい黄橙	外面に煤付着
890	SD6002		土師質土器	釜							環のみ		にぶい黄橙	外面に煤付着
891	SD6002		土師質土器	釜			残存高 3.6				脚部		にぶい黄橙	全体にスス付着
892	SD6002		土師質土器	皿		ロクロ	(11.5)	4.85	2.75		1/12		にぶい橙	
893	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部 1/6		灰白	
894	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)	(6.9)	(1.75)		口縁～底部 1/5		浅黄橙	
895	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	7.3	5.05	2.1		1/2		浅黄橙	
896	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)	(6.0)	(1.85)		口縁～底部 1/4		灰白	
897	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.2)	(5.0)	(2.15)		口縁～底部 1/5		浅黄橙	
898	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.2)				口縁部 1/3		灰白	
899	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.6)	(6.5)	(2.1)		口縁～底部 1/5		浅黄橙	
900	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)	(6.0)	(2.0)		口縁～底部 1/3		浅黄橙	
901	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	9.2	6.45	1.75		ほぼ完形		浅黄	
902	SD6002		土師質土器	皿		非ロクロ	9.2	7.6			口縁～体部 1/2		灰白	
903	SD6002		施釉陶器	擂鉢	古志戸呂		(25.4)				口縁部 1/9		浅黄橙	
904	SD6002		施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	大窯２	(23.4)				口縁部 1/8		灰赤	
905	SD6002		施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	後Ⅳ新～大２		(11.0)			底部～体部 1/6	鉄釉	灰白 / 灰赤	
906	SD6002		施釉陶器	花瓶	古志戸呂		(9.6)				口縁部 1/8	鉄釉か	黄褐 / 灰黄	
907	SD6002		施釉陶器	花瓶	古志戸呂						基部のみ	?	灰黄褐 / 浅黄	
908	SD6002		施釉陶器	丸皿	瀬戸美濃	大窯１～２				(6.3)	底部 1/3	灰釉	灰白 / 灰オリーブ	見込に菊花文
909	SD6002		施釉陶器	丸皿	瀬戸美濃	大窯１～２				(6.7)	底部	灰釉	灰白 / オリーブ灰	
910	SD6002		近世陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登３～４	(12.9)				口縁～体部 1/18	鉄釉	黒 / 灰白	
911	SD6002		近世陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登５～６	(11.7)				口縁～体部 1/8	灰釉	暗褐 / 灰白	
912	SD6002		近世陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登５～６	(9.7)				口縁部 1/6	灰釉か	暗褐 / 浅黄	
913	SD6002		近世陶器	尾呂茶碗	瀬戸美濃	登７				5.0	底部 5/8	灰釉	褐 / 浅黄	
914	SD6002		近世陶器	柳茶碗	瀬戸美濃	登８				(4.2)	体部～底部 1/4		灰白	
915	SD6002		近世陶器	鉄湯呑	瀬戸美濃	登８				3.1	体部～底部 1/4	鉄釉	黒・明黄褐 / 灰白	
916	SD6002		近世陶器	小中	瀬戸美濃	登８～９	(10.0)		5.1	3.3	1/4		灰白	
917	SD6002		近世陶器	小中	瀬戸美濃	登８～９	(9.8)				口縁～体部 1/8		灰白	
918	SD6002		近世陶器	小中	瀬戸美濃	登８～９				(4.0)	底部 2/3		灰白	
919	SD6002		近世磁器	皿	肥前		(13.1)		3.75	(7.3)	1/3		明緑灰 / 灰白	五弁花・渦福字銘
920	SD6002		近世磁器	碗	肥前		(11.6)		5.75	4.15	1/4		灰白	
921	SD6002		近世磁器	碗	肥前					3.8	体部～底部 1/3		明青灰 / 灰白	大明年製銘
922	SD6002		近世磁器	碗	肥前					3.6	底部 1/2		明青灰 / 灰白	大明年製銘
923	SD6002		近世磁器	碗	肥前					3.3	底部 2/3		明緑灰 / 灰白	大明年製銘
924	SD6002		近世陶器	摺絵皿	瀬戸美濃	登６～７	(12.7)				口縁～体部 1/9	灰釉	浅黄	
925	SD6002		近世陶器	梅文皿	瀬戸美濃	登８				3.0	底部		灰白	
926	SD6002		近世陶器	向付	瀬戸美濃					(6.0)	底部 1/2	灰釉	灰白 / 灰オリーブ	角鉢
927	SD6002		近世陶器	仏飯具	瀬戸美濃	登７～８					体部	灰釉	灰白	
928	SD6002		施釉陶器	香炉	志戸呂		(11.4)	(8.6)	(5.95)		口縁～底部 1/4	鉄釉か	浅黄	
929	SD6002		施釉陶器	茶壺	志戸呂		(12.2)				口縁部 1/8	鉄釉	浅黄橙 / 灰褐	
930	SD6002		近世陶器	片口	瀬戸美濃	登７	(15.2)				口縁部 1/8	灰釉	明黄褐 / 浅黄	
931	SD6002		近世陶器	折縁袖長鉢	瀬戸美濃	登７	(14.4)				口縁部 1/13	灰釉	灰白	
932	SD6002		近世陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登１～２	(25.8)				口縁部 1/28	鉄釉	灰白 / 灰赤	
933	SD6002		近世陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登６	(28.8)				口縁部 1/12	鉄釉	灰白 / にぶい赤褐	
934	SD6002		近世陶器	擂鉢	瀬戸美濃	登４	(35.3)				口縁～体部 1/8		暗赤灰 / にぶい黄橙	

4．河川

SR8001（図 112 ～ 150、図版 8 ～ 16・20 ～ 22・51・58・61・62・77・80 ～ 82・84 ～ 86）

主に 8 区に位置する河川跡である。やや蛇行しながら、調査区内を南北に縦断している。経路はやや異なるが、この位置には現在大門川が流れており、SR8001 はその前身の流路とみられる。地形的にも周辺に比べて低くなっており、上流には河川の痕跡が明瞭に残されている。調査時には周囲は水田として利用されていたが、昭和 14 年までは「干杭池」と呼ばれる溜池となっており、8 区の東端には高さ 2 m程の堤が残存していた。層位は、大きくⅠ～Ⅳの 4 層に分けることができ、Ⅲ層の堆積後には両岸に護岸施設が構築されている。

図 112　SR8001 実測図

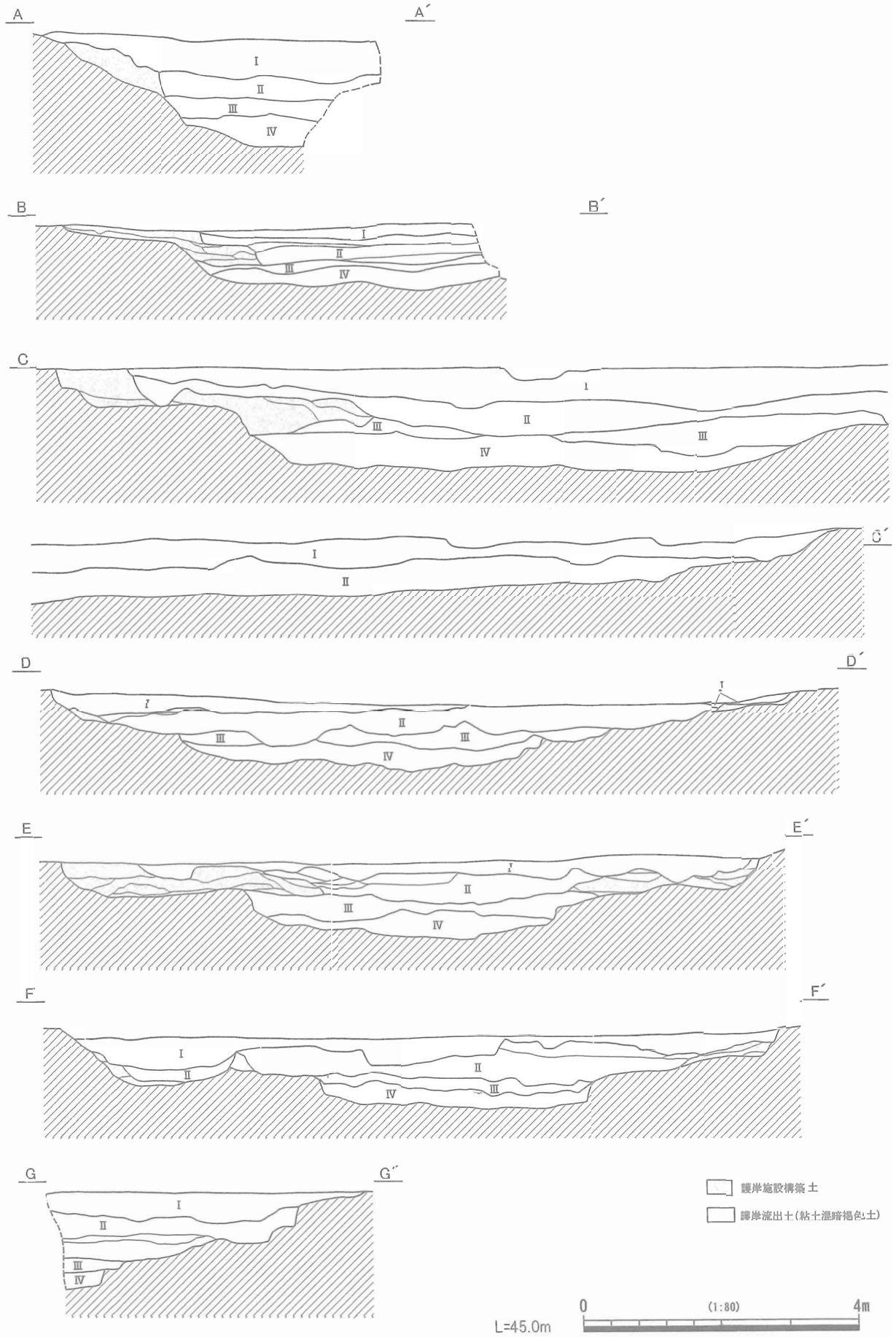


図 113　SR8001 土層断面図

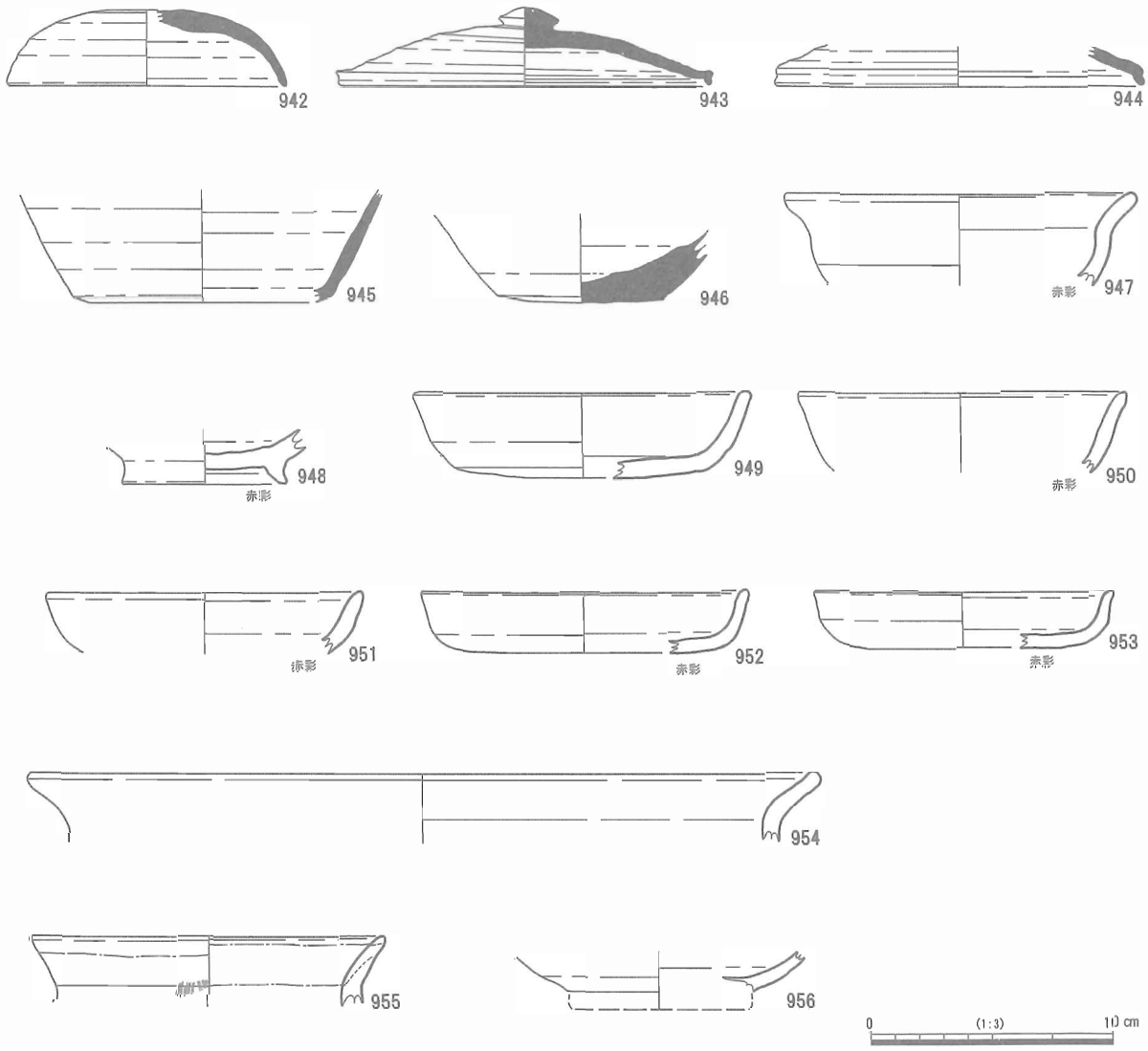


図 114　SR8001 Ⅳ層出土遺物

（1）Ⅳ層

最下層にあたるⅣ層は、拳大程度の礫を多量に含む砂礫層である。細かくはさらに数層に分けることができ、部分的に腐植土も含まれてはいるが、ほとんどは砂と礫によって構成されている。場所によって多少異なるが、底面から平均 30 ㎝程の厚さで堆積している。

遺物は少ないが、須恵器や土師器、灰釉陶器が出土している。942 ～ 944 は須恵器の坏蓋である。942 はローリングによるためか、表面全体が摩滅している。943 は一部欠損するが、完形に近いものである。Ⅳ層出土遺物はほとんどが小破片となっており、完形に近いものはこの 1 点のみである。945 は須恵器の坏、946 は須恵器の壺である。947 は土師器の鉢である。全体的に表面が摩滅しているが、赤彩の痕跡が認められる。948 ～ 950 は土師器の坏である。948 と 950 は軟質で、内外面に赤彩が施されているが、949 は比較的硬質の焼きとなっており、赤彩は認められない。951 ～ 953 は土師器の皿である。いずれも内外面に赤彩が認められる。954 と 955 は土師器の甕である。956 は灰釉陶器の碗である。口縁部を欠くが、残存する体部下半の内外面に灰釉は認められない。10 世紀頃のものであろう。

これらの遺物から、Ⅳ層は 10 世紀頃までの堆積層であると推測される。

（２）Ⅲ層

Ⅲ層は、砂を多く含む暗褐色土が堆積しており、数cm単位で砂が層状に堆積する部分も認められる。この時期、河川が比較的安定した穏やかな流れであったことが伺える。部分的にしか認められない場所もあるが、平均30㎝程度の厚さで堆積している。Ⅲ層の堆積により、河川の一段深くなっている部分については、中央付近が少し窪む程度で、ほぼ埋没してしまっている。

遺物は、Ⅳ層でみられた須恵器、土師器、灰釉陶器の他、山茶碗など中世の遺物が出土している。957～959は須恵器であり、957と958は蓋、959は高坏である。960は土師器の坏で、内外面には赤彩が確認される。961は土師器の鉢である。962～965は灰釉陶器である。966～983は山茶碗で、いずれも渥美湖西産の製品である。966～979は碗、980は小碗、981～983は小皿である。時期としてはⅠ期からⅢ－２期まで確認されるが、Ⅲ－２期のものは少数である。984と985は片口鉢である。986は土師質土器皿である。坏形の形態のもので、厚手のつくりとなっており、口縁部には強いナデ調整が施されている。

Ⅲ層では、13世紀後半までの遺物が確認できるが、全体の構成としては、13世紀前半までの遺物が大半を占め、13世紀後半の遺物も一部含まれている程度に過ぎない。後述する護岸施設やⅡ層出土遺物などからみて、Ⅲ層は13世紀の中頃（後半でも比較的早い段階）までに堆積したものとみてよいであろう。

（３）護岸施設

Ⅲ層の堆積後には、河川の両岸に護岸施設が築造されている。護岸施設は、基底部に打ち込まれた直立杭を芯材とし、主に粘土をブロック状に混ぜた土を積み上げることで構築されている。また、部分的ではあるが、杭列の間に敷設された木の枝などの構造材や矢板の使用も確認されている。深く打ち込まれたものを中心に、芯材は比較的良好に残存するが、構築土については多くが後世の水流によって失われている。法面の残存する部分は確認されておらず、その構造については明らかでない。氾濫によって決壊している部分もみられるが、護岸施設の修築や改築の痕跡は発見されていない。

検出された芯材の杭列は、大きくＡ～Ｆに分けられる。

杭列Ａは、東岸の北端で検出された杭列である（図116）。この部分は、Ⅱ層の時期の氾濫（SR8002）によって大きく削られており、施設の本体は完全に失われ、深く打ち込まれた木杭がかろうじて残存する程度であった。細かくみると、河岸に平行する杭列が３列程認識できる。芯材には、いずれも丸杭が用いられている。直径４～７㎝の比較的太い杭が多いが、太い杭だけが水流に流されずに残存した可能性もある。33本検出されており、樹種としてはマツが26本、エノキ属が２本、コナラ、キハダ、カヤノキ、ナナカマド、コジイが各１本と、マツが圧倒的に多い。

杭列Ｂ（図117）は、杭列Ａの南側で検出されている。北側では岸から約２ｍの位置に打たれており、徐々に岸から離れるが、17ｍ程下流の場所で屈曲し、再び岸に近づく。杭列Ｂの芯材には、丸杭と角杭が併用されている。木杭は合計102本発見されているが、角杭が44本と４割近くを占めている。太さは様々で、一辺７㎝程の角材から、杭と言うよりは枝の先を尖らせたような、直径２㎝程しかないものまでみられる。また、樹種に関しても、非常にバラエティーに富んでいる。樹種として最も多いのは、コジイで34本確認されている。次いで、マツが25本、スダジイが19本、モミ属が９本と続く。さらにこれら以外にも、ユズリハが３本、スノキとエゴノキが２本、アセビ・ツツジ・エノキ・クマノミズキ・ウツギ属・コナラ・サカキ・アカガシ属・クリが各１本と、合計16種も確認されている。ただし、角材

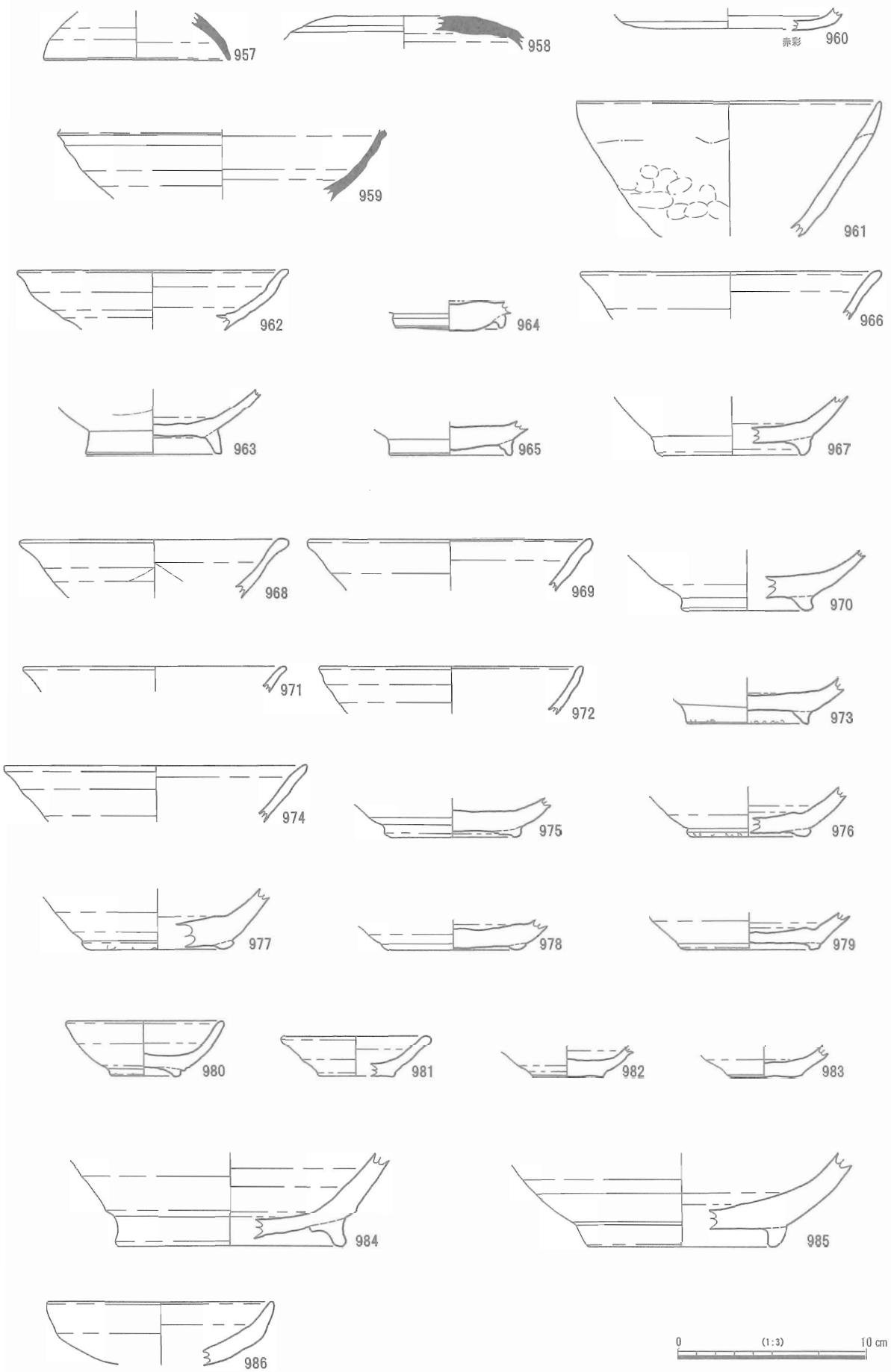


図 115　SR8001 Ⅲ層出土遺物

図 116　SR8001 護岸施設構築材検出状況図（１）

の樹種はコジイとスダジイ、モミ属の３種に限られており、おそらくは転用材であろうが、ある一定の場所から調達された可能性が伺える。

杭列Ｃ（図 117）は、杭列Ｂの対岸に位置している。約３ｍ程の長さしか残らないが、杭列Ｂと平行するように南側が東に向かって屈曲しており、護岸施設によって、河川の流路を意識的にやや東向きに変えていた可能性が想定される。芯材はいずれも丸杭で、直径２㎝程の細いものから、６㎝程度の太いものまでみられる。樹種は、ズダジイ・コジイ・シキミ・ウツギ・クスノキといった、マツ以外のものが使用されている。

杭列Ｂの中央付近と杭列Ｃでは、杭列に沿わせて置かれた枝が検出されている。いずれも長さ１ｍ

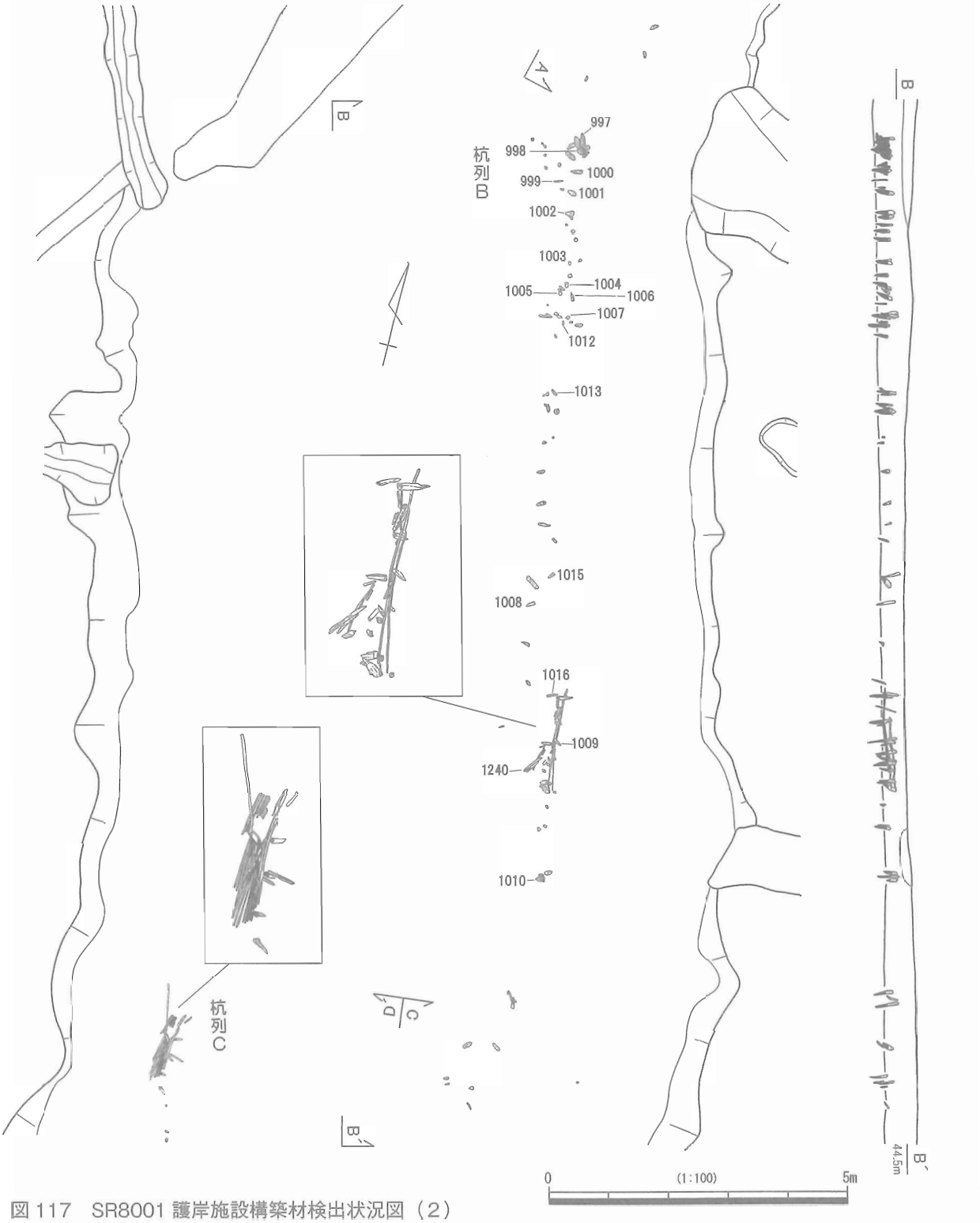


図 117　SR8001 護岸施設構築材検出状況図（2）

程度の枝で、杭列Ｃでは数十本敷き詰められた状態で発見されている。これらの枝は、護岸施設の基底部に人為的に配置された構造材とみてよい。護岸施設の基底部や構築土内における有機物の有無については、この実測図以外に記録がなく不明とせざるを得ないが、この部分のみに特殊な工法が採用されたとは考えにくく、枝のほか草や樹皮などの構造材がもっと広い範囲で敷設されていた可能性が高いと推測される。

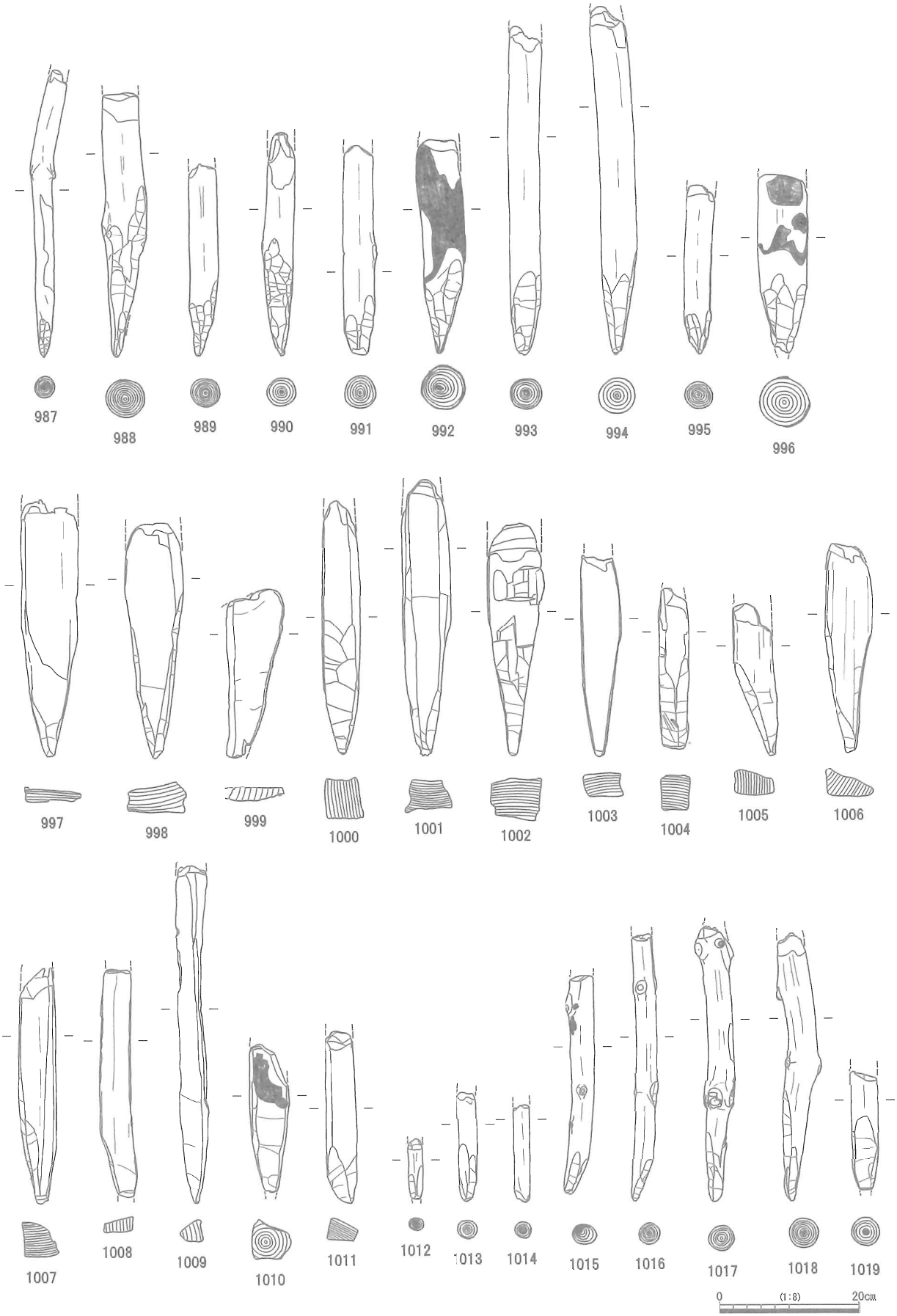


図 118　SR8001 護岸施設内出土木杭（杭列 A・B）

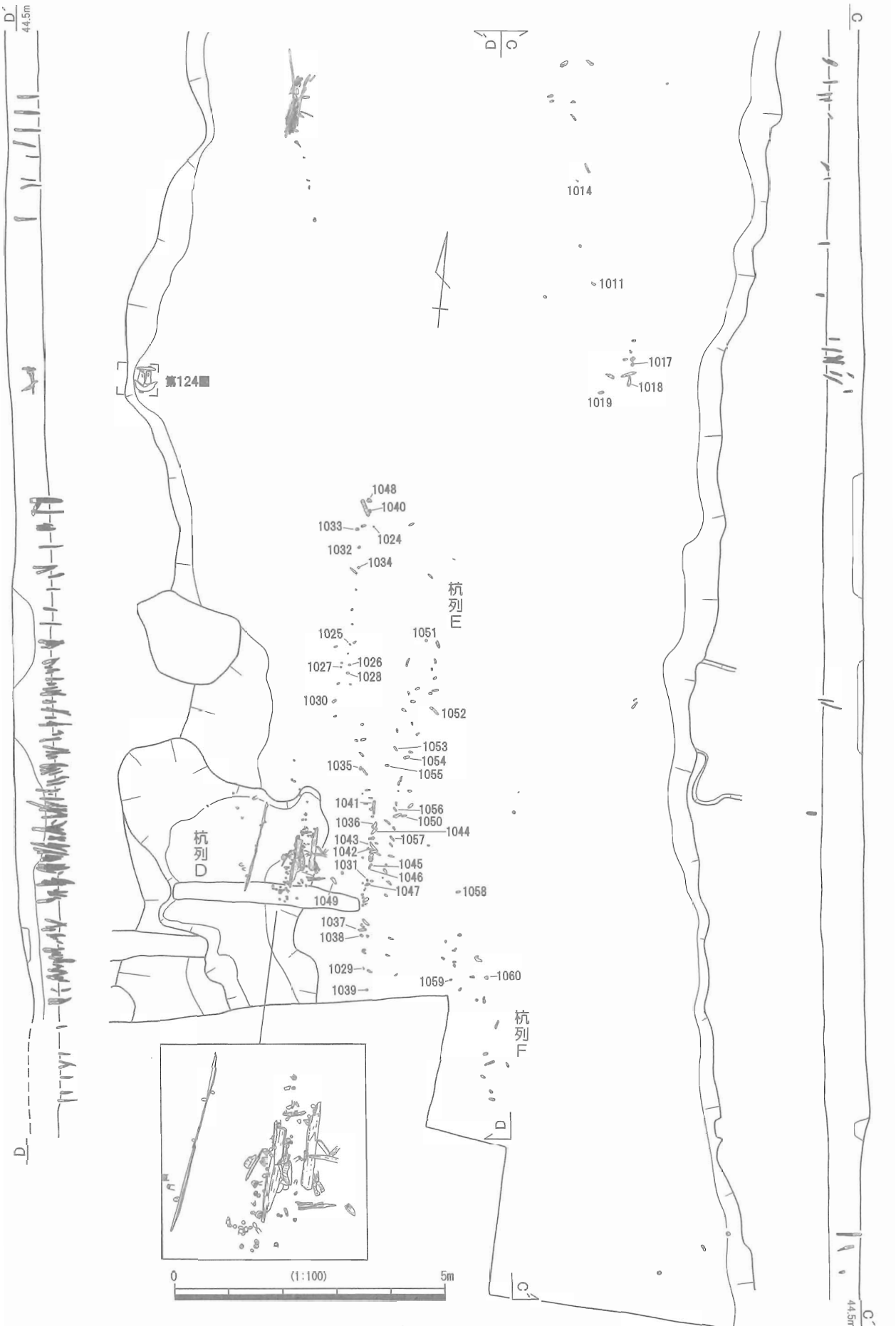


図 119　SR8001 護岸施設構築材検出状況図（3）

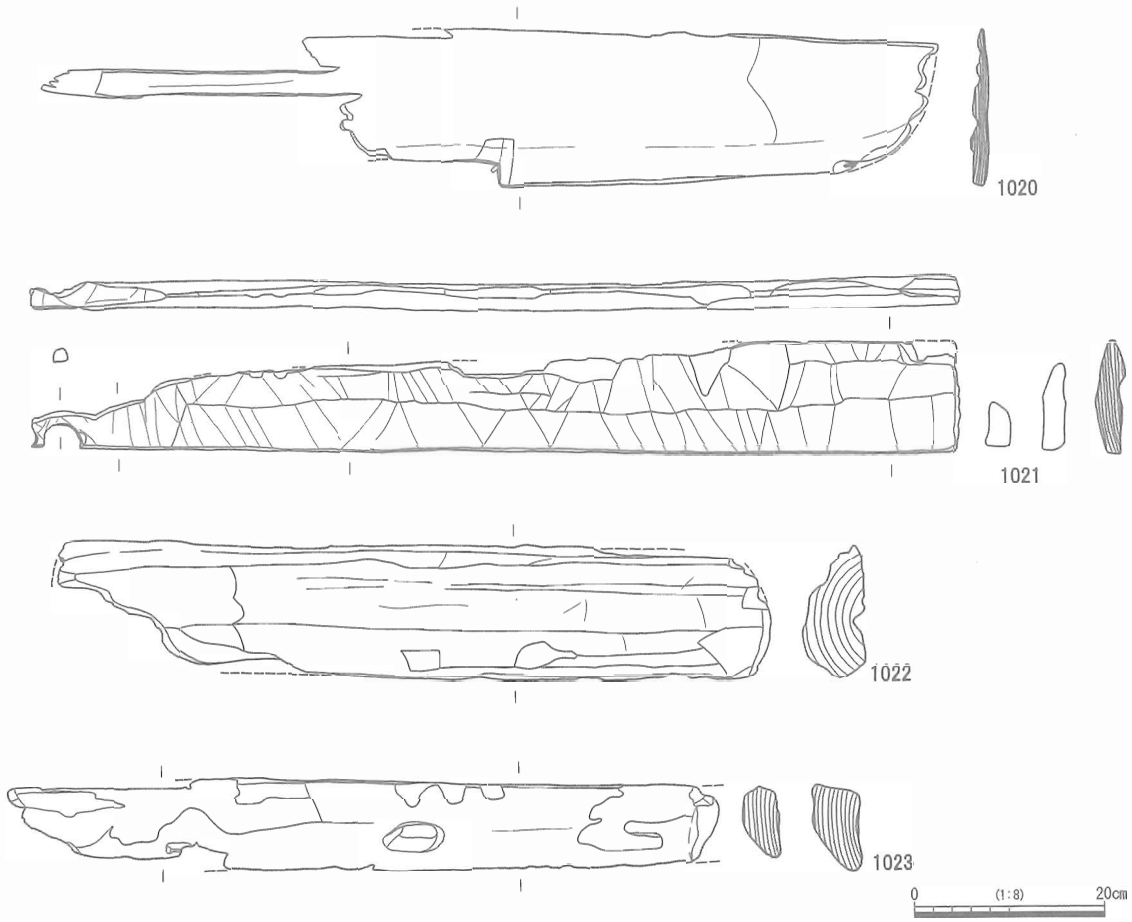


図 120　SR8001 護岸施設内出土矢板（杭列 D）

杭列 D（図 119）は西岸の南端に位置しており、矢板も検出されている。上部が後世の水流によって失われており、最下段が残存するのみである。矢板は杭によって挟み込むような形で固定されている。一見階段のようにも見えるが、矢板は護岸の構築土で埋め殺しされており、護岸施設の内部構造であるとみて間違いない。矢板を用いた構造が検出されたのは杭列 D のみであり、全体からみるとやや特殊な構造であるといえる。この場所は、護岸の築造以前には、河岸が崩落して大きく抉れた状態となっており、より強固な構造とするために、このような工法が用いられたものと推測される。矢板に用いられている板材は、長さ 70 ㎝～１ｍ、幅９～ 16 ㎝の大きさのもので、厚さは２㎝程度のものから６㎝程の厚いものまで様々である。ほぞ穴がみられるものもあり、多くは転用材が利用されているものと推測される。樹種については 1020 と 1021 がヒノキ、1022 はスダジイ、1023 はコジイとなっており、いずれも建築材として利用される樹木である。

杭列 E（図 119）は杭列 D の東側に位置しており、非常に多くの芯材が検出されている。平行する３～４列程の杭の並びが認識できる。杭は合計 111 本発見されており、角杭が４本認められるが、他は全て丸杭である。太さは２㎝以下の細いものから、８㎝程もある太いものまで様々である。樹種も多様であるが、最も多いのがマツで 61 本、次いでシキミが 17 本となっており、この２種で全体の約７割を占めている。

マツを多用する傾向は杭列 A・B などにもみられるが、シキミが多く用いられているのは杭列 E の特徴と言えよう。他には、マンサクが４本、コジイ・カキノキ・クリが各３本、コナラ・サクラ・ヤマザクラ・クスノキ・スダジイが各２本、カマツカ・アカメガシワ・ユズリハ・ソツジ・ヤマモガシ・ミ

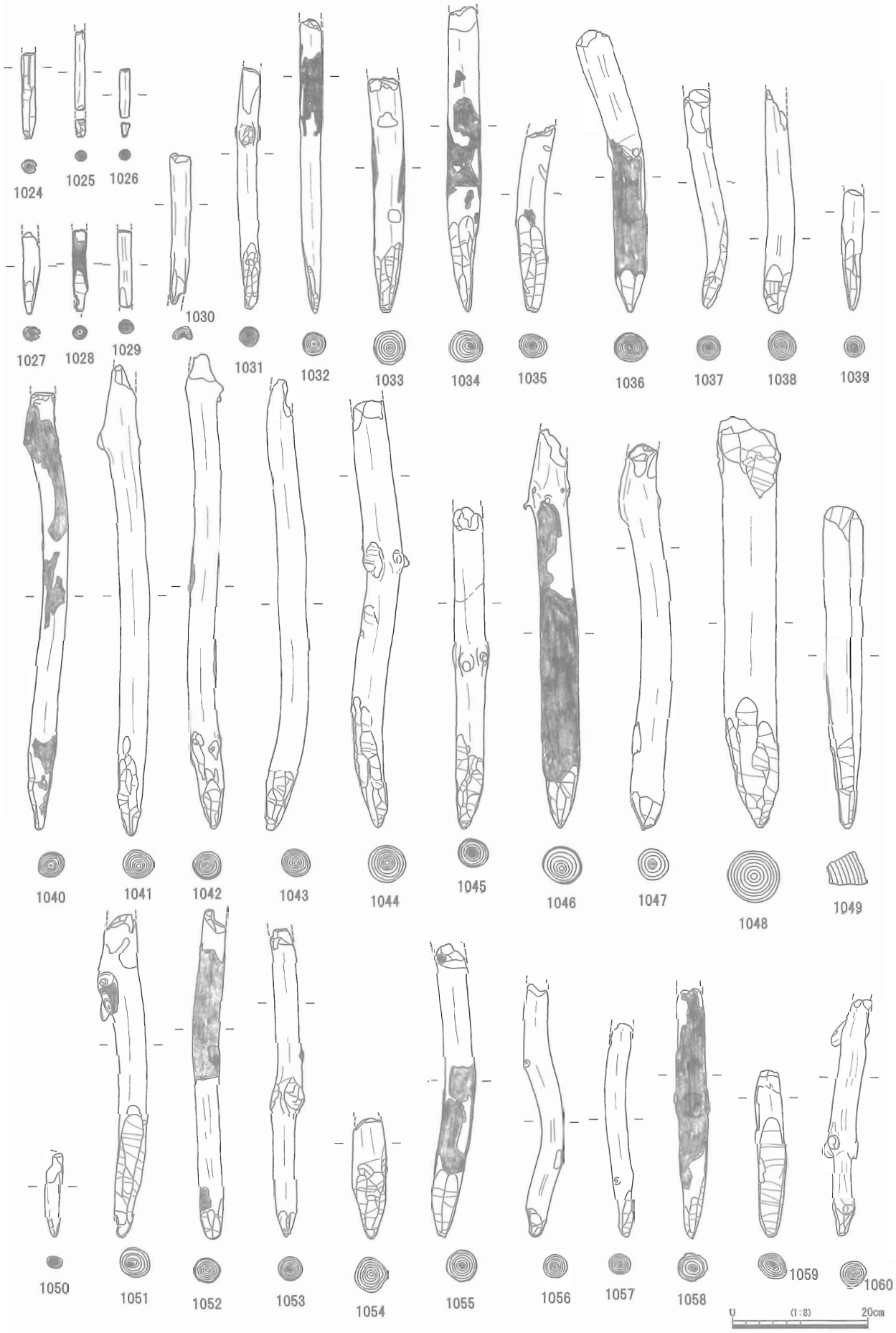


図 121　SR8001 護岸施設内出土木杭（杭列 E・F）

図 122　SR8001 護岸施設構築材出土位置図（杭列 G）

ズキ・イヌシデ・エゴノキ・サカキ・イボタノキが各１本と、全部で 21 種もの樹種が確認されている。

杭列Ｆ（図 119）は、杭列Ｅのさらに東側に位置する。周辺に護岸構築土は検出されていないが、杭列Ｅとほぼ平行しているなどの位置関係から、護岸施設の芯材であると判断される。杭がⅢ層の上面から少し出る程度にしか残存していなかったことからも、護岸構築土は流失してしまったものと推測される。杭は合計 22 本検出されており、すべて丸杭である。ほとんどが、直径４～５㎝前後の太さのものである。樹種は同定を行った 14 本中、マツが 10 本と大半を占めている。マツ以外の樹種としては、クリが３本とナシ亜科が１本確認されている。

大溝 SD2001 の排水溝が注ぎ込む２区にも、護岸施設の芯材が検出されている（杭列 G・図 122）。部分的な調査のため明確でないが、複数列存在していることが確認される。後世の水流によって、構築土や芯材の多くは流失しているが、河岸から５ｍ以上の幅で強固な護岸施設が構築されていたことがわかる。芯材は合計 25 本検出されており、角杭は１本のみで基本的には丸杭が用いられており、丸太を半裁した割材も一部確認できる。太さは様々であるが、多くが直径５～６㎝程の杭で構成されている。樹種は細枝状の 1064 がシキミ、同じく細枝状の 1061 と割材の 1070 ～ 1072 がの４本がヒノキ、角杭の

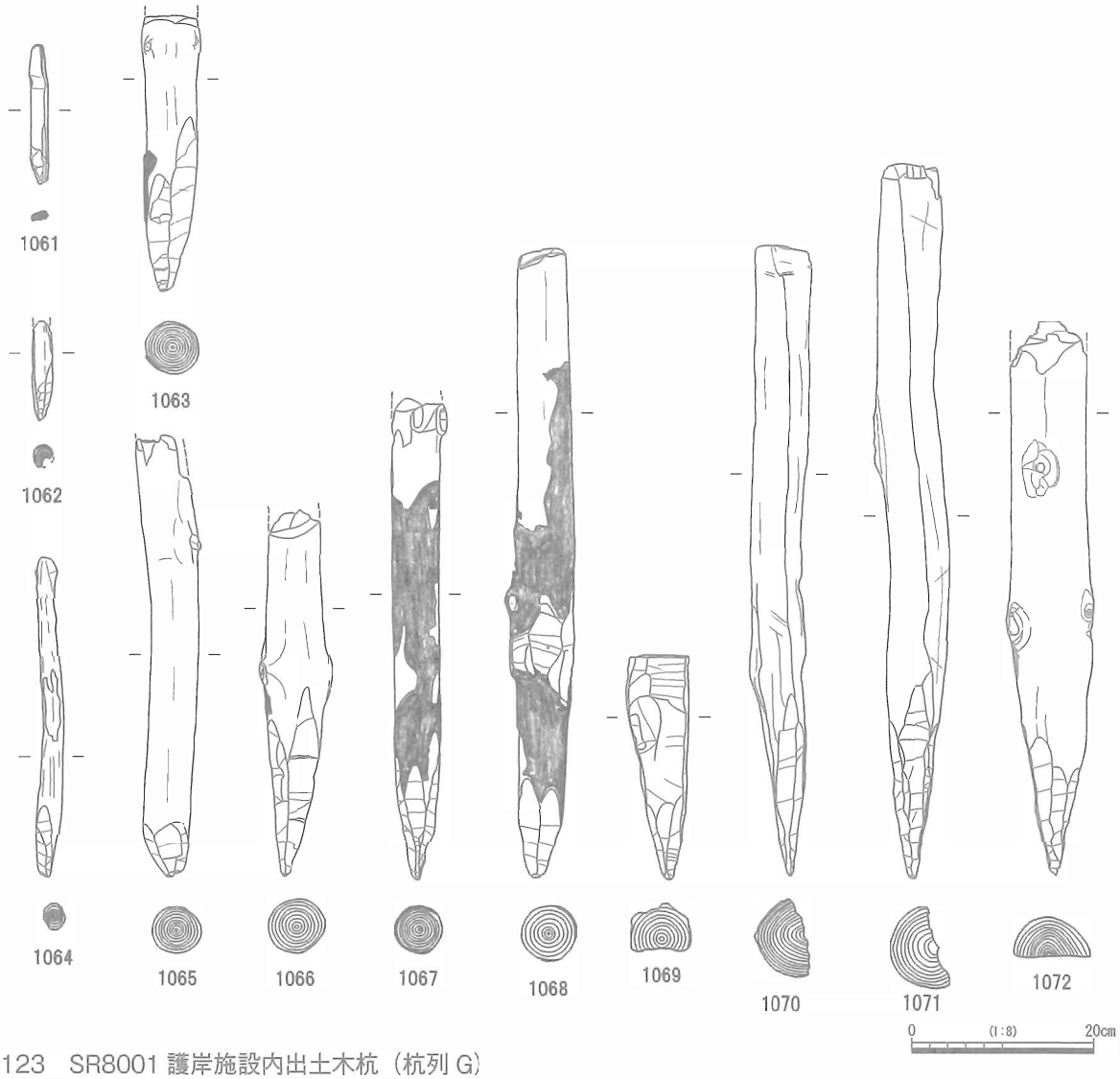


図 123　SR8001 護岸施設内出土木杭（杭列 G）

1069 がクリである他、丸材は全てマツが用いられている。

西岸の護岸施設内からは、螺鈿鞍と呪符木簡とヤダケが発見されている。鞍は組み上げられた状態で、前輪を北に向けて置かれている。鞍の主軸方向は、ほぼ真北を示している。前輪・後輪ともに爪先は、ほぼ河岸に接している。各部材を固定していた革紐は、腐敗によって失われており、残存していない。鞍はほぼ組み上げられた状態を保持しているが、後輪はやや後方へ倒れ込む状態になっている。居木は、後方がやや下へ落ち込んでおり、前輪に接して力の掛かる前方の居木先部分が折れてしまっている。呪符木簡とヤダケは、鞍の下から出土している。呪符木簡は、すべて先端を北、表を上にして、5枚重ねた状態でヤダケの上に置かれていた。ヤダケは８本発見されており、左居木の下に揃えて置かれている。形状は保っているが、遺存状態が悪く、全体が平らにつぶれた状態となっていた。長さは 50 ㎝程で、両端部は欠損している。いずれも、河岸には接しておらず、４㎝程浮いた状態で出土している。下の土層は暗褐色土を多く含んでいることから、下に草などの有機物が敷かれており、それが土壌化したために浮いた状態になった可能性が高い。

これらは、上層からの掘り込みが検出されておらず、護岸施設の構築土で覆われている。護岸施設の築造前に河岸に納置され、工事の際に構築土で被覆されたものとみて間違いない。もちろん、通常の工事と同様に、無造作に土を盛って突き固めた場合、このような状態で鞍の原形が保たれることはないで

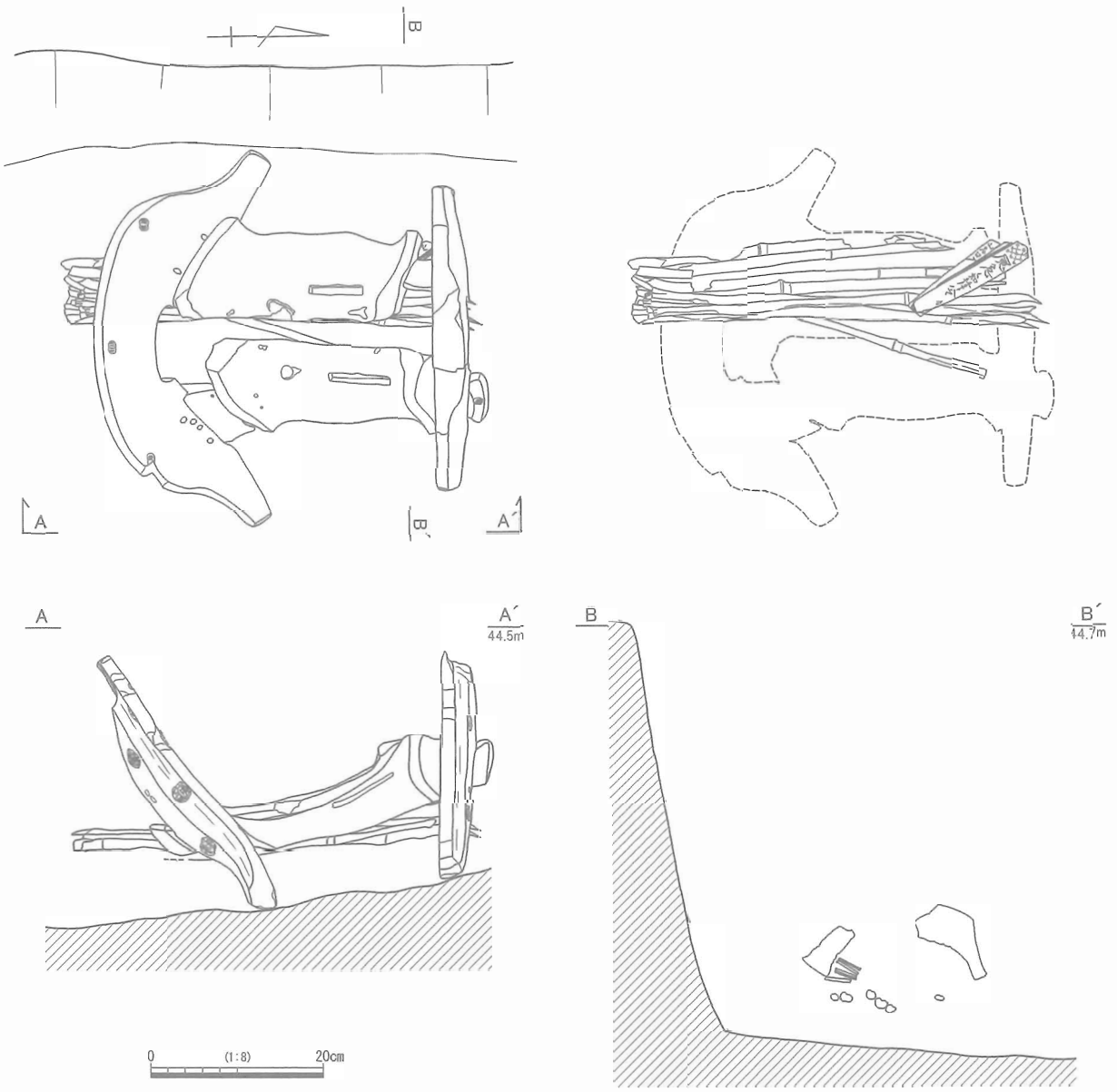


図 124　SR8001 螺鈿鞍出土状況図

あろう。土層では明確に認識できていないが、例えば鞍の周囲を塚状に被覆するなど、他とはやや異なった工法が採られたものと推測される。また、鞍の周囲には、護岸の構築土は良好に残存しているものの、芯材は全く検出されていない。このことも、この周辺の工法が、やや異なっていたことを示していよう。

螺鈿鞍は、前輪と後輪、居木２枚が完存している。組み上がった状態（図 125）での大きさは、前輪の復元高 30.6 cm、後輪の高さ 29.4 cm、乗間（両輪の山形先端間の長さ）は 33.6 cmである。

前輪（1073）は、調査時に山形を欠いているが、他は完存している。海と磯の境に明瞭な段差を有し、肩の比較的高い位置に２段に刻った手形が設けられている。爪先間 33.2 cm、復元高 30.6 cm（現存高 26.5 cm）、磯の洲浜形の部分の厚さは 4.0 cmである。左右の爪先付近には鞍穴が設けられており、馬肩の居木を受けるための左右の切り込みには、居木結束用の紐通し穴が２つ穿たれている。漆は、馬肩を除くほぼ全面に施されているが、外周と内面の居木が当たる部分は明らかに漆が摩滅しており、一部木地が露出する部分もみられる。

後輪（1074）は、爪先間 40.4 cm・高さ 34.7 cmの大きさで、洲浜形の部分の厚さは 4.0 cmである。海

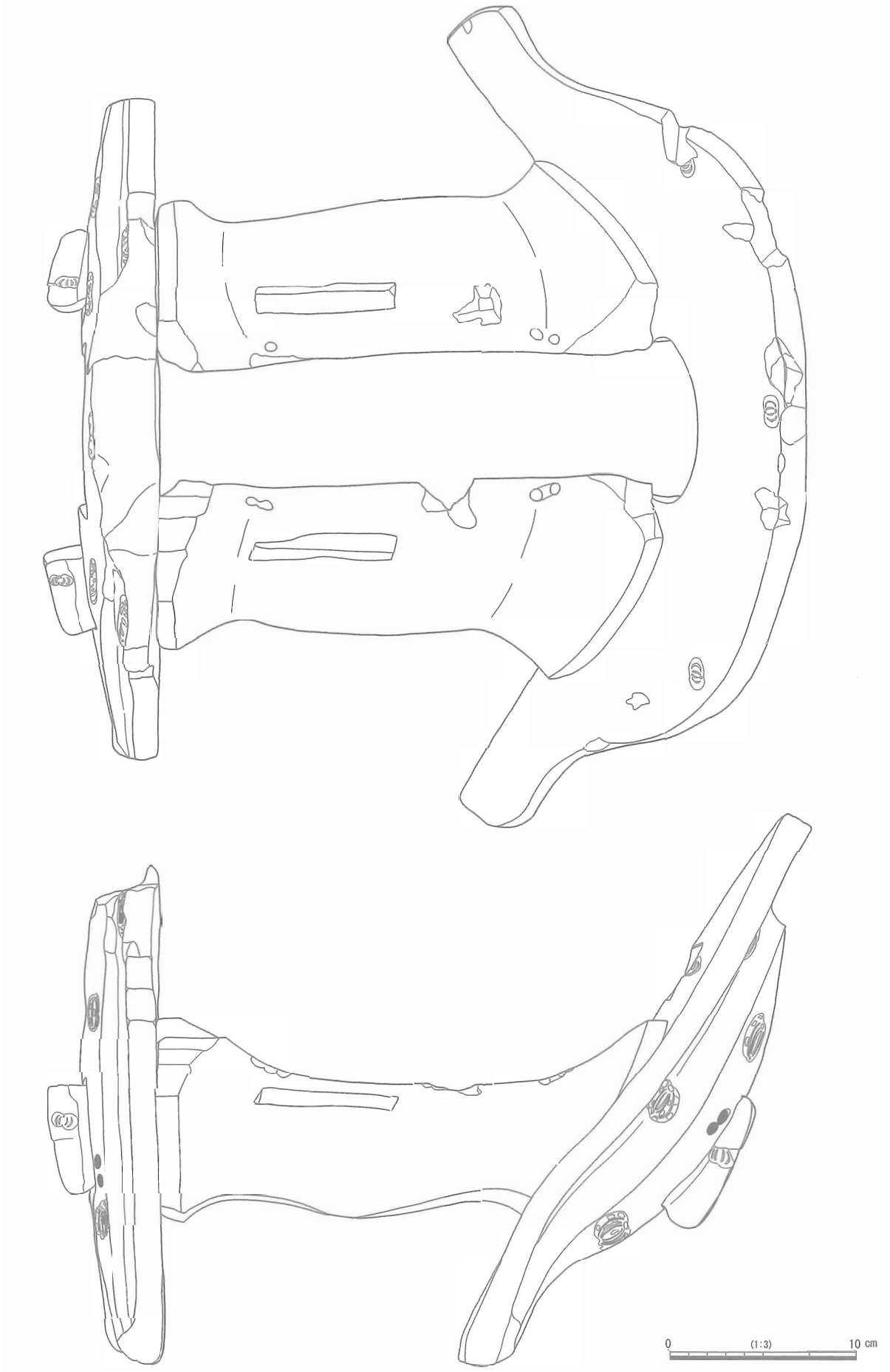


図 125　SR8001 出土螺鈿鞍（組み上げ時）

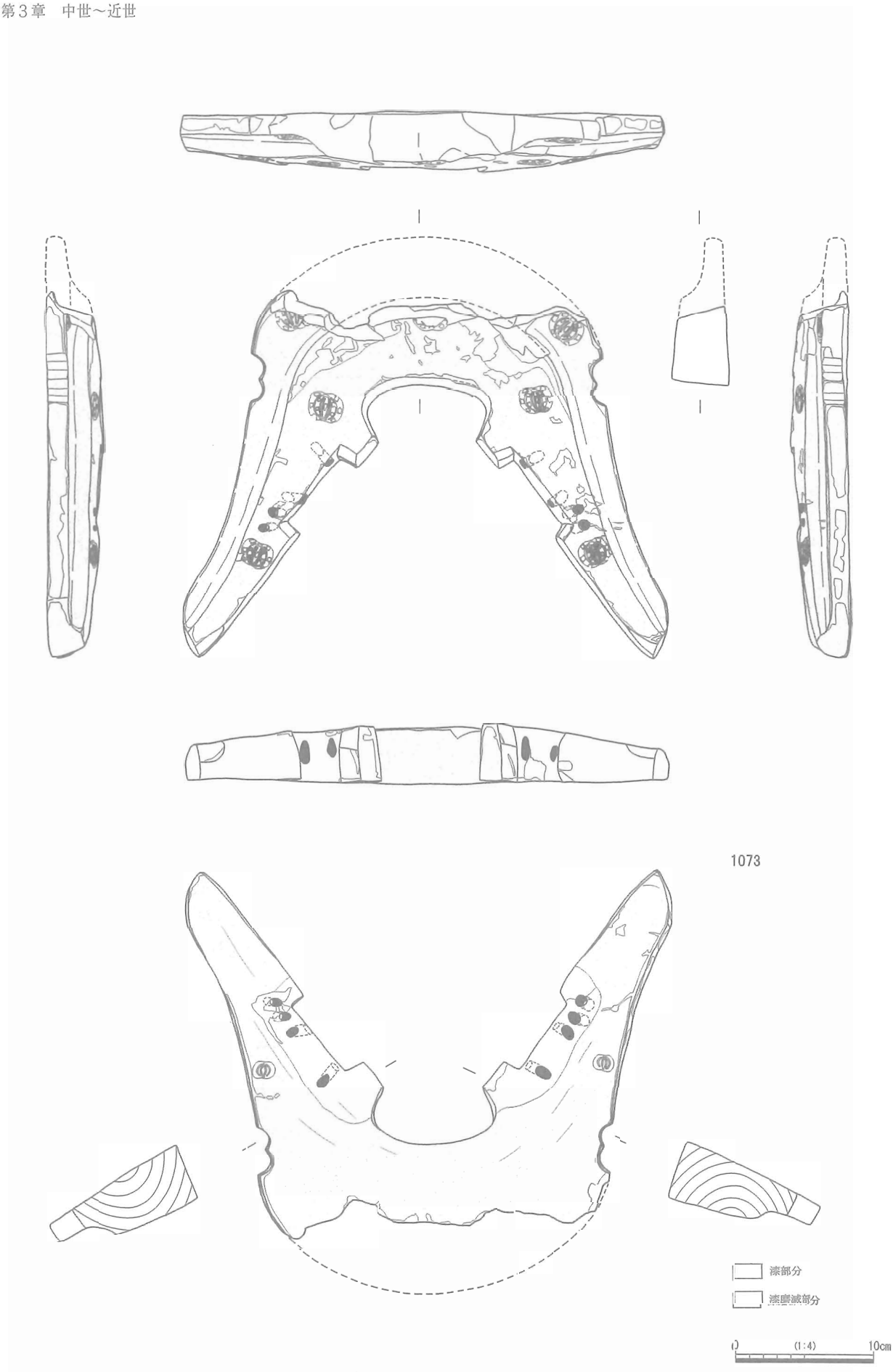


図 126　SR8001 出土螺鈿鞍（前輪）

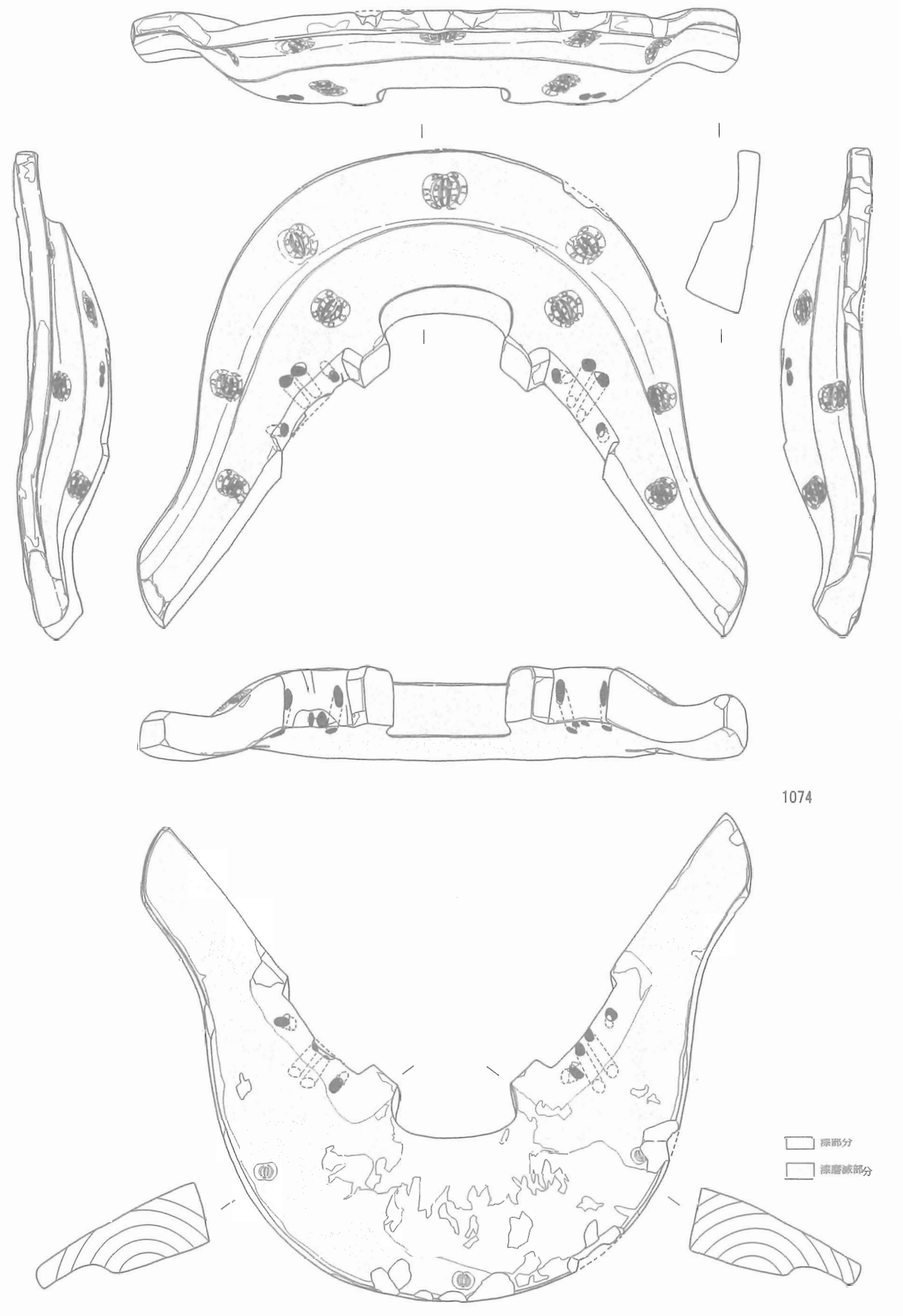


図 127　SR8001 出土螺鈿鞍（後輪）

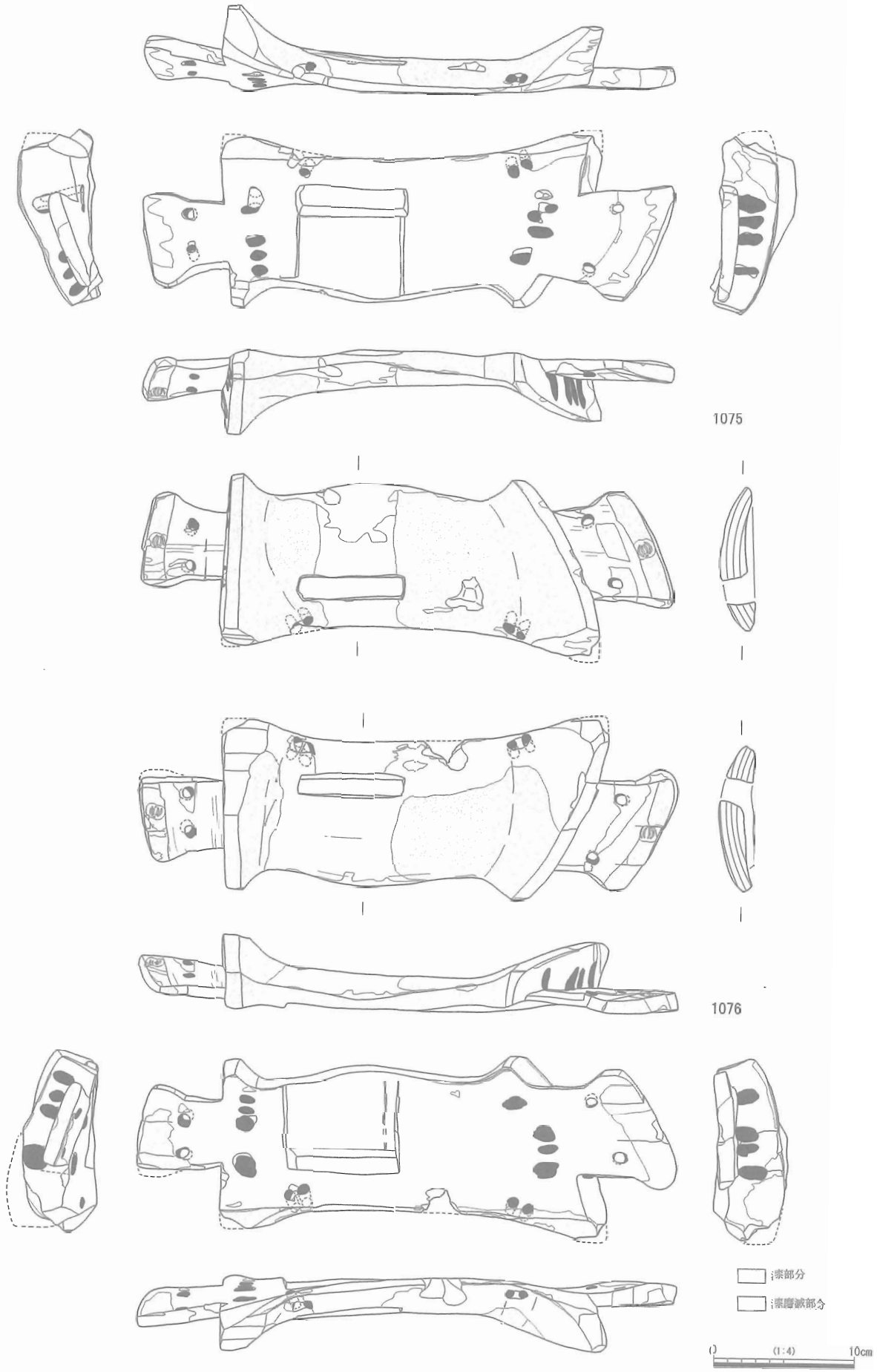


図 1.28　SR8001 出土螺鈿鞍（居木）

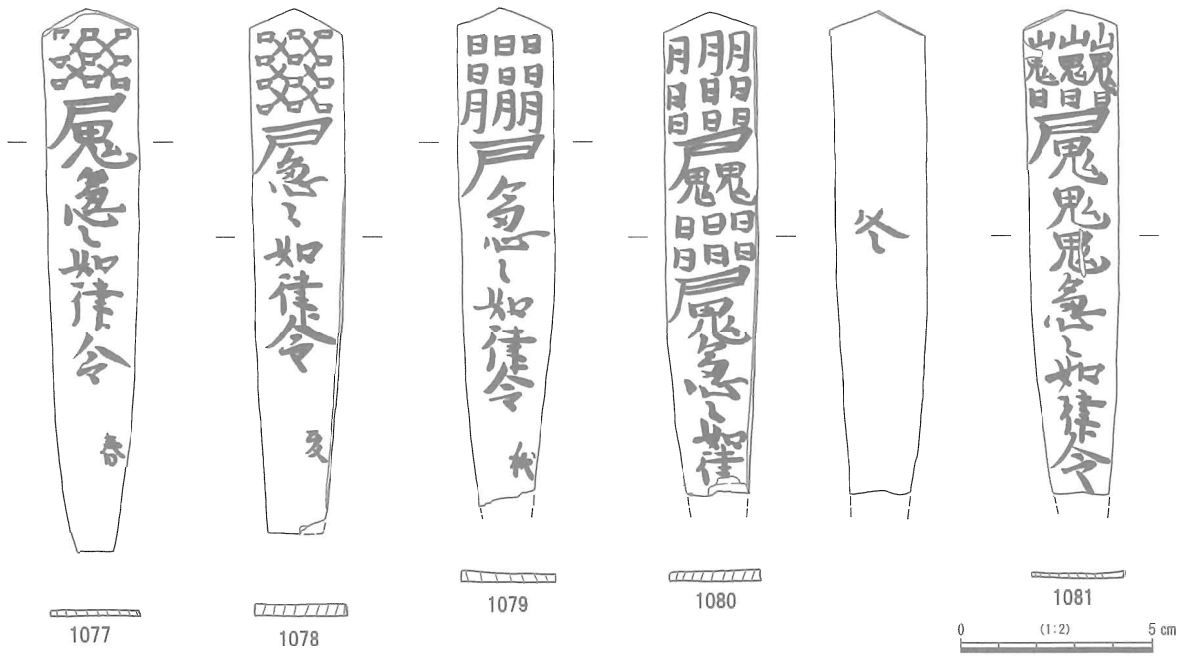


図 129　SR8001 出土呪符木簡

と磯の境に明瞭な段差を有しており、立体的で重厚なつくりとなっている。居木を受けるための切り込みの斜め上方には、鞍穴が設けられている。切り込み面から内面に向かっては、居木結束用の紐通し穴が２つ穿たれている。前輪と同様に、馬膚を除く全面に漆が施されているが、後輪では外周と居木が接する部分の他、内面の洲浜形の周辺にも漆の摩耗が確認される。

居木（1075・1076）は二枚居木で、左側が幅 10.3 ㎝・長さ 38.5 ㎝、右側が幅 10.2 ㎝・長さ 38.0 ㎝と、比較的狭いつくりとなっている。居木裏には、力革通穴から外側に切れ目が彫り込まれている。居木表のやや後輪寄りの位置には、左右ともに穴が穿たれている。穴に土が詰まった状態で出土しており、埋納時には既に穴が存在していたとみて間違いない。この穴に実用的な意味は見出せないことから、埋納祭祀に伴うものである可能性が高いと推測される。前後の側面には、鞍穴と居木結束用紐通し穴が２つずつ、居木裏に向かって斜めに穿たれており、居木結束用紐通し穴は居木先にも設けられている。前輪や後輪の穴の位置に合わなかったためか、いくつかの穴には掘り直しの痕跡が認められる。漆は基本的に、前輪と後輪が取り付く部分を除く、居木表と居木先の先端に施されている。居木裏にも確認されるが、ごく一部に薄く塗布されている程度である。居木表の漆は全体的に摩滅している部分が多いが、特に力革通し穴の周辺は摩滅が著しく、木地が露出する部分もみられる。

螺鈿文様はいずれも瓜文で、大小２種類が確認できる。大きな文様は、縦 2.0 ～ 2.5 ㎝・横 2.4 ～ 3.2 ㎝の大きさで、すべて両輪の外側に配されている。小さな文様は、縦 1.0 ～ 1.2 ㎝・横 1.4 ～ 1.6 ㎝と小さく、斑点が描かれないなどやや簡略化された文様である。両輪の内側と居木先に配されている。螺鈿自体は完全に消失しているが、文様の凹部の深さから、薄手の厚貝が装着されていたものとみられる。凹部には漆が確認でき、螺鈿の装着法が漆地螺鈿であったことがわかる。

呪符木簡は、上から 1077 から 1081 の順で５枚重ねられた状態で出土している。いずれも上部は圭頭形で、下部で徐々に幅が狭くなる形態を呈している。1079 ～ 1081 は下部を欠損しているが、長さは 1077 が 14.3 ㎝、1078 が 13.8 ㎝で、上部の幅はいずれも約 2.5 ㎝である。ヒノキの薄板が用いられており、厚さは 1.5 ～ 3 ㎜と薄い。文字の基本的な構成は、符籙＋呪句（「急々如律令」）となっている。さらに、1077 ～ 1079 の右下にはそれぞれ「春」「夏」「秋」、1080 の裏面には「冬」という季節を示す文字が記

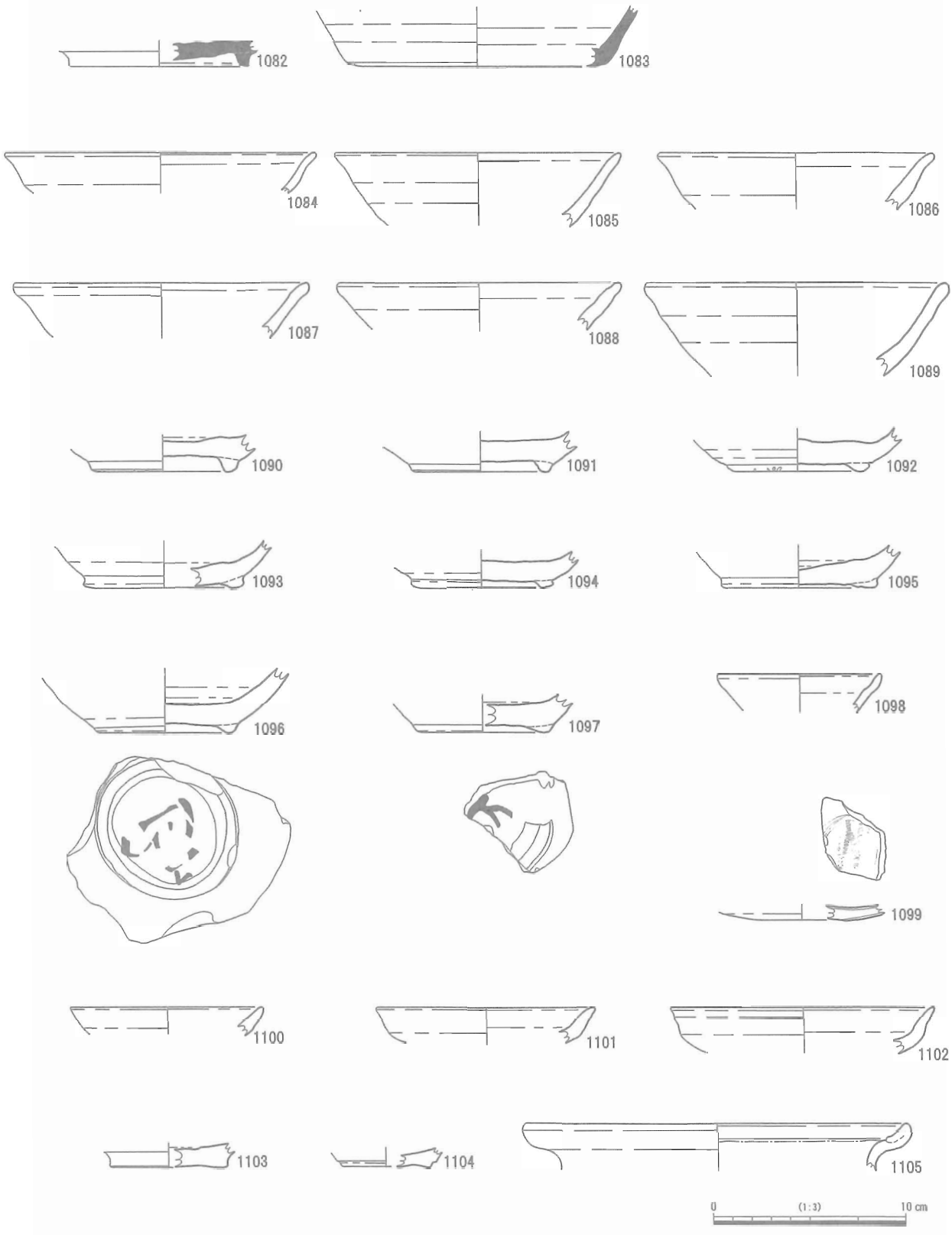


図 130　SR8001 護岸施設構築土出土遺物

されている。個別の呪符の内容は明らかでないが、藤原宮西方官衙地区井戸 SE8431 出土の呪符木簡に描かれた「羅堰」と推定されている符籙と、1077 に書かれている符籙が近似している点は興味深い。

螺鈿鞍と呪符木簡とヤダケは、護岸施設の構築時に埋納されており、護岸工事の際に行われた地鎮祭祀等に伴う遺物とみて間違いない。

また、護岸施設の構築土中からも、点数は少ないが遺物が出土している。1082 と 1083 は、須恵器の坏である。1084 ～ 1098 は山茶碗で、Ⅲ－１期までのものが多いが、Ⅲ－２期のものも一部確認できる。1096 と 1097 は底部外面に墨書が認められる。いずれも断片的にしか残らないため、文字の判読は困難である。1099 は青磁の皿である。底部は無高台で釉が削り取られており、内面には櫛目文がみられる。いわゆる同安窯系の青磁である。1100 ～ 1102 は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。1101 は比較的硬質の焼きとなっているが、1100 と 1102 は軟質で表面の摩滅も著しい。いずれも、口縁部には強いナデ調整が施されている。1103 と 1104 はロクロ成形の土師質土器皿である。1105 は伊勢型鍋で、口縁部は折り返し部分にのみナデ調整が施されている。遺物はいずれも破片であり、埋納品として認識できるものはない。構築土中に混ざり込んだ遺物とみてよい。遺物の構成としては、前述のⅢ層と大きく違いは見受けられない。護岸施設が築造された時期は、13 世紀後半でも早い段階、13 世紀の中頃とみてよいであろう。

（4）Ⅱ層

Ⅱ層は、主に砂礫を多く含む暗褐色土である。複数回にわたって、多量の土砂が堆積しており、東岸では決壊して河川が氾濫した痕跡（SR8002）が認められる。砂礫層の間には、流出した護岸構築土の堆積が確認できる。Ⅲ層の段階で比較的安定していた河川の水量は、この時期大幅に増しており、護岸施設の大部分はⅡ層の水流によって失われている。

遺物は、Ⅲ・Ⅳ層に比べて豊富に出土している。1106 ～ 1109 は須恵器である。1106 は盤、1107 は壺の底部である。1108 と 1109 は坏の底部で、外面に墨書が確認される。1108 は断片のため釈読できないが、２文字以上の存在が認められる。1109 は「枚主」と読める。恐らくは人名であろう。1110 と

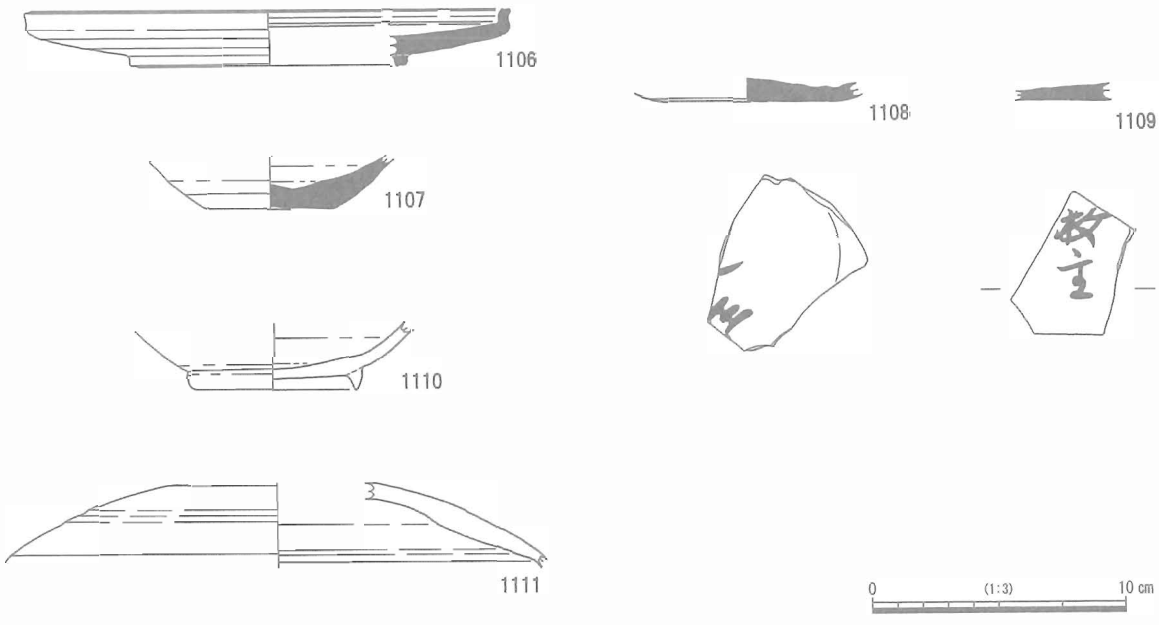


図 131　SR8001 Ⅱ層出土遺物（１）

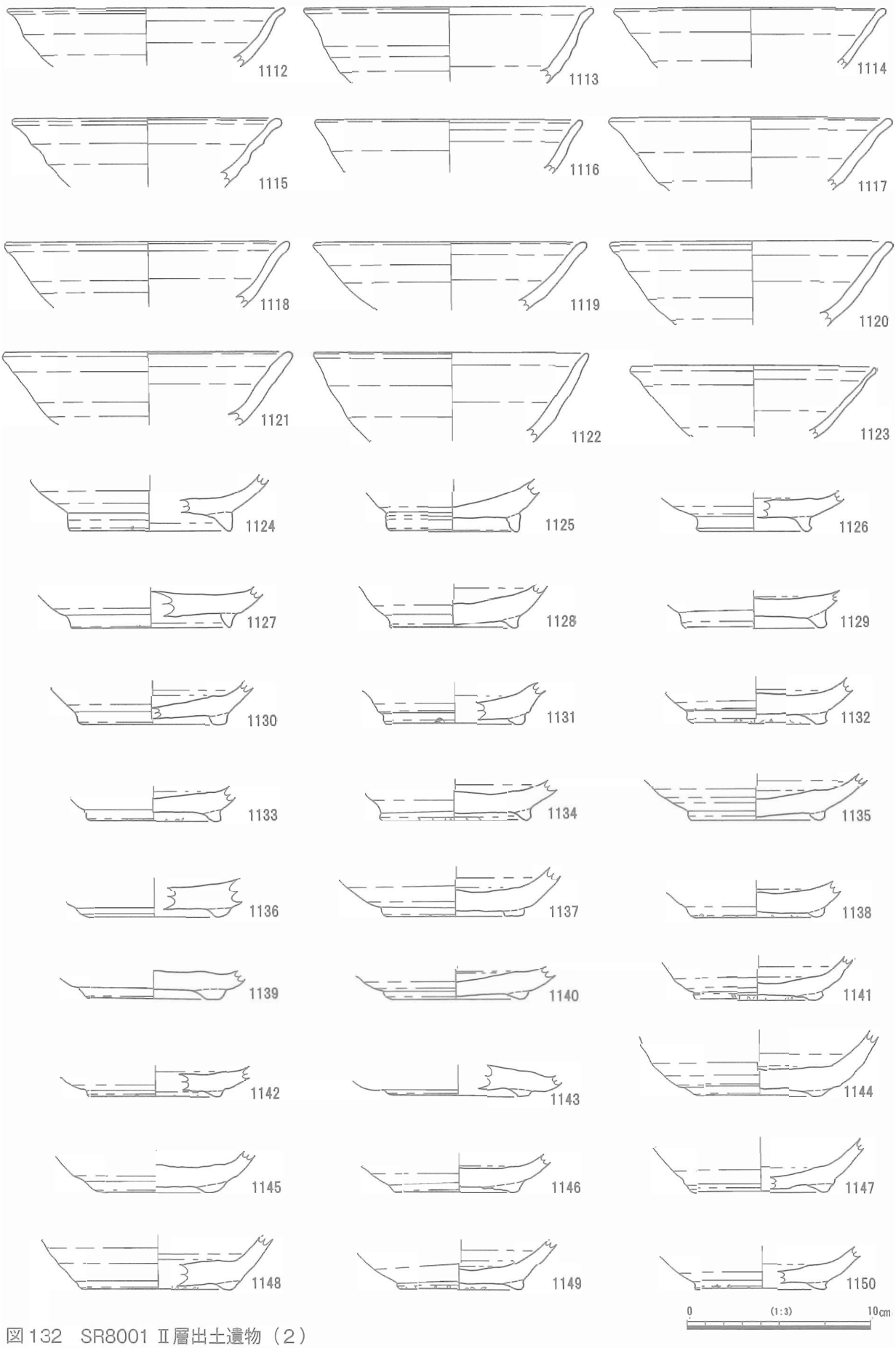


図 132　SR8001 Ⅱ層出土遺物（２）

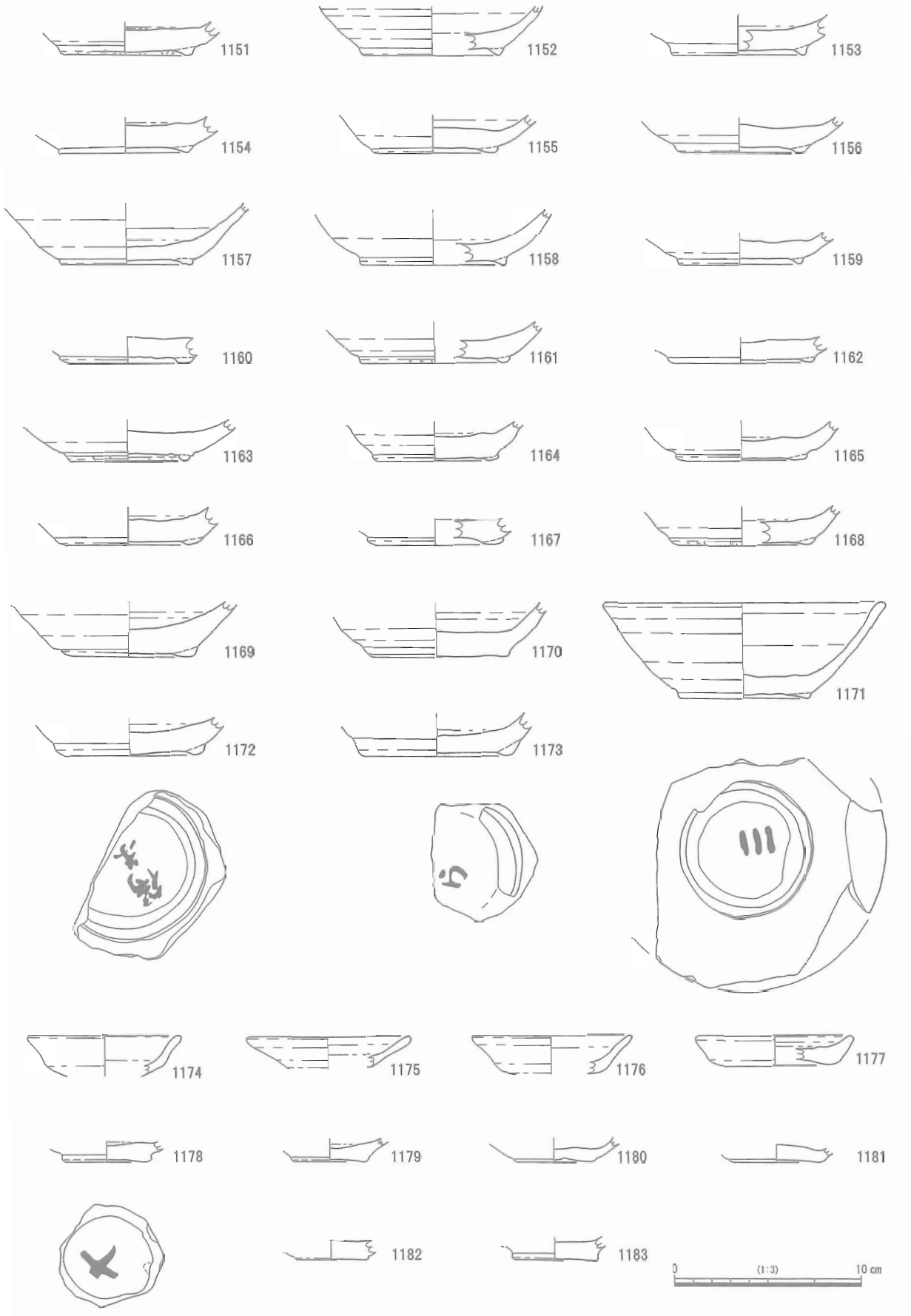


図 133　SR8001 Ⅱ層出土遺物（3）

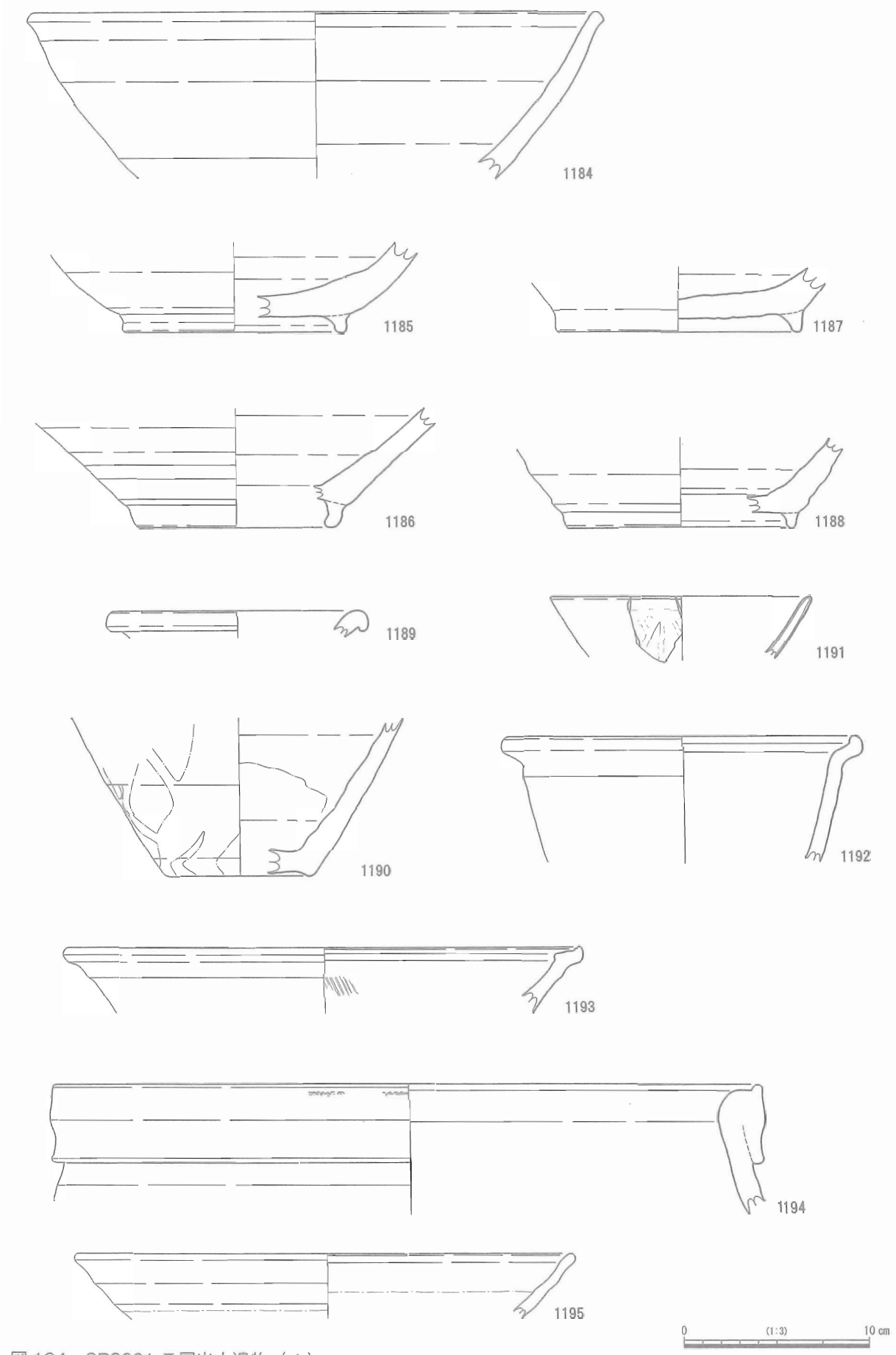


図 134　SR8001 Ⅱ層出土遺物（4）

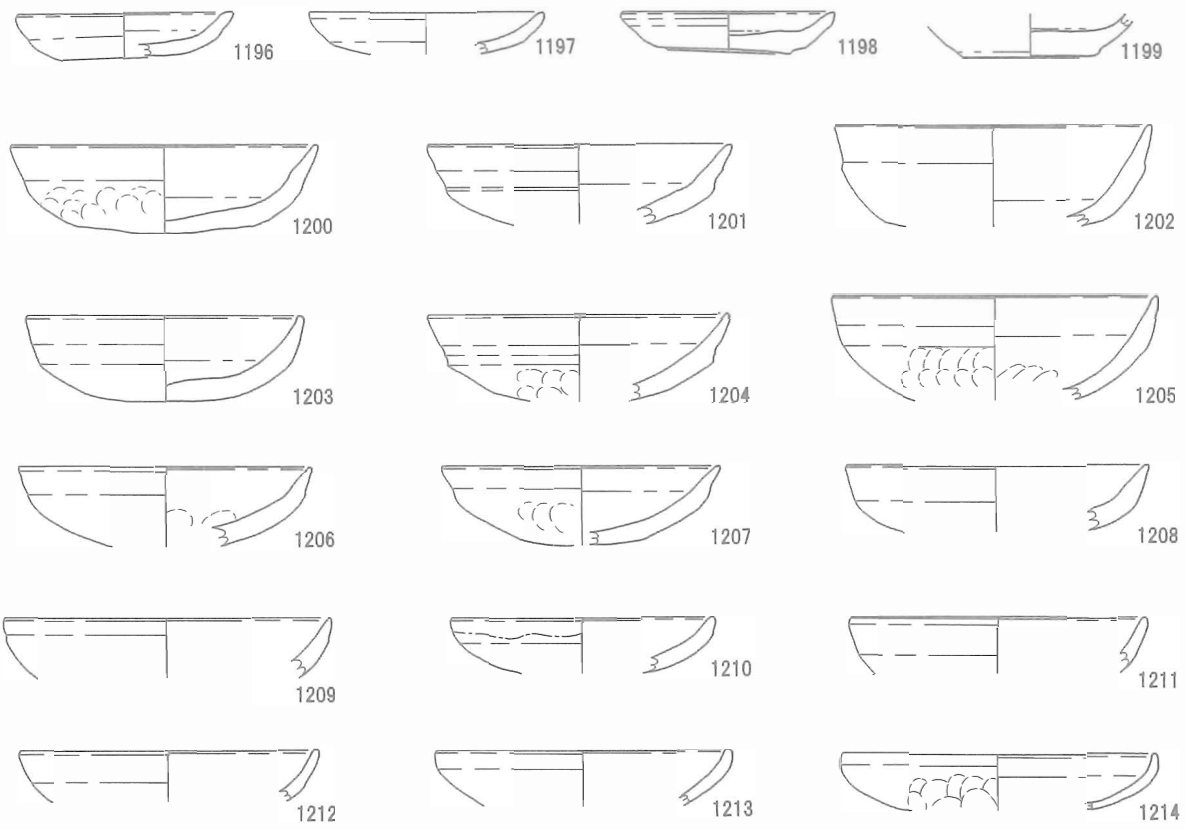


図 135　SR8001 Ⅱ層出土遺物（5）

1111 は灰釉陶器で、1110 は碗、1111 は壺の肩部である。

1112 ～ 1183 は山茶碗である。1112 ～ 1173 は碗、1174 ～ 1183 は小碗および小皿であり、東遠江産とみられる 1152 を除き、すべて渥美湖西産の製品である。時期としては、Ⅰ～Ⅱ期のものも少量みられるが、大半がⅢ期のもので、中でもⅢ－２期のものが多く出土している。1113 には、内面と外面の一部に炭化物の付着が認められる。1126・1155・1162 には、表面に煤が付着し、断面の色調が赤色や黒色に変化するなど、被熱の痕跡が明瞭に確認できる。1167 と 1170 には、薄い塗膜状の黒色物質が付着している。成分分析は実施していないが、漆または鉄分が吸着したものと推測される。1171 ～ 1173 の底部外面には、墨書が認められる。1171 は「三」、1172 は「得米」と判読できる。1173 は断片のため明確でないが、「分」であろうか。

1184 ～ 1188 は片口鉢である。1184 ～ 1186 は渥美湖西産、1187 と 1188 は知多産の製品とみられる。1189 と 1190 は、渥美産の壺である。1191 は青磁の碗である。外面には鎬蓮弁文が施されている。1192 は古瀬戸の片口で、後Ⅰ～Ⅱ期のものである。1193 と 1195 は古志戸呂窯産の製品で、1193 は擂鉢、1195 は直縁大皿である。1194 は常滑産の甕で、15 世紀後半のものである

1196 ～ 1214 は土師質土器皿である。ロクロ成形と非ロクロ成形がみられるが、ロクロ成形のものは 1096 と 1106 の２点のみである。1196 と 1197 は、口径８cm前後の小型のものである。口縁部には明瞭なナデ調整が施されている。1200 ～ 1209 は、口径 12 cm前後で、坏形の形態を呈するものである。厚手のつくりで、口縁部には強いナデ調整が施されている。1210 ～ 1214 は、口径 12 cm前後の中型のもので、浅い皿状の形態を呈するものである。薄手のつくりであり、比較的硬質の焼きのものがみられる。坏形のもの程強くはないが、口縁部には明瞭なナデ調整が施されている。

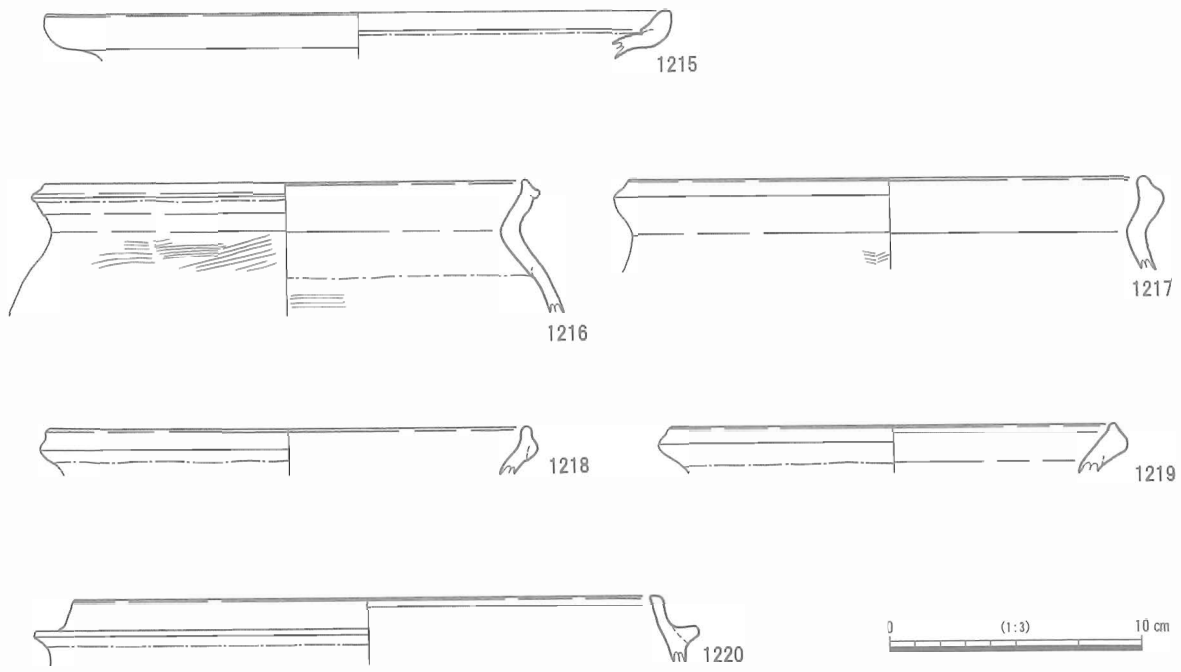


図 136　SR8001 Ⅱ層出土遺物（６）

1215 は伊勢型鍋で、口縁の折り返し部にのみナデ調整が施されている。1216 ～ 1219 は、くの字形内耳鍋である。1216 と 1217 には、体部にハケ目調整が施されている。1220 は内彎形の羽釜である。内耳鍋の破片は一定量存在するが、明確に内彎形内耳鍋や半球形内耳鍋と認識できるものは認められない。

Ⅱ層では、瓦も出土している。大溝 SD2001 などで出土している瓦と、同じ特徴を有するものである。

1221 ～ 1230 は丸瓦である。明確に有段式(玉縁式)と認識できるものはなく、いずれも無段式(行基式)の丸瓦であると推測される。凸面はナデ調整で、凹面には布目と吊り紐痕が認められる。1221 と 1222 は狭端部の破片で、狭端から７cm程の位置に釘穴が設けられている。狭端面には少量の離れ砂の付着が認められる。紐の痕跡が同一であり、同じ布袋が用いて製作されていることが分かる。1223・1224・1226 ～ 1228 は側端部の破片である。いずれも、凹面の側端側には面取り調整が施されている。1223 と 1225 には、同一の吊り紐痕が確認できる。布に隠れている長さを１とした時の、布から出た部分の吊り紐の比率は 0.7 となっている。1225 と 1223 の凸面には、縄目叩きの痕跡が残存する。

1231 ～ 1238 は平瓦である。いずれも凹凸両面には、離れ砂の付着が認められる。1231 ～ 1235 は、縦長斜格子の叩き目が残るものである。1231 と 1232 には、格子内に「大」の字が認められる。1231 と 1233 は側端の残る破片で、凹面の側面側に幅広の面取り調整が施されている。1237 は、横長斜格子の叩き目が残るものである。格子内には、断片のため明確でないが、記号または文字の存在が認められる。1237 と 1238 は、縦長斜格子＋横線の叩き目が残るものである。1234・1236・1238 には、断面に煤が付着するなど、被熱の痕跡が明瞭に認められる。

1239 ～ 1249 は木製品である。1239 は薄板状の木製品で、表面の腐食が著しく墨書は確認できないが、笹塔婆である可能性が高いと推測される。欠損部は多いが上端は圭頭形で、下端は先端に向けて細く尖る。ヒノキの柾目材が用いられている。1240 ～ 1242 は、曲物の側板である。いずれも、ヒノキが用いられており、木釘穴が空けられている。1242 には綴じ皮用の穴も確認できる。1243 は曲物の底板である。

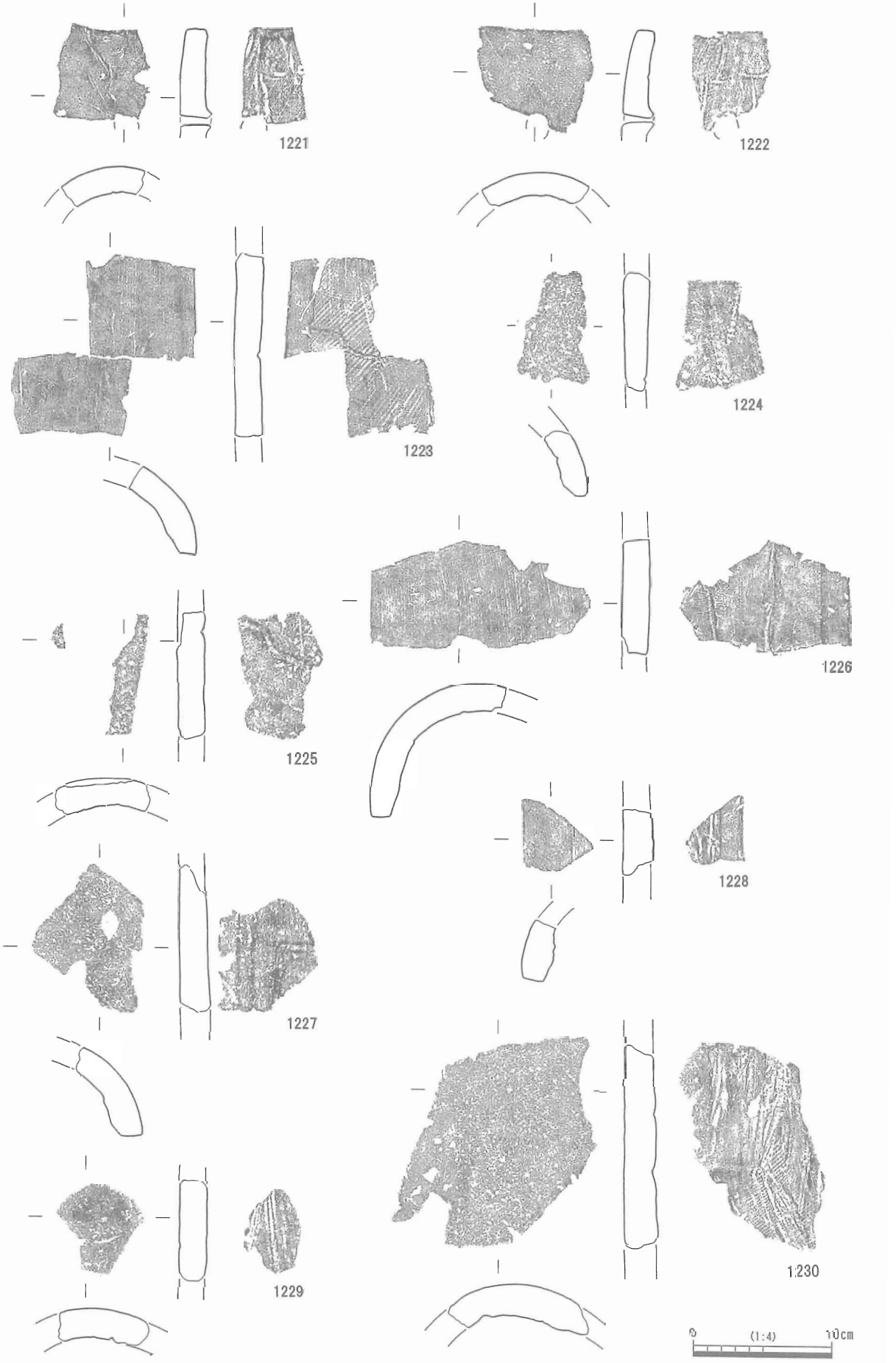


図137　SR8001 Ⅱ層出土瓦（1）

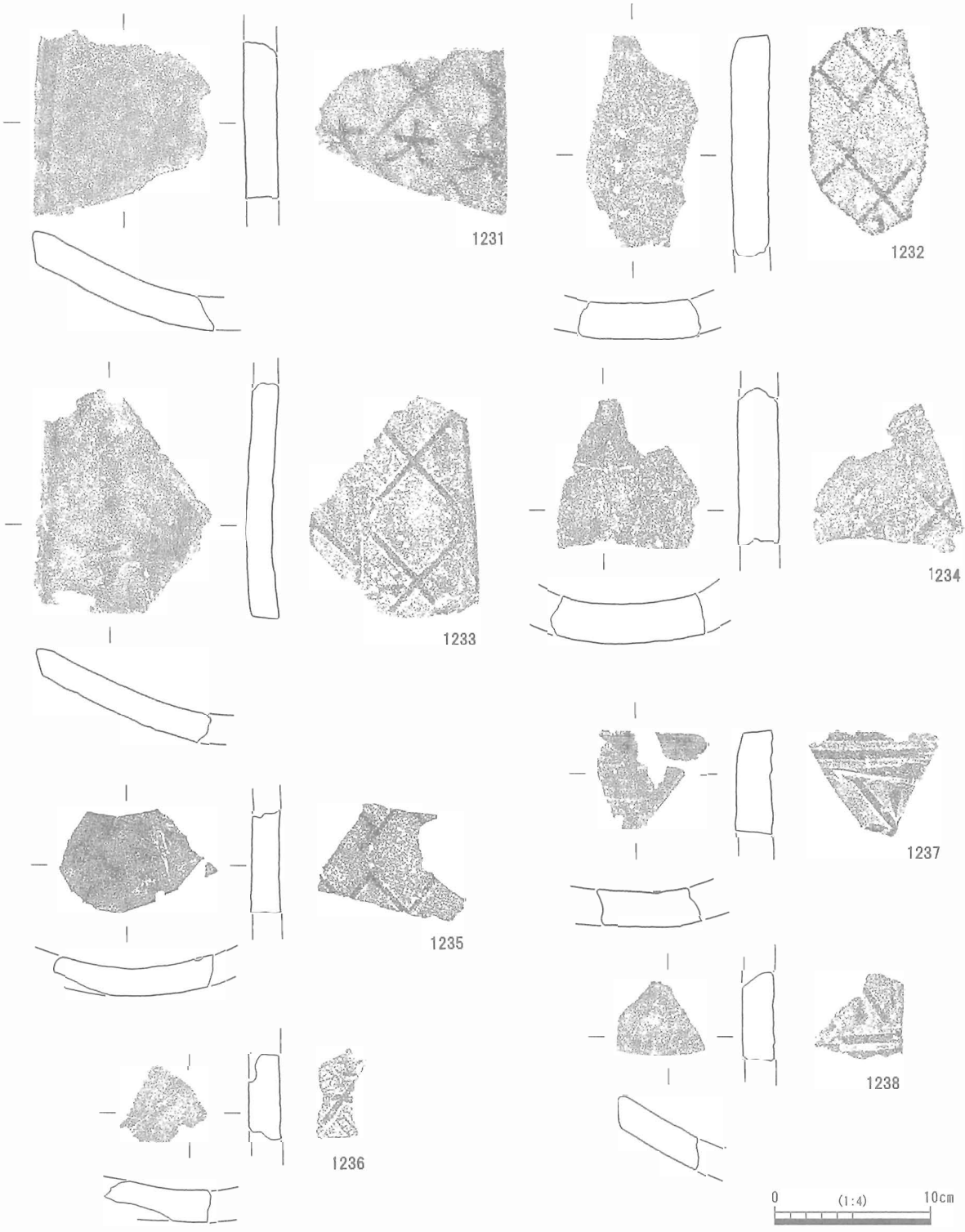


図 138　SR8001 Ⅱ層出土瓦（２）

ヒノキの柾目材で、直径約 13 cmの小型のものである。1244 は草履芯である。ヒノキ材が用いられており、周縁は曲線状に仕上げられている。1245 は箸状木製品で、約 15 cm残存するが、先端側は欠失している。1246 と 1247 は用途不明の薄板である。1246 にはサワラ、1247 には二葉松類が用いられている。1248 は、いわゆる有頭棒状木製品である。一辺約 2.5 cmのヒノキの角棒で、端部は丸く削られている。1249 は刳物である。断片ではあるが、残存部の形状から、方形または長方形の大型の容器であると推測され

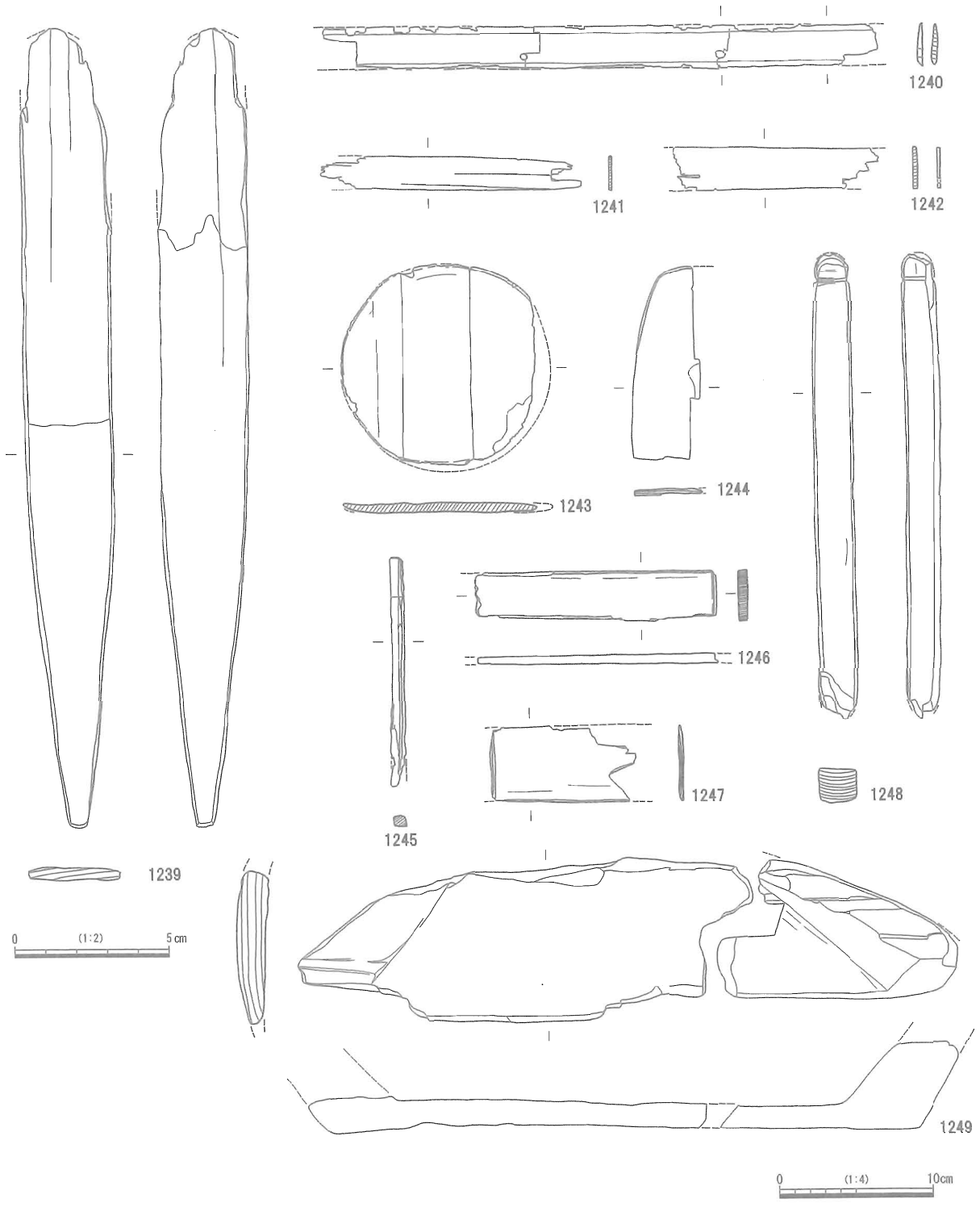


図 139　SR8001 Ⅱ層出土木製品

る。材にはアカマツが用いられている。

このように、Ⅱ層では、数量的には 13 世紀代の遺物が多いが、確実にそれ以降の遺物も含まれており、その下限の年代は 15 世紀後半となっている。水流によって多少の遺物の攪拌は想定されるものの、Ⅱ層については、15 世紀後半頃までの堆積とみてよいであろう。

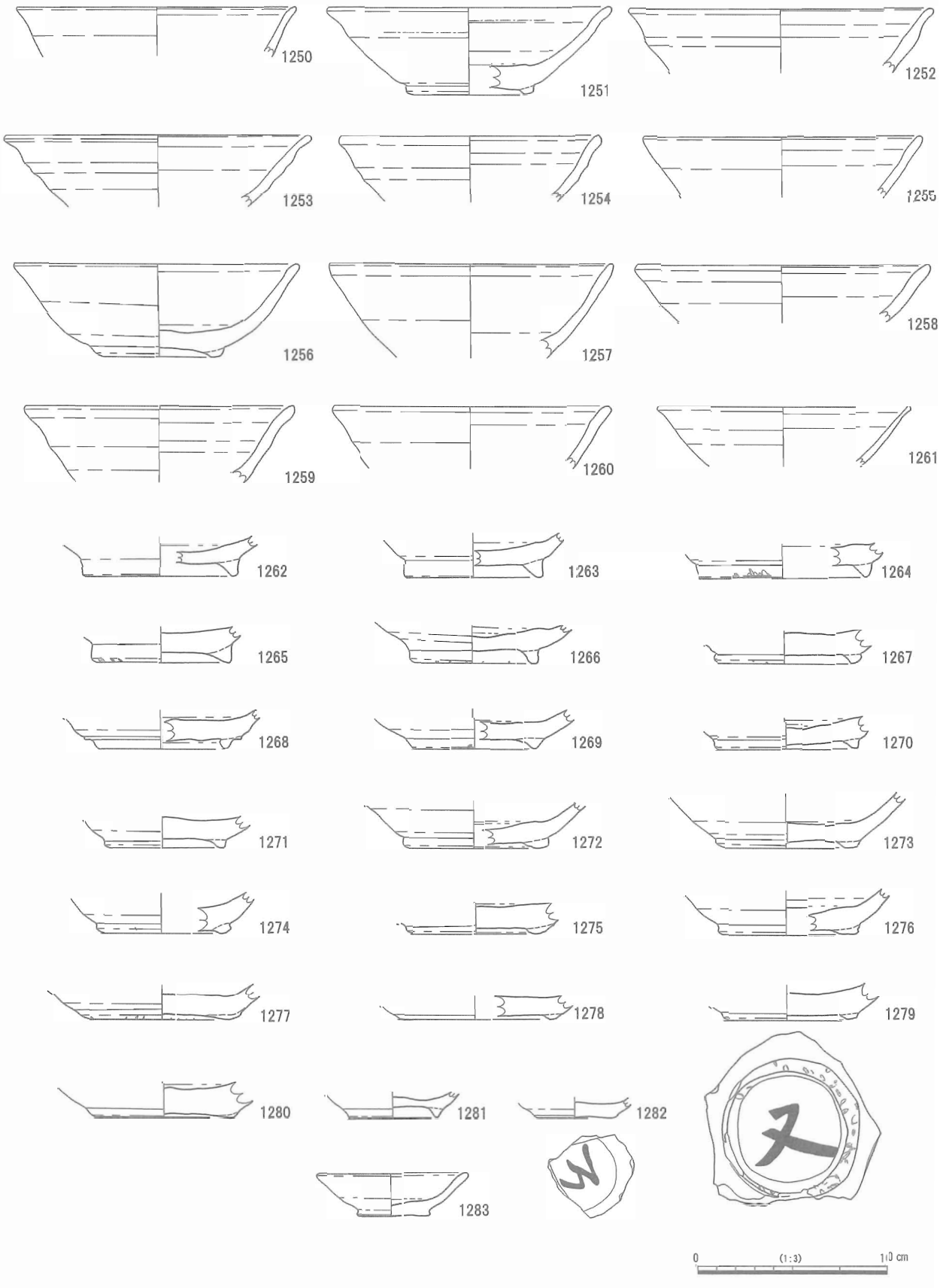


図 140　SR8001 Ⅰ層出土遺物（1）

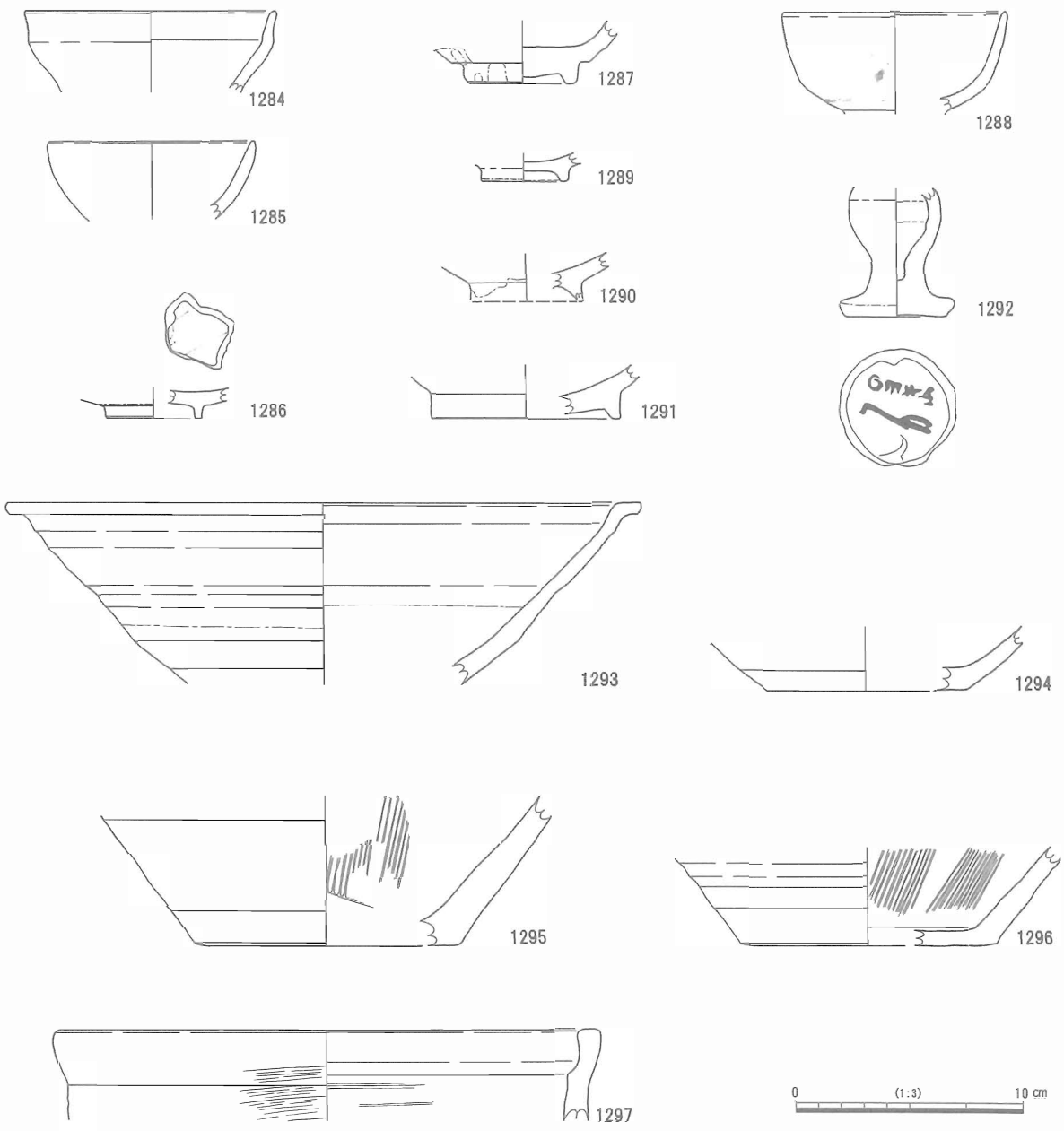


図 141　SR8001 Ⅰ層出土遺物（2）

（5）Ⅰ層

Ⅰ層は、SR8001 の最終の堆積土である。暗褐色土と砂層の互層となっており、木片などの有機物も豊富に含まれていた。礫を多く含んでいるⅡ層に比べて、この時期水流が緩やかで、安定していた様子が伺える。また、最上層では、シジミやカワニナなどの貝殻が遺存しており、少なくともこの段階には河川は堰き止められて溜池になっていたものと推測される。

遺物は、土器や陶磁器などのほか、木製品も比較的豊富に出土している。1250 ～ 1280 は山茶碗である。1261 が東濃産、1268 が東遠江産であるほかは、すべて渥美湖西産の製品である。時期としては、Ⅱ～Ⅲ期のものであるが、やはりⅢ期のものが大半を占めている。1265 は被熱により全体が赤褐色に変色しており、底部外面にはタール状の物質が付着している。1279 の底部外面には、「又」と記された墨書が確認できる。1281 は山茶碗の小碗で、東遠江産の製品である。1282 と 1283 は山茶碗の小皿である。

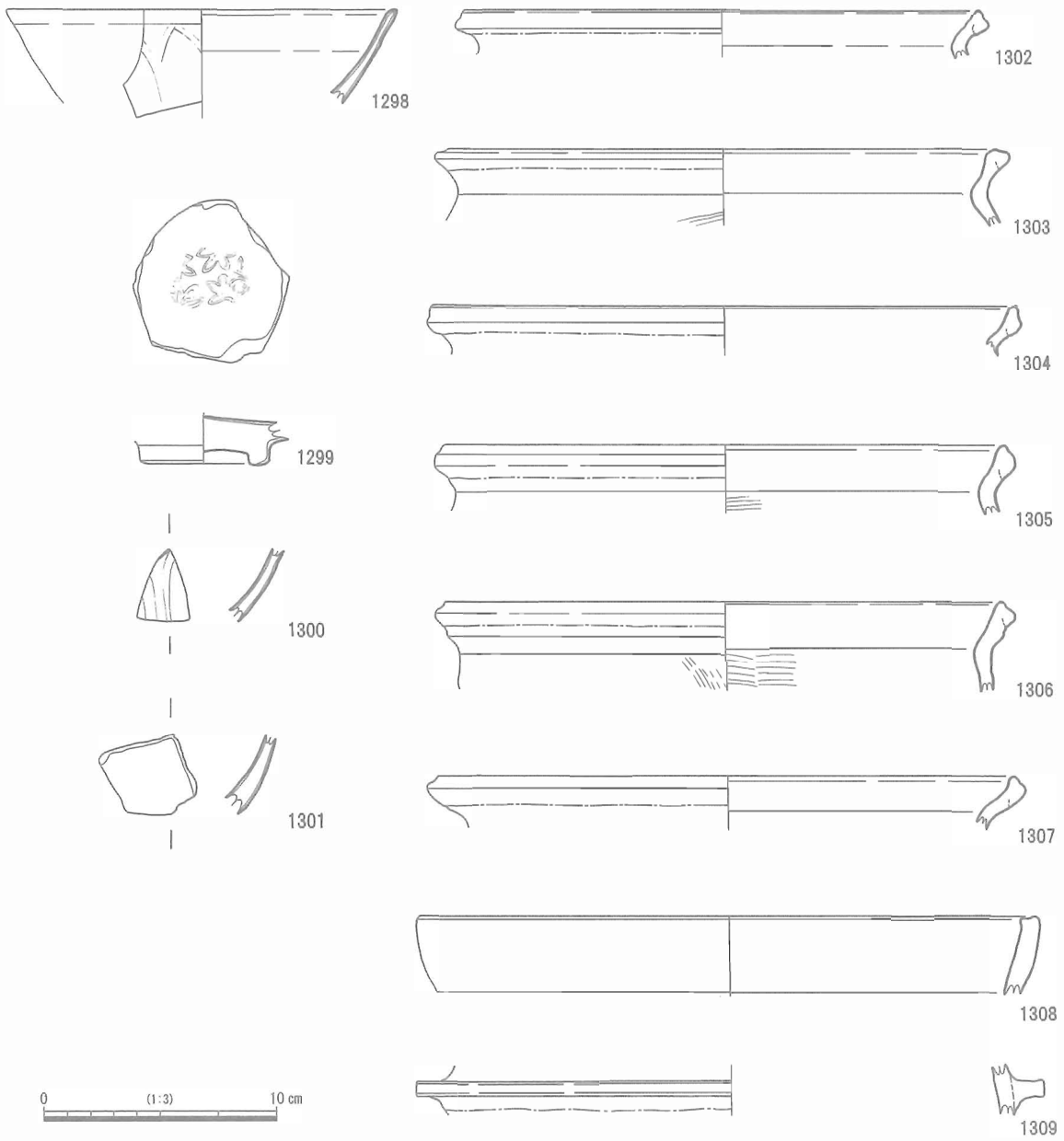


図 142　SR8001 Ⅰ層出土遺物（３）

1282 の底部外面には、墨書が認められる。文字がやや不鮮明であるが、恐らく「万」であろう。

1284 は古瀬戸後Ⅱ期の天目茶碗である。1287 ～ 1289・1291・1292 は、瀬戸美濃産の製品であり、Ⅰ層でも最上層から出土している。1287 は天目茶碗で、17 世紀後半のものである。1288 は小中、1289 は腰錆茶碗、1291 は片口、1292 は花瓶で、いずれも 18 世紀後半から 19 世紀にかけてのものである。1292 の底裏には墨書が認められる。右側に「〇ヨキ山」、左側に「右」と書かれている。1285 と 1286 は京・信楽産の碗であり、Ⅰ層の検出面から出土している。1290 は肥前産の白磁の皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎが施されている。18 世紀のもので、Ⅰ層の最上層から出土している。1293 は古瀬戸後Ⅳ期の折縁深皿である。1294 は古志戸呂窯産の盤類である。1295 と 1296 は擂鉢で、1296 は古瀬戸後Ⅳ期のものである。1297 は筒形の瓦質製品である。器壁は厚く、口縁部は受け口状の形態を呈している。焜炉等の類であろうか。

1298 ～ 1301 は貿易陶磁である。いずれも青磁の碗であり、1298 と 1300 の外面には蓮弁文が、1299

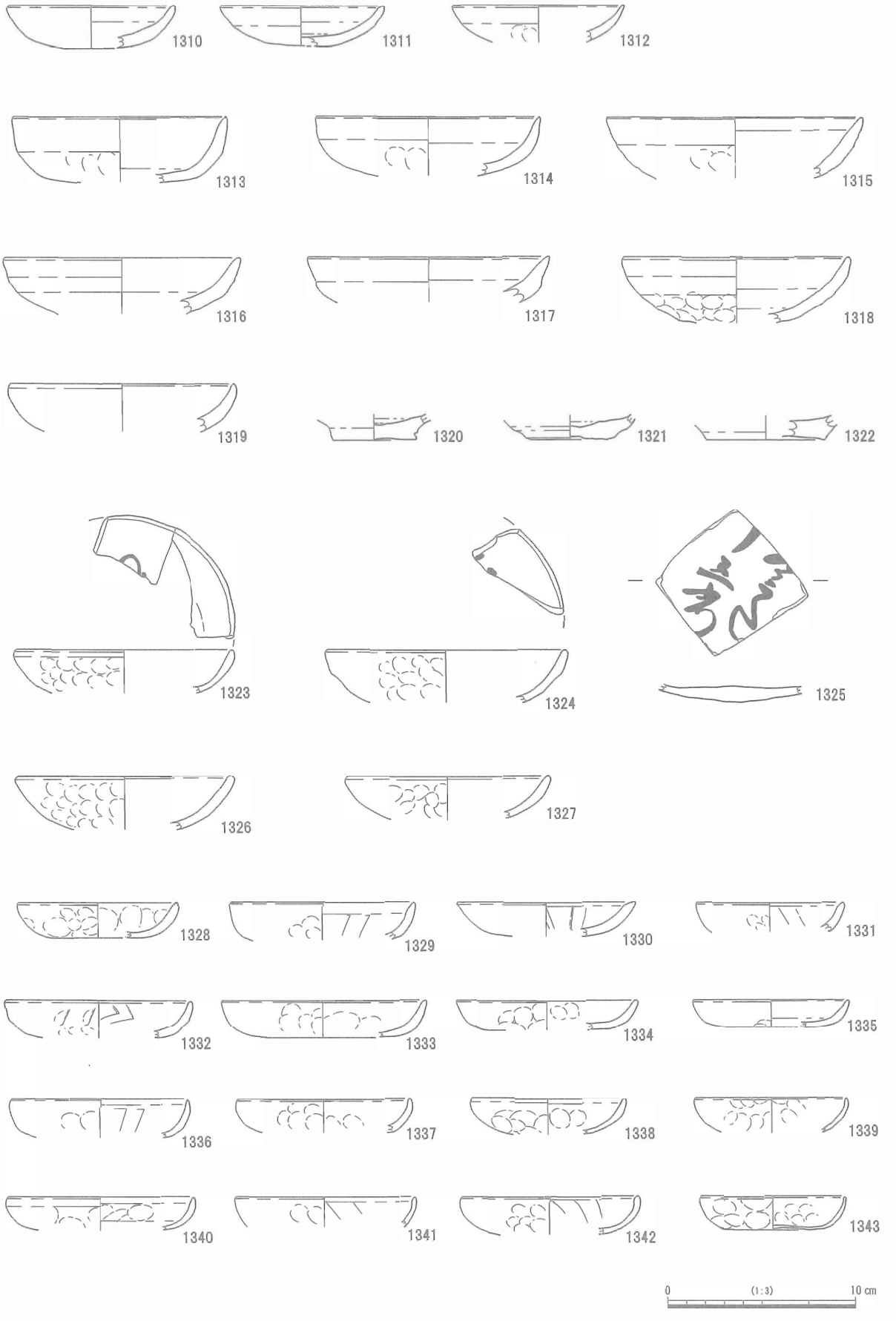


図 143　SR8001 Ⅰ層出土遺物（4）

の見込みには花文が施されている。1302 ～ 1308 は内耳鍋である。くの字形内耳鍋（1302 ～ 1307）に加え、Ⅱ層でみられなかった内彎形内耳鍋（1308）も出土している。図化したものはいずれも口縁部の破片であるが、体部の破片も一定量出土している。1309 は羽釜である。

1310 ～ 1343 は土師質土器の皿である。軟質のもの（1310 ～ 1322）と、比較的硬質のもの（1323 ～ 1343）とに大別できる。1310 ～ 1312 は、口径９cm先後の小型のものである。浅い皿状の形態で、大きさの割にはやや厚手のつくりとなっており、口縁部にはナデ調整が施されている。1313 ～ 1319 は、口径 12 cm前後のものである。坏形の形態を呈しており、全体的に厚手のつくりとなっており、口縁部には強いナデ調整が施されている。1320 ～ 1322 はロクロ成形のものである。1320 と 1321 は小型のもの、1322 は中型のものである。1323 ～ 1327 は、比較的硬質で口径 12 cm前後の中型のものである。浅い皿状の形態で、全体的に薄いつくりとなっている。軟質のものにみられるような、口縁部の強いナデ調整は認められない。1323 ～ 1325 の内面には墨書が確認できる。いずれも断片であり、1323 と 1324 は全く判読できないが、1325 は「　今うた　/　□三尚　」と読める。1328 ～ 1343 は、比較的硬質で口径９cm前後の小型のものである。形態や厚さ、内面の調整方法などにいくつかのタイプがみられるが、口縁部に明確なナデ調整が施されていない点は共通している。

1344 ～ 1349 は丸瓦である。凸面はナデ調整が施され、凹面には布目や吊り紐痕が残されている。1344 は玉縁部の破片である。凹面は全体にナデ調整が施され、狭端と側端側には面取り調整が施され

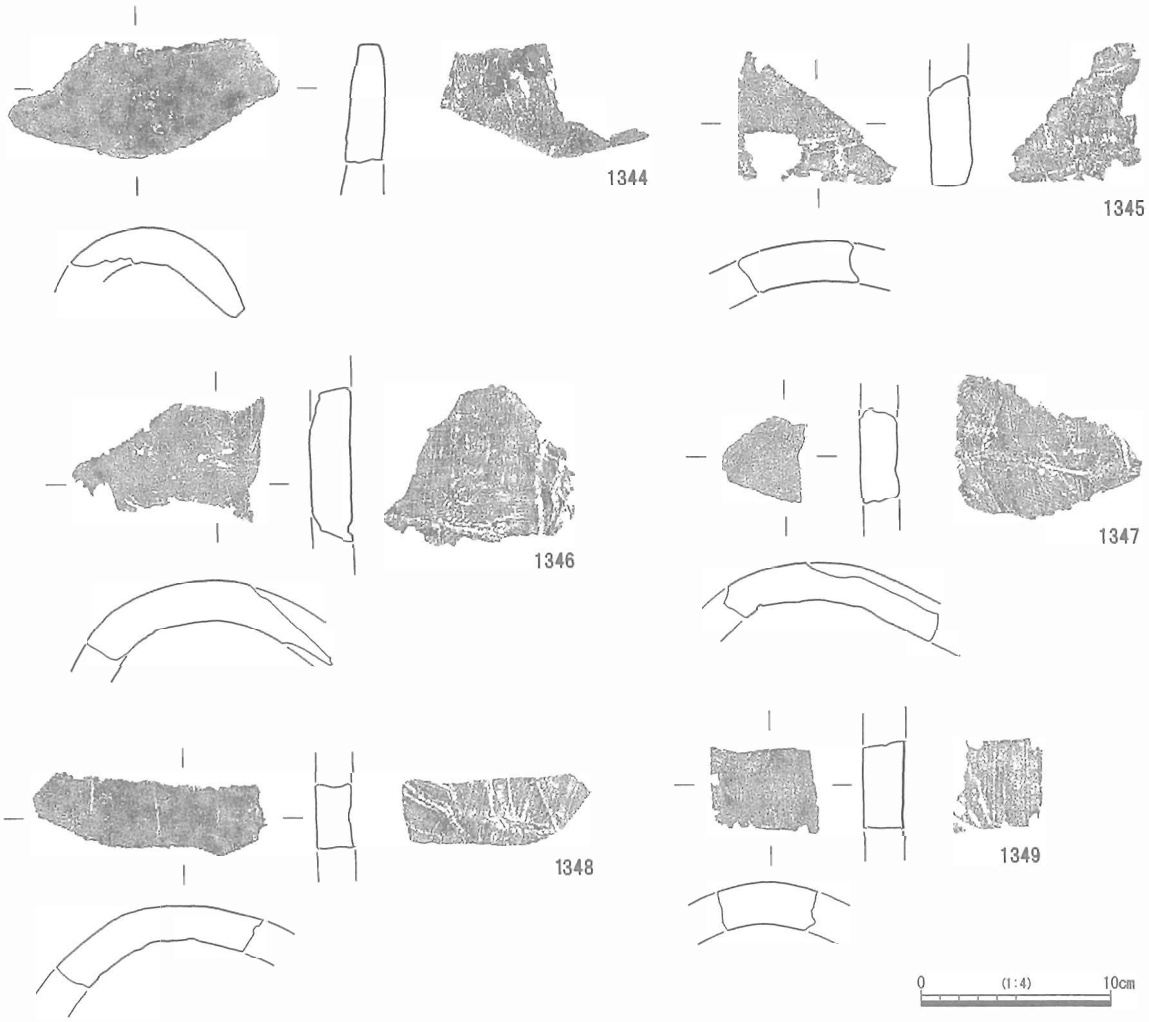


図 144　SR8001 Ⅰ層出土瓦（１）

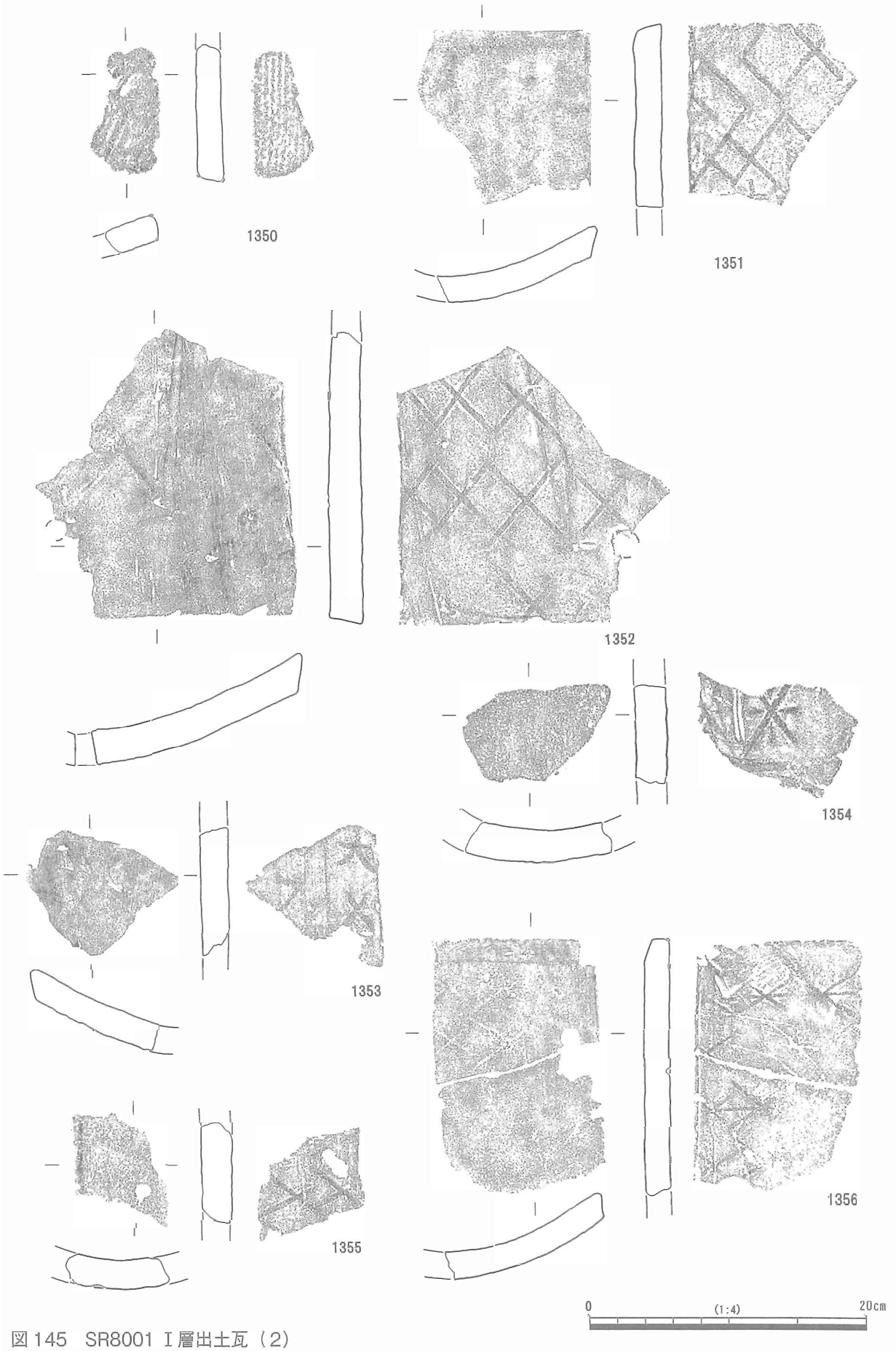


図145　SR8001 Ⅰ層出土瓦（2）

ている。1345 は広端部が残る破片である。広端面には、少量の離れ砂の付着が認められる。1346 ～ 1349 は、端部の残らない破片である。1346 と 1347 には同一の吊り紐痕が残る。布に隠れている長さを１とした時の、布から出た部分の吊り紐比率は、0.8 以下である。1349 の凹面には、少量の離れ砂が付着している。

1350 ～ 1356 は平瓦である。1350 は凸面に縄目叩きが残るものである。全体が著しく摩滅しているが、叩き目の窪みには離れ砂の付着が認められる。1351 ～ 1353 は、縦長斜格子の叩き目が残るものである。1351 と 1353 の格子内には「大」の字がみられる。1352 は広端部の破片で、広端から約５cmの場所には、釘穴が空けられている。1354 は縦長斜格子＋横線の叩き目が残るものである。斜線の交差部には、剣菱形の文様が十字に配されている。凹凸面ともに離れ砂が付着している。1355 と 1356 は、横長斜格子の叩き目が残るものである。凹凸面ともに離れ砂が付着する。1352 と 1356 の凹面には、叩き目の転写が明瞭に認められる。

1357 ～ 1362 は笹塔婆である。いずれも上部は圭頭形で、左右に２段の切り込みが入っている。1359

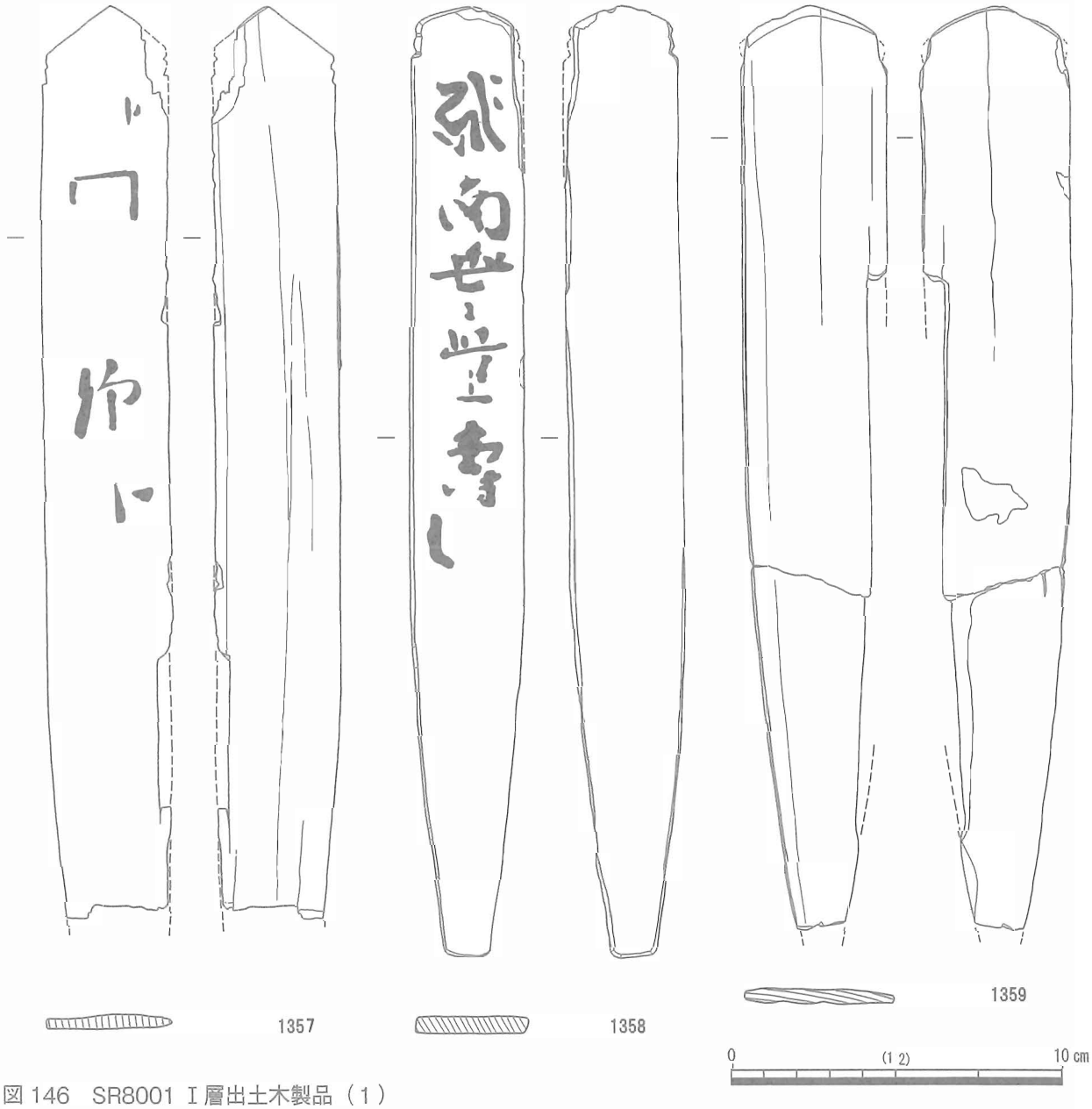


図 146　SR8001 Ⅰ層出土木製品（１）

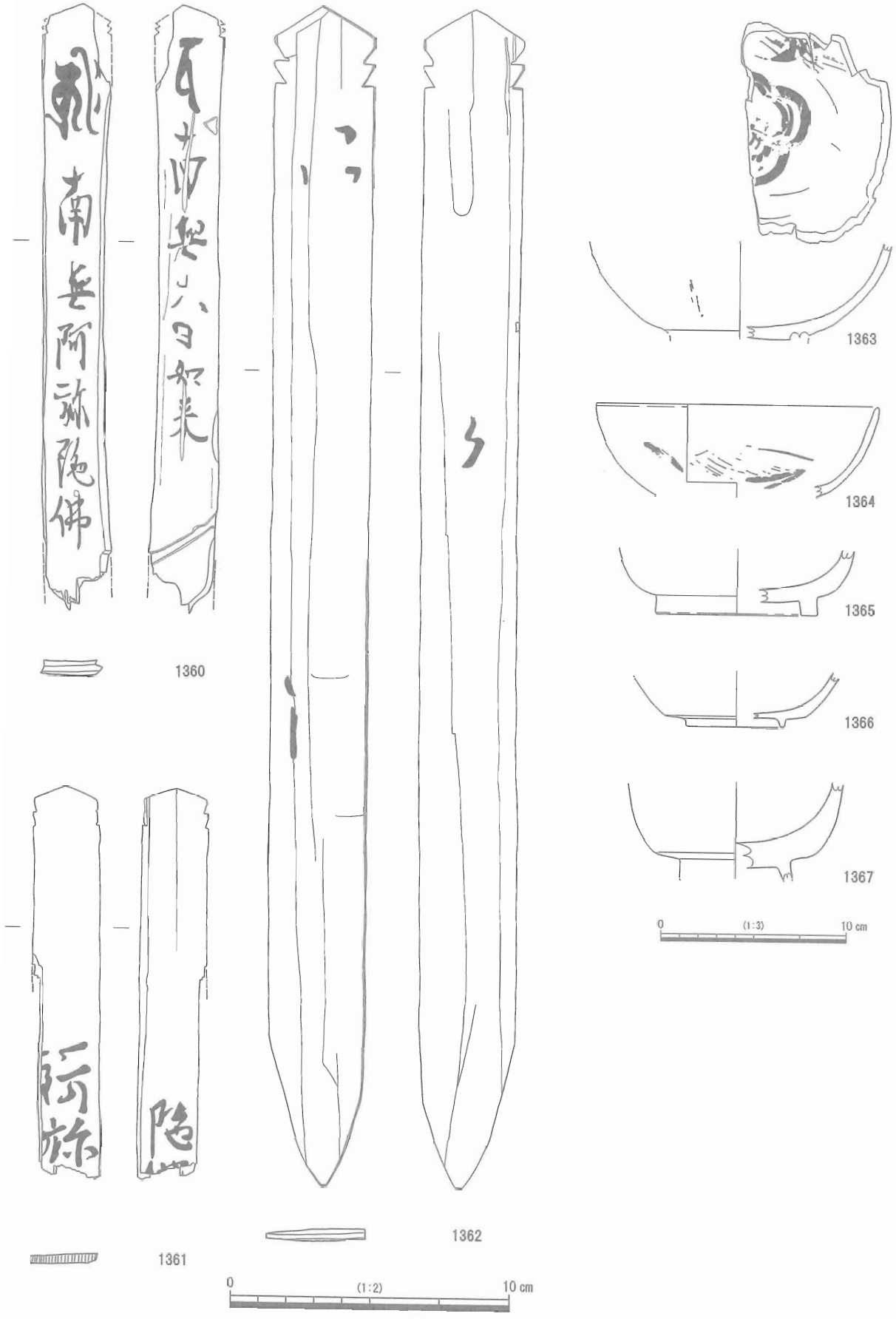


図147　SR8001 I層出土木製品（2）

のみコウヤマキであるが、他はすべてヒノキが用いられている。1357は、墨書がほとんど残っておらず、釈読不能ではあるが、出土した他の笹塔婆やわずかに残存する墨跡から、「キリーク（梵字）南無阿弥陀仏」と書かれていた可能性が高いと推測される。1358は、「キリーク（梵字）南無々量壽□」と読める。裏面には墨書は認められなかった。1359は墨書が全く残存しなかったが、形態から笹塔婆と判断した。1360は墨書が比較的明瞭に残る。片面に「キリーク（梵字）南無阿弥陀仏」、裏面には「バン（梵字）南無大日如来」と書かれている。1361は上部の墨書は消失しているが、両面に「無阿弥」、と「陀仏」の字が認められる。1362は上部から下部までほぼ完存しているが、墨書の残りは悪い。釈読はできないが、両面に墨痕の存在が確認される。

1363～1367は漆椀である。1363と1364は腰が丸い形態のものであり、内外面とも黒漆地で、赤漆による漆絵が施されている。1363の木地にはハンノキ属が用いられている。1365は外面を赤漆、内面を黒漆に塗り分けている。木地にはトチノキが用いられている。1366と1367は、内外面ともに赤漆が

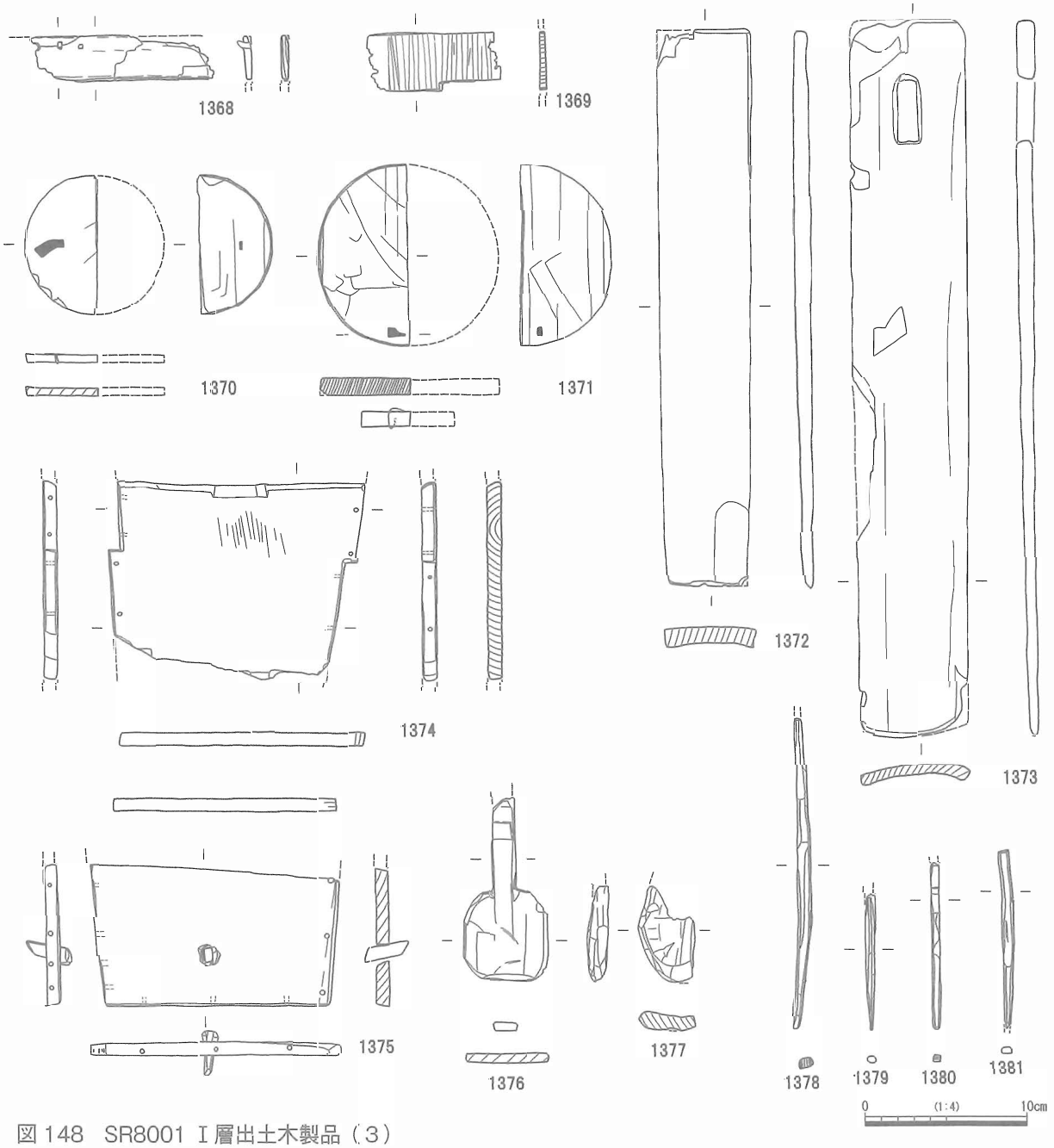


図148　SR8001 Ⅰ層出土木製品（3）

施されており、木地の厚さは異なるが、両者とも腰が明瞭に折れる形態のものである。1366 にはヤマザクラ、1367 にはブナ属が用いられている。

1368 と 1369 は曲物の側板であり、いずれもヒノキ材が用いられている。1368 には、底板固定用の木釘が残存する。1369 には、ケビキ跡と木釘穴が認められる。1370 と 1371 は曲物の底板または蓋である。ともにヒノキ材が用いられており、周縁部には綴じ皮が残存する。1372 と 1373 は桶の側板である。横断面は弧状に湾曲しており、1373 には端部に長方形の穴が空けられている。1372 はヒノキ、1373 はスギ材が用いられている。1374 と 1375 は指物の部材である。1374 は段違い、1375 は台形の形状となっている。いずれもヒノキ材で、側端と側面には木釘用のほぞ穴が空けられており、一部木釘も残存する。1375 の中央には、直径８㎜程の穴が空けられており、長さ約２㎝の断面長方形の木片が嵌め込まれていた。1376 は杓文字状の形態の木製品である。身に刳り込みは認められず、柄は５㎜程度の厚さしかない。スギ材が用いられている。1377 は、シキミ材を用いた匙である。1378 ～ 1381 は箸である。いずれも端部付近の断片で、全長が判明するものは出土していない。1378 はスギ、他はヒノキが用いられている。

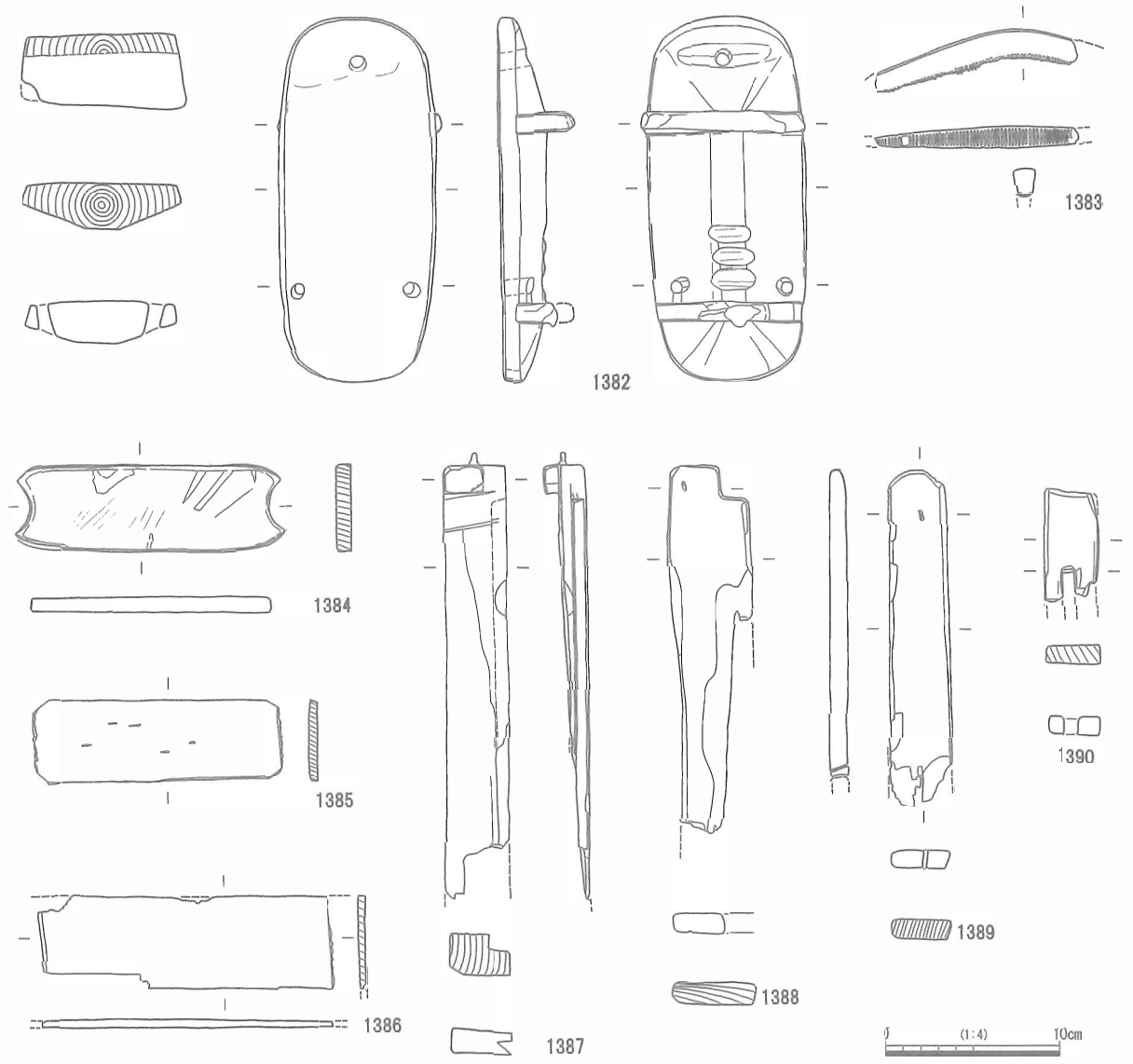


図 149　SR8001 Ⅰ層出土木製品（４）

1382 は陰卯下駄である。平面は楕円形で、歯は裏面に空けた溝に差し込まれている。横緒孔は後歯の前に位置しており、裏面のやや後方には横方向に３条の溝が刳り込まれている。台と歯で材が異なっており、台にはサワラ、歯にはシイ属が用いられている。1383 は櫛である。楕円形の形態のもので、歯は細かい。腐食が著しく、歯のほとんどは欠失している。材にはヤマザクラが用いられている。1384 ～ 1386 は、用途不明の薄板状の木製品であり、いずれもヒノキ材が用いられている。1384 の左右両側端には、半円形の刳り込みが認められる。周囲には、丁寧な面取りが施されている。1385 は四隅が斜めに切り落とされており、２～３㎜の小さな木釘が６ヶ所に打ち込まれている。1387 ～ 1390 は、用途は特定できないが、加工痕のある棒状木製品である。いずれも大きさからみて、指物の部材であると推測される。1387 は断面長方形の角材で、上部には鉄釘が打ち込まれている。側面には断面三角形の溝が彫られており、板状のものが差し込まれていたものと推測される。1388 も断片であるが、端部を継ぎ手状に切り欠いており、釘孔も確認できる。1389 は、端部が円頭状に仕上げられており、２ヶ所に釘孔が認められる。釘孔の１つには、鉄釘が残存している。1390 には、中央にほぞ孔が設けられている。1389 はスギ材が、他はヒノキ材が用いられている。

1391 ～ 1393 は大型の板状木製品である。1392 にはほぞ孔が穿たれており、1393 には鎹が打ち込まれている。いずれも長さ 80 ㎝以上の大型の材で、厚さは３㎝以上もある。1391 はサワラ、1392 はコナラ属、1393 はヒノキである。

以上のように、Ⅰ層から出土した遺物は、年代としては 19 世紀代のものまで確認できる。ただし、すべての遺物について層位の違いが峻別できるわけではないが、明確なものに限定すると、17 世紀後半以降の遺物に関しては、Ⅰ層でも最上層からの出土に限られている。前述のように、Ⅰ層の最上層は、カワニナやシジミなどの貝殻が多数遺存する土層である。同様の状況は、検出面より上層にあたる溜池の堆積土でも確認されていることから、Ⅰ層の最上層に関しては溜池築造後の堆積土であると判断される。一説によると、「干杭池」が築かれた時期は、1630 年頃に築かれた「谷ノ奥池」と同じ頃であるという。もちろん、これはあくまで伝承ではあるが、Ⅰ層の最上層から出土している遺物から、溜池が 17 世紀後半以前に築かれていることは明らかである。詳細な年代を特定することは困難であるが、ほぼ伝承の通り、「干杭池」は 17 世紀中頃前後に築造された可能性が高いと推測される。

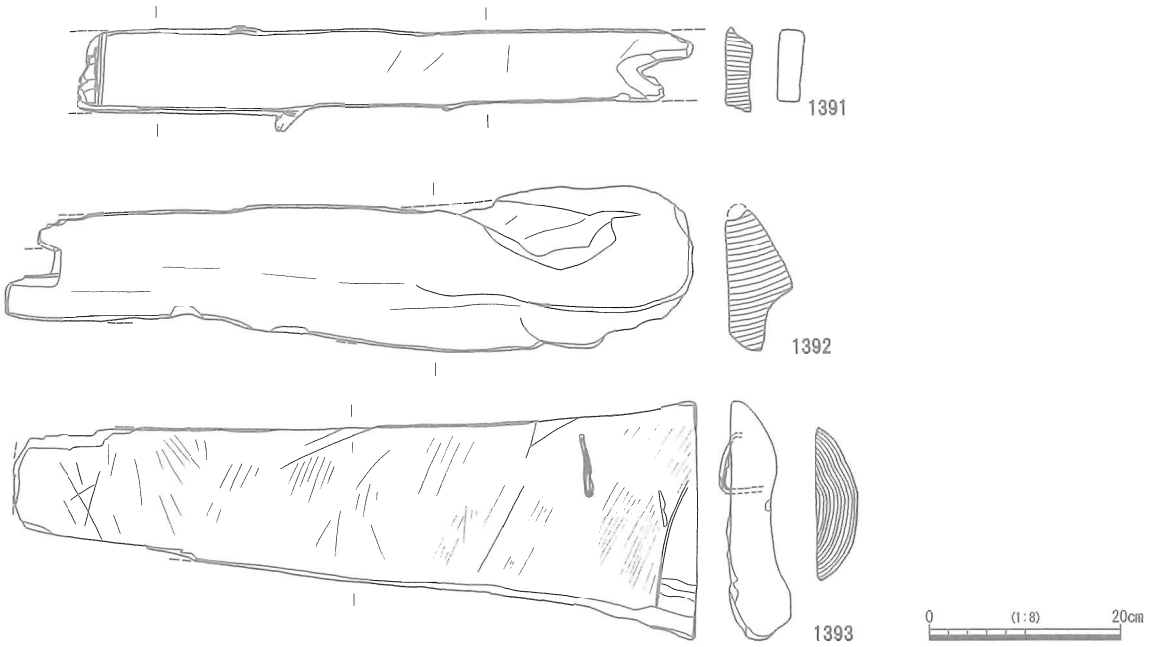


図 150　SR8001 Ⅰ層出土木製品（５）

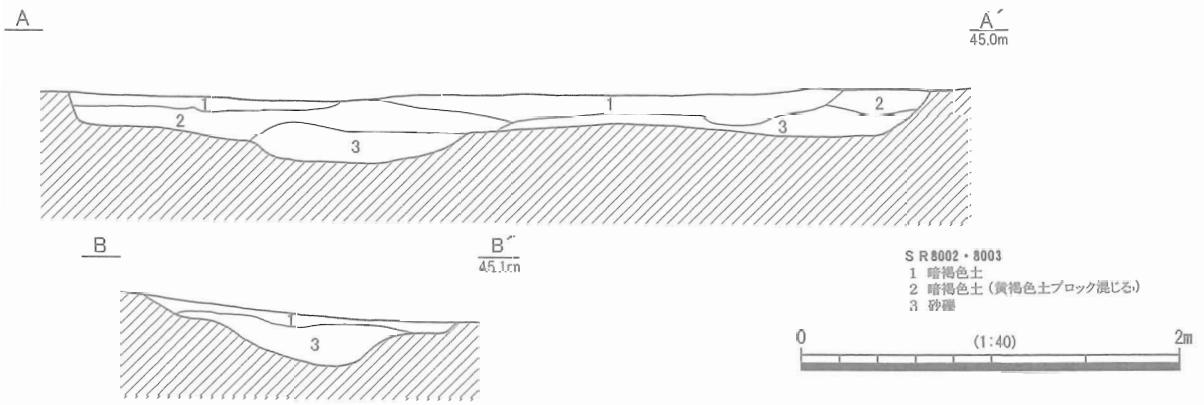


図 151　SR8002・8003 実測図・断面図

SR8002・8003（図 151・152、図版 29）

SR8001 の東側に位置する自然流路である。SR8002 と SR8003 は、直接接続する状況が検出されなかったために遺構番号を分けてはいるが、SR8003 の延長線上で SR8002 が東へ大きく張り出しており、二又に分かれる単一の流れであるとみてよい。いずれも形状は不定形で、深さも安定しておらず、底部は大きく波打っている。一部深い部分もみられるが、大部分は 20 ～ 30 ㎝程の深さとなっている。土層は大きく上下２層に分けられる。上層は暗褐色土、下層は砂礫が堆積している。下層には、流出した護岸構築土とみられる粘土ブロックも多量に含まれている。

規模の割に、出土遺物はごく少量である。1394 ～ 1398 は、SR8002 から出土した遺物である。1394 は須恵器の坏身である。1395 は土師器の甕で、図化したもの以外にも破片が数点出土している。1396 は貿易陶磁で、青磁碗の体部の破片である。1397 は片口鉢である。13 世紀前半のもので、知多産とみられる。1398 は古志戸呂窯産の擂鉢である。1399 ～ 1404 は、SR8003 から出土した遺物である。1399 ～ 1401 は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品である。1401 の底部外面には、「大」と書かれた墨書が認められる。1402 ～ 1404 は土師質土器皿である。いずれも口径９㎝程度の小型のものである。摩滅が著しく調整に関しては不明瞭であるが、軟質の焼きで、比較的厚手のつくりとなっている。

前述のように、SR8002 と SR8003 は、SR8001 の土層断面からみてⅡ層の段階での河川の氾濫の跡とみて間違いない。また、SR8003 は溜め池の堤の下層で検出されており、明らかに溜池築造以前の遺構といえる。SR8001 のⅡ層の年代は 13 世紀後半～ 15 世紀であり、両遺構から出土した遺物の年代も、これとほぼ同様の年代を示している。詳細な年代を特定することは困難であるが、SR8002 と SR8003 は、概ね 15 世紀代の遺構とみてよいであろう。

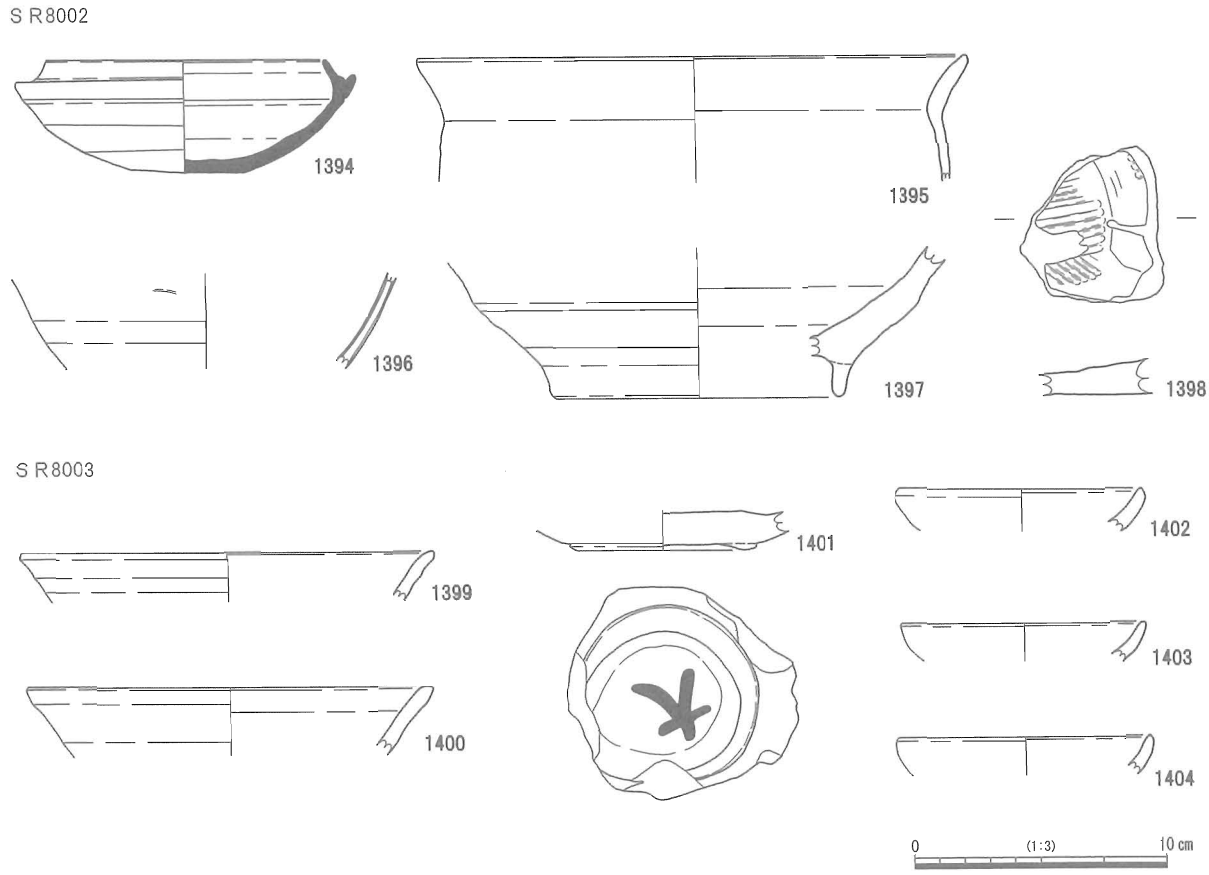


図 152　SR8002・8003 出土遺物

図 153　SR7002・9002 実測図・断面図

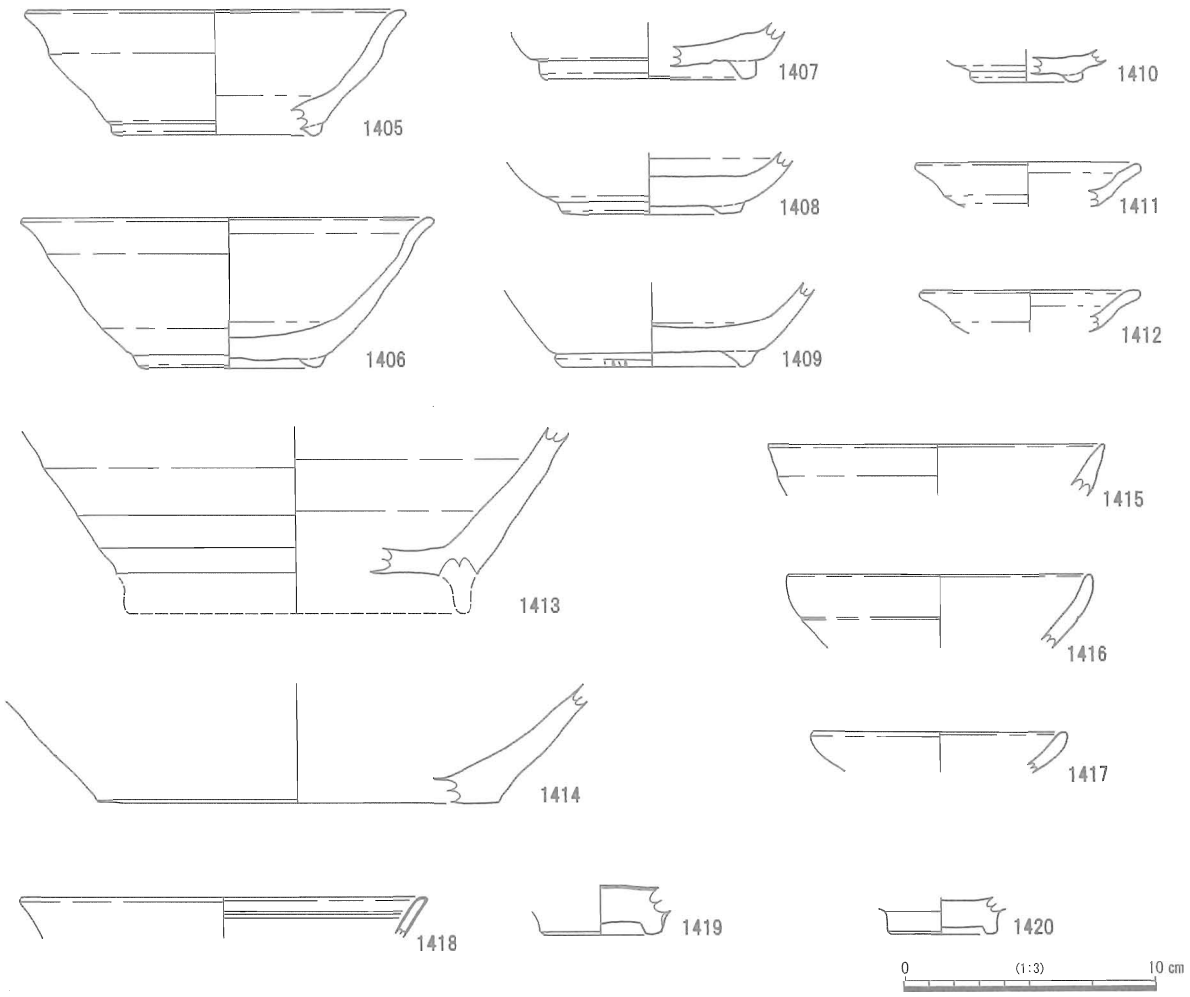


図 154　SR7002 出土遺物

SR7002（図 153・154、図版 28・50）

SR7002 は 7 区の東端に流れる自然流路である。北に向かって徐々に浅くなり、北端では、底部の痕跡がわずかに確認できる程度となっている。底部は凹凸が激しく一定しない。深さは大部分が 10 ～ 20 cm程であるが、調査区南端より約 10 mの地点から急激に深くなり、南端では深さ 80 cm以上にもなる。底面から 10 cm程の高さまで、主に砂や小礫が堆積している。また、その上層の埋土には、黄褐色土（地山）ブロックが多量に含まれており、この遺構が比較的早い段階で人為的に埋められていることが認識できる。

遺物は、すべて人為的に埋め戻された上層から出土しており、下層からの出土は確認されていない。古代と中世前期のものが大半であるが、近世の遺物も出土している。1405 ～ 1412 は、渥美湖西産の山茶碗である。1405 ～ 1409 は碗であり、Ⅱ期とⅢ期のものがみられる。1410 ～ 1412 は小碗と小皿である。1413 は渥美湖西産の片口鉢である。1414 は渥美窯産の甕の底部である。1415 ～ 1417 は土師質土器皿である。1415 と 1416 は坏形を呈する中型のもので、比較的厚手のつくりとなっており、口縁部には強いナデ調整が施されている。1418 と 1419 は貿易陶磁で、いずれも青磁の碗である。1420 は瀬戸美濃産の天目茶碗で、17 世紀中頃のものである。

出土遺物から、SD7002 は 17 世紀中頃に埋められたとみてよい。これは東側に溜池が築かれる時期と一致しており、おそらくは溜池の造成に伴って埋め立てられたのであろう。

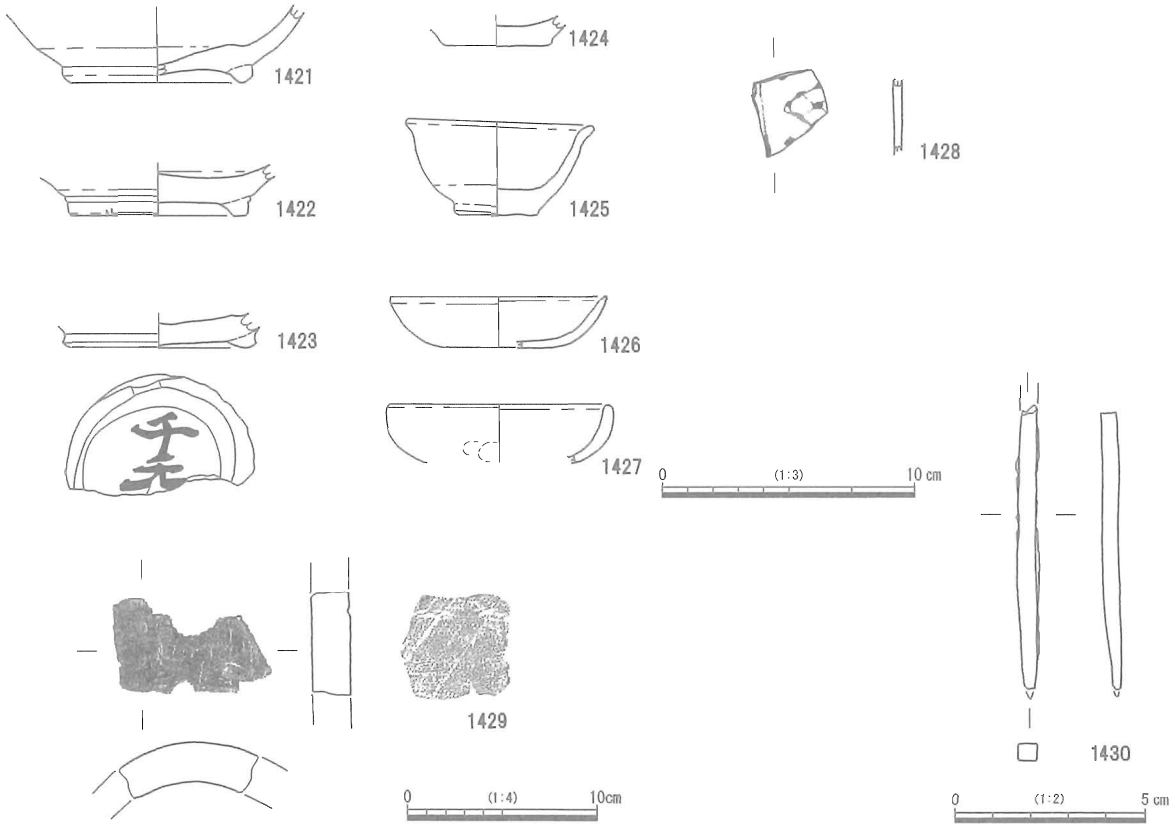


図 155　SR9002 出土遺物

SR9002（図 153・155、図版 28）

SR9002 は、3 区の東端から 9・8 区にかけて流れる自然流路である。大溝 SD2001 の東辺付近から南東へ向かって蛇行して流れ、最終的には河川 SR8001 に注ぎ込んでいる。全体的に浅く、底部がわずかに残存する程度であり、ほとんどの部分では深さは 5 ㎝にも満たない。底面は一定せず、凹凸が激しい。埋土には、砂や小礫を多く含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、古代のものの他、中世から近世の遺物が出土している。1421 ～ 1423 は山茶碗である。いずれも渥美湖西産の製品である。1423 の底部外面には、「千□（手か？）」の墨書がみられる。1424 は山茶碗の小皿である。1425 は、山茶碗の小杯とでも称すべき、特殊な器形のものである。中屋遺跡では、この 1 点しか確認されていない。底部には糸切り痕が明瞭に残っている。胎土からみて、恐らくは渥美湖西産の製品であろう。1426 と 1427 は土師質土器皿であり、1426 は軟質で表面の摩滅が著しく、1427 は比較的硬質である。1428 は肥前窯産の磁器染付である。19 世紀初頭の筒形碗で、外面には四菱文が描かれている。1429 は丸瓦である。軟質のもので、表面には被熱の痕跡が認められる。大溝 SD2001 などで出土している中世の瓦である。端部は遺存しないが、布目が粗いため有段式であると推測される。1430 は鉄釘である。一辺 4 ㎜の角釘で、頭部を欠くが長さは 7.2 ㎝残存している。これらの他に、図化できない小片であるが、内耳鍋も出土している。

出土遺物からは、SD9002 が少なくとも 19 世紀の初め頃までは機能していたことがわかる。これは、河川 SR8001 が堰き止められ溜池となって以降も流れていたことを示している。大溝 SD2001 が埋没し、逃げ場のなくなった周囲の雨水が、高まりとなっていた土塁の周囲に沿って、溜池へと流入していた痕跡とみてよいであろう。

SR1001（図 156・157、図版 52）

１区の西端に位置する河川である。調査区北端から 33 ｍの長さで主に東岸部分が確認されており、南へ向かって流れる。西側には、現在の道路と「荒巻川」と呼ばれる河川が位置しており、大部分が調査区外となっている。

深さは検出面から平均１ｍ程で、底部は一定せず凹凸が激しい。内部には、砂や砂を多く含む暗褐色土が堆積している。15 世紀には調査区北端から約 50 ｍの場所に、溝 SD1001 が取り付けられている。全体の規模や経路については不明な点が多いが、道路と川を挟んだ５区では検出されていないことから、幅に関しては６ｍ以内であるとみてよい。

検出された範囲が狭いこともあり、出土遺物は多くない。1431 ～ 1438 は、下層から出土した山茶碗である。周辺の溝などと同様に、いずれも渥美湖西産の製品で、大半がⅢ期のものとなっている。1442 は常滑産の片口鉢である。15 世紀のもので、下層から出土している。1439 ～ 1441 は、中層から出土した山茶碗である。中層からは、図化したものの他に 16 世紀の瀬戸美濃産の擂鉢も出土している。1443 と 1444 は丸瓦である。いずれも広端部の破片であり、広端面と凹面には離れ砂が付着する。1443 は下層、

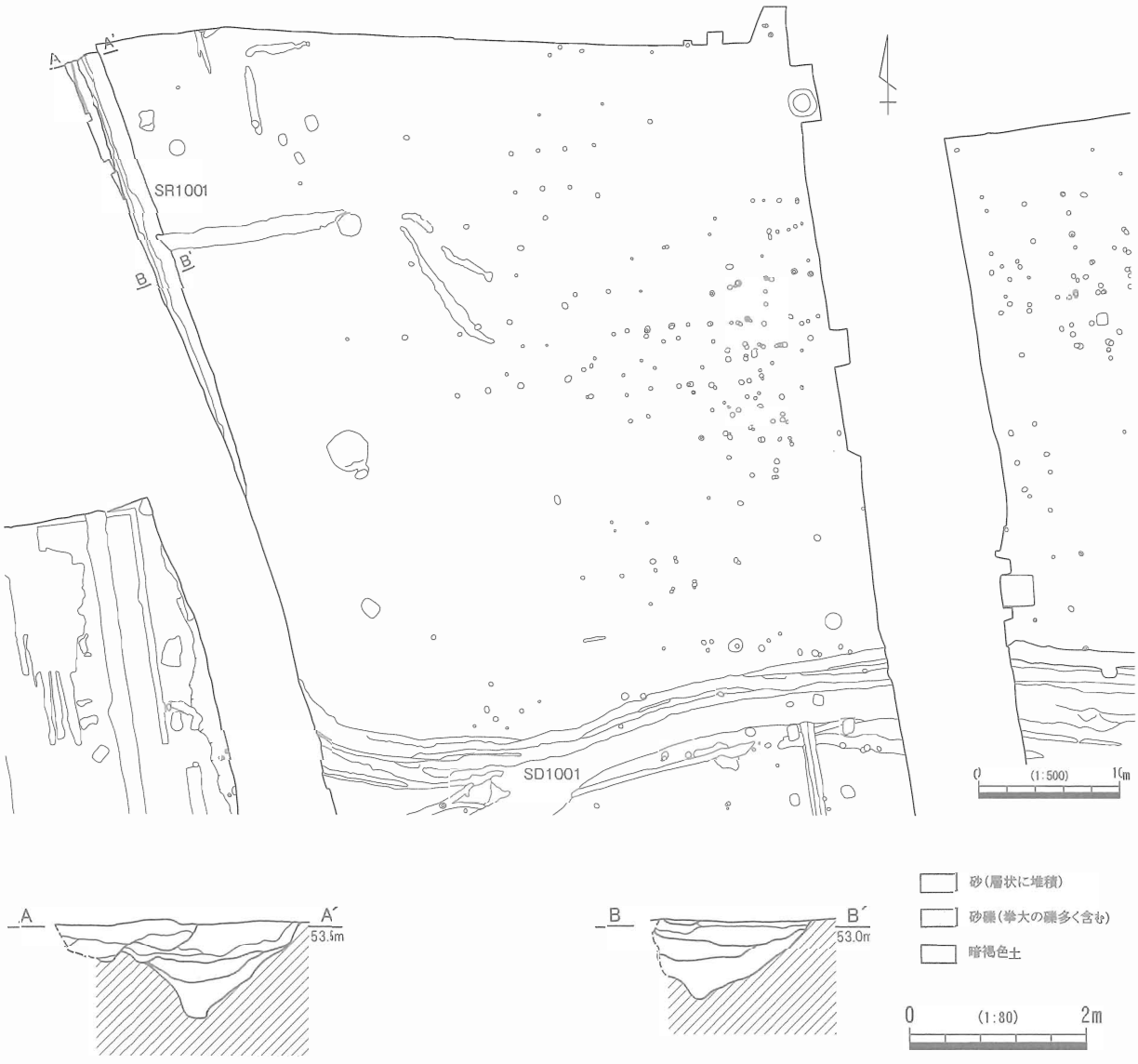


図 156　SR1001 実測図・断面図

1444 は上層から出土している。

これらの遺物から、SR1001 は 15 世紀代にはこの位置を流れていたことがわかる。これは、SR1001 から水を引き込むために掘られたとみられる溝 SD1001 の年代とも矛盾はない。また、「荒巻川」の存在から、その後現在に至るまで、SR1001 はほぼ同じ経路を流れていたものと推測される。

ただし、今回の調査では河川の中央部分については未調査であり、実際にはもっと深い可能性も想定できる。そのため、検出された範囲における「下層」が、SR1001 の最下層の堆積とは言い切れない側面があり、河川のはじまりの年代については明確にし得ない。

「荒巻川」の上流は、現在「谷ノ奥池」となっている谷部にあたる。同じ谷部に源流があるとみられる河川跡は、約 150 m西側の寺海土遺跡でも検出されている。寺海土遺跡については、今後整理作業を行い報告書を刊行する予定であるが、調査時の所見等からみると、寺海土遺跡の河川の方が先行するようである。この河川の変遷については、今後寺海土遺跡における検討を踏まえ、あわせて検討する必要があろう。

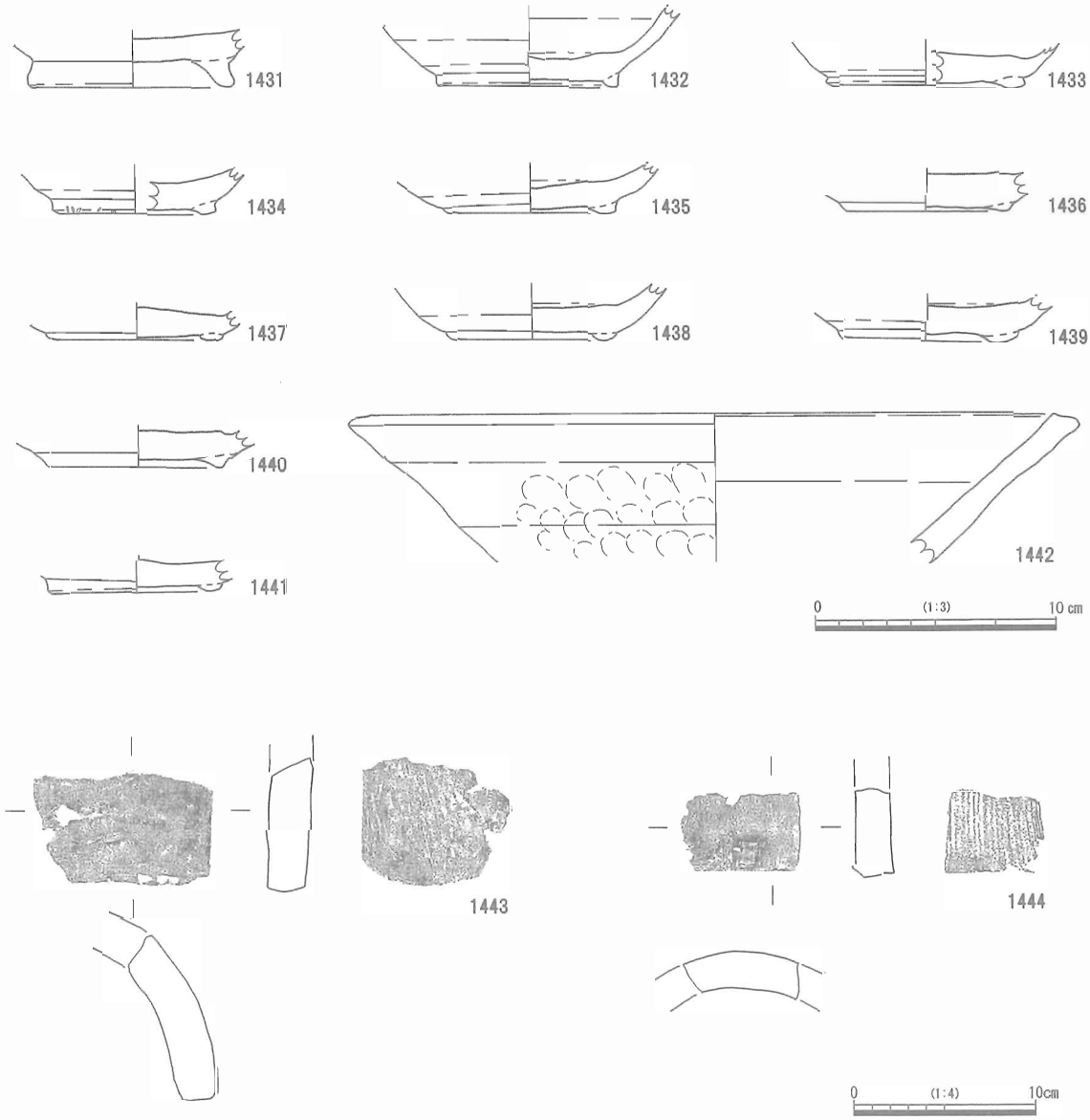


図 157　SR1001 出土遺物

表14　河川出土 土器・陶磁器観察表（1）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
942	SR8001	Ⅳ層	須恵器	坏蓋			(11.4)		3.1		口縁～体部 1/4		灰白	
943	SR8001	Ⅳ層	須恵器	坏蓋			15.2		3.2		口縁～天井 2/3		灰	
944	SR8001	Ⅳ層	須恵器	坏蓋			(15.0)				口縁部 1/9	外面・自然釉	灰白	
945	SR8001	Ⅳ層	須恵器	坏身				(9.4)			体部～底部 1/6		灰	
946	SR8001	Ⅳ層	須恵器	壺				6.9			底部のみ	内面・自然釉	灰	
947	SR8001	Ⅳ層	土師器	鉢			(14.2)				口縁～体部 1/20		灰白	赤彩
948	SR8001	Ⅳ層	土師器	坏						6.7	底部のみ		灰白	赤彩
949	SR8001	Ⅳ層	土師器	坏			(13.6)	(9.9)			口縁～底部 1/14		灰白	
950	SR8001	Ⅳ層	土師器	坏			(13.4)				口縁～体部 1/10		にぶい橙	赤彩
951	SR8001	Ⅳ層	土師器	皿			(12.8)				口縁部 1/18		灰白	赤彩
952	SR8001	Ⅳ層	土師器	皿			(13.4)	(8.0)			口縁～底部 1/10		にぶい橙	赤彩
953	SR8001	Ⅳ層	土師器	皿			(12.3)	(8.0)			口縁～底部 1/3		浅黄橙	赤彩
954	SR8001	Ⅳ層	土師器	甕			(32.5)				口縁部 1/26		にぶい黄橙	
955	SR8001	Ⅳ層	土師器	甕			(14.5)				口縁部 1/12		にぶい黄橙	
956	SR8001	Ⅳ層	灰釉陶器	碗							体部 1/4		灰白	
957	SR8001	Ⅲ層	須恵器	坏蓋			(9.7)				口縁部 1/10		灰白	
958	SR8001	Ⅲ層	須恵器	坏蓋				(7.3)			天井部 1/5		灰白	
959	SR8001	Ⅲ層	須恵器	高坏							体部 1/8		灰	
960	SR8001	Ⅲ層	土師器	坏				(8.0)			底部 1/4		浅黄橙	赤彩
961	SR8001	Ⅲ層	土師器	鉢			(16.1)				口縁～体部 1/4		にぶい橙	
962	SR8001	Ⅲ層	灰釉陶器	碗			(14.2)				口縁～体部 1/4		浅黄橙	
963	SR8001	Ⅲ層	灰釉陶器	碗						7.0	底部のみ	漬け掛け	灰白	
964	SR8001	Ⅲ層	灰釉陶器	碗						5.5	底部 1/2		灰白	
965	SR8001	Ⅲ層	灰釉陶器	碗						(6.4)	底部のみ	内面・自然釉	灰黄	高台部ほぼ欠損
966	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.8)				口縁部 1/9	自然釉	灰白	
967	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.4)	底部 1/4		灰白	
968	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(13.8)				口縁部 1/20	漬け掛け	灰白	
969	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.8)				口縁部 1/10		灰白	
970	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2				(6.5)	体部～底部 1/8	?	灰白	
971	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(13.7)				口縁部 1/20		灰白	
972	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(13.9)				口縁部 1/14	内面・自然釉	灰	
973	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				6.2	底部 2/3		灰白	
974	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.9)				口縁部 1/8		灰白	
975	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.5	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
976	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.0)	底部 1/4		灰白	
977	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 1/4		灰白	
978	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.7)	底部 1/4		灰白	
979	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.7)	底部 1/2		灰白	
980	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	小鉢	湿美湖西	Ⅰ－2	(8.2)		2.9	3.4	口縁～底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
981	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ	(7.5)	(3.9)	2.1		口縁～底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
982	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		(3.7)			体部～底部 1/2		灰白	
983	SR8001	Ⅲ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		(4.0)			体部～底部 1/2		灰白	
984	SR8001	Ⅲ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西	Ⅰ期				(11.8)	底部 1/6	自然釉	灰白	
985	SR8001	Ⅲ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西	Ⅰ期				(9.8)	底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
986	SR8001	Ⅲ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.9)				口縁部 1/6		灰白	
1082	護岸施設	構築土	須恵器	坏						(9.2)	底部 1/4		灰白	
1083	護岸施設	構築土	須恵器	坏				(12.4)			底部 1/8		灰白	
1084	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西		(16.0)				口縁部 1/24		灰白	
1085	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.7)				口縁部 1/18	自然釉	灰白	
1086	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.0)				口縁部 1/12		灰白	
1087	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.1)				口縁部 1/12		灰白	
1088	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.5)				口縁部 1/12		灰白	
1089	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	(15.4)				口縁～体部 1/9	内面・自然釉	灰白	
1090	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(6.7)	底部 1/5		灰白	
1091	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.6)	底部 1/2		灰白	
1092	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.7	底部のみ		灰白	
1093	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.2)	底部 1/6		灰白	
1094	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.5	底部のみ		灰白	
1095	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.6)	底部 1/3		灰	
1096	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.7	体部～底部 1/2		灰白	墨書
1097	護岸施設	構築土	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.4)	底部 1/4		灰白	墨書「□」
1098	護岸施設	構築土	山茶碗	小皿	湿美湖西		(8.5)				口縁部 1/14		灰白	
1099	護岸施設	構築土	貿易陶磁	青磁皿	同安	A類			(4.7)		底部 1/4	青磁	灰白	櫛目文
1100	護岸施設	構築土	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)				口縁部 1/16		灰白	
1101	護岸施設	構築土	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.2)				口縁部 1/6		浅黄橙	
1102	護岸施設	構築土	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.6)				口縁部 1/10		灰白	
1103	護岸施設	構築土	土師質土器	皿		ロクロ		(5.9)			底部 1/4		灰白	
1104	護岸施設	構築土	土師質土器	皿		ロクロ		(4.5)			底部 1/5		灰白	
1105	護岸施設	構築土	土師質土器	伊勢鍋			(19.8)				口縁部 1/20		にぶい黄橙	外面に煤付着
1106	SR8001	Ⅱ層	須恵器	盤			(18.6)		2.2	(10.2)	口縁～底部 1/10		灰白	
1107	SR8001	Ⅱ層	須恵器	壺				5.0			体部～底部 1/8		灰	
1108	SR8001	Ⅱ層	須恵器	坏				(7.1)			底部 1/8		灰白	墨書「□□」
1109	SR8001	Ⅱ層	須恵器	坏							底部一部残		灰白	墨書「枚主」
1110	SR8001	Ⅱ層	灰釉陶器	碗						(6.4)	底部のみ		灰白	
1111	SR8001	Ⅱ層	灰釉陶器	壺							肩部 1/5		灰白	
1112	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.0)				口縁部 1/20		灰白	
1113	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.6)				口縁部 1/10		灰白	炭化物付着
1114	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.4)				口縁部 1/22		灰白	
1115	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.2)				口縁部 1/32		灰白	
1116	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.3)				口縁部 1/16	内面・自然釉	灰白	
1117	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(16.3)				口縁部 1/7	自然釉	灰白	
1118	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(16.7)				口縁部 1/8	内面・自然釉	灰白	
1119	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(13.2)				口縁部 1/9		灰	
1120	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.9)				口縁部 1/8		灰白	
1121	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.4)				口縁部 1/20	外面・自然釉	灰白	

表15　河川出土 土器・陶磁器観察表（2）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径(cm)	残存率	釉薬	色調	備考
1122	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.7)				口縁部 1/5		灰白	
1123	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗			(13.3)				口縁部 1/7	内面・自然釉	灰白	
1124	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2				(8.7)	底部 1/3		灰白	
1125	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2				(7.0)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1126	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2				(5.6)	底部 1/3		灰白	煤付着
1127	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(8.5)	底部 1/4	内面・自然釉	灰白 / オリーブ黄	
1128	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.6)	底部 1/4		灰白	
1129	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				7.3	底部のみ		灰白	
1130	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.3)	底部 1/2		灰白	
1131	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.4)	底部 1/4	自然釉	灰白	
1132	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				6.7	底部のみ		灰白	
1133	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部 1/3		黄灰	
1134	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				7.7	底部 2/3		灰白	
1135	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 2/3		灰	
1136	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部 1/4		灰白	
1137	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				7.0	底部 2/3	内面・自然釉	灰白	
1138	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.6	底部 3/4		灰白	
1139	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				7.1	底部のみ		灰白	
1140	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 1/3		灰白	
1141	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.5	底部のみ		灰白	
1142	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部 1/4		灰白	
1143	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.8)	底部 1/4		灰白	
1144	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.1)	体部～底部 2/3		灰白	
1145	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(5.7)	底部 2/3		灰白	
1146	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.3	底部のみ		灰白	
1147	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 1/2		灰	
1148	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(8.0)	底部 1/2		灰白	
1149	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.5	底部 3/4	内面・自然釉	灰白	
1150	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部 1/4		灰白	
1151	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－2				6.5	底部のみ		灰白	
1152	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	東濃	Ⅱ－2				(7.1)	底部 1/6		灰白	
1153	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－1				(7.0)	底部 1/4		灰白	
1154	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－2				6.9	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
1155	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－2				6.2	底部のみ		灰白	煤付着
1156	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－2				6.1	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
1157	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－2				(6.8)	体部～底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1158	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－1				(7.6)	体部～底部 1/3		灰白	
1159	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ－2				(6.5)	底部 2/3		灰白	
1160	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				5.9	底部 3/4		灰白	
1161	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.6)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1162	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.2)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	内面に黒色物付着
1163	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.1	底部のみ		灰白	
1164	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.0)	底部 2/3		灰白	
1165	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(5.5)	底部 1/2		灰白	
1166	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.6)	底部 1/3		灰白	
1167	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.2)	底部 1/4		灰白	内面に黒色物付着
1168	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(6.8)	底部 1/4		灰白	
1169	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				6.3	体部～底部		灰白	
1170	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2		7.3			体部～底部		灰白	内面に黒色物
1171	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	(14.6)		5.1	6.7	口縁～底部 1/4		灰白	墨書「三」
1172	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 1/2		灰白	墨書「得米」
1173	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.4)	底部 1/4		灰白	墨書「□」
1174	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－1	(8.1)				口縁～体部 1/8	内面・自然釉	灰白	
1175	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2	(8.5)				口縁～体部 1/6		灰白	
1176	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2	(8.3)				口縁～体部 1/12		灰白	
1177	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2	(8.1)	5.6	1.6		口縁～底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
1178	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.8			底部のみ		灰白	墨書「十」
1179	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.1			底部のみ	内面・自然釉	灰白	
1180	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.3			底部 1/2		灰白	
1181	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		5.1			底部 2/3	自然釉	灰白	
1182	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		3.9			底部のみ		灰白	
1183	SR8001	Ⅱ層	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ～2		4.5			底部のみ		灰白	
1184	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西	Ⅰ期	(30.3)				口縁部 1/8	自然釉	灰白	
1185	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西					(11.6)	胴部～底部 1/4		灰白	
1186	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	湿美湖西					(10.4)	胴部～底部 1/4		灰白	
1187	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	知多					(12.8)	底部 1/3		灰白	
1188	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	片口鉢	知多					(12.0)	胴部～底部 1/8	内面・自然釉	灰白	
1189	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	小型壺	湿美		(13.0)				口縁部 1/7		黄灰	
1190	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	壺	湿美			(18.0)			胴部～底部 1/3		灰白	
1191	SR8001	Ⅱ層	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類	(13.9)				口縁部 1/17	青磁	灰白	鎬蓮弁文
1192	SR8001	Ⅱ層	施釉陶器	柄付片口	瀬戸美濃	後期Ⅰ～Ⅱ	(18.6)				口縁～体部 1/14		灰白	
1193	SR8001	Ⅱ層	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂		(27.4)				口縁部 1/13		橙	
1194	SR8001	Ⅱ層	中世陶器	甕	常滑	10 型式	(37.7)				口縁部 1/20		灰褐 / 灰白	
1195	SR8001	Ⅱ層	施釉陶器	直線大皿	古志戸呂		(26.4)				口縁部 1/24	錆	にぶい褐色 / 赤褐	
1196	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	8.4	4.7	1.7		口縁～底部 3/4		灰白	
1197	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部 1/12		灰白	
1198	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		ロクロ	8.3	4.8	1.6		口縁～底部 1/2		淡黄橙	
1199	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		ロクロ		5.0			底部のみ		灰白	
1200	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.1)	(6.0)	3.2		口縁～底部 1/8		灰白	
1201	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	11.8)				口縁部 1/12		灰白	
1202	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	10.6)	(4.4)			口縁～底部 1/6		灰白	
1203	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	10.7)	(3.0)	3.4		口縁～底部 1/4		灰白	
1204	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	12.0)	(4.2)	2.7		口縁～底部 1/4		灰白	
1205	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	12.9)	(5.6)			口縁～底部 1/4		灰白	
1206	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/4		灰白	

表16　河川出土 土器・陶磁器観察表（3）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径(cm)	残存率	釉薬	色調	備考
1207	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)	(4.0)	2.9		口縁～底部 1/4		灰白	
1208	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/12		灰白	
1209	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.5)				口縁部 1/10		灰白	
1210	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)				口縁部 1/9		浅黄橙	
1211	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)				口縁部 1/10		灰白	
1212	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)				口縁部 1/8		灰白	
1213	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/9		灰白	
1214	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部 1/5		灰白	
1215	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	伊勢鍋			(24.6)				口縁部 1/16		にぶい黄橙	外面に煤付着
1216	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(19.0)				口縁～肩部 1/6		にぶい黄橙	
1217	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.4)				口縁部 1/14		にぶい黄橙	外面に煤付着
1218	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(18.8)				口縁部 1/24		灰白	
1219	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(17.5)				口縁部 1/10		にぶい黄橙	外面に煤付着
1220	SR8001	Ⅱ層	土師質土器	羽釜		内彎形	(23.0)				口縁～羽部 1/40		にぶい黄橙	
1250	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西		(14.6)				口縁部 1/20		灰白	
1251	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅱ	(14.8)		4.6	(5.9)	口縁～底部 1/10	自然釉	灰白	
1252	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西		(16.0)				口縁部 1/20		灰白	
1253	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	知多		(16.0)				口縁部 1/6		灰白	
1254	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西		(13.6)				口縁部 1/10		灰白	
1255	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1	(14.5)				口縁部 1/20	内面・自然釉	灰白	
1256	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1	14.8		4.9	5.7	口縁～底部 1/2		灰白	
1257	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西		(17.0)				口縁部 1/8		灰白	
1258	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西		(15.3)				口縁部 1/6		灰白	
1259	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1	(14.0)				口縁部 1/12	自然釉	灰白	
1260	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西		(14.5)				口縁部 1/14		灰白	
1261	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	東濃	8型式	(13.2)				口縁部 1/4		灰白	
1262	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅱ				(7.6)	底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
1263	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
1264	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(8.7)	底部 1/6		灰白	
1265	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				7.0	底部のみ		明褐灰	被熱
1266	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	知多	3～4型式				6.4	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
1267	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				7.0	底部のみ		灰白	
1268	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	東遠	Ⅲ－1				(6.6)	底部 1/2		明青灰	
1269	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(6.4)	底部 1/3		灰白	
1270	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(7.2)	底部 1/2		灰白	
1271	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				5.9	底部のみ		灰白	
1272	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
1273	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				6.7	体部～底部	内面・自然釉	灰白	
1274	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(6.0)	底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
1275	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				6.3	底部のみ		灰白	
1276	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	底部 1/3	内面・自然釉	灰白	
1277	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				7.1	底部のみ		黄灰	
1278	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(7.6)	底部 1/4		灰白	
1279	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.5	底部のみ		灰白	墨書「又」
1280	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				7.0	底部のみ		灰白	
1281	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	小碗	東遠	Ⅰ－2				(4.6)	底部 1/2		灰	
1282	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅲ－2		(4.0)			底部 1/3		灰白	墨書「万」
1283	SR8001	Ⅰ層	山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅱ	(7.7)	3.8	2.2		口縁～底部 1/16	自然釉	灰白	
1284	SR8001	Ⅰ層	施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	後期Ⅱ	(11.0)				口縁～体部 1/8		天目釉 / 灰白	
1285	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	碗	京・信楽		(8.9)				口縁～体部 1/8		灰白	
1286	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	碗	京・信楽					(4.0)	底部 1/4		灰白	
1287	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	登3～4				4.3	底部のみ		天目釉 / 灰白	
1288	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	小中	瀬戸美濃	登8～9	(9.8)				口縁～体部 1/3		明緑灰 / 灰白	呉須絵
1289	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	碗	瀬戸美濃	登8～9				3.6	底部のみ		黒褐 / 灰白	
1290	SR8001	Ⅰ層	近世磁器	白磁皿	肥前						底部 1/6		灰白	高台端部欠損
1291	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	碗	瀬戸美濃	登8～9				(8.2)	底部 1/3		灰白 / オリーブ黄	
1292	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	花瓶	瀬戸美濃			4.3			体部～底部		黒褐 / 灰白	墨書「○よき山ゟ」
1293	SR8001	Ⅰ層	施釉陶器	折縁深皿	瀬戸美濃	後期Ⅳ古	(27.9)				口縁～体部 1/14		オリーブ黄 / 灰白	
1294	SR8001	Ⅰ層	施釉陶器	盤類	古志戸呂			(8.8)			底部 1/3		にぶい黄橙	
1295	SR8001	Ⅰ層	近世陶器	擂鉢	瀬戸	登		(11.5)			胴部～底部 1/14		褐灰 / 灰白	
1296	SR8001	Ⅰ層	施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	後期Ⅴ古		(11.4)			胴部～底部 1/8		にぶい褐 / 灰白	
1297	SR8001	Ⅰ層	瓦質土器	筒形			(23.6)				口縁部 1/16		黄灰	
1298	SR8001	Ⅰ層	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B2 類	(16.6)				口縁部 1/22	青磁	オリーブ灰 / 灰白	蓮弁文
1299	SR8001	Ⅰ層	貿易陶磁	青磁鍋	龍泉窯系	B1 類				4.6	底部のみ	青磁	明緑灰 / 灰白	
1300	SR8001	Ⅰ層	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B2 類					体部一部	青磁	オリーブ灰 / 灰白	蓮弁文
1301	SR8001	Ⅰ層	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	D1 類					体部一部	青磁	灰オリーブ / 灰白	
1302	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(22.1)				口縁部 1/24		灰白	
1303	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(23.6)				口縁部 1/12		灰白	外面に煤付着
1304	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(25.1)				口縁部 1/12		にぶい黄橙	
1305	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(24.1)				口縁部 1/14		灰白	
1306	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(24.0)				口縁部 1/20		淡黄	外面に煤付着
1307	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(24.9)				口縁部 1/22		灰白	外面に煤付着
1308	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(26.6)				口縁部 1/20		灰白	
1309	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	羽釜							羽部 1/7		淡黄	外面に煤付着
1310	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部 1/12		灰白	
1311	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	8.6	3.5	2.1		口縁～底部 1/3		灰白	
1312	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.1)				口縁部 1/12		灰白	
1313	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(14.4)	(9.9)			口縁～底部 1/7		灰白	
1314	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.9)	(4.6)			口縁～底部 1/20		にぶい橙	
1315	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.6)				口縁部 1/4		灰白	煤付着
1316	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部 1/8		灰白	
1317	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)				口縁部 1/6		灰白	
1318	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部 1/4		灰白	
1319	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部 1/10		浅黄橙	
1320	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		ロクロ		(4.4)			底部 1/2		にぶい黄橙	

表 17　河川出土 土器・陶磁器観察表（4）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1321	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		ロクロ		(4.8)			底部 1/2		浅黄橙	
1322	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		ロクロ		(6.4)			底部 1/2		にぶい黄橙	
1323	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.4)				口縁部 1/4		浅黄橙	墨書「 」
1324	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.4)				口縁部 1/8		灰白	墨書「 」
1325	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ					底部一部		淡黄	墨書「今うた / 三尚」
1326	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.7)				口縁部 1/4		灰白	内面スス付着
1327	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.6)				口縁部 1/8		灰白	
1328	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.4)	(4.8)			口縁～底部 1/4		灰白	
1329	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.9)				口縁部 1/5		灰白	
1330	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.2)				口縁部 1/8		灰白	
1331	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.9)				口縁部 1/10		灰黄	
1332	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)				口縁部 1/8		灰白	
1333	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.1)	(5.0)			口縁～底部 1/8		灰白	
1334	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.0)				口縁～底部 1/6		浅黄橙	
1335	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)	(7.0)			口縁～底部 1/14		にぶい黄橙	
1336	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.0)				口縁部 1/8		にぶい黄橙	
1337	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.1)				口縁部 1/6		灰白	
1338	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.2)				口縁部 1/6		浅黄橙	
1339	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.2)				口縁部 1/9		灰白	
1340	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.9)				口縁部 1/8		灰白	
1341	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.5)				口縁部 1/10		灰白	
1342	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)				口縁部 1/6		灰白	
1343	SR8001	Ⅰ層	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.7)	(3.9)	1.8		口縁～底部 1/4		灰白	
1394	SR8002		須恵器	坏身			10.9	4.45	4.45		ほぼ完形		灰	
1395	SR8002		土師器	甕			(21.6)				口縁部 1/12		にぶい黄橙	
1396	SR8002		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	C2 類か					体部 1/8	青磁	オリーブ黄 / 灰白	
1397	SR8002		中世陶器	片口鉢	知多					(11.2)	体部～底部 1/6	内面・自然釉	灰白	
1398	SR8002		施釉陶器	擂鉢	古志戸呂						底部一部		橙	
1399	SR8003		山茶碗	碗	遠美湖西		(16.2)				口縁部 1/24	自然釉	灰白	
1400	SR8003		山茶碗	碗	遠美湖西		(15.6)				口縁部 1/20	自然釉	灰白	
1401	SR8003		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(6.2)	底部 1/2		灰白	墨書「大」
1402	SR8003		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.6)				口縁部 1/12		灰白	
1403	SR8003		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)				口縁部 1/12		灰白	
1404	SR8003		土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁部 1/9		灰白	
1405	SR7002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅱ	(14.9)		(4.95)	(7.8)	口縁～底部 1/12		灰白	
1406	SR7002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1	(15.9)		(6.0)	(6.7)	1/4		灰白	
1407	SR7002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅱ				(8.0)	底部 1/4		灰白	
1408	SR7002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(5.6)	底部		灰白	
1409	SR7002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(7.0)	体部～底部 3/4		灰白	
1410	SR7002		山茶碗	小碗	遠美湖西	Ⅰ－2				(3.8)	底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
1411	SR7002		山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅲ	(8.7)				口縁～体部 1/7	自然釉	灰白	
1412	SR7002		山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅲ	(8.4)				口縁部 1/8		灰白	
1413	SR7002		中世陶器	片口鉢	遠美湖西						体部 1/8		灰白	
1414	SR7002		中世陶器	甕	遠美			(16.1)			体部～底部 1/4		灰黄	
1415	SR7002		土師質土器	皿		非ロクロ	(13.3)				口縁部 1/18		灰白	
1416	SR7002		土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部 1/28		浅黄橙	
1417	SR7002		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/10		浅黄橙	
1418	SR7002		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	A 類か	(16.0)				口縁部 1/22	青磁	灰オリーブ / 灰白	
1419	SR7002		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類				(4.2)	底部 3/4	青磁	灰オリーブ / 灰白	
1420	SR7002		近世陶器	天目茶碗	瀬戸美濃					(3.8)	底部のみ	鉄釉		17 世紀中頃
1421	SR9002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(6.6)	底部 1/4		灰白	
1422	SR9002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(6.8)	底部 4/5		灰白	
1423	SR9002		山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(6.8)	底部 1/2		灰	墨書「千□」
1424	SR9002		山茶碗	小皿	遠美湖西	Ⅲ－2		3.9			底部		灰白	
1425	SR9002		山茶碗	小杯	遠美湖西	Ⅰか	(7.2)	3.0	3.55		4/5		灰白	
1426	SR9002		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.6)				口縁部 1/4		浅黄橙	
1427	SR9002		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.6)				口縁～体部 1/8		灰白	
1428	SR9002		近世磁器	筒形碗	肥前						体部片			染付け
1431	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅰ－2				8.0	底部のみ	自然釉	灰白	
1432	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				7.1	底部のみ	自然釉	灰白	
1433	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(7.4)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1434	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(5.7)	底部 1/2		灰白	
1435	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.1	底部のみ		灰白	
1436	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.4	底部のみ		灰白	
1437	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(6.4)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1438	SR1001	下	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				(5.7)	底部 1/2		灰白	
1439	SR1001	中	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				6.3	底部のみ		灰白	
1440	SR1001	中	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－1				(7.0)	底部のみ		灰白	
1441	SR1001	中	山茶碗	碗	遠美湖西	Ⅲ－2				6.4	底部のみ		灰黄	
1442	SR1001	下	中世陶器	片口鉢	常滑	9 型式	(28.2)				口縁部 1/4		にぶい赤褐	

５．掘立柱建物

中世を中心とした時期の掘立柱建物跡は調査区のほぼ全域で発見されているが、いくつかの群を構成している傾向がある。図 158 に示したように、その建物群をⅠ～Ⅴ群としてまとめ、記述を進めたい。

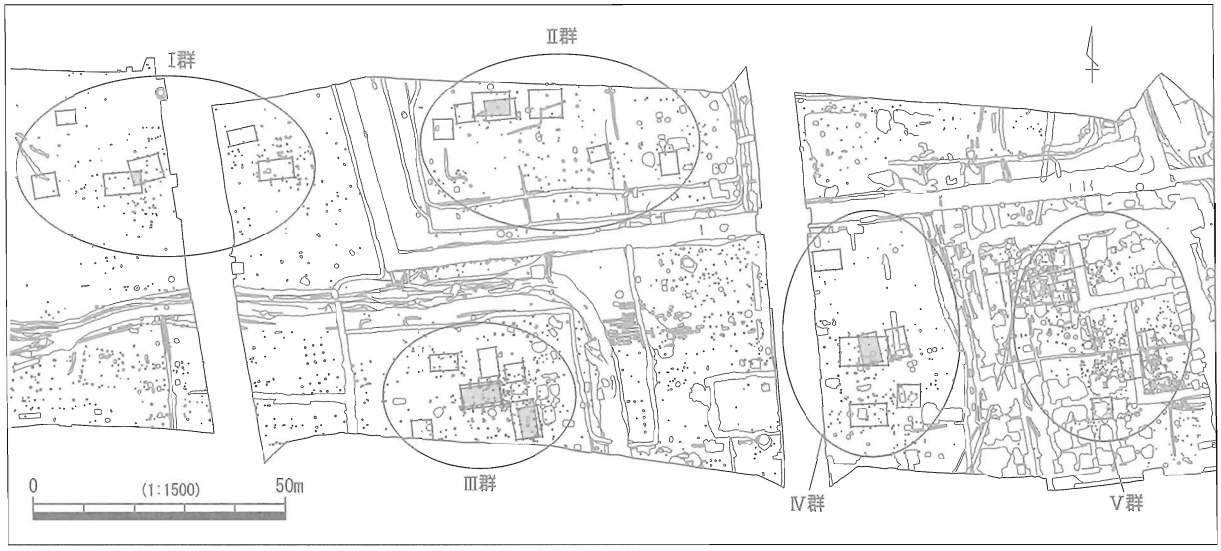


図 158　掘立柱建物群（中世～近世）

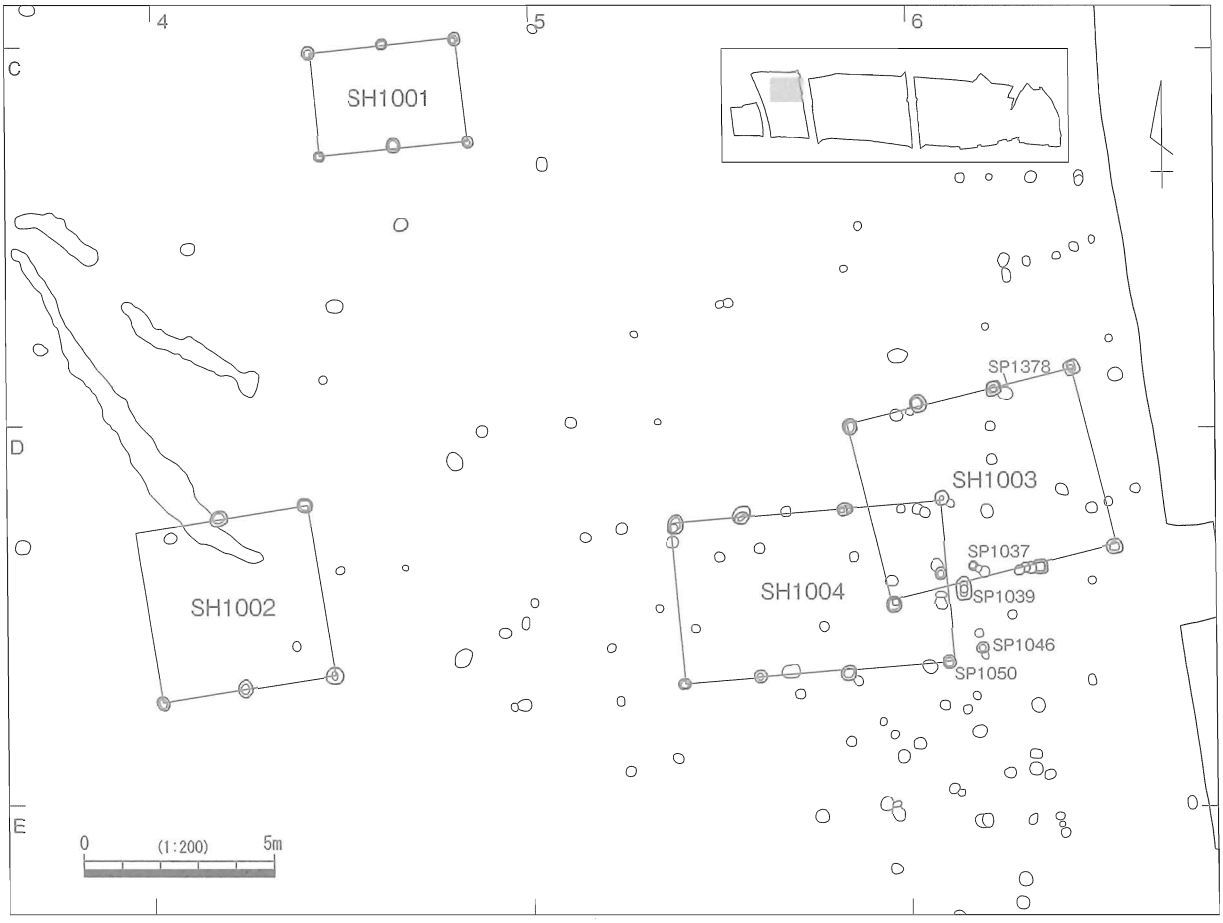


図 159　掘立柱建物配置図（１区）

（1）Ⅰ群の掘立柱建物

1区～2区にかけての掘立柱建物群で、SH1001・SH1002・SH1003・SH1004・SH2001・SH2004が該当する。出土遺物や建物の方向性から、SH1001・1004・2002は12～13世紀代、SH1002・1003・2002は15世紀後半～16世紀代の建物とみられる。SH1001・1004・2002は、大溝及び土塁による方形区画の西側に配された建物群と考えられる。SH1002・1003・2002は、クランク状に屈曲するSD1001によって南側と西側、またこの時期まで浅く残存していたとみられる大溝によって東側が区画された屋敷地であったと考えられる。

SH1001（図159・160）

1区北部のC4区に位置する。南北1間、東西2間の側柱建物で、建物規模は梁行2.75 m、桁行3.9 mである。南北方向の軸がN－7°－Wの南北棟である。柱間は桁行が1.95 mの等間となっている。柱痕跡は確認されておらず、柱穴掘方の平面形状はほぼ円形であった。その規模は直径が0.25～0.35 m、

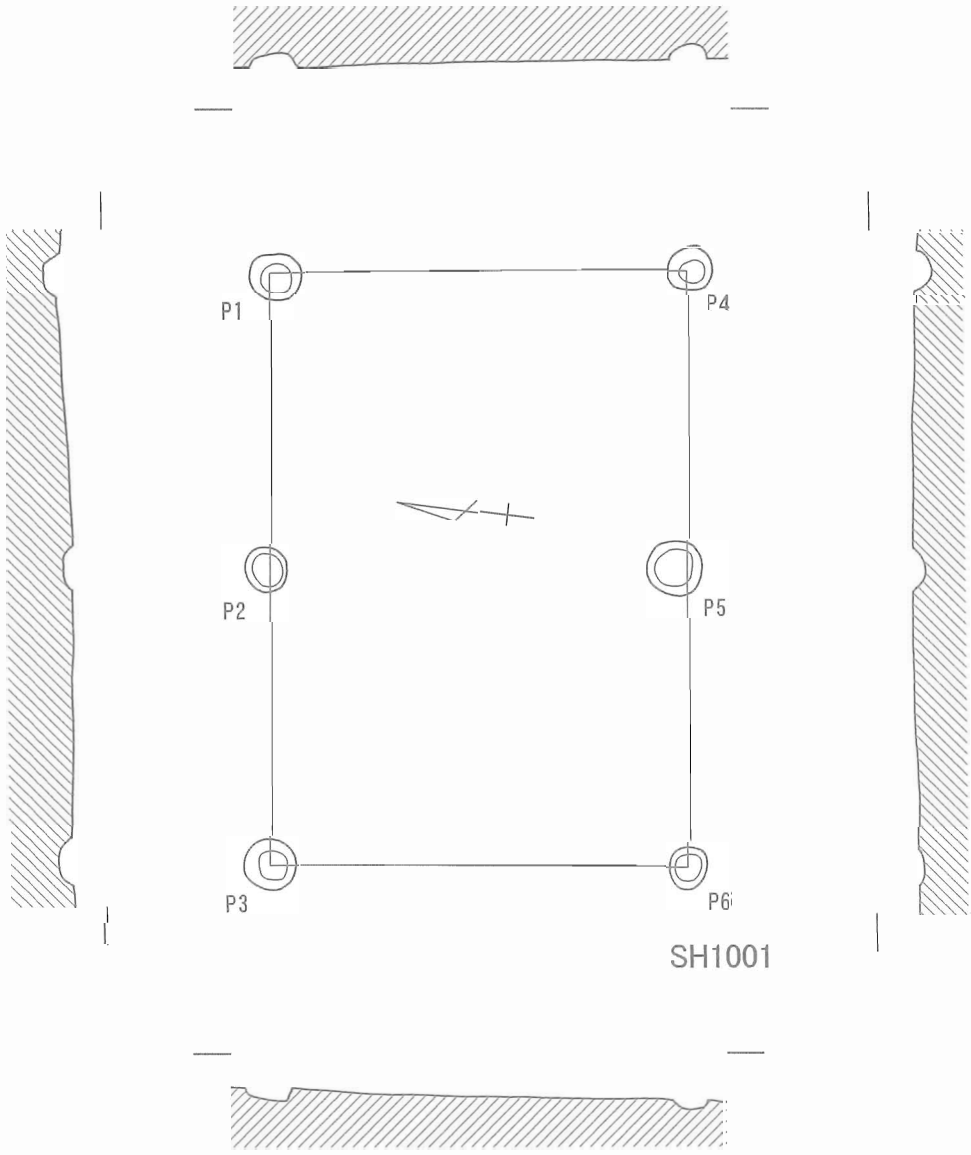


図160　SH1001実測図

深さが 0.05 ～ 0.10 ｍである。出土遺物は皆無であるが、南側及び東側に展開する SH1004、SH2002 とほぼ同様の建物方向であることから、一連の建物群と考えられ、同時期の遺構と推定される。

SH1002（図 159・161）

１区中央部のＤ４区に位置する。南北１間、東西２間の側柱建物で、１辺 4.6 ｍの正方形の平面形を持ち、北辺、南辺ともに柱間は 2.3 ｍの等間である。南北方向の軸はＮ－９°－Ｗである。北西隅の柱穴は検出されず、また柱穴内の柱痕も確認されていない。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径 0.25 ～ 0.44 ｍ、検出面からの深さは 0.05 ～ 0.18 ｍと、かなり浅い。北側中央の柱穴 SP1165 と SD1006 に切合いがあるが、新旧関係は不明である。

北東隅の柱穴 SP1146 の埋土内底面付近から土師質土器の破片が１点出土している。小片ではあるが、16 世紀代の非ロクロ成形の皿とみられることから、遺構の帰属年代はその時期と推定される。

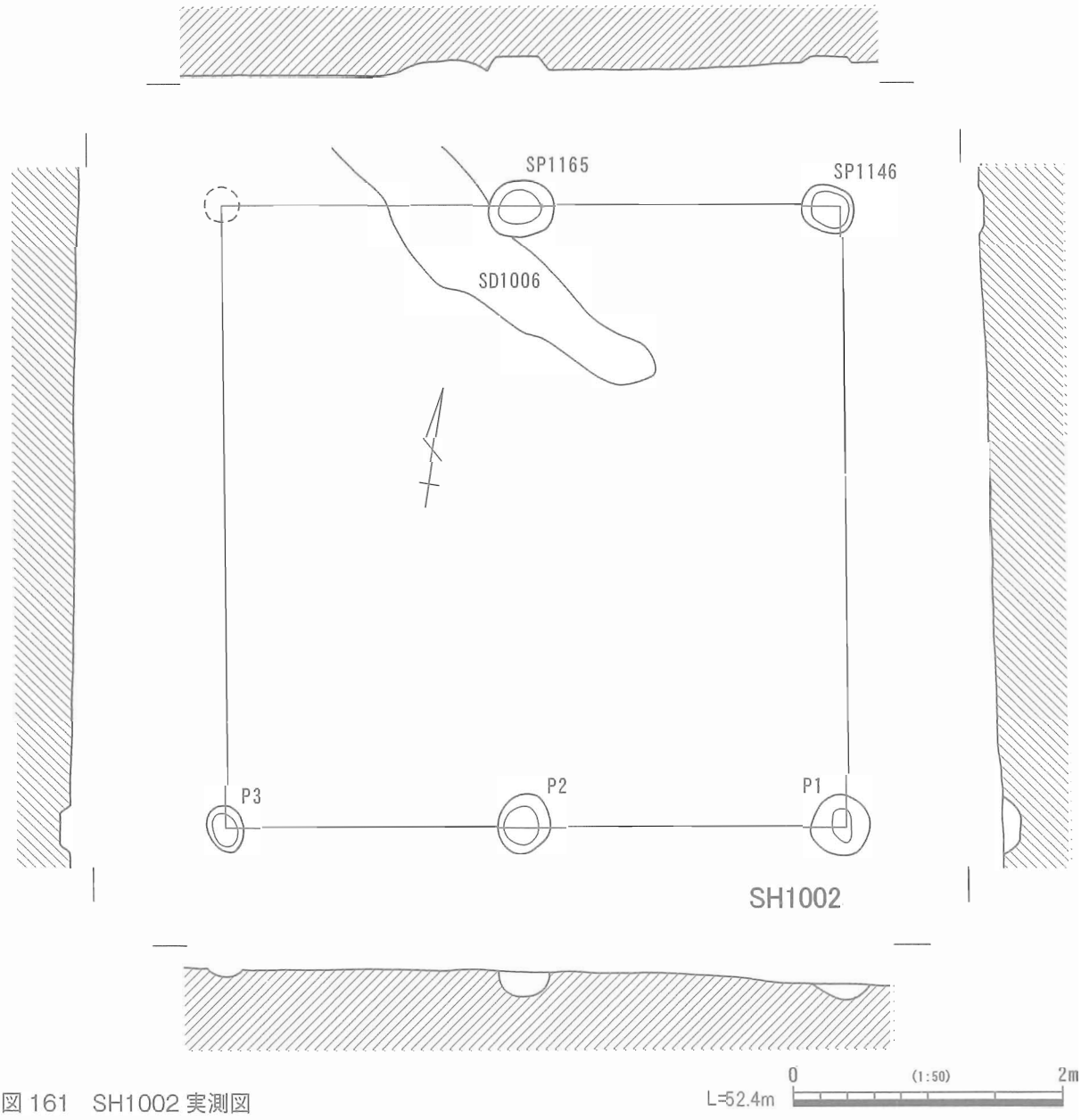


図 161　SH1002 実測図

SH1003（図 159・162・163、図版 45・69）

１区東端のＤ６区付近に位置し、SH1004 と南西隅が重なるが柱穴の切合いは不明である。梁行１間、桁行３間の側柱建物で、建物規模は梁間が 4.8 ｍ、桁行が 6.2 ｍである。南北方向の軸がＮ－ 11°－Ｗとなる東西棟である。桁行の柱間は南北ともに、西から 2.0 ｍ、2.1 ｍ、2.1 ｍである。６つの柱穴で柱痕

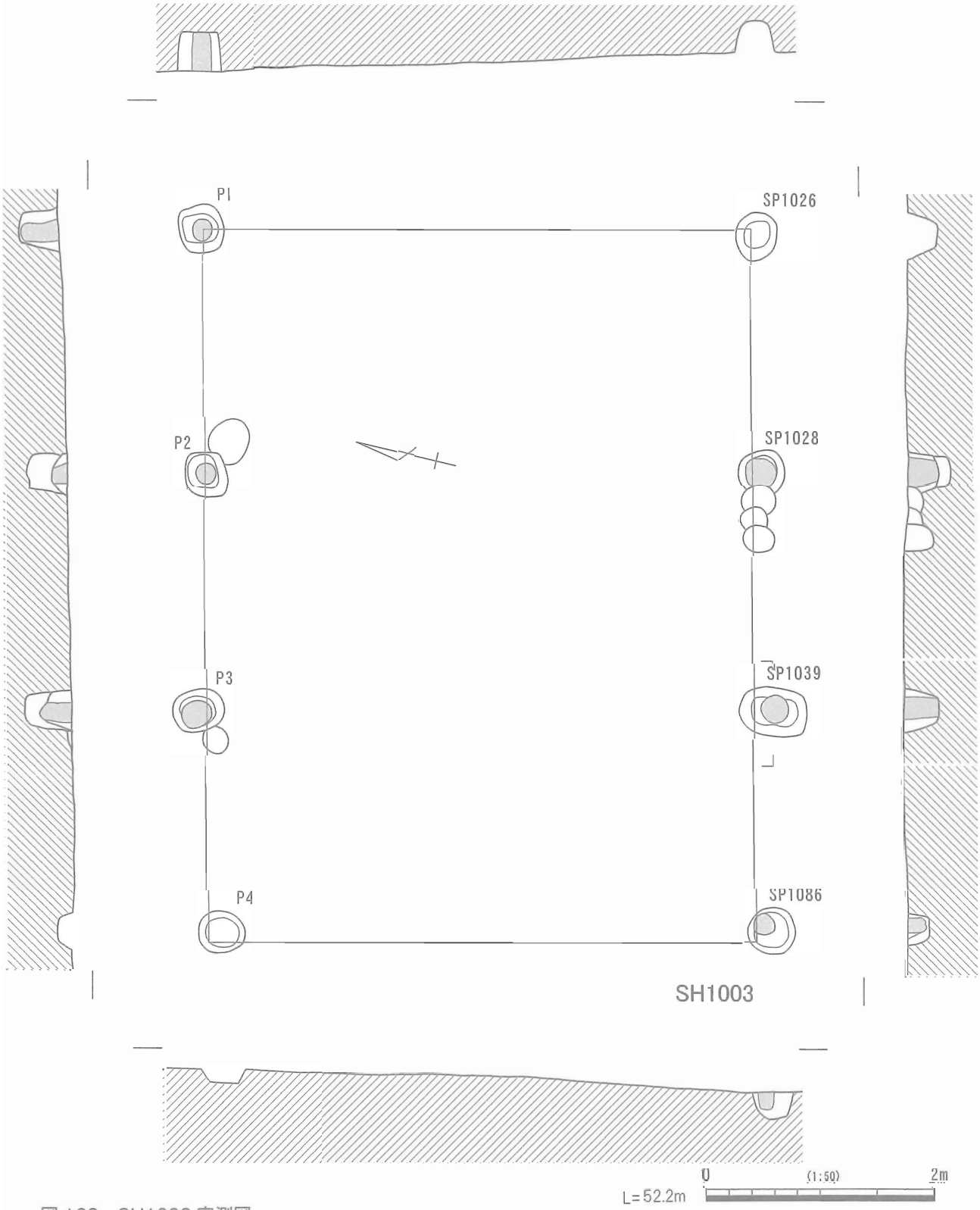


図 162　SH1003 実測図

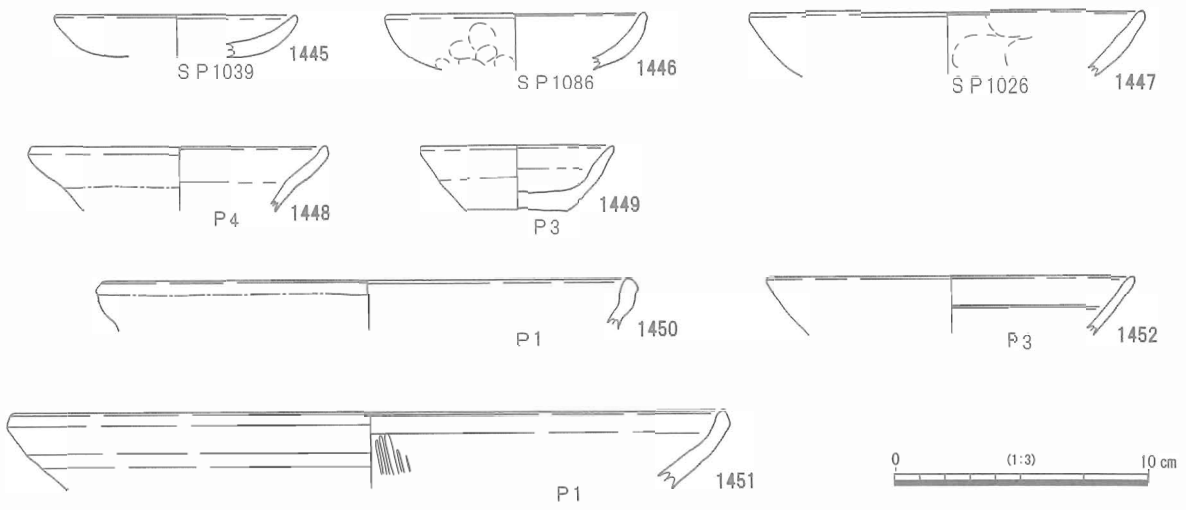


図 163　SH1003 出土遺物

跡が検出されており、柱の直径は 0.18 ～ 0.28 ｍである。柱穴の平面形状は SP1039 のみ楕円形で、他は円形である。規模は直径が 0.38 ～ 0.60 ｍ、検出面からの深さは 0.28 ～ 0.38 ｍである。

出土遺物は図 163 に図示した。1445 から 1449 は土師質土器の皿である。1445 から 1448 は非ロクロ成形品で、1449 は SP1039 の掘方埋土底面付近からの出土である。やや厚手で、浅いつくりである。表面が摩滅しており、調整は確認できない。1446 は SP1086 の掘方埋土からの出土である。内面はナデ調整、外面には指頭痕が確認できる。1447 は SP1026 の埋土底面付近からの出土で、口径が 15.5cm と大型品であるが、摩滅が著しく調整は不明である。1448 はＰ４の検出面付近からの出土で、口縁部の強いナデ調整により、体部との境が屈曲する特徴がある。1449 はＰ３から出土したロクロ成形品で、ほぼ完形である。口径 7.5cm と小型であり、底部外面には糸切痕が顕著に残り、口縁部には煤が付着している。灯明皿として使用されたものであろう。1450 はＰ４検出面付近から出土した、くの字形内耳鍋の口縁部である。口縁端部を小さく折り返して仕上げられる。1451 はＰ１埋土内から出土した古瀬戸後Ⅳ期並行となる古志戸呂の擂鉢口縁部の破片である。1452 はＰ３の柱痕跡埋土内から出土した白磁碗の口縁部破片で、白磁碗Ⅴ類に分類されよう。体部から口縁端部まで直線的なつくりで、内側には沈線が入り、釉は薄い。1452 の白磁碗は 12 世紀代の遺物であり、前代の遺構からの混入品と考えられる。その他の遺物の年代観は 15 世紀中葉～ 16 世紀後葉で押さえられることから、遺構もその時期に営まれたと考えられる。

SH1004（図 159・164、図版 45）

１区東部のＤ５区に位置し、SH1003 と北東隅が重なる。梁行１間、桁行３間の側柱建物で、建物規模は梁行が 4.2 ｍ、桁行が 7.2 ｍである。東西棟で、南北方向の軸はＮ－５°－Ｗである。柱間はややばらつきがあり、桁行北側が西から 1.8 ｍ、2.7 ｍ、2.7 ｍ、桁行南側が西から 2.1 ｍ、2.1 ｍ、2.0 ｍである。柱痕跡が確認されたのは SP1117 のみで、柱痕は円形で直径 0.25 ｍである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径 0.25 ～ 0.50 ｍ、検出面からの深さ 0.15 ～ 0.30 ｍを測る。

遺物は SP1091 の埋土から出土した土師質土器の皿（1453）である。口径 8.2cm に復元される小型の非ロクロ成形品で、器壁は厚く、浅いつくりである。12 ～ 13 世紀代の製品とみられ、遺構の年代を表すものであろう。

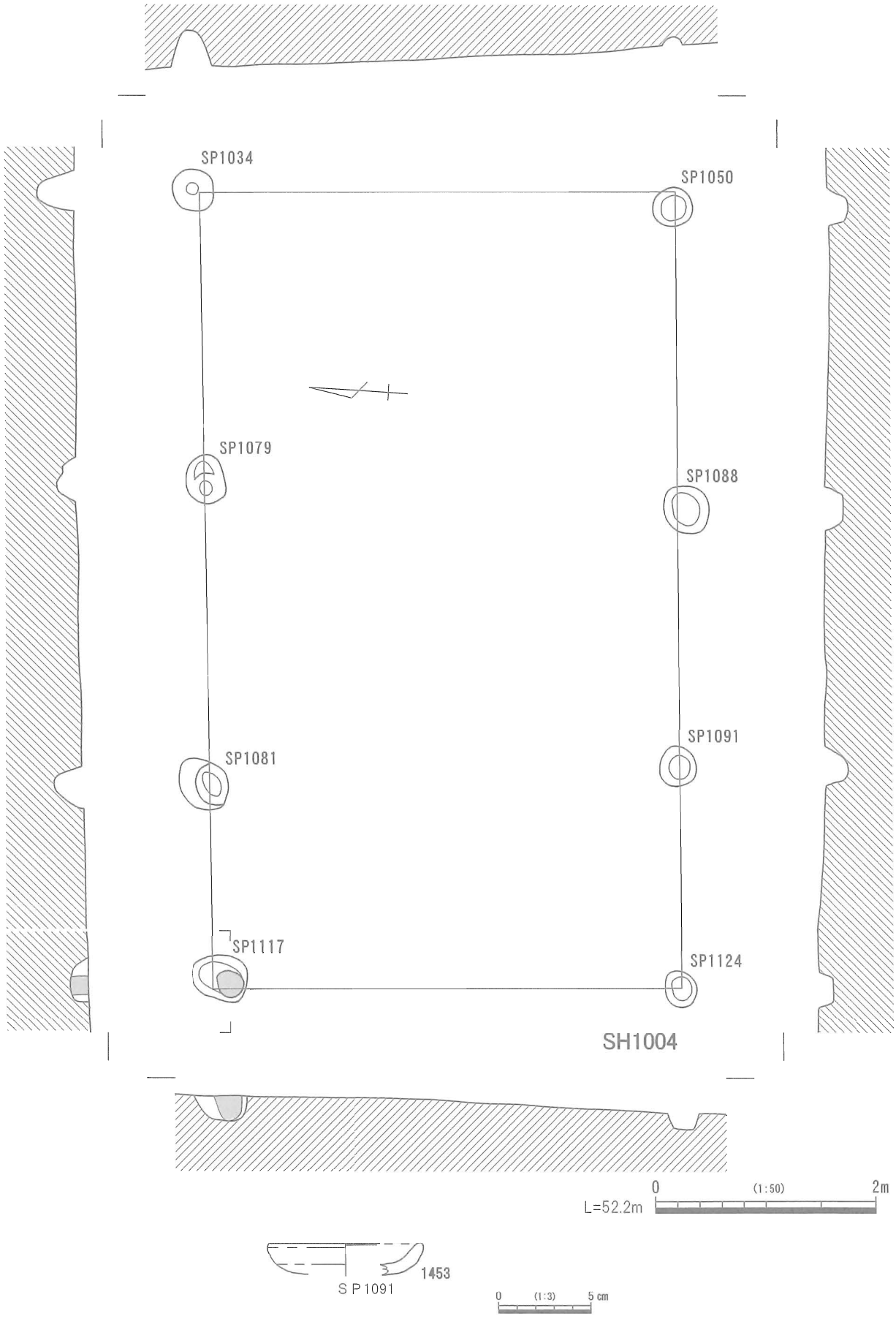


図 164　SH1004 実測図・出土遺物

SH2001（図 165・166、図版 46）

２区北西隅のＣ７～８区に位置する。SH2002 の北西に近接する。梁行２間、桁行２間の側柱建物で、建物規模は梁行が 2.9 ｍ、桁行が 5.6 ｍである。南北方向の軸がＮ－ 13°－Ｗとなる東西棟である。柱間は梁間の東側が北から 1.4 ｍ、1.5 ｍ、桁行は南北ともに西から 2.7 ｍ、2.9 ｍである。西側の妻柱は検出されていないため、柱穴は７つで、西側の柱筋に 0.4 ｍ程のずれがある。柱痕跡は確認されていないが、北西隅の SP2046 では柱穴底面に直径 0.20 ｍほどの柱の痕跡とみられる凹みが認められる。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径 0.25 ～ 0.42 ｍ、検出面からの深さは西側が 0.1 ｍ程度と浅いが、東側は 0.40 ～ 0.50 ｍと比較的深くなっている。

遺物は３ヵ所の柱穴の埋土内から出土している。1454 は SP2045 から出土した常滑産の片口鉢で、常滑５型式にあたる製品であろう。同じ埋土からは古瀬戸後期頃の壷か瓶子とみられる小破片も出土している。1455 は SP2049 から出土した伊勢鍋で、使用による二次焼成が顕著である。図示した遺物は 13 世紀代のものであるが、古瀬戸後期製品の存在から、遺構は 14 世紀後葉以降の遺構であることは確実である。やや距離はあるが、SH1003 と建物方向が近似するため、同時期となる 15 世紀中葉～ 16 世紀後葉の遺構である可能性が高い。

SH2002（図 165・167、図版 46）

２区北西隅のＤ４区に位置する。大溝西辺の西側にあたり、SH2001 の南東に近接する。梁行２間、桁行３間の側柱建物である。東西棟で、南北方向の軸はＮ－ 6°－Ｗである。建物規模は梁行が 3.8 ｍ、

図 165　掘立柱建物配置図（２区）

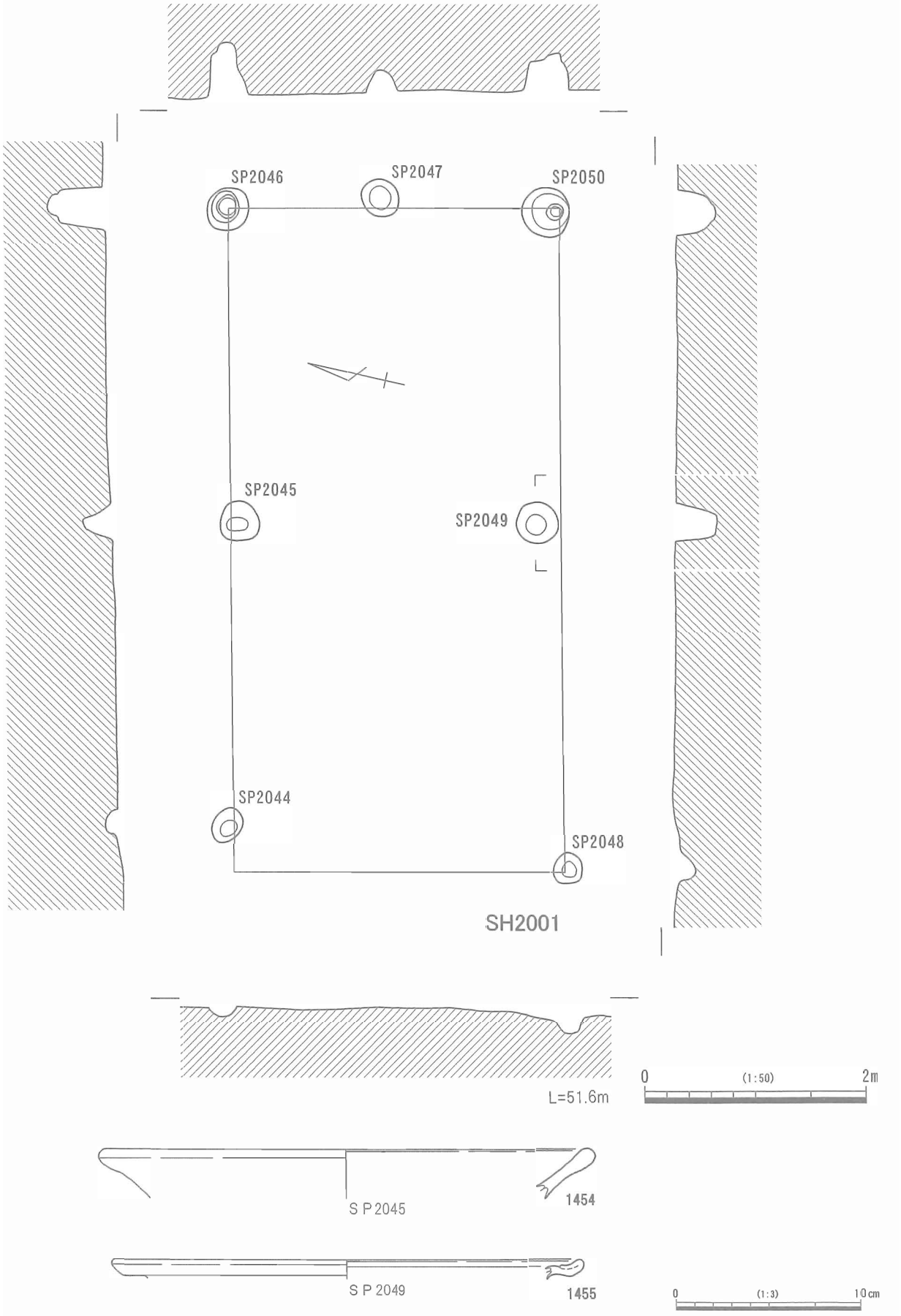


図 166　SH2001 実測図・出土遺物

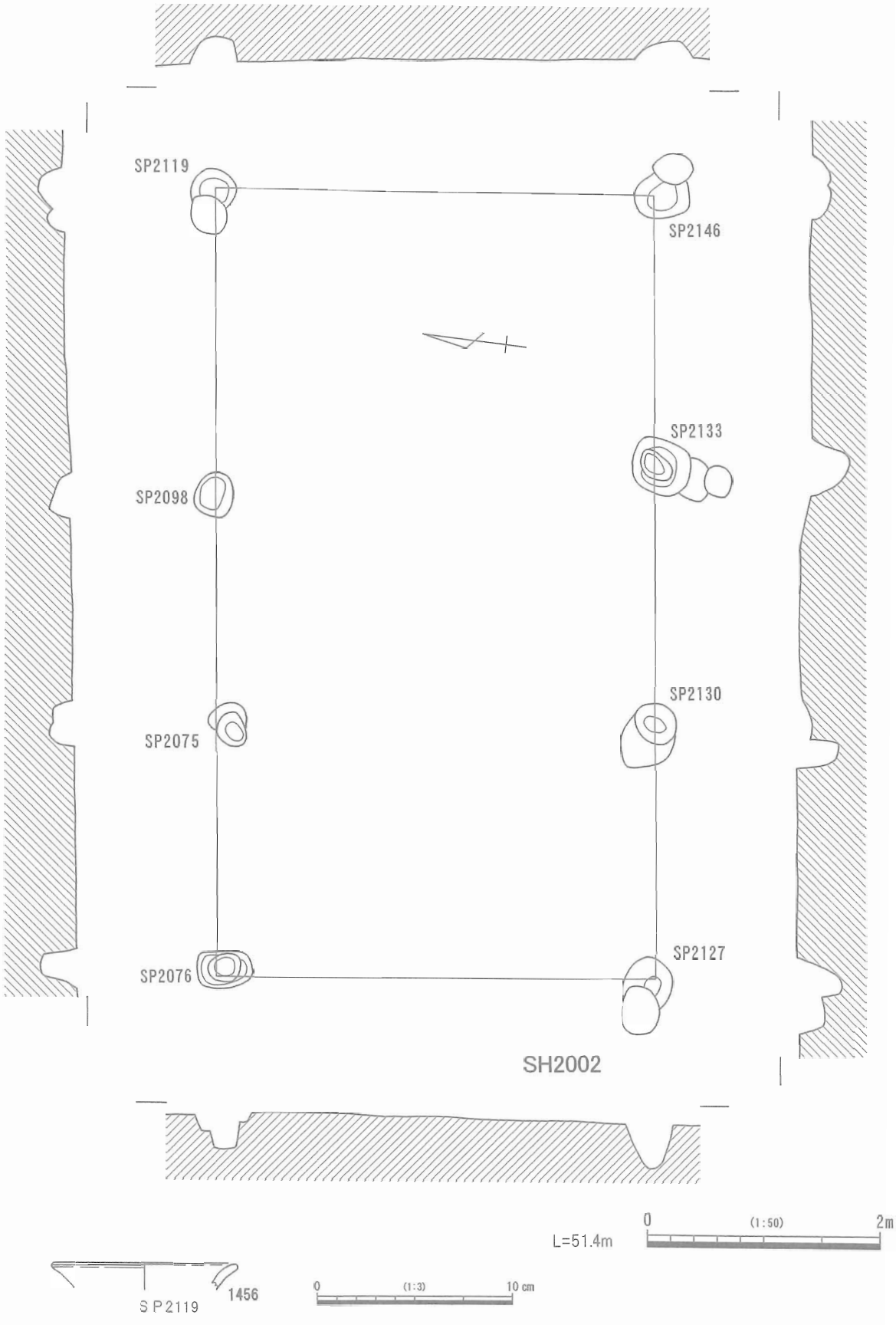


図 167　SH2002 実測図・出土遺物

桁行が 6.8 m、柱間は東側の梁行が北から 1.8 m、2.0 m、西側が 2.1 m、1.7 mである。桁行は北側が西から 2.1 m、2.1 m、2.6 m、南側が西から 2.2 m、2.2 m、2.4 mである。柱痕跡は検出されていない。柱穴の平面形は円形または楕円形で、直径は 0.15 ～ 0.50 m、検出面からの深さは 0.15 ～ 0.35 mである。

1456 は SP2119 の埋土内から出土した渥美湖西産の小碗で、口縁部が小さく外反するⅡ期の製品とみられる。また SP2119 の埋土から出土した壷の破片は、大溝Ⅰ層から出土した 332（図 65）の渥美窯産線刻文壷と接合した。この他、SP2075・SP2076 の検出面付近で土師質土器の破片が出土した。遺物の年代からは、少なくとも 12 世紀末葉以降に廃絶したものと考えられる。やや離れた西側に展開する SH1001、SH1004 と建物方向が近似し、特に SH1004 とは北側桁行の軸がほぼ一致するため、これらと同時期となる可能性が高い。

（２）Ⅱ群の掘立柱建物

大半が２区に展開し、やや離れた４区に SH4001 がある建物群である。SH2004・SH2005・SH2006・SH2007・SH2008・SH2009・SH4001 が該当し、出土遺物から 15 ～ 16 世紀代の建物で構成される。13 世紀代の大溝とそれに伴う土塁も一部この時期まで残存したと考えられ、また残存土塁の内側にあたる SD2003 が 15 ～ 16 世紀代の溝であるため、Ⅱ群建物のある空間はこれらによって区画された屋敷地と捉えられる。建物の南北軸は２～３° 西に傾き、ほぼ真北近くを向く SH2004・SH2006・SH2008、西に５～８° 傾く SH2005・SH2007・SH4001 に分けられ、新旧関係は不明ながらそれぞれ同時期の建物群と捉えられる。なお、SH2009 のみ西に 14° と大きく傾き、他の建物群の軸方向と異なっている。

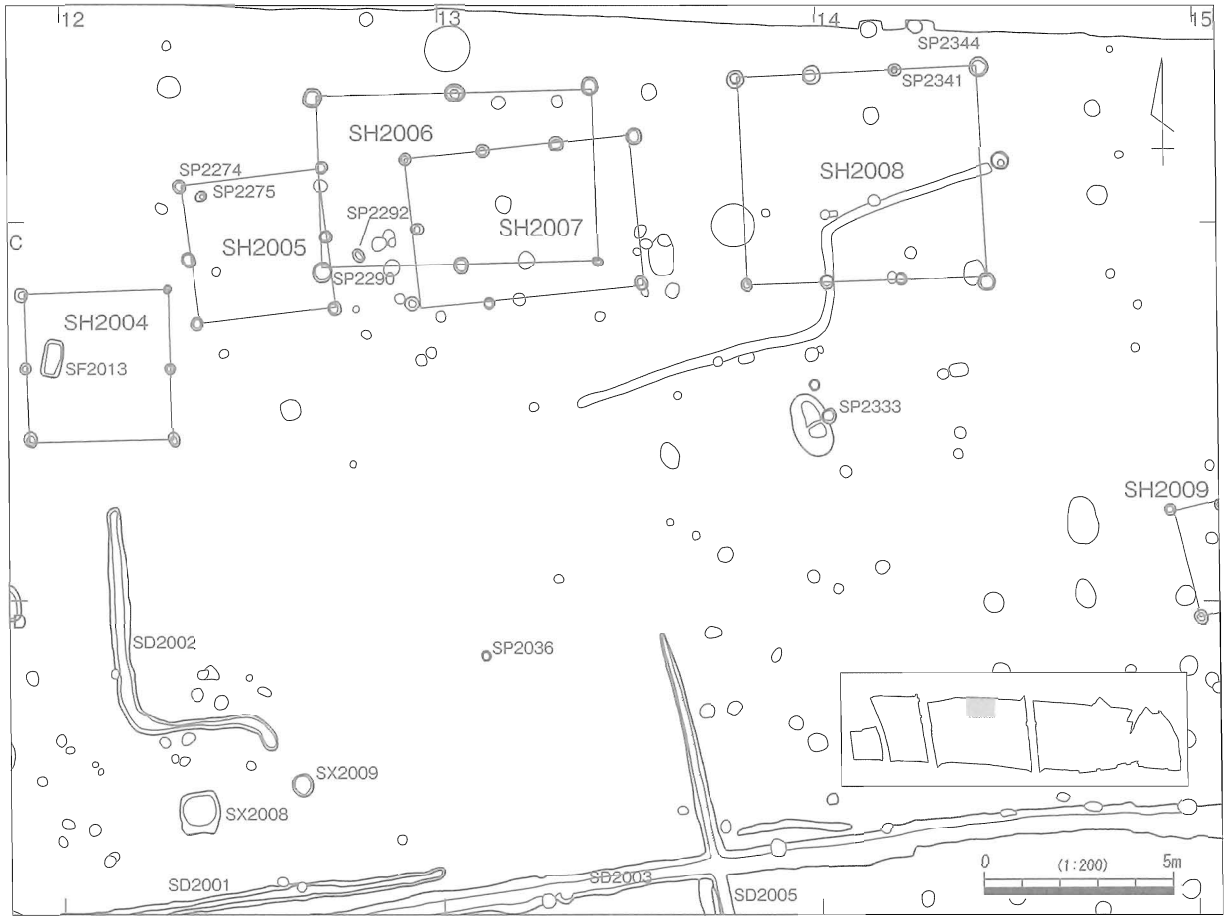


図 168　掘立柱建物配置図（Ⅱ群）

SH2004（図 168・169）

２区中央部のＣ 11 ～ 12 区に位置する。南北２間、東西１間の側柱建物で、建物規模は南北 4.0 ｍ、東西 3.75 ｍである。南北方向の軸はＮ－２°－Ｗである。柱間は西辺が北から 2.0 ｍの等間、東辺が北から 2.1 ｍ、1.9 ｍである。柱痕跡は検出されておらず、柱穴の平面形状は円形、あるいは楕円形で、

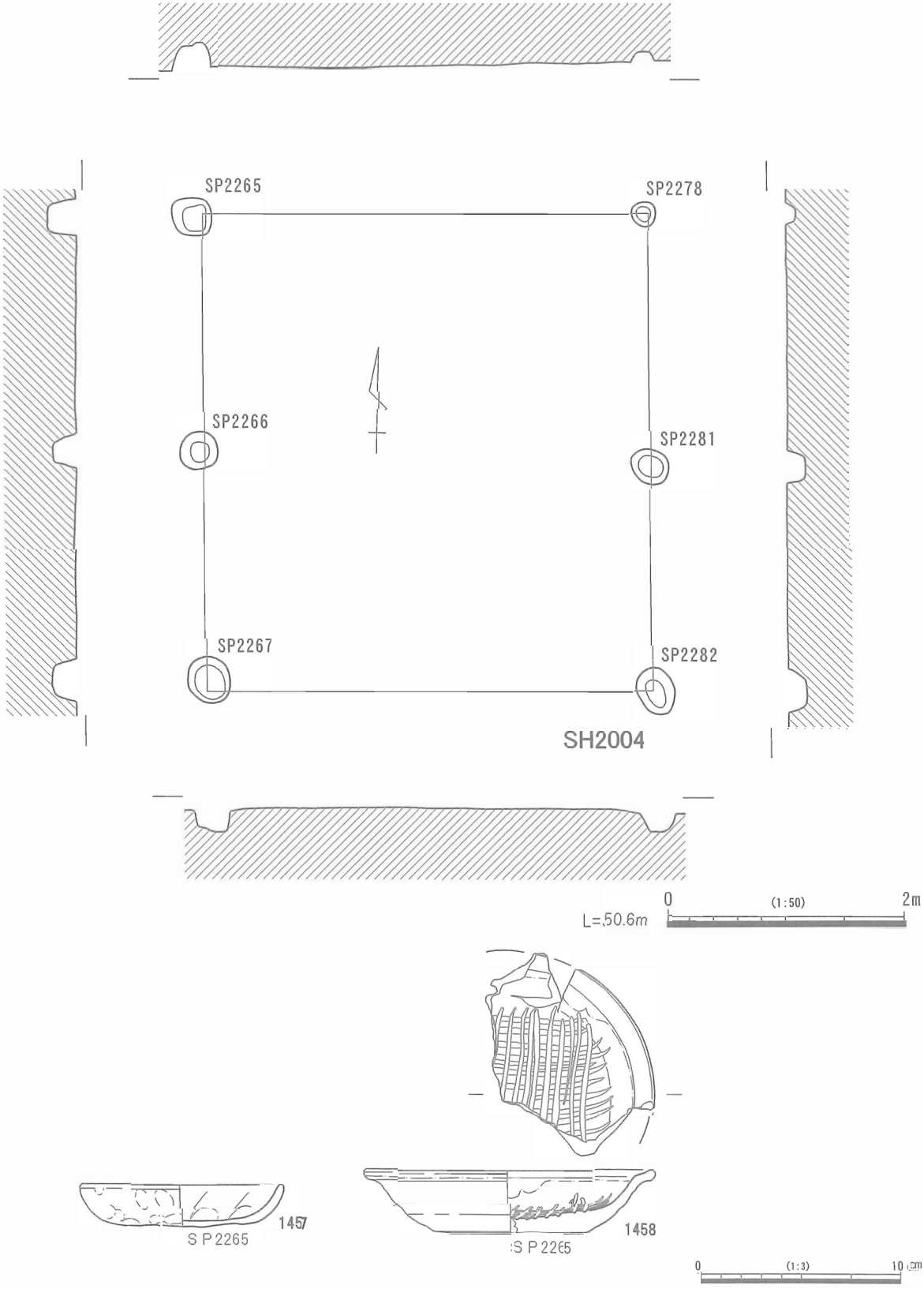


図 169　SH2004 実測図・出土遺物

北東の柱穴が直径 0.19 m、検出面からの深さ 0.07 mと小さいが、その他は直径 0.30 m～ 0.38 m、深さは 0.18 m～ 0.24 mである。

遺物は SP2265 埋土内の比較的上層から２点出土した。1457 は土師質土器の皿で、1/3 が残存する。非ロクロ成形品で内外面に指頭痕が顕著に残り、内面には板ナデの痕跡も確認できる。1458 は古瀬戸後Ⅳ期新段階の卸皿である。二次焼成が顕著であり、破損後に被熱したものと考えられる。これら遺物は 15 世紀中葉～ 16 世紀後葉の範疇で捉えられるため、遺構も同時期と考えられる。

SH2005（図 168・170）

２区中央部のＣ 12 区に位置する。SH2004 とほぼ同規模である。南北２間、東西１間の側柱建物で、一辺が 3.7 mのほぼ正方形の平面形状を呈する建物である。南北方向の軸はＮ－６°－Ｗである。柱間は西辺が北から 1.9 m、1.8 m、東辺が北から 1.8 m、1.9 mである。柱痕跡は検出されておらず、柱穴の平面形状は円形、あるいは楕円形であった。規模はほぼ同様で、直径 0.30 m～ 0.45 m、検出面からの

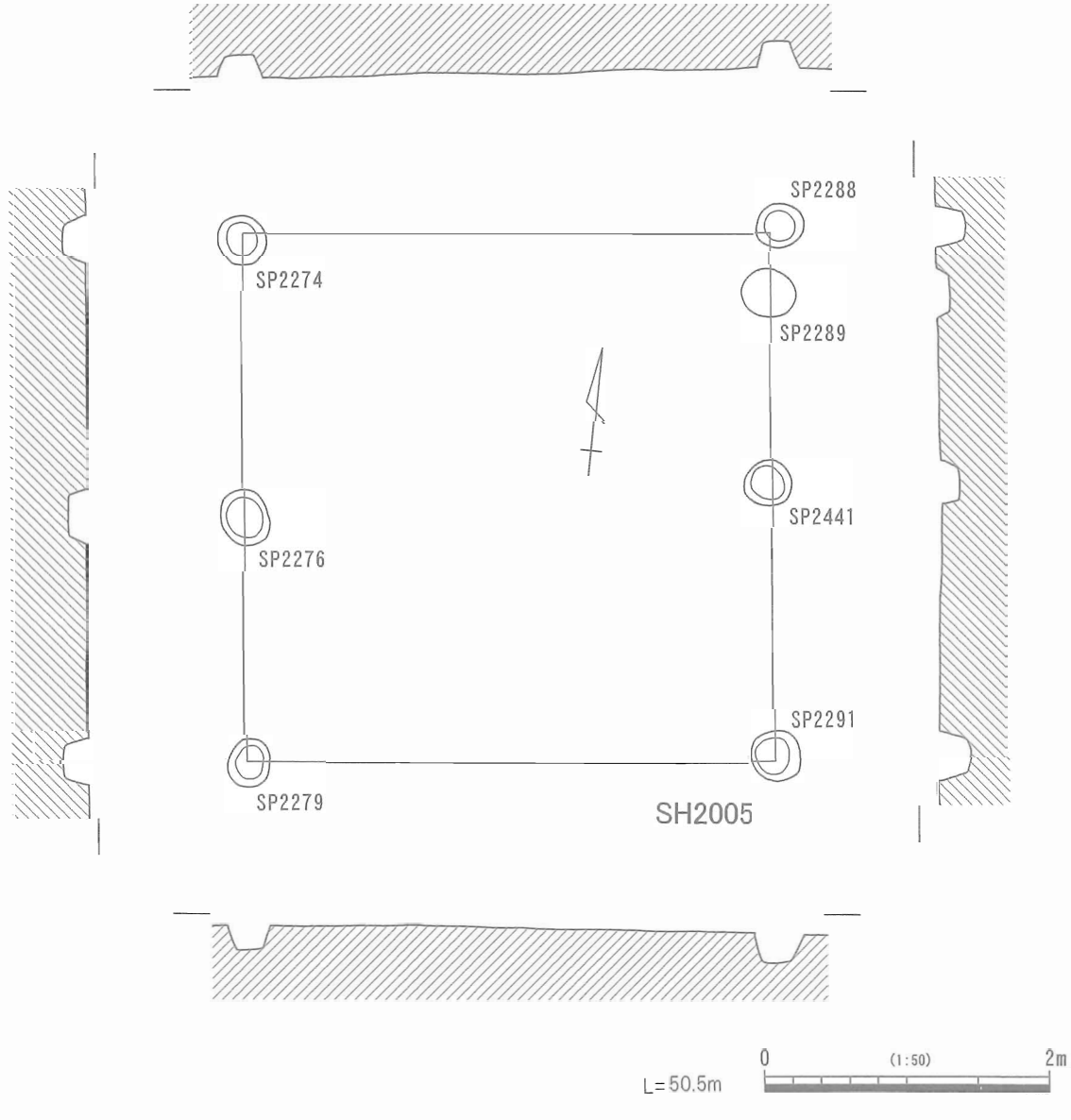


図 170　SH2005 実測図

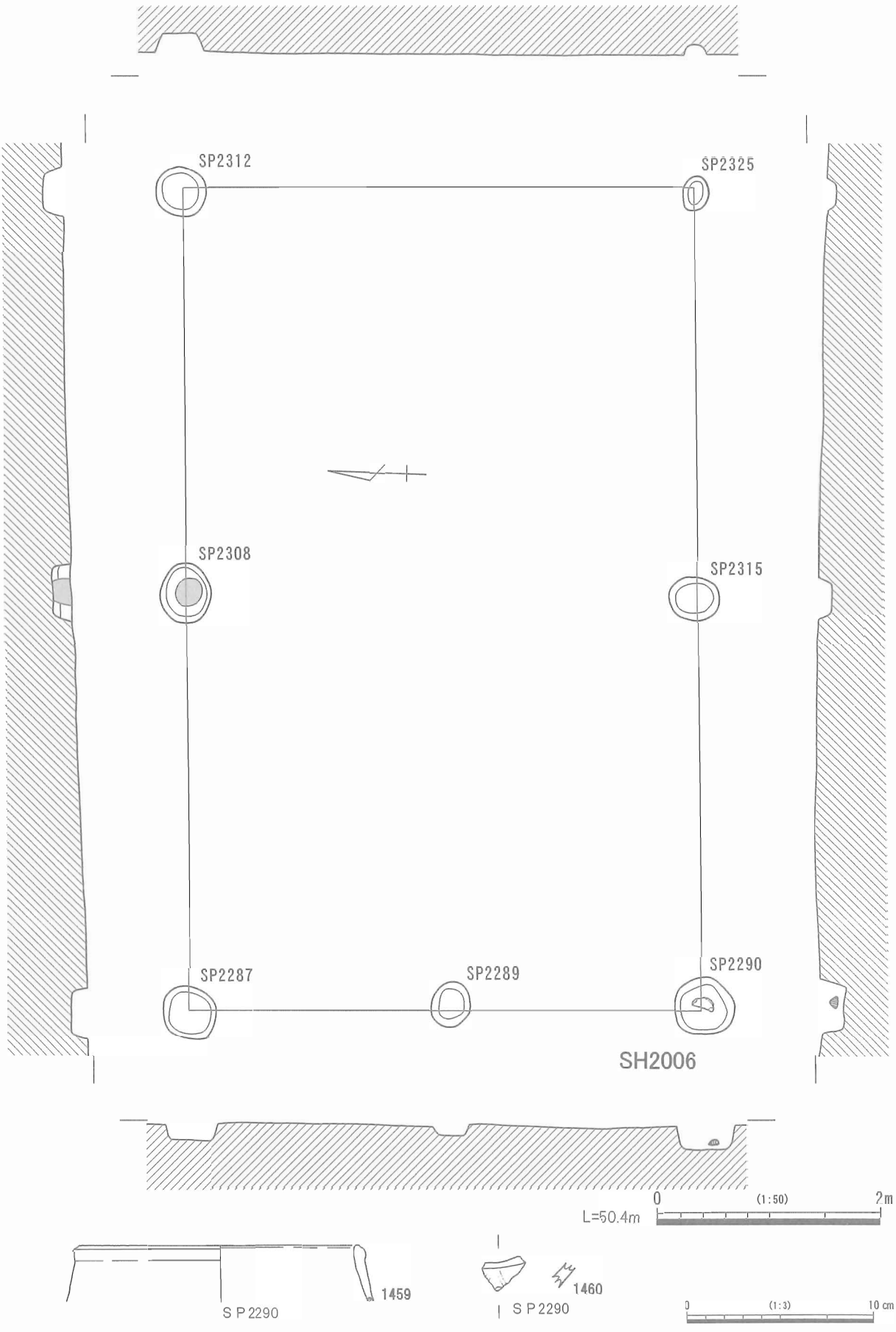


図 171　SH2006 実測図

深さは0.15 m～0.28 mである。出土遺物は皆無であるが、隣接するSH2007とほぼ同じ建物軸で並ぶことから、一連の建物であったと推定される。

SH2006（図168・171、図版46）

2区北東部のC 12区に位置し、SH2007と大きく重なる。梁間2間、桁行3間の側柱建物で、建物規模は梁行4.6 m、桁行7.4 mである。南北方向の軸がN－2°－Wの東西棟である。柱間は梁行の西側

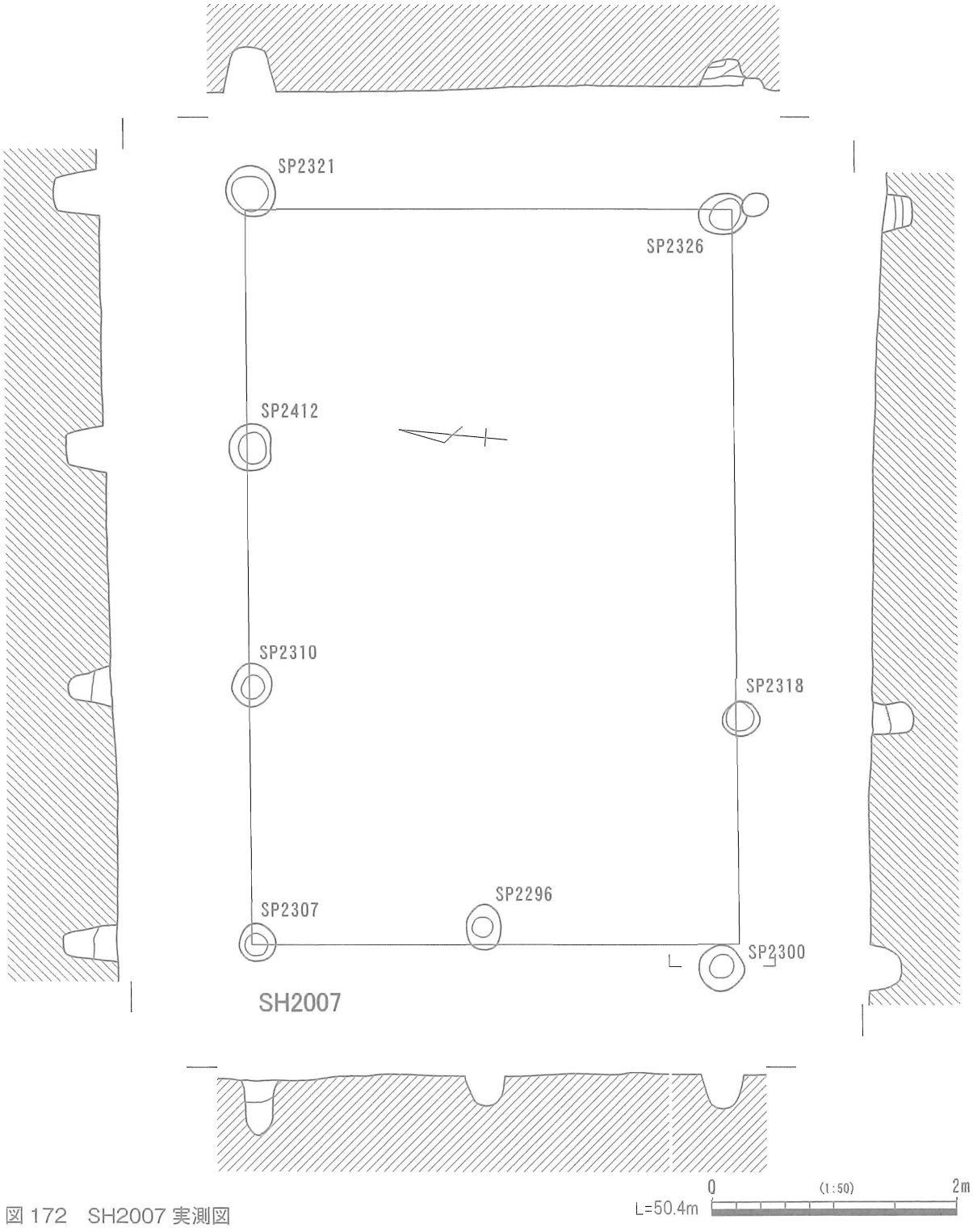


図172　SH2007実測図

が北から 2.3 m、2.3 mの等間で、東側は妻柱が検出されていない。桁行の南側は西から 3.7 mの等間で、北側は西から 3.8 m 、3.6 mである。柱痕跡は SP2308 で検出されており、その平面形は円形で直径は 0.24 mであった。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径 0.23 ～ 0.52 m、検出面からの深さは 0.15 ～ 0.20 mである。

遺物は南西隅の SP2290 の埋土から 2 点出土した。1459 は土師質土器の口縁部破片で釜類と考えられるが、摩滅が顕著で詳細は不明である。1460 は二重網手文が描かれた磁器丸碗とみられ、18 世紀前～中葉頃の肥前産の磁器と推定される。土師質土器の釜類 1459 の年代観と周囲の建物との関連から、SH2006 は 16 世紀代の遺構と考えられる。1460 は近世の遺物であるが、混入品と理解したい。

SH2007（図 168・172、図版 46）

2 区北東部のＣ 13 区に位置し、SH2006 と大きく重なる。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁間 4.0 m 、桁行 6.0 mである。南北方向の軸がＮ－ 5°－Ｗとなる東西棟である。柱間は桁行の北側が東から 2.1 m 、1.95 m、1.95 m、南側は南東隅から 2 本目の柱穴が検出されていないが 、柱間にあるとすると東から 1.8 m 、2.1 m、2.1 mとなる。梁行は西側が 2.0 mの等間となり、東側は妻柱が検出されていない。柱痕跡は確認されておらず、柱穴の平面形は概ね円形で、直径は 0.26 m～ 0.39 m、深さは 0.24 m～ 0.43 mである。

遺物は SP2321 埋土から土師質土器の破片が 1 点出土している。極めて小片であり、図化することはできなかったが、胎土などから中世後期の鍋釜類と推定される。また SH2007 と建物の軸方向が近い周囲の掘立柱建物 SH2004・2006・2008 が概ね 15 ～ 16 世紀代の遺構と捉えられることから、SH2007 も若干の時期差はあるものの、近い時期に営まれた建物であったと考えられる。

SH2008（図 168・173、図版 46）

2 区北東部のＢ 13 ～ 14 区に位置し、SH2006 及び SH2007 に近接する。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物、建物規模は梁行 5.6 m、桁行が 6.4 mである。南北方向の軸がＮ－ 3°－Ｗとなる東西棟である。柱間は桁行の北側が西から 2.0 m、2.25 m、2.15 m、南側は西から 2.1 m、2.0 m、2.3 mである。梁行の東側は北から 2.6 m、3.0 m、西側の妻柱は検出されていない。また東側の妻柱は 0.50 mほど東に外れている。3 ヵ所の柱穴で柱痕跡が検出されており、その直径は 0.16 m～ 0.18 mである。柱穴の平面形状は円形で直径 0.34 m～ 0.48 m、深さは 0.18 m～ 0.36 mである。

1461 は SP2335 埋土内からの出土した土師質土器の皿で、非ロクロ成形によるものである。口縁部がやや外反し、外面には煤の付着が確認できる。1462 と 1463 は SP2339 から出土した。1462 は埋土内下層から出土した土師質土器の皿で、非ロクロ成形によるものである。外面に指頭痕が残り、内面はナデによる調整が施される。1463 は埋土内上層から出土した土師質土器の鍋で、頸部のみの破片であるが、くの字形の内耳鍋と推定される。この他 SP2345 と SP2350 から古志戸呂の擂鉢、土師質土器鍋の小破片が出土している。遺物は 15 世紀中葉～ 16 世紀後葉頃の年代観が与えられることから、遺構もその時期に営まれたと推定される。

SH2009（図 168・174）

2 区北東部のＣ 15 区に位置し 、SH2008 に近接する。梁間 1 間 、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁間 2.4 m、桁行 3.6 mである。東西棟で、南北方向の軸はＮ－ 14°－Ｗである。柱間は桁行の北側で西から 1.2 m、1.3 m、1.1 m、南側では西から 1.1 m、1.4 m、1.1 mである。柱穴の平面形は円形で、直径は 0.23 m～ 0.37 m、深さは 0.12 m～ 0.29 mである。南西隅の SP2364 は柱穴下部が抉れており、柱抜き取りの痕跡と考えられる。柱穴内の柱痕は確認されていない。

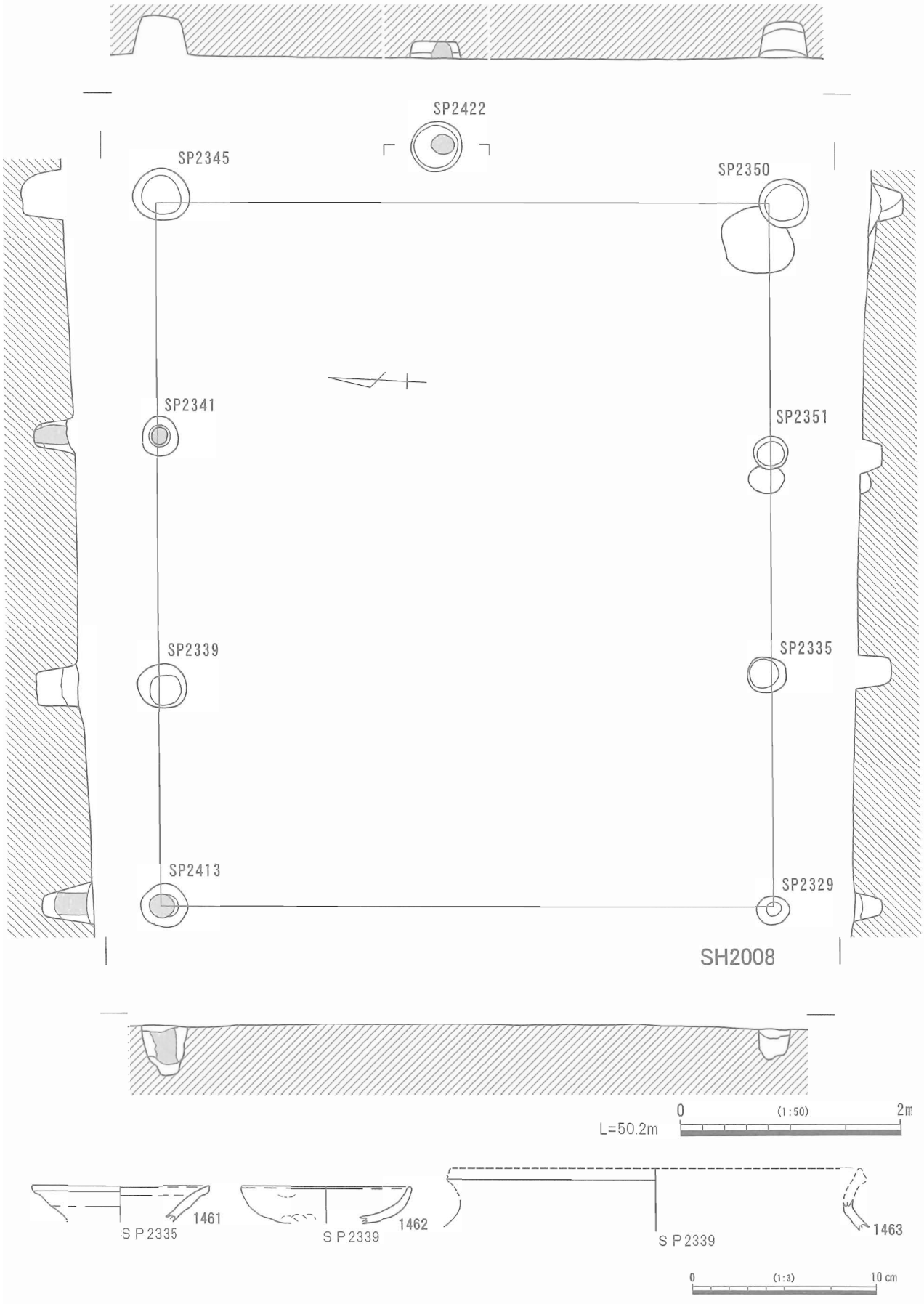


図 173　SH2008 実測図

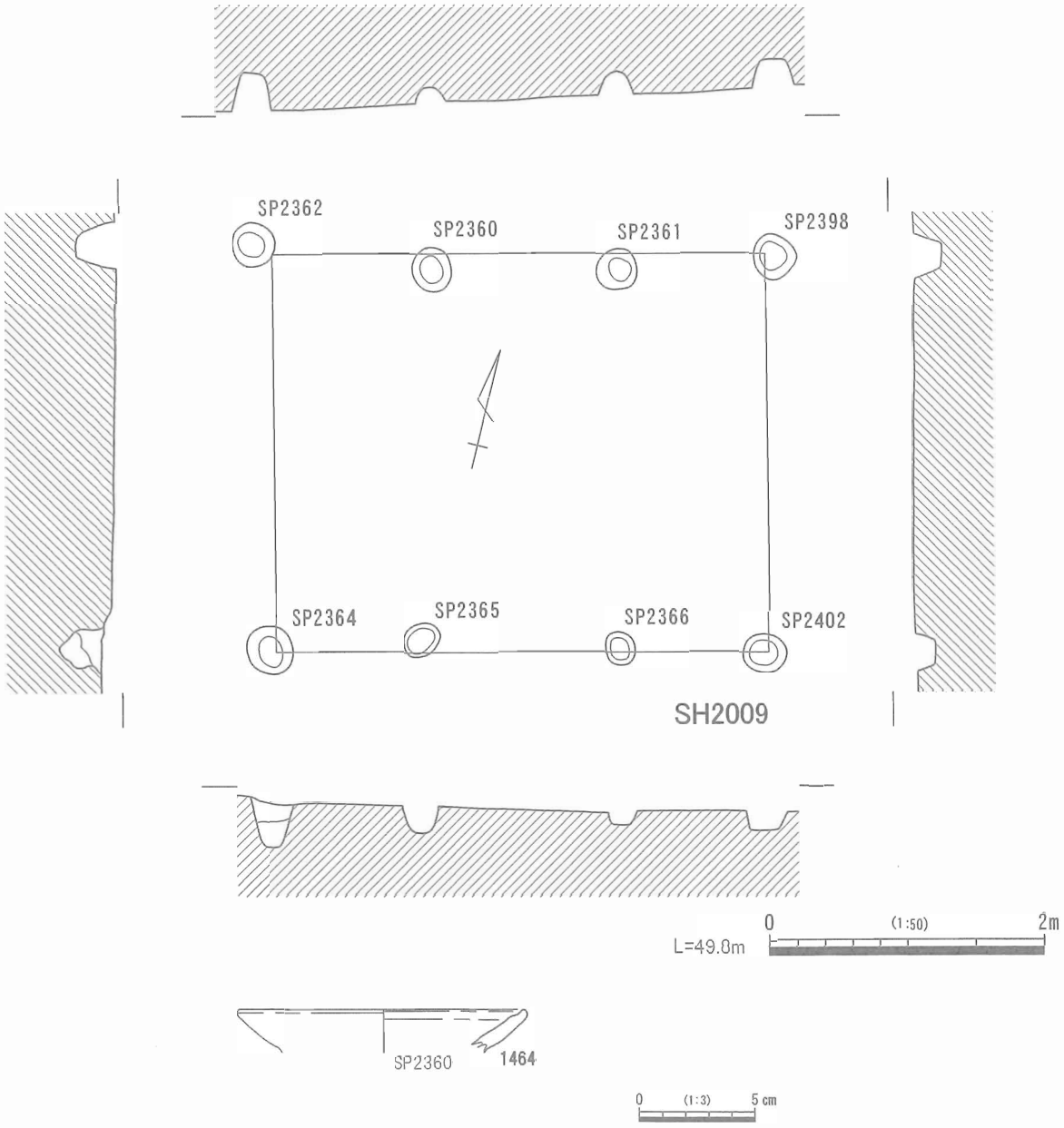


図 174　SH2009 実測図

1464 は SP2360 の埋土底面付近から出土した土師質土器の皿である。ロクロ成形品で、体部が直線的に立ち上がる特徴を持つ。このほか SP2361 と SP2365 から土師質土器の破片が出土しているが、図化することはできなかった。遺物の年代観から遺構は 15 世紀後半～ 16 世紀前葉のものである可能性が高い。

SH4001（図 175）

4区中央のC～D 16 区に位置する。梁行 1 間、桁行 2 間の側柱建物で、建物規模は梁行 3.4 m、桁行 4.3 mであった。南北方向の軸がN－8°－Wとなる東西棟である。柱間は桁行が東西側ともに北側から 2.2 m、2.1 mであった。SP4055 を除いて柱痕が確認されており、平面形は円形で、直径 0.12 ～ 0.16 mであった。柱穴もほぼ円形で、直径 0.28 ～ 0.32 m、検出面からの深さは 0.16 ～ 0.2 mとほぼ類似した規模であった。遺物が出土していないことから、遺構の時期認定は難しいが、やや離れた西に所在する SH2008 な

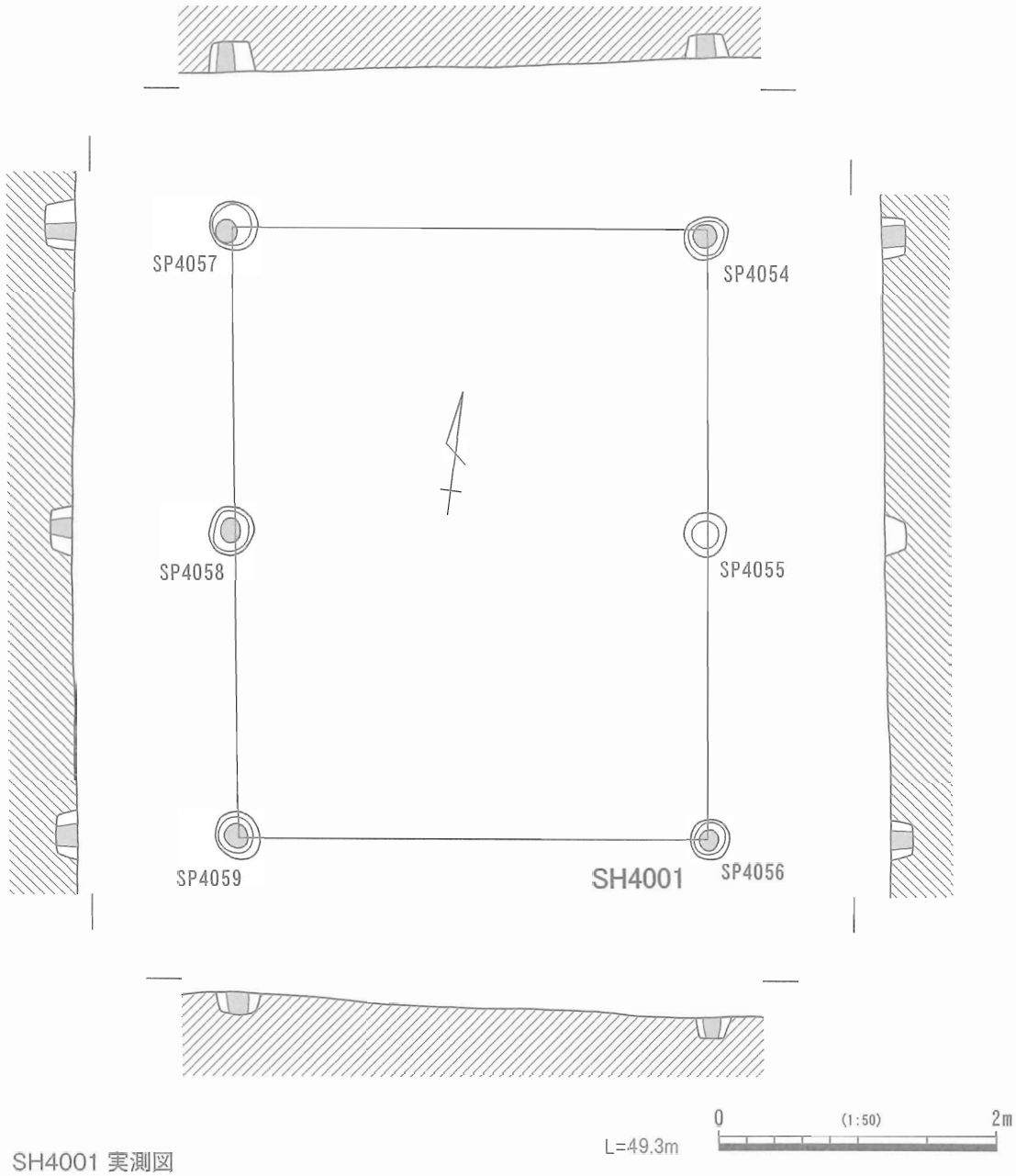


図 175　SH4001 実測図

どと建物方向が近似することから、同時期のものと推定される。

（3）Ⅲ群の掘立柱建物

6 区に展開する建物群である。SH6004・SH6005・SH6006・SH6007・SH6008・SH6010・SH6011・SH6015 が該当する。15 ～ 16 世紀代に機能した大規模な溝 SD1001 の南側に位置し、またF 14 区付近で南に向かって屈曲する SD1001 に西側を区画された屋敷地であった可能性がある。

出土遺物から遺構の年代観はいずれも 15 世紀後半～ 17 世紀代の範疇で捉えられ、また建物の南北軸がほぼ５～ 10° 西に振れる点でも共通することから、上記帰属年代の中での同一主体による建替えが想定できる状況である。建物の配置や重複関係から、SH6004・SH6007・SH6011・SH6015 の建物群と SH6005・SH6006・SH6008・SH6010 の建物群が抽出され、それぞれ同時期の建物であったと推定したい。

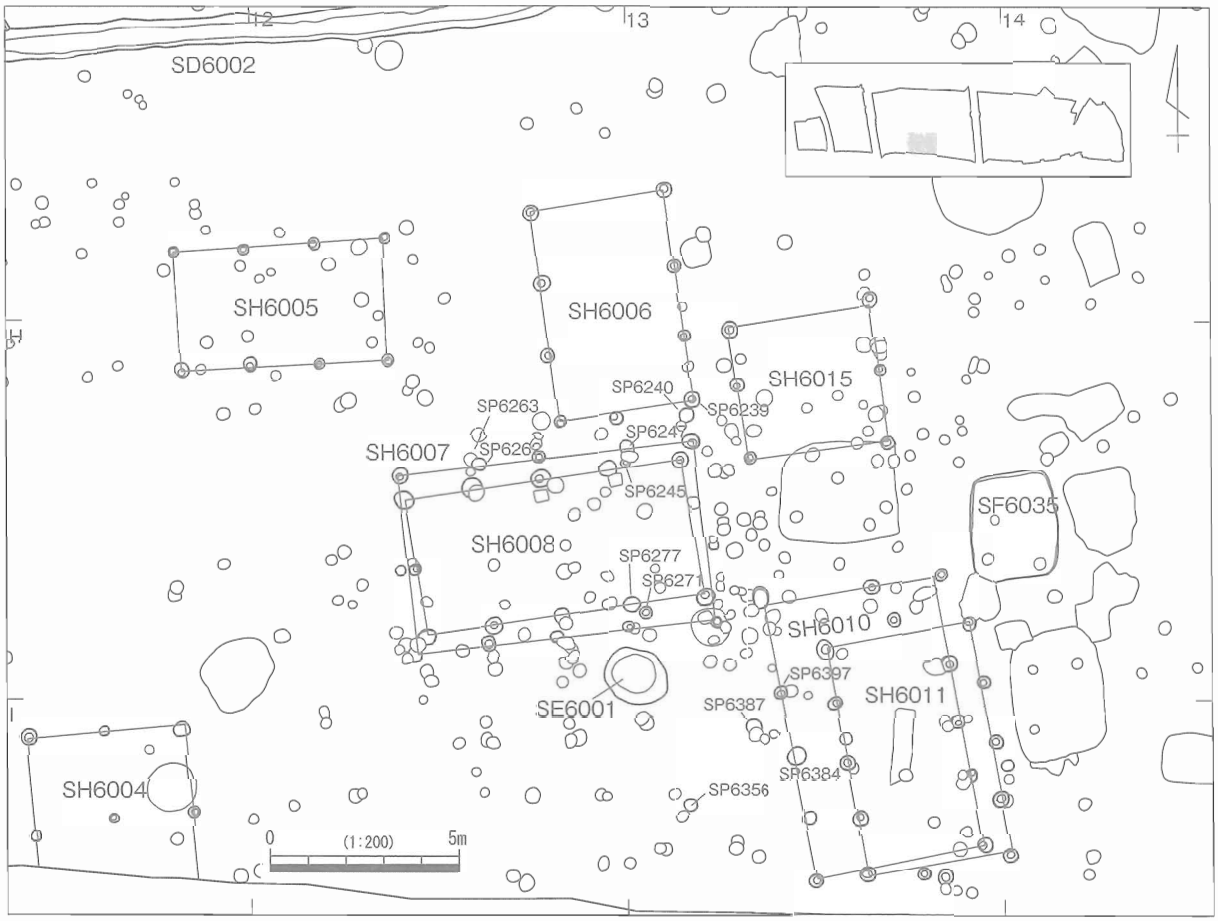


図 176　掘立柱建物配置図（Ⅲ群）

SH6004（図 176・177）

６区南端のⅠ 11 区に位置する。東西２間、南北１間が確認されたが、さらに調査区外となる南方向へと広がっている可能性がある。建物規模は確認できるところで東西 4.2 m、南北 2.5 mで、南北方向の軸はN－6°－Wである。柱間は北側が 2.1 mの等間で、西側が 2.5 m、東側は 2.15 mである。柱痕跡は３つの柱穴で確認されており、柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.18 m～ 0.24 mである。柱穴も円形で、直径 0.33 m～ 0.44 m、深さは 0.13 m～ 0.26 mである。

SP6155 の埋土内から土師質土器などが出土しているが、いずれも小片で図示は不可能であった。土師質土器の破片は外面に煤が濃く付着しており、くの字形内耳鍋の可能性が高いため、遺構は 15 世紀後半～ 16 世紀代に営まれたと考えられる。

SH6005（図 176・178、図版 47）

６区中央のG 11 ～ 12 区に位置し、Ⅲ群建物群のやや離れた北東側にある。梁行１間、桁行３間の側柱建物で、建物規模は梁行 3.2 m、桁行 5.5 mである。南北方向の軸がN－2°－Wとなる東西棟である。桁行北側の柱間は西から 1.8 m、1.9 m、1.8 m、南側は西から 1.8 m、1.9 m、1.8 mとほぼ同様の数値を示す。柱痕跡は全ての柱穴で確認され、いずれも平面形は円形で、直径は 0.16 ～ 0.18 mである。柱穴も平面形は円形で、直径 0.26 ～ 0.40 m、検出面からの深さは 0.1 ～ 0.2 mを測る。遺物は出土していないが、南側の SH6006 や SH6008 などの建物群に近接し、建物方向もほぼ一致することから、これら建物群と同時期の遺構と判断される。

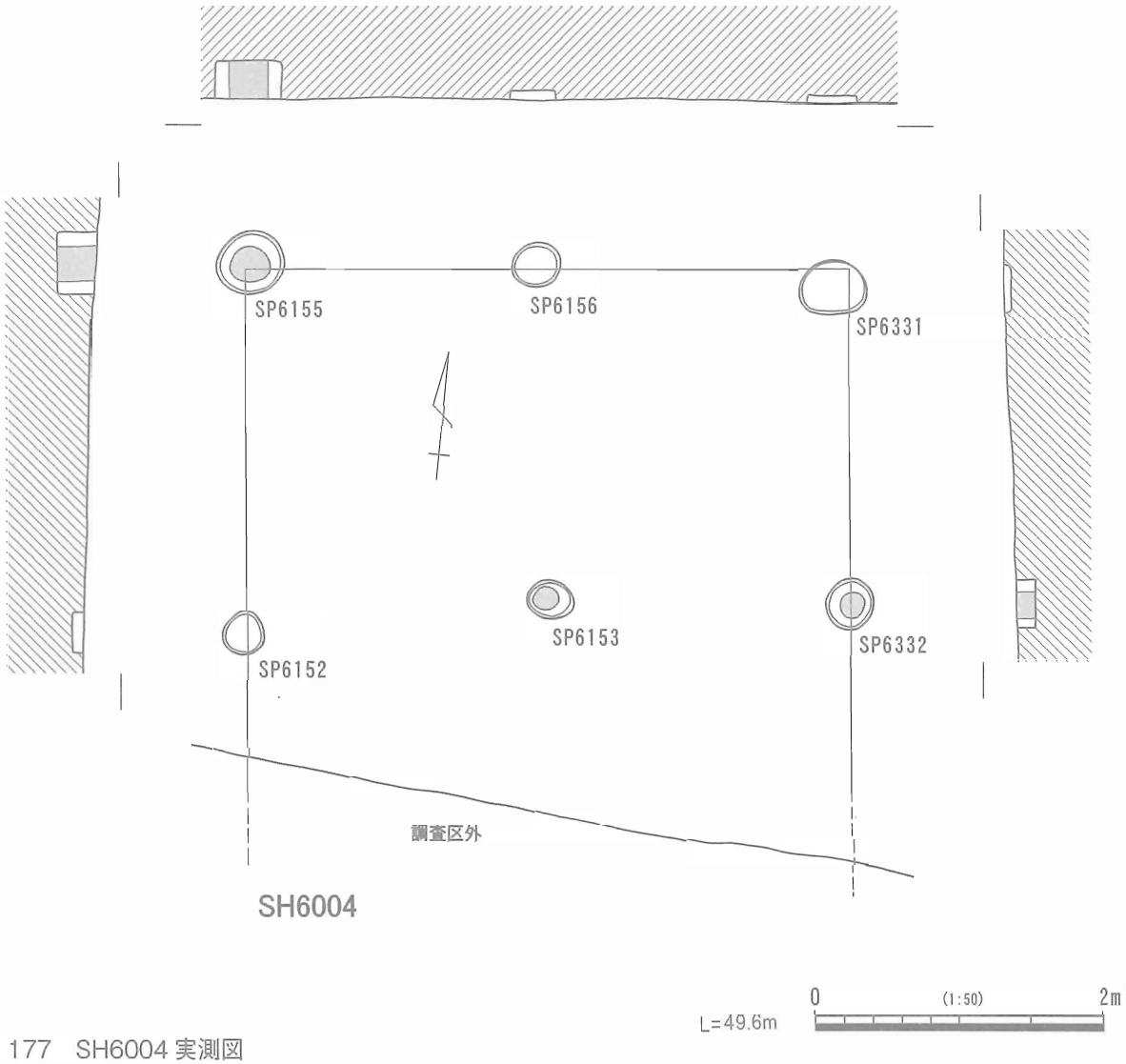


図 177　SH6004 実測図

SH6006（図 176・179、図版 47・69）

6 区中央の G 12 区にあり、Ⅲ群建物群の最も北側に位置する。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁行 3.6 m、桁行 5.6 mである。南北方向の軸がN－8°－Wとなる南北棟である。柱間は梁行南側で西から 1.5 m、2.1 mである。梁行北側では妻柱が検出されなかった。桁行西側と桁行東側は北から 2.0 m、1.8 m、1.8 mである。柱痕跡はすべての柱穴で確認された。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.16 m～0.22 mである。柱穴の平面形も円形で、直径は 0.32 m～0.51 m、深さは南側の妻柱が 0.43 mとやや深く、その他は 0.25 m～0.38 mで、0.35 m前後のものが最も多い。

1465 は SP6259 から出土した土師質土器の皿である。柱痕跡の埋土から出土しており、隣接する SP6260 から出土した皿との接合が確認された。ロクロ成形品で、体部は直線的に立ち上がり、底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。1465 が 16 世紀中葉～後葉の所産と推定されることから、遺構の帰属年代もその時期と考えられる。

SH6007（図 176・180、図版 47）

6 区中央の H 12 区に位置し、SH6008 とは全体が重なる。梁行 2 間、桁行 4 間の側柱建物で、建物規模は梁行 4.8 m、桁行 8.0 mである。南北方向の軸がN－7°－Wとなる東西棟である。柱間は桁行北

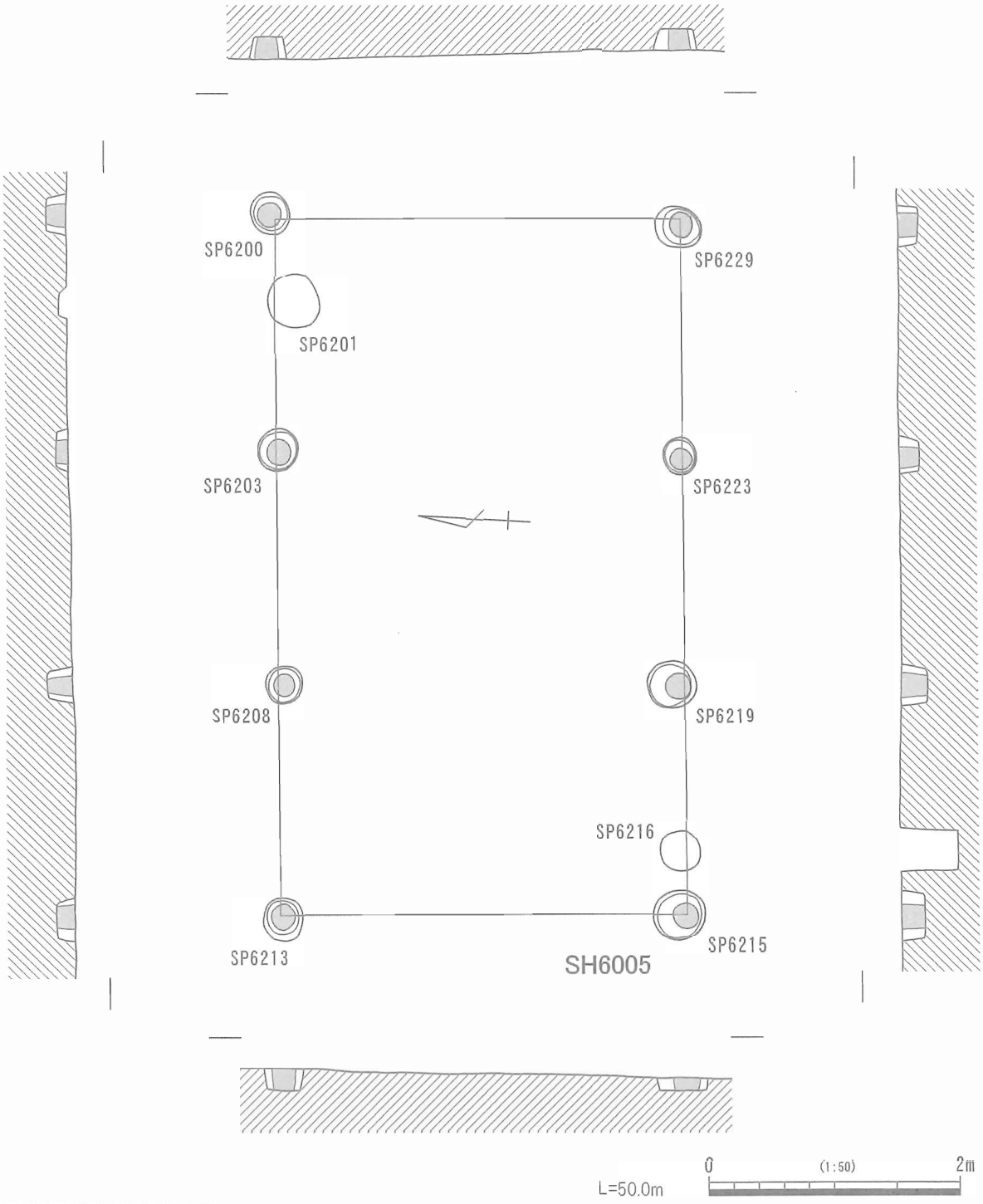


図178　SH6005実測図

側が西から2.2 m、1.6 m、2.4 m、1.8 m、桁行南側が西から1.9 m、1.8 m、2.0 m、2.3 mである。梁間西側が北から2.5 m、2.3 m、梁間東側が北から2.7 m、2.1 mである。柱痕跡は7ヵ所の柱穴で確認された。柱痕跡の平面形は全て円形で、直径は0.18 m～0.26 mである。柱穴は全てほぼ円形で、直径0.28 m～0.40 m、深さは0.12 m～0.53 mとばらつきが大きい。

1466はSP6242の掘方埋土から出土した土師質土器の皿である。非ロクロ成形品で、体部から口縁部にかけて強く内湾する。1467はSP6262の埋土から出土した土師質土器の皿である。ロクロ成形品で底部外面に糸切痕がみられる。これら出土遺物は16世紀後半～17世紀前葉の所産と推定されることから、

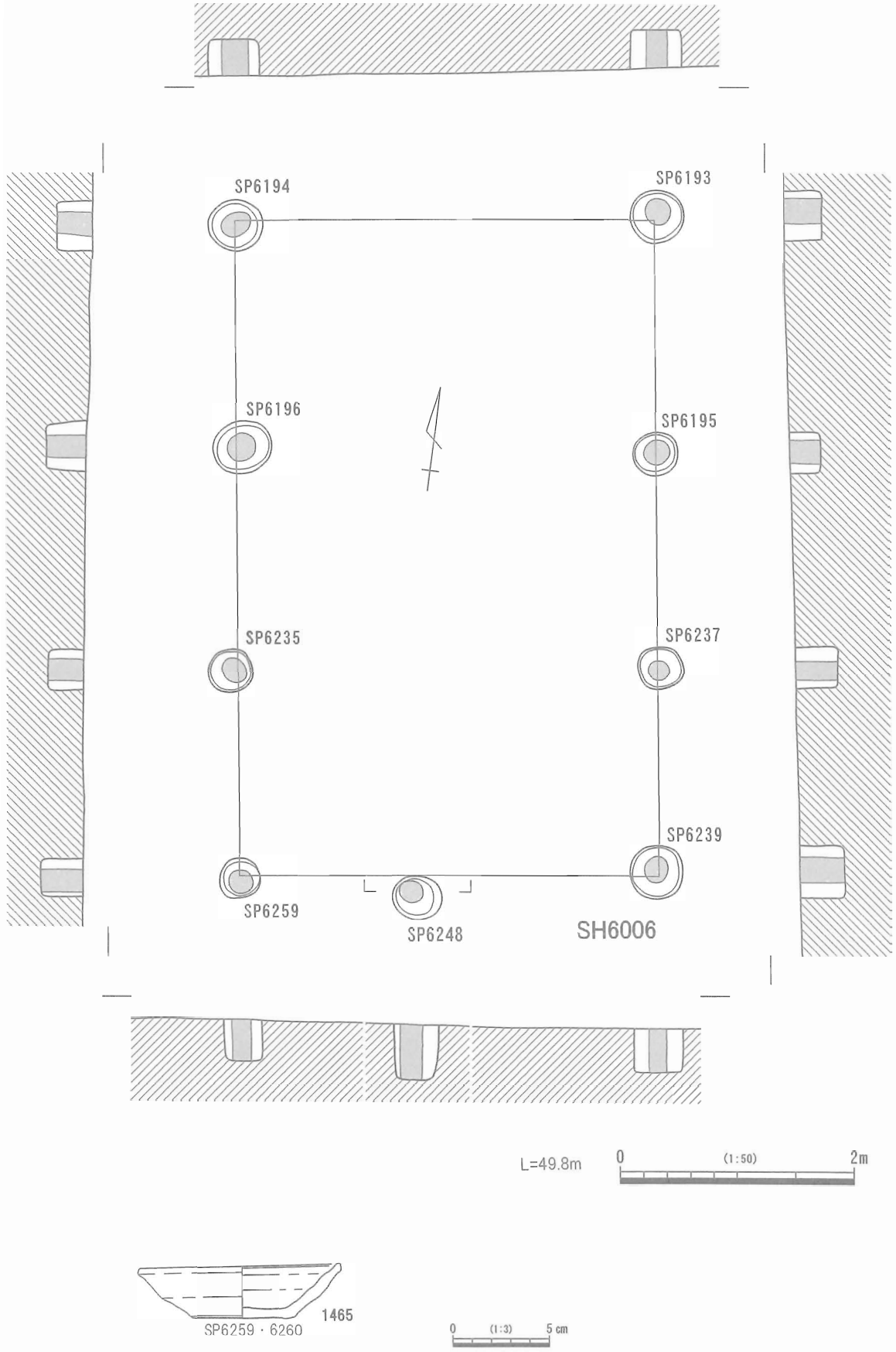


図 179　SH6006 実測図・出土遺物

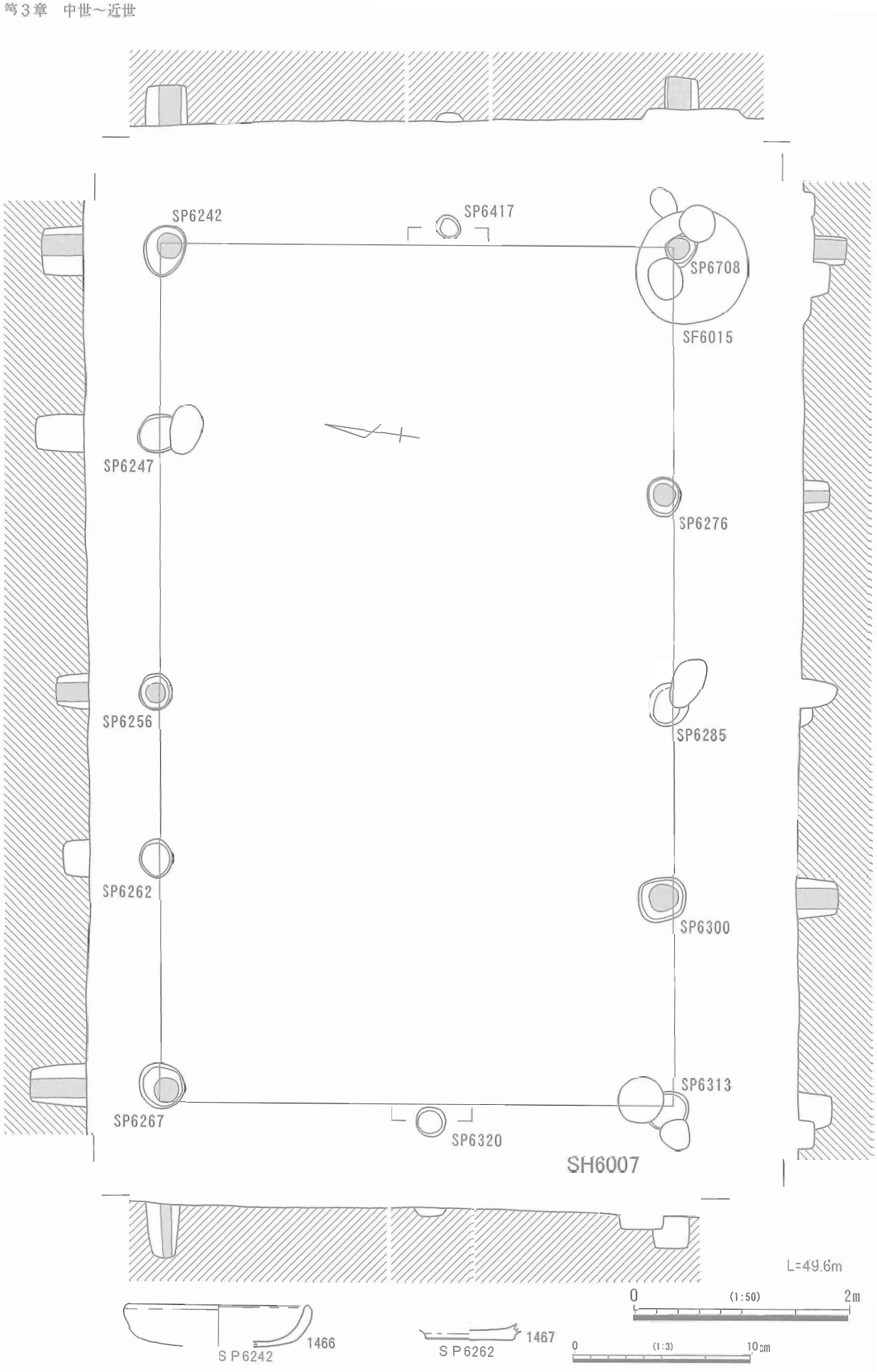


図 180　SH6007 実測図

建物の帰属年代もその時期とみられる。また、ほぼ重なった位置で検出されたSH6008は、SH6007とは建物の方向、規模及び構造において共通することから、建て替え関係にあったと考えられる。ただし、柱穴の切合いがないため、前後関係は不明である。

SH6008（図176・181、図版47）

6区中央のH12区に位置する。SH6007と全体が重なる。梁行2間、桁行4間の側柱建物で、建物規模は梁行3.6m、桁行7.4mである。南北方向の軸がN－8°－Wとなる東西棟である。柱間は桁行北側が西から1.9m、1.7m、2.0m、1.8m、桁行南側が西から1.8m、1.8m、2.0m、1.8mである。梁間東側は北から1.8m、1.8mの等間となり、梁間西側では妻柱が検出されていない。柱痕跡は5ヵ所の柱穴で確認され、柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.18m～0.24mである。柱穴もほぼ円形で、直径は0.40m～0.52m、深さは0.17m～0.46mで、0.20m前後のものが多い。南東隅の柱穴SP6421の底部には扁平な石を根石として敷いていたことが確認されている。

SP6265・6266・6268・6319で土師器、土師質土器の皿が出土しているが、小片であるため図化は不可能であった。土師質土器皿は15世紀～16世紀にかけての遺物とみられ、また前述のようにSH6007とは建替え関係にある可能性が高いため、遺構の帰属年代も16世紀後半～17世紀前葉の範疇で捉えられる。

SH6010（図176・182、図版48）

6区中央のH～I13区にあり、SH6011と大きく重なる位置にある。建物は梁行2間、桁行4間の側柱建物で、規模は梁行4.6m、桁行7.3mである。南北方向の軸がN－6°－Wとなる南北棟である。柱間は梁行の北側と南側が西から2.9m、1.7mで、いずれも妻柱が東に偏る。桁行西側は北から2.3m、1.7m、1.7m、1.6m、桁行東側は北から2.4m、1.5m、1.4m、2.0mである。柱痕跡は9ヵ所の柱穴で確認された。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.15m～0.20mである。柱穴の平面形もほぼ円形で、直径0.34m～0.50m、深さは0.10m～0.23mだが、南北の妻柱と北東隅の柱のみ0.40m～0.45mとなる。

出土遺物は小片のみで図化できたものはないが、SP6367・6727の柱穴より出土した小破片に内耳鍋があることから、遺構は15世紀後半～16世紀代のものと考えられる。

SH6011（図176・183、図版48）

6区中央のH～I13区に位置し、SH6010とは大きく重なる。建物は梁行2間、桁行4間の側柱建物で、規模は梁行3.9m、桁行6.2mである。南北方向の軸がN－10°－Wとなる南北棟である。柱間は梁行北側が西から1.9m、2.0m、梁行南側が西から2.0m、1.9mである。桁行西側は北から1.5m、1.6m、1.5m、1.6m、東側は北から1.7m、1.6m、1.5m、1.4mである。妻柱は南北ともにやや外側にずれる。柱痕跡は全ての柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.16m～0.24mで、0.20m前後のものが大半を占める。柱穴の平面形もほぼ円形で、直径は0.33m～0.57m、深さは0.10m～0.25mである。

遺物は土師質土器の破片などが4点出土したが、いずれも小破片で図化することはできなかった。土師質土器片は、皿あるいは鍋釜類とみられ、15世紀後半～16世紀代の所産と考えられる。また、上記SH6010とSH6011は建物の構造、規模、方向において共通していることから、建て替え関係にあったとみられる。ただし、直接的な切合い関係がないため、前後関係は不明である。

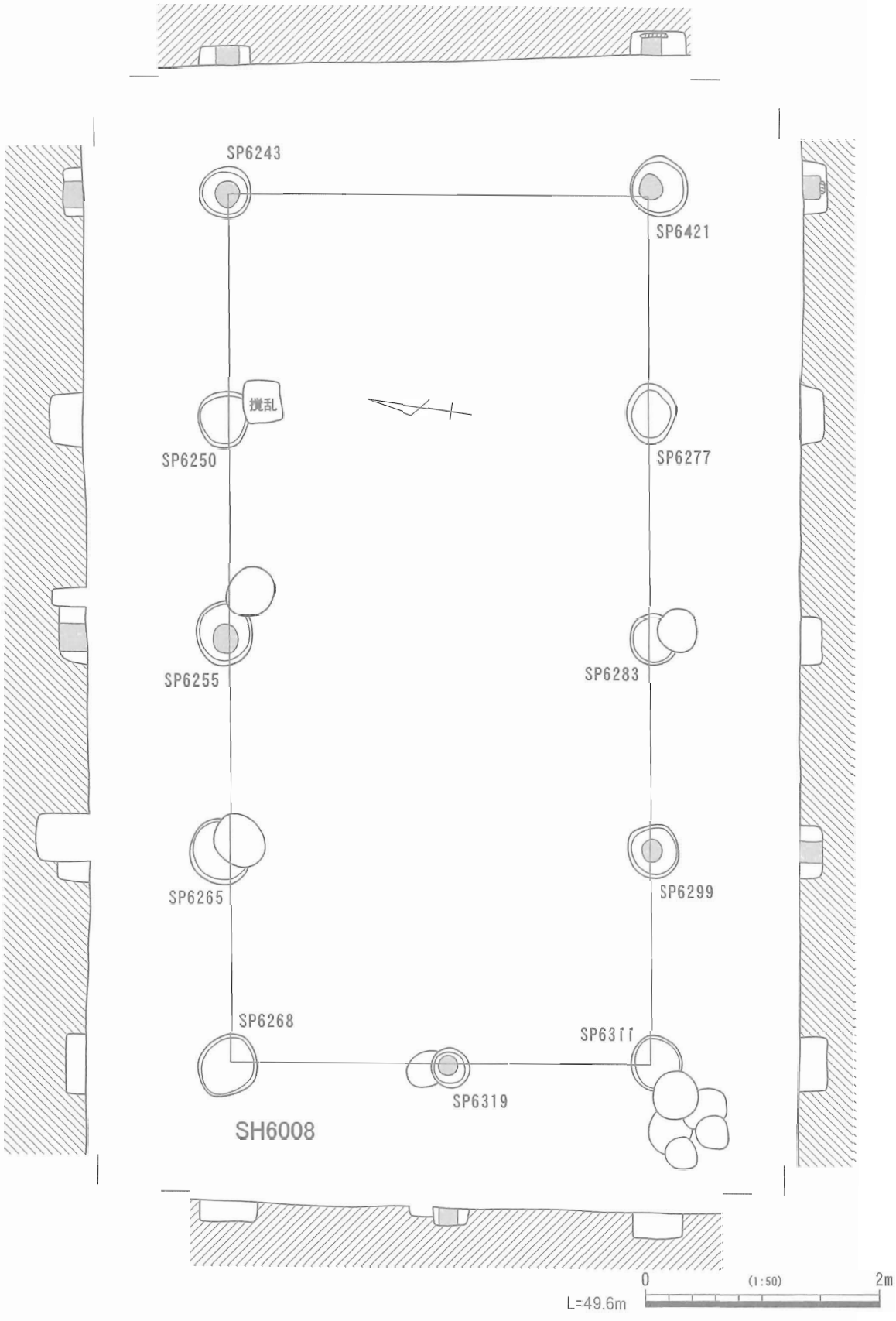


図 181　SH6008 実測図

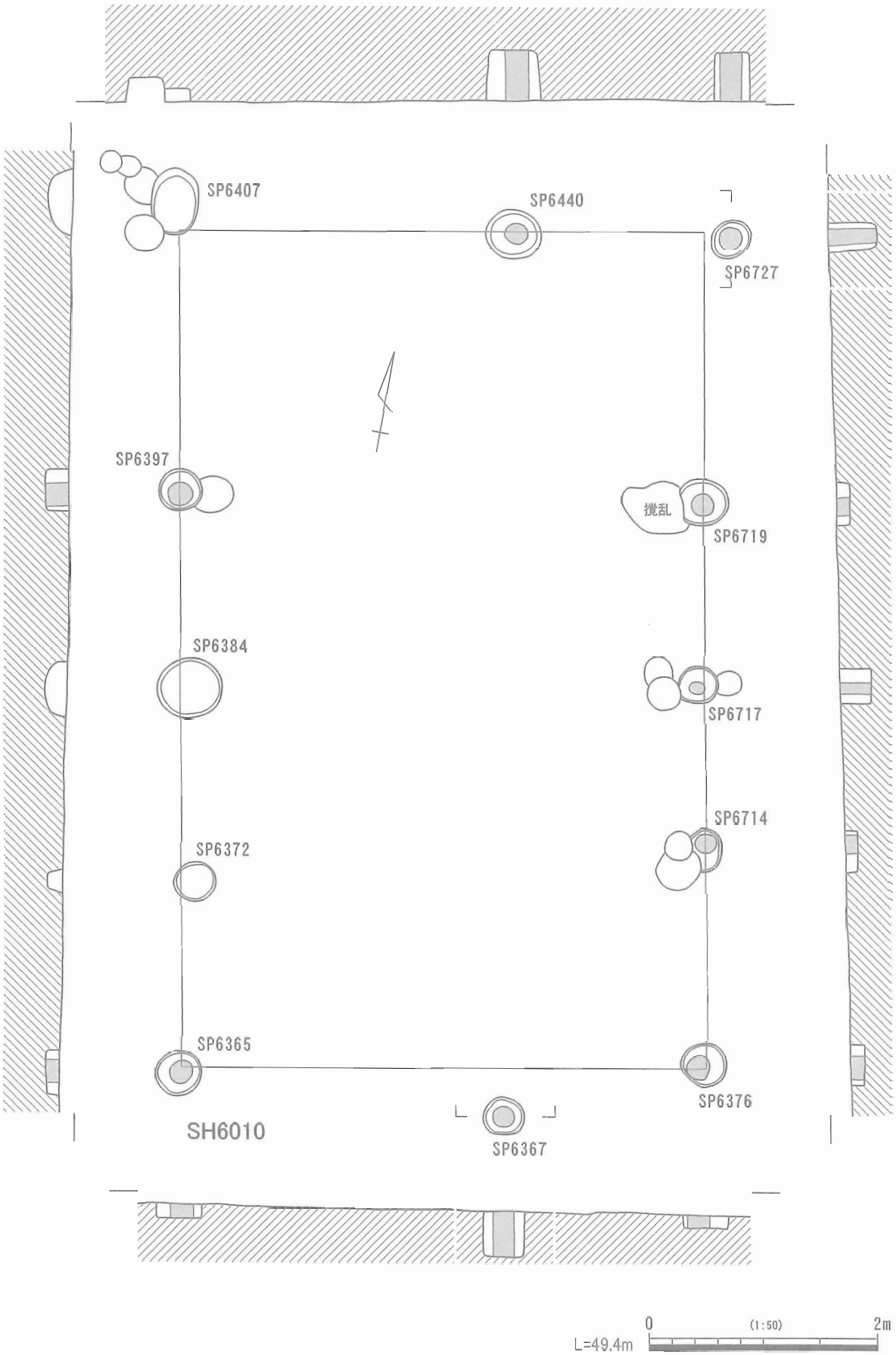


図 182　SH6010 実測図

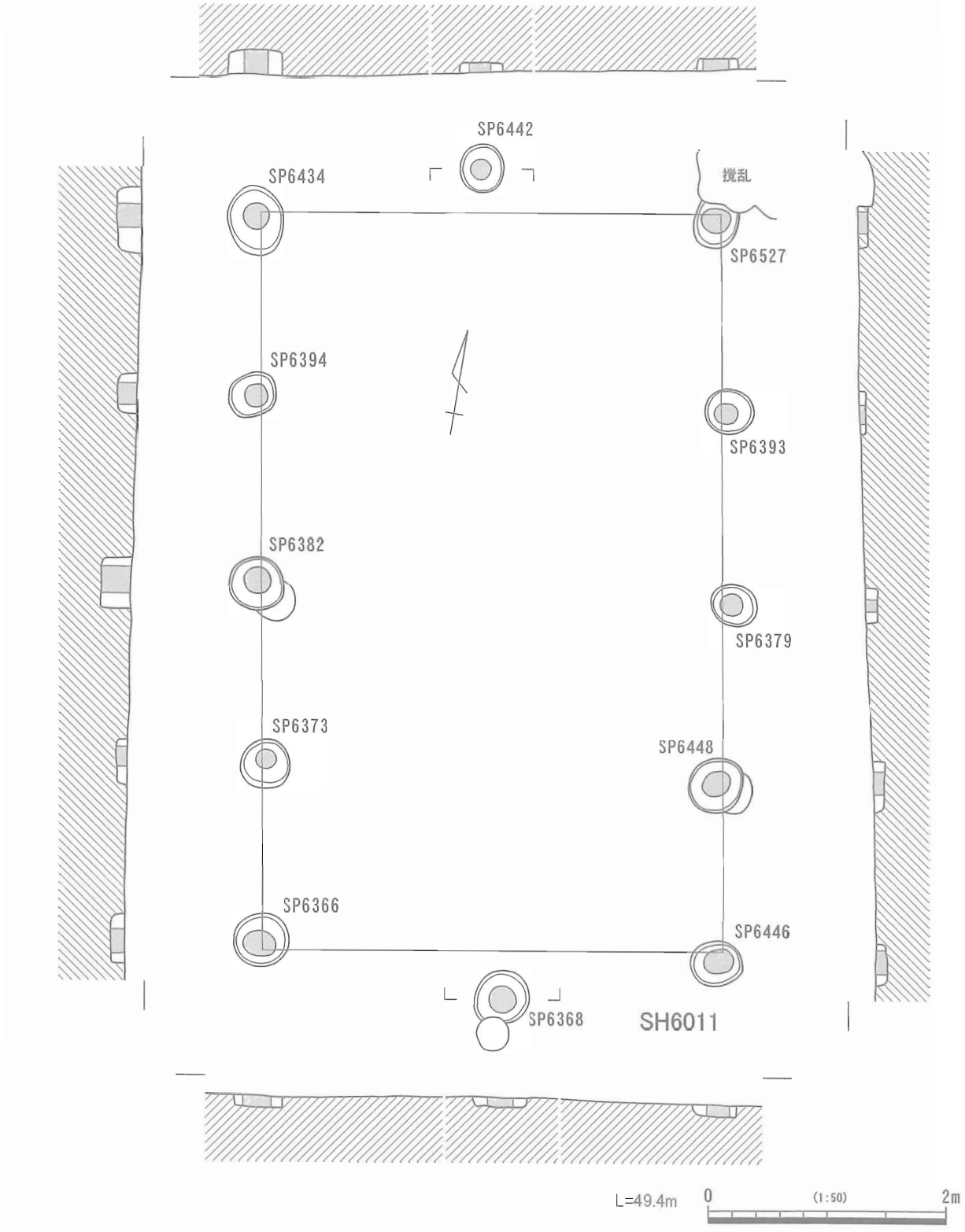


図 183　SH6011 実測図

SH6015（図 176・184）

6区中央のG～H 13区にあり、Ⅲ群建物群の北東部に位置する。南北2間、東西1間の側柱建物である。平面形は正方形に近いが、南北 3.6 m、東西 3.8 mと若干東西の軸が長く、南北方向の軸はN－7°－Wである。柱間は西辺と東辺が北から 1.7 m、1.9 mとなっている。柱痕跡は全ての柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.18 m～ 0.27 mである。掘方の平面形もほぼ円形で、直径は 0.33 m～ 0.47 m、深さは 0.28 m～ 0.49 mである。

1468 は SP6497 から出土した山茶碗口縁部の破片である。1469 は SP6480 から出土した、くの字形内耳鍋の内耳部破片である。この内耳鍋を手がかりとすれば、遺構の営まれた時期は 15 世紀中葉～ 16 世紀代と考えられる。

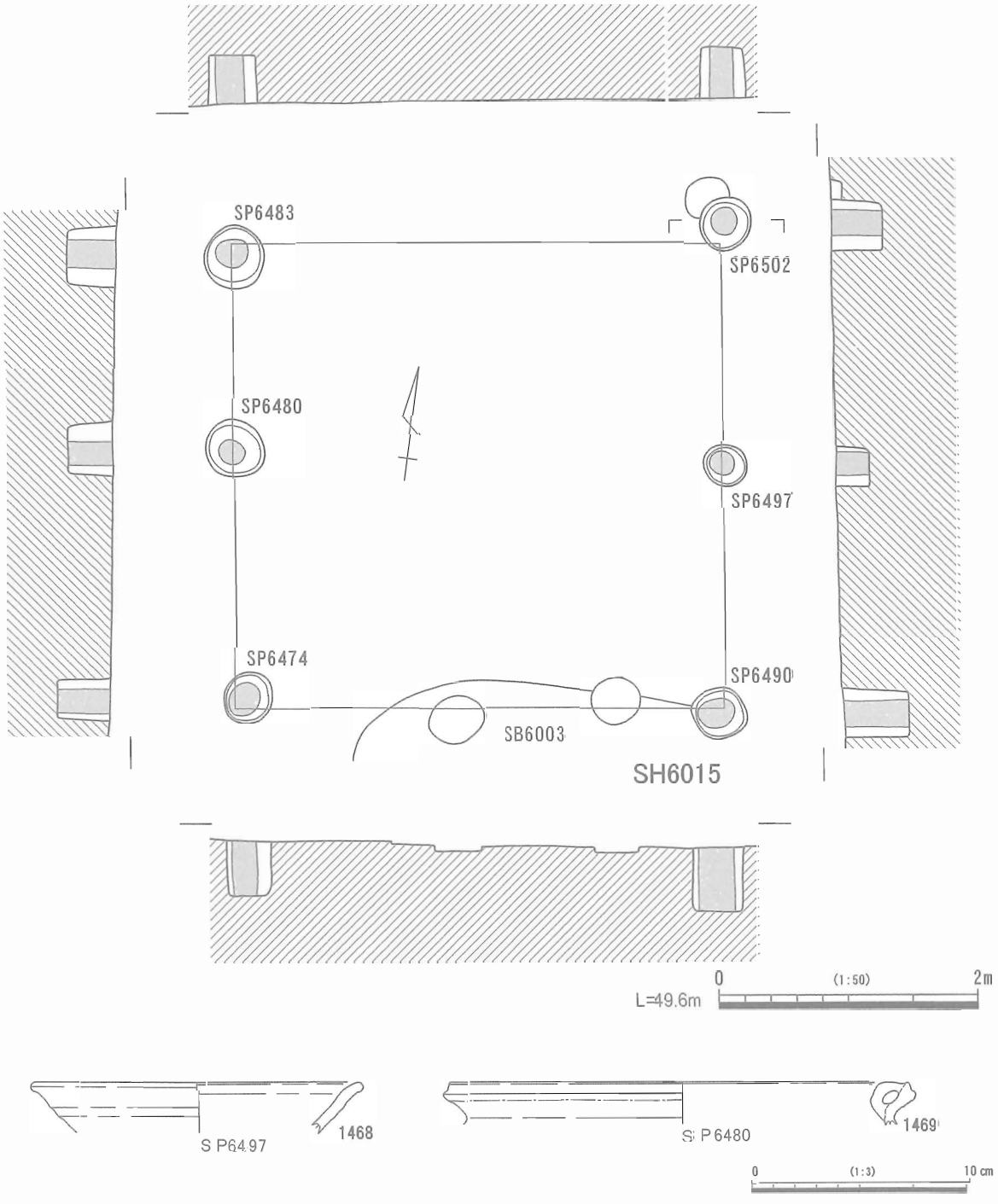


図 184　SH6015 実測図・出土遺物

（4）Ⅳ群の掘立柱建物

3区から7区にかけての東側に所在する建物群である。SH3001がやや北に離れた場所にある以外は、SH7002・SH7003・SH7006・SH7008・SH7009が集中している。SH7002とSH7003は16世紀～近世までの年代観で捉えられ、その他は15世紀後半～17世紀代の建物と推定される。東側を15世紀後半～16世紀代のSD1001に区画され、北側は残存する大溝が区画しているとみられるが、建物群北側や東側に遺構があまり確認されないため、広い空閑地を持っていることが指摘できよう。建物の南北軸は西に1～2°と、ほぼ真北を向くSH7006・SH7008・SH7009とやや傾きが大きいSH3001の建物群と、西に12°傾くSH7002・SH7003の建物群に分けられる。遺物相から後者は時期的に降る建物群と想定される。なお、出土遺物の様相から古代の建物としたSH6013・SH6014・SH7001・SH7004は規模、位置、建物の方向から、この時期のⅣ群建物群と関連する可能性もある。

SH3001（図186）

3区西部のE～F 19区に位置し、Ⅳ群建物群のうち、やや北側に離れて所在する。周囲には小穴が散在するが、本遺構以外に目立った遺構はみあたらない。梁間1間、桁行3間の側柱建物で、建物規模は梁行4.0 m、桁行5.4 mを測る。南北方向の軸がN－5°－Wとなる東西棟である。桁行北側では西端柱間が2.1 mであったが、SP3053とSP3059間の柱穴が検出されず、この間が3.3 mの間隔となっている。桁行南側の柱穴は西から2.2 m、1.9 m、1.3 mであった。柱痕跡はSP3058を除いた柱穴で確認されている。柱痕跡の平面形は円形あるいは楕円形で、直径0.14 m～0.20 mである。柱穴の規模は直径0.22 m～0.34 m、深さは0.06 m～0.16 mで、平面形状は円形であった。

出土遺物は皆無であったため、遺構の時期を把握するのは困難である。ただし、やや離れた場所ではあるが、南側にあるSH7006・SH7008・SH7009と建物方向が類似することから、同時期の遺構と推定される。

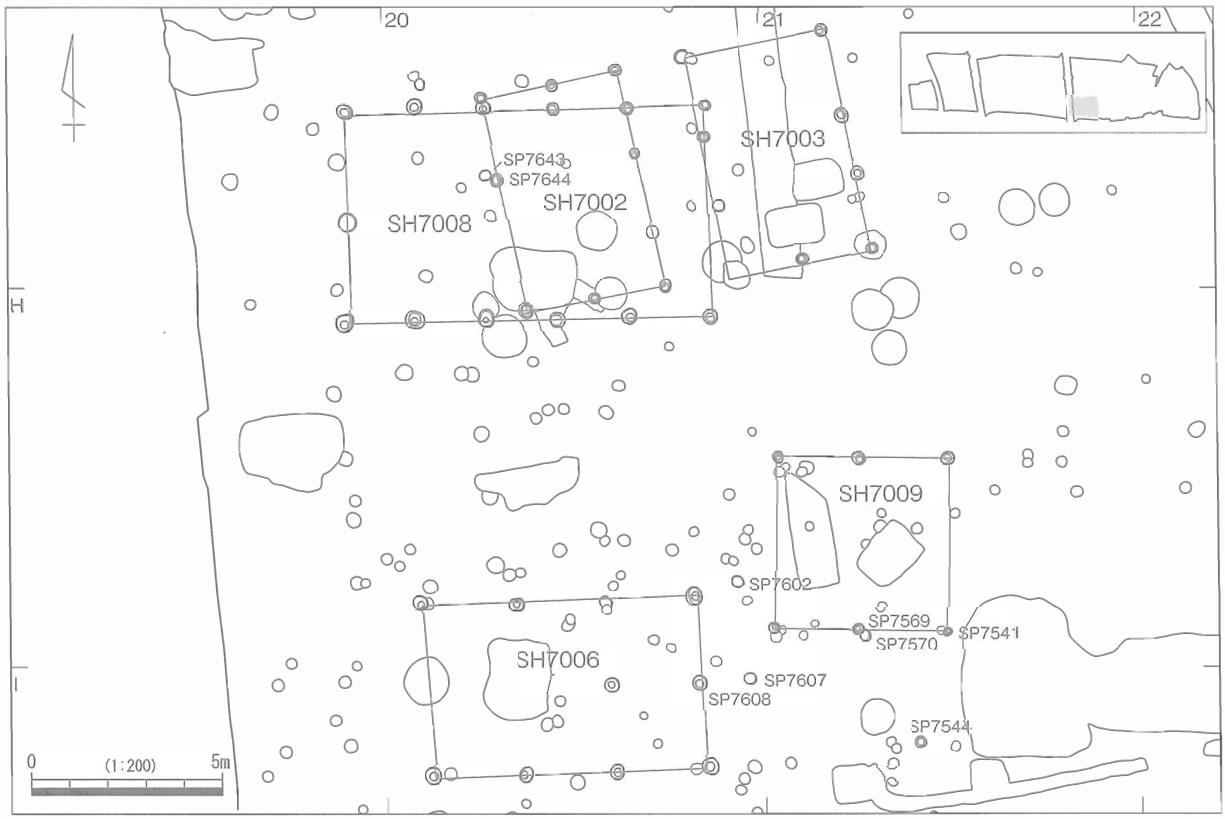


図185　掘立柱建物配置図（Ⅳ群）

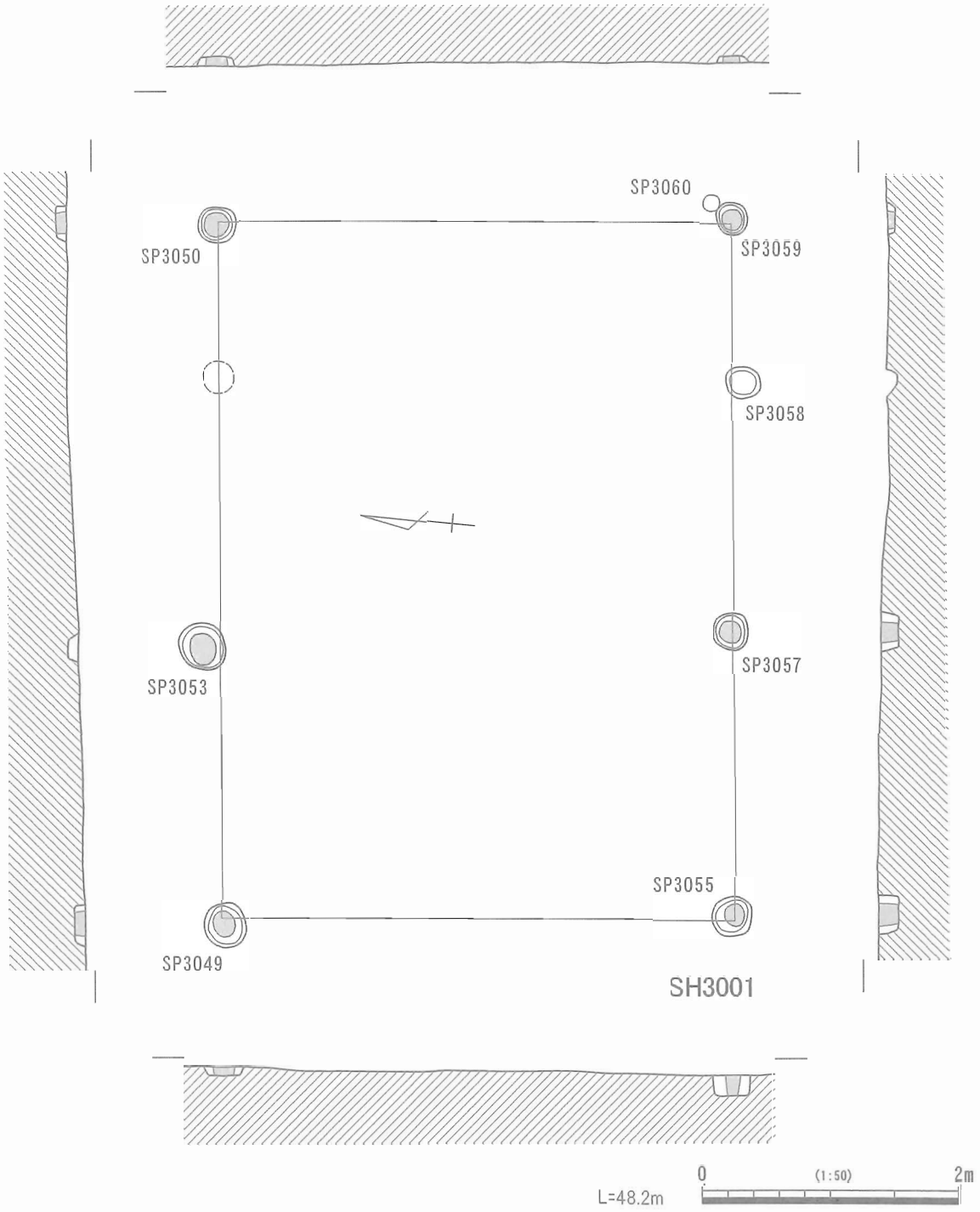


図 186　SH3001 実測図

SH7002（図 185・187、図版 47）

7区東端のG 20 区に位置にあり、Ⅳ群建物群の北部に位置する。梁行２間、桁行３間の側柱建物で、規模は梁行 3.9 m、桁行 6.2 mである。南北棟で、南北方向の軸はN－12°－Wである。柱間は梁行が南北ともに等間 1.85 m間隔である。桁行は西側の柱穴が１ヵ所検出されなかったが、東側と同様と考えると、北から 2.2 m、2.1 m、1.5 mと推測できる。柱痕跡は８ヵ所の柱穴で確認した。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.14 m～0.23 mである。柱穴の平面形もほぼ円形であり、直径は 0.27 m～0.38 m、深さは妻柱と四隅の柱穴が深く 0.20 m～0.40 mで、その他は 0.05 m～0.17 mであった。なお、南西隅

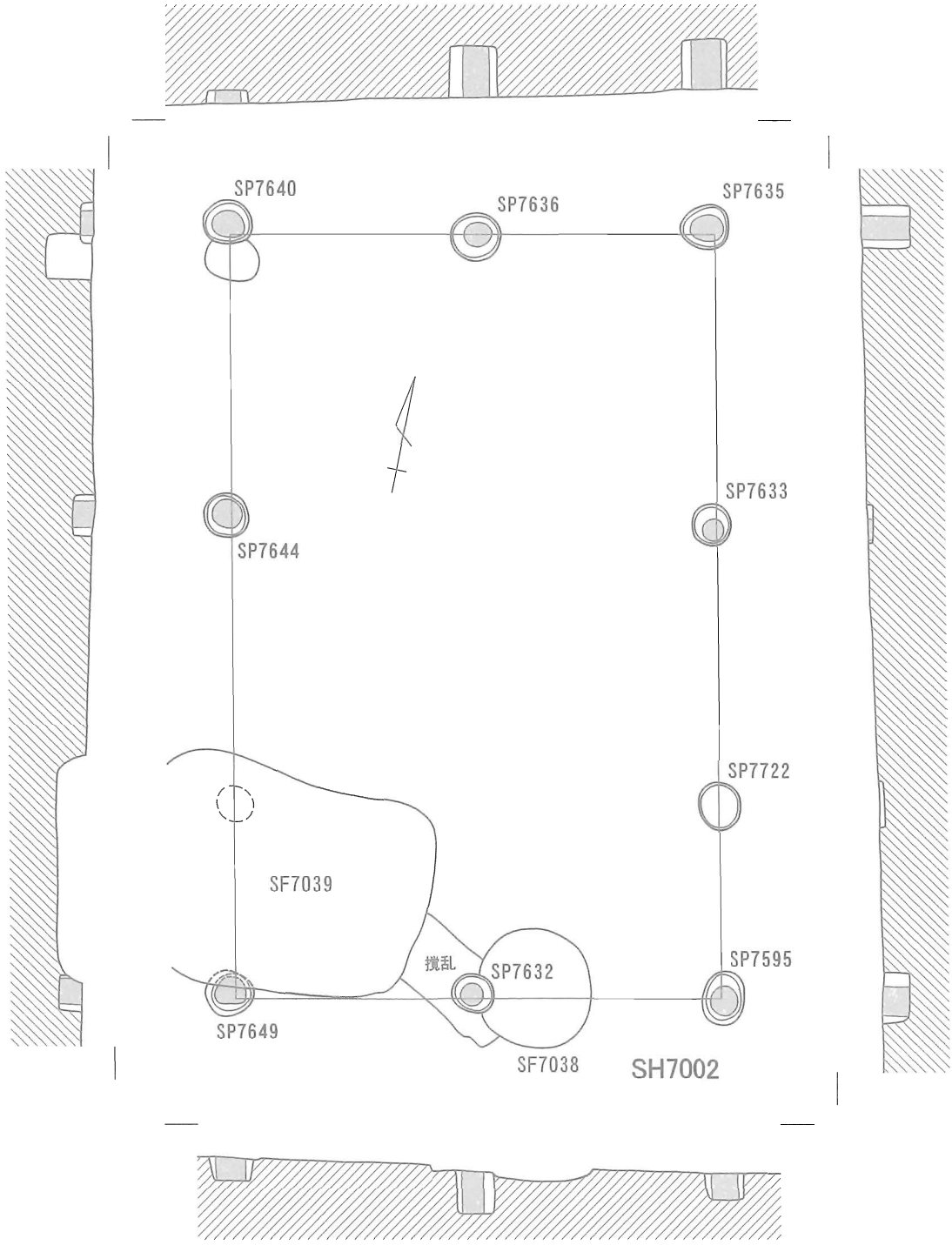


図 187　SH7002 実測図

の柱穴 SP7649 は SF7039 によって一部切られている。

遺物は SP7632・7636・7640 から５点出土しているが、いずれも小破片であり図示は不可能であった。このうち SP7640 柱痕跡からは近世志戸呂製品の小片が出土しているが、器種は不明である。これを根拠とすれば、SH7002 は近世の建物跡である可能性はあるが、後述のように SH7003 との関連から 16 世紀代～近世という時間幅で建物の年代を捉えておきたい。

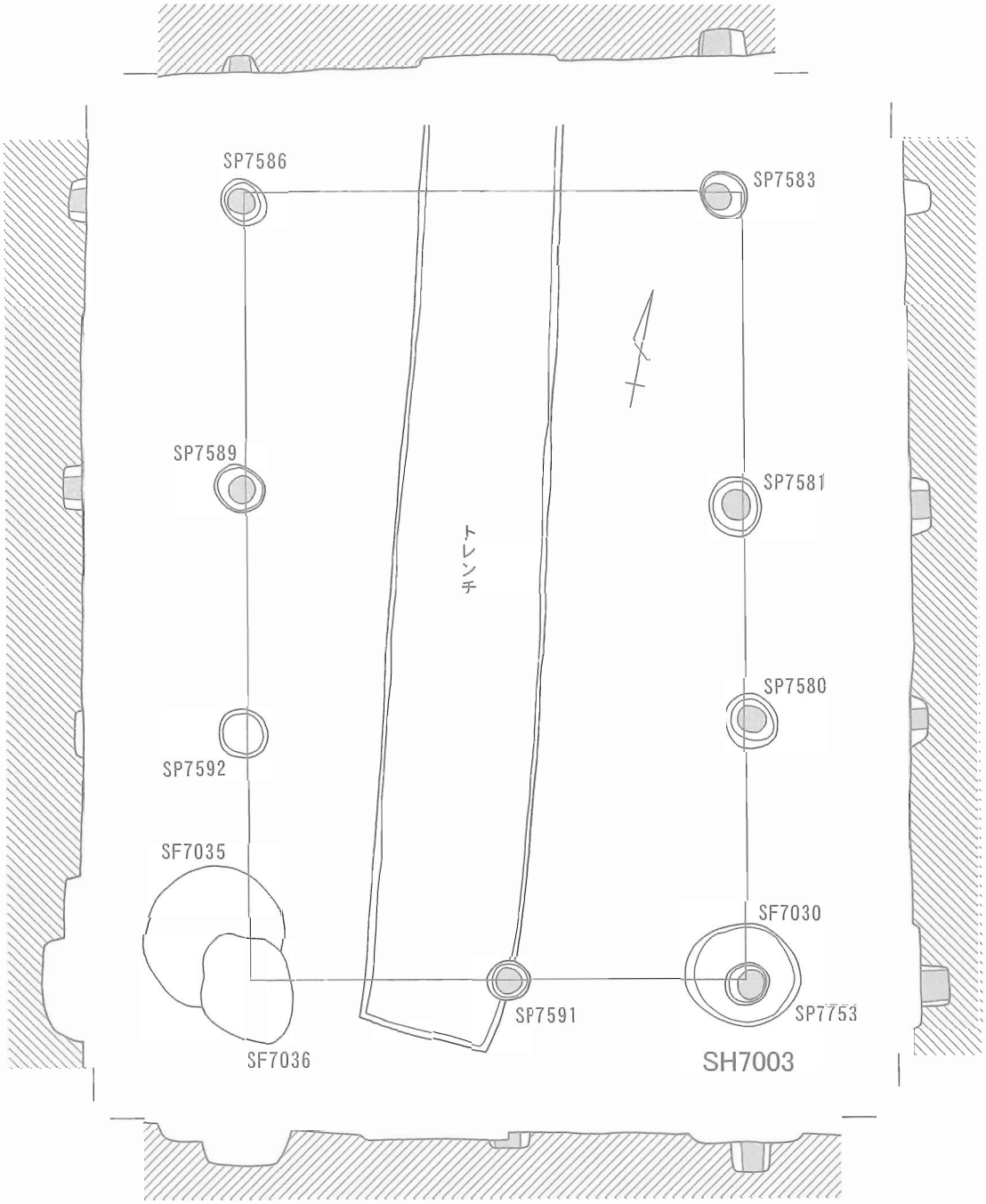


図 188　SH7003 実測図

L=478m　0　(1:50)　2m

SH7003（図 185・188、図版 48）

7 区東端の G 20 ～ 21 区にあり、Ⅳ群建物群の北部に位置する。梁行 2 間、桁行 3 間の側柱建物で、建物規模は梁行 3.9 m、桁行 6.2 mである。南北方向の軸がN － 12°－Wとなる南北棟である。柱間は梁行が 1.85 mの等間となる。桁行の柱間は南西隅の柱穴が SF7036 に破壊されているため検出できなかったが、東側に対応する位置にあるとすれば、北から 2.2 m、2.1 m、1.5 mと推測できる。柱痕跡は 8 ヵ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.14 m～ 0.23 mである。柱穴の平面形もほぼ円形であり、直径に 0.27 ～ 0.38 m、深さは妻柱と四隅の柱穴が深く 0.20 m～ 0.40 mで、その他は 0.05 m～ 0.17 mであった。

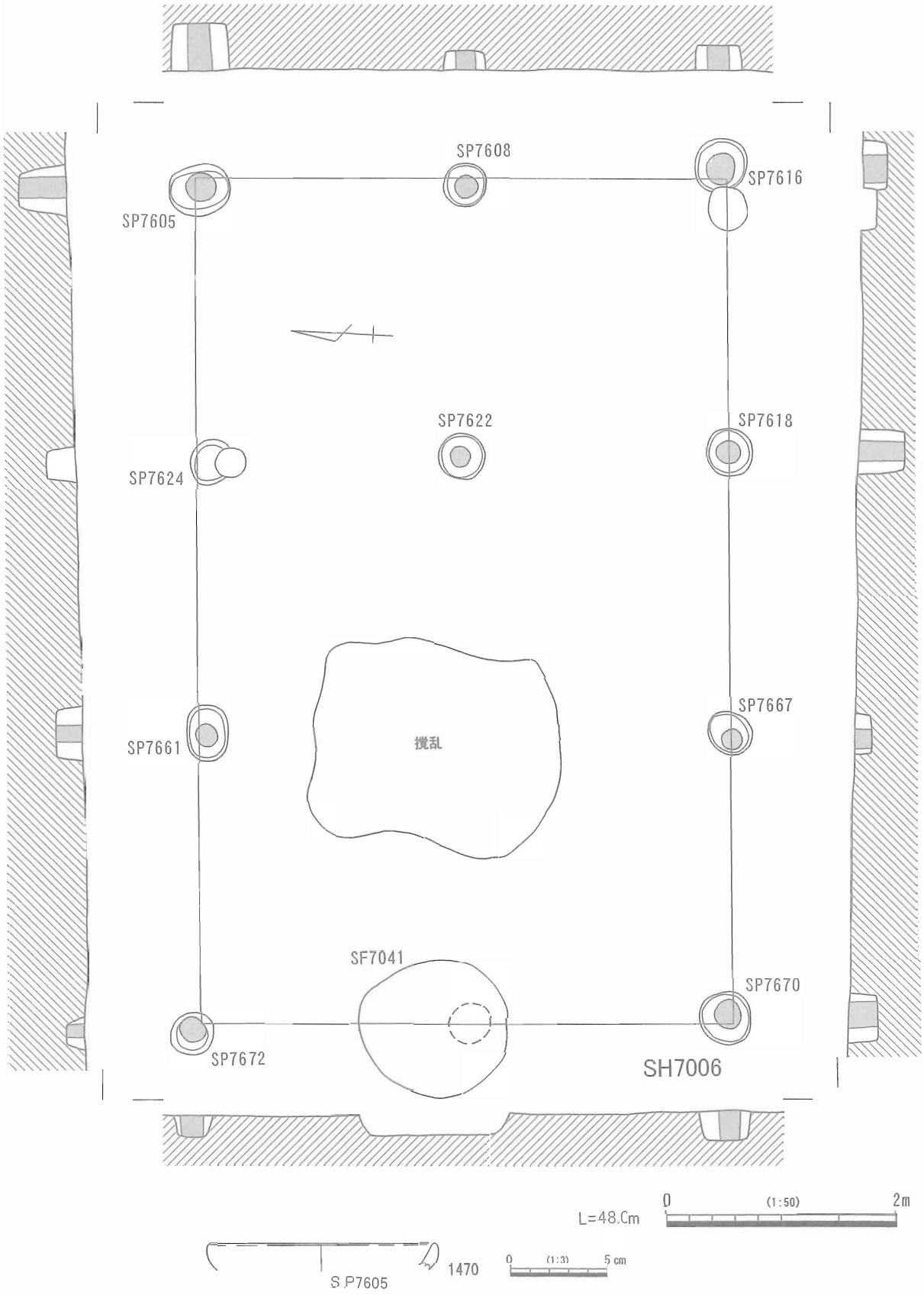


図 189　SH7006 実測図・出土遺物

出土遺物は小片で図示することはできなかったが、SP7589 の掘方埋土より非ロクロ成形の土師質土器皿とみられる破片が出土しており、16 世紀～ 17 世紀代の製品と考えられる。なお、前述した SH7002 と SH7003 は平行して並ぶ位置関係にあり、建物の規模や構造、方向性の点で共通しているこ

とから一連の建物である可能性が高い。出土遺物に乏しいが、SH7003 と SH7002 は 16 世紀代～近世にかけて営まれた建物と推定される。

SH7006（図 185・189）

７区南西端のＨ～ I20 区にあり、Ⅳ群建物群の最も南に位置する。梁行２間、桁行３間の総柱建物の可能性があるが、西半の柱の一部が他遺構や攪乱によって失われているため、明確ではない。建物規模は梁行 4.6 ｍ、桁行 7.2 ｍである。南北方向の軸がＮ－ 2°－Ｗとなる東西棟である。柱間は西側の妻柱が SF7041 に切られて確認できないが、東側と同様とすれば梁行が 2.3 ｍの等間となり、桁行も 2.4 ｍの等間である。柱痕跡は９ヵ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.15 ｍ～ 0.22 ｍである。掘方の平面形もほぼ円形であり、直径は 0.34 ｍ～ 0.46 ｍ、深さは 0.09 ｍ～ 0.42 ｍとばらつきがある。

1470 は SP7605 柱痕跡から出土した。非ロクロ成形の土師質土器の皿で、口縁端部の内外面には強い横ナデが認められる。15 世紀後葉～ 16 世紀前葉の遺物と考えられることから、遺構の帰属年代もその時期になるだろう。後述のように SH7008 と SH7009 とは一連の建物と推定される。

SH7008（図 185・190・191）

７区西端のＧ 20 区にあり、Ⅳ群建物群の北よりに位置する。梁行２間、桁行５間の側柱建物で、建物規模は梁行 5.6 ｍ、桁行 9.4 ｍである。南北方向の軸がＮ－ 2°－Ｗとなる東西棟である。柱間は東側の妻柱が検出されていないが、西側と同様であるとすると梁行が 2.8 ｍの等間となる。桁行の柱間は南北ともに西から 1.9 ｍ、1.8 ｍ、1.9 ｍ、1.9 ｍ、1.9 ｍである。柱痕跡は 11 ヵ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.18 ｍ～ 0.29 ｍである。掘方の平面形もほぼ円形であり、直径は 0.40 ｍ～ 0.50 ｍ、深さは 0.22 ｍ～ 0.43 ｍである。

1471 は SP7637 の柱痕跡より出土した須恵器で、壺類の口縁部であろう。1472 と 1473 はいずれも渥美湖西産の山茶碗類である。1472 は SP7634 掘方埋土から出土した山茶碗、1473 は SP7637 の柱痕跡から出土した小皿である。1474 ～ 1479 は土師質土器の皿である。1474 と 1475 は非ロクロ成形品で、1474 は SP7634 の柱痕跡埋土、1475 は SP7642 の埋土から出土した。1476 ～ 1479 はロクロ成形品である。1476 は SP7715 柱痕跡から出土し、口径 7.0cm を測る小型品である。1477 は SP7698 の柱痕跡埋土、1478 は SP7634 掘方埋土から出土しており、いずれも体部から口縁かけてやや外反しながら立ち上がる形態である。1479 は SP7698 掘方埋土から出土しており、底部外面に糸切り痕が明瞭に残る。この他内耳鍋や土師器皿とみられる小破片も出土している。これらの遺物は 15 世紀後半～ 16 世紀後葉の範疇で捉えられ、前述したように SH7006 と関連する建物である可能性が高い。

SH7009（図 185・192）

７区西端のＨ 21 区にあり、Ⅳ群建物群の南西部に位置する。南北１間、東西２間の側柱建物で、規模は一辺 4.6 ｍのほぼ正方形に近い平面形となり、南北軸はＮ－ 1°－ Ｅである。北辺、南辺ともに柱間は 2.3 ｍの等間となる。柱痕跡は６つの柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は 0.14 ｍ～ 0.18 ｍである。柱穴も円形で、直径 0.23 ｍ～ 0.38 ｍ、深さは 0.08 ｍ～ 0.16 ｍである。

出土遺物は全くないが、近接する SH7007・SH7008 とはその位置関係から強い関連が認められ、また建物軸の方向性に類似が認められることから、３棟が同時期に建てられた一連の建物群である可能性が高いと考えられる。

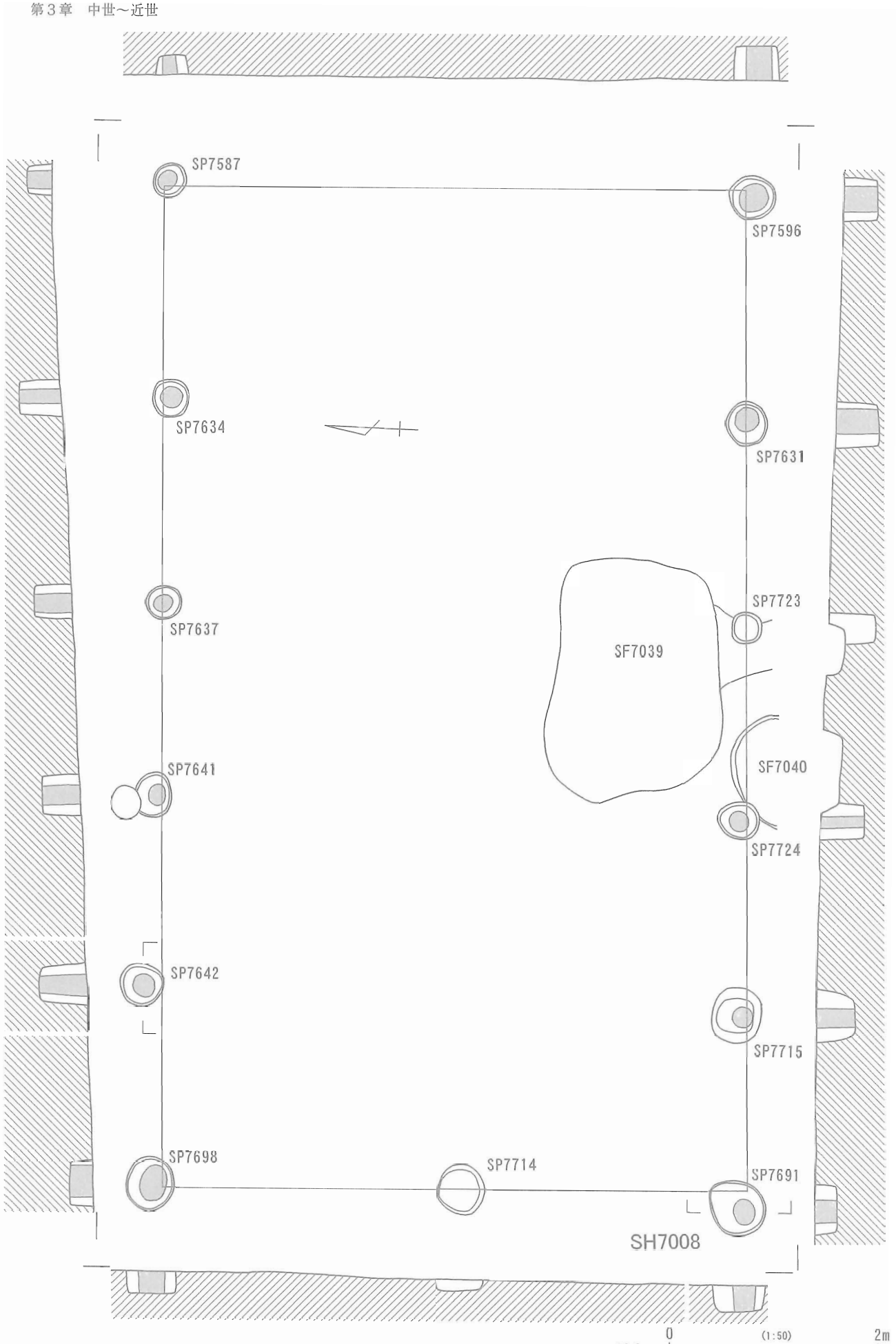


図 190　SH7008 実測図

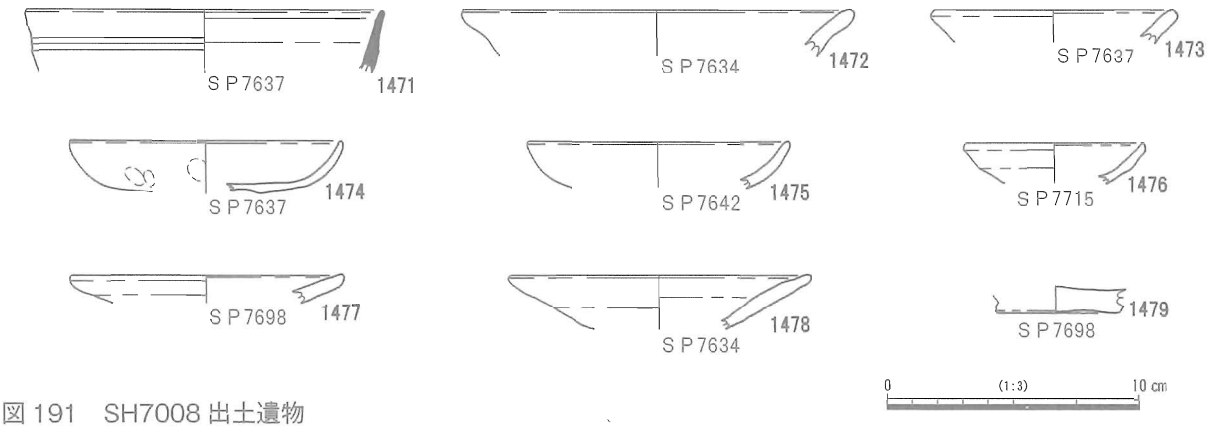


図 191　SH7008 出土遺物

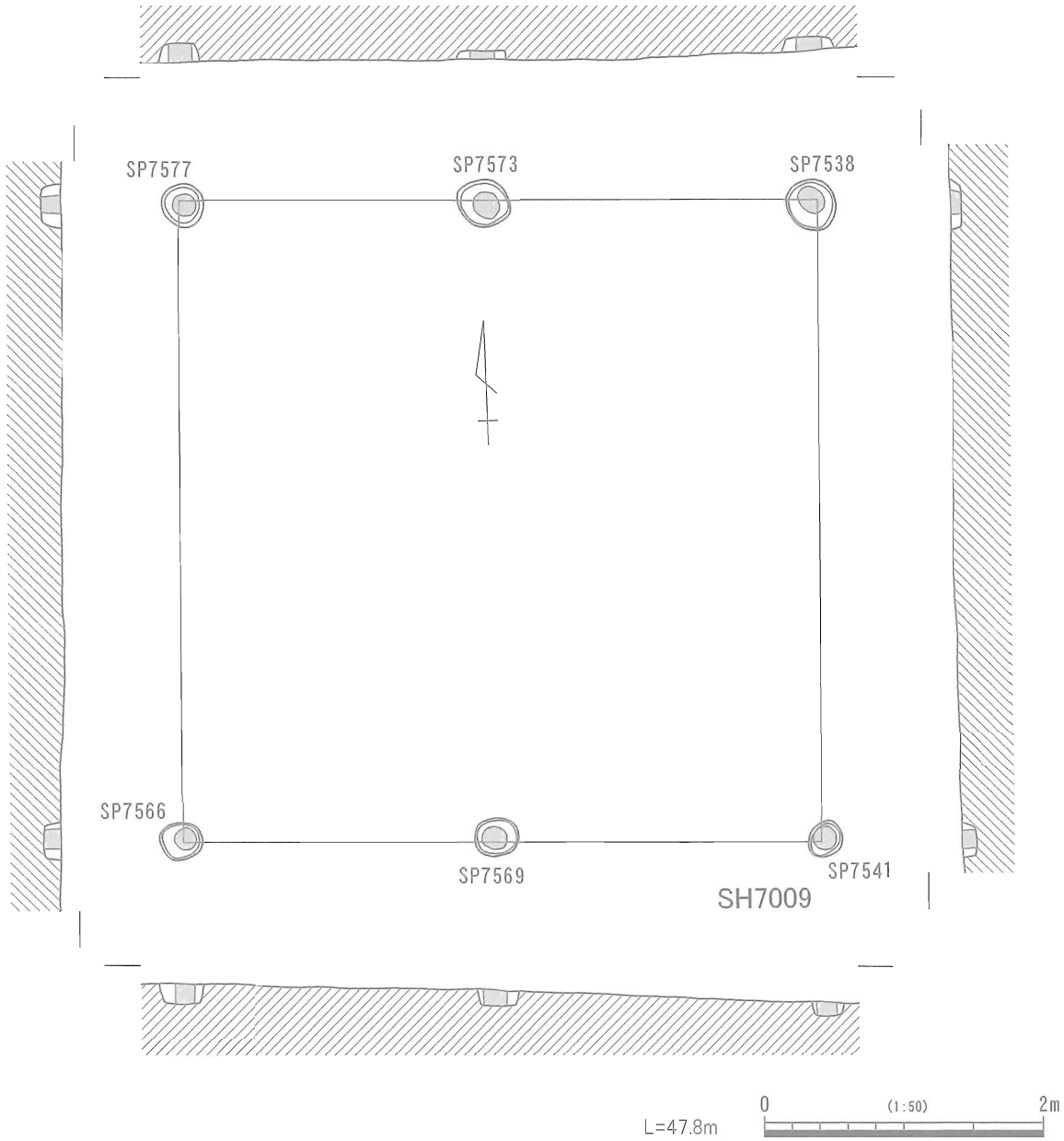


図 192　SH7009 実測図

（５）Ｖ群の掘立柱建物

３区～７区にかけての西側に位置する建物群である。北部（図 193）の SH3002・SH3003・SH3004、南部（図 197）の SH7011・SH7013・SH7014・SH7016 が該当する。出土遺物から北部の SH3002・SH3003・SH3004 と南部の SH7016 は 15 世紀後半～ 16 世紀にかけての建物であり、南部の SH7011・SH7013・SH7014 は出土遺物から 12 ～ 13 世紀代の建物であることが判明している。建物群のある敷地は、西側では明瞭な区画溝などは確認されていないが、古代～近世まで流れていた河道となっており、北側は残存する大溝及び土塁に区切られていたと考えられる。建物の軸方向は西に１° 傾く SH7011 以外は 14 ～ 20° と他群と比べて大きく傾くものが多く、西側を流れた旧河道 SR8001 の影響を受けた建物配置であったとも考えられる。

SH3002（図 193・194）

３区南端のＦ 23 区に位置し、SH3004 と南東隅が重なる。梁行１間、桁行２間の側柱建物で、建物規模は梁行 4.0 m、桁行 4.4 mである。南北方向の軸がＮ－ 20°－Ｗの東西棟である。柱間は桁行北側、南側ともに等間で 2.2 mを測る。柱痕跡が確認された SP3146 は、柱痕跡の直径が 0.16 m、柱穴の規模は直径 0.39 m、深さ 0.13 mである。四隅の柱穴は直径 0.35 m～ 0.40 mと比較的大きく、その他の柱穴は直径 0.25 m～ 0.30 mである。平面形状は SP3168 が隅丸方形となる以外はほぼ円形で、検出面からの深さは 0.07 m～ 0.42 mである。

1480 は SP3149 の埋土内から出土した非ロクロ成形の土師質土器皿である。底部内外面に煤が付着する。1481 は SP3163 の埋土内から出土した土師器坏である。口縁部を体部中ほどで大きく屈曲させる平安期のものであろう。口縁端部には油煙らしき痕跡がみられる。1482 は SP3166 の埋土内から出土した土錘で、長さ 3.1cm、幅 2.2cm、重さ３ｇの小型品である。この他 SP3138 と SP3146 の埋土内から土師

図 193　掘立柱建物配置図（Ｖ群北部）

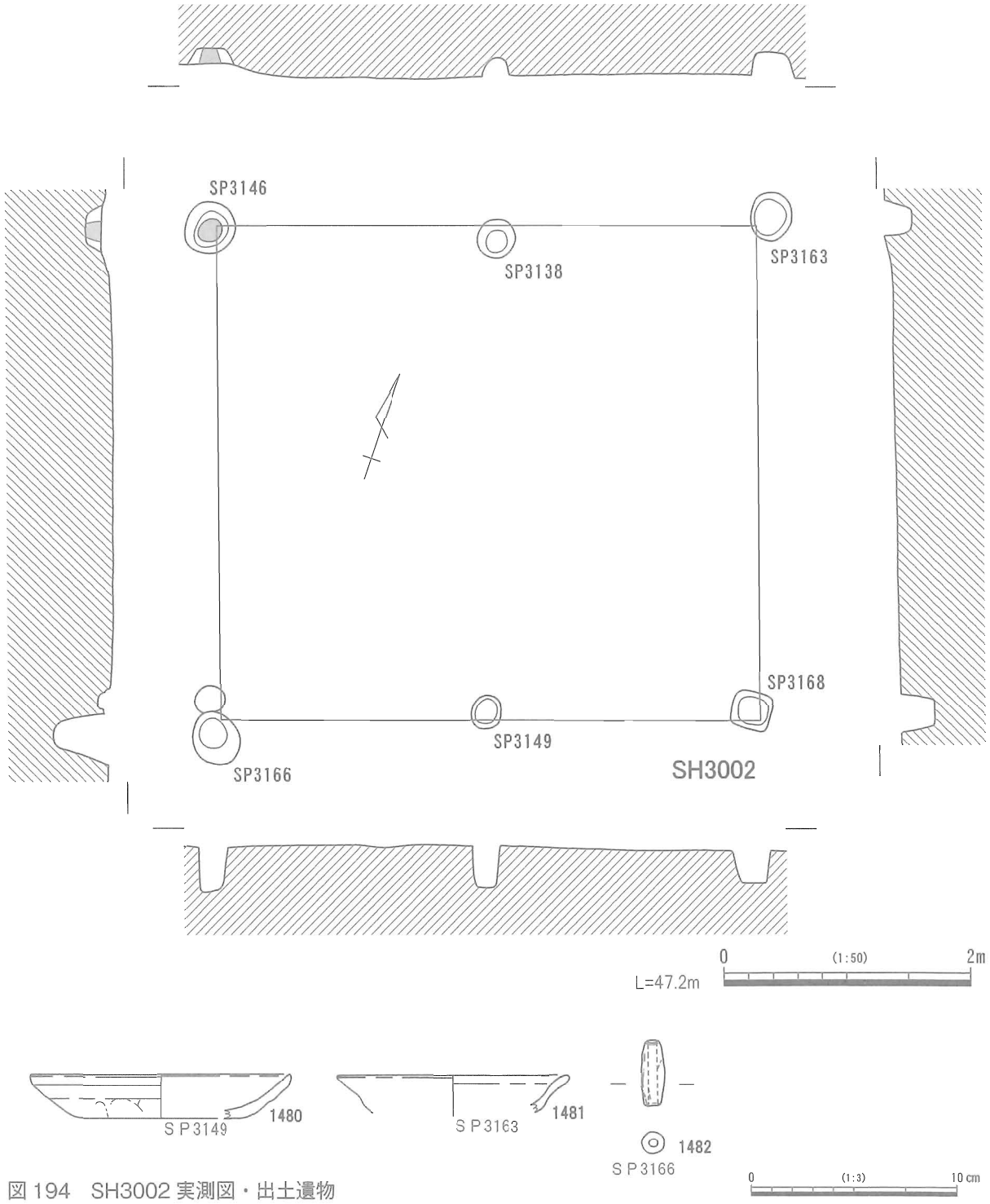


図 194　SH3002 実測図・出土遺物

質土器の破片が３点出土したが、図示は不可能であった。出土遺物から、遺構の帰属年代は 16 世紀中葉～後葉と考えられる。

SH3003（図 193・195）

３区南部のＥ～Ｆ 24 区に位置し、SH3002・SH3004 と近接する。梁行２間、桁行２間の側柱建物で、建物規模は梁行 4.7 m、桁行 6.2 mであった。南北方向の軸がＮ－ 14°－Ｗとなる東西棟である。北東隅と梁行東側の柱穴が検出されなかったが、桁行南側で西から 3.1 m、3.1 m、梁行西側で北から 2.4 m、2.3

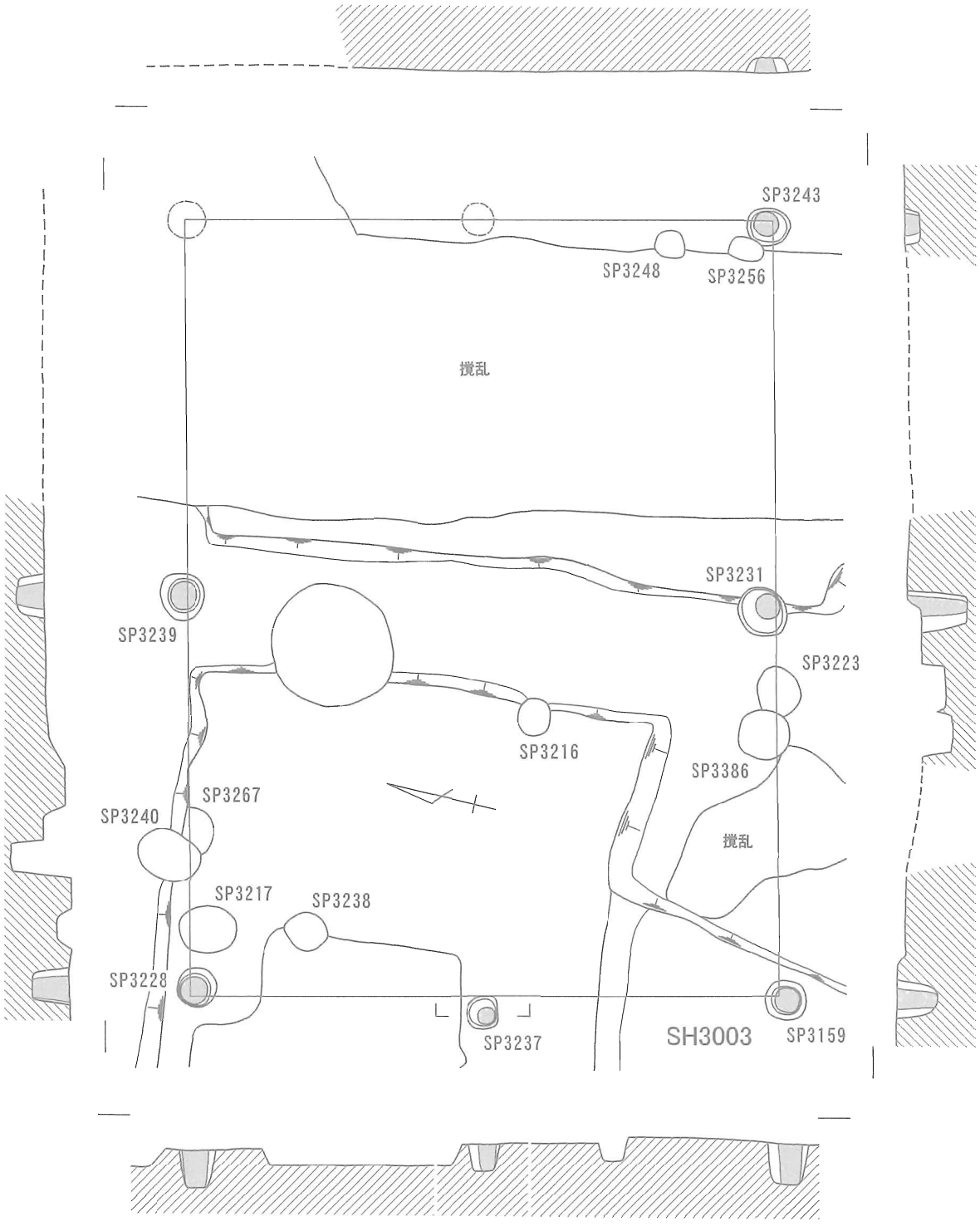


図 195　SH3003 実測図

mの柱間規模が確認されているため、近似した場所に柱穴があったと考えられる。柱痕跡は検出されたすべての柱穴で確認されており、その平面形は円形で、直径 0.12 m～0.2 mであることが判明している。柱穴の直径は 0.24 m～0.36 m、検出面からの深さは SP3243 が 0.12 mと浅い以外は 0.2 m～0.48 mと比較的深くなっている。出土遺物は皆無であったが、隣接する SH3004 と建物方向がほぼ一致することから、同時期の遺構と推定される。

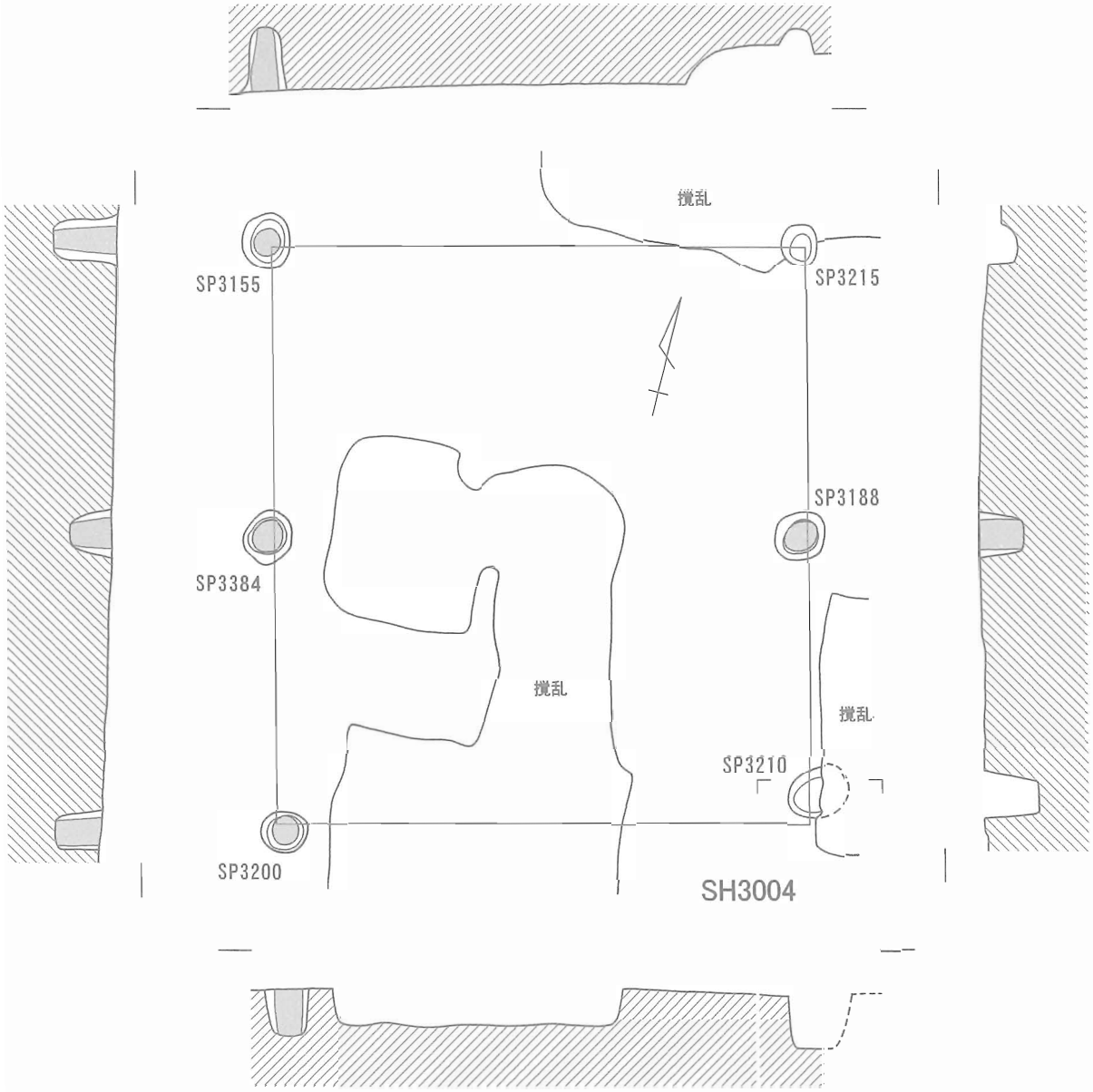


図 196　SH3004 実測図

SH3004（図 193・196）

3 区南端の F 24 区に位置し、SH3002 と北西隅が重なる。東西 1 間、南北 2 間の正方形に近い平面を持つが、中央部に攪乱が入るため、総柱建物か側柱往物かは不明である。また東側も攪乱を受けており、東方向にさらに広がっていた可能性もある。建物規模は確認できるところで東西に 3.9 m、南北に 4.2 m、柱間は南北方向で 2.1 m、東西方向で 1.95 m とそれぞれ等間となっている。南北方向の軸は N－14°－W である。柱痕跡は 4 つの柱穴で確認できており、柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.19 m～ 0.24 m である。柱穴の平面形は円形で、直径 0.34 m～ 0.38 m、深さ 0.31 m～ 0.48 m であった。

出土遺物は SP3155 埋土内から土師質土器の破片が 1 点出土したが、小破片につき図示はできなかった。胎土やわずかにみえる体部外面の指頭痕などから、15 世紀後葉～ 16 世紀代のくの字形内耳鍋と考えられる。この遺物から、遺構の年代は 15 世紀後葉～ 16 世紀代と推定される。

図 197　掘立柱建物配置図（Ⅴ群南部）

SH7011（図 197・198）

７区南部のＨ 25 ～Ｉ 25 区に位置し、Ⅳ群建物群の南側にあたる。梁行２間、桁行２間の南北棟で、南北方向の軸はＮ－ 1°－Ｗである。建物中心や東側、北側が大きく攪乱されており、建物構造の判断はできず、また一部柱穴も確認できなかった箇所があった。建物規模は梁行が 4.1 ｍ、桁行が 4.6 ｍで、柱間は梁行が西から 2.2 ｍ、1.9 ｍ、桁行は 2.3 ｍの等間であった。柱痕跡は４ヵ所の柱穴で確認できた。柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.32 ｍ～ 0.42 ｍである。柱穴の平面形は円形で、直径 0.14 ｍ～ 0.22 ｍ、深さ 0.40 ｍ～ 0.50 ｍであった。

SP7220 の埋土から山茶碗の小破片が出土していることから、根拠には乏しいが、少なくとも遺構は 12 世紀以降に築造されたと考えられる。

SH7013（図 197・199）

７区中央付近のＧ～Ｈ 25 区に位置する。東西２間、南北２間の正方形に近い平面を持ち、南北方向の軸はＮ－ 11°－Ｗである。建物の東側に南北方向の大きな攪乱が入るため、建物構造の詳細は不明である。建物規模は東西 3.9 ｍ、南北 4.1 ｍで、柱間は南側が西から 2.0 ｍ、1.9 ｍ、西側が 2.1 ｍ、2.0 ｍ、北側と東側の柱間は不明である。柱痕跡は４つの柱穴で確認できた。柱痕跡の平面形は円形で、直径 0.14 ｍ～ 0.20 ｍである。柱穴の平面形は円形で、直径 0.22 ｍ～ 0.40 ｍ、深さ 0.23 ｍ～ 0.40 ｍであった。

遺物は５つの柱穴から出土している。1483 は山茶碗の小皿である。SP7133 の埋土から出土した底部の破片で、渥美湖西産Ⅱ期の製品であろう。1484 と 1485 は土師質土器の皿である。1484 は SP7060 から出土し、摩滅により調整は確認できない。1485 は SP7024 の埋土から出土し、底部は丸く、口縁

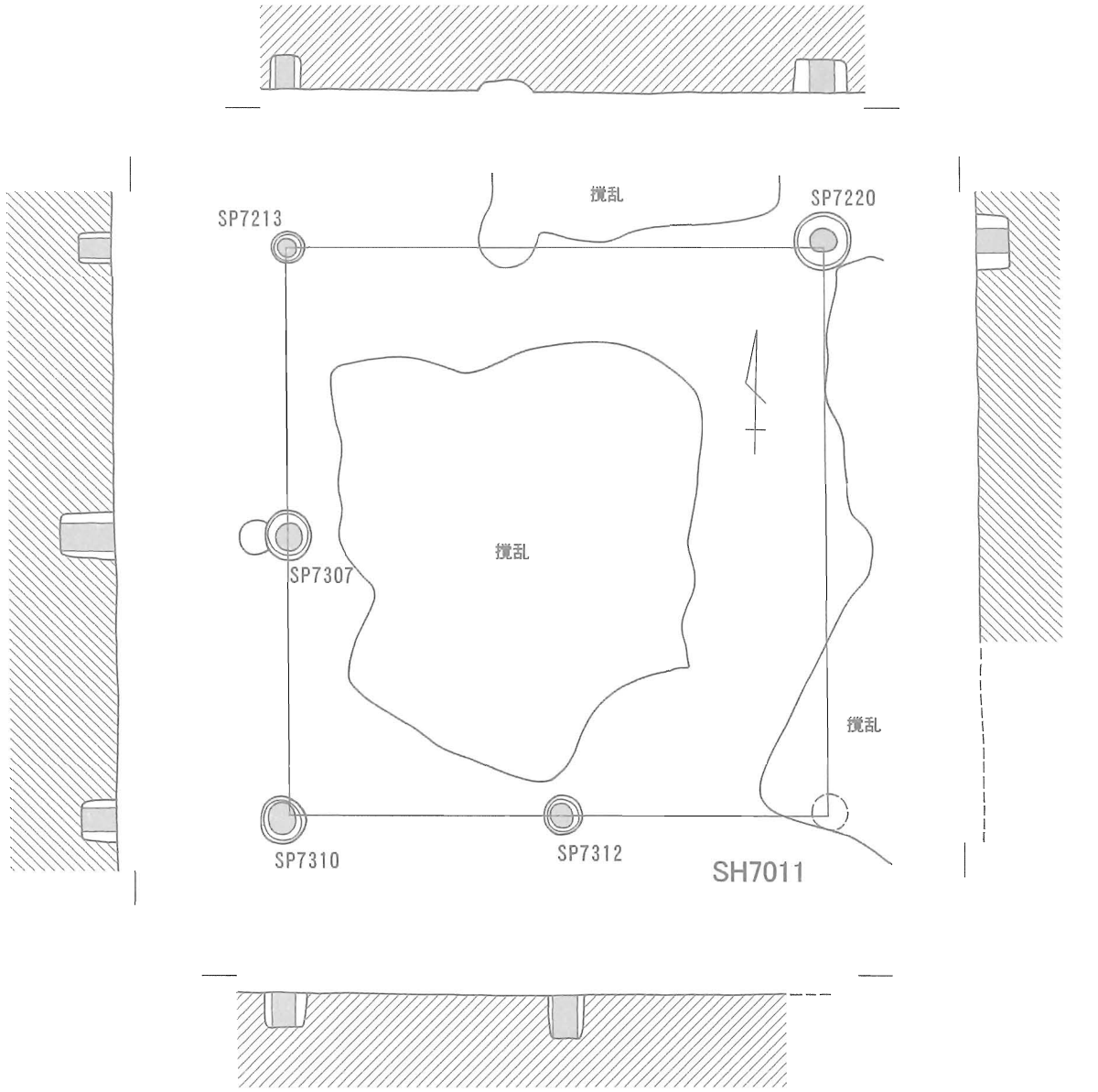


図 198　SH7011 実測図

部の強い横ナデにより体部中央が屈曲する。1486 と 1487 は伊勢鍋で、それぞれ SP7037 柱痕跡埋土と SP7060 埋土から出土した口縁部の破片である。1486 は二次焼成が顕著であり、1487 は外面に煤が付着することから、ともに使用痕が確認できる。1488 は SP7037 の埋土から出土した青磁碗である。内面に陰刻文がみられ、明緑灰色の釉が内外面に施されるが、小片であることから型式は不明である。この他山茶碗、土師質土器などの小片が出土しているが、上記遺物と同様に 12 世紀後葉～ 13 世紀代の様相を示すことから、遺構はこの時期に営まれたものと考えられる。

SH7014（図 197・200）

７区中央付近の G 25 ～ 26 区にあり、Ⅴ群建物群南側の西端に位置する。梁行２間、桁行３間の掘立柱建物で、建物規模は梁行 3.5 m、桁行 5.9 m である。南北方面の軸が N － 12° － W の南北棟である。柱間は北側の梁行が 1.9 m、1.6 m、南側では妻柱が確認されていない。桁行は東側が北から 2.1 m、1.9 m、

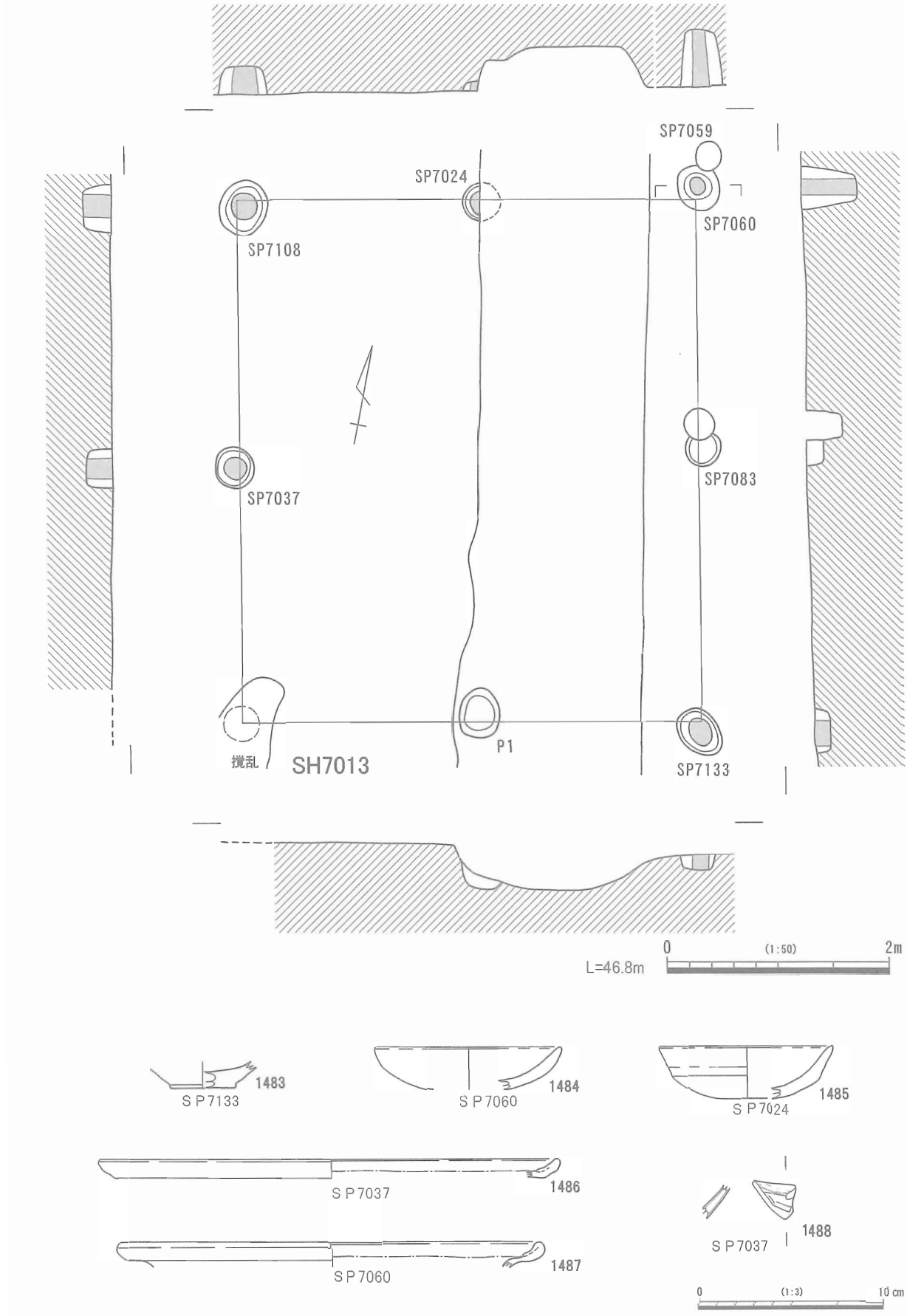


図199　SH7013実測図・出土遺物

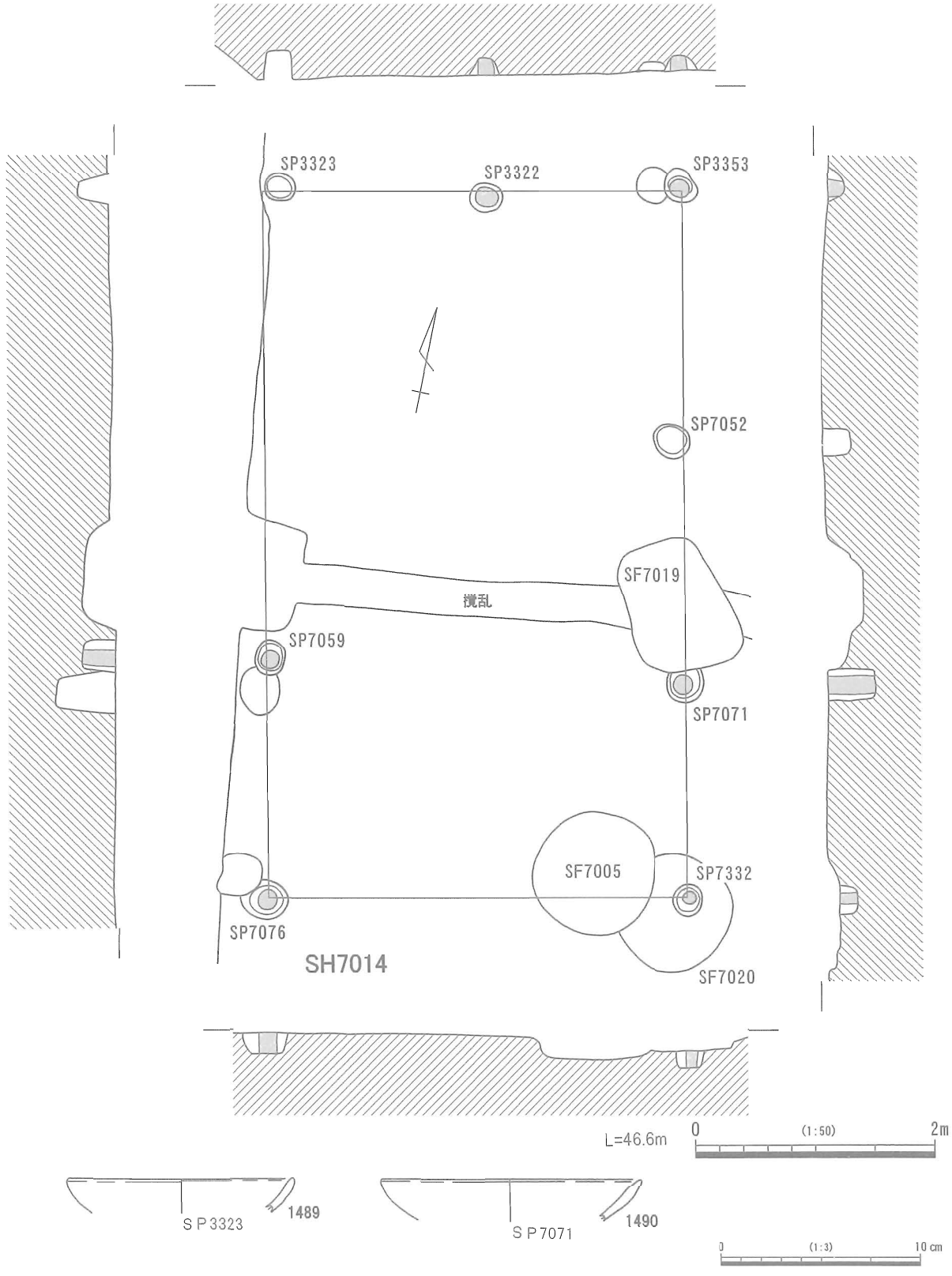


図 200　SH7014 実測図

1.9 m、西側では攪乱のため一部不明だが、南端のみ2.0 mと確認できる。柱痕跡は6つの柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.09 m～0.16 mである。柱穴の平面形も円形であり、直径は0.22 m～0.36 m、深さは0.14 m～0.40 mとばらつきが大きい。なお南東部の柱穴であるSP7071はSF7019に、SP7332はSF7020にそれぞれ切られている。

図化した遺物はいずれも土師質土器の皿で、1489はSP3323の埋土、1490はSP7071柱痕跡埋土からそれぞれ出土した。表面が摩滅しており、調整は不明である。この他、柱穴の掘方埋土から土師質土器の皿や鍋類の小片が出土しているが、図示した遺物同様、いずれも12～13世紀代の遺物とみられる。よって、建物の年代もその時期と推定される。

SH7016（図197・201）

7区中央のH 26区にあり、V群建物群南西端に位置する。その南東隅に位置する。南北1間、東西2間分か確認されるが、南側が攪乱で削られているため正確な規模は不明である。建物規模は確認できる範囲で南北1.8 m、東西3.6 mである。南北方向の軸はN－16°－Wである。柱間は北辺が西から1.7 m、1.9 m、西辺の残存部分で1.6 mを測る。柱痕跡は4ヵ所の柱穴で確認することができた。柱痕跡の平面形は円形で、直径0.13 m～0.22 mである。掘方の平面形も円形であり、直径は0.23 m～0.45 m、深さは0.15 m～0.50 mとばらつきがあるが、底面の標高は46.1 m前後である。

遺物は小破片のため図示できないが、SP7276の柱痕跡埋土から土師質土器の破片が1点出土している。形状は明確でないが、内彎形内耳鍋の体部破片とみられる。根拠には乏しいが、この遺物を手がかりとすれば、遺構は16世紀代の建物と推定される。

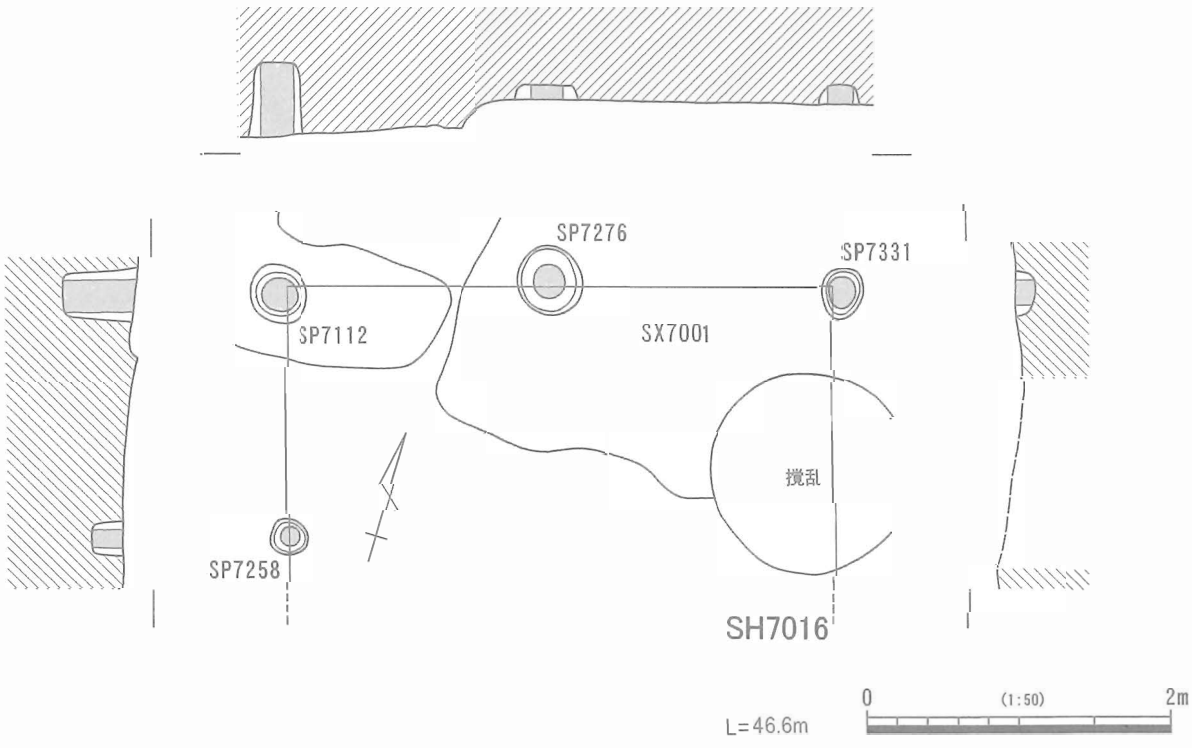


図201　SH7016実測図

表 18　掘立柱建物一覧表（中世・近世）

遺構名	間数	構造	方向	軸	規模 (m)	面積 (㎡)	梁行柱間 (cm)		桁行柱間 (cm)		柱痕跡規模 (cm)	柱穴規模 (cm)	備考
SH1001	1×2	側柱	東西	N－7°－W	2.75 × 3.9	10.7	275		195/195		－	－	
SH1002	1×2	側柱	正方形	N－9°－W	4.6 × 4.6	21.2	230		230/230		－	－	
SH1003	1×3	側柱	東西	N－11°－W	4.8 × 6.2	29.8	480		200/210/210		18～28	38～60	
SH1004	1×3	側柱	東西	N－5°－W	4.20 × 7.20	30.2	420		180/270/270	210/210/200	25	24～50	
SH2001	2×2	側柱	東西	N－13°－W	2.90 × 5.60	16.2	140/150		270/290		－	－	
SH2002	2×3	側柱	東西	N－6°－W	3.80 × 6.80	25.8	180/200	210/170	210/210/260	220/220/240	－	－	
SH2004	1×2	側柱	南北	N－2°－W	4.00 × 3.75	15	375		200/200	210/190	－	－	
SH2005	1×2	側柱	正方形	N－6°－W	3.70 × 3.70	13.7	370		190/180	180/190	－	－	
SH2006	2×2	側柱	東西	N－2°－W	4.60 × 7.40	34	230/230		370/370		24	22～52	
SH2007	2×3	側柱	東西	N－5°－W	4.00 × 6.00	24	200/200		210/195/195	180/210/210	－	－	
SH2008	2×3	側柱	東西	N－3°－W	5.60 × 6.40	35.8	260/300		200/225/215	210/200/230	16～18	34～48	
SH2009	1×3	側柱	東西	N－14°－W	2.40 × 3.60	8.6	240		120/130/110	110/140/110	－	－	
SH3001	1×3	側柱	東西	N－5°－W	4.00 × 5.40	21.6	400		210/	220/190/130	14～20	22～34	
SH3002	1×2	側柱	東西	N－20°－W	4.00 × 4.40	17.6	400		220/220		16	25～40	
SH3003	2×2	側柱	東西	N－14°－W	4.70 × 6.20	29.1	240/230		310/310		12～20	24～36	
SH3004	1×2	側柱	南北	N－14°－W	3.90 × 4.20	16.4	390		210/210		19～24	34～38	
SH4001	1×2	側柱	東西	N－8°－W	3.40 × 4.30	14.6	340		220/210		12～16	28～32	
SH6004	2×	－	－	N－6°－W	4.20 ×	－	210/210		215/		18～24	33～44	
SH6005	1×3	側柱	東西	N－2°－W	3.20 × 5.50	17.6	320		180/190/180		16～18	26～40	
SH6006	2×3	側柱	南北	N－8°－W	3.60 × 5.60	20.2	150/210		200/180/180		16～22	32～50	
SH6007	2×4	側柱	東西	N－7°－W	4.80 × 8.00	38.4	250/230		220/160/240/180	190/180/200/230	18～26	28～40	
SH6008	2×4	側柱	東西	N－8°－W	3.60 × 7.40	26.6	180/180		180/180/200/180		18～24	40～52	
SH6010	2×4	側柱	南北	N－6°－W	4.6 × 7.3	33.6	290/170		230/170/170/160		15～20	34～50	
SH6011	2×4	側柱	南北	N－10°－W	3.90 × 6.20	24.2	190/200	200/190	150/160/150/160	170/160/150/140	16～24	33～56	
SH6015	1×2	側柱	東西	N－7°－W	3.80 × 3.60	13.7	380		170/190		18～27	33～46	
SH7002	2×3	側柱	南北	N－12°－W	3.90 × 6.20	24.2	185/185		220/210/150		14～23	28～38	
SH7003	2×3	側柱	南北	N－12°－W	3.90 × 6.20	24.2	185/185		220/210/150		14～23	26～38	
SH7006	2×3	総柱	東西	N－2°－W	4.60 × 7.20	33.1	230/230		240/240/240		15～22	34～46	
SH7008	2×5	側柱	東西	N－2°－W	5.60 × 9.40	52.6	280/280		190/180/190/190/190		18～30	40～50	
SH7009	1×2	側柱	正方形	N－1°－E	4.60 × 4.60	21.2	460		230/230		14～18	24～38	
SH7011	2×2	側柱	南北	N－1°－W	4.10 × 4.60	18.9	220/190		230/230		14～22	32～42	
SH7013	2×	－	－	N－11°－W	3.90 ×	－	200/190		210/200/		14～20	22～40	
SH7014	2×3	側柱	南北	N－12°－W	3.50 × 5.90	20.6	190/160		210/190/190		9～16	22～36	
SH7016	2×	－	－	N－16°－W	3.60 ×	－	170/190		160/		13～22	23～45	

表 19　掘立柱建物出土遺物観察表

No.	遺構名	柱穴	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1445	SH1003	SP1039	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.5)				口縁部 1/12		灰白	
1446	SH1003	SP1086	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/5		灰白	
1447	SH1003	SP1026	土師質土器	皿		非ロクロ	(15.5)				口縁部 1/10		灰白	
1448	SH1003	P4	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/10		灰白	
1449	SH1003	P3	土師質土器	皿		ロクロ	7.5	3.9	2.5		2/3		橙	煤付着
1450	SH1003	P4	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.8)				口縁部 1/32		灰白	
1451	SH1003	P1	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂	後Ⅳ並行	(28.0)				口縁部 1/48		橙 / 淡黄	
1452	SH1003	P3	貿易陶磁	白磁碗		Ⅴ類	(14.5)				口縁部 1/16	白磁	明緑灰 / 灰白	
1453	SH1004	SP1091	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.2)				口縁部 1/8		灰黄	
1454	SH2001	SP2045	中世陶器	片口鉢	常滑	5 型式	(26.2)				口縁部 1/16		灰白	
1455	SH2001	SP2049	土師質土器	伊勢鍋			(25.2)				口縁部 1/20		にぶい橙	二次焼成
1456	SH2002	SP2119	山茶碗	小皿	湖西	Ⅱ	(9.4)				口縁部 1/10		にぶい黄橙	
1457	SH2004	SP2265	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)	(6.0)	2.1		1/3		灰白	
1458	SH2004	SP2265	施釉陶器	卸皿	瀬戸美濃	後Ⅳ新	(14.4)	(7.6)	(3.15)		1/3		浅黄 / 灰白	煤付着、二次焼成
1459	SH2006	SP2290	土師質土器	羽釜			(14.8)				口縁部 1/10		浅黄橙	
1460	SH2006	SP2290	近世磁器	丸碗	肥前						体部片		灰白	
1461	SH2008	SP2335	土師質土器	皿		ロクロ	(9.6)				口縁部 1/16		橙	
1462	SH2008	SP2339	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部 1/8		灰白	
1463	SH2008	SP2339	土師質土器	内耳鍋		くの字形					頸部 1/20		淡黄	
1464	SH2009	SP2360	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部 1/12		灰白	
1465	SH6006	SP6259	土師質土器	皿		ロクロ	(10.2)	5.4	2.65		1/3		にぶい橙	SP6260 と接合
1466	SH6007	SP6242	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)	(8.9)			口縁～底部 1/6		灰白	
1467	SH6007	SP6262	土師質土器	皿		非ロクロ		(4.8)			底部 1/2		浅黄橙	
1468	SH6015	SP6497	山茶碗	碗	湖西		(15.0)				口縁部 1/16		灰白	
1469	SH6015	SP6480	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.3)				口縁部 1/20		灰白	外面に煤付着
1470	SH7006	SP7605	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/8		灰白	
1471	SH7008	SP7637	須恵器	坏身			(14.0)				口縁部 1/20	自然釉	黒 / 灰白	
1472	SH7008	SP7634	山茶碗	碗	湖西		(15.4)				口縁部 1/24		灰白	
1473	SH7008	SP7637	山茶碗	小皿	湖西		(9.4)				口縁部 1/18		灰白	
1474	SH7008	SP7637	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.6)	(4.2)			口縁～底部 1/4		灰白	
1475	SH7008	SP7642	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)				口縁部 1/8		灰白	
1476	SH7008	SP7715	土師質土器	皿		ロクロ	(7.0)				口縁部 1/3		浅黄橙	
1477	SH7008	SP7698	土師質土器	皿		ロクロ	(10.7)				口縁部 1/8		にぶい黄橙	
1478	SH7008	SP7634	土師質土器	皿		ロクロ	(11.8)				口縁部 1/4		浅黄橙	
1479	SH7008	SP7698	土師質土器	皿		ロクロ		5.0			底部		にぶい橙	
1480	SH3002	SP3149	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.45)	(7.6)	(2.1)		口縁～底部 1/10		灰白	煤付着
1481	SH3002	SP3163	土師器	坏			(11.0)				口縁～体部 1/12		淡黄	
1483	SH7013	SP7133	山茶碗	小皿	湖西	Ⅱ		(3.5)			底部 1/2		灰白	
1484	SH7013	SP7060	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.8)				口縁部 1/5		灰白	
1485	SH7013	SP7024	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)	(5.2)	(2.8)		口縁～底部 1/10		灰白	
1486	SH7013	SP7037	土師質土器	伊勢鍋			(24.6)				口縁部 1/20		灰白	煤付着、二次焼成
1487	SH7013	SP7060	土師質土器	伊勢鍋			(22.4)				口縁部 1/18		灰白	外面に煤付着
1488	SH7013	SP7037	貿易陶磁	青磁碗	不明	不明					体部片	青磁	明オリーブ灰 / 灰白	
1489	SH7014	SP3323	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.2)				口縁部 1/18		灰白	
1490	SH7014	SP7071	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)				口縁部 1/20		灰白	

６．小穴

明確な建物の柱穴として認識することはできなかったが、調査区内では多くの小穴が検出されている。以下、出土遺物のあった小穴を中心に調査区ごとに記述する。

１区の小穴（図 159・202、図版 76）

SP1037 はＤ６区に位置し、SH1003 の北に隣接する。埋上内から渥美湖西産山茶碗（1491）が出土した。高台下部には砂目痕が残る。底部外面には糸切り痕と墨書が見られるが、文字の判読は困難である。Ⅲ－２期の製品であろう。

SP1046 はＤ６区に位置し、SH1004 の北東に隣接する。埋土内から伊勢鍋の口縁部破片（1493）が出土した。口縁は水平方向に開き、端部は約１cm を折り返す。二次焼成が顕著である。13 世紀代のものであろう。

SP1236 はＩ６区に位置し、SH1010 の南に隣接する。埋土から染付の底部破片（1492）が出土した。体部外面と高台内が施釉され、内面は無釉である。肥前産磁器の御神酒徳利であろう。

SP1340 は１区東端部となるＧ６区に位置し、SD1008 の北に隣接する。埋土内検出面付近から擂鉢の口縁部破片（1496）が出土した。口縁は折り返され、内面の突帯が巡る。古瀬戸後Ⅳ期並行の古志戸呂製品で、15 世紀中～後葉の製品である。

SP1345 は１区東端部となるＧ６区に位置し、SD1001 の南に隣接する。SD1011 と重複するが、切合い関係は不明である。埋土内から内耳鍋の口縁部（1495）が出土した。口縁端部を外側に折り返す、くの字形内耳鍋である。15 世紀中葉～ 16 世紀代に位置づけられよう。

SP1378 はＣ６区に位置し、SH1003 の柱穴Ｐ２に切られている。埋土内下層から伊勢鍋の口縁部破片（1494）が出土した。形態は 1493 とほぼ同様で、同じく 13 世紀代のものと見られる。

２区の小穴（図 165・168・203、図版 69）

SP2036 はＤ 13 区に位置し、SH2007 の南に隣接する。埋土内から擂鉢の体部破片（1506）が出土した。内面には櫛目が最大 10 本の直線的な櫛目が刻まれ、やや軟質に焼成されている。古瀬戸後Ⅳ期並行の古志戸呂製品である。

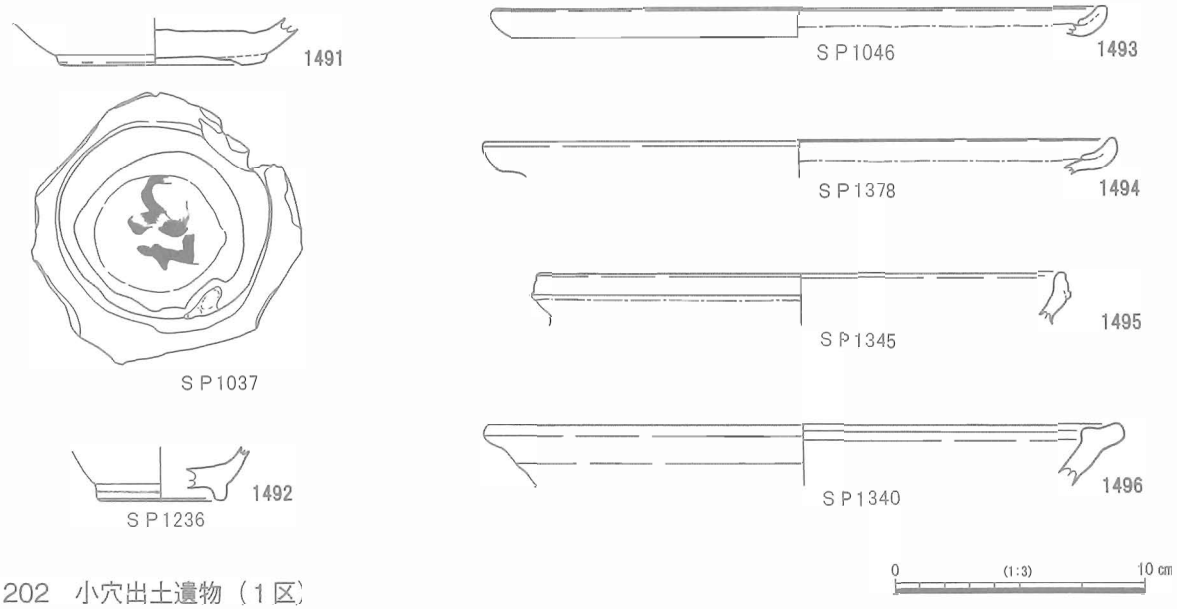


図 202　小穴出土遺物（１区）

SP2131はＤ８区に位置し、SH2002の南に隣接する。埋土内から山茶碗底部の破片（1502）が出土した。底部内面はかなり摩滅し、煤が付着する。渥美湖西産Ⅱ期の製品であろう。

SP2190はＥ８区に位置し、SH2002の南西に隣接する。検出面で出土した1501は渥美湖西産の山茶碗で、Ⅲ－１期の製品とみられる。

SP2436はＣ10区に位置する。埋土内から山茶碗の底部破片（1503）が出土した。内面の摩滅が顕著である。形状は1502に近く、同じく渥美湖西産Ⅱ期の製品であろう。

SP2129はＤ８区に位置し、SH2002の東に隣接する。埋土内から青磁碗の体部破片（1500）が出土した。体部外面に鎬蓮弁文が施され、龍泉窯系Ｂ１類に分類される。

SP2275はＢ12区に位置し、SH2005の南東に隣接する。埋土内の検出面付近から土師質土器皿(1499)が出土した。内面はナデにより滑らかに仕上げられ、板ナデの痕跡も残っている。外面は未調整で指頭痕が残る非ロクロ成形品である。16世紀代のものと考えられる。

SP2292はＣ12区、SH2006と重なる位置にある。埋土内からは内耳鍋（1504）が出土した。体部下部から口縁部にかけて残存しており、外面には全体的に煤が厚く付着しているが、内面には認められない。体部外面には指頭痕が残る。内彎形に分類される内耳鍋で、16世紀頃に位置づけられる。

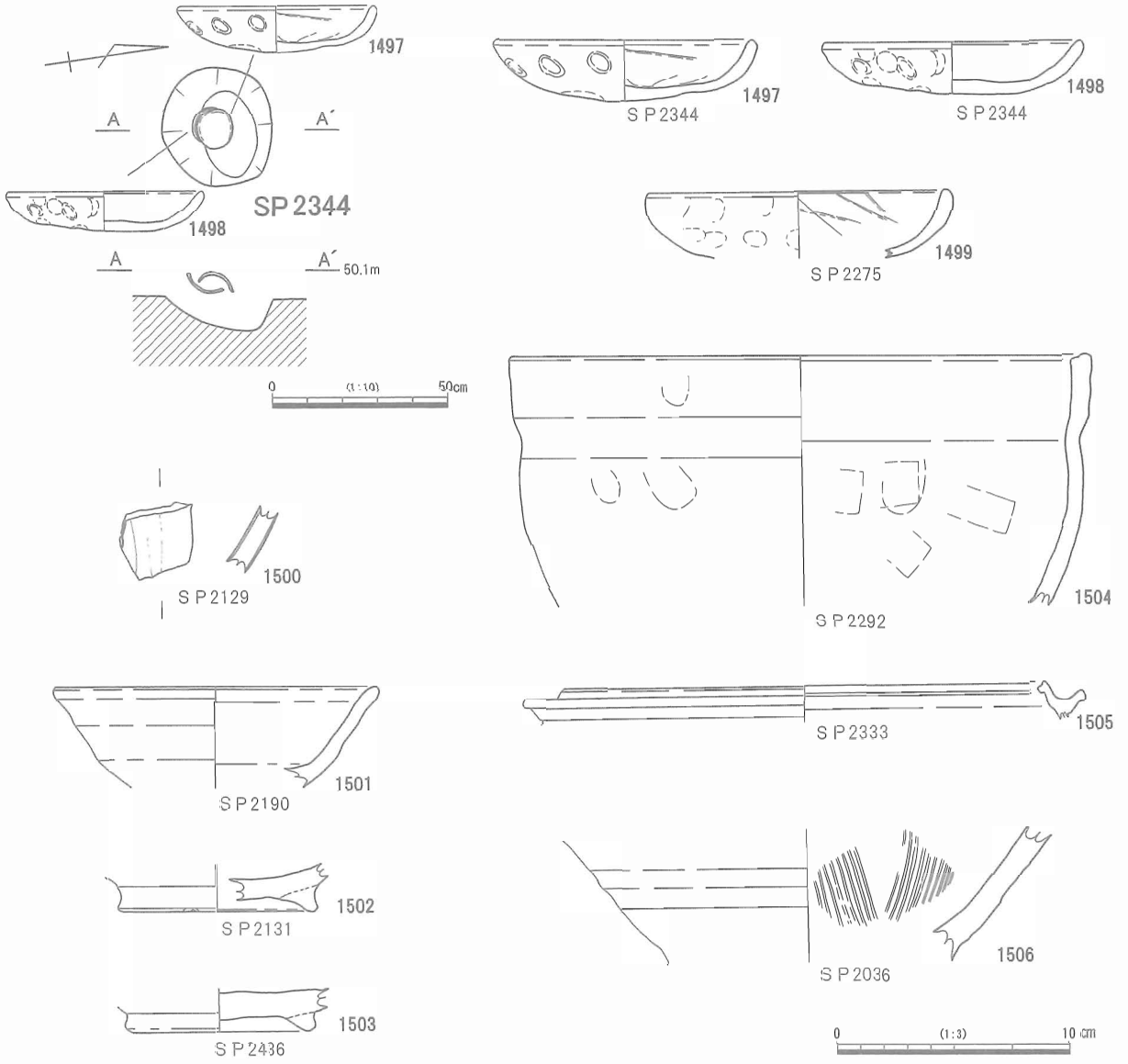


図203　小穴実測図・出土遺物（２区）

SP2333はC 14区に位置する。SH2008の南に隣接し、SF2018を切っている。埋土内検出面付近から羽釜の口縁部破片（1505）が出土した。口縁部上部を強くナデられることで端部は内側に突出し、内外面には煤が付着する。15世紀前葉～中葉の製品と考えられる。

SP2344（図203）はB 14区に位置し、SH2008の北に隣接する。1497と1498土師質土器の皿が２点出土している。出土状況は1497が上で逆位、1498が下で正位となる合わせ口で重ねられており、底面からは12～13cm程度浮いたほぼ検出面での出土であった。２点ともほぼ完形で、何らかの埋納行為によることは明らかであり、地鎮に伴う可能性が高いように思われる。皿はいずれも非ロクロ成形品で、内面はナデ調整、外面は未調整で指頭痕が残る、やや扁平な形状を示すものである。体部外面を巡るように、楕円形の施文具を押しつけた文様が８～10ヵ所ほど認められるが、摩滅によりやや不鮮明である。遺物の年代は16世紀後葉～17世紀前葉の所産とみられる。

３区の小穴（図193・204）

SP3034は３区北西隅となるC 20区に位置し、SF3008の東に隣接する。山茶碗底部から口縁部にかけての破片（1507）が出土した。底部内面と口縁端部には煤が付着しており、高台はほとんどが欠損している。渥美湖西産Ⅲ－２期の製品であろう。

SP3035は３区北西隅のC 20区に位置し、SF3008の東に近接する。埋土内より土師質土器の内耳鍋（1520）が出土した。内彎形内耳鍋の内耳部分で、被熱痕が観察される。16世紀代の製品であろう。

SP3115はF 23区に位置し、SH3002の西に隣接する。埋土内から土師質土器の皿（1511・1512）と、瀬戸美濃産施釉陶器皿の底部破片（1510）が出土した。1511と1512は非ロクロ成形品で内面はナデ調整が施され、外面は未調整で指頭痕が残る。いずれも底面付近から出土している。1510は灰釉の内禿皿である。底部内面は露胎となっている。大窯４段階前半の製品で、16世紀末葉頃に比定される。前述の土師質土器皿（1511・1512）も同時期のものであろう。

SP3218はE 23区に位置し、SH3002の北に隣接する。柱痕跡埋土から山茶碗の口縁部（1508）が出土した。渥美湖西産Ⅲ－１期頃の製品であろう。

SP3123はF 23区に位置する。埋土内から土師質土器内耳鍋（1522）が出土した。くの字形内耳鍋で、口縁端部を外側に折り返して仕上げられる。15世紀後半～16世紀前半頃の製品であろう。

SP3125は３区南端のG 23区に位置する。柱痕跡埋土より土師質土器の皿（1513）が出土した。底部から口縁部にかけての破片で、非ロクロ成形品である。16世紀後葉～17世紀代の製品であろう。

SP3137と3197はF 23区に位置し、いずれもSH3002の南に隣接する。埋土から土師質土器の皿（1514）の破片がそれぞれ出土し、接合した。器壁は薄く、浅いつくりの非ロクロ成形品である。内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。16世紀後葉～17世紀代のものであろう。

SP3157はF 24区に位置し、SH3002の東に隣接する。埋土下層から土師質土器の皿（1515）が出土した。非ロクロ成形品で、全体的に摩滅している。内面には煤が付着しているため、灯明皿として使用されたとみられる。16世紀後葉～17世紀代の製品であろう。

SP3174はF 24区に位置し、SH3004と重複している。埋土下層から土師質土器の皿（1516）が出土した。胎土は密で、灰白色を呈する。16世紀後葉～17世紀代の非ロクロ成形品であろう。

SP3182はF 24区に位置し、SH3002の北に隣接する。柱痕跡埋土から土師質土器の皿（1517）が出土した。胎土は灰白色である。16世紀後葉～17世紀代の非ロクロ成形品であろう。

SP3199はG 24区に位置し、SH3004の南に隣接する。掘方埋土内から土師質土器の皿（1519）が出土した。器壁はやや厚く、浅いつくりである。16世紀後葉～17世紀代の非ロクロ成形品であろう。

SP3190はG 24区に位置する。掘方埋土から土師質土器内耳鍋（1521）が出土した。内彎形に分類さ

れる製品で、口縁部断面は方形となり外面には煤が付着する。16 世紀代に比定される。

SP3273 はG 24 区に位置し、SF3020 の北に隣接する。柱痕跡埋土から土師質土器皿の底部破片（1518）が出土した。ロクロ成形品で、底部外面には糸切り痕及びスノコ状圧痕が残る。13 世紀代の製品とみられる。

SP3318 は３区東部のＦ 25 区に位置し、SF3019 に隣接する。埋土内から、志戸呂窯産の擂鉢（1523）が出土した。底部から口縁部にかけての残存しており、口縁内面はナデによる窪みが巡っている。全面に薄く鉄釉が施され、内面の櫛目の単位は 10 本となる。古瀬戸後Ⅳ期並行に位置づけられる古志戸呂製品で、15 世紀中葉～後葉に比定される。

SP3324 はG 26 区に位置し、SH7014 の北に隣接する。埋土から山茶碗の体部から口縁部にかけての破片（1509）が出土した。渥美湖西産のⅢ－１期の製品であろう。

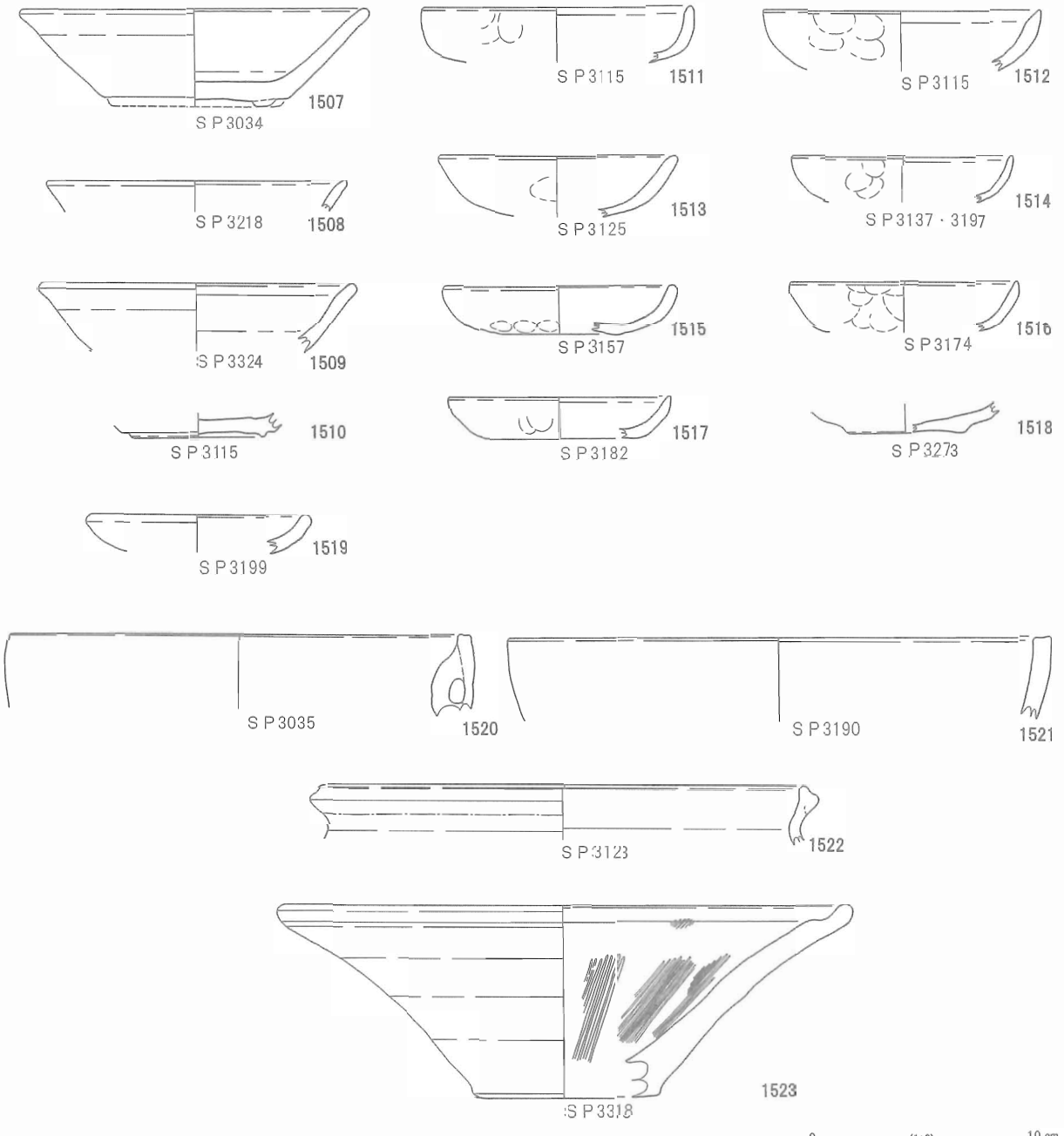


図 204　小穴出土遺物（３区）

４区の小穴（図 205）

SP4013 は４区北東隅のＢ 17 区に位置する。埋土内から土師質土器内耳鍋が複数出土した。いずれもくの字形内耳鍋に分類されるものである。1524 は口縁端部を外側に折り返したうえ、上端部外側をナデによって凹ませる。体部外面下部には煤が付着し、体部外面に指頭痕が残るが、上部はナデとハケ調整がみられ、下部にはヘラケズリの痕が明瞭に残る。1525 と 1526 は口縁端部を折り返さず、上端部外側をナデで凹ませる。いずれも煤は付着していない。1524・1526 は検出面付近から、1525 は比較的下層から出土している。遺物の年代は 15 世紀後半 16 世紀前半にかけてのものであろう。

SP4025 はＣ 16 区に位置する。埋土底面付近から土師質土器の皿（1527）が出土した。非ロクロ成形品で、口縁部の横ナデによって体部の中程で小さく段を持つ。13 世紀代の製品であろう。

SP4175 は４区南部のＥ 16 区に位置し、古代の遺構 SB4001・SF4015 の東側を切る位置にある。埋土内の比較的上層から土師質土器の内耳鍋（1528）が出土した。内彎形内耳鍋で、外面には厚く煤が付着し、内面も黒く変色している。16 世紀代の製品であろう。

５区の小穴（図 205）

SP5018 はＨ２区に位置し、SH5004 の西に隣接する。埋土から土師質土器の皿（1529）が出土した。厚手のロクロ成形品で、復元口径 15.2cm を測る比較的大型なものである。15 世紀後半～ 16 世紀前半頃に比定されよう。

６区の小穴（図 176・206）

SP6240 はＨ 13 区に位置し、SH6006 の南に近接する。掘方埋土内から土師質土器の皿（1530）が出土した。ロクロ成形によるもので、底部には糸切痕が明瞭に残る。口径は 7.9cm と小型品である。15 世紀後半～ 16 世紀前半のものであろう。

SP6245 はＨ 12 区に位置し、SH6007 の北側に隣接する。SP6246 に切られている。柱痕跡埋土内から

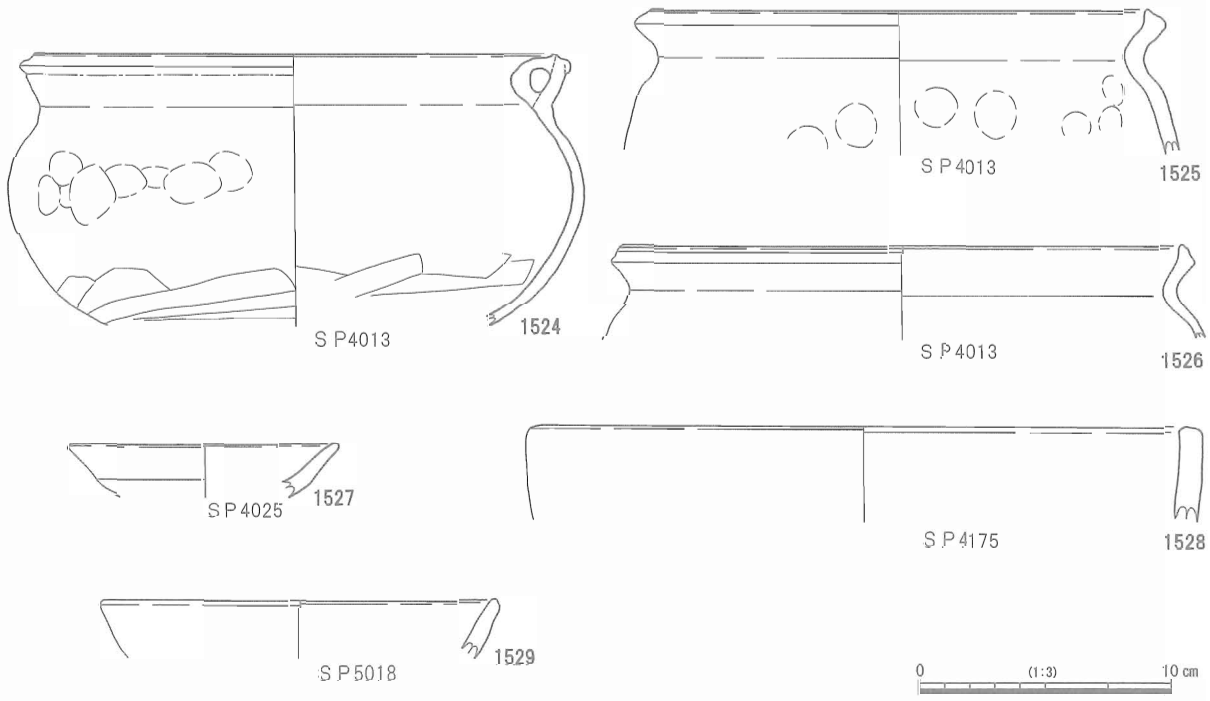


図 205　小穴出土遺物（４・５区）

土師質土器の皿（1531）が出土した。非ロクロ成形によるもので、内面には板ナデ調整が施され、指頭痕が残る外面は未調整である。16 世紀後葉～ 17 世紀代の製品であろう。

SP6263 はＨ 12 区に位置し、SH6007 の柱穴 SP6262 に切られている。埋土内から土師質土器の皿（1534）が出土した。非ロクロ成形によるもので、口縁部を外反させながら横ナデを施す。15 世紀後半～ 16 世紀前半のものであろう。

SP6271 はＨ 13 区に位置し、SH6008 の南側に隣接する。柱痕跡埋土下層から 1532・1533 が出土した。いずれも非ロクロ成形の土師質土器皿で、内面はナデ調整が施され、外面未調整である。1533 は薄手でやや浅いつくりとなる。16 世紀後葉～ 17 世紀代のものであろう。

SP6387 はＨ 13 区に位置し、SH6010 の西に隣接する。SP6386 に切られている。掘方埋土から土師質土器の内耳鍋（1535）が出土した。口縁部上部外側を強いナデによって凹ませる特徴があり、内外面にはわずかに煤が付着する。内彎形か半球形に分類される小型品である。16 世紀代の製品であろう。

７区の小穴 (図 185・197・207)

SP7038 はＨ 25 区に位置し、SH7013 と重なる場所にある。掘方理土から青磁の体部破片（1536）が出土した。龍泉窯系Ｂ１類の碗と見られ、外面に鎬連弁文が見られる。13 世紀中葉～ 14 世紀前葉に比定される。

SP7048 はＧ 26 区に位置し、SH7014 と重なる。掘方埋土より片口鉢の口縁部（1537）が出土した。口縁端部は肥厚して丸く仕上げられ、薄く自然釉がかかる。 尾張産の製品で、常滑５型式に位置づけられるものであろう。

SP7054 はＧ 26 区に位置し、SH7014 の東に隣接する。掘方埋土から山茶碗口縁部の破片（1538）が出土した。渥美湖西産Ⅲ期の製品であろう。

SP7062 はＧ 25 区に位置し、SH7014 と重複する。掘方埋土より山茶碗の口縁部破片（1539）が出土した。渥美湖西産Ⅲ期の製品であろう。

SP7063 はＧ 25 区に位置し、SH7014 の中央付近にある。柱痕跡埋土から土師質土器の皿（1540）が出土した。薄く浅いつくりの非ロクロ成形品である。16 世紀後葉～ 17 世紀代のものであろう。

SP7069 はＧ 26 区に位置し、SH7014 と重なる。埋土から小碗の底部破片（1541）と土師質土器皿の体部破片（1542）が出土した。1541 は渥美湖西産Ⅰ－２期の製品で、12 世紀中葉のものであろう。1542 は底部がやや厚い碗状を呈し、口縁部を横ナデすることで、体部中程が段を持つ。13 世紀代のものであろう。

SP7088 はＨ 25 区に位置し、SH7014 南東隅の柱穴 SP7332 の南にある。埋土から片口鉢（1544）が出土した。尾張産（知多）のもので、体部内面は使用による摩滅が顕著である。口縁部は肥厚して丸く仕上げられ、上面には沈線が巡る。常滑６ａ型式に位置づけられよう。

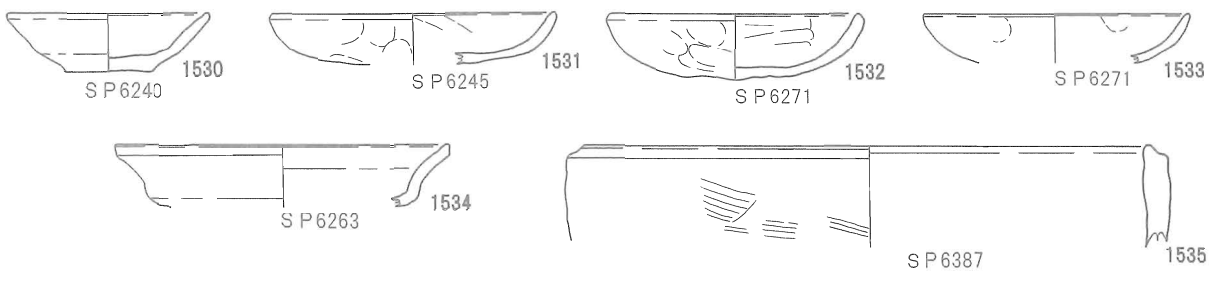


図 206　小穴出土遺物（６区）

SP7089はH 26区に位置し、SH7014南東に近接する。掘方埋土から土師質土器の伊勢鍋（1545）が出土した。口縁外面には煤が厚く付着する。13世紀代の製品である。

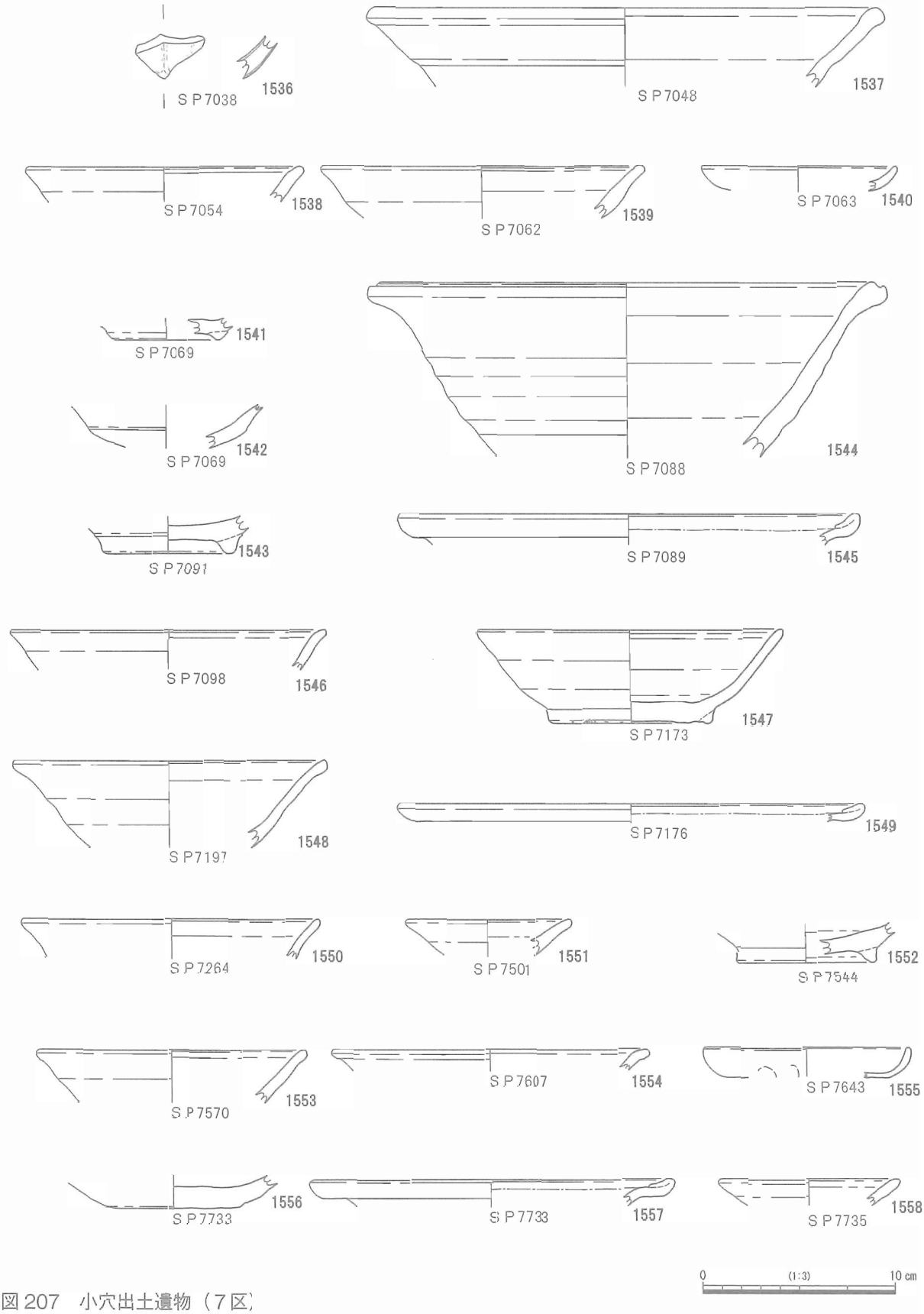


図207　小穴出土遺物（7区）

SP7091はH 24区に位置し、SH7016の北に近接する。SP7090に切られている。掘方埋土から山茶碗底部の破片（1543）が出土した。高台下部には籾殻痕が残る。渥美湖西産Ⅱ期の製品と見られる。

SP7098はH 26区に位置し、SH7016の東に近接する。掘方埋土から山茶碗の口縁部破片（1546）が出土した。やや焼成が悪いようで、軟質である。渥美湖西産の製品である。

SP7173はG 25区に位置し、SH7010の東に隣接する。埋土から山茶碗（1547）が出土した。底部外周を巡るような低い高台の下部には籾殻痕が残る。渥美湖西産Ⅲ－２期に位置づけられる13世紀中葉の製品である。

SP7176はH 25区に位置し、SH7015の北に隣接する。埋土内から土師質土器の伊勢鍋（1549）が出土した。口縁部の破片で、外面に煤の付着が認められるが、全体的に摩滅が顕著である。13世紀代の製品であろう。

SP7197はH 24区に位置し、SP7196を切っている。掘方埋土から山茶碗（1548）が出土した。口縁部は緩やかに外反する。渥美湖西産Ⅱ期の製品とみられる。

SP7264は７区南端のＩ 25区に位置する。掘方埋土から山茶碗の口縁部破片1550が出土した。渥美湖西産の製品である。

SP7501はG 24区に位置する。柱痕跡埋土から渥美湖西産の小皿の口縁部破片（1551）が出土した。

SP7544はＩ 21区に位置し、SH7009南東隅の柱穴SP7541の南に隣接する。柱痕跡埋土から山茶碗の底部破片（1552）が出土した。高台下部の欠損が多く、籾殻痕等は確認できない。渥美湖西産Ⅱ期の製品と見られ、12世紀後葉に位置づけられよう。

SP7570はH 21区に位置し、SH7009の柱穴SP7569に切られる。掘方埋土からは山茶碗の口縁部破片（1553）が出土した。口縁端部には薄くオリーブ黄色の自然釉がかかる。渥美湖西産Ⅲ期頃の製品であろう。

SP7607はＩ 20区に位置し、SH7006東辺の柱穴SP7608の東に位置する。掘方埋土から山茶碗口縁部の破片（1554）が出土した。口縁端部には漆と見られる付着物がある。渥美湖西産の製品である。

SP7643はG 20区に位置し、SH7002西に隣接する。埋土内から土師質土器の皿（1555）が出土した。非ロクロ成形品で、体部から口縁を屈曲させ、ほぼ垂直に立ち上がらせる。16世紀後葉～17世紀代にかけてのものであろう。

SP7733はH 24区に位置する。掘方埋土から土師質土器の口縁部破片（1557）が、柱痕跡埋土から山茶碗底部破片（1556）がそれぞれ出土した。1557は伊勢鍋で、外面には煤が厚く付着する。13世紀代の製品であろう。1556は湖西渥美産Ⅲ－２期の製品と見られるが、高台は欠損している。焼成がやや不良で摩滅が激しい。

SP7735はH 24区に位置し、SH7010南西に近接する。柱痕跡埋土から小皿の口縁部破片（1558）が出土した。渥美湖西産の製品である。

８区の小穴（図208）

SP8050は８区東端F 33区に位置する。掘方埋土から土師質土器内耳鍋（1559）が出土した。口縁端部は外側に折り返し、上部外側をナデによって窪ませている。内外面には煤が全く付着していない。くの字形に分類される15世紀後半～16世紀前半の製品であろう。

SP8074は８区東端のG 34区に位置する。埋土内下層から土師質土器の皿（1560）が出土した。非ロクロ成形品で、摩滅しているが、口縁部にわずかに横ナデの痕跡が認められる。13世紀代の製品であろう。

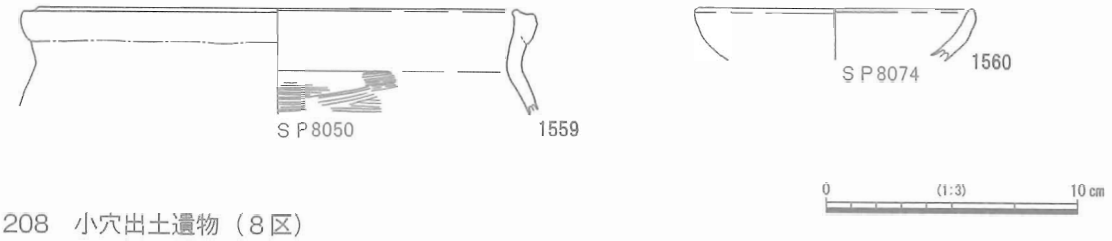


図 208　小穴出土遺物（８区）

表 20　小穴出土遺物観察表

No.	遺構名	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径(cm)	残存率	釉薬	色調	備考
1491	SP1037	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				7.0	底部のみ		灰白	墨書
1492	SP1236	近世磁器	神前徳利	肥前					(4.8)	体部～底部 1/3		灰白	
1493	SP1046	土師質土器	伊勢鍋			(24.0)				口縁部 1/28		にぶい橙	
1494	SP1378	土師質土器	伊勢鍋			(24.8)				口縁部 1/24		にぶい黄橙	
1495	SP1345	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.7)				口縁部 1/20		灰白	
1496	SP1340	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂	後Ⅳ並行	(25.0)				口縁部 1/20		にぶい赤褐	
1497	SP2344	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	11.05	7.5	2.6		ほぼ完形		灰白	
1498	SP2344	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	11.0	6.5	2.25		ほぼ完形		灰白	
1499	SP2275	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(12.9)				口縁部 1/6		灰白	
1500	SP2129	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部片	青磁	オリーブ黄 / 灰白	鎬連弁文
1501	SP2190	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(13.8)				口縁部 1/4	自然釉	灰白	
1502	SP2131	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(8.1)	底部 1/6		灰白	
1503	SP2436	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(7.5)	底部 1/4		灰白	
1504	SP2292	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(24.9)				口縁部 1/6		浅黄橙	外面に煤付着
1505	SP2333	土師質土器	羽釜			(20.8)				口縁部一部		にぶい褐	内外面に煤付着
1506	SP2036	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂	後Ⅳ並行					体部 1/8		橙	
1507	SP3034	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２	(15.5)		4.4		1/14		灰白	煤付着
1508	SP3218	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(13.4)				口縁部 1/20		灰白	
1509	SP3324	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(14.0)				口縁部 1/8		灰白	
1510	SP3115	施釉陶器	内禿皿	瀬戸美濃	大窯４前				(5.8)	底部 1/3	灰釉	浅黄 / にぶい橙	
1511	SP3115	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(12.2)				口縁部 1/8		灰白	
1512	SP3115	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(12.6)				口縁部 1/3		灰白	
1513	SP3125	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.6)				口縁部 1/28		灰白	
1514	SP3137	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/6		にぶい黄橙	SP3197 と接合
1515	SP3157	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.4)	(5.3)	(2.2)		口縁～底部 1/3		灰白	内面に煤付着
1516	SP3174	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/8		灰白	
1517	SP3182	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.0)	(6.8)	(1.85)		口縁～底部 1/11		灰白	
1518	SP3273	土師質土器	Ⅲ		ロクロ		(5.4)			底部 1/5		灰白	
1519	SP3199	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(9.8)				口縁部 1/10		灰白	
1520	SP3035	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(20.0)				口縁部 1/14		灰白	被熱痕
1521	SP3190	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(24.6)				口縁部 /12		灰白	外面に煤付着
1522	SP3123	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.7)				口縁部 1/28		灰白	
1523	SP3318	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂	後Ⅳ並行	(25.4)	(8.55)	(8.75)		口縁～底部 1/4		橙 / 浅黄橙	
1524	SP4013	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.6)				口縁～体部 1/6		灰白	外面に煤付着
1525	SP4013	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.6)				口縁～体部 1/6		灰白	
1526	SP4013	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(22.2)				口縁部 1/20		灰白	
1527	SP4025	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.3)				口縁部 1/10		灰白	
1528	SP4175	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(25.2)				口縁部 1/24		灰黄褐	外面に煤付着
1529	SP5018	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(15.2)				口縁部 1/16		浅黄橙	
1530	SP6240	土師質土器	Ⅲ		ロクロ	(7.9)	(3.3)	2.3		1/4		灰白	
1531	SP6245	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(11.2)	(9.6)			口縁～底部 1/8		灰白	
1532	SP6271	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(9.8)	(4.0)	2.6		1/8		灰白	
1533	SP6271	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.5)				口縁部 1/10		浅黄橙	
1534	SP6263	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(13.0)				口縁～体部 1/10		浅黄橙	
1535	SP6387	土師質土器	羽釜			(15.0)				口縁部 1/10		浅黄橙	煤付着
1536	SP7038	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部片	青磁	明緑灰 / にぶい橙	
1537	SP7048	中世陶器	片口鉢	常滑	５型式	(26.0)				口縁部 1/16	自然釉	灰白	
1538	SP7054	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ	(14.0)				口縁部 1/20		灰白	
1539	SP7062	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ	(16.4)				口縁部 1/14	外面・自然釉	灰黄	
1540	SP7063	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/5		灰白	
1541	SP7069	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－２				(5.2)	底部 1/4		灰白	
1542	SP7069	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ					体部 1/5		灰白	
1543	SP7091	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(6.1)	底部 1/3		灰白	
1544	SP7088	中世陶器	片口鉢	尾張	6a 型式	(25.4)				口縁～体部 1/6	自然釉	灰白	
1545	SP7089	土師質土器	伊勢鍋			(23.6)				口縁部 1/28		灰白	外面に煤付着
1546	SP7098	山茶碗	碗	湿美湖西		(16.2)				口縁部 1/12		灰白	
1547	SP7173	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２	(15.6)		4.8	(8.0)	1/3		灰白	
1548	SP7197	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	(16.0)				口縁～体部 1/8		灰白	
1549	SP7176	土師質土器	伊勢鍋			(23.9)				口縁部 1/26		にぶい黄橙	外面に煤付着
1550	SP7264	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.4)				口縁部 1/16	自然釉	灰白	
1551	SP7501	山茶碗	小皿	湿美湖西		(8.2)				口縁部 1/8		灰白	
1552	SP7544	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(6.9)	底部 1/4		灰白	
1553	SP7570	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ	(13.6)				口縁部 1/14	自然釉	灰白	
1554	SP7607	山茶碗	碗	湿美湖西		(16.2)				口縁部 1/20		灰白	漆付着
1555	SP7643	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.5)				口縁部 1/8		灰白	
1556	SP7733	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２		6.9			底部		灰白	
1557	SP7733	土師質土器	伊勢鍋			(18.4)				口縁部 1/20		にぶい黄橙	外面に煤付着
1558	SP7735	山茶碗	小皿	湿美湖西		(9.0)				口縁部 1/12		灰白	
1559	SP8050	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(18.8)				口縁部 1/20		灰白	
1560	SP8074	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.9)				口縁部 1/16		浅黄	

7．井戸

SE1001（図 209 ～ 211、図版 30・54）

1 区北東隅のＢ 6 区に位置する。平面形状は円形で、直径は上面で 2.1 m、深さは検出面から 2.1 m である。かなりの急傾斜で掘り込まれており、井戸側などの下部施設はなく、素掘り井戸である可能性が高い。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、29 層に分層される。最上層の 1 層、下層の 27 ～ 29 層には 1 ～ 3 ㎝程度の礫が認められ、中層の 4・7・11・12・18・19 層などでは褐色土のブロックを含んでいる。比較的水平に堆積する下層から、褐色ブロックの混じる中層までは人為的に埋められ、レンズ状堆積となる上層は自然埋没していったと考えられる。

遺構内からは山茶碗類と土師質土器の皿が出土している。1561・1562 は山茶碗、1563・1564 は小皿で、いずれも渥美湖西産の製品である。1561 は底部から体部が直線的なつくりである。1562 の高台には籾殻痕が多く見られる。1563 と 1564 は小皿である。1563 の方がやや口径が大きい。これら山茶碗類は 1562 がⅡ期に遡る可能性があるが、おおむねⅢ－ 1 ～ 2 期の製品とみられる。1565 ～ 1587 は非ロクロ成形による土師質土器の皿である。すべて復元径であるが、1565 ～ 1572 は口径 8 ～ 9 ㎝の小型品、

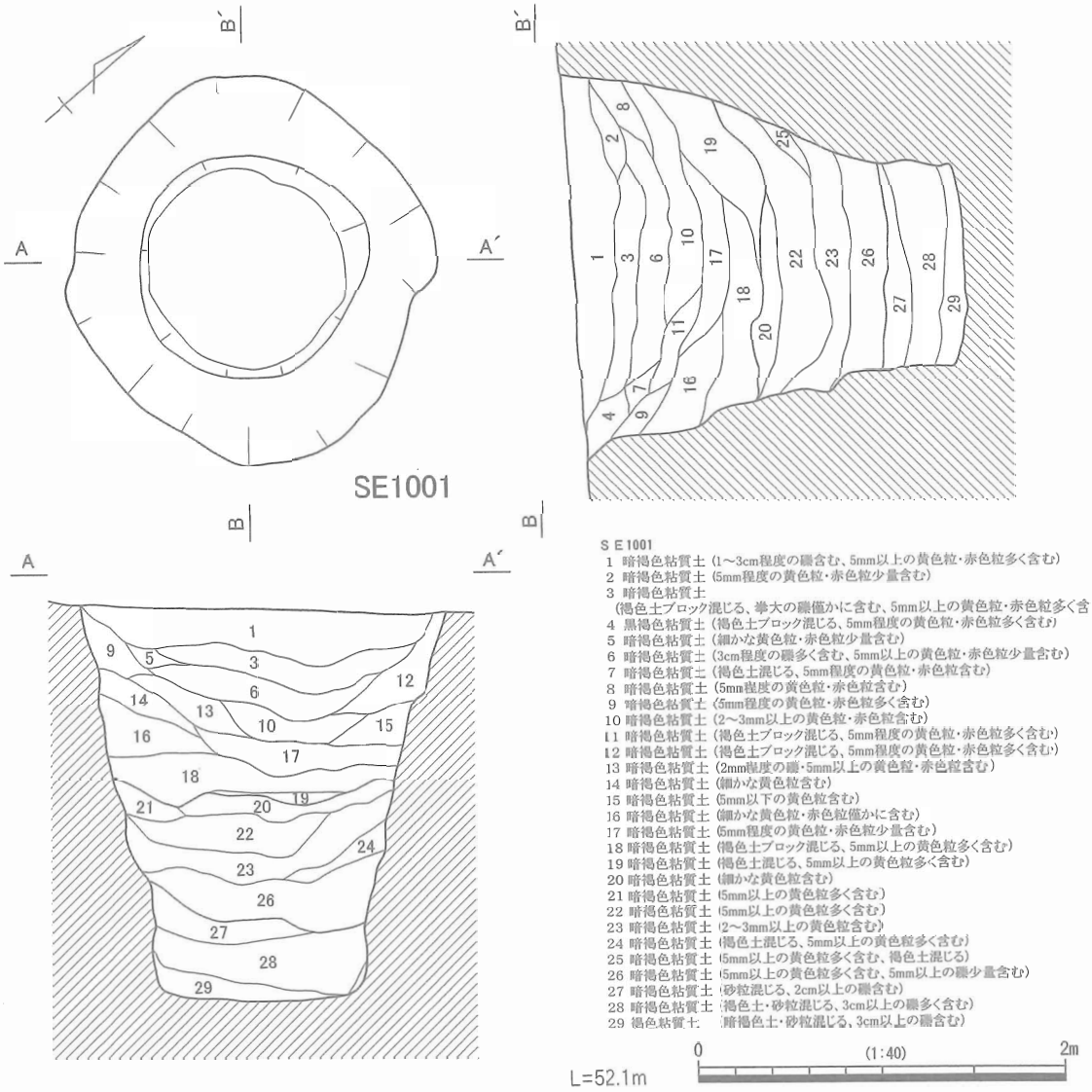


図 209　SE1001 実測図

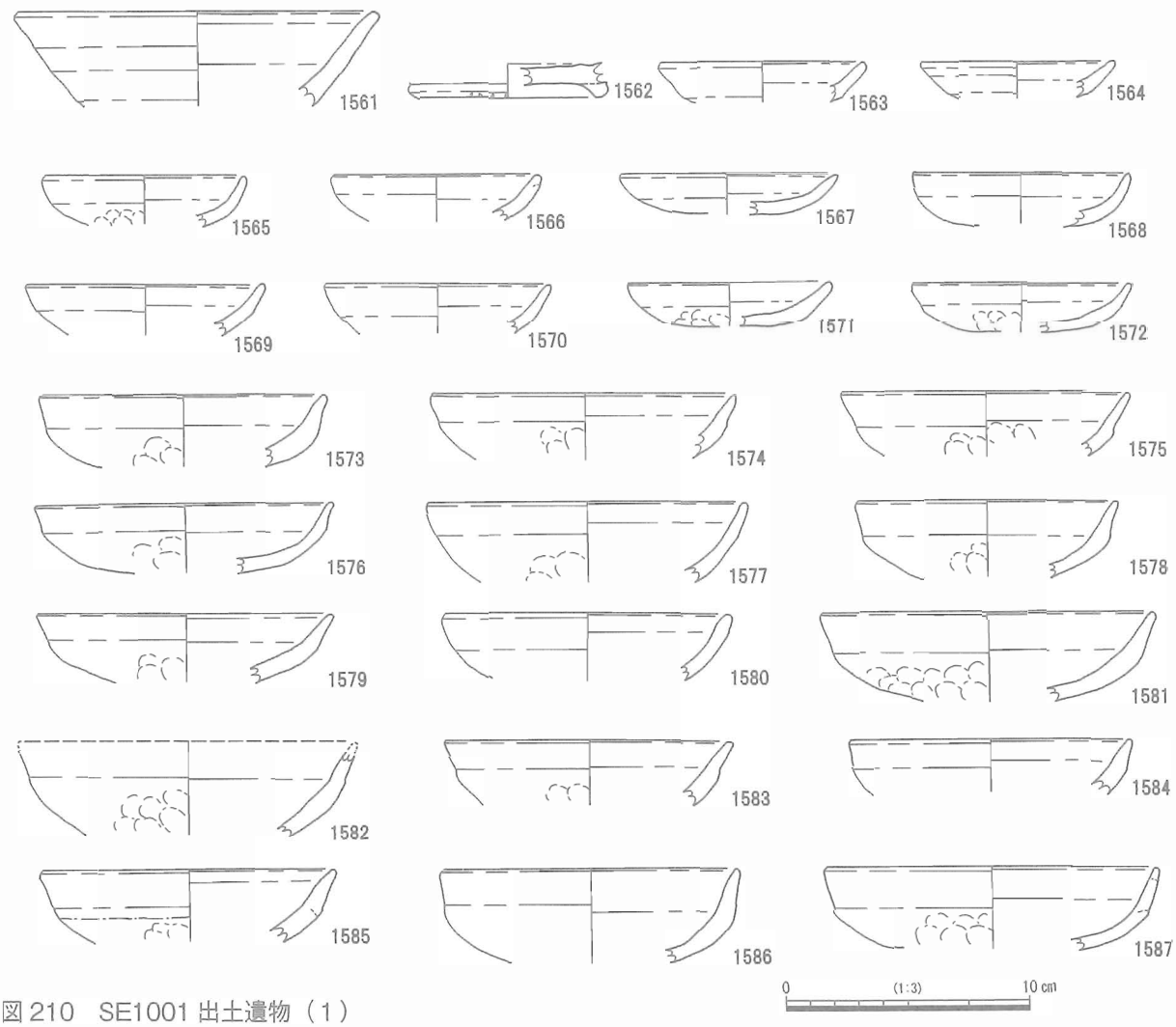


図 210　SE1001 出土遺物（1）

1573 ～ 1587 は口径 11 ～ 12 ㎝の中型品に分けられる。1565 ～ 1572 の小型品は摩滅しているものも多いが、体部は内面ナデ調整、外面は指頭痕が残る粗い調整で、口縁部は横ナデ調整が行われる。体部から口縁にかけて丸く仕上げられるものが大半であるが、1572 は口縁部の強い横ナデによって体部に段がつくり出される。1568 は底部内面、1566 は底部外面に煤が付着している。1573 ～ 1587 の中型品も小型品同様、体部は内面ナデ調整、外面は指頭痕が残る粗い調整で、口縁部は横ナデ調整が行われるつくりである。多くの製品は、口縁部の強い横ナデによって体部中程に段がつくり出されており、口縁部はほぼそのまま引き出されている。1580 と 1577 は口縁部を横ナデで調整しているが、体部に段をつくり出さず、丸く仕上げられている。1582 は内外面に煤が付着している。

1588 ～ 1594 は瓦である。1588 ～ 1590 は平瓦で、1588 は縦長斜格子＋横線、1589 と 1590 は横長斜格子＋横線の叩き目が認められる。凸面には離れ砂の痕跡があり、1588 は凹面に布目が残る。1591 ～ 1594 は丸瓦である。1592･1593 の凹面には吊り紐の痕跡が確認され、1594 の凹面には離れ砂が付着する。1591・1593 は二次焼成を受けており、変色が著しい。

山茶碗は埋土上層から出土しており、土師質土器皿は 1565・1566・1573 ～ 1577 が埋土上層、1567・1568・1578 ～ 1582 が埋土中層、1569 ～ 1572・1583 ～ 1587 が埋土下層というように、埋土上～下層全てにわたって出土している。遺物の年代は 13 世紀前～後葉におさまることから、井戸の廃絶年代はそれ以降の時期と考えられる。

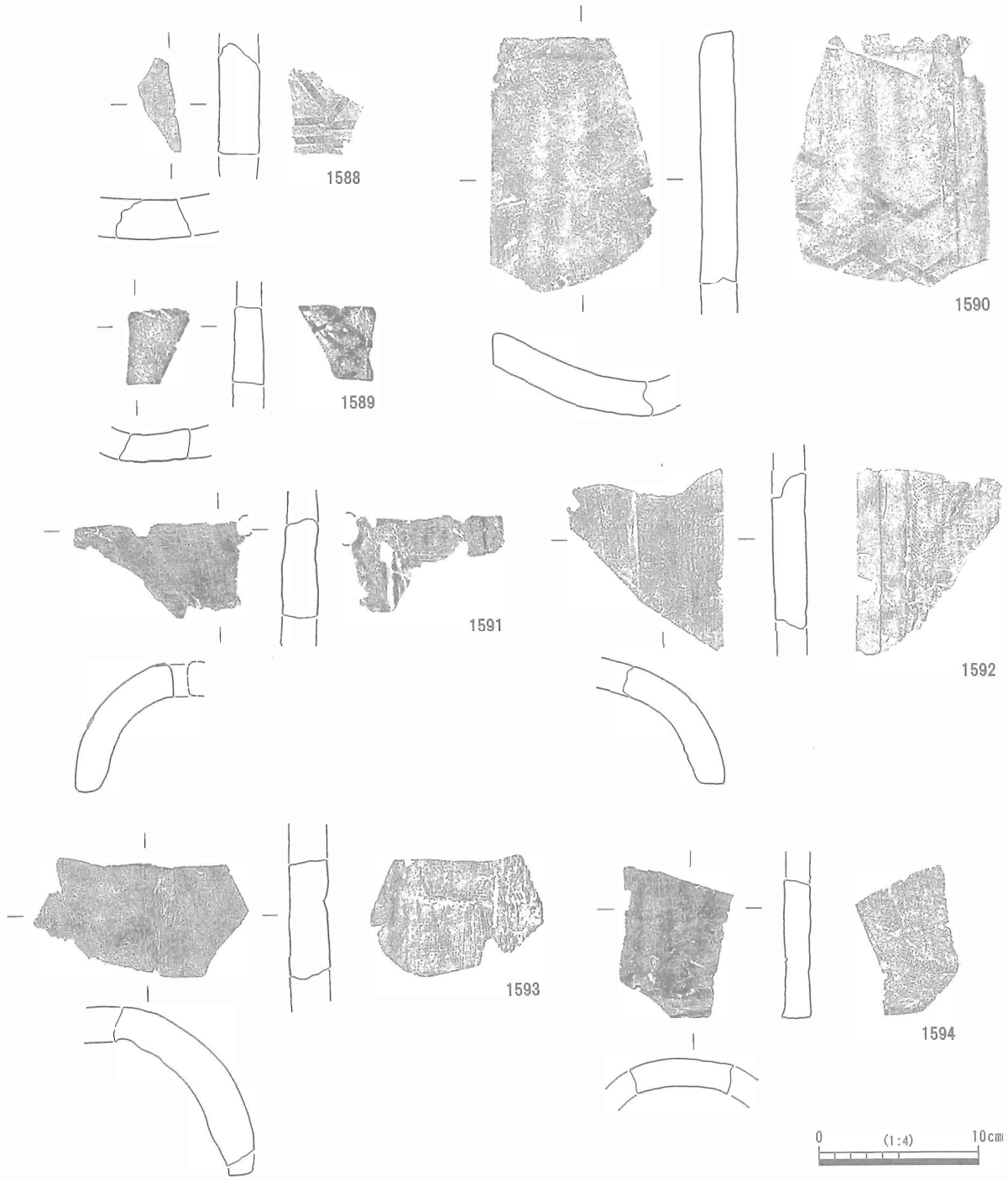


図211　SE1001 出土遺物（2）

SE3001（図212、図版30・83）

3区中央の大溝南側、E23区に位置する。平面形状はほぼ円形で、直径は1.1m、検出面からの深さは1.9mで、ほぼ円筒形に掘り込まれている。埋土は16層以上に黄土ブロックが多く含まれ、暗褐色粘質土との互層となる。17層以下はやや還元した灰褐色粘質土を主体とし、黄土ブロックをほとんど含まない。よって、17層以下は井戸使用中～廃絶までに自然に堆積し、16層以上は最上層以外ほぼ水平に堆積する状況などもあり、人為的に埋められたと考えられる。井戸側などの下部施設はなく、土層堆積状況からもそうした知見は得られなかったため、素掘りであった可能性が高い。

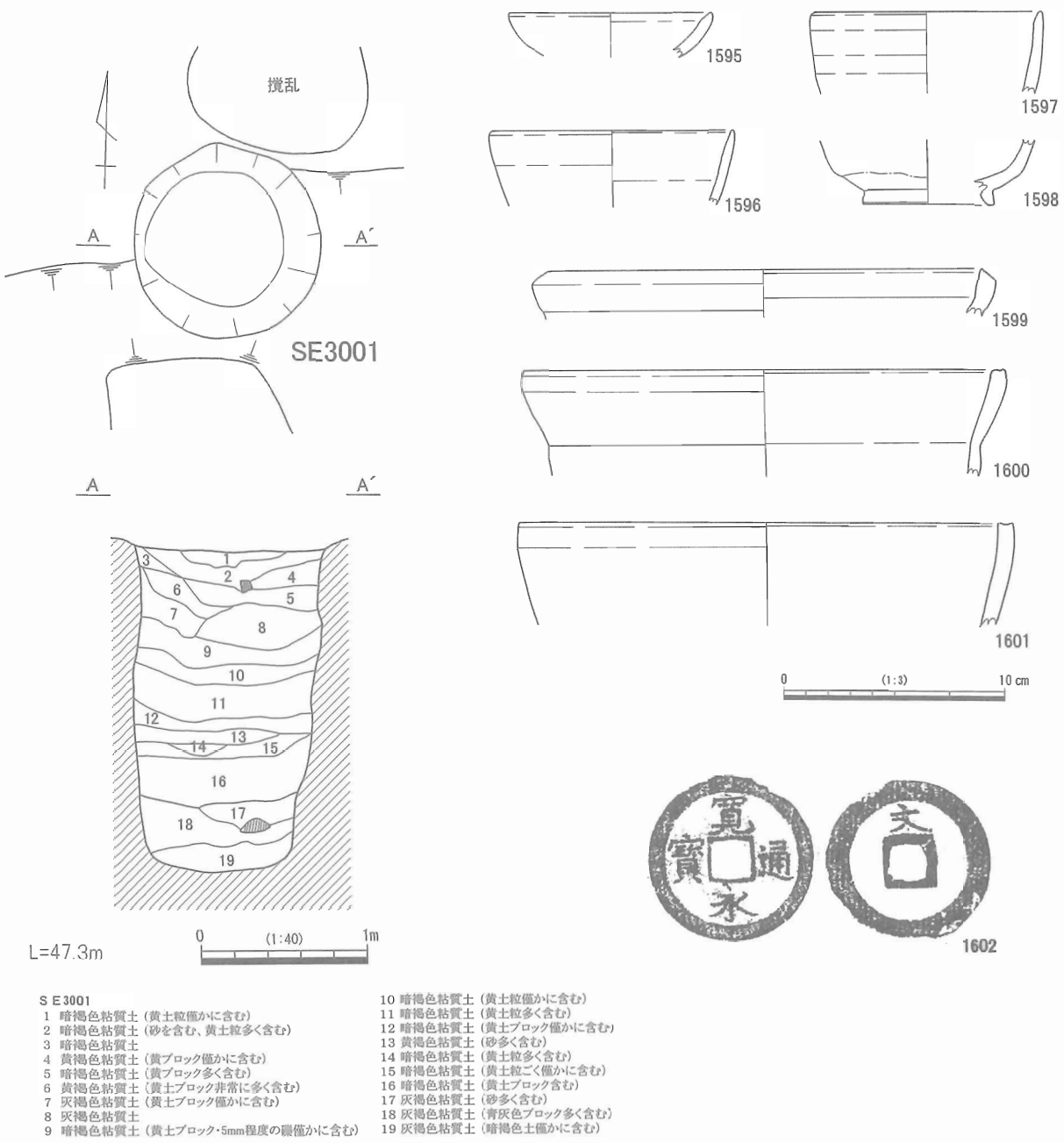


図 212　SE3001 実測図・出土遺物

遺物のほとんどは 16 層からの出土である。 1595 は土師質土器の皿で、非ロクロ成形の内外面にナデ調整が施される。1599 ～ 1601 は土師質土器の内耳鍋である。1599 はくの字形の口縁部の破片で、外面に煤が付着している。1600 と 1601 は内彎形内耳鍋で、1600 は口縁端部が断面方形で、上面が強いナデによりわずかにくぼむ。1601 は体部と口縁の境が明確でないが、半球形ほど湾曲していないため、内彎形に範疇のものであろう。いずれも外面に煤が付着するが、内面は若干黒く変色するのみである。1596 ～ 1598 はいずれも近世美濃産の碗である。口縁部破片の 1597、底部破片 1598 は直接接合を確認できないが、同一個体の鉄釉丸碗である。底部外面から高台部分を除き、褐色の鉄釉が掛けられる。登窯３～４小期に位置づけられよう。1596 は尾呂茶碗の口縁部の破片である。登窯５～６小期に位置づけられる。1602 は寛永通宝で、検出面付近から出土した。裏面に「文」の文字があり、寛文年間に鋳

造されたことを示す。全体的に被熱の痕跡が残っていた。このほか山茶碗、土師質土器の破片が 11 点出土したが小片であり、図化することはできかった。

人為的な埋土と考えられる 16 層から 17 世紀中葉～後葉に位置づけられる 1597・1598 が出土していることから、廃絶はその時期と考えられる。最上層で 17 世紀末～ 18 世紀初頭の 1596 が出土していることから、その頃までには完全に埋没していたのであろう。

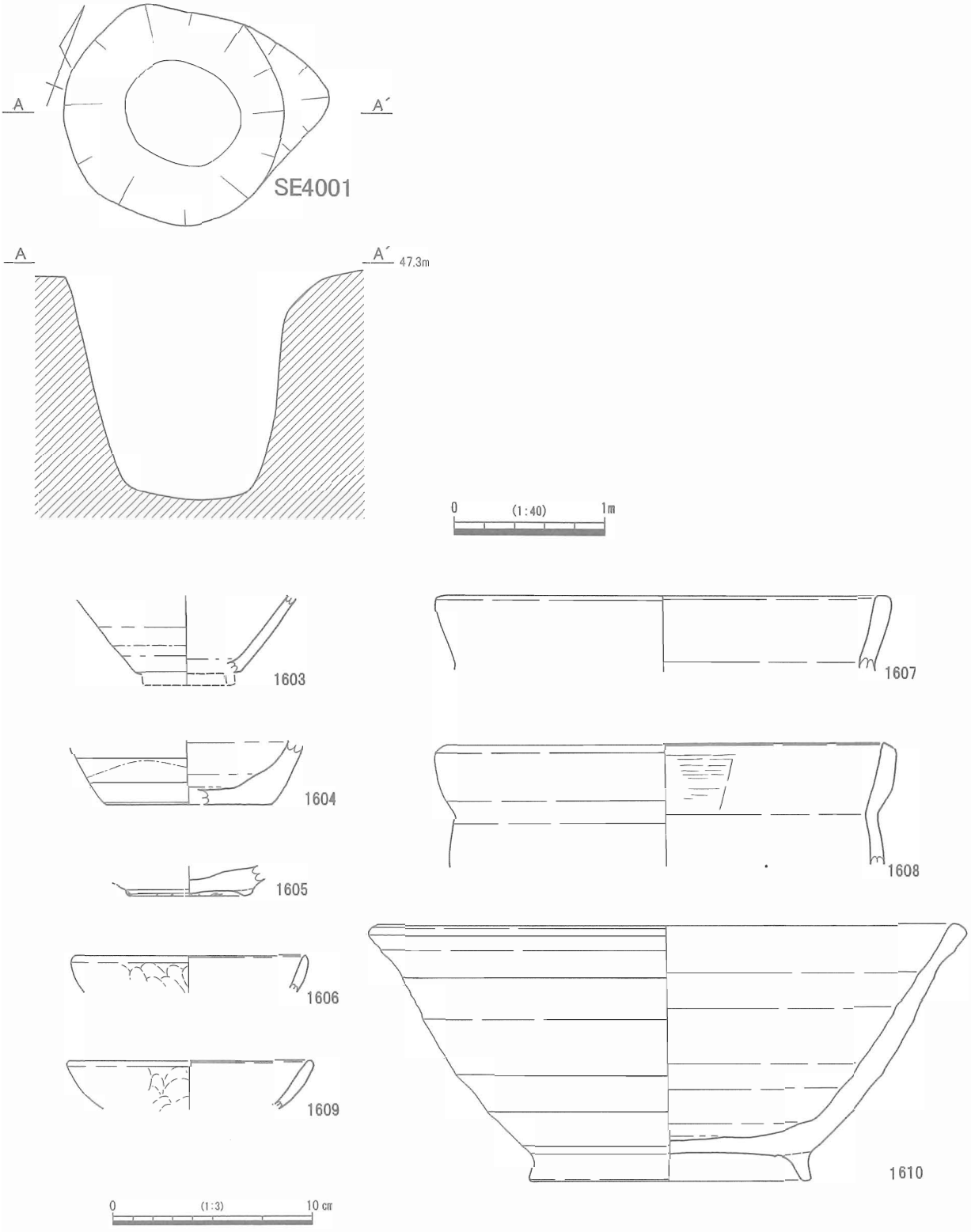


図 213　SE4001 実測図・出土遺物（1）

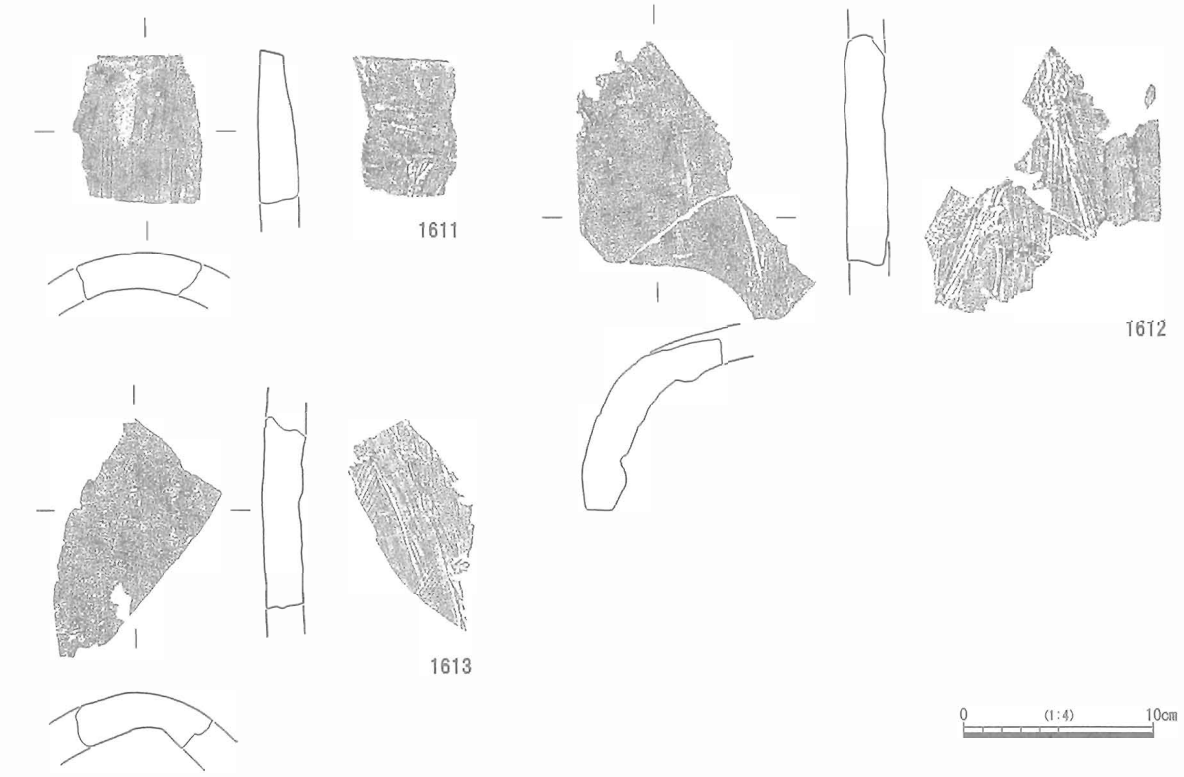


図214　SE4001出土遺物（2）

SE4001（図213～215、図版30・82）

4区中央のE17区に位置し、大溝SD2001の底面において検出した。本遺構は大溝よりも新しいため、本来は大溝埋土上層から掘り下げられていたようであるが、大溝と本遺構の埋土が極めて似通っていたために、大溝を下層まで掘り下げた段階での検出となってしまった。平面形状はやや不定型な円形で、直径は1.45 m、検出面からの深さは1.5 mである。大溝の検出面からの深さは3.0 mほどになる。井戸側などの下部施設は確認されていないため、素掘りの井戸であった可能性が高い。堆積状況がはっきりしないため、明確ではないが、1610の片口鉢が上～下層にわたって接合するため、この破片を含んだ埋土で短期間に埋められた可能性が高い。

図示した出土遺物は結果的に検出面となった大溝底面以下の遺物の他、大溝内として取り上げた遺物のうち出土地点を元にSE4001出土遺物として報告するものを含んでいる。前者を中～下層、後者を上層出土遺物として報告すると、上層で1603、中層で1609、下層で1604～1608が出土し、1610は上～下層出土遺物が接合している。

1603は瀬戸美濃産の天目茶碗で、大窯第2段階に比定される製品である。1604は初山窯産の壺類の底部で、内外面に鉄釉が施されるが、底部付近は無釉となる。初山窯の製品は他にも下層から壺類の小片が出土している。1605は山茶碗底部で、渥美湖西産の製品である。1606・1609は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。内面ナデ調整、外面は指頭が残る粗い調整を施す。1607・1608は土師質土器の内耳鍋である。いずれも内彎形で、外面には煤が厚く付着するが、内面は使用痕がほとんど目立たない。1610は尾張（知多）産の片口鉢で、常滑5型式頃に位置づけられるものであろう。体部外面下半にはケズリ調整が顕著で、底部内面付近は使用により表面が滑らかになっている。複数の破片が接合し、全体の1/2程度に復元できた。

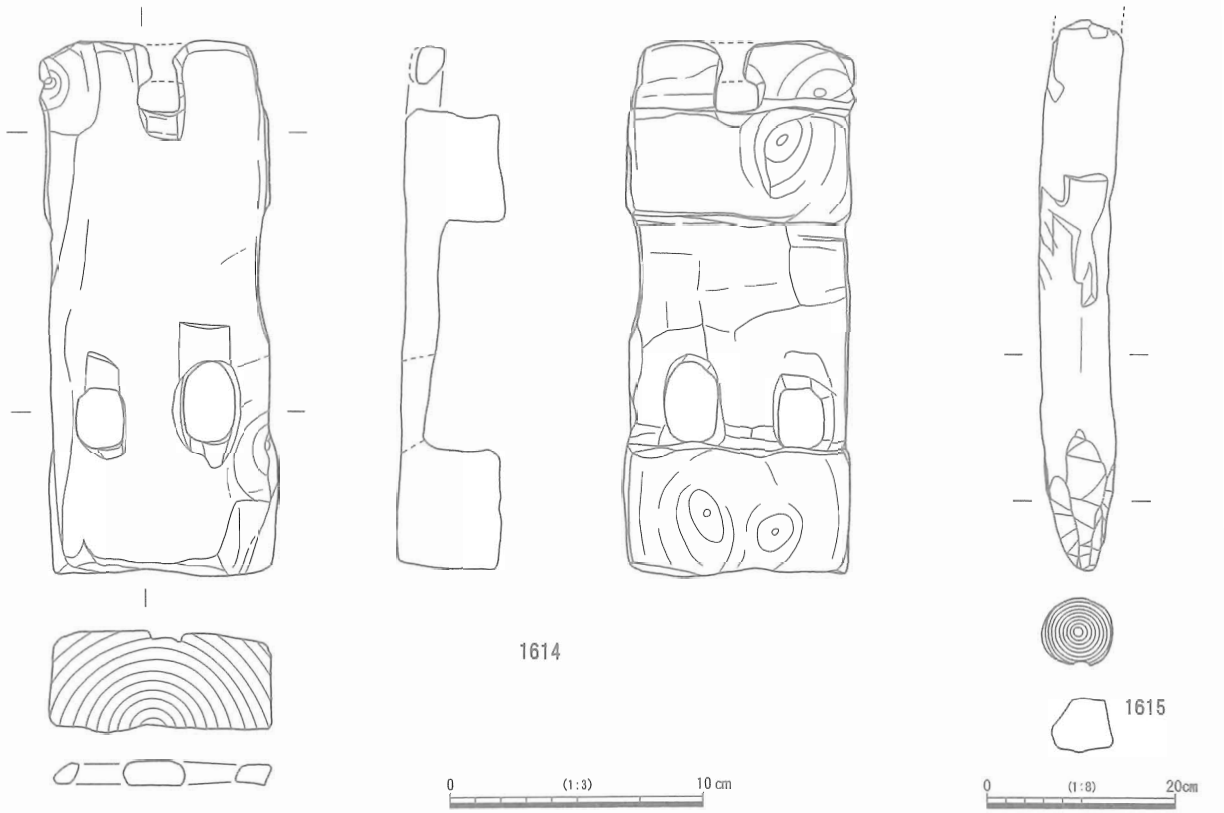


図 215　SE4001 出土遺物（３）

1611 ～ 1613 は丸瓦である。いずれも凸面は全面ナデ調整されており、凹面には布目が認められる。1611 は狭端部の破片である。被熱により変色し、表面の摩滅も著しいが、凹面の狭端側は幅広に面取りされている。1612 は側端面の残る破片である。凹面の側端側には、面取り調整が施されている。布目には皺が目立ち、大きく絞っている様子が確認できる。1613 は端部の残らない破片で、全体の湾曲がややいびつになっている。凹面には、吊り紐痕が認められる。

1614 と 1615 は底面から 0.3 mほど浮いた層位で出土した木製品である。1614 は角型の連歯下駄であるが、腐食が激しく、細かい調整や使用痕は明確でない。カヤ材を使用した一木造りで、長さ 21.2cm、幅 9.3cm、最大厚 4.0cm を測る。前壷及び後壷は腐食が激しく、本来の形状・大きさは不明である。1615 は直径 7.5 cmの丸杭である。先端を粗く尖らせ、体部にも削痕がみられる。

やや古い段階の遺物も含むが、初山窯製品や土師質土器の様相から、本遺構は 16 世紀後葉には廃絶したと考えられる。

SE5001（図 216、図版 30・54）

５区北西部のＦ２区に位置する。平面形状は円形で、直径は上面で 1.65 m、深さは検出面から約 1.0 mである。底面の西側に直径 0.5 m、深さ 0.4 mの小穴があるが、湧水を得るために掘削されたのかもしれない。井戸側などの下部施設はなく、素掘り井戸の可能性が高い。暗褐色土と黄褐色土が互層となっており、17 層に分層される。１・２層の上層と 16・17 層の下層に 1 cm 程度の礫が混じっている。埋土堆積状況から埋没過程を推定するのは困難であるが、土層状況を見ると、東側に埋土の盛り上がりが観察され、その上に地山由来の黄褐色土と暗褐色土が互層となっており、それは中層～上層にも認めら

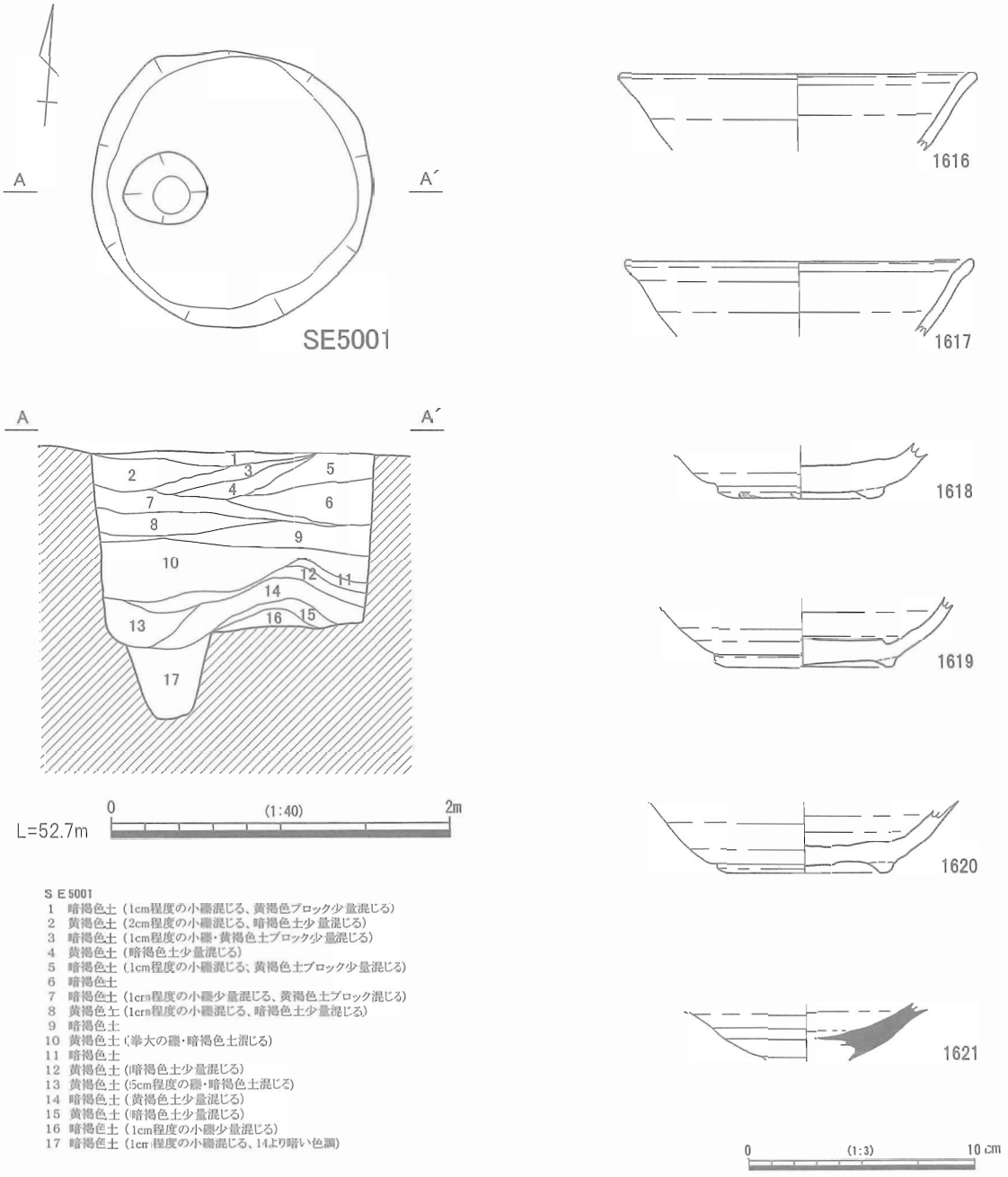


図 216　SE5001 実測図・出土遺物

れる。こうした堆積状況から、東側から人為的に投げ込まれた埋土の上に、壁面が崩落するというサイクルが数度にわたって続きながら埋まった状況が想定できる。周辺に同時期とみられる遺構はほとんどなく、遺構の用途は不明である。

遺物は 1616 ～ 1619 が埋土上層、1620 が埋土中層、1621 が下層から出土している。1616 ～ 1620 はいずれも渥美湖西産の山茶碗である。1616・1617 は体部～口縁部破片である。1618 ～ 1620 は底部の破片で、1618 は高台下部に籾殻痕、1619・1620 は砂目痕が認められる。いずれも底部内面は使用痕が顕著である。高台がかなり低く粗雑になることから、Ⅲ－２期に位置づけられる。1621 は下層から出土した須恵器の高坏である。混入品であろう。これら出土遺物は 13 世紀中頃に比定されることから、井戸の廃絶年代もその時期と考えられる。

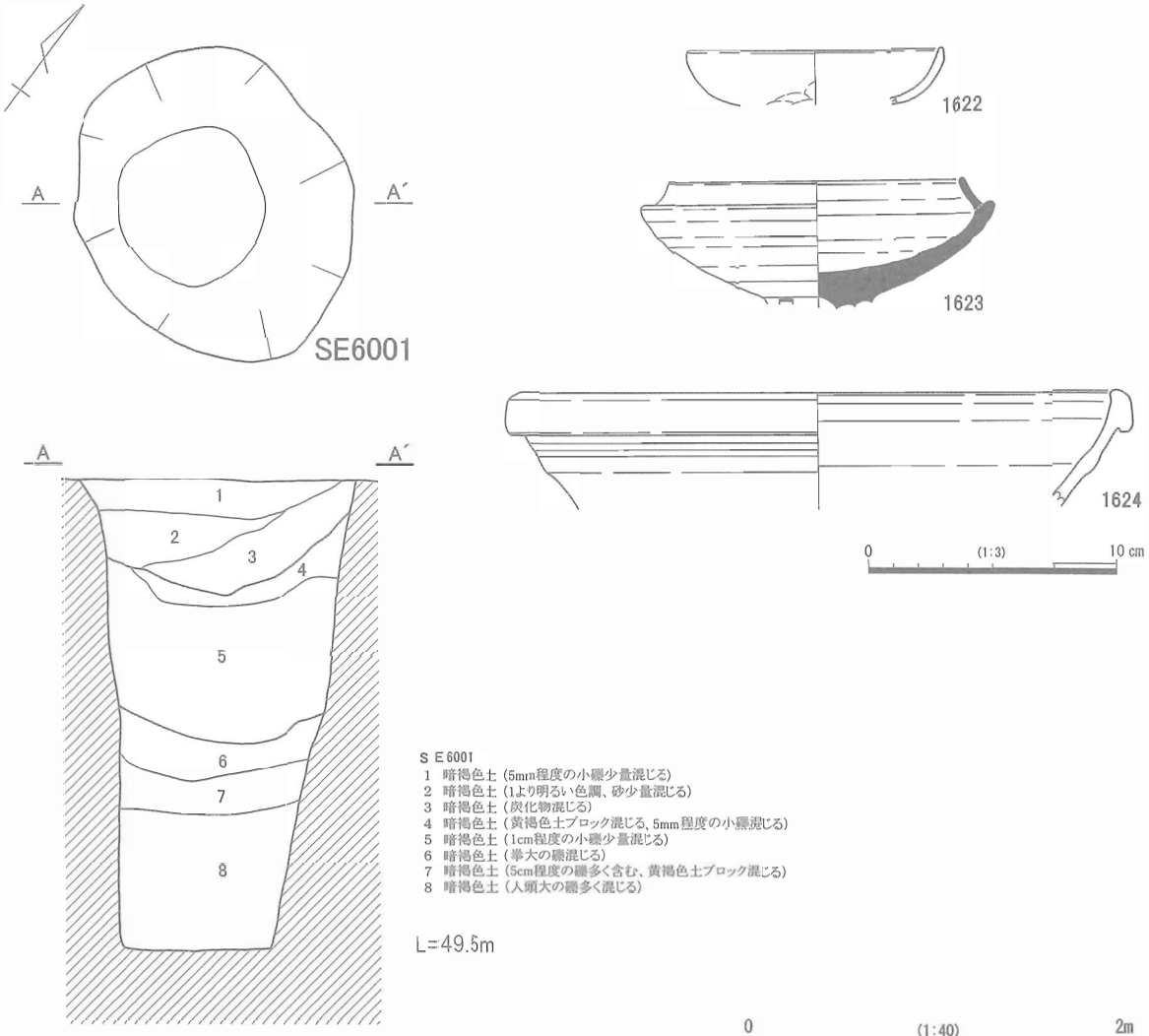


図 217　SE6001 実測図・出土遺物

SE6001（図 217、図版 54）

6 区中央の H 12 ～ 13 区に位置し、SH6007・6008・6010・6011 に隣接している。平面形状は不整形な楕円形で、直径は上面で 1.65 m、検出面からの深さは 2.5 m である。下部に向かってやや狭くなるが、ほぼ円筒形に掘り込まれている。井戸側などに下部施設は確認されておらず、素掘りであった可能性が高い。埋土は暗褐色土で、8 層に分層される。6 ～ 8 層からは直径 5 ㎝～人頭大の礫が多く出土しているが、井戸側に使用されたという状況ではなかった。堆積状況は各層が水平に厚く堆積する様子が見受けられるため、人為的に埋め戻されたと判断される。

1622 は 3 層から出土した土師質土器の皿で、非ロクロ成形品である。内面はナデ調整、外面は指頭の残る粗雑な調整が施され、比較的硬質に焼成される。1623 は須恵器の蓋付高坏である。混入品であろう。1624 は志戸呂窯産の擂鉢である。体部から口縁部は湾曲し、口縁端部には縁帯が巡る。櫛目は確認できないが、体部はかなり薄く仕上げられている。大窯第 4 段階末期～登窯期初頭並行の製品であろう。

出土遺物は志戸呂窯産擂鉢が 17 世紀前葉の製品であり、これが埋土下層から出土していることから、その頃までに本遺構は廃絶されたのだろう。周囲の SH6007・6008・6010・6011 の帰属年代が 15 世紀後葉～ 16 世紀代であることから、井戸の主な使用年代はその範疇におさまるものと考えられる。

表 21　井戸出土 土器・陶磁器観察表

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1561	SE1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.8)				口縁～体部 1/7		灰白	
1562	SE1001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１～２				(7.4)	底部 1/3		灰白	
1563	SE1001	上	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ	(8.3)				口縁部 1/5		灰白	
1564	SE1001	上	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－２	(7.8)				口縁～体部 1/6	自然釉	灰白	
1565	SE1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.0)				口縁～体部 1/6		灰白	
1566	SE1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.3)				口縁～体部 1/5		浅黄橙	外面煤付着
1567	SE1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.9)				口縁～底部 1/5		浅黄橙	
1568	SE1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部 1/6		灰白	煤付着
1569	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.7)				口縁～体部 1/8		灰白	
1570	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部 1/10		灰白	
1571	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.2)				口縁～底部 1/2		浅黄橙	
1572	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.9)				口縁～体部 1/4		灰白	
1573	SE1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁～体部 1/14		灰白	
1574	SE1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.4)				口縁部 1/10		浅黄橙	
1575	SE1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.7)				口縁～体部 1/8		浅黄橙	
1576	SE1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.1)				口縁～底部 1/8		淡黄	
1577	SE1001	上	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)				口縁～体部 1/14		灰白	
1578	SE1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.6)				口縁～体部 1/4		灰白	
1579	SE1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁～体部 1/6		灰白	
1580	SE1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.8)				口縁部 1/7		浅黄橙	
1581	SE1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.5)				口縁～底部 1/2		灰白	
1582	SE1001	中	土師質土器	皿		非ロクロ					体部 1/8		灰白	
1583	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.7)				口縁～体部 1/8		灰白	
1584	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁～体部 1/6		灰白	
1585	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部 1/16		浅黄橙	
1586	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.1)				口縁～体部 1/4		灰白	
1587	SE1001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.6)				口縁～体部 1/8		浅黄橙	
1595	SE3001		土師質土器	皿		非ロクロ	(9.1)				口縁部 1/10		灰白	
1596	SE3001		近世陶器	尾呂茶碗	美濃	皇５～６	(10.9)				口縁部 1/16	灰釉	オリーブ褐 / 灰白	
1597	SE3001		近世陶器	丸碗	美濃	皇３～４	(10.2)				口縁部 1/12	鉄釉	褐 / 灰白	2183 と同一個体
1598	SE3001		近世陶器	丸碗	美濃	皇３～４				(5.9)	底部 1/16	鉄釉	褐 / 灰白	2182 と同一個体
1599	SE3001		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(19.7)				口縁部 1/20		にぶい黄橙	外面煤付着
1600	SE3001		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.8)				口縁部 1/9		浅黄橙	外面煤付着
1601	SE3001		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.4)				口縁部 1/16		灰白	外面煤付着
1603	SE4001	上	施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	大窯２					体部 1/4	鉄釉	黒褐 / 灰白	
1604	SE4001	下	施釉陶器	壺類	初山			(8.2)			底部 1/6	鉄釉	赤灰 / 灰	
1605	SE4001	下	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(5.7)	底部		灰白	
1606	SE4001	下	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.5)				口縁部 1/10		灰白	
1607	SE4001	下	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.6)				口縁部 1/10		灰白	外面煤付着
1608	SE4001	下	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.0)				口縁部 1/17		灰白	外面煤付着
1609	SE4001	中	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.0)				口縁部 1/16		灰白	
1610	SE4001	上～下	中世陶器	片口鉢	常滑	５型式	(29.2)		1:2.8	(13.8)	1/2	内面・自然釉	灰白	
1616	SE5001	上	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.4)				口縁部 1/10	内面・自然釉	灰白	
1617	SE5001	上	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.3)				口縁部 1/16		灰白	
1618	SE5001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(6.0)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1619	SE5001	上	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(7.15)	底部		灰白	
1620	SE5001	中	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(7.2)	底部		灰白	
1621	SE5001	下	須恵器	高坏							体部 1/2		灰白	
1622	SE6001	3 層	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.1)				口縁部 1/8		浅黄橙	
1623	SE6001		須恵器	高坏			(11.7)				坏部 1/4		灰白	透かし三方向
1624	SE6001	下	施釉陶器	擂鉢	志戸呂	大 4～皇初	(24.0)				口縁部 1/8		灰赤 / にぶい赤褐	

8．土坑

SF1025（図 218・219、図版 31・54）

1区東部のＥ３区に位置する。平面形はやや不整形な円形で、南北 2.8 m、東西 3.0 m、深さは検出面から 1.2 mを測る。南側には浅い落ち込みがあり、これに切られている。周囲に同時期の遺構は見当らず、遺構の性格は不明である。埋土は下層に褐色粘質土、上層に黒褐色粘質土が堆積しており、最下層の６層には黄色土ブロックが多く含まれ、また中～上層には１～10 cm程度の礫が混入していた。

遺物のほとんどは１層からの出土で、1627のみ中層からの出土である。1625は土師質土器の皿である。非ロクロ成形によるもので、底部外面付近に指頭痕、面には板ナデ痕が残る。1626 ～ 1629 は土師質土器の内耳鍋である。1626 はくの字形内耳鍋で、口縁端部を強く引き出す特徴がある。1627 ～ 1629 は内彎形内耳鍋である。いずれも端部断面は方形に成形される。1627 は口縁端部が被熱し、変色している。1630・1631 は施釉陶器で、古志戸呂の盤類である。体部破片であるが、上半に鉄釉が掛けられ、下半は無釉となり、ケズリ調整が明瞭に観察できる。1632 は丸瓦の広端部破片である。このほか陶器、土

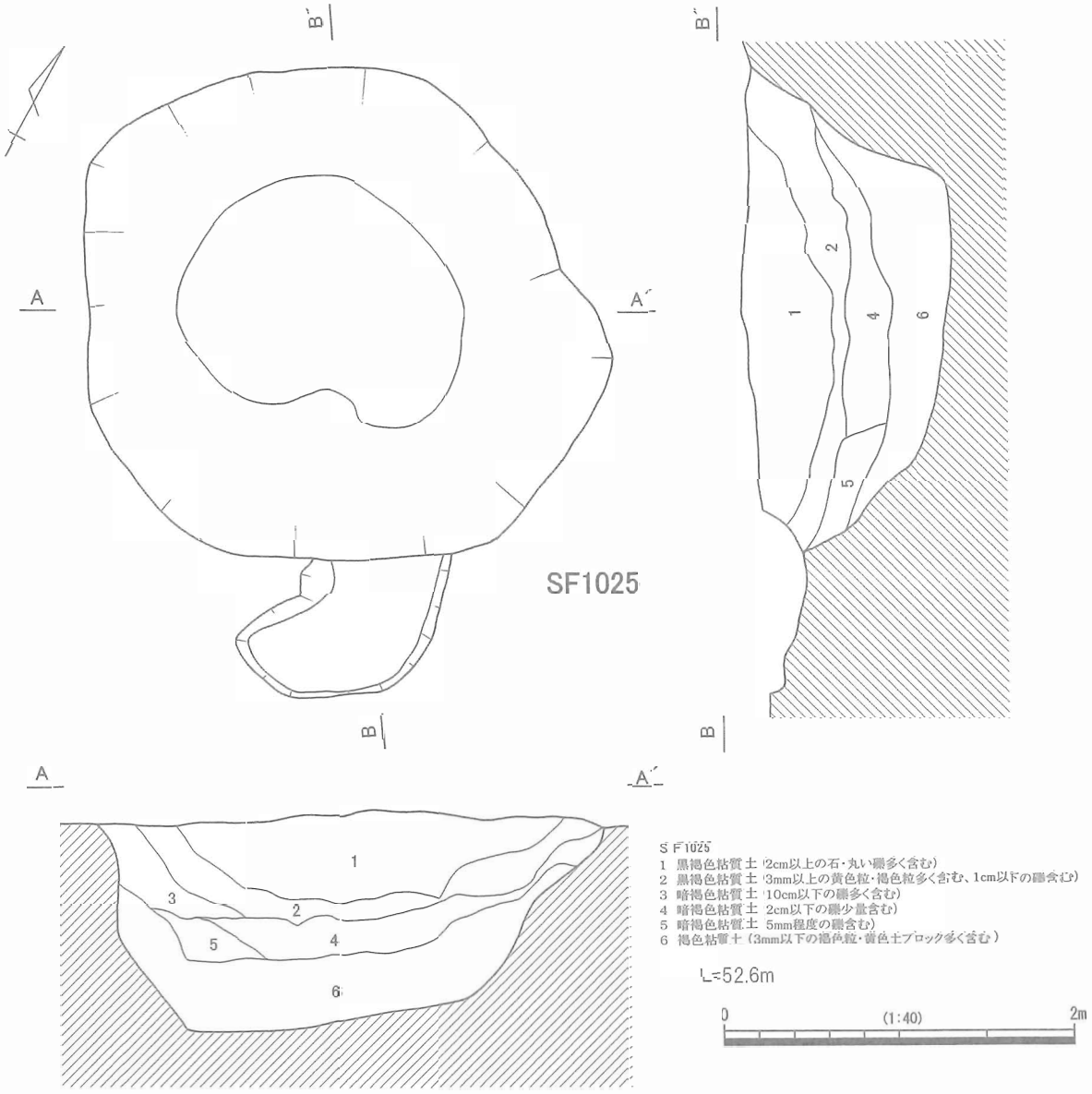


図 218　SF1025 実測図・出土遺物

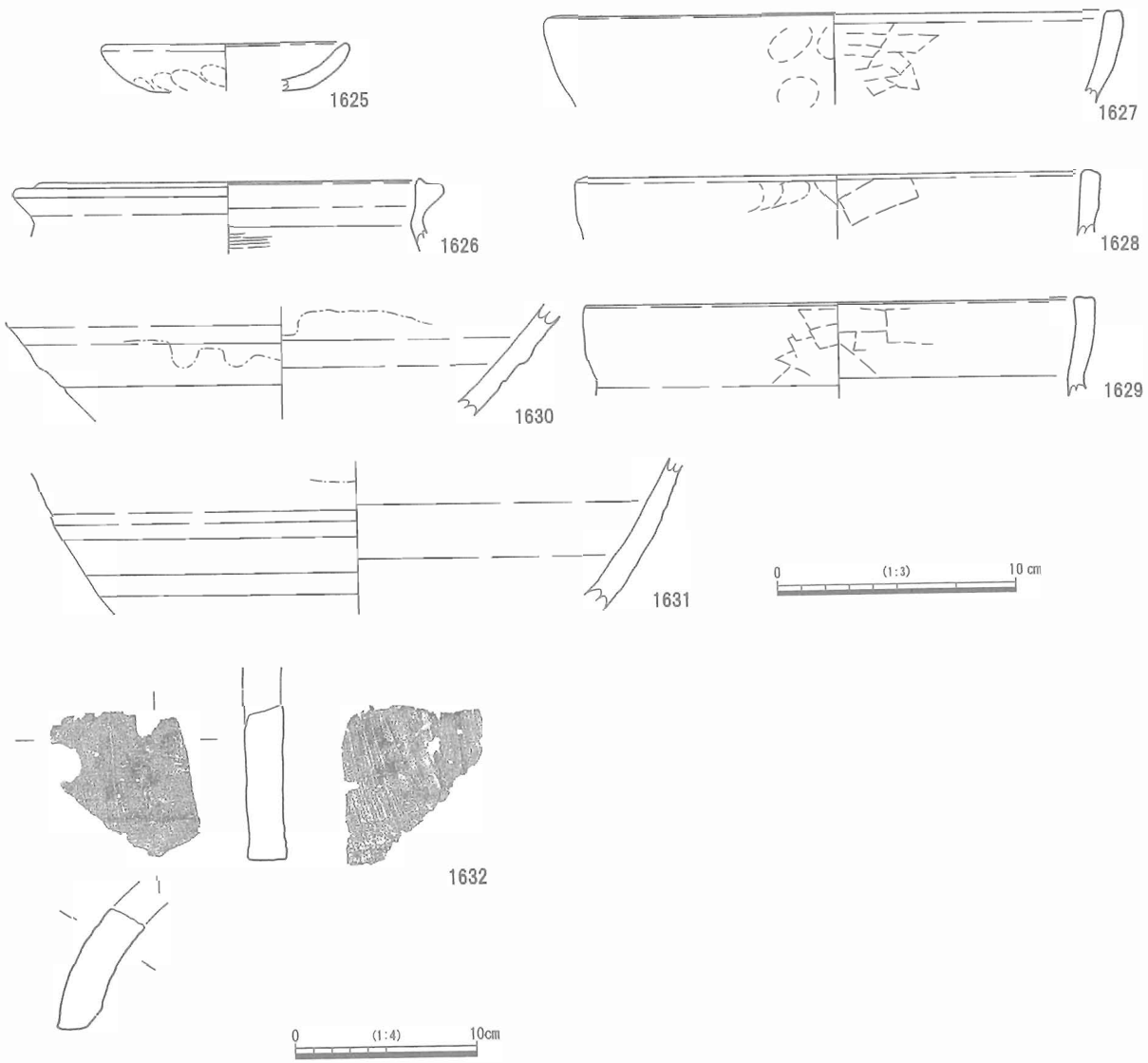


図 219　SF1025 実測図・出土遺物

師質土器が出土したが、小片であり図化することはできなかった。古志戸呂製品なども含むが、土師質土器の皿及び内耳鍋の年代観から、遺構は 16 世紀代に廃絶したものと考えられる。

SF6033（図 220・221、図版 31・54・64）

６区東端のⅠ 18 区に位置する。平面形は不整形な円形で、南北 3.2 m、東西 2.8 m、検出面からの深さは 1.9 m を測る。概ね碗状だが、中程から段をもって狭くなっている。埋土は暗褐色土が主体で、５層に分層される。堆積状況は最下層の５層が最も厚く、レンズ状の堆積を示す１～４層のうち３・４層には挙大の礫が含まれる。

1633 ～ 1643 は山茶碗類である。1634・1642 が１層、1635・1636 が３層、1633・1637 が４層、1638 ～ 1641・1643 は５層から出土しており、全て渥美湖西産の製品である。1633 は高台がかなり低くなるが、口径は 16.6cm に復元でき、口縁端部を外反させる。Ⅲ－１期に位置づけられよう。1634 ～ 1636 は口縁部破片で、いずれも厚手で端部に自然釉が付着する。1636 ～ 1641 は底部破片で、高台が高い 1637 がⅡ期となる以外はⅢ－２期の製品であろう。高台下部には 1637・1640 が籾殻痕、1638・1639・1641 は砂目痕が残る。1642・1643 は小皿である。1642 は内外面に自然釉が付着する。1644 は尾張（知

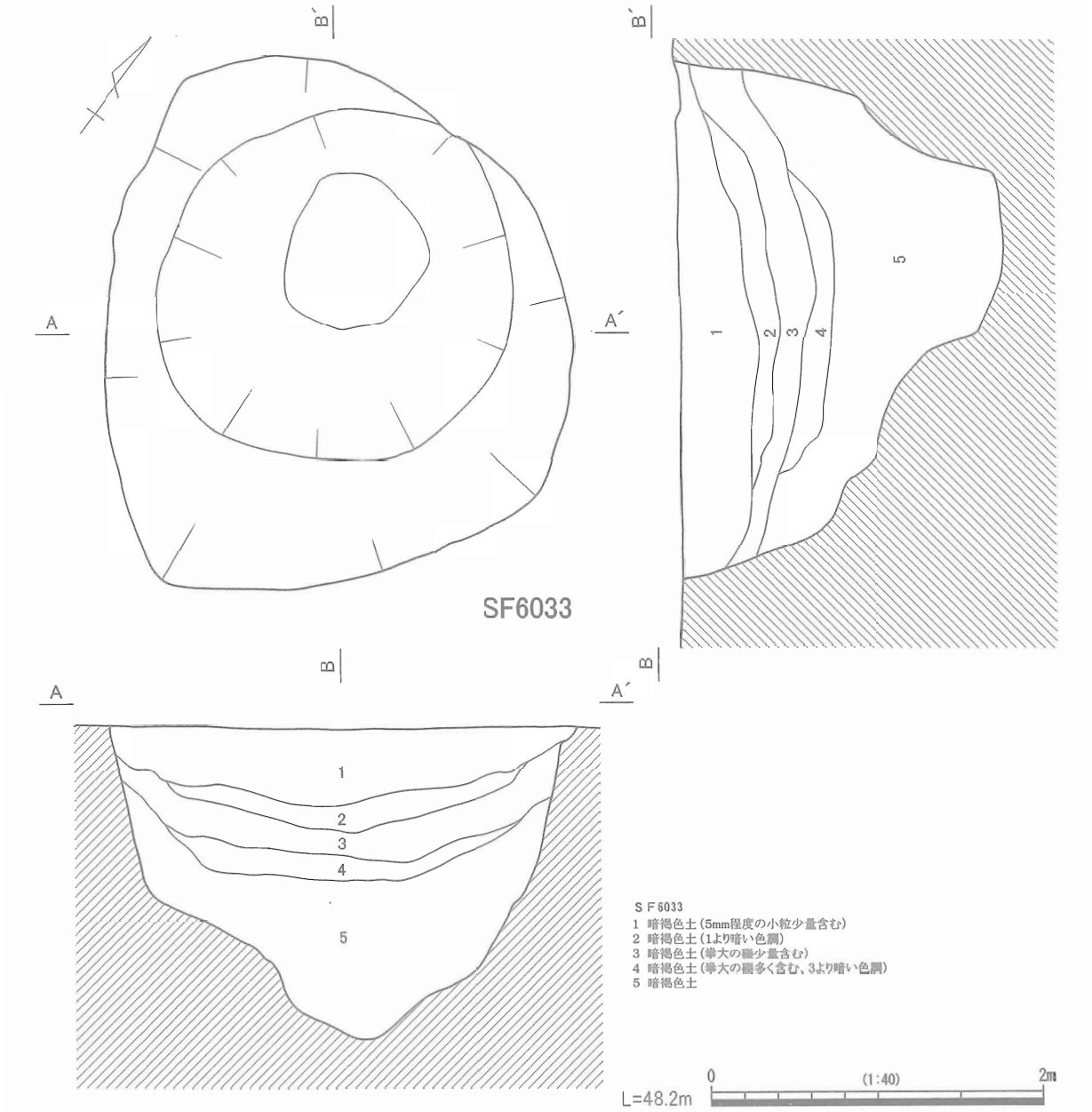


図 220　SF6033 実測図

多）産の片口鉢である。体部下半は粗いケズリ調整が残り、低い高台がつけられる。常滑６ａ型式のものであろう。1645・1646 は常滑産の製品である。1645 は片口鉢の底部で、内面に使用痕が明瞭に残る。1646 は甕の口縁部破片で、外面には自然釉が厚く付着する。口縁端部上部に突帯が巡る常滑５型式の製品であろう。1647 ～ 1650 は土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形品で、摩滅が激しい。1650 は口縁端部のナデにより、体部との境に段がついている。1651・1652 は貿易陶磁の青磁碗である。1651 は鎬連弁文碗でＢ１類、1652 は無文碗でＡ１類に比定されよう。これら遺物の様相から、本遺構は 13 世紀中葉頃までには廃絶し、埋没したものと考えられる。

SF6035（図 222）

６区中央のＨ 13 区に位置する。SH6010・6011・6015 に隣接する。平面形は隅丸長方形で、長軸 2.8 ｍ、短軸は 2.45 ｍである。遺構上部は削平されており、検出面からの深さは 0.05 ｍと非常に浅い。埋

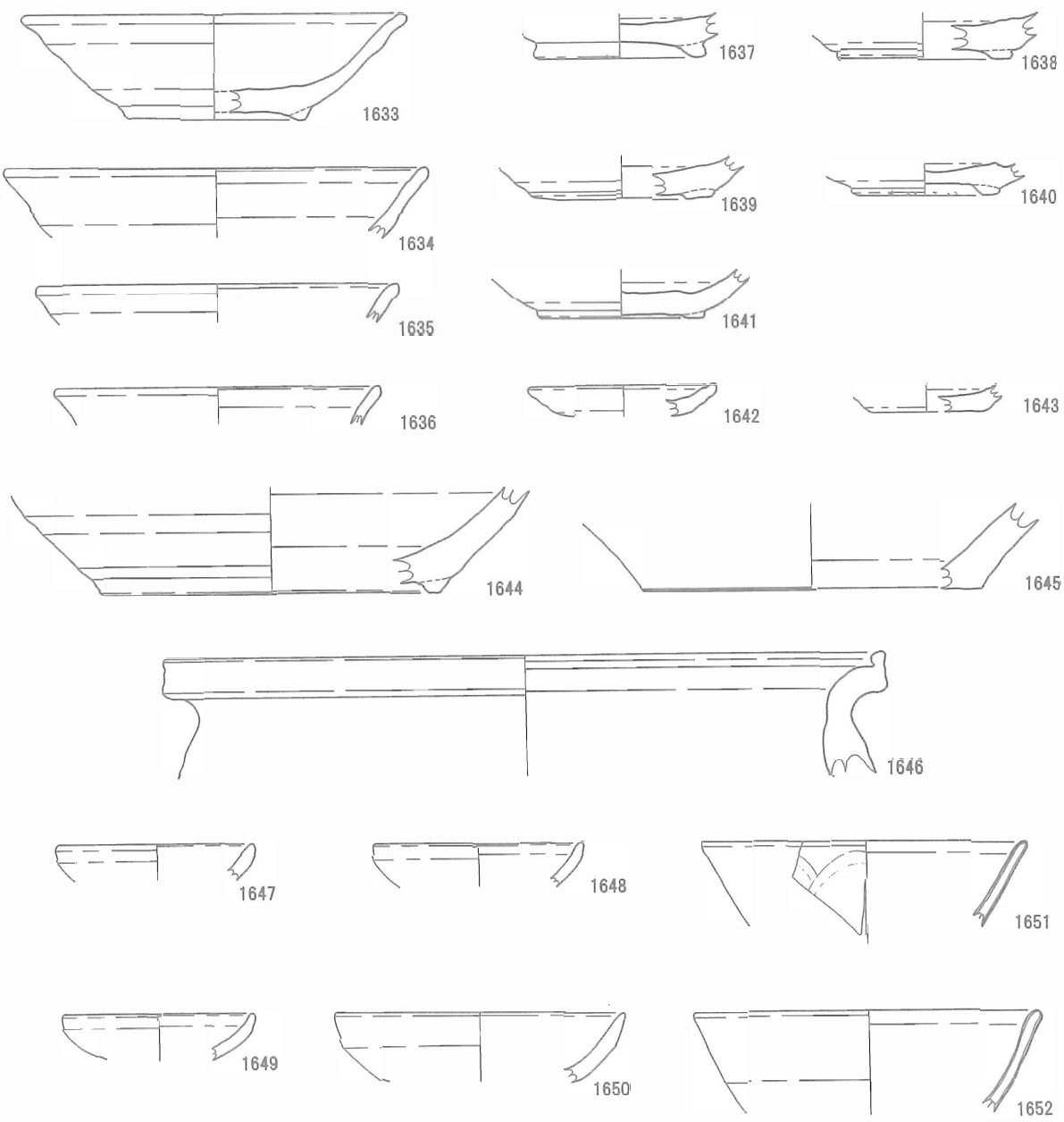


図 221　SF6033 出土遺物

土は暗褐色土の単層である。遺物は多く出土しているが、小破片が大半で遺構の性格を推定させる状況はない。

1653・1655 は須恵器である。1653 は坏蓋の口縁部、1655 は甕の口縁部破片である。1654 は土師器の皿である。摩滅しているが、内外面に赤彩の痕跡がある。1656 は渥美湖西産山茶碗の口縁部である。1658・1659 は土師質土器の内耳鍋である。1658 は頸部、1659 は体部であるが、いずれもくの字形内耳鍋と考えられる。1657 は土師質土器の皿である。非ロクロ成形品であるが、摩滅が激しく調整は明らかではない。この他須恵器、土師器、土師質土器などが出土しているが、いずれも小片のため図化することはできなかった。出土遺物の年代観が 15 世紀中葉～ 16 世紀代であり、また SH6010・6011・6015 の年代観とも重なるため、同時期に営まれた遺構群と捉えることができる。

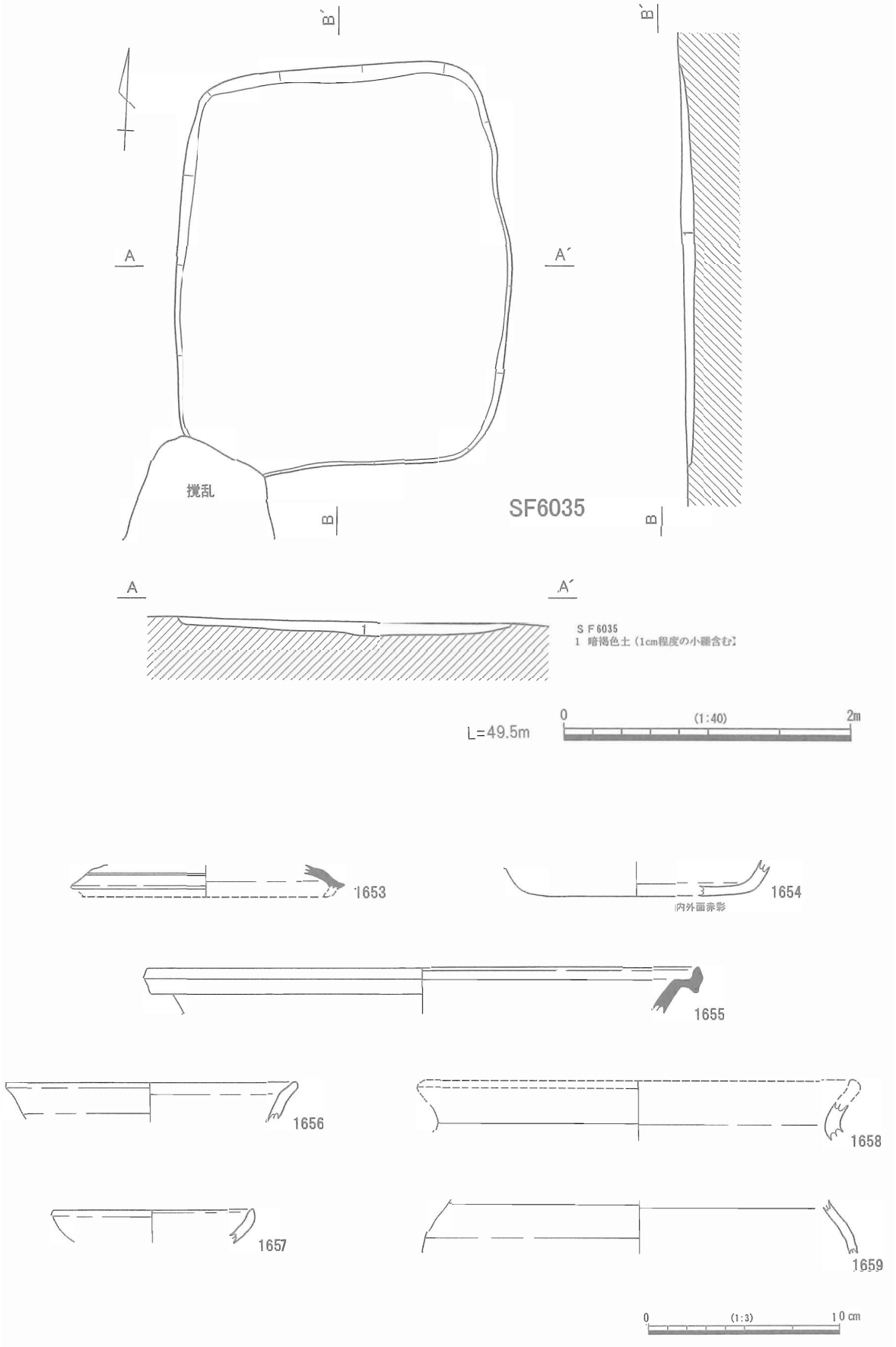


図 222　SF6035 実測図・出土遺物

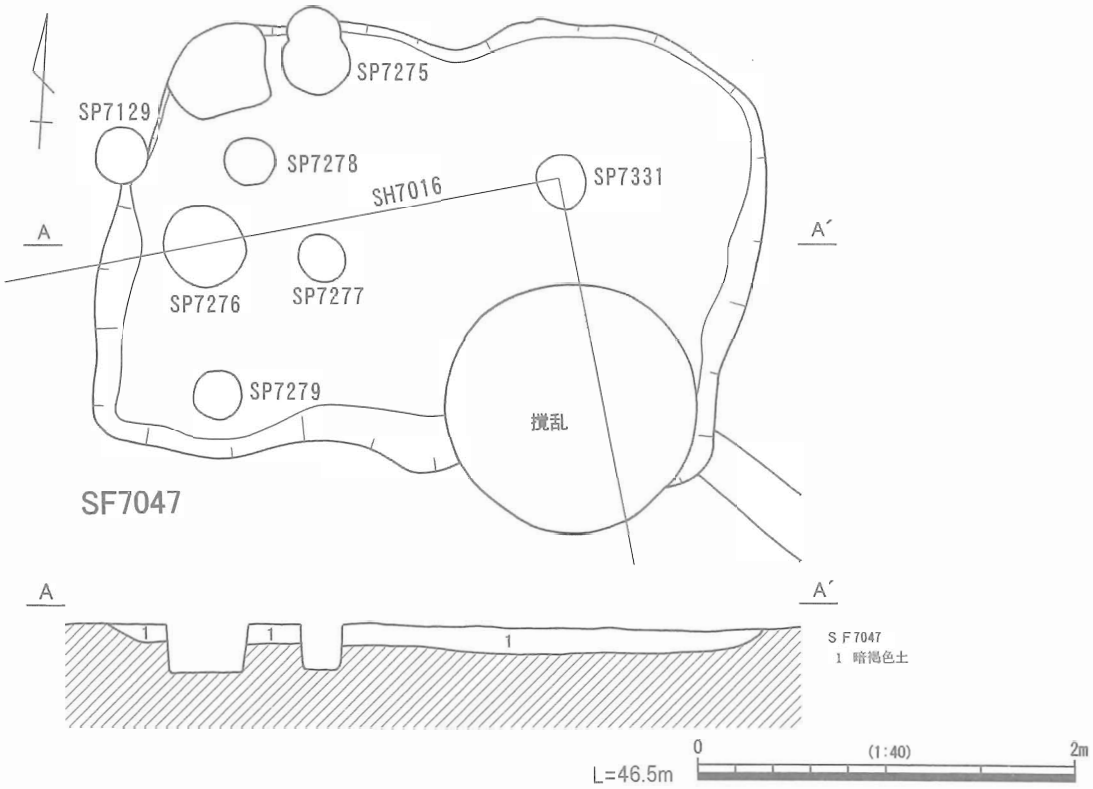


図 223　SF7047 実測図

SF7047（図 223・224、図版 30・64）

７区東のＨ 26 区に位置する。SH7016 と重なっており、その柱穴 SP7276 と SP7331 及び SD7001 に切られることから、これらよりも古い段階の遺構である。平面形は不整形な隅丸長方形で、長軸 1.65 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.1 mである。底面はやや凹凸があり、周縁部は皿状となる浅い落ち込みで、埋土は暗褐色土の単層であった。

1660・1661 は須恵器で、1660 は箱坏の底部、1661 は壷の口縁部であろう。1662 ～ 1664 は土師器である。1662 は坏、1663・1664 は長胴甕の口縁部破片である。1660 ～ 1681 は古代の遺物で、混入品である。

1665 ～ 1671 は山茶碗類である。1665 ～ 1668 は山茶碗である。1666 が尾張産である以外はいずれも渥美湖西産の製品で、1667・1668 は高台底部に籾殻痕が残る。Ⅲ－１期の製品であろう。1669 は薄手であることから、小碗の口縁部であろう。1670・1671 は小碗の底部である。1670 は底部内面の全面に自然釉が付着し、1671 は底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。いずれもⅠ－２期の製品であろう。1672・1673 は片口鉢で、いずれも尾張（知多）産であろう。1672 は端部が肥厚する口縁部破片で、1673 は低い高台のつく底部破片である。常滑５～６ａ型式の製品であろう。1674 ～ 1683 は土師質土器である。1674 ～ 1681 は皿で、いずれも非ロクロ成形品である。軟質に焼成されるものが多く、摩滅が顕著であるが、内面はナデ調整、外面は指頭による調整が施される。器壁はやや厚手で、体部から口縁にかけてなだらかに立ち上げるが、1674 は口縁部を垂直近くまで屈曲させる。概ね 10 ～ 12cm に口径が復元されるが、1681 は７cm 程度とかなり小型品である。1682・1683 は伊勢鍋の口縁部破片である。外面には使用による煤が付着する。

1684 ～ 1687 は瀬戸美濃系の施釉陶器である。1684 は天目茶碗である。底部外面が露胎となる以外は鉄釉が掛けられ、高台は輪高台がケズリ調整によってつくり出される。口縁部はほぼ直立し、薄く引き出されて尖る。古瀬戸後Ⅰ期の製品である。1685・1686 は灰釉平碗である。1685 は内面に灰釉が掛かるが、

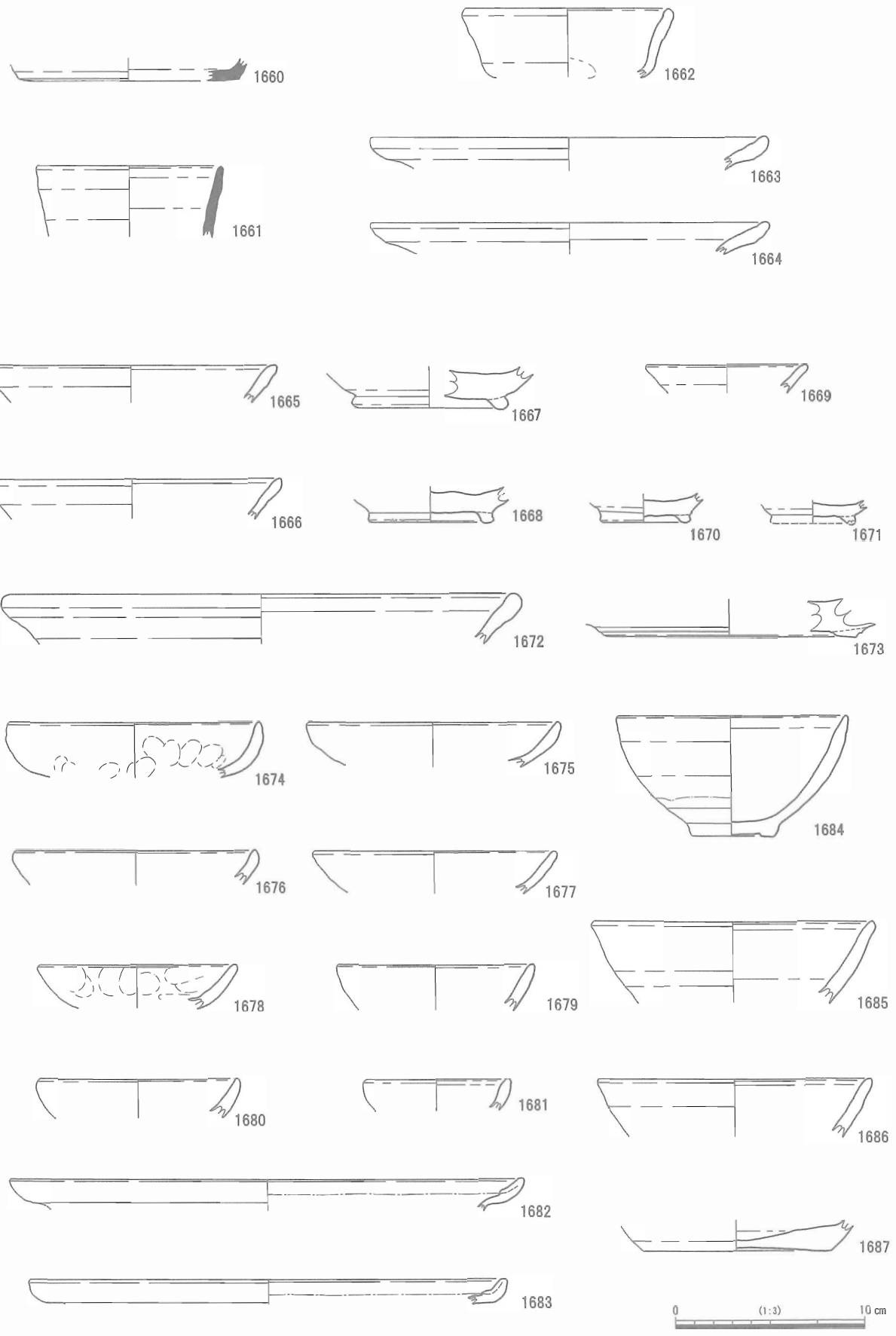


図 224　SF7047 出土遺物

外面は露胎となるが、1686 は全面に施釉される。1685 が古瀬戸後Ⅰ期、1686 は古瀬戸後Ⅳ期古段階に位置づけられる。1687 は柄付片口の底部である。内面には灰釉が掛かり、底部付近の外面は露胎で糸切り痕が明瞭に残る。古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の製品である。この他、図化が不可能な須恵器・土師器・土師質土器の小片が出土している。

これら出土遺物の下限は 15 世紀後葉であり、切合い関係から本遺構よりも新しいＳＨ 7016 が 16 世紀代の建物であることから、15 世紀後葉～ 16 世紀代に帰属する遺構と推定される。

SF8009（図 225）

８区東端のＥ 33 区に位置する。SD8002、SD8045 と重なるが、新旧関係は不明である。平面形は不定形で、長軸は 3.4 ｍ、短軸は 2.5 ｍ、検出面からの最深部は 0.15 ｍである。底面は凹凸があり、明瞭な立ち上がりは認められない。埋土は黄色土ブロックを含む灰褐色粘質土が主体で、２層に分層される。浅い落ち込み状の遺構である。

1688 ～ 1692 は山茶碗で、すべて渥美湖西産の製品である。1689 ～ 1692 の高台底部には砂目が残り、体部内面は使用による摩滅が顕著である。Ⅲ－２期段階の製品であろう。これら山茶碗は 13 世紀中葉の年代観を示すものの、小片のため図化できない破片の中に内耳鍋の破片があり、それが埋土中層付近から出土していることから、遺構は 15 世紀～ 16 世紀代に降る可能性がある。

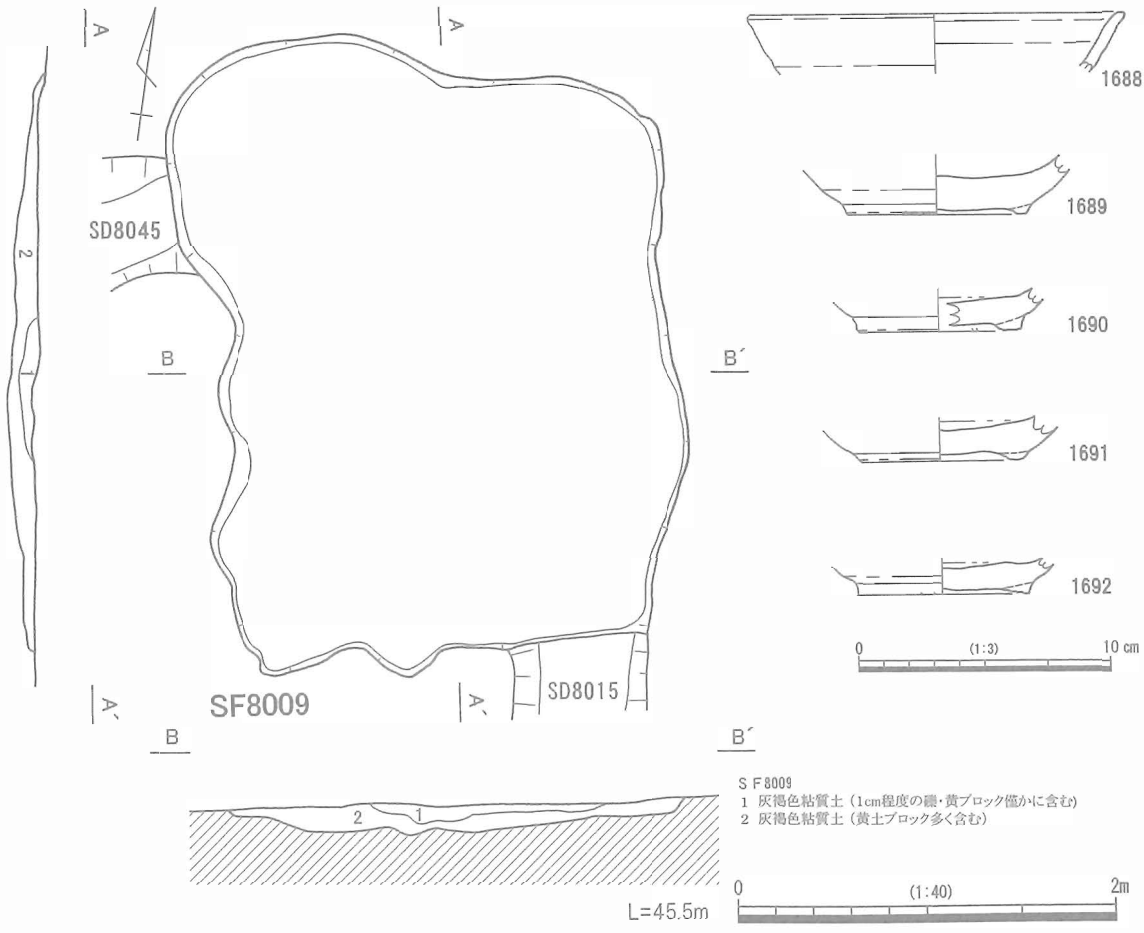
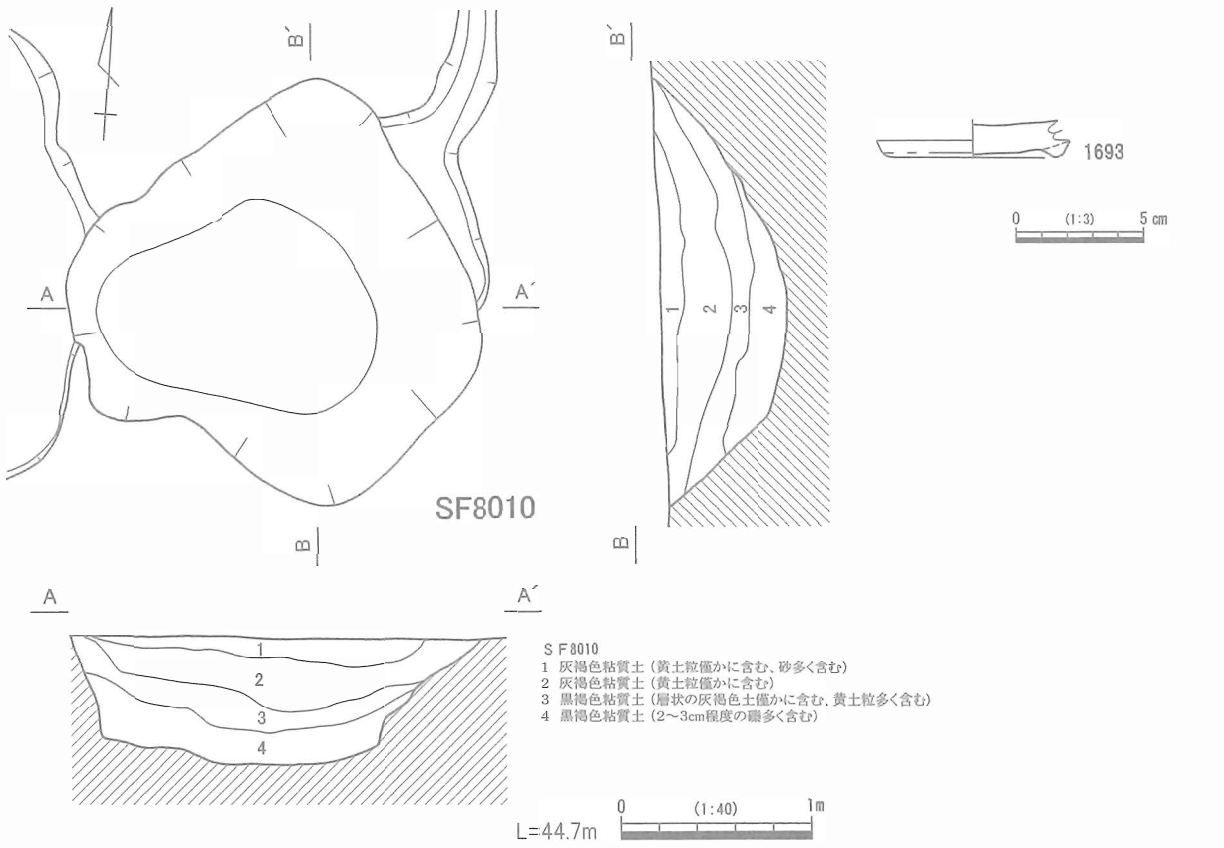


図 225　SF8009 実測図・出土遺物



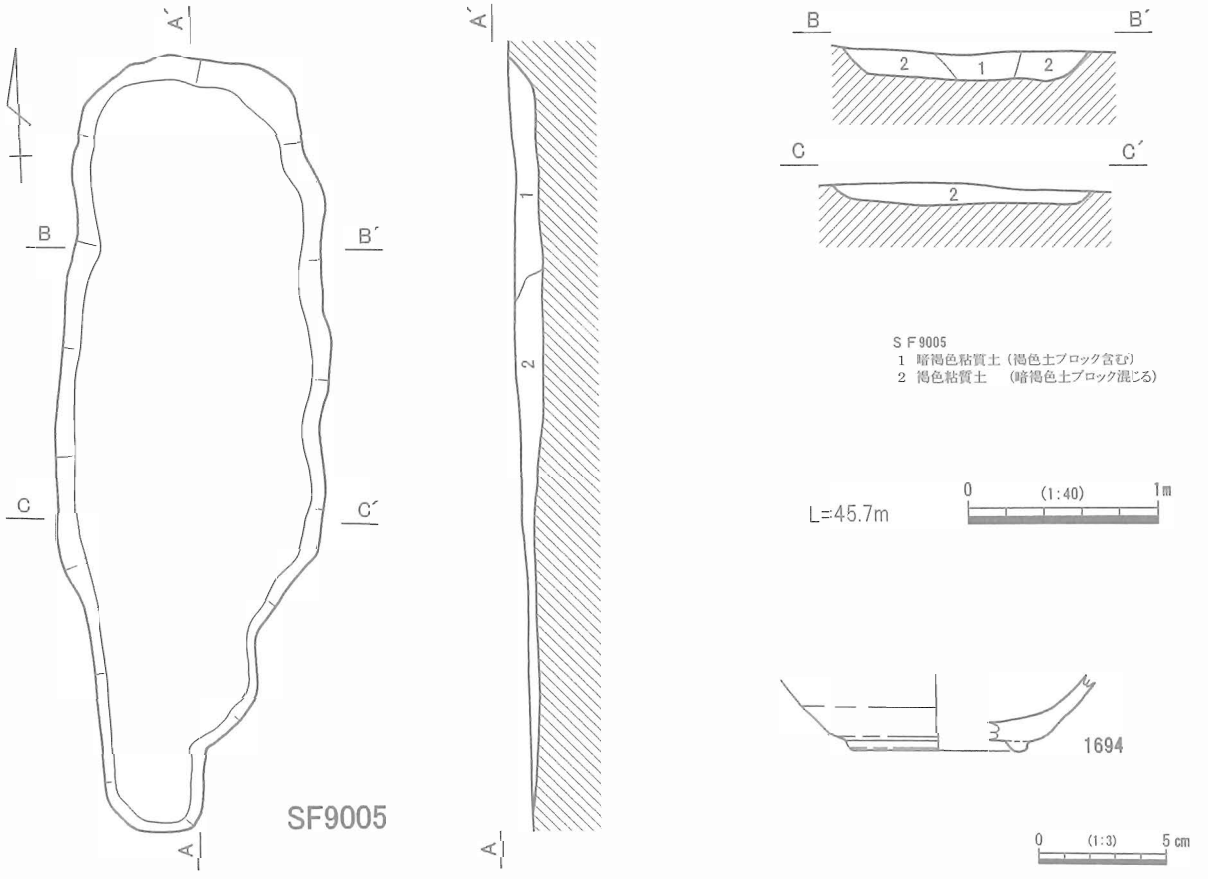


図 226　SF8010、SF9005 実測図・出土遺物

SF8010（図 226）

８区東部のＨ 33 区に位置する。平面形は不整形で、東西の長軸は 1.9 ｍ、南北の短軸は 1.8 ｍである。検出面からの最大深さは 0.6 ｍである。埋土は４層に分層されるが、いずれも黄色土の粒子を少量含み、上層が灰褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土に大きく分かれる。

1693 は３層から出土した山茶碗である。底部内面は使用による摩滅が顕著である。渥美湖西産のⅢ－２期の製品であろう。

この他、小片のため図化できなかった遺物があるが、大半は土師質土器の皿であった。出土遺物の大半が小片であるため、遺構の時期認定は困難であるが、少なくとも 13 世紀中葉には埋没していたと考えられる。

SF9005（図 226）

９区中央のＤ～Ｅ 28 区に位置する。平面形は不定形で、南北の長軸は 4.1 ｍ、東西の短軸は 1.4 ｍである。深さは 0.15 ｍと浅く、底面はほぼ平坦で、周縁に向かって徐々に浅くなり、立ち上がりは明確でない。埋土は暗褐色と褐色の粘質土に分層される。遺構の性格は不明である。

1694 は山茶碗の底部の破片である。底部内面は使用痕が顕著で、煤が薄く付着する。渥美湖西産のⅢ－１期の製品であろう。

他に土師器の小片が見つかっているが、図化不能である。出土遺物が極めて少なく明確でないが、13 世紀前葉頃の年代観が与えられよう。

SF1004（図 227、図版 31・64）

１区北西部のＣ３区に位置し、SD1002 の東に隣接する。平面形はややいびつな円形であり、直径は 1.6 ｍである。底面は平坦で、南西側の掘り込みに比べて北東側は緩やかとなる。検出面からの深さは 0.3 ｍで、埋土は暗褐色土を主体に４層に分層される。

図 227 に示したように、１・２層を中心とした埋土から比較的多くの遺物が出土している。1695 ～ 1697 は山茶碗で、いずれも渥美湖西産の製品である。1695 は底部から口縁部にかけて全体の 1/2 が残存していた。高台は粗雑な歪んだ形状で、底部には砂目痕が観察できる。体部から口縁にかけては厚手で、口縁部には自然釉が付着する。Ⅲ－１期のものであろう。1696・1697 は口縁部の破片である。いずれも口縁端部に自然釉がみられる。1695 と形状が類似するため、同時期の遺物とみられる。1698 は片口鉢である。底部の全面と体下部の一部が残存する。高台は比較的高く、断面は方形となり、下面に何らかの植物の痕跡が残る。外面下半はケズリ調整、内面は粗いナデ調整が施されている。尾張（知多）産の製品で、常滑６ａ型式に比定されよう。

1699 ～ 1709 は土師質土器の皿である。全て非ロクロ成形で全体の 1/2 が残る 1699 以外はいずれも口縁部の破片であった。1699 ～ 1705 のような口径 10 ～ 12cm の製品が多く、他に 1707 ～ 1709 のような口径８～９cm の小型品や、1706 のような口径 14cm 程度の大型品がある。体部から口縁にかけてはやや外反させながら、外側に引き出す形状のものが多いが、1708 のように湾曲させるものもある。基本的に体部内面をナデ調整、外面は粗い指オサエあるいはナデ調整、口縁部には横ナデを施すが、1699・1702・1703 のように、強い横ナデによって体部外面に段が生じているものもある。1704・1705・1709 は摩滅が激しく、調整などは不明である。

他に山茶碗、土師質土器の小片が出土している。これら出土遺物は 13 世紀前葉～後葉にかけてのものである。よって、遺構の帰属年代もその時期に比定されよう。

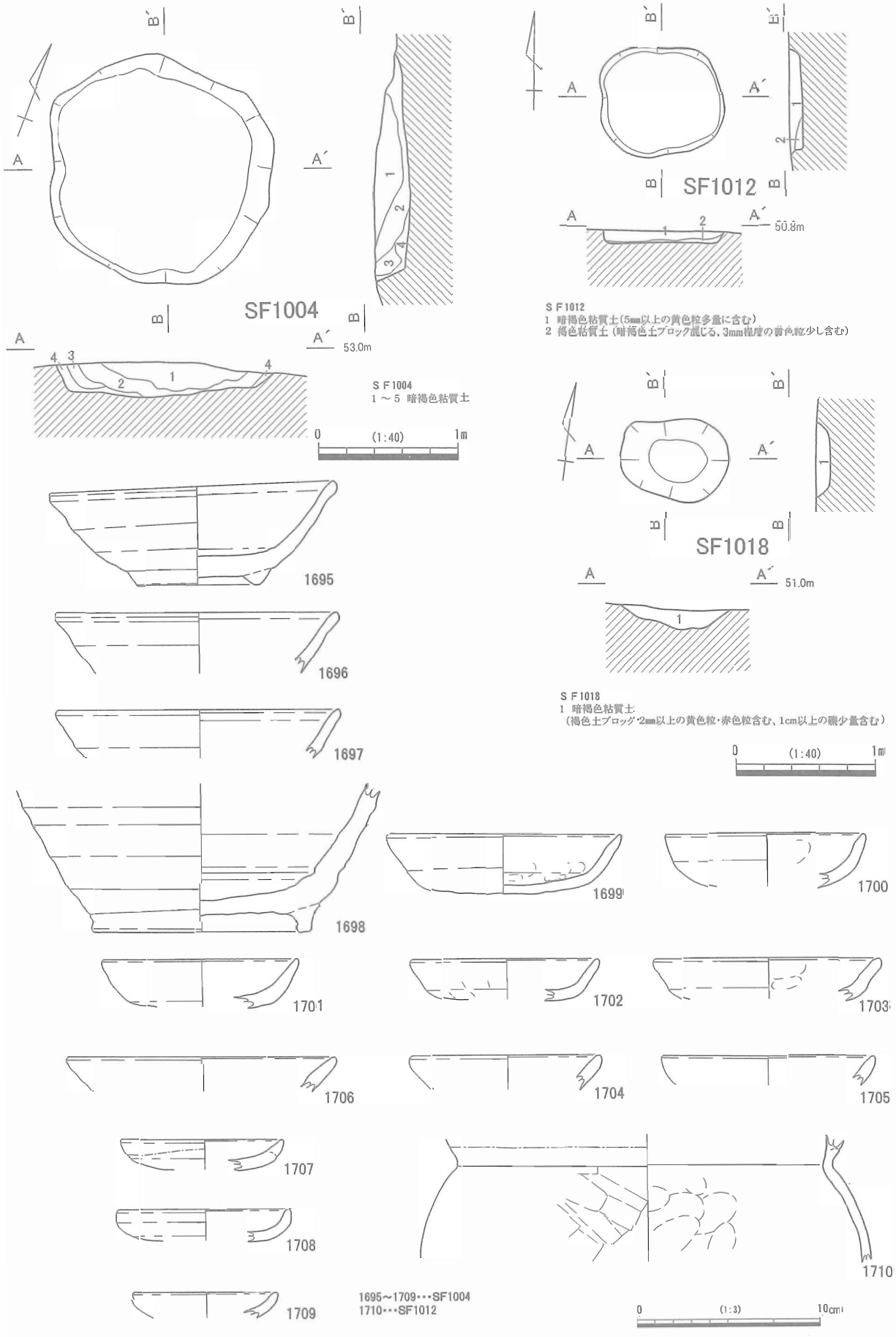


図 227　1区の土坑実測図・出土遺物

SF1012（図227）

1区南端のH5区に位置する。平面形は楕円形で、長軸が0.9m、短軸が0.8mを測り、検出面からの深さは0.1mと浅い。底面は平坦で、周縁部はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分層され、1層は暗褐色粘質土、2層は褐色粘質土である。

遺物は1層から出土している。1710は土師質土器の内耳鍋である。口縁部が欠損しているが、くの字形内耳鍋の頸部破片である。外面はナデ、内面は指頭痕の調整がわずかにみられるが、摩滅が激しく明瞭ではない。使用時の煤は見られない。

他に土師質土器片が1点出土しているが、小片で図化は不可能であった。出土遺物に乏しいが、内耳鍋の年代観から15世紀中葉～16世紀代の遺構と推定される。

SF1018（図227）

1区南西のG6区に位置し、SD1001の南に隣接する。平面形は不整形な楕円形で、長軸は0.8m、短軸は0.6mを測る。底面は碗状となり、検出面からの深さは0.1mである。埋土は褐色土のブロックなどを含む暗褐色粘質土の単層である。

遺物は埋土から土師質土器の破片が出土した。小片につき図示はできなかったが、胎土や焼成状況からくの字形内耳鍋と考えられるため、遺構は15世紀中葉～16世紀代に帰属するとみられる。

SF2011（図228）

2区北部のC11区に位置し、SD2003とSD2004に挟まれた場所にあたる。平面形は楕円形で、長軸1.3m、短軸0.9m、検出面からの深さは0.2mである。底面はほぼ平坦で、北側はテラス状となる。埋土は暗褐色粘質土が主体となる2層に分層され、1層には礫を多く含んでいる。

1711は土師質土器の皿である。非ロクロ成形品で、器壁は薄く、比較的硬質に焼成される。1712は擂鉢の口縁部で、内外面に鉄釉が施される。登窯11小期に位置づけられよう。

この他陶器の小片が3点出土しているが、図化不可能であった。遺物の年代観から、本遺構は19世紀中葉に位置づけられる。

SF2013（図228、図版64）

2区北部のC12区に位置し、SD2003の西側に近接する。平面形は隅丸長方形で、長軸は1.0m、短軸は0.5m、検出面からの深さは0.15mである。底面は平坦となる。埋土は暗褐色粘質土が主体であり、1層には礫や黄色粒子を多く含む。

出土遺物は検出面付近より出土した、1713の土師質土器の皿である。胎土は橙色で、薄手ではあるが硬質に焼成される。歪みが大きく、外面は指頭痕が残る指オサエによる調整で、内面はナデ調整である。16世紀後葉～17世紀前葉の製品と見られ、遺構の帰属年代もその頃と推定される。

SF2016（図228）

2区北東部のB13区に位置し、SH2008と重なる位置にある。平面形はほぼ円形で直径は1.1m、深さは検出面から0.13mである。底面は緩やかな皿状を呈する。

出土遺物は小破片であり図化不可能であるが、山茶碗・土師質土器皿・須恵器が埋土内から出土した。こうした遺物から、遺構の帰属年代は12～13世紀代と推定される。

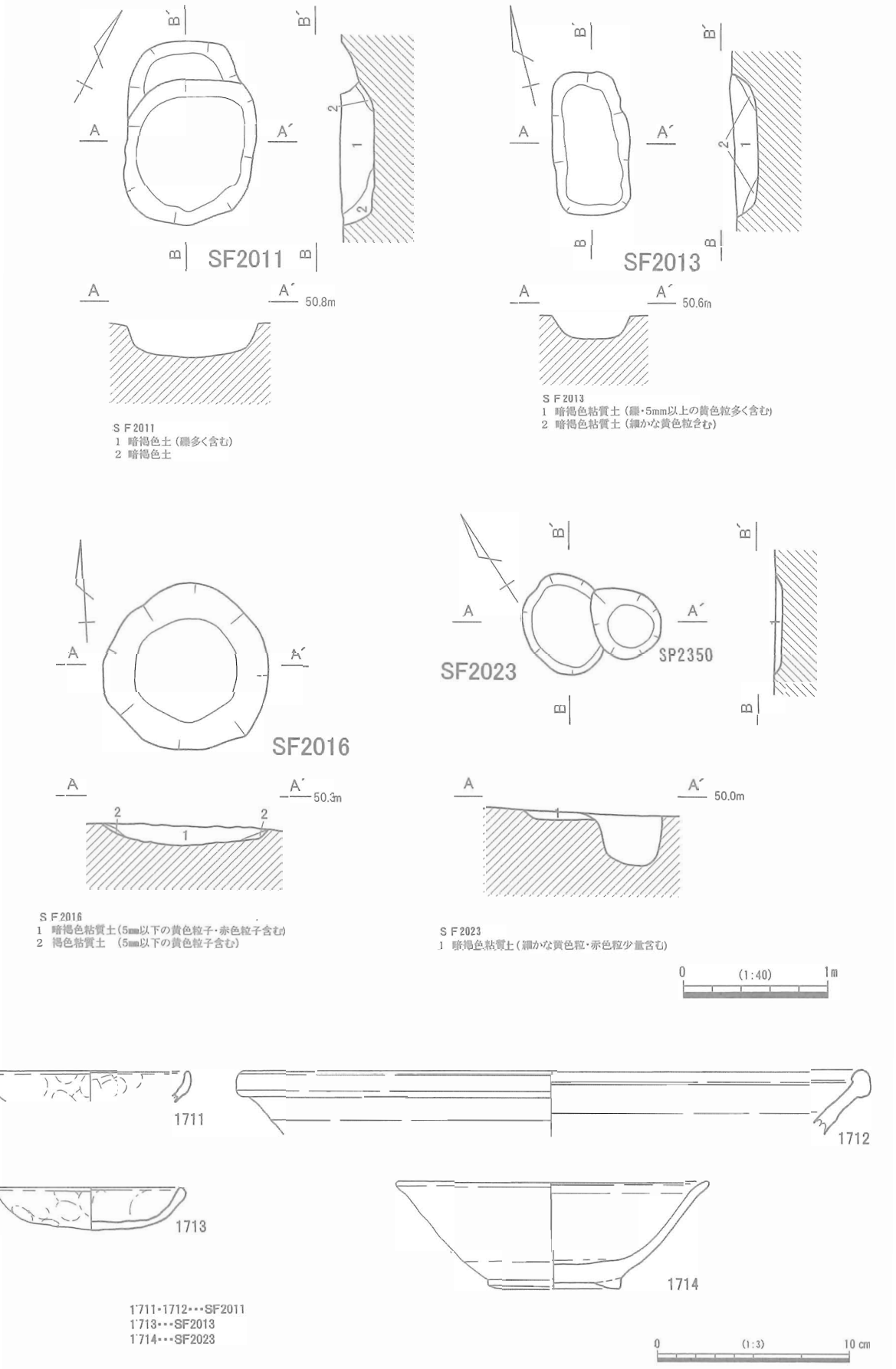


図 228　２区の土坑実測図・出土遺物

SF2023（図 228、図版 64）

２区北東のＣ 14 区に位置し、SH2008 の柱穴 SP2350 と切合い関係にあり、これよりも古い。残存部の平面形はほぼ円形で、直径は 0.7 ｍである。深さは 0.05 ｍと極めて浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質土の単層である。

検出面付近から 1714 の山茶碗の破片がまとまって出土しており、1/2 程度にまで復元できた。器壁はやや厚く、口縁部の外反は弱い特徴があり、高台は粗雑で、下部には砂目が残る。渥美湖西産の皿－１期の製品であろう。

他にも山茶碗の小片が出土していることから、遺構は 13 世紀前葉の年代観が与えられ、SH2008 との切合い関係にも矛盾はない。

SF3004（図 229）

３区北西端のＢ 19 に位置し、SD3005 と一部切合い関係にあり、これよりも新しい。遺構の北側は調査区外となるが、平面形は隅丸方形になると見られ、検出した東西の最大長は 1.2 ｍである。検出面からの深さは 0.15 ｍであった。埋土は暗褐色粘質土の単層で、黄色土ブロックを含んでいる。

1715 は用途不明の金属製品である。棒状鉄製品の周囲に木質が残存していることから、何らかの木製品の一部を留めていた釘である可能性が高い。土器類は図化が不可能な程の小片であったが、土師質土器の鍋あるいは皿とみられる破片が６点出土している。これらから、中世後期以降の遺構と考えられるが、隣接する SF3005 と同様、近世の遺構である可能性が高い。

SF3005（図 229）

３区北西隅のＢ 19 区に位置する。北側は調査区外となり、南側は SD3003 に切られる。平面形は検出された部分から推測すると隅丸長方形、あるいは楕円形であったと考えられる。最大長は東西長 1.9 ｍで、底面は平坦となる皿状を呈し、検出面からの深さは 0.12 ｍと浅い。埋土は暗褐色粘質土が主体で、１層には炭化物や黄色粒子が含まれる。

出土遺物は 1716 ～ 1720 に示した。1716 は近世美濃窯産の灯明皿で、登窯第８～ 10 小期に位置づけられる製品である。底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。1717 は瀬戸美濃産施釉陶器の天目茶碗である。口縁部のみの破片であるが、大窯段階の製品と考えられる。1718 は土師質土器皿の口縁部破片である。非ロクロ成形品で、器壁は厚手となり、胎土は灰白色を呈する。外面には指頭の調整痕が残る。1719･1720 は土師質土器内耳鍋の口縁部破片である。内彎形内耳鍋と見られ、外面には使用時の煤が付着する。

この他、施釉陶器、土師質土器などの小片が出土している。出土遺物の下限は 18 世紀後葉～ 19 世紀中葉であることから、本遺構の年代もその時期に求められよう。

SF3008（図 229）

３区北東隅のＢ 19 区に位置する。平面形はほぼ円形で、直径は 0.8 ｍである。底面は平坦で、検出面からの深さは 0.1 ｍの浅い皿状となる。埋土は暗褐色粘質土を主体として、炭化物や焼土粒、黄色土ブロックを含んでいる。

遺物は山茶碗や土師質土器が出土しているが、いずれも小破片であり、図化は不可能であった。土師質土器には内耳鍋の体部破片とみられる遺物があることから、本遺構は少なくとも中世後期以降に位置づけられよう。

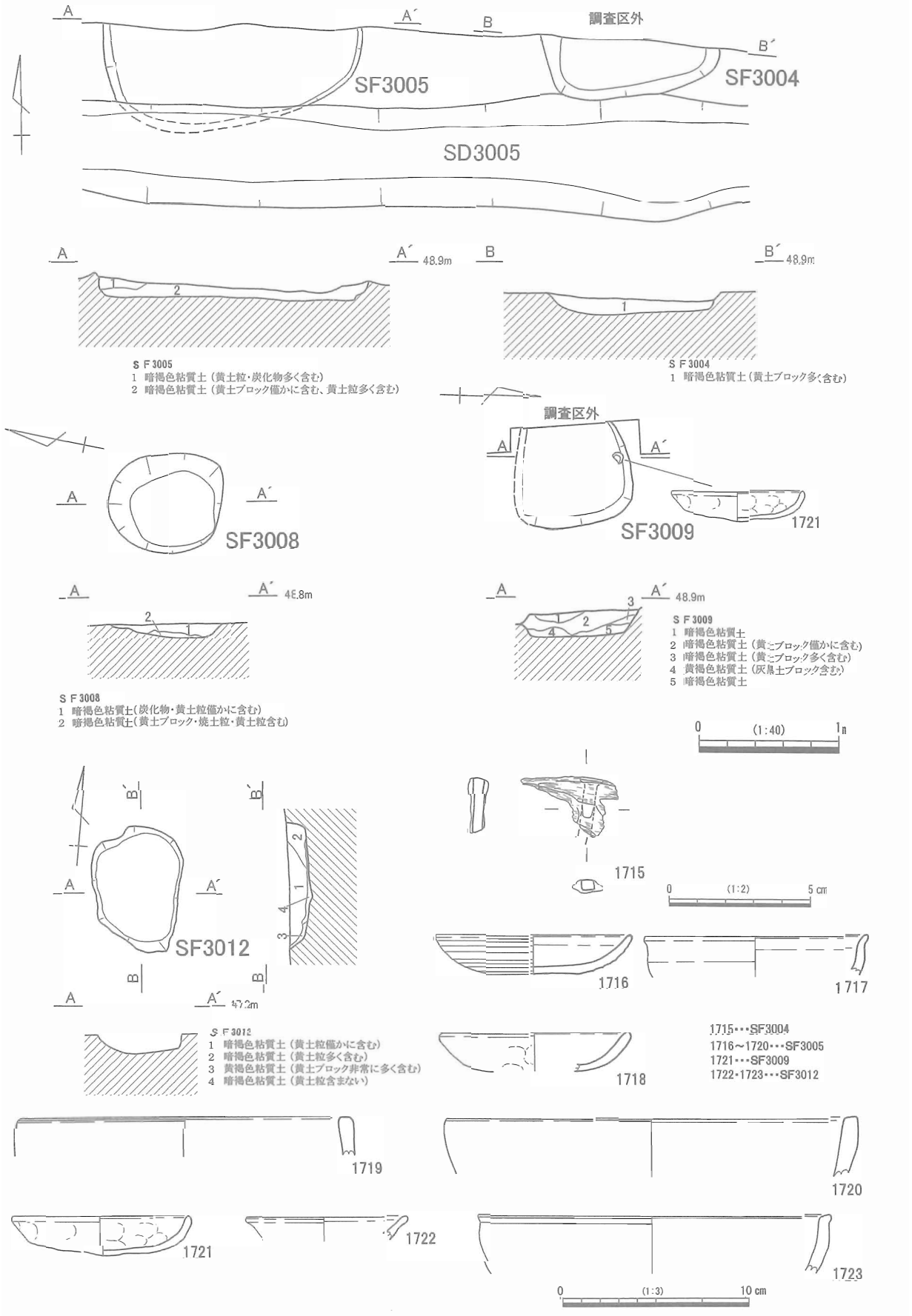


図 229　３区の土坑実測図・出土遺物（１）

SF3009（図229、図版64）

3区北西端のC 19区に位置する。西側は調査区外となっており、南側は不明瞭であり、上端を検出することができなかった。平面形はややいびつな隅丸方形であると推測できる。底面は平坦で皿状となり、検出面からの深さは0.2 m程度であった。埋土は暗褐色粘質土を主体として、5層に分層され、2～3層には黄色土がブロック状に入っている。

遺物は底面付近より出土している。1721は土師質土器の皿である。ほぼ完形品で、胎土は灰白色を呈する。内外面に指頭による調整が残り、内面は不鮮明ながらナデ調整がなされたとみられる。完形品の1721が1点のみ出土していることから、何らかの埋納行為によるものと考えられる。

遺物は16世紀後半～17世紀前葉の製品とみられるため、遺構の帰属年代もその頃と考えられる。

SF3012（図229）

3区南部のF 23区に位置する。平面形は不定形で、南北最大長は0.9 m、東西最大長は0.6 mで、検出面からの深さは0.2 mで、やや凹凸はあるが底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、黄色土のブロックや粒子を含んでいる。

出土遺物は1722・1723に図示した。1722は山茶碗の小碗である。比較的薄手で口縁部はわずかに外反する。1723は土師質土器内耳鍋で、内彎形に分類される口縁部の破片である。外面には煤が付着する。

この他に土師質土器の小破片が出土している。出土遺物が少なく、遺構の年代比定は困難であるが、内耳鍋の年代観から16世紀中葉～後葉とみられる。

SF3014（図230）

3区南部のE 23区に位置し、SH3002の北側、SH3004の西側に隣接する。平面影は隅丸長方形で、南北の長軸は1.2 m、東西の短軸は0.9 mである。底面は比較的平坦で、深さは0.1 mである。埋土は暗褐色粘質土を主体として、黄色土粒子やブロックを含む。

底面付近から土師質土器、陶器の破片が出土しているが、いずれも微細な破片であり、図化は不可能であった。このうち、陶器片は瀬戸美濃産の大窯段階の皿とみられる。

出土遺物がごくわずかであり、遺構の年代比定は困難であるが、16世紀代と捉えておきたい。

SF3017（図230）

3区南東部のG 25区に位置し、SF3020に隣接するする。平面形はほぼ円形で、直径は1.0 mである。底面がほぼ平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは0.2 mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とするが、南西部には黄色土のブロックを多く含む層が入り込んでいる。

出土した1724・1725は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。1725は小型品で、浅いつくりの製品である。1724は摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、口縁部は横ナデ調整が施されていたとみられる。

他にも図化不可能な土師器及び土師質土器の小片が出土している。わずかな遺物による遺構の年代比定は困難であるが、中世前期の遺構と考えられる。

SF3018（図230、図版31）

3区南部のF 23区に位置し、SH3002及びSF3012に近接する。東側の一部は攪乱により破壊されているが、平面形はほぼ円形であったと見られ、直径は0.8 mである。底面はほぼ平坦で皿状を呈し、検出面からの深さは0.15 mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、下層には黄色土のブロックを多量

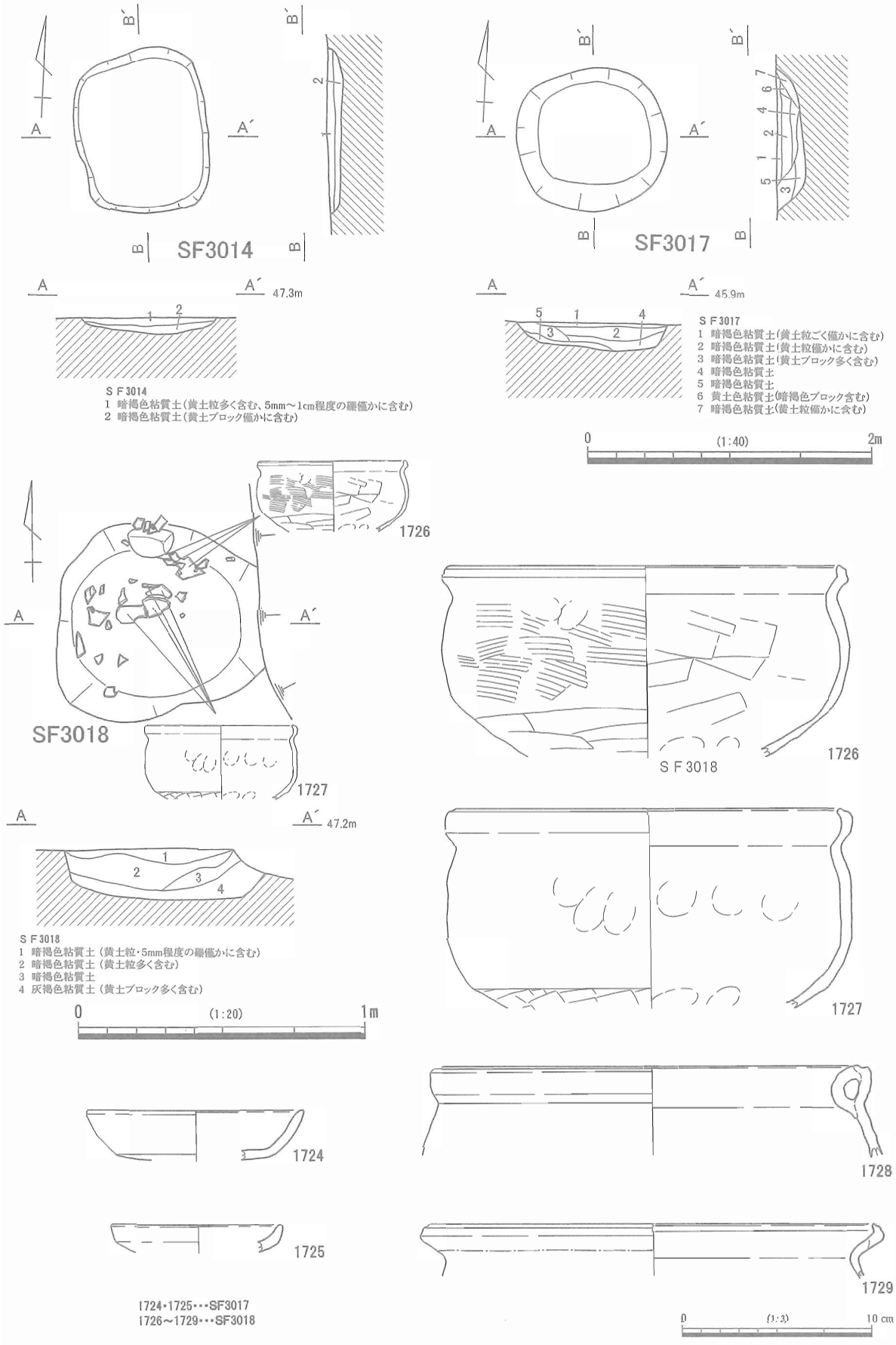


図230　3区の土坑実測図・出土遺物（2）

に含み、上層にも黄色土の粒子を含んでいる。遺物は遺構底部付近から内耳鍋がまとまって出土した。少なくとも4個体の破片が出土しており、土坑内に廃棄された可能性がある。

出土した内耳鍋のうち、図化が可能であったのは1726～1729の4点である。すべてくの字形内耳鍋に分類されるもので、他にも接合を確認することはできなかったが、多数の体部破片が出土している。1726は体部下半にヘラケズリを施し、体部上半はハケ及びナデ調整を施す。体部外面には煤が多量に付着している。1727と1728の内耳部分は同一個体である。1727は体部下半にヘラケズリが認められるものの、体部上半から口縁部にかけてナデ調整のみで仕上げられる。体部外面の下半には被熱がみられるとともに、全体的に薄く煤が付着し、底部内面は薄黒い変色がみられる。1726と比べて口縁端部が若干長くなる特徴がある。1729は口縁部破片であるが、頸部から口縁部の屈曲が他と比べてかなり強い。

これら遺物の特徴から、本遺構は15世紀中葉～16世紀中葉頃の年代観が与えられよう。

SF3019（図231）

3区南東部のE 25区に位置し、SH3003の東側に近接する。平面形は楕円形で、南北北長は0.7 m、東西最大長は0.55 mである。底面はほぼ平坦で、深さは0.25 mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、下層には黄色土のブロックが多量に含まれる。底面に接して長さ20 cmの礫が出土しているが、意図的に入れられたものかどうかは判然としない。

1730・1731は土師質土器の皿である。1730は非ロクロ成形品の口縁部の破片である。口径は8.6cmに復元される小型品である。1731はロクロ成形品であるが、摩滅がかなり激しい。胎土は橙色を呈し、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、薄手に仕上げられる。

この他、土師質土器の小破片が出土したが、図化は不可能であった。土師質土器皿の年代観から、本遺構は16世紀後葉～17世紀前葉頃の年代観が与えられよう。

SF3020（図231）

3区南東部のG 25区に位置し、SF3017に隣接する。平面形はほぼ円形で、直径1.2 mを測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは0.1 mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、黄色土のブロックや粒子が含まれる部分もある。

遺物は多くはないが、1732を図示した。1732は渥美湖西産の山茶碗で、口縁端部は外反せずに厚手である。

この他、土師器あるいは土師質土器の破片が出土しているが、微細な破片であり器種の判別をすることができなかった。出土遺物が僅少であり、遺構の年代を押さえるのは困難であるが、少なくとも1732が示す13世紀中～後葉以降に埋没した可能性が高い。

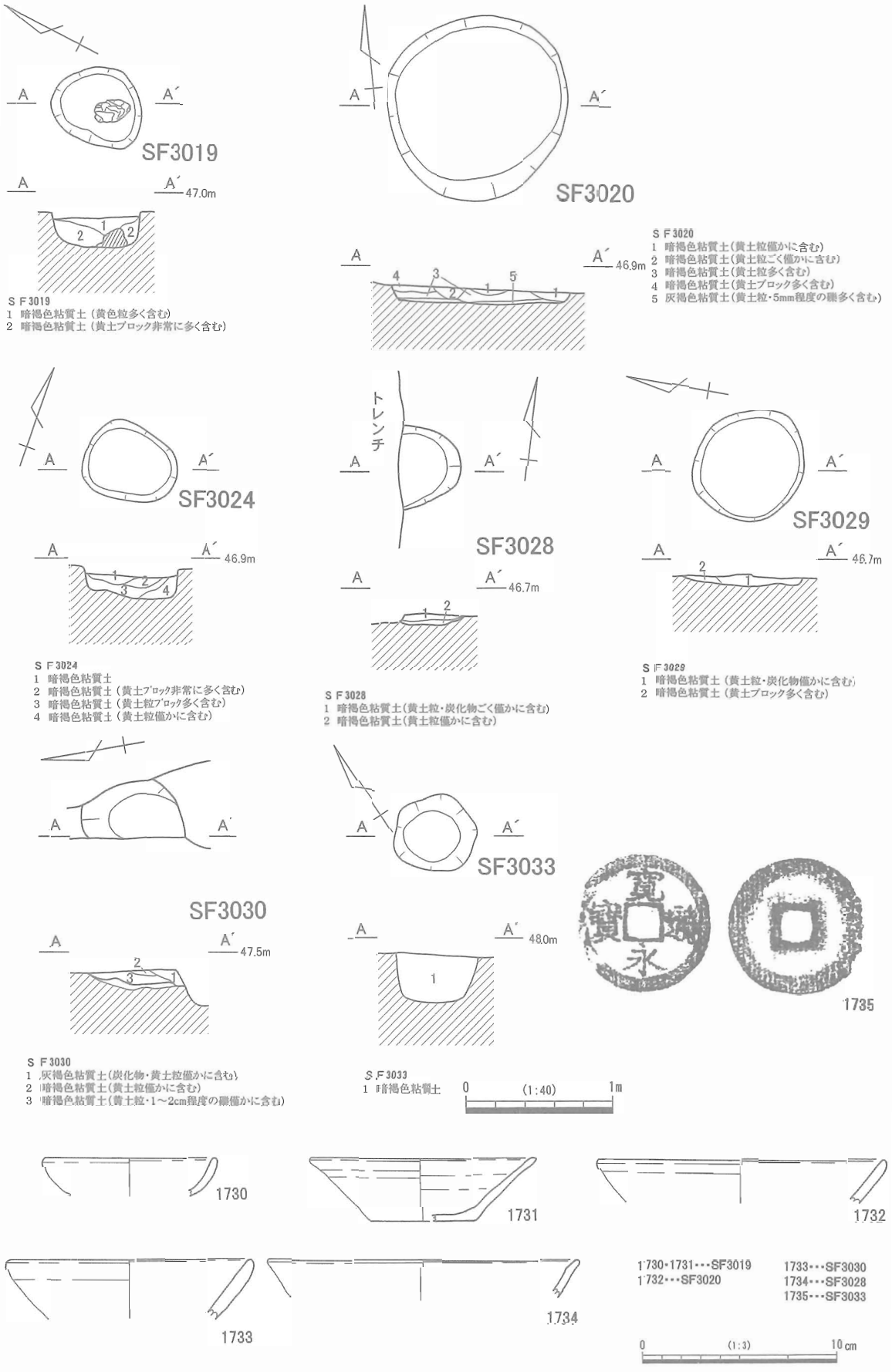
SF3024（図231）

3区東部のF 25区に位置し、SH3004の東に位置する。平面形はほぼ円形で、直径は0.6 m、検出面からの深さは0.2 mである。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、黄色土のブロックや粒子を含む。

遺物は土師質土器の破片が出土したのみである。微細な破片のため器種等は明確でないが、内耳鍋の体部破片と推定されることから、本遺構は少なくとも15世紀中葉以降に埋没したと考えられる。

SF3028（図231）

3区東部のF 25区に位置する。西側がトレンチにかかっているが、平面形は円形か楕円形であったと推測できる。南北の最大径は0.6 mで、皿状となる底面の検出面からの深さは0.1 mである。埋土は



S F3019
1 暗褐色粘質土（黄色粒多く含む）
2 暗褐色粘質土（黄土ブロック非常に多く含む）

S F3020
1 暗褐色粘質土（黄土粒僅かに含む）
2 暗褐色粘質土（黄土粒ごく僅かに含む）
3 暗褐色粘質土（黄土粒多く含む）
4 暗褐色粘質土（黄土ブロック多く含む）
5 灰褐色粘質土（黄土粒・5mm程度の礫多く含む）

S F3024
1 暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土（黄土ブロック非常に多く含む）
3 暗褐色粘質土（黄土粒ブロック多く含む）
4 暗褐色粘質土（黄土粒僅かに含む）

S F3028
1 暗褐色粘質土（黄土粒・炭化物ごく僅かに含む）
2 暗褐色粘質土（黄土粒僅かに含む）

S F3029
1 暗褐色粘質土（黄土粒・炭化物僅かに含む）
2 暗褐色粘質土（黄土ブロック多く含む）

S F3030
1 灰褐色粘質土（炭化物・黄土粒僅かに含む）
2 暗褐色粘質土（黄土粒僅かに含む）
3 暗褐色粘質土（黄土粒・1～2cm程度の礫僅かに含む）

S F3033
1 暗褐色粘質土

図 231　３区の土坑実測図・出土遺物（３）

暗褐色粘質土を主体とし、上層には炭化物を少量含んでいる。

出土遺物は1734の山茶碗である。渥美湖西産の口縁部破片とみられ、かなり薄手である。この他土師質土器とみられる小片が出土しているが、器種不明である。出土遺物に乏しいことから、遺構の年代比定は困難であるが、少なくとも山茶碗が示す12世紀中～後葉以降に埋没したと考えられる。

SF3029（図231）

３区東部のＦ25区に位置する。平面形は円形で、直径は0.8ｍである。底面は浅い皿状となり、検出面からの深さは0.05ｍである。埋土は暗褐色粘質土が主体で、わずかに炭化物を含み、北側には黄色土ブロックを多量に含む埋土が認められた。

出土遺物は図化が不可能な小片であり、器種を特定することはできないが、土師質土器内耳鍋とみられる破片が含まれる。このことから、本遺構は少なくとも15世紀中葉以降に埋没したものと推定される。

SF3030（図231）

３区北部のＥ23区に位置する。西側でSD3001と重複し、これを切っており、東側は攪乱によって失われている。残存している部分から平面形は円形と推測可能で、残存部の南北最大長は0.6ｍで、検出面からの深さは0.15mを測る。埋土は暗褐色粘質土を主体するが、炭化物を若干量含んでいる。底面に焼土面が認められている。

1733は山茶碗の口縁部破片である。口径は12.4cmに復元され、小型化が進んだⅢ－３期に降る渥美湖西窯の製品とみられる。

他に土師質土器の体部破片とみられる極めて小さな破片が出土したが、器種等の判別は不可能であった。出土遺物が少ないため、遺構の年代は判然としないが、少なくとも14世紀初頭以降に埋没したものと考えられる。３区北側には焼土面を持つ近世墓が存在することから、あるいはそれに関連する可能性もある。

SF3033（図231、図版83）

３区北東のＣ25区に位置し、大溝に伴う残存土塁に近接する。平面形はほぼ円形で、直径0.6ｍ、検出面からの深さは0.3ｍである。埋土は暗褐色粘質土の単層である。

土器類は出土しなかったが、1735の寛永通宝が出土している。土坑上層から出土しており、いわゆる古寛永の特徴を有する。全体に被熱の痕跡が残ることから、火葬墓に伴う遺物と考えられる。本遺構周辺には近世墓が集中することから、17世紀中葉以降の近世墓である可能性もある。

SF4004（図232）

４区東部のＣ17区に位置する。平面形は円形で、直径は1.3ｍを測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは0.1ｍである。埋土は暗褐色粘質土を主体として２層に分層され、１層には炭化物や褐色ブロックを多く含んでいる。

小片であることから図示はできなかったが、１層から山茶碗類の小皿の底部が出土しており、渥美湖西産のⅢ期頃の製品とみられる。遺物が極めて少ないが、遺構の上限年代は13世紀代以降であることは間違いない。

SF4012（図232）

４区南西のＦ16区に位置するSF4013の南西に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は0.8ｍを測る。

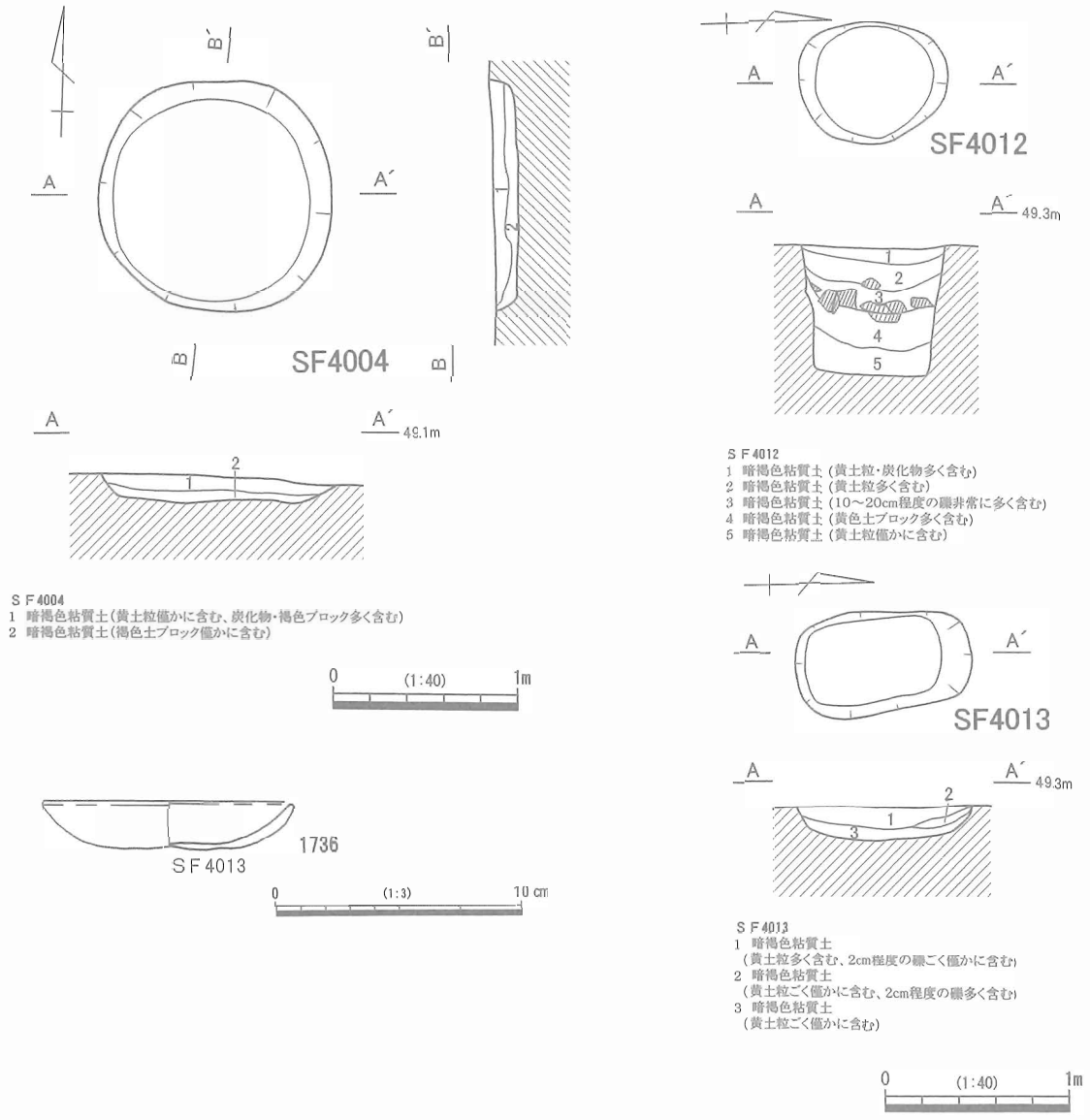


図 232　４区の土坑実測図・出土遺物

底面は平坦で、検出面から深さ 0.7 ｍまでほぼ円筒形に掘り込まれている。埋土は暗褐色粘質土を主体として５層に分層される。２・４層は黄色土のブロックを多量に含み、また３層には長さ 10 ～ 20 cmほどの礫が多量に入っていたことから、人為的に埋められている可能性が高い。

遺物は３層に入っていた礫とともに、常滑産の甕とみられる陶器破片、土師質土器の内耳鍋とみられる体部片が出土しているが、いずれも体部の小片であり、図示は不可能であった。これらは中世後期の所産とみられるため、遺構の年代もその時期にあたると考えられる。

SF4013（図 232、図版 64）

４区南西のＥ 16 区に位置し、SF4012 の北西に近接する。平面形は隅丸長方形で、長軸は 1.0 ｍ、短軸は 0.6 ｍ、検出面からの深さは 0.15 ｍである 。埋土は暗褐色粘質土を主体として、３層に分層され、黄色土の粒子をわずかに含む。

1736は１層から出土した土師質土器の皿である。口縁部の一部が欠損している以外はほぼ完形に復元されることから、埋納品である可能性が高い。非ロクロ成型品で、胎土は肌色に近い灰白色を呈し、かなり薄手に仕上げられている。16世紀後葉～17世紀前葉頃の製品とみられ、遺構の年代を反映するものといえる。

SF6007（図233）

６区中央北部のＧ12区に位置し、SD6002によって北側を破壊されている。平面形は北側が不明であるが、不定形であったとみられ、南北の最大残存長は0.9ｍ、東西長は0.8ｍを測る。検出面からの

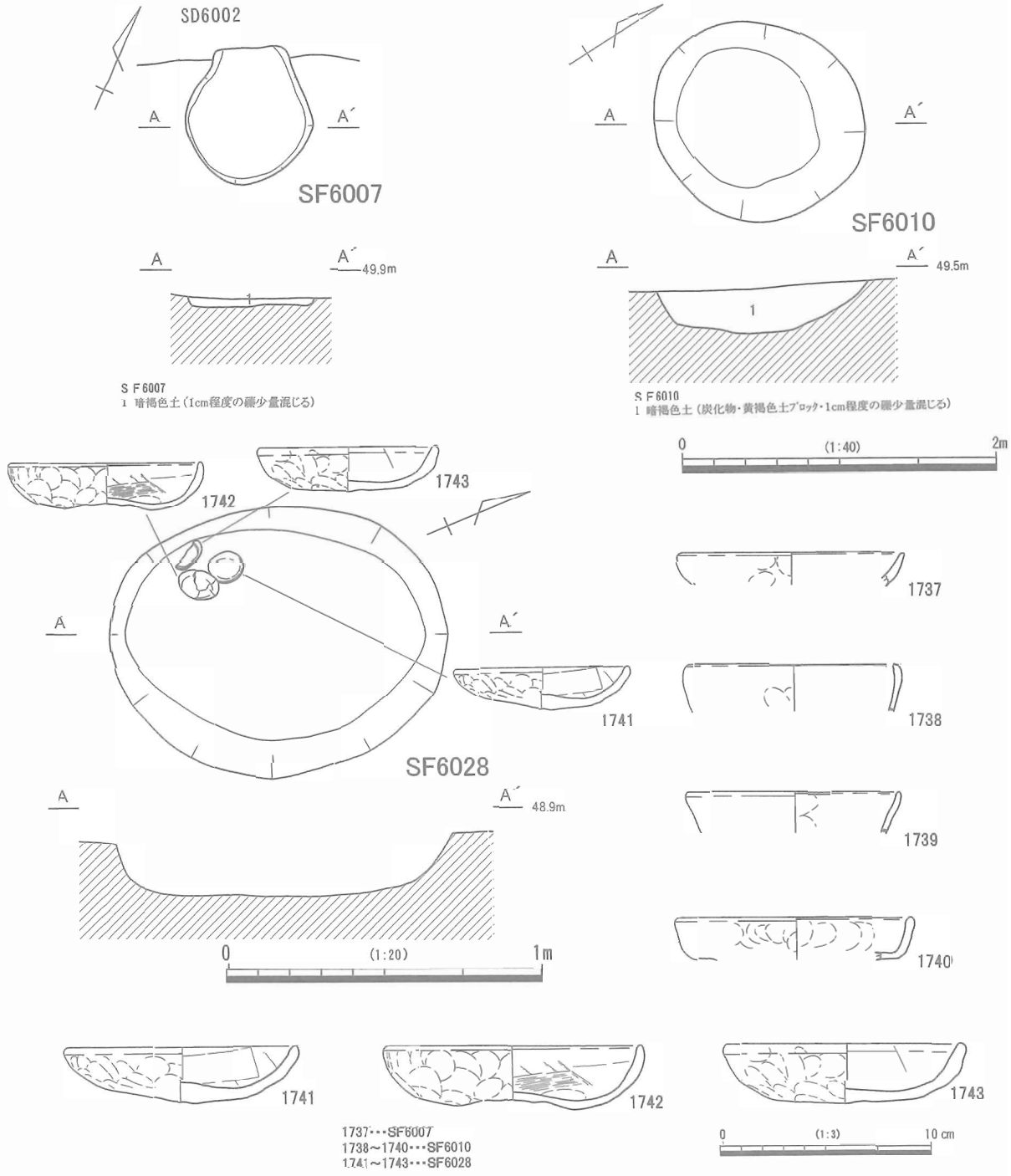


図233　６区の土坑実測図・出土遺物

深さは0.05ｍと極めて浅い皿状の土坑である。埋土は単層の小礫混じり暗褐色土である。

1737は土師質土器の皿で、非ロクロ成形品の口縁部である。胎土は肌色に近い灰白色で、かなり薄手のつくりである。16世紀後葉～17世紀前葉頃の製品とみられるため、遺構の上限年代が押さえられる。本遺構と切合い関係にあり、これよりも新しいSD6002は18世紀後葉～19世紀前葉に埋没したと推定されるため、それ以前には廃絶していたと考えられる。

SF6010（図233）

6区南端のⅠ11区に位置し、SH6004と重複するが、柱穴との切合いがないため、前後関係の把握は難しい。平面形は円形で、直径は1.4ｍを測る。底面は浅い碗状を呈し、検出面からの深さは0.3ｍである。埋土は暗褐色土の単層で炭化物や黄色土のブロックを少量含んでいる。

1738・1739は古代の製塩土器の坏部である。直接接合はしないが、同一個体とみられる。内外面に濃く煤が付着する。1740は埋土上層から出土した土師質土器の皿である。非ロクロ成形品であるが、底部から体部がかなりゆがんでいる。

この他土師器が出土しているが、いずれも小破片のため図化は不可能であった。1421の年代観から、遺構は16世紀後葉～17世紀前葉に位置づけられよう。

SF6028（図233、図版31・54・64）

6区東部のH16区に位置する。SH6012の北東に位置する。平面形は楕円形で南北長軸が1.0ｍ、東西短軸が0.8ｍを測る。底面は皿状となり、検出面からの深さは0.2ｍである。ほぼ完形の土師質土器皿1741～1743が南西隅付近から出土している。これらは底面に接する形で置かれたと考えられることから、他に出土遺物はないものの、墓坑であった可能性がある。

1741～1743は土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形品で、内面はナデ調整、外面はかなり指頭痕が残るかなり粗雑な調整が施される。1741の内面にはナデ調整とともに、部分的なヘラ状工具による調整が認められる。また1742の底部外面の中央部はほとんど未調整となっている。16世紀後葉～17世紀前葉までの年代観で捉えられることから、本遺構もその時期の所産と考えられる。

SF7005・SF7020（図234）

7区東部のG26区に位置する。SF7005とSF7020は重複しており、SF7020の方が新しい。また、SH7014の南東隅の柱穴SP7332とも重なるが、これよりもSF7020の方が新しい。

SF7005の平面形は円形で、直径1.0ｍである。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは0.2ｍを測るSF7020の平面形も円形で、直径は0.8ｍを測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは0.1ｍである。いずれの埋土も暗褐色粘質土の単層であった。

1744～1746はSF7005から出土した土師質土器の皿である。いずれも胎土が灰白色か浅黄橙色の非ロクロ成形品である。1744と1745は口径7～9㎝程度の小型品で、1746は口径11.3㎝に復元される中型品である。調整は口縁部に横ナデを施す点で共通するが、1744と1746は体部外面に弱い段がつくのに対し、1745は口縁部に向かってなだらかに立ち上がる違いがある。

この他、SF7005からは土師器・山茶碗・土師質土器、SF7020からは土師質土器の皿とみられる破片などがそれぞれ出土しているが、小片のため詳細は不明である。

SF7005は土師質土器皿や山茶碗の出土から、13世紀代の年代観が与えられ、これよりも新しいSF7020はそれ以降に位置づけられよう。

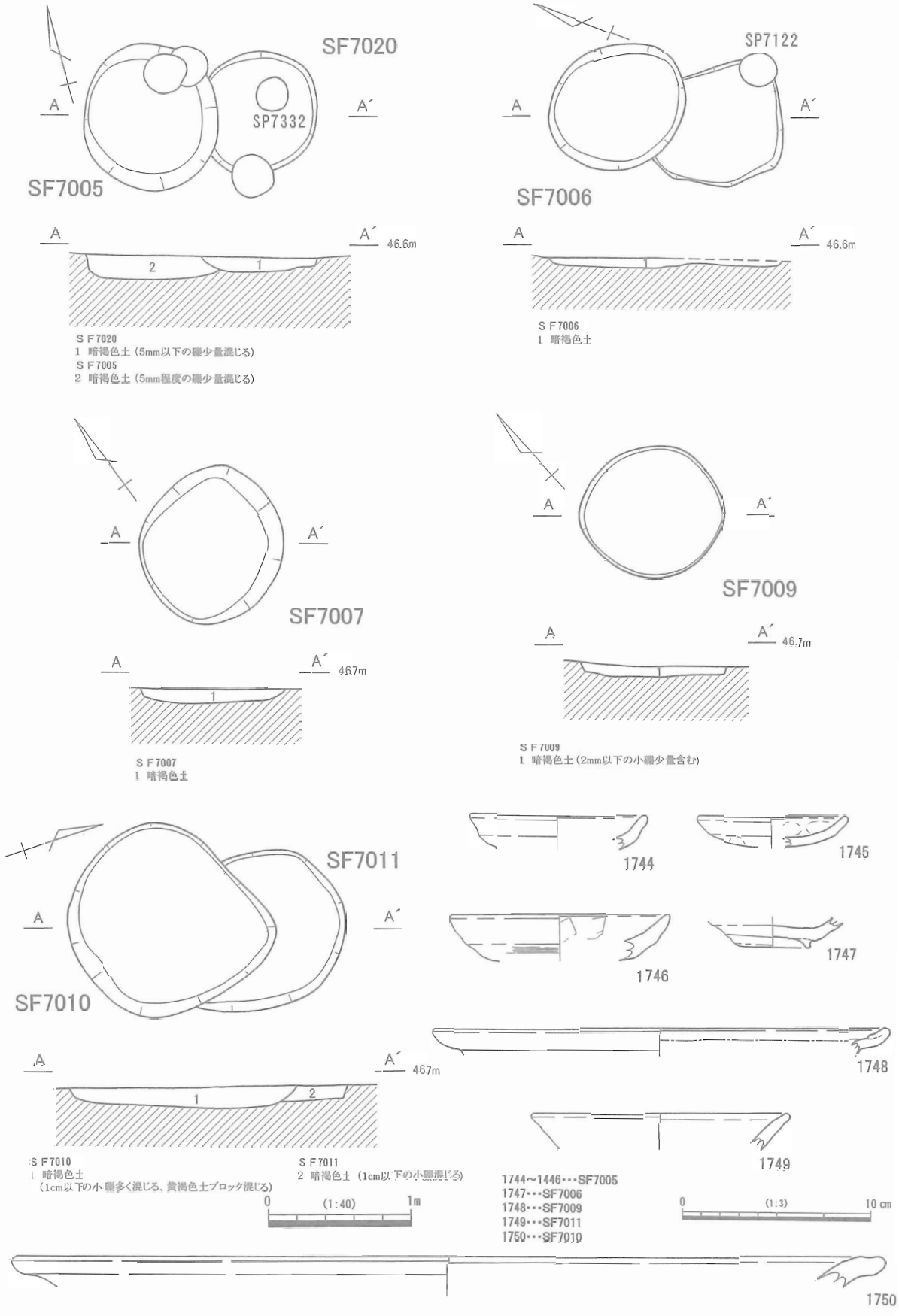


図234　7区の土坑実測図・出土遺物（1）

SF7006（図 234）

7 区東部の H 26 区に位置し、SF7005 の南に隣接する。平面形は円形で、直径 1.0 ｍを測る。底面は平坦で、検出面からの深さが 0.05 ｍの極めて浅い皿状となる。南側に浅い落ち込みを伴っているが、本遺構との新旧関係は明らかでない。

出土遺物は 1747 の山茶碗類の小碗の底部である。底部内面は重ね焼き痕とともに、顕著な使用痕が確認される。渥美湖西産の製品で、Ⅰ－２期に位置づけられよう。他に土師質土器の小片が出土している。出土遺物から、本遺構には 12 世紀後葉の年代観が与えられよう。

SF7007（図 234）

7 区南東の H 25 区に位置し、SF7009 の北に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は 1.0 ｍを測る。底面が平坦な皿状を呈し、検出面からの深さは 0.1 ｍである。

遺物は体部小片であるため図示できなかったが、土師質土器と渥美産陶器の甕が出土している。出土遺物に乏しいため、年代比定は困難で阿あるが、12 ～ 13 世紀頃の遺構と推定される。

SF7009（図 234）

7 区南東のⅠ 25 区に位置し、SF7007 の南に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は 1.0 ｍである。底面は平坦で、検出面からの深さ 0.1 ｍの浅い皿状を呈する。

遺物は土師質土器の伊勢鍋（1748）が出土している。口縁端部を図示し、口径を 23.7 ㎝と復元したが、摩滅も激しいため、詳細な形状、調整は不明である。13 世紀代に位置づけられるとみられる。他に出土遺物もないことから、根拠は乏しいものの、本遺構の帰属年代は 13 世紀代と推定される。

SF7010・SF7011（図 234）

7 区の南東のⅠ 25 区に位置し、SF7009 の西側に近接する。SF7010 と SF7011 は重複しており、SF7010 の方が新しい。SF7010 はややいびつな隅丸方形で、一辺が 1.2 ｍである。検出面からの深さは 0.15 ｍで、底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土で、黄色土のブロックを含む。SF7011 は SF7010 に切られているため平面形は不明瞭だが、短軸が 1.2 ｍの楕円形と推測できる。検出面からの深さは 0.1 ｍである。

SF7010 からは中世陶器の甕の口縁部（1750）が出土した。渥美窯の製品とみられ、口径 45.5 ㎝に復元される大型品である。SF7011 からは山茶碗の口縁部（1749）が出土した。渥美湖西窯の製品で、口径 13.4cm に復元される小型化が進んだ段階のⅢ－２～３期に位置づけられよう。

この他土師質土器の微細な破片が出土している。これら遺物から、SF7011 は 13 世紀中～後葉、SF7010 は 12 世紀代を上限として、それよりも古くなる年代観が与えられよう。

SF7014（図 235）

7 区南東のⅠ 25 区に位置する。平面形は円形で、直径は 0.7 ｍを測る。検出面からの深さは 0.15 ｍで、底面がほぼ平坦な皿状となる。埋土は暗褐色土で、黄褐色ブロック及び小礫を含む。

遺物は山茶碗の口縁部破片（1751）が出土したのみである。渥美湖西産のⅢ期頃の製品と推定される。出土遺物に乏しいため、遺構年代の比定は困難であるが、13 世紀代と推定される。

SF7015（図 235）

7 区南東のⅠ 26 区に位置し、SF7014 の南東に近接する。平面形は円形で、直径は 0.9 ｍを測る。検

出面からの深さは 0.2 ｍで、底面がほぼ平坦な皿状となり、形態的には SF7014 と類似する。

1752 は土師質土器の皿である。摩滅が顕著で、細かい調整は不明であるが、口縁部の強い横ナデにより、体部と口縁部の境に段がつくり出されている。胎土は灰白色である。

この他土師器、須恵器、土師質土器の小破片が出土している。本遺構も出土遺物に乏しいため、遺構年代の比定は難しいが、13 世紀代と推定される。

SF7019（図 235、図版 64）

７区東部の G 26 区に位置し、SH7014 の柱穴 SP7071 と重複し、これよりも新しい。中央部が攪乱によって一部破壊されている。平面形は隅丸長方形で、長軸は 1.1 ｍ、短軸は 0.7 ｍを測る。底面はほぼ平坦となり、検出面からの深さは 0.3 ｍである。埋土は黄褐色土のブロックが混じる暗褐色粘質土である。

1753 ～ 1755 は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。1754 は口径 12.5cm に復元され、内面はナデ調整、外面は指頭痕の残るオサエ調整を施す。胎土は灰白色で、表面がかなり摩滅している。1450 は薄手に作られており、口縁部が直線的に開く形状である。1755 は器壁が厚手で、浅いつくりとなっている。口縁部に横ナデ調整が施される。

この他、土師器、土師質土器の小破片が出土している。1753・1755 は 13 世紀代の製品とみられるが、1754 は 16 世紀代に降る製品とみられるため、本遺構の年代もその時期に求められよう。

SF7021（図 235）

７区東部の G 25 区に位置し、SH7013・7015 に近接する。平面形はやや不整形な隅丸長方形で、南北の長軸は 3.0 ｍ、東西の短軸は 1.3 ｍである。底面は緩やかな起伏があり、検出面からの深さ 0.2 ｍである。

1756 は土師質土器の皿である。非ロクロ成形品の口縁部破片であるが、摩滅が顕著で、調整や形状は不明瞭である。この他土師器、須恵器、土師質土器の小破片が出土している。

出土遺物に乏しいことから、遺構の年代を把握するのは困難であるが、1756 の土師質土器皿が 13 世紀代のものと考えられるため、その時期の遺構と推定される。隣接する SH7013 ～ 7015 が同時期の遺構と考えられることから、関連した遺構である可能性が高い。

SF7025（図 235）

７区南東部の Ｉ 28 区に位置する。平面形は円形で直径 1.0 ｍを測る。検出面からの深さは 0.1 ｍで、底面がほぼ平坦な皿状となる。埋土は炭化物及び黄褐色土ブロックを少量含む。

1757 は山茶碗での口縁部破片である。小片のため不明確であるが、口径は 13.5cm に復元される。渥美湖西産のⅢ－２～３期の製品であろう。

他に出土遺物がないため、遺構の時期を押さえるのは難しいが、少なくとも 13 世紀中～後葉に上限があるとみてよいだろう。

SF7026（図 236、図版 64）

７区東部の G 24 区に位置し、SF7027・7028 に近接する。平面形はほぼ円形で、直径は 1.0 ｍである。検出面からの深さは 0.2 ｍで、底面はほぼ平坦となる。埋土上層には黄褐色土のブロックを多く含む。

出土遺物は 1758 ～ 1761 に図示した。1758 ～ 1760 は土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形

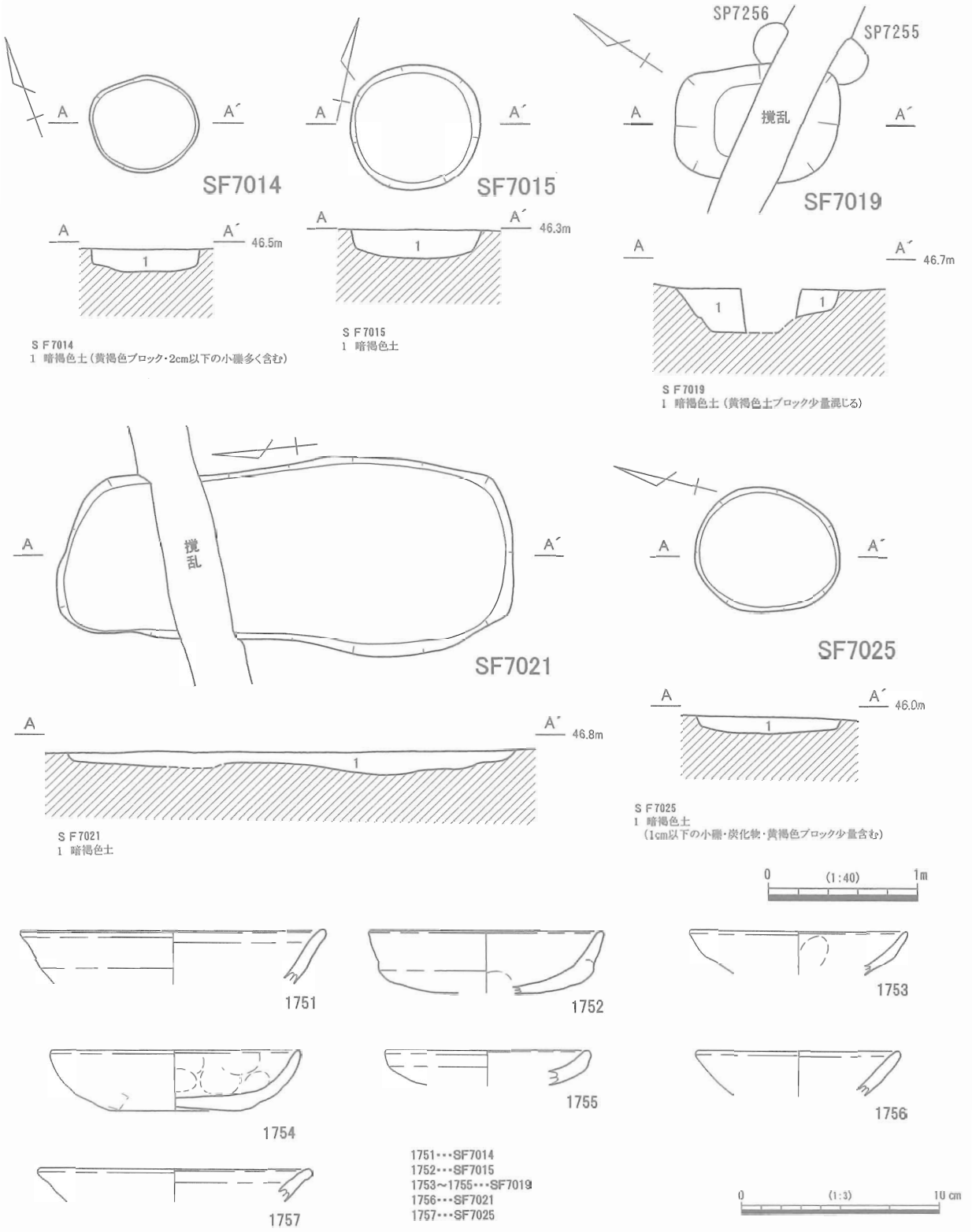


図 235　7区の土坑実測図・出土遺物（2）

品で、口径８～９㎝前後に復元される小型品である。内面ナデ調整、外面は指頭によるオサエ調整を基本としており、胎土は灰白色で、薄手のつくりである。1761 は美濃産の陶器で、灰釉筒形香炉である。登窯７小期に位置づけられる製品である。これら出土遺物の様相から、遺構は 18 世紀中葉の年代観が与えられよう。

SF7029（図 236）

７区西部のＧ 21 区に位置する。平面形は円形で、直径は 1.0 ｍを測る。検出面からの深さは 0.1 ｍと極めて浅く、底面は概ね平坦な皿状となる。

1762・1763 はいずれも渥美湖西産の山茶碗で、1762 は口縁部破片、1763 は底部破片で高台が欠損している。双方、Ⅲ期頃の製品と推定される。

この他、小片のため図示不可能な遺物が数点出土しているが、その中に古志戸呂製品とみられる甕類の破片や同じ時期の製品とみられる天目茶碗の小片がある。出土遺物が乏しいため、遺構の時期を把握するのは困難であるが、少なくとも 15 世紀中～後葉以降に埋没したと考えられる。

SF7031・SF7032（図 236、図版 64）

７区西部のＨ 21 区も位置し、SF7033 の北側に隣接する。SF7031 と SF7032 は重複し、SF7032 の方が新しい。SF7031 の平面形は円形で、直径は 1.1m を測る。検出面からの深さは 0.15 ｍで、底面はほぼ平坦な皿状となる。埋土は暗褐色土を主体とし、下層には炭化物が少量混じる。SF7032 は SF7031 とほぼ同様の規模形状であり、直径 1.1 ｍ、検出面からの深さは 0.1 ｍである。埋土は暗褐色土の単層であるが、黄褐色土のブロックを少量含む点で、SF7031 と若干の相違がある。

1765・1766 は SF7031 から出土した土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形品で、胎土は灰白色を呈する。1765 は口径 12.9cm に復元される中型品で、口縁部の強い横ナデにより、体部との境に明瞭な段がつくり出される。1766 は口径 10.5 ㎝に復元される小型品で、口縁部は横ナデされるものの、体部から口縁部は緩やかに湾曲する。1764 は SF7032 から出土した土師質土器の皿で、やはり非ロクロ成形品である。胎土は密で、浅黄橙色を呈する。口縁部は横ナデが観察されるが、やや厚いつくりとなっている。

この他 SF7031 からは土師器、須恵器、土師質土器の小片、SF7032 からは土師貿土器の小片が出土している。SF7031 出土遺物は 13 世紀代、SF7032 出土遺物は 16 世紀代に位置づけられる製品とみられることから、遺構もその時期のものと推定される。

SF7033（図 236）

７区西部のＨ 21 区に位置し、SF7031・7032 の南に隣接する。平面形は円形で、直径は 1.0 ｍである。検出面からの深さは 0.1 ｍで、底面が平坦な皿状を呈する。埋土は暗褐色土で、炭化物を少量含んでいる。

埋土上層から 1767 の龍泉窯系の青磁蓮弁文折縁皿が出土している。薄い胎土に厚く緑灰色の釉がかかり、体部外面に蓮弁文が施文されている。13 世紀後葉～ 14 世紀前半に位置づけられる製品であることから、本遺構の時期もその頃と考えられる。

SF7035・SF7036（図 237）

７区西部のＧ 20 区に位置している。SF7035 と SF7036 は重複し、SF7036 の方が新しい。また SH7003 とも重複しており、SF7036 が SH7003 南西隅の柱穴を破壊している。SF7035 の平面形は円形で直径 1.1 ｍ、検出面からの深さは 0.15 ｍである。埋土は暗褐色土で、黄褐色土のブロックを少量含

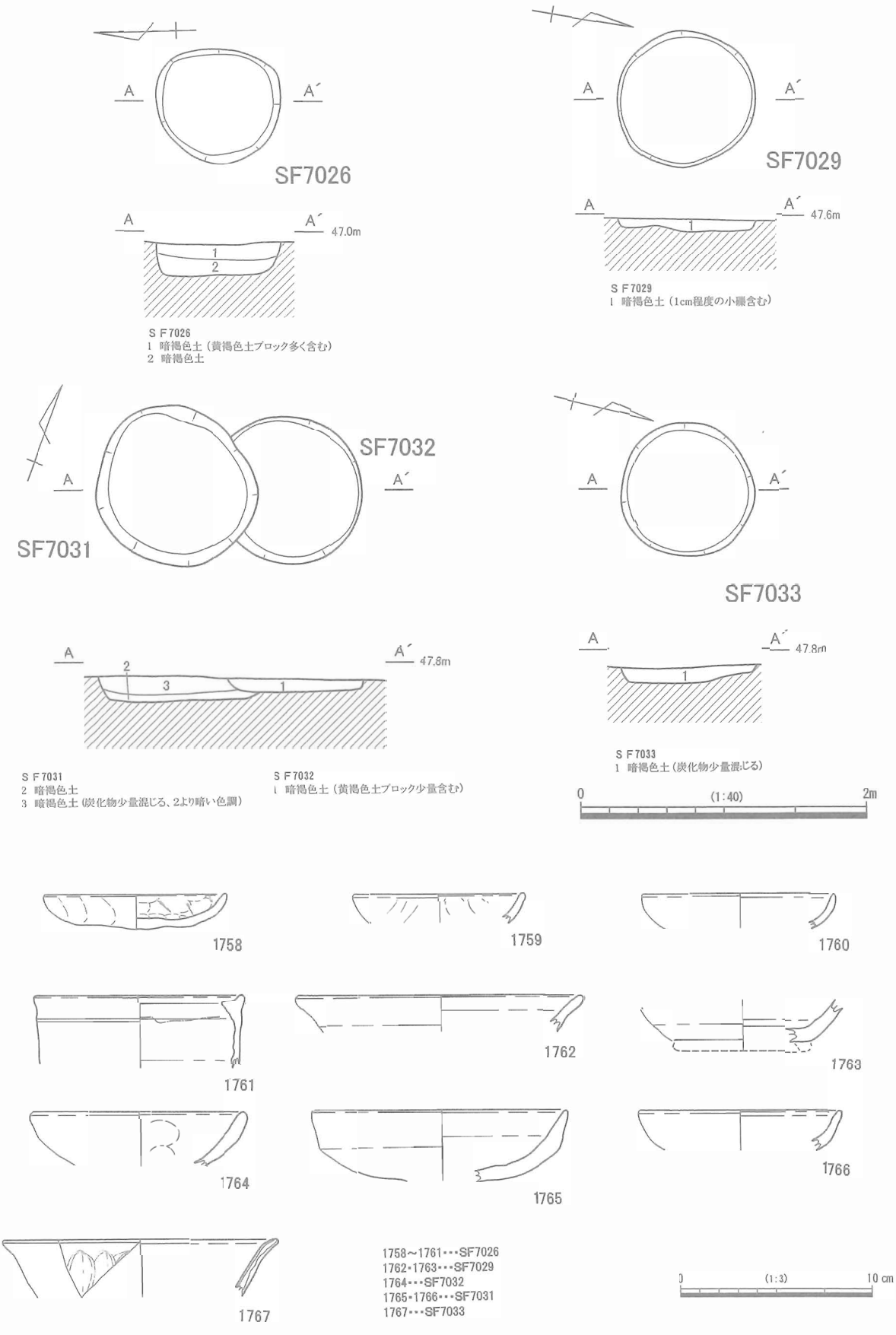


図 236　7区の土坑実測図・出土遺物（3）

む。SF7036の平面形は不整形な円形で、直径は0.7ｍである。底面は椀状を呈し、検出面からの深さは0.3ｍである。埋土には黄褐色土のブロックを多く含むとともに、炭化物も認められる。前述のようにSH7003南西隅の柱穴を破壊しているが、位置的にはほぼ重なる位置にあるため、SF7036は柱の抜き取り穴である可能性もある。

遺物はSF7036の埋土から出土した土師質土器の皿とみられる破片があるが、図示は不可能な程の小片である。これ以外に出土遺物がないことから、遺構の時期を把握するのは困難であるが、16世紀代～近世にかけての遺構であるSH7003の柱穴をSF7036が破壊していることから、これよりも新しい時期の遺構であることは間違いない。SF7035はそれよりも古い段階の遺構であるが、埋土や遺構の形状などから、中世の遺構と推定される。

SF7039（図237）

7区西部のG～H 20区に位置する。SH7002と重複し、南西隅の柱穴SP7649を切っていることから、本遺構の方が新しいと理解される。平面形はやや不整形な隅丸長方形で、東西の長軸は2.2ｍ、南北の短軸は1.6ｍである。検出面からの深さは0.2ｍで、底面はほぼ平坦となっている。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、上層には黄褐色土のブロック及び小礫を含んでいる。

1768～1770は山茶碗類で、いずれも渥美湖西窯の製品である。1768・1769は山茶碗の口縁部破片、1770は小皿の口縁部破片である。Ⅲ期頃に位置づけられよう。1771・1772は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。1772は小型品で口縁部に横ナデが認められる。

この他、山茶碗・土師質土器の破片が出土しているが、図示した遺物を含めて13世紀代頃のものが大半とみられる。しかし、前述のように本遺構は16世紀代～近世の遺構であるSH7002よりも新しい遺構であることが明らかであり、近世の遺構と判断される。

SF7040（図237）

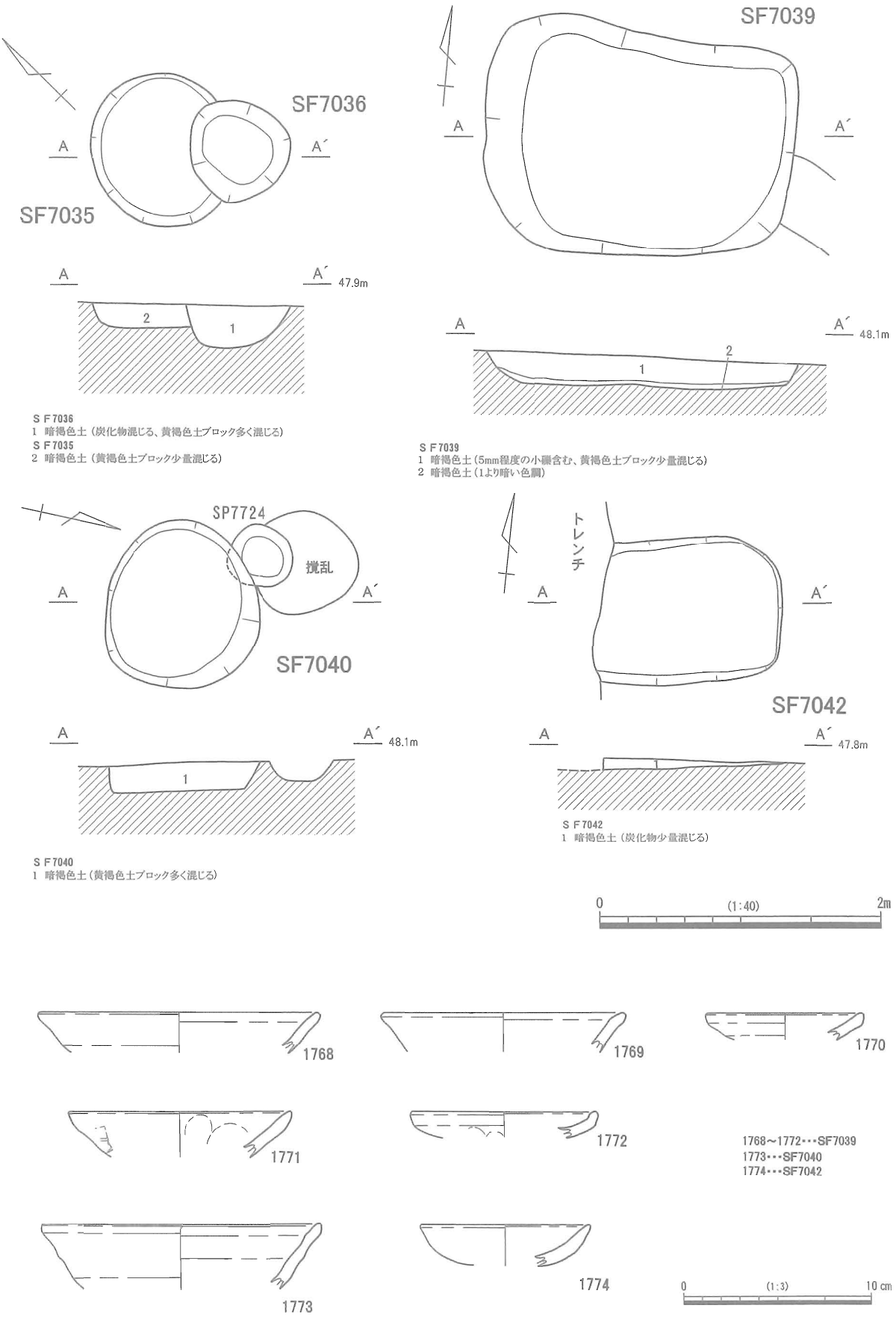
7区西部のH 20区に位置する。SF7039の南に隣接し、SH7008の柱穴SP7724を切ることから、これよりも新しいと考えられる。平面形はほぼ円形で、直径は1.1ｍである。検出面からの深さは0.2ｍを測り、底面は平坦となる。

1773は山茶碗で、渥美湖西産の口縁部の破片である。Ⅲ期頃に位置づけられよう。この他、土師器・山茶碗の小破片が出土している。出土遺物は13世紀代の様相を示すが、16世紀代の建物跡と推定されるSH7008の柱穴SP7724を切っていることから、本遺構の時期は16世紀代以降と判断される。

SF7042（図237）

7区西部のG 21区に位置する。隣接するSF7043と並ぶような位置関係にあり、規模や形状も類似するため、関連性が高いように思われる。トレンチによって西側が破壊されているが、平面形は隅丸長方形と推測できる。残存している東西の長軸は1.3ｍ、南北の短軸は1.0ｍである。検出面からの深さは0.05ｍと極めて浅く、底面は平らであるが、東側は上端が明らかでなくなるほど浅くなっている。埋土の暗褐色土には炭化物が少量混じっている。

1774は土師質土器の皿である。全体的に摩滅が激しく調整などは不明瞭だが、口縁部にわずかな横ナデが認められる。底部内面には煤が付着する。他に土師質土器とみられる小片が出土している。遺物の年代観から、本遺構は13世紀代の遺構と推定される。



S F 7036
1 暗褐色土（炭化物混じる、黄褐色土ブロック多く混じる）
S F 7035
2 暗褐色土（黄褐色土ブロック少量混じる）

S F 7039
1 暗褐色土（5mm程度の小礫含む、黄褐色土ブロック少量混じる）
2 暗褐色土（1より暗い色調）

S F 7040
1 暗褐色土（黄褐色土ブロック多く混じる）

S F 7042
1 暗褐色土（炭化物少量混じる）

図 237　7区の土坑実測図・出土遺物（4）

SF8002（図 238、図版 64）

8区東部のF～G 34区に位置する。SF8003・SF8006の南に隣接する。平面形は円形で、直径は1.7mを測り、検出面からの深さは0.05mと極めて浅い皿状となる。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、一部に黄色土のブロックを含む黒褐色粘質土が入り込んでいる。

1775は口縁部破片であるが、山茶碗類の小碗であろう。渥美湖西産のⅠ－2期の製品とみられる。1776・1777は土師質土器の皿で、いずれも非ロクロ成形品である。1776は口径10.4cmに復元される小型品である。1777は胎土が灰白色を呈し、表面はかなり摩滅しているが、外面は指頭痕が残る粗い調整、内面はナデ調整が施される。口縁部の強い横ナデによって、体部外面に段がつくり出される。1778は土師質土器の伊勢鍋の口縁部破片である。外面には煤が厚く付着している。

この他、土師器・土師質土器の小片が出土している。出土遺物は12世紀代に遡る遺物も含むが、ほぼ13世紀代に位置づけられることから、遺構の年代もその時期にあたると推定される。

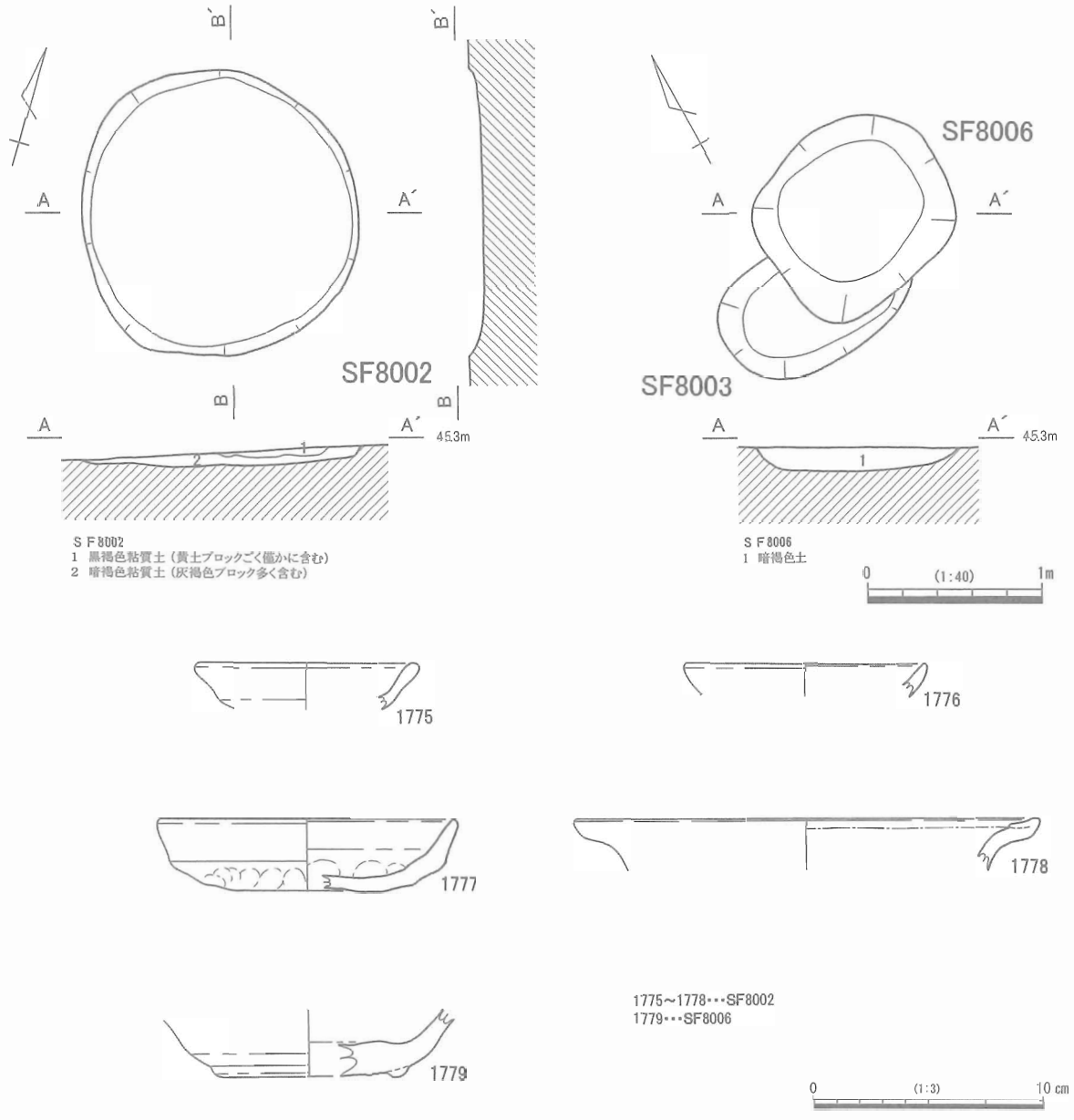


図 238　8区の土坑実測図・出土遺物

SF8003・SF8006（図 238）

8 区東部の F 34 区に位置し、SF8002 の南に隣接する。SF8003 と SF8006 は重複し、SF8006 の方が新しい。SF8003 は一部が SF8006 に切られるため、形状は明確でないが、平面形は長軸が 1.2 m、短軸が 0.7 m程度の楕円形になると推定される。検出面からの深さは 0.15 mである。SF8006 の平面形はややいびつな隅丸方形で、一辺が 1.1 mの規模である。底面は緩やかな碗状となり、検出面からの深さは 0.1 mである。

1779 は渥美湖西産の山茶碗の底部破片である。高台がかなり低く、底部内面は使用による摩滅が顕著である。Ⅲ－２期の製品であろう。他に出土遺物はなく、遺構の年代を把握するのは難しいが、13 世紀中葉頃に位置づけられると考えられる。SF8003 は SF8006 に若干先行する時期になると推定される。隣接する SF8002 も同時期の遺構とみられることから、関連する遺構である可能性が高い。

SF9002（図 239）

9 区中央の D 28 区に位置し、SF9001・SF9005 に隣接する。平面形は隅丸長方形で、東西の長軸は 1.3 m、南北の短軸は 1.1 mである。底面は平坦で、壁面をほぼ垂直に掘り込んでいる形状で、検出面からの深さは 0.3 mを測る。埋土は暗褐色粘質土を主体とするが、上～下層にわたって黄色土のブロックや粒子が多量に含まれることから、人為的に埋められている可能性が高い。土坑中央部の底面からやや浮いた部分で 1780 の内耳鍋が出土している。破損した状態ではあったが、底部の一部を除き、ほぼ完形近くに復元されることから、まとめて遺構内に残されたものと考えられる。

1780 は土師質土器の内耳鍋で、くの字形に分類されるものである。口縁部内面には２ヵ所の内耳が取り付けられている。口縁端部の内外面は横方向のナデ調整が行われ、体部外面上半はハケ調整、体部外面下半から底部にかけてはヘラケズリ調整、底部外面の中央部周辺はナデ調整が施される。体部内面

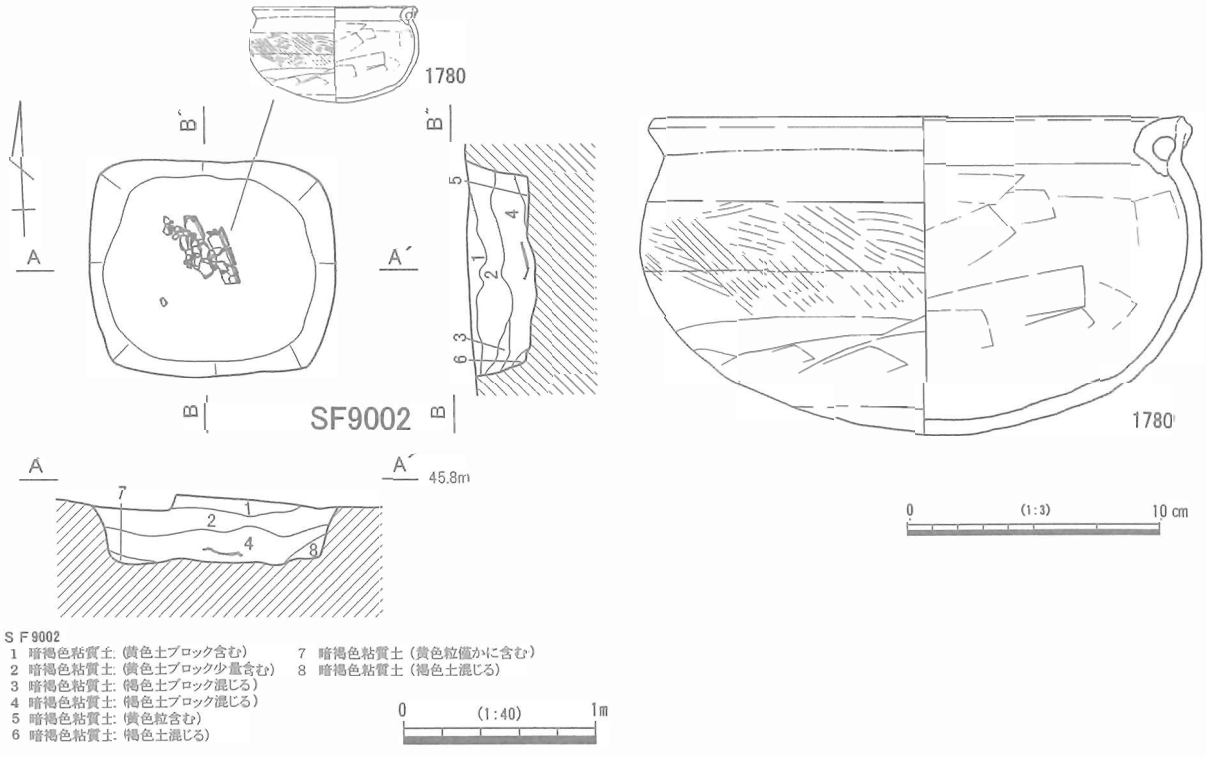


図 239　SF9002 実測図・出土遺物

は全体的にナデ調整が施されるが、一部ヘラ状工具による調整も観察される。体部外面には煤が多く付着し、内面底部周辺には煮炊きした内容物が焦げ付いた痕跡が観察される。

この他に常滑産とみられる甕の体部破片が出土している。遺物の年代観から、本遺構は 15 世紀中葉～ 16 世紀中葉頃に位置づけられる可能性が高い。

SF0031（図 240）

10 区東部のⅠ 34 区に位置する。平面形は円形で直径は 1.0 ｍを測る。検出面からの深さは 0.1 ｍで、底面はほぼ平坦な浅い皿状を呈する。

1781 は埋土上層から出土した片口鉢の底部である。高台が高くつくり出され、底部内面は使用による摩滅が顕著である。尾張（知多）産の製品とみられ、常滑５型式頃に位置づけられるものであろう。

この他、山茶碗・土師質土器皿の小片が出土している。1781 を手かがりとすれば、本遺構は 13 世紀中葉を中心とした時期の範疇で捉えられるものであろう。

SF0032・SF0033・SF0035（図 240）

10 区東部のⅠ 34 区に位置する。SF0032・SF0033・SF0035 が重複して検出され、新旧関係は SF0035 が最も新しく、次いで SF0032・SF0033 が最も古い。

SF0035 の平面形は楕円形で、長軸が 0.7 ｍ、短軸が 0.6 ｍである。検出面からの深さは 0.3 ｍで、底面は碗状となる。SF0032 の平面形は不定形な形状で、長軸は 1.2 ｍ、短軸は 0.7 ｍを測る、検出面からの深さは 0.05 ｍと極めて浅く、底面はほぼ平坦となる。SF0033 は平面形がやや不整形な隅丸長方形で、長軸は 2.4 ｍ、短軸は 1.8 ｍを測る。検出面からの深さ 1.1 ｍである。埋土は４層に分層され、１層が黄色土粒子及び褐色土のブロックを含む暗褐色土、２～４層は黒褐色土が堆積していた。

1782 ～ 1784 は SF0033 から出土した山茶碗類で、いずれも渥美湖西産の製品である。1782 は山茶碗の口縁部の破片、1783 は山茶碗底部の破片である。いずれもⅡ期頃に位置づけられるものであろう。1784 は小皿である。小型、扁平化が著しいⅢ－２期頃に位置づけられよう。

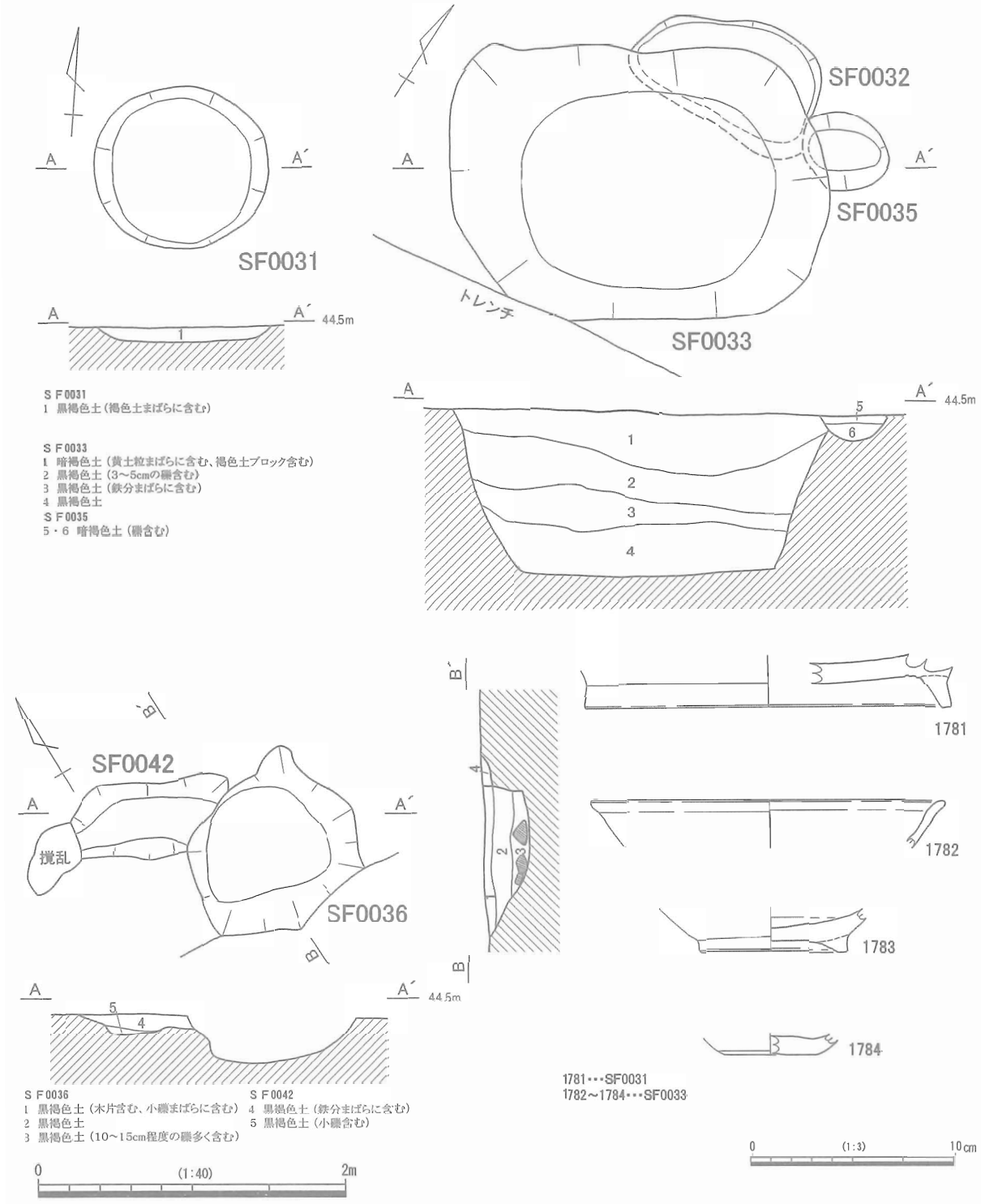
この他、SF0033 からは須恵器、土師器、土師質土器などが出土しているが、SF0032 の出土遺物は皆無であり、SF0035 からは土師質土器の小片が１点出土したのみである。

SF0033 は出土遺物から、13 世紀中葉頃の遺構と判断される。SF0032、SF0035 は新旧関係から SF0033 が埋没した後の遺構であるが、出土遺物が乏しいため、時期は不明確である。

SF0036・SF0042（図 240）

10 区東部南端のＪ 33 区に位置する。SF0036・SF0042 は重複して検出され、SF0036 の方が新しい。SF0036 の平面形は不定形で、長軸は 0.6 ｍ、短軸は 0.5 ｍを測る。検出面からの深さは 0.2 ｍである。底面は緩やかな碗状となる。埋土は黒褐色土を主体とし、２層に分層される。１層には小礫や木片、３層には 10 ～ 15cm 程度の礫を多く含む。SF0042 の平面形は不定形で、長軸は 1.0 ｍ、短軸は 0.5 ｍである。底面は不規則な凹凸があり、検出面からの深さは 0.15 ｍである。埋土は黒褐色土を主体として、２層に分層される。

遺物は SF0036 の検出面から土師質土器の破片が１点出土している。図示は不可能であったが、13 世紀代頃の土師質土器の皿と推定されることから、SF0036 は少なくとも 13 世紀以降に位置づけられ、SF0042 はそれに先行するものと考えられる。



S F0031
1　黒褐色土（褐色土まばらに含む）

S F0033
1　暗褐色土（黄土粒まばらに含む、褐色土ブロック含む）
2　黒褐色土（3～5cmの礫含む）
3　黒褐色土（鉄分まばらに含む）
4　黒褐色土

S F0035
5・6　暗褐色土（礫含む）

S F0036
1　黒褐色土（木片含む、小礫まばらに含む）
2　黒褐色土
3　黒褐色土（10～15cm程度の礫多く含む）

S F0042
4　黒褐色土（鉄分まばらに含む）
5　黒褐色土（小礫含む）

図 240　10 区の土坑実測図・出土遺物

表 22　土坑出土 土器・陶磁器観察表（１）

No.	遺構名	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1625	SF1025	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/4		灰白	
1626	SF1025	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(15.8)				口縁部 1/16		灰白	
1627	SF1025	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(22.8)				口縁部 1/16		浅黄橙 / 灰白	
1628	SF1025	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(20.6)				口縁部 1/12		灰白	
1629	SF1025	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.1)				口縁部 1/20		灰白	
1630	SF1025	施釉陶器	盤類	古志戸呂						体部一部	鉄釉	黒褐 / 淡黄	
1631	SF1025	施釉陶器	盤類	古志戸呂						体部一部	鉄釉	灰褐	
1633	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(16.6)		(4.6)	(7.8)	1/3	内面・自然釉	灰白	
1634	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西		(18.6)				口縁部 1/12	自然釉	灰白	
1635	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.8)				口縁部 1/18		灰白	
1636	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.3)				口縁部 1/16	自然釉	灰白	
1637	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(7.0)	底部 1/4	内面・自然釉	灰白	
1638	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(7.4)	底部 1/4		灰白	
1639	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(5.7)	底部 1/3		灰白	
1640	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(5.8)	底部 1/2		灰白	
1641	SF6033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(7.1)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1642	SF6033	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－２	(8.1)				口縁～体部 1/6	自然釉	灰白	
1643	SF6033	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－２		(4.8)			底部 1/6		灰白	
1644	SF6033	中世陶器	片口鉢	尾張	6a 型式				(14.8)	体部～底部 1/6		灰白	
1645	SF6033	中世陶器	擂鉢	常滑			(15.2)			底部 1/6		にぶい褐	
1646	SF6033	中世陶器	甕	常滑	５型式	(31.8)				口縁部 1/8		灰オリーブ / 暗緑灰	
1647	SF6033	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)				口縁部 1/6		灰白	
1648	SF6033	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.1)				口縁部 1/8		浅黄橙	
1649	SF6033	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.4)				口縁部 1/10		浅黄橙	
1650	SF6033	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.75)				口縁部 1/6		灰白	
1651	SF6033	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類	(14.4)				口縁部 1/16	青磁	明オリーブ / 灰白	鎬蓮弁文
1652	SF6033	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	A1 類	(15.2)				口縁部 1/6	青磁	オリーブ黄 / 灰白	無文
1653	SF6035	須恵器	坏蓋							体部 1/20	外面・自然釉	灰白	
1654	SF6035	須恵器	甕			(28.7)				口縁部 1/26		灰白	
1655	SF6035	土師器	皿				(10.1)			体部～底部 1/10		にぶい黄橙	内外面赤彩
1656	SF6035	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.1)				口縁部 1/16		灰黄	
1657	SF6035	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)				口縁部 1/12		灰白	
1658	SF6035	土師質土器	内耳鍋		くの字形					頸部 1/24		浅黄橙	頸部（21.1）
1659	SF6035	土師質土器	内耳鍋		くの字形					肩部 1/16		浅黄橙	外面煤付着
1660	SF7047	須恵器	坏身				(11.6)			底部 1/12		灰白	
1661	SF7047	須恵器	甕			(9.6)				口縁部 1/5		灰白	
1662	SF7047	土師器	坏			(10.6)				口縁～体部 1/12		明黄褐	
1663	SF7047	土師器	甕			(20.4)				口縁部 1/12		にぶい橙	
1664	SF7047	土師器	甕			(20.7)				口縁部 1/10		にぶい橙	
1665	SF7047	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.1)				口縁部 1/8		灰白	
1666	SF7047	山茶碗	碗	尾張		(15.6)				口縁部 1/18		灰白	
1667	SF7047	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(7.6)	底部 1/3		オリーブ黄	
1668	SF7047	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(6.0)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1669	SF7047	山茶碗	小碗	湿美湖西		(8.5)				口縁部 1/14	内面・自然釉	灰白	
1670	SF7047	山茶碗	小碗	湿美湖西	Ⅰ－２				4.2	底部	内面・自然釉	灰白	
1671	SF7047	山茶碗	小碗	湿美湖西	Ⅰ－２					底部	自然釉	灰白	高台端部欠損
1672	SF7047	中世陶器	片口鉢	尾張	5～6a 型式	(26.4)				口縁部 1/16	内面・自然釉	灰白	
1673	SF7047	中世陶器	片口鉢	尾張	5～6a 型式				(13.0)	底部 1/8		灰白	
1674	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.1)				口縁部 1/4		灰白	
1675	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(13.0)				口縁部 1/16		灰白	
1676	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.5)				口縁部 1/12		浅黄橙	
1677	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.6)				口縁部 1/16		灰白	
1678	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/6		灰白	
1679	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/12		淡黄	
1680	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/16		灰白	
1681	SF7047	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.4)				口縁部 1/14		浅黄橙	
1682	SF7047	土師質土器	伊勢鍋			(27.0)				口縁部 1/6		灰黄褐 / 灰白	外面煤付着
1683	SF7047	土師質土器	伊勢鍋			(25.0)				口縁部 1/32		灰白	
1684	SF7047	施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	後期Ⅰ	(12.1)		6.4	4.2	2/3	鉄釉	にぶい褐・黒 / 灰白	
1685	SF7047	施釉陶器	平碗	瀬戸美濃	後期Ⅰ	(14.7)				口縁部 1/16		灰白 / 灰白	
1686	SF7047	施釉陶器	平碗	瀬戸美濃	後期Ⅳ古	(14.4)				口縁部 1/20		灰白 / 灰白	
1687	SF7047	施釉陶器	柄付片口	瀬戸美濃	後期Ⅰ～Ⅱ		(9.9)			底部 1/2		浅黄橙 / オリーブ黄	
1688	SF8009	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.7)				口縁部 1/16		灰白	
1689	SF8009	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(7.0)	底部 3/4		灰白	
1690	SF8009	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(6.2)	底部 1/3		灰白	
1691	SF8009	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(6.3)	底部 1/2		灰白	
1692	SF8009	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(6.8)	底部 1/2		灰白	
1693	SF8010	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－２				(6.3)	底部 1/4		灰白	
1694	SF9005	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１				(6.4)	体部～底部 1/3		灰白	煤付着
1695	SF1004	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	15.45		5.3	6.2	1/2	自然釉	灰白	
1696	SF1004	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.2)				口縁部 1/6	自然釉	灰白	
1697	SF1004	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－１	(15.2)				口縁部 1/20		灰白	
1698	SF1004	中世陶器	片口鉢	常滑	6a 型式				11.1	体部～底部		灰黄	底部に植物痕
1699	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	12.5	9.1	3.1		1/2		灰白	
1700	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.7)				口縁部 1/6		淡黄	
1701	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.5)				口縁部 1/8		灰白	
1702	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/12		浅黄橙	
1703	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.2)				口縁部 1/8		浅黄橙	
1704	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.1)				口縁部 1/12		灰白	
1705	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.2)				口縁部 1/20		浅黄橙	
1706	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(14.4)				口縁部 1/8		淡橙	
1707	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.7)				口縁部 1/5		灰白	
1708	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.1)				口縁部 1/8		灰白	
1709	SF1004	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.8)				口縁部 1/8		灰白	
1710	SF1012	土師質土器	内耳鍋		くの字形					体部 1/36		灰白	頸部径（20.4）

表23　土坑出土 土器・陶磁器観察表（2）

No.	遺構名	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1711	SF2011	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/6		浅黄橙	
1712	SF2011	近世陶器	擂鉢	瀬戸	登11	(32.0)				口縁部 1/16		にぶい褐 / 灰黄	
1713	SF2013	土師質土器	皿		非ロクロ	9.5	5.5	2.15		3/4		橙	
1714	SF2023	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	(15.9)		5.5	5.35	1/2	自然釉	灰白	
1716	SF3005	近世陶器	灯明皿	美濃	登8～10	(10.4)	(4.9)	2.05		1/8	鉄釉	褐 / 褐灰	
1717	SF3005	施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	大窯	(11.8)				口縁部 1/16	鉄釉	にぶい黄褐 / 浅黄	
1718	SF3005	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.9)				口縁部 1/8		灰白	
1719	SF3005	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(16.5)				口縁部 1/20		浅黄橙	外面煤付着
1720	SF3005	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(21.9)				口縁部 1/20		灰白	外面煤付着
1721	SF3009	土師質土器	皿		非ロクロ	9.3	7.1	2.1		口縁部一部欠損		灰白	
1722	SF3012	山茶碗	小碗			(8.6)				口縁部 1/10		灰白	
1723	SF3012	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(18.9)				口縁部 1/24		明褐灰	スス付着
1724	SF3017	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.3)	(7.9)			口縁部 1/8		にぶい橙	
1725	SF3017	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部 1/12		灰白	
1726	SF3018	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.5)				口縁～体部 1/3		灰白	外面煤付着
1727	SF3018	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.3)				口縁～体部 1/4		灰白	外面煤付着
1728	SF3018	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.8)				口縁部 1/8		灰白	
1729	SF3018	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(23.4)				口縁部 1/8		灰白	外面煤付着
1730	SF3019	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.6)				口縁部 1/16		灰白	
1731	SF3019	土師質土器	皿		ロクロ	(11.5)	(5.2)	(3.2)		口縁～底部 1/4		浅黄橙	
1732	SF3020	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.6)				口縁部 1/12		灰白	
1733	SF3030	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－3	(12.4)				口縁部 1/8		灰白	
1734	SF3028	山茶碗	碗	湿美湖西		(15.9)				口縁部 1/16	自然釉	灰白	
1736	SF4013	土師質土器	皿		非ロクロ	10.1	6.0	1.8		口縁部 1/4 欠損		灰白	
1737	SF6007	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.6)				口縁部 1/15		灰白	
1738	SF6010	製塩土器				(9.8)				口縁部 1/16		にぶい橙	
1739	SF6010	製塩土器				(10.1)				口縁部 1/24		にぶい橙	
1740	SF6010	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.0)				口縁部 1/8		灰白	
1741	SF6028	土師質土器	皿		非ロクロ	10.8	6.7	2.6		ほぼ完形		灰白	
1742	SF6028	土師質土器	皿		非ロクロ	11.8	5.55	2.5		完形		灰白	
1743	SF6028	土師質土器	皿		非ロクロ	11.1	6.85	2.75		口縁部 1/4 欠損		灰白	
1744	SF7005	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.2)				口縁部 1/12		浅黄橙	
1745	SF7005	土師質土器	皿		非ロクロ	(7.6)				口縁部 1/8		灰白	
1746	SF7005	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.3)				口縁部 1/12		灰白	
1747	SF7006	山茶碗	小碗	湿美湖西	Ⅰ－2				3.4	底部のみ	内面・自然釉	灰白	
1748	SF7009	土師質土器	伊勢鍋			(23.7)				口縁部 1/40		浅橙	
1749	SF7011	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2～3	(13.4)				口縁部 1/20		灰白	
1750	SF7010	中世陶器	甕	湿美湖西		(45.5)				口縁部 1/24		黄灰	
1751	SF7014	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ	(15.2)				口縁部 1/16		灰白	
1752	SF7015	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.6)				口縁部 1/8		灰白	
1753	SF7019	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)				口縁部 1/16		浅黄橙	
1754	SF7019	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.5)	(6.5)	(3.0)		1/3		灰白	
1755	SF7019	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/12		灰白	
1756	SF7021	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.2)				口縁部 1/10		灰白	
1757	SF7025	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2～3	(13.5)				口縁部 1/24		灰白	
1758	SF7026	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.4)	6.15	1.75		1/6		灰白	
1759	SF7026	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.9)				口縁部 1/10		灰白	
1760	SF7026	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/10		灰白	
1761	SF7026	近世陶器	筒形香炉	美濃	登7	(10.8)				口縁部 1/8	灰釉	明黄褐 / 灰白	
1762	SF7029	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ	(14.6)				口縁部 1/30		灰白	
1763	SF7029	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ					体部～底部 1/8		灰白	高台部欠損
1764	SF7032	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.9)				口縁部 1/12		浅黄橙	
1765	SF7031	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.9)				口縁～体部 1/3		灰白	
1766	SF7031	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.5)				口縁部 1/10		灰白	
1767	SF7033	貿易陶磁	折縁皿	龍泉窯系		(14.1)				口縁部 1/10	青磁	緑灰 / 灰白	端弁文折縁皿
1768	SF7039	山茶碗	碗	湿美湖西		(14.6)				口縁部 1/20		灰白	
1769	SF7039	山茶碗	碗	湿美湖西		(12.6)				口縁部 1/12	内面・自然釉	灰白	
1770	SF7039	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ	(8.2)				口縁部 1/8		灰白	
1771	SF7039	土師質土器	皿		非ロクロ	(11.7)				口縁部 1/8		浅黄橙	
1772	SF7039	土師質土器	皿		非ロクロ	(9.7)				口縁部 1/24		浅黄橙	
1773	SF7040	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ	(14.6)				口縁部 1/14	内面・自然釉	灰白	
1774	SF7042	土師質土器	皿		非ロクロ	(8.9)				口縁部 1/6		浅黄橙	内面スス付着
1775	SF8002	山茶碗	小碗	湿美湖西	Ⅰ－1	(9.2)				口縁部 1/10	内面・自然釉	灰白	
1776	SF8002	土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁部 1/20		灰白	
1777	SF8002	土師質土器	皿		非ロクロ	(12.8)	(5.4)	(3.1)		口縁～底部 1/4		灰白	
1778	SF8002	土師質土器	伊勢鍋			(19.8)				口縁部 1/16		にぶい褐	外面煤付着
1779	SF8006	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2				(7.3)	底部 1/2		灰白	
1780	SF 9002	土師質土器	内耳鍋		くの字形	20.8		(12.5)		口縁～底部		灰白	内外面煤付着
1781	SF0031	中世陶器	片口鉢	常滑	5型式				(17.9)	底部 1/8		灰白	
1782	SF0033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ	(17.2)				口縁部 1/16	外面・自然釉	灰白	
1783	SF0033	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				(6.8)	底部のみ		灰白	
1784	SF0033	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		(4.6)			底部 1/2		灰白	

９．埋葬遺構

（１）埋葬方法と年代

中屋遺跡の土坑のうち、人骨が遺存していることから埋葬遺構（墓）であると判断される場合がある。人骨の遺存していない場合においても、副葬品の六道銭や土師質土器皿、火打金（火打鎌ともいう）、キセルなどが副葬品として納められた状況が認められれば、やはり埋葬遺構と判断できる。以下の遺構については、上記の根拠に基づき、中世後期から近世中期（15 世紀中葉から 18 世紀前半から中頃）の埋葬遺構と判断した。

遺構の年代については、六道銭の銭種構成や陶磁器・土師質土器皿の編年などを根拠としたが、もともとこの時期の墓には副葬品は少ないこともあり、比較的多くに共通してみられる次のような六道銭の銭種構成の変化に重きをおいた。

１　渡来銭で構成
２　渡来銭と模鋳銭で構成
３　渡来銭もしくはその模鋳銭と古寛永通宝（以下、古寛永に略）で構成
４　渡来銭もしくはその模鋳銭と古寛永、文銭（背に文を入れる）で構成
５　渡来銭もしくはその模鋳銭、古寛永、文銭と新寛永通宝（以下、新寛永に略）で構成
６　古寛永のみで構成
７　古寛永と文銭で構成
８　古寛永、文銭と新寛永で構成
９　文銭と新寛永で構成
10　新寛永のみで構成
11　新寛永と鉄製寛永通宝（以下、鉄銭に略）で構成

銭種構成の変化による年代の基準は、古寛永の鋳造は寛永 13（1636）年から明暦２（1656）年までであり、古寛永出現以前と以後の基準となりえる。つまり、上記１類と２類は、寛永 13 年以前である。文銭の鋳造は寛文８（1668）年から、鉄銭一文銭の鋳造は元文４（1739）年である。これらのことによって、使用年代の幅を考慮し、遺構の年代決定の指針となる。

埋葬方法については、火葬と土葬の違いが大きい。火葬には、掘削した穴に燃料となる木材を組んで遺体を荼毘にふし、骨となった遺体にそのまま土をかけて埋める荼毘墓と称すべき墓がある。荼毘にふされた骨は木炭や焼けて脆くなり、落下した焼土とともに土坑から検出される。土坑の周囲の壁は火熱を受けていることもある。火熱を受けた部分が当時の表面や底面である。棺のまま荼毘に付した場合には、納棺の際打ち付けたと考えられる釘や鎹が出土することもある。このような例が、本遺跡にも認められた。別の火葬墓には、荼毘を別の火葬施設（火葬場）で行い、収骨し土坑に納める埋め墓がある。この場合、木炭や焼土は認められないし、土坑の周囲の壁は火熱を受けていない。

本遺跡の土葬の場合、土坑の大きさから考え、屈葬と考えられる。おおむね遺体は北枕西向きの原則に則っていたと考えられる。

墓標があったか、無かったかという点では、SX2009 の礫が自然石による墓標と考えられる。同じ頃一石五輪塔など庶民の供養塔婆が普及していたが、これは移動しやすく、改葬の際、移動している可能性がある。本遺跡の埋葬遺構が石塔を伴ったかどうかの判断は、保留しておきたい。

（2）遺構と遺物

SX1005（図 241・242、図版 23・25・65 ～ 67）

1区の北西部に位置する荼毘墓である。墓坑の形状は、南北方向を長軸とする長さ 110 cm・幅 84 cm の隅丸長方形で、深さは8cm程しか残存しない。底部中央を中心に被熱による赤化面が認められ、その上面には多量の炭化物と人骨が検出された。人骨は細片となって、墓坑全体に散乱した状態で検出されており、南西部では歯が出土している。

副葬品としては、土師質土器皿とキセル、火打金、銭貨が出土している。土師質土器皿（1785）は、約2分の1個体ずつに分かれ、墓坑南側の中央と東端の2ヶ所から出土している。明確な被熱の痕跡は認められないことから、破砕した皿を火葬後に分けて納めたものと推測される。キセル（1786）は、雁首と吸口の破片で、墓坑中央から出土している。火皿の下に補強体が設けられておらず、吸口にも肩がないなど、やや新しい様相を呈している。火打金（1787）は、いわゆる山形のタイプで、キセルの東側から出土している。中央やや南東寄りの場所からは、古寛永（1788 ～ 1791）が4枚出土している。重なって錆着した状態で発見されており、外側になる 1788 の表と 1791 の裏には布目の痕跡が確認できる。布に包んだり、袋に入れた状態で納められた可能性が高い。

銭種は古寛永のみで構成されているものの、キセルには 18 世紀以降主流となる特徴が認められることから、埋葬年代は 17 世紀後半から 18 世紀にかけての時期と推測される。

図 241　埋葬遺構配置図（1区）

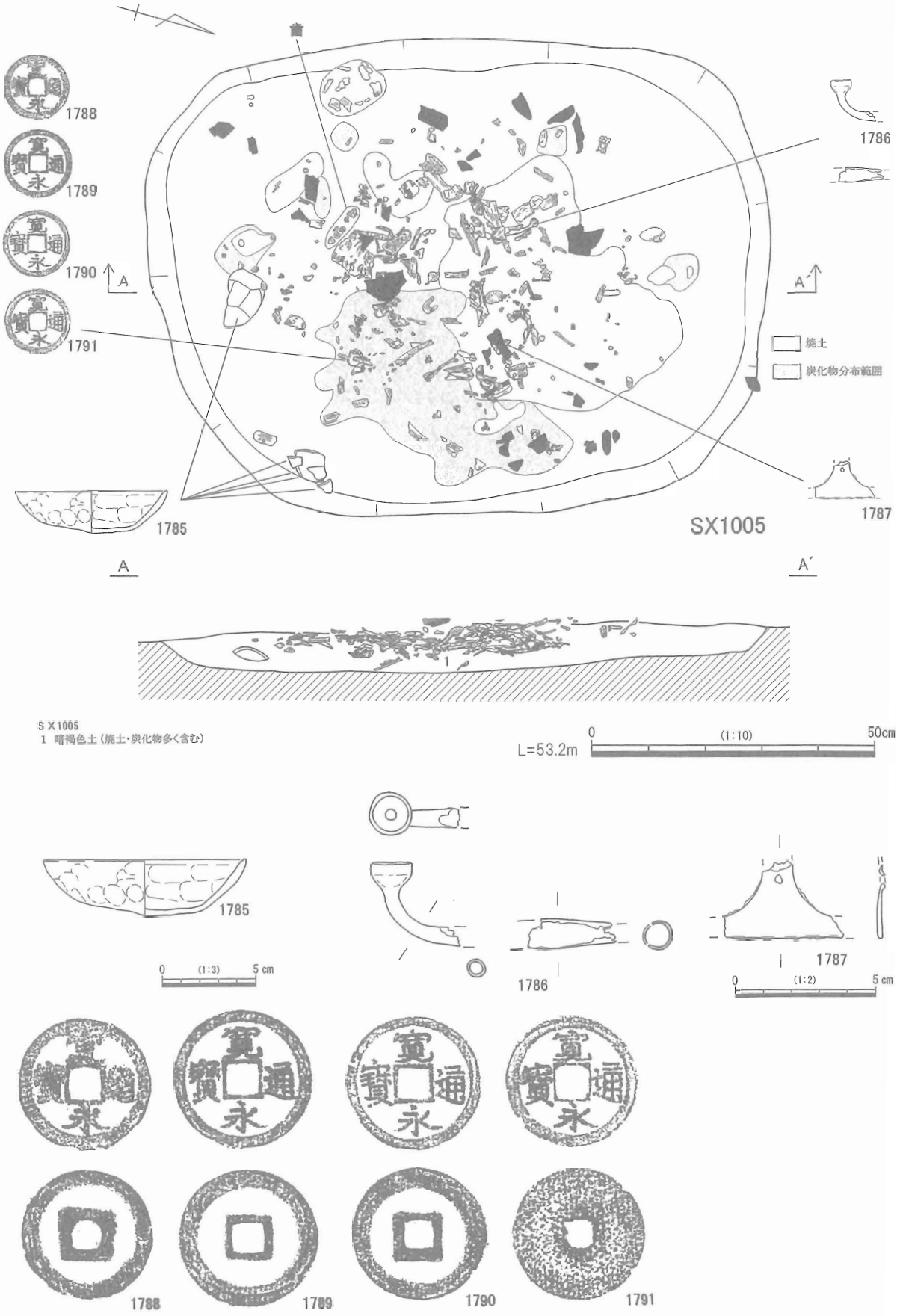


図 242　SX1005 実測図・出土遺物

SX1006（図 241・243、図版 67）

SX1005 の西側約 1.6 mに隣接する、木棺墓または直葬墓である。長径 82 cm・短径 60 cmの楕円形で、上面が大きく削平され、深さは 7 cm程しか残存しない。SX1005 と同様に、南北方向を長軸とする。底面および埋土中から、焼土や炭化物は確認されていない。人骨も、墓坑の東側で小片が発見されたのみである。

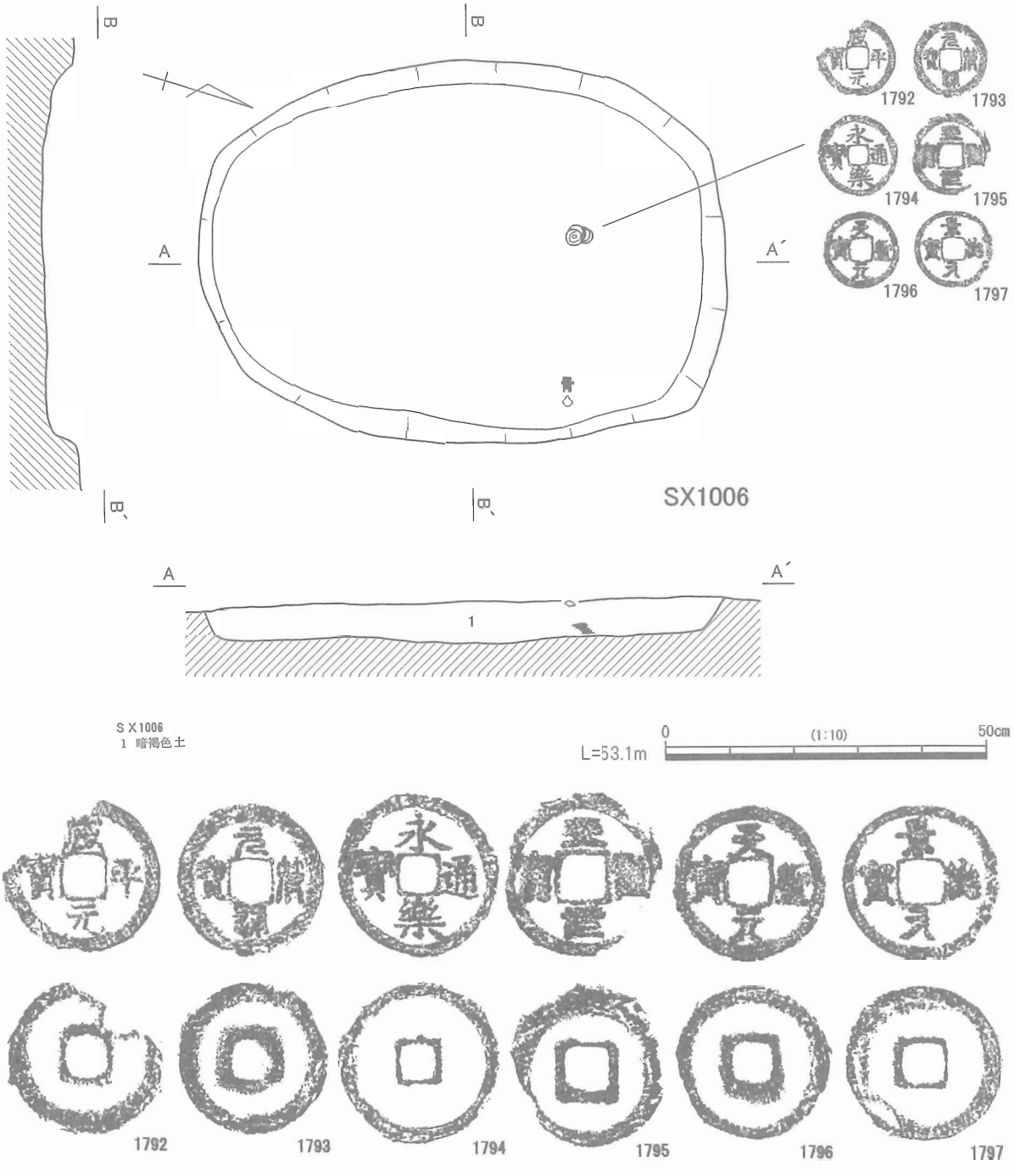


図 243　SX1006 実測図・出土遺物

副葬品としては、墓坑の中央やや北よりの位置から、銭貨（1792 ～ 1797）が出土している。銭貨は、6枚が重なった状態で錆着して出土している。1792は咸平元宝、1793は元符通宝、1794は永楽通宝、1795と1796は天聖元宝、1797は景徳元宝である。繊維などは確認されていないが、孔が通った状態で錆着している点から見て、緡銭の状態で埋納された可能性が高いと推測される。

遺構の年代としては、六道銭が渡来銭または模鋳銭のみで構成されていることから、15世紀後半から17世紀前半にかけての時期であるが、その時期でも16世紀代までと推定される。

SX1007（図241・244、図版24・25・65・67）

SX1006の南側約80㎝に隣接する、木棺墓または直葬墓である。南北方向に長い隅丸長方形で、長軸が北側でやや西に振る点は、隣接する埋葬遺構SX1005・1006と共通する。規模は長さ86㎝・幅50㎝で、深さは現存で約14㎝となっている。底面や側面に被熱の痕跡は確認されておらず、炭化物も検出されていない。人骨については、ほとんど残存しておらず、墓坑の中央やや北寄りの位置に、小片がわずかに出土しているのみである。

副葬品としては、土師質土器皿（1798）と銭貨（1799 ～ 1804）が出土している。土師質土器皿は、墓坑の西隅から口縁を上に向けた状態で発見されている。本遺跡では出土数の少ないロクロ成形のもので、底部には糸切り痕が明瞭に残る。銭貨は、土坑のほぼ中央に6枚錆着した状態で発見されている。1799の表には、藁紐とみられる有機物が付着しており、緡銭の状態で埋納されていたとみて間違いない。1799は元豊通宝、1800は永楽通宝、1801と1803は天聖元宝、1802は元祐通宝、1804は元符通宝である。

土師質土器皿の年代が16世紀後半から17世紀にかけてのものであり、銭種構成も渡来銭または模鋳銭のみであることから、埋葬年代は16世紀後半から17世紀前半に位置付けられる。

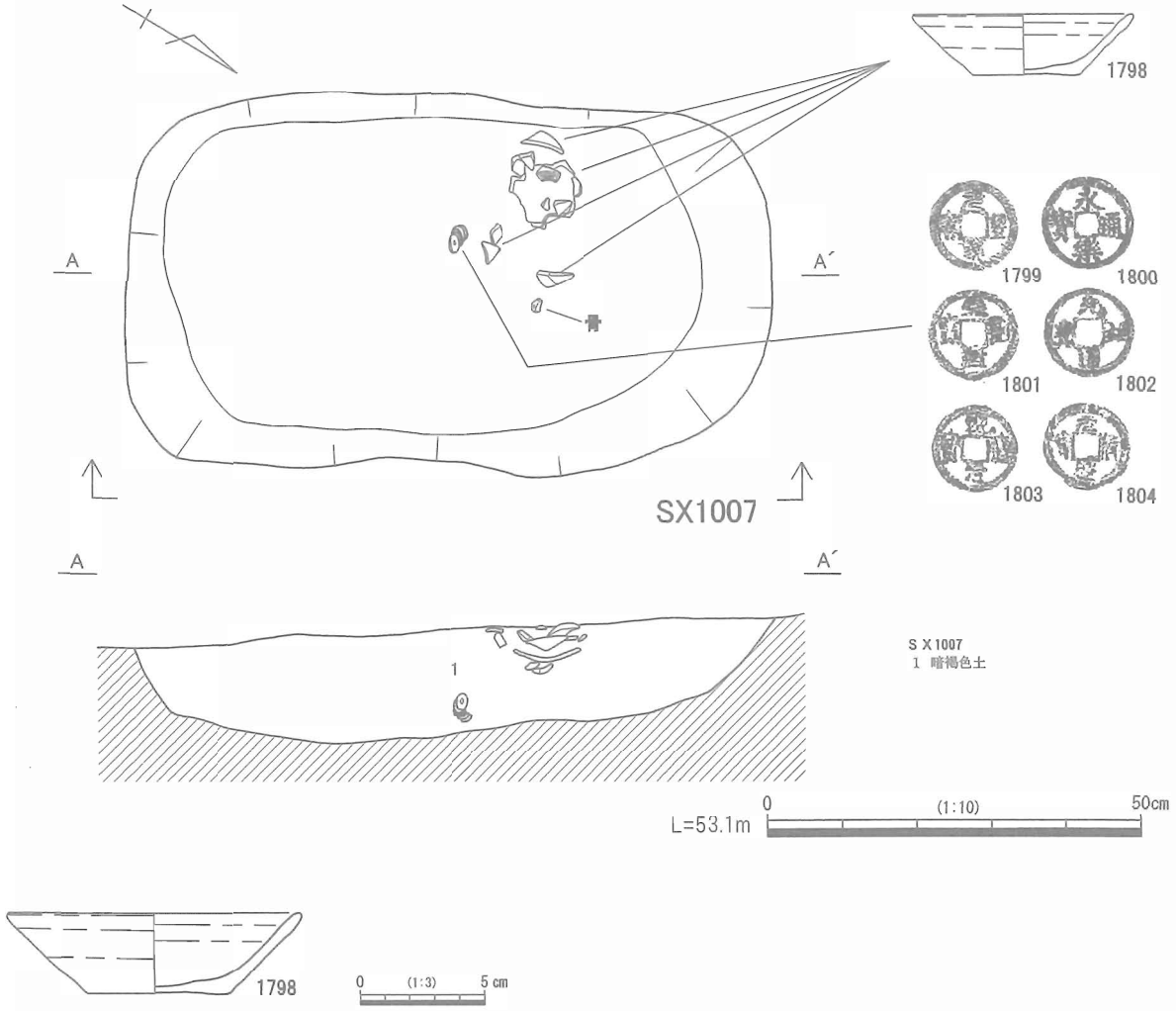
SX1008（図241・245、図版24・25・65・67）

SX1007から約50ｍ南の位置で単独で検出されている、木棺墓または直葬墓である。南北方向に長軸をもつ隅丸長方形で、規模は長さ75㎝・幅50㎝、深さは約10㎝残存する。底面や側面に被熱の痕跡は認められておらず、炭化物や人骨も出土していない。

副葬品は、土師質土器皿（1805 ～ 1807）と銭貨（1810 ～ 1815）が出土している。土師質土器皿（1805 ～ 1807）は、墓坑の北側の隅に、口縁を上に向けた状態で出土している。銭貨は、土坑のほぼ中央に6枚錆着した状態で発見されている。藁紐は残存しないが、孔が通った状態で重なっており、緡銭であった可能性が高い。1810は永楽通宝、1811と1815は皇宋通宝、1812は聖宋元宝、1814は元豊通宝である。1812については遺存状態が悪いが、X線写真からみて元祐通宝であると推定される。

この他に、埋土中からは、瓦質土器と土師質土器の破片が出土している。1808は瓦質土器で、小型であることなどから、香炉の破片と推測される。外面には突帯が巡り、亀甲文のスタンプが押捺されている。中世後期のものとみてよい。1809は土師器の甕で、古代のものである。いずれも小破片のため、副葬品とは考えられず、埋土に混入した遺物とみてよい。

SX1008では、墓坑の中央に六道銭、北側の隅に土師質土器皿が配置されており、この副葬品の配置はSX1007と共通する要素として捉えられる。また、六道銭の銭種構成も、渡来銭もしくは模鋳銭のみで構成されている。以上の点から、埋葬年代は、15世紀後半から17世紀前半にかけての、SX1007と比較的近接した時期と考えてよいであろう。



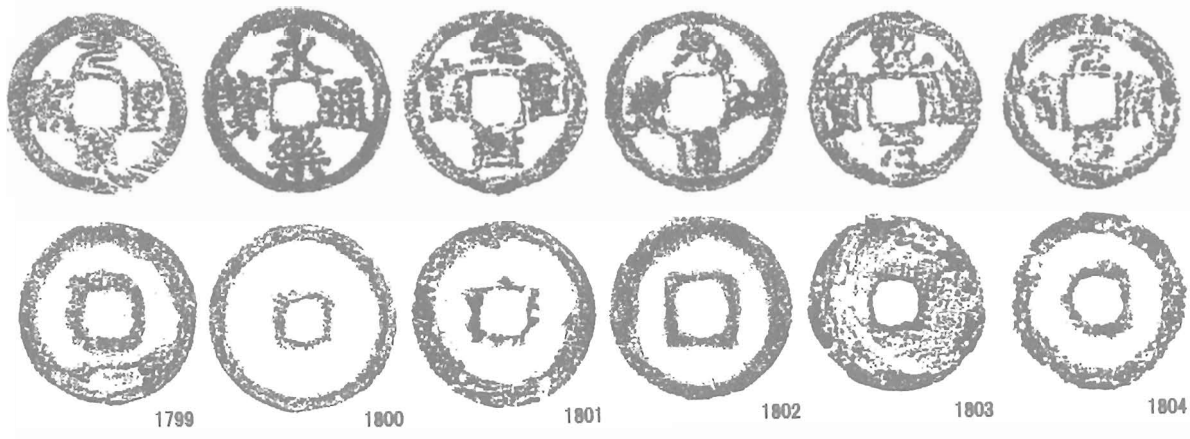


図 244　SX1007 実測図・出土遺物

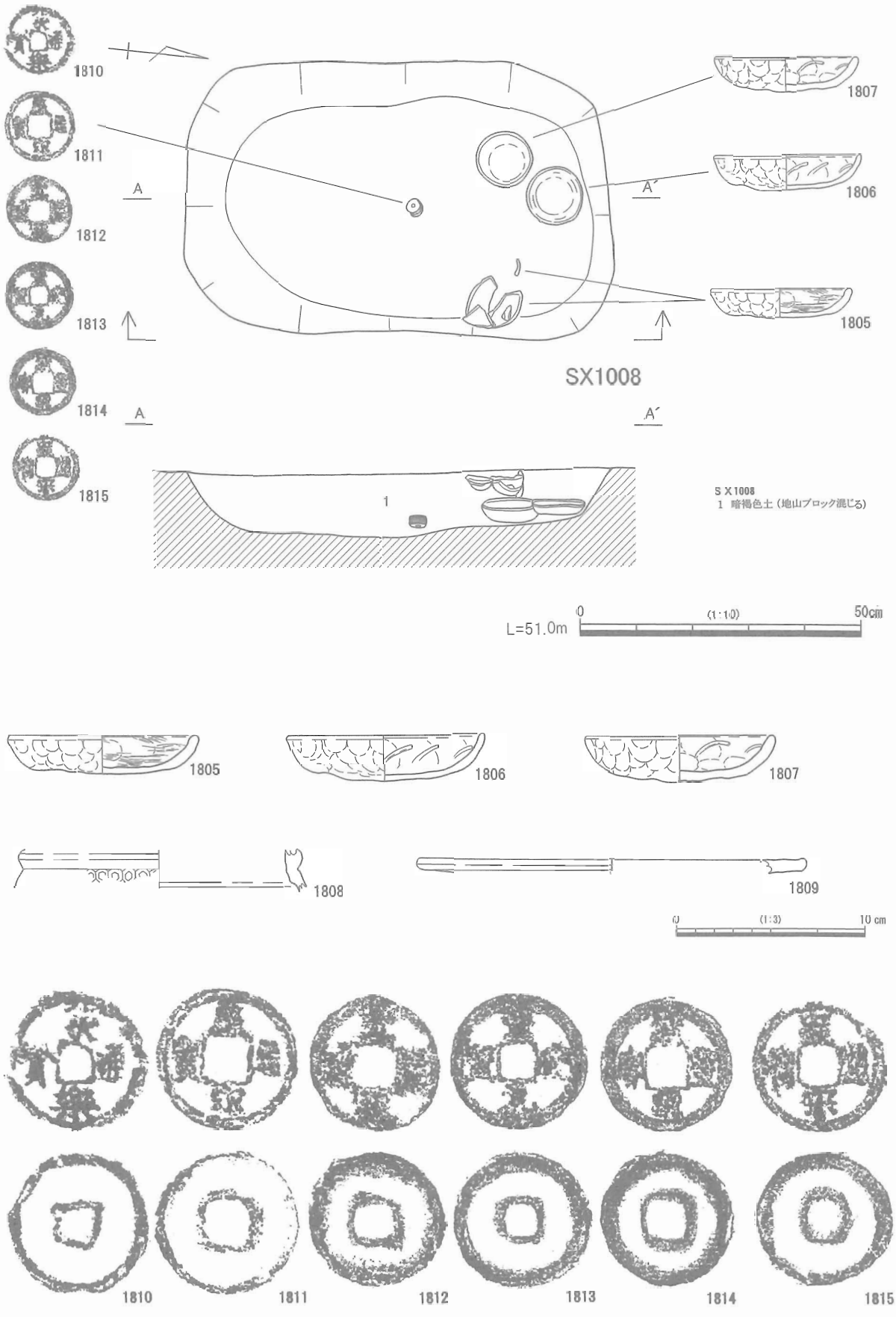


図245　SX1008実測図・出土遺物

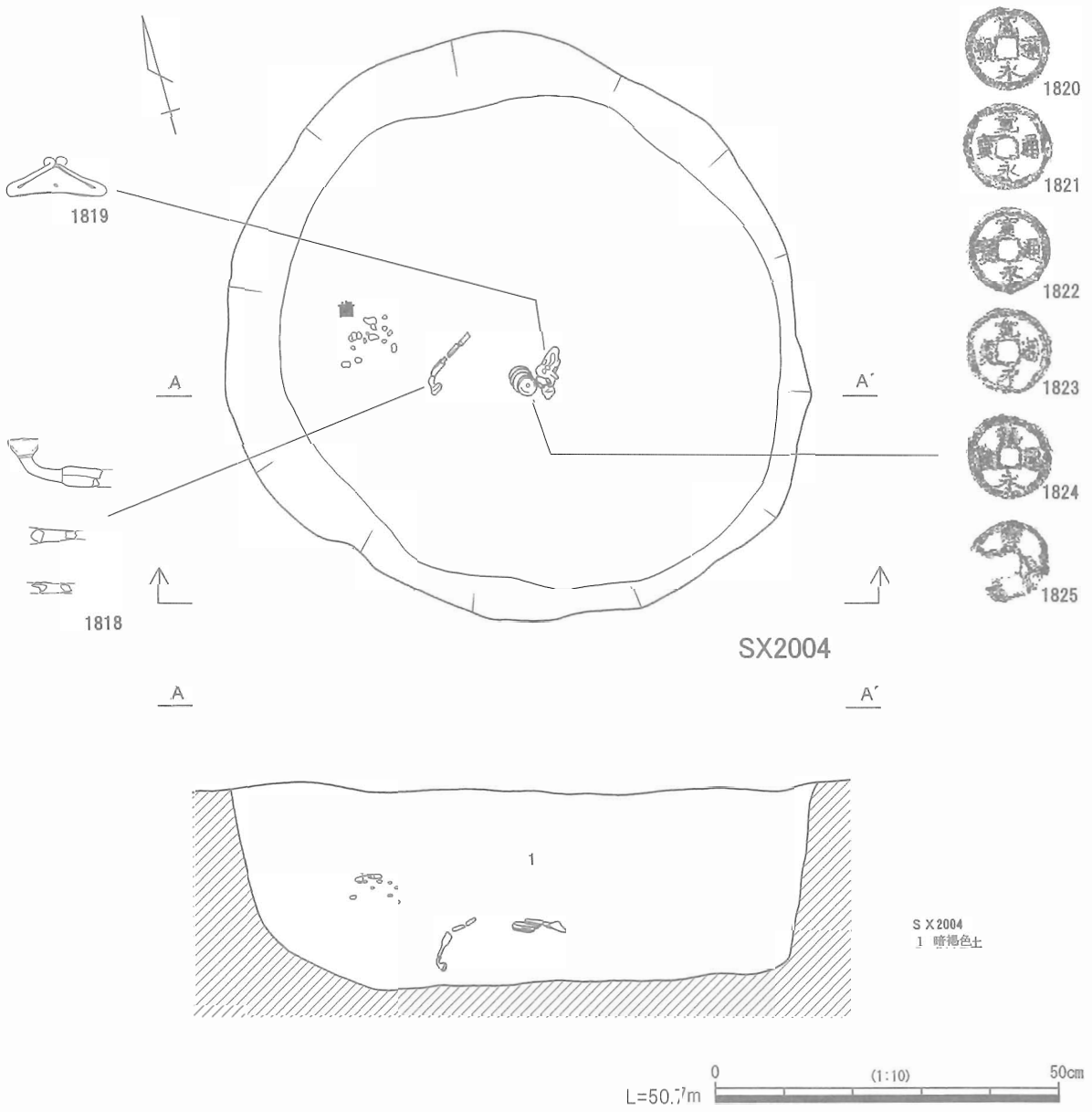


図 246　SX2004 実測図

SX2004（図 246 ～ 248、図版 24・25・66・67）

２区の西側に位置する、桶棺墓である。墓坑は平面が直径 85 cmの円形で、深さは 28 cm残存する。底面や側面に被熱した痕跡は認められず、埋土中に炭化物や焼土も確認されていない。人骨は確認されていないが、墓坑西側の底面から 15 cm程浮いた状態で歯が出土している。歯の出土位置から、頭位は北または西であったとみてよいであろう。

副葬品としては、墓坑の中央から銭貨と火打金、これらと歯のほぼ中間の位置からキセルが出土している。銭貨（1820 ～ 1825）は、底面より８cm程度浮いた状態で出土している。藁紐などは確認されていないものの、６枚重なった状態で出土していることから、緡銭の可能性が高い。６枚とも全て古寛永である。火打金（1819）は、銭貨に接して出土している。いわゆる鎌形火打金で、両側端を上方に折り上げてつくられている。キセル（1818）は、雁首と吸口が出土しており、断片的に羅宇も発見されている。火皿の下端には補強体が設けられ、肩の段も明瞭である。

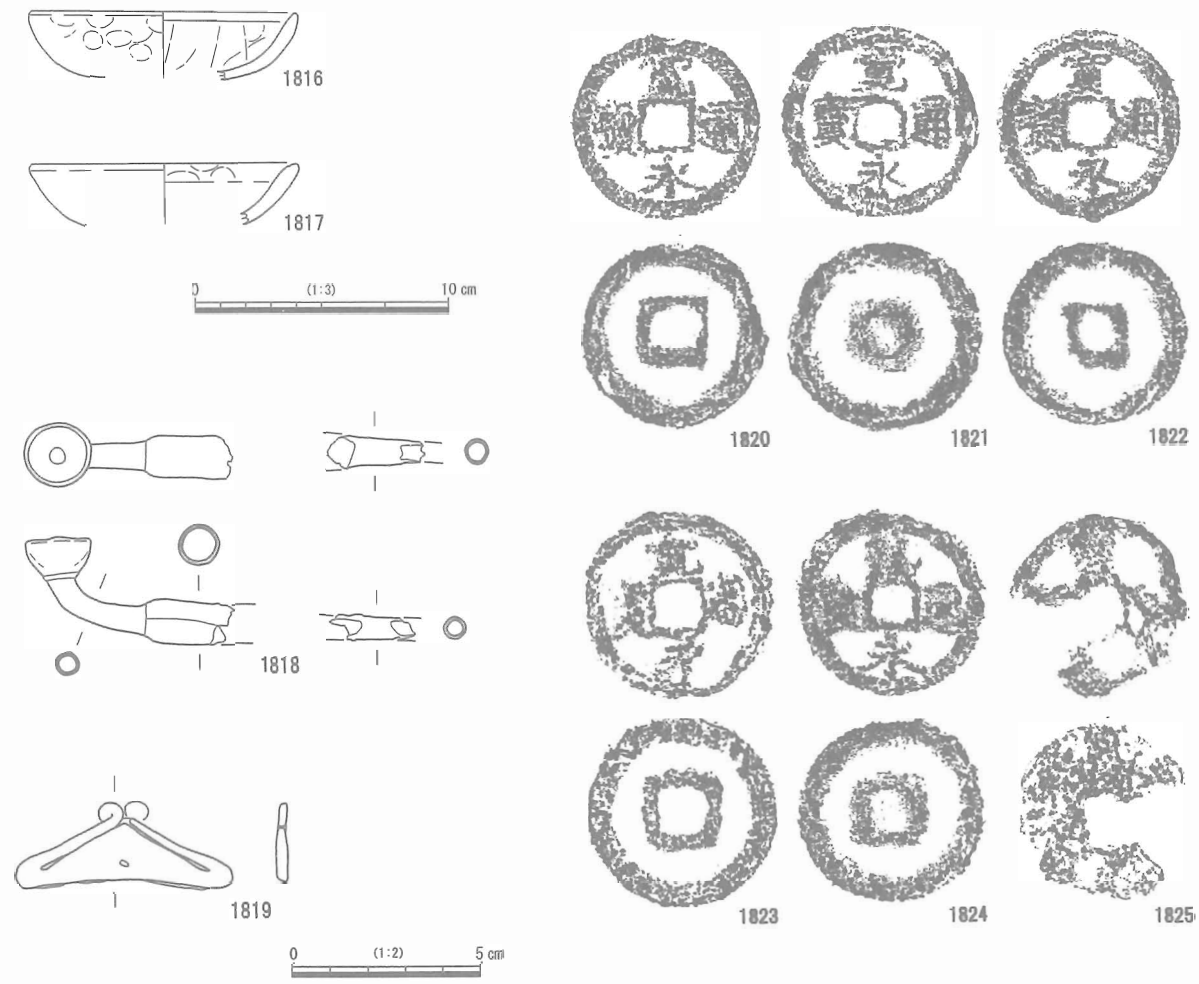


図 247　SX2004 出土遺物

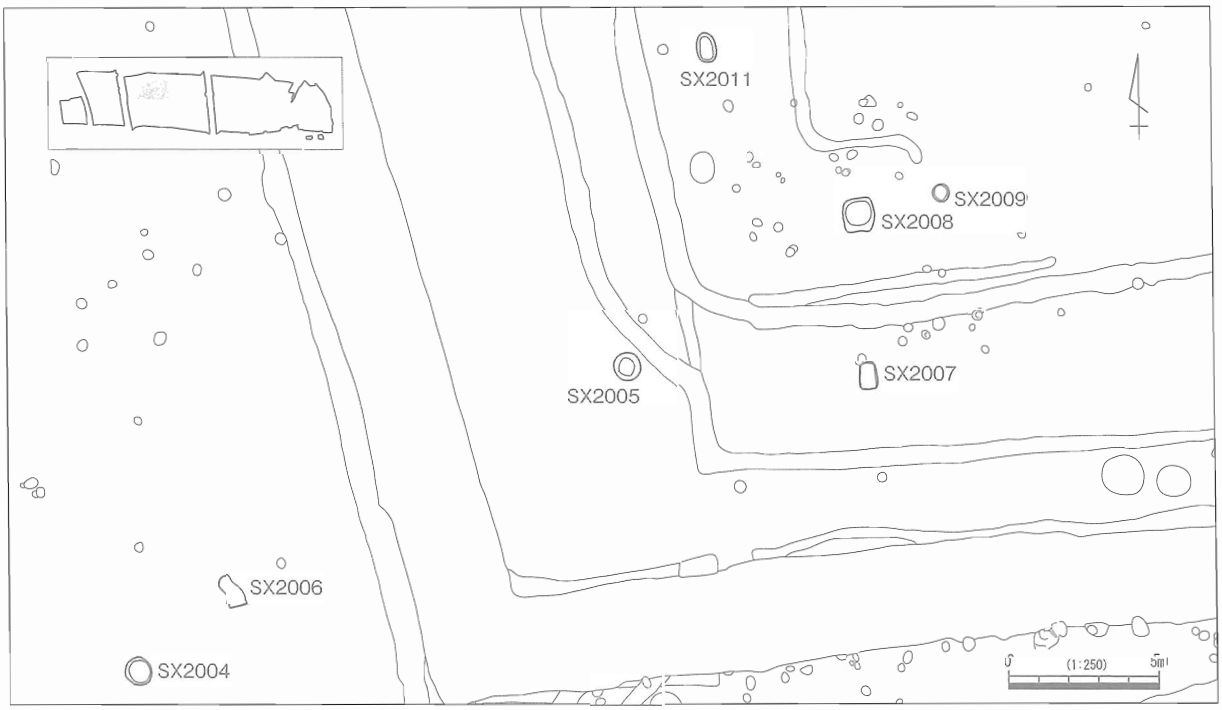


図 248　埋葬遺構配置図（2区）

この他に、埋土中から土師質土器皿（1816・1817）や、内耳鍋の破片が数点出土している。いずれも破片資料であり、墓坑を埋めた際の混入遺物であろう。

キセルが17世紀後半の特徴を呈しており、銭貨が古寛永のみで構成されていることから、埋葬年代は17世紀後半に位置付けられる。

SX2005（図248～250、図版24・25・66・67）

SX2004から、北東へ約20ｍ離れた場所に位置する、桶棺墓である。墓坑は直径80㎝の円形で、深さは約60㎝残存する。人骨は、ごく小さな骨片が1点北端で確認されているのみである。底部や側面に被熱の痕跡は認められず、埋土中に焼土や炭化物も確認されていない。

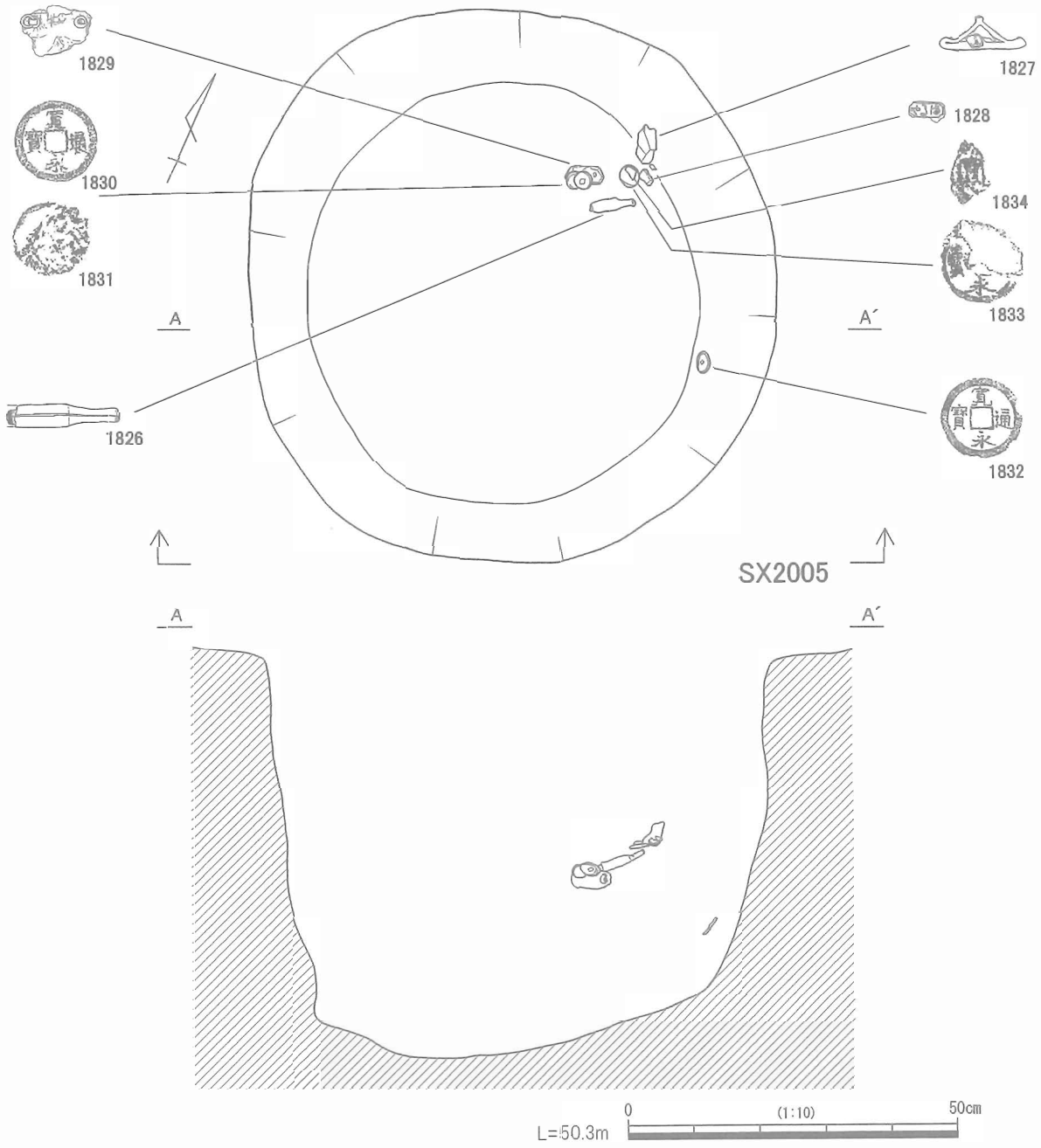


図249　SX2005実測図

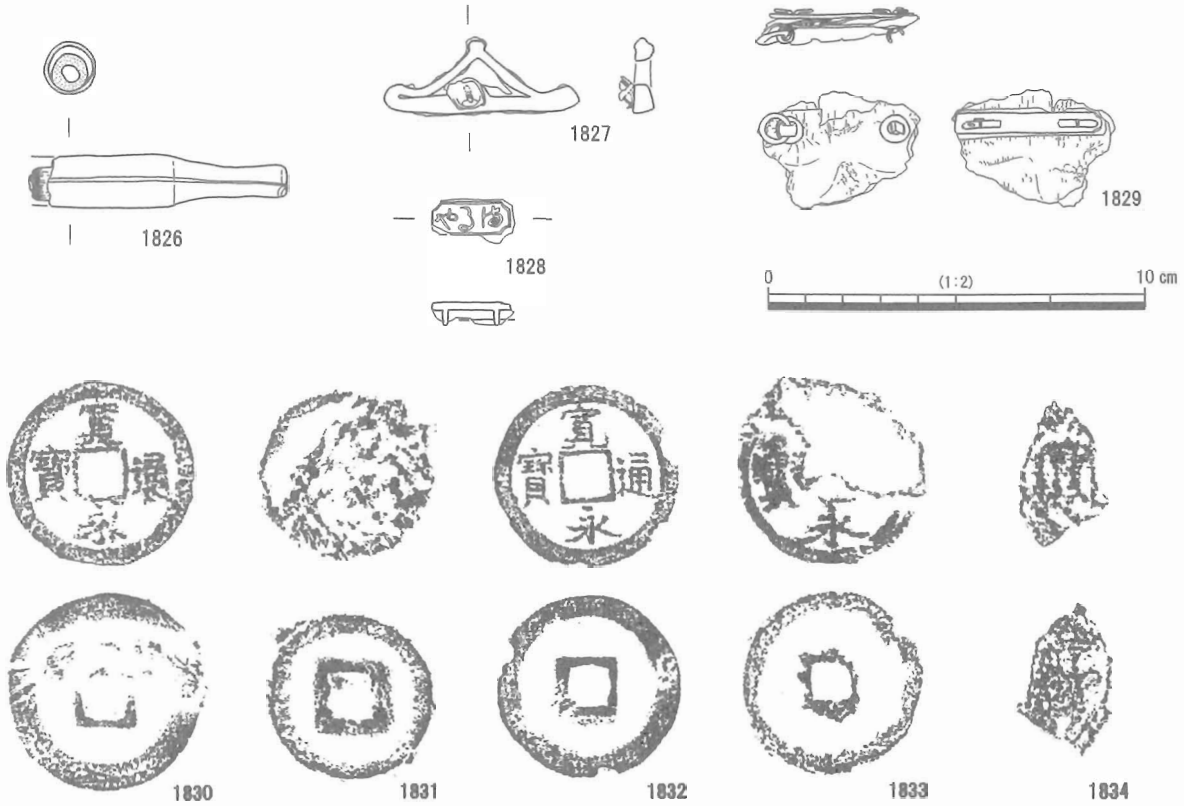


図 250　SX2005 出土遺物

副葬品としては、キセルと火打金、布製品、銭貨が出土している。銭貨 1 点（1832）を除き、墓坑の北隅に副葬されている。副葬品が北隅に集中することから、被葬者の頭位は北とみてよいであろう。1826 はキセルの吸口で、肩の段はやや不明瞭になっている。1827 は火打金であり、表面には布と銅製の鋲が錆着している。1828 と 1829 は、布製品に付随する銅製の金具である。1828 の表側には、「満るや」の文字が確認できる。1829 には、円環状の金具が取り付けられており、布を挟んで鋲で銅板に固定されている。紐等を通して吊り提げるための金具であろう。金具の構成から、出土した布製品については、火打入れや煙草入れなどの袋物である可能性が高いと推測される。

銭貨（1830 ～ 1834）は、破片のものを含め 5 枚出土しているが、古寛永・文銭・新寛永・鉄銭と多様な構成となっている。1830 は文銭である。背に紐状の繊維が付着しており、半分程度重なる状態で 1831 と錆着する。1831 は寛永鉄銭であり、表には有機質が付着している。直径が 2.1 cmと、他の銭貨に比べて極端に小さい。1832 は新寛永であり、他の副葬品とは少し離れた墓坑の東端で出土している。出土した高さも他の副葬品と異なり、底部に近い位置である。1833 は古寛永で、1834 と錆着した状態で出土している。表には、布が付着している。1834 は鉄銭で、全体の 4 分の 1 程度の破片である。1832 を除き、墓坑の北側で出土している銭貨には、いずれも布の付着が確認できることから、袋物に入れて埋納されたものとみてよいであろう。

キセルが 18 世紀代に主流となる特徴を有しており、銭貨に鉄銭がみられることから、埋葬年代は 18 世紀の中頃を中心とした時期と推測される。

SX2006（図 248・251、図版 23・67）

SX2004 から北東へ約 4 mの場所に隣接する荼毘墓である。底部の一部のみ、幅約 70 cm・長さ 1 m の規模で検出されている。周辺が大幅に削平されているため、正確な規模や形状については不明である。底面は、被熱により赤化している。底面付近では、多量の炭化物とともに人骨も発見されている。副葬品は、貨銭が 4 点（1835 ～ 1838）出土している。南東側からまとまって出土しているが、それぞれ錆着した状況はみられず、繊維等の付着も確認されない。1835・1836・1838 は、いずれも新寛永である。1837 は文銭で、全体が裏側に反る形に大きく変形する。荼毘に付す以前に副葬され、遺体とともに荼毘に付された際、火熱によって変形したものとみられる。

埋葬年代は、文銭と新寛永という銭種構成から、18 世紀代を中心とする時期と推測される。

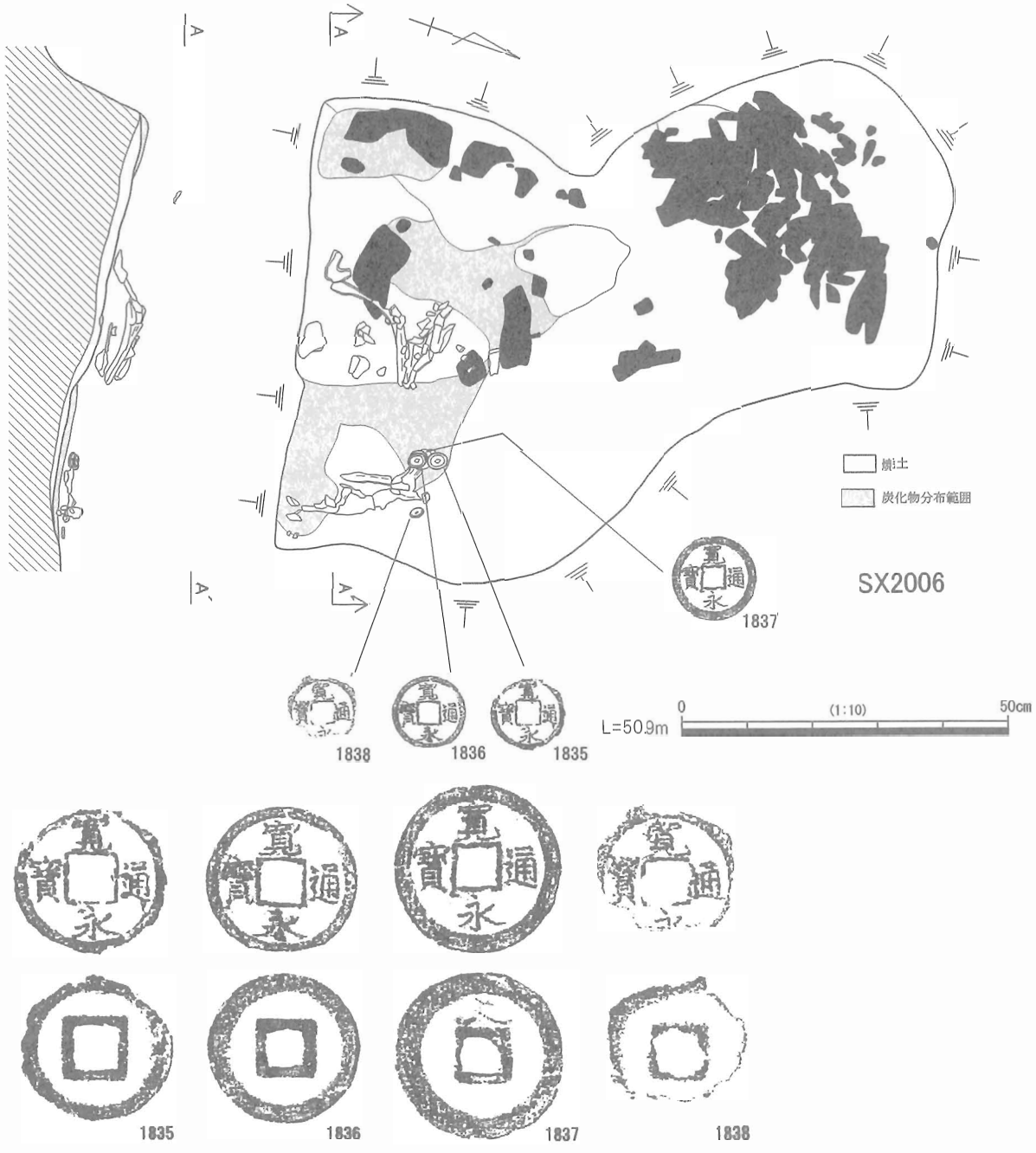


図 251　SX2006 実測図・出土遺物

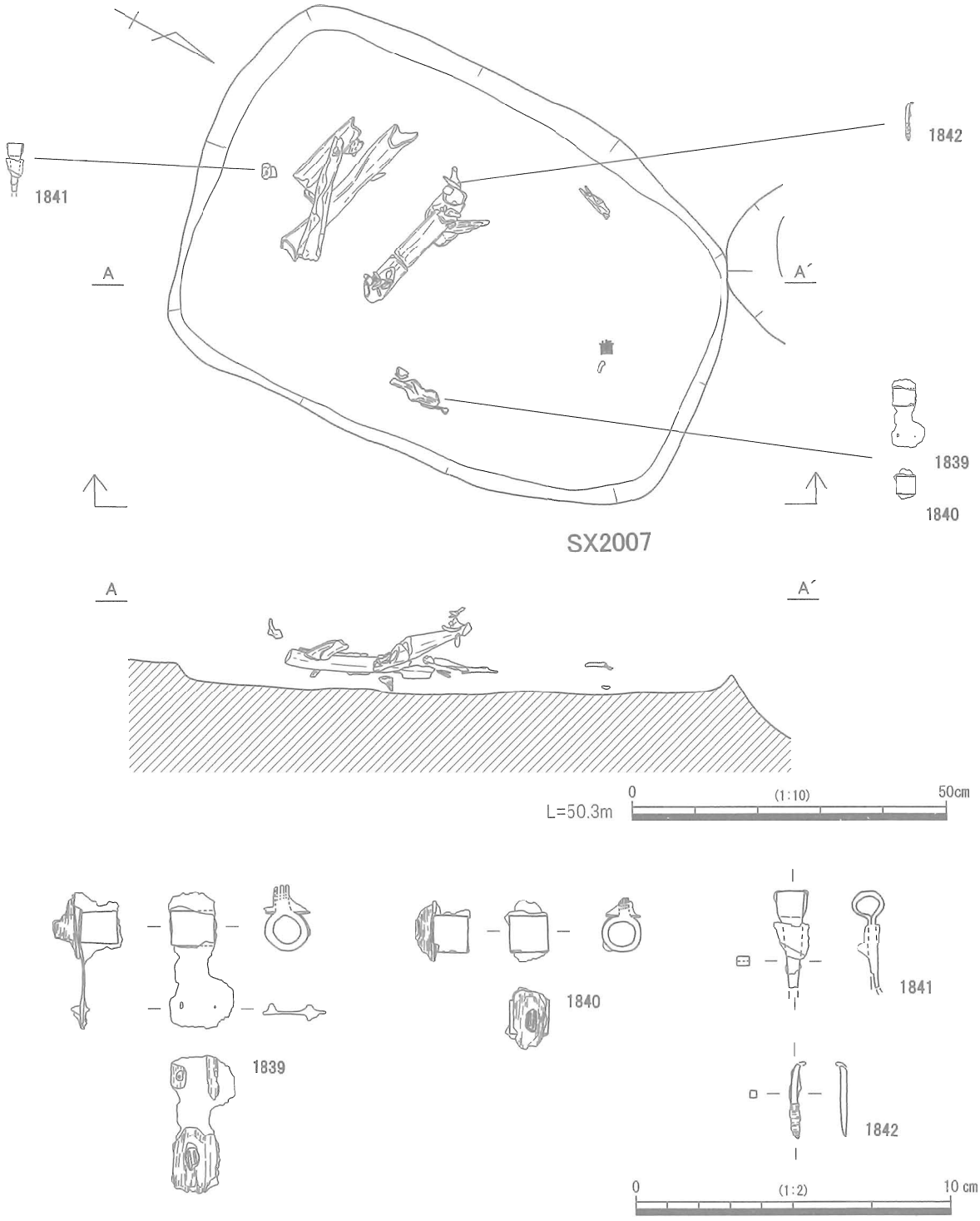


図 252　SX2007 実測図・出土遺物

SX2007（図 248・252、図版 24・66）

SX2005 から東へ約８ｍに位置する木棺墓である。南北に長軸をもつ、長さ 90 ㎝・幅 60 ㎝の隅丸長方形の墓坑である。上面が大幅に削平を受けているため、深さは５㎝程度しか残存しない。底面や側面に被熱した痕跡はなく、炭化物も確認されていない。墓坑の北側では歯が出土しており、南側では比較的形状を保った状態で人骨が検出されている。人骨は長骨で、墓坑の長軸に直交する形で出土している。

歯との位置関係からみて、下肢骨の一部であると推定される。人骨と歯の出土状況から、被葬者は、頭位を北とする伏臥屈葬で土葬されていた可能性が高い。

他の遺物としては、釘（1839 ～ 1842）が４点出土している。1839 ～ 1841 は環頭釘である。いずれも幅の狭い板状の素材を、二つに折り合わせてつくられている。環状部の下端から脚部には、木質が残存する。1842 は、太さ約２㎜・残存部の長さ約２㎝程度の小型の釘で、頭部は欠損している。いずれも、墓坑の端で出土していることから、棺に用いられた釘であると推測される。

SX2007 については、周辺に中世末から近世の埋葬遺構が集中することから、これらと同様の時期である可能性が高いと推測される。しかし、出土遺物が釘のみで、年代を明確に示す副葬品等が出土していないため、詳細な時期の特定は困難である。

SX2008（図 248・253、図版 24・67）

SX2007 の北５ｍに位置する桶棺墓または直葬墓である。調査時には正方形に近い平面形態と認識されているが、南側については立ち上がりの傾斜が明らかに異なっており、誤って別の遺構を一体のものと捉えてしまった可能性が高い。本来は、底部から比較的急に立ち上がる、直径 90 ㎝程度の円形の墓坑であったと推測される。底面や側面に被熱の痕跡はなく、炭化物も発見されていない。

副葬品としては、銭貨が７点（1843 ～ 1849）出土している。遺存状態が悪く、断片になっているものが多い。1843 と 1844 は重なった状態で錆着していたものの、他については単体で出土している。いずれの銭貨にも、繊維等の付着は確認されていない。1843 と 1846 は永楽通宝、1844 は開元通宝、1845 は熙寧元宝、1847 は宣徳通宝、1848 と 1849 は洪武通宝である。1849 には、側面に歯車状の刻みが認められる。1843 と 1844 は裏面で錆着しているが、孔は通っていない。1843 ～ 1846 の４枚は墓坑の南側、1847 ～ 1849 の３枚は北側から出土しており、遺体を挟んで相対する位置に埋納されているようにみえる。本遺跡では、六道銭は１ヶ所にまとめられている例がほとんどであり、やや特殊な印象を受ける。

年代としては、貨銭が渡来銭もしくは模鋳銭のみで構成されており、さらに永楽銭が優位の銭種構成であることから、15 世紀から 16 世紀前半と推測される。

SX2009（図 248・254・255、図版 24・68）

SX2008 の東側約２ｍの場所に隣接する、桶棺墓または直葬墓である。平面は直径約 60 ㎝の円形で、深さは約 60 ㎝残存する。床面や側面に被熱の痕跡は確認されておらず、埋土中に炭化物も検出されていない。また、人骨や歯についても発見されなかった。埋土の上層には、長さ約 30 ㎝の礫が検出されている。中央にやや大型の角礫とその脇に円礫が２つ、埋土の上層に埋め込まれる形で立てられている。どの程度削平を受けているか不明ではあるが、現存では墓坑上面から 10 ～ 15 ㎝程度露頭しており、墓標であった可能性が高い。

副葬品としては、底面から 25 ～ 30 ㎝程の高さから、銭貨が合計 13 枚出土している。1851 ～ 1855 は、墓坑中央やや南東よりの位置から出土している。1851 は熙寧元宝、1852 は嘉祐通宝、1853 は嘉祐元宝、1854 は元豊通宝、1855 は紹聖元宝である。５枚が重なった状態で錆着して発見されており、孔も通っていることから、緡銭であった可能性が高い。1856 ～ 1863 は、墓坑の東寄りの位置から、重なった状態で錆着して出土している。孔に藁紐が残存することから、緡銭の状態で副葬されていたことが分かる。1856・1858・1860・1861 の４枚は元豊通宝、1857 と 1863 は熙寧元宝、1859 は古寛永、1862 は至和元宝である。

また、銭貨の他に、埋土中からは土師質土器皿（1850）が１点出土している。出土状況について記録が残されていないため不明確な部分も多いものの、全体の３分の１程度の破片しか出土していないこと

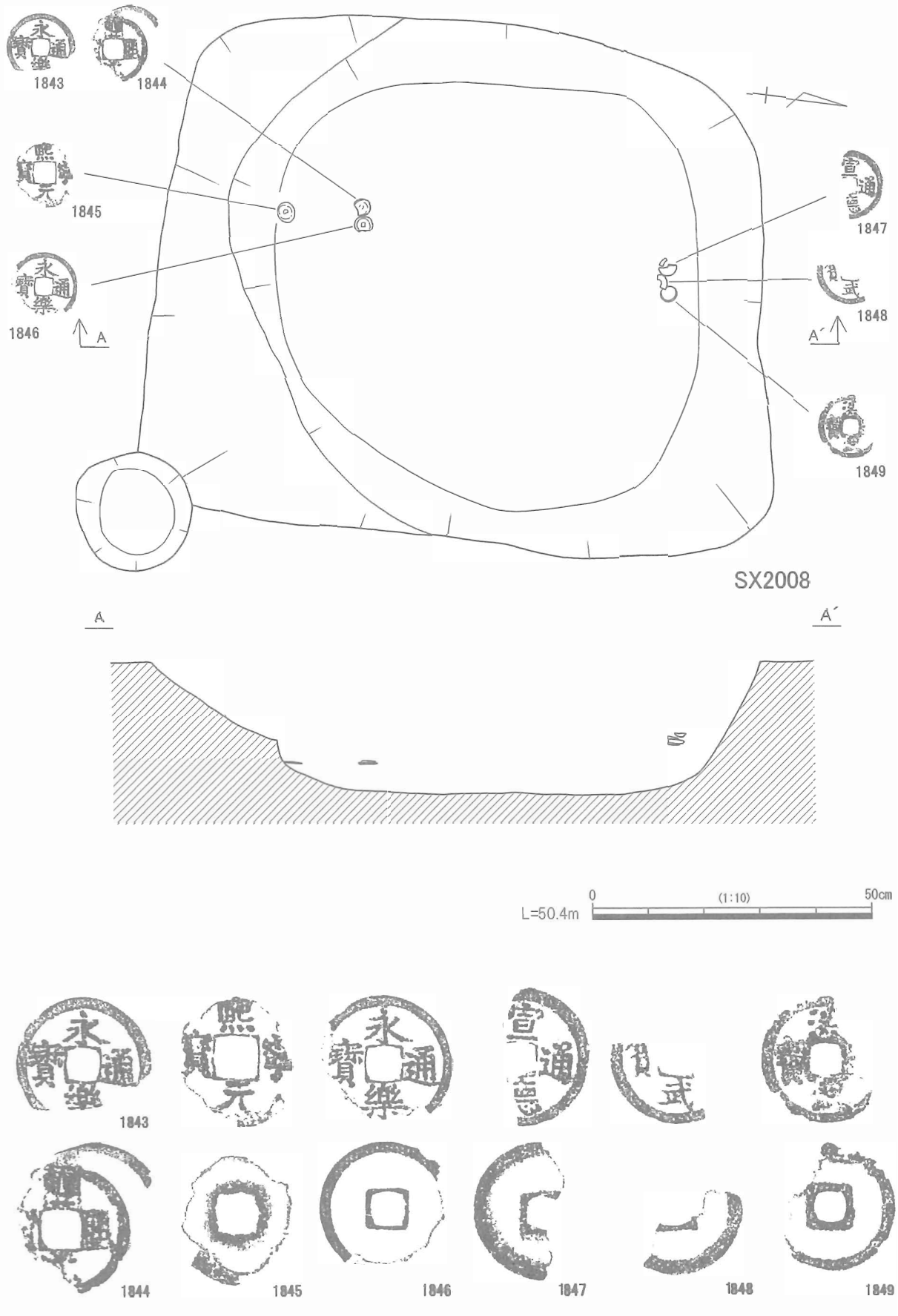


図 253　SX2008 実測図・出土遺物

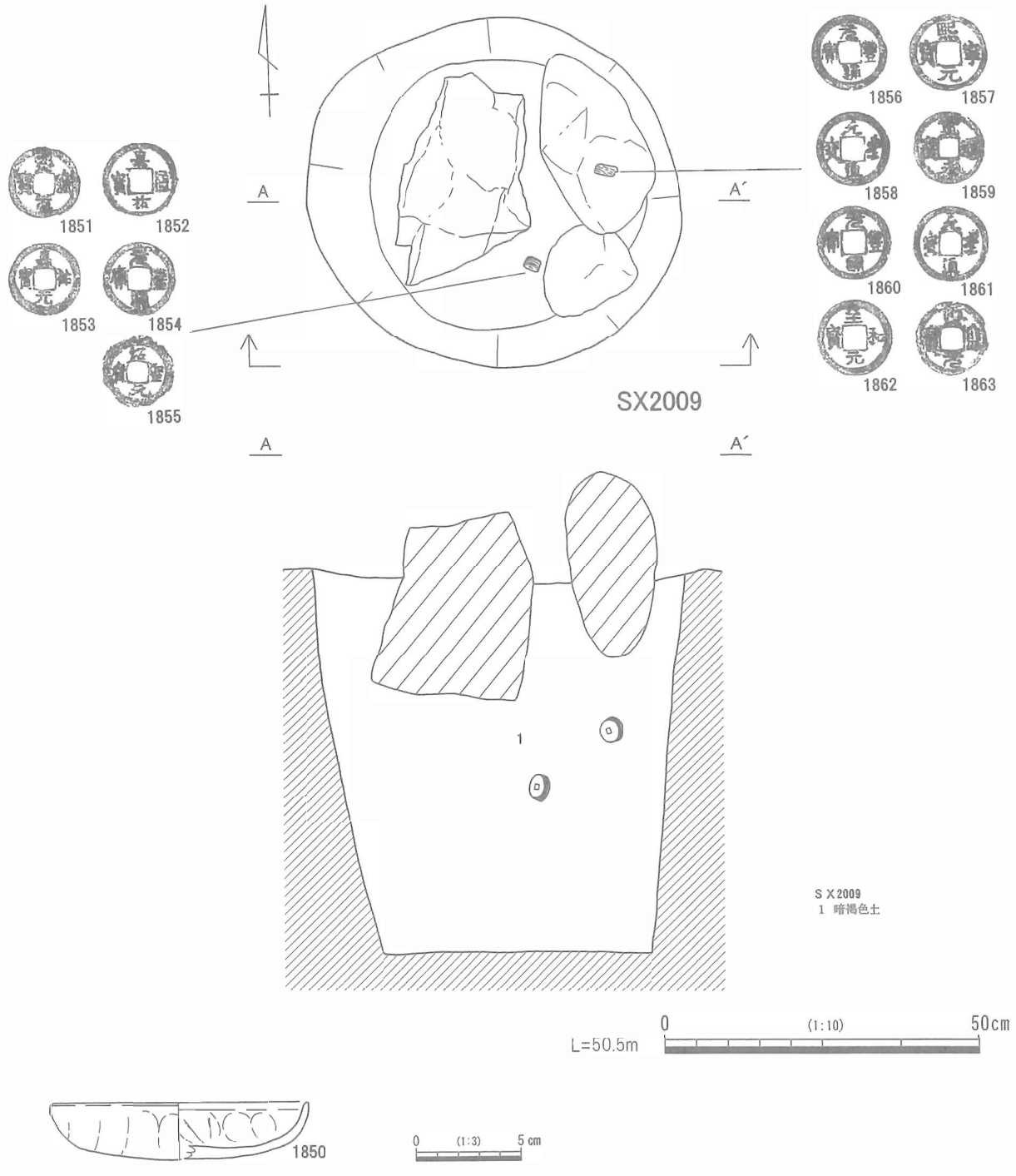


図 254　SX2009 実測図・出土遺物（1）

から、埋土に混入した遺物の可能性が高い。

SX2009 は、同様の平面形態の SX2004･2005･2008 と比べると、その規模は明らかに小型である。また、深さも底面から墓標の下端までは 40 ㎝程しかない。体躯を折り曲げれば成人の埋葬も不可能ではない

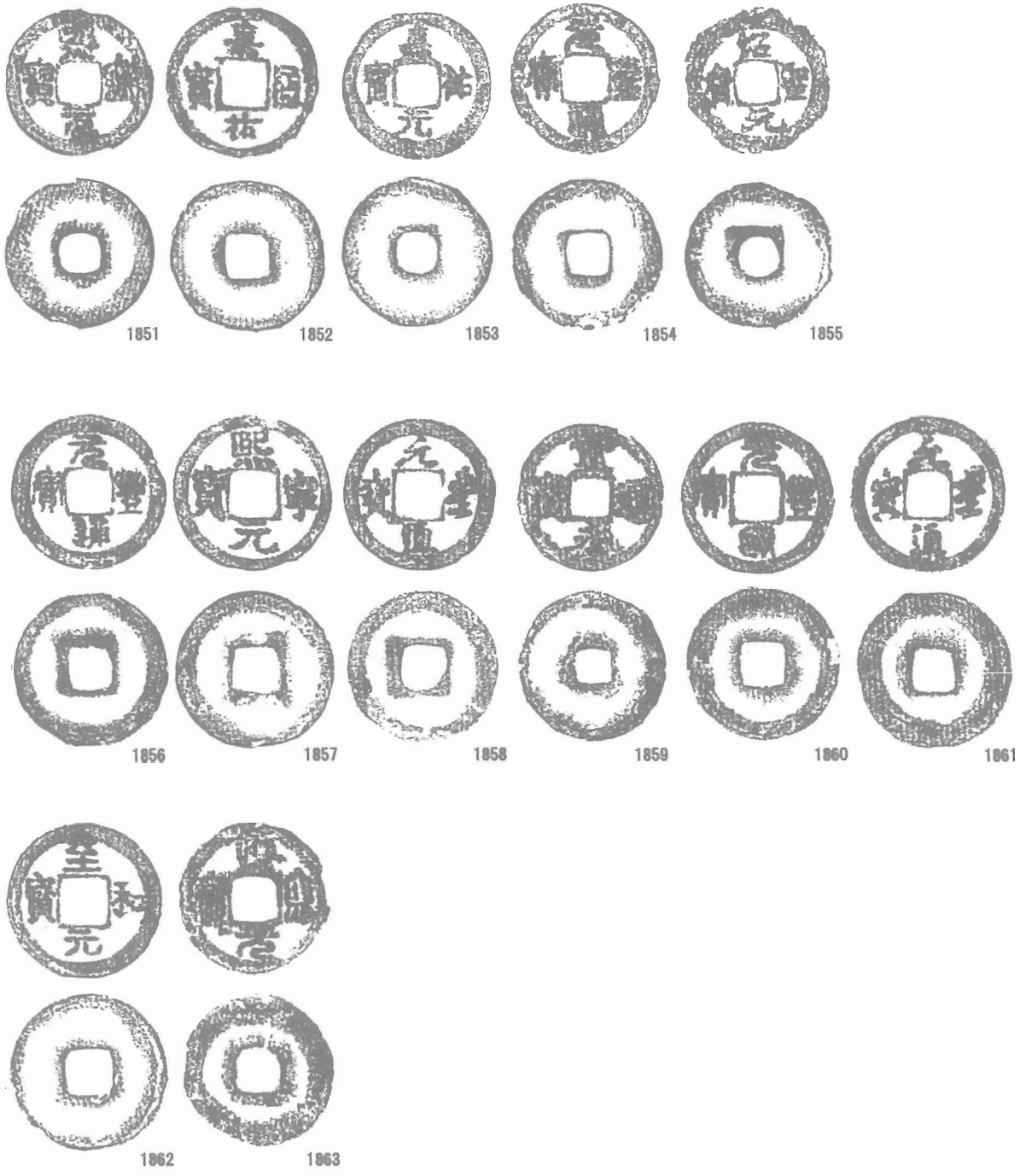


図 255　SX2009 出土遺物（2）

が、被葬者が子供である可能性も想定しておく必要があろう。

銭種構成としては、渡来銭または模鋳銭に加えて、１枚だけではあるが古寛永が含まれている。このことから、埋葬年代は 17 世紀中頃を中心とした時期と推測される。

SX2011（図 248・256、図版 68）

SX2009 の北西約 8 mに位置する木棺墓または直葬墓である。南北に長軸をもつ、長さ 90 cm・幅 55 cmのややいびつな隅丸長方形で、深さは現存で 10 cm程度である。底面や側面に被熱した痕跡はなく、炭化物も検出されていない。人骨は墓坑西端で破片が数点検出されているが、遺存状態が悪く、小破片もしくは粉末となった状態であった。

副葬品としては、墓坑の中央やや北東寄りの位置から、銭貨（1864 ～ 1869）が出土している。1864 は開元通宝、1865 と 1866 は永楽通宝、1867 は景徳元宝、1868 は皇宋通宝、1869 は乾元重宝である。藁紐等は確認されていないが、6 枚重なった状態で錆着しており、緡銭であった可能性が高い。

埋葬年代としては、貨銭が渡来銭のみで構成されていることから、15 世紀後半から 17 世紀前半にかけての時期でもその前半代であると推測される。

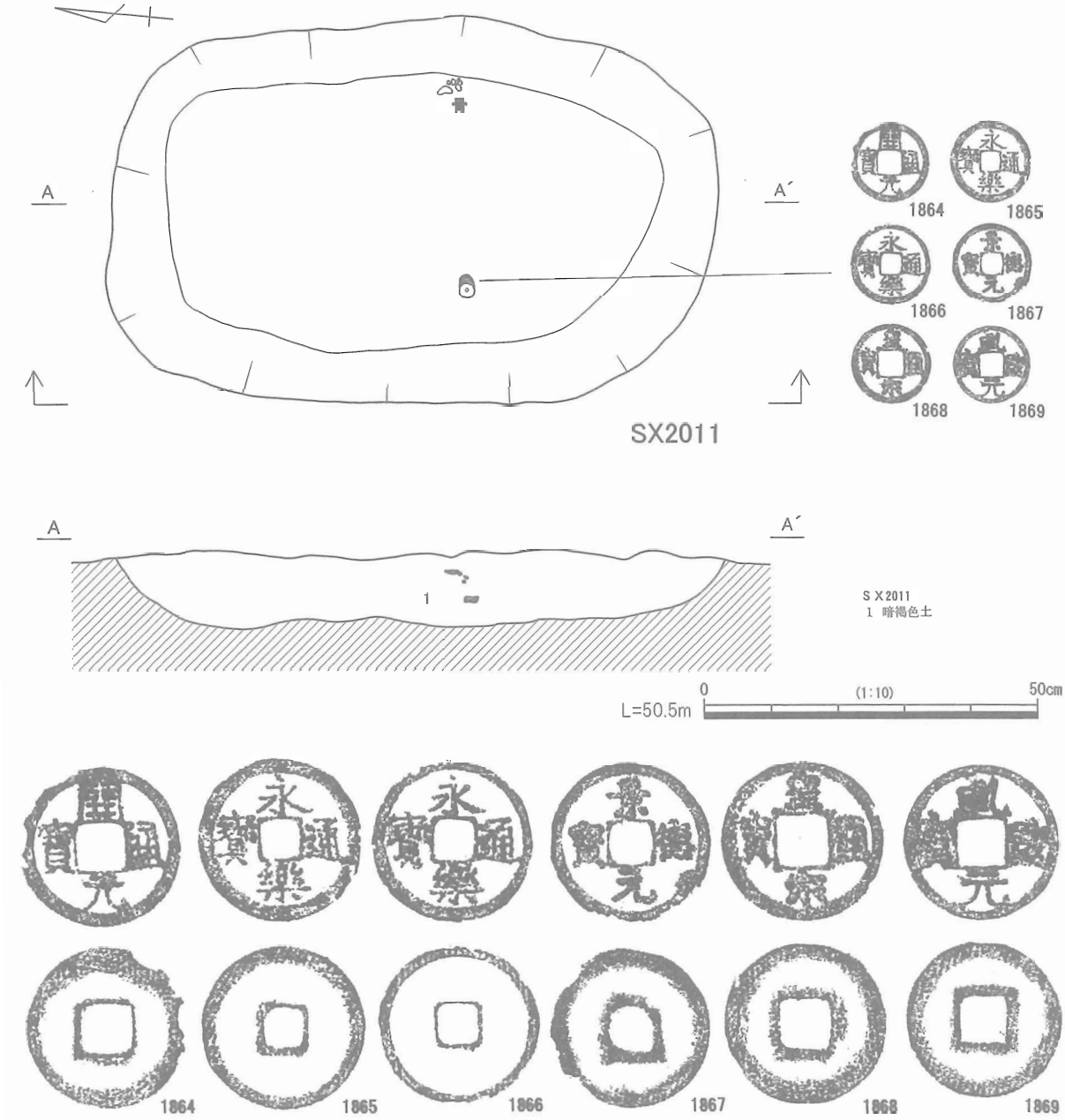


図 256　SX2011 実測図・出土遺物

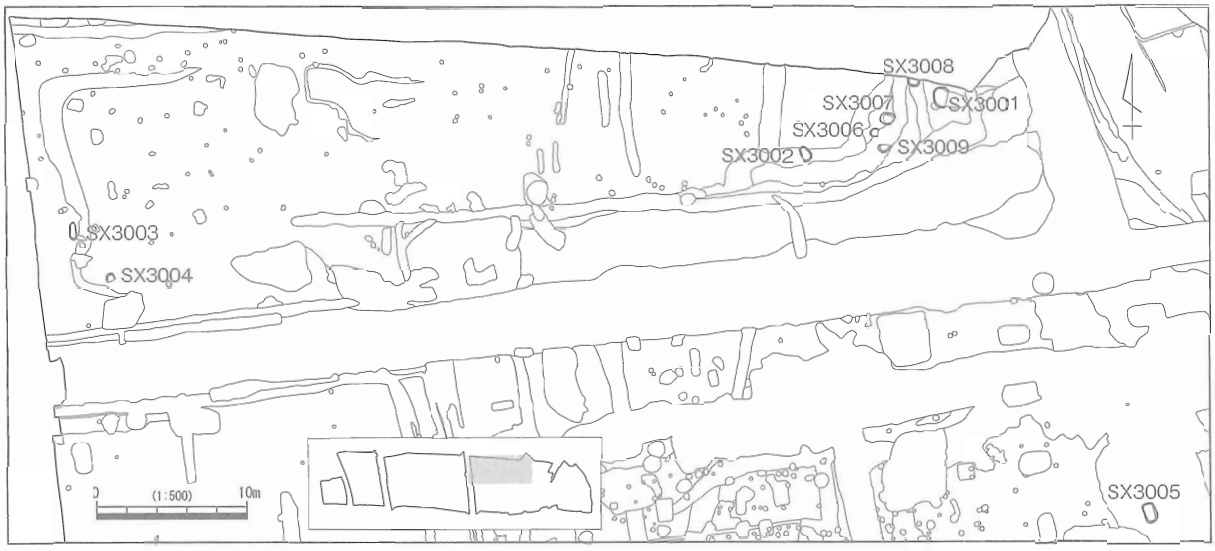


図257　埋葬遺構配置図（3区）

SX3001（図257・258、図版23・25・65・66・68）

3区の北東部に位置する荼毘墓である。SD3009の上面で検出されており、東側はトレンチによって失われている。南北を長軸とする径1.1～1.3m程度の楕円形と推測され、深さは約30cm残存した。墓坑の底面と側面には、被熱による赤化が認められる。墓坑内からは、焼土ブロックと炭化物の他に、人骨も多量に出土している。人骨は墓坑全体に散らばっており、ほとんどが細片の状態であった。

副葬品は、土師質土器皿3枚（1870～1872）と、銭貨1枚（1876）が出土している。土師質土器皿は、口縁を上に向けた状態で、墓坑の北側に副葬されている。1870は単独で、1871と1872は2枚重ねて置かれている。1876は古寛永で、墓坑の南側から出土しており、表面には菰や筵の一部とみられる粗い繊維状の有機物の付着が認められる。遺物としては、他に棺に用いられたと思われる鉄釘（1873～1875）も3点出土している。いずれもやや小型の方頭釘で、板状に延ばした後下方に巻き込んで頭部を造り出している。

下層に存在するSD3009の埋没年代は、17世紀前半に位置付けられており、切り合い関係からSX3001がこれを遡ることはない。1枚だけではあるが古寛永が出土していることから、埋葬年代は、17世紀中頃から後半にかけての時期と推測される。

SX3002（図257・259、図版23・26・65・66・68）

SX3001より約7.5m西に位置する荼毘墓である。長径8.7m・短径6.3mの、南北方向に長軸をもつ楕円形で、深さは80cm程残存している。底面は被熱により広範囲にわたって赤化しており、炭化物も出土している。人骨は、墓坑のやや西側寄りの部分で集中して発見されている。

副葬品は、土師器皿と銭貨、火打金が出土している。土師質土器皿（1877～1881）は、墓坑の北側から5枚まとまって出土している。いずれも立った状態で出土しており、単純に置いたとは考えにくい。布に包んだり、箱に入れて埋納された可能性がある。被熱の痕跡が認められないことから、荼毘に付した後に供献されたものとみてよい。銭貨（1883～1888）は、いずれも古寛永であり、墓坑の南側から、多少散らばった状態で発見されている。一部に被熱の痕跡が認められる。1882は短冊形の火打金で、銭貨と近接した位置で出土している。

埋葬年代としては、古寛永のみで構成される銭種構成から、17世紀中頃から後半にかけての時期と推測される。

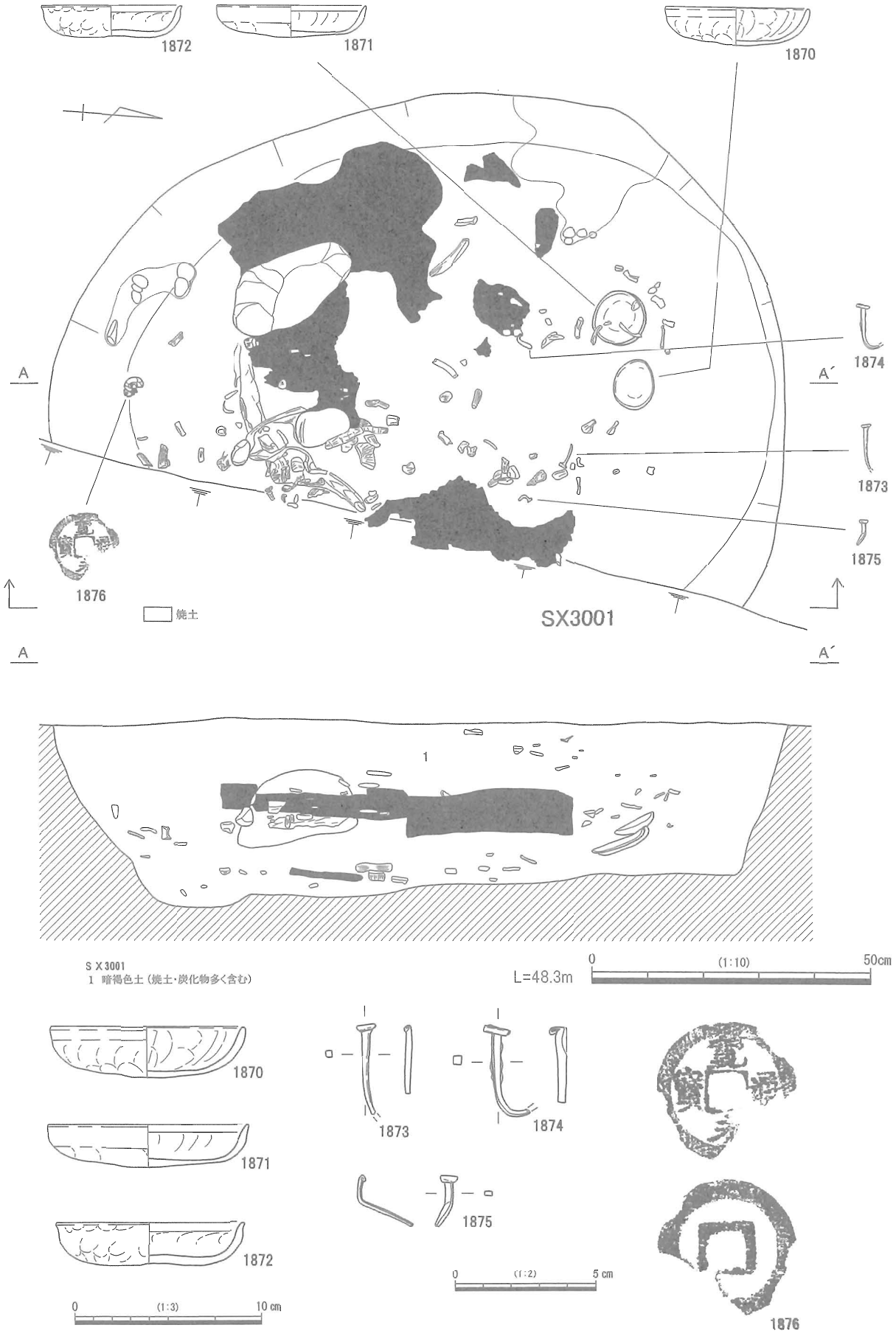


図 258　SX3001 出土遺物

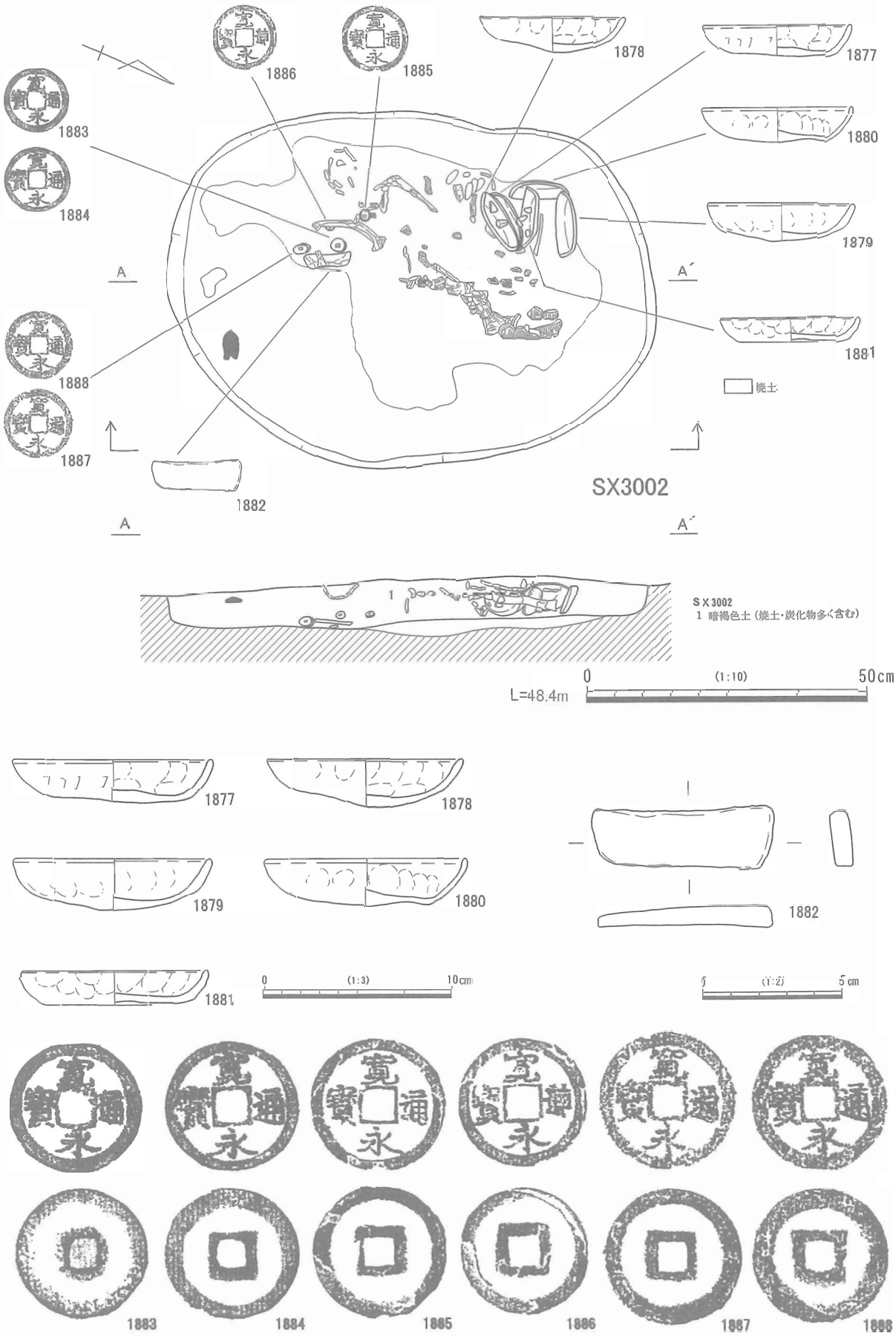


図 259　SX3002 実測図・出土遺物

SX3006（図 257・260、図版 68）

SX3002 から約 3 m東に隣接する、桶棺墓または直葬墓である。現地では SD3014 の掘り下げ後に検出されているが、実際は SD3014 より後出する遺構である。南東部が失われているが、平面形態は、直径 65 cm前後の円形であったものと推測される。SX2009 と同様の小型の埋葬遺構である。上面は大幅に削平されており、深さは 5 cm程しか残存しない。底面や側面に被熱の痕跡は認められず、炭化物や人骨も発見されていない。

副葬品としては、墓坑の南側で銭貨が 6 枚発見されている。銭貨はすべて古寛永であり、1889 ～ 1891 と 1892 ～ 1894 が、3 枚ずつ重なった状態で錆着している。1889 と 1894 の表面には、全体に纏状の繊維の付着が認められる。墓坑や棺の底に敷かれていた筵等が付着しているものとみられる。

埋葬年代は、古寛永のみの銭種構成であることから、17 世紀中頃から後半にかけての時期であると推測される。

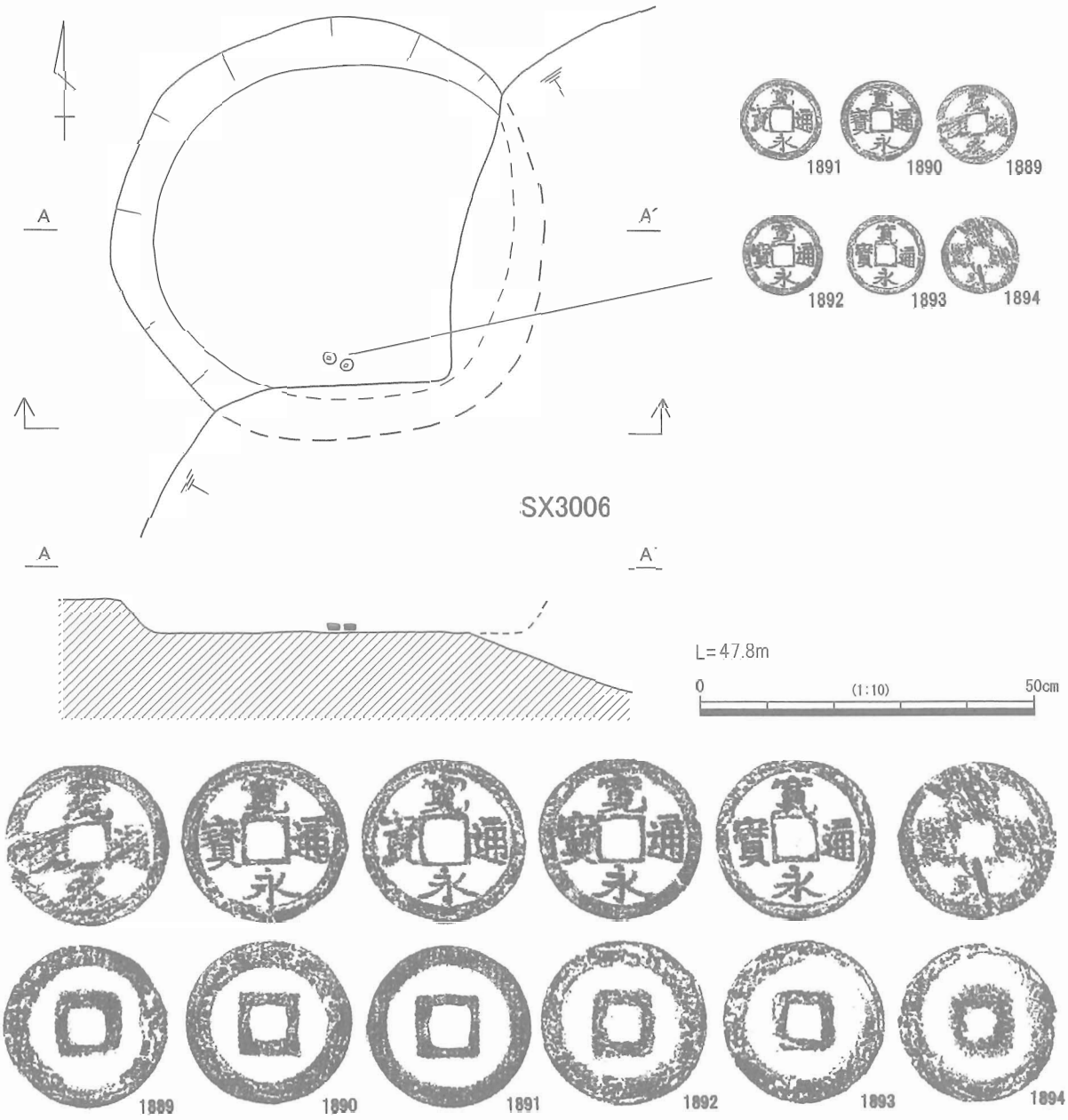


図 260　SX3006 実測図・出土遺物

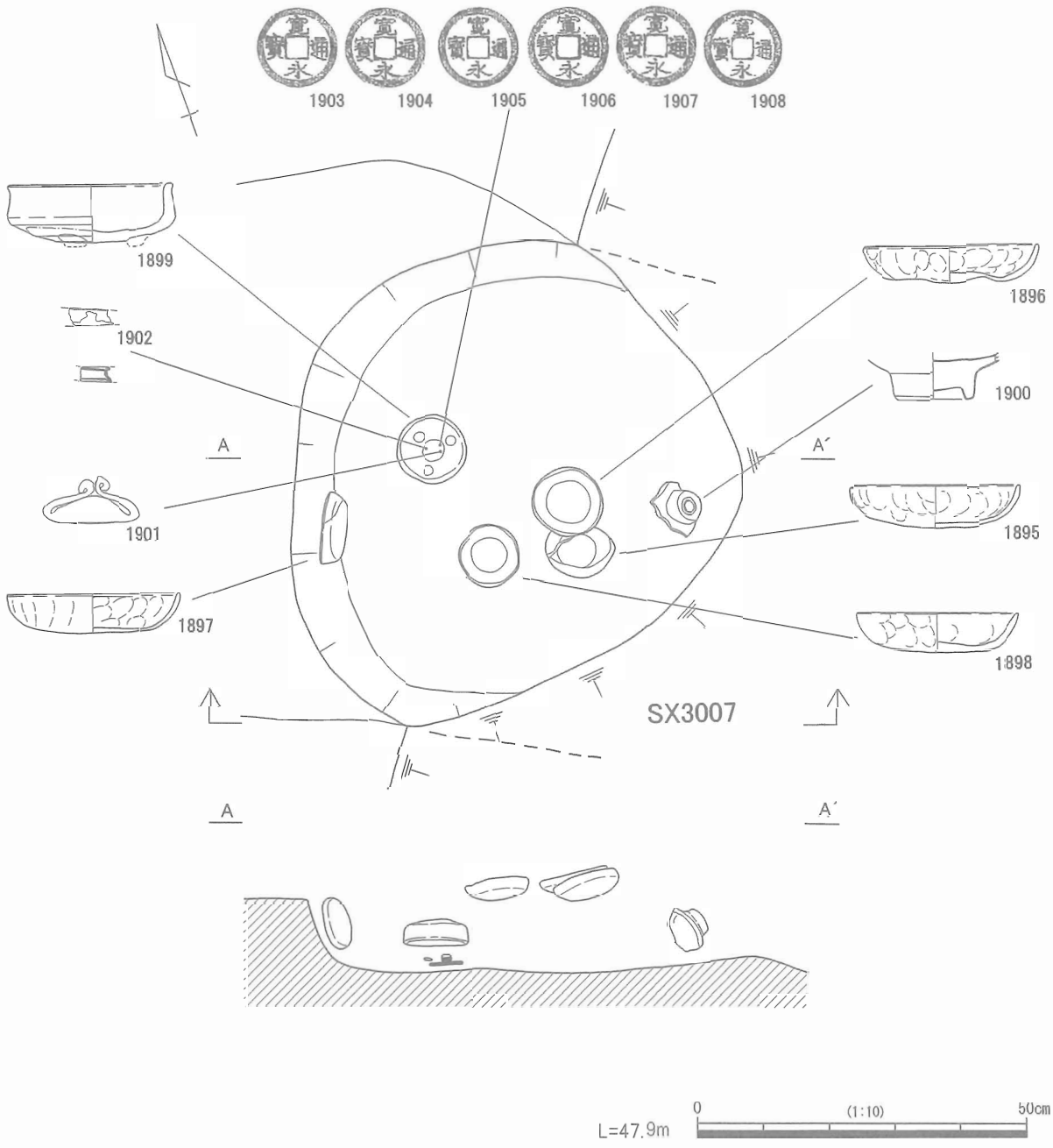


図 261　SX3007 実測図

SX3007（図 257・261・262、図版 24・26・65・66・68）

SX3006 の北東側 50 cmに隣接する、埋葬遺構である。SX3006 と同様に、SD3014 の掘り下げ後に検出されてはいるが、実際は SD3014 より後出する遺構である。東側の大半が失われているが、墓坑の形状は直径 80 cm前後の円形または隅丸方形と推測される。深さは現存で 15 cm程度である。底面や側面に被熱の痕跡は認められておらず、埋土中に炭化物や人骨も確認されなかった。

副葬品は、他の埋葬遺構に比べて豊富に出土している。1895 ～ 1898 は土師質土器皿である。1897 は、墓坑の西側に立てかけるようにして、他の 3 枚は口縁を上に向け、底部より 10 cm程浮いた状態で墓坑中央から出土している。墓坑のやや北側では、火打金（1901）とキセル（1902）、銭貨（1903 ～ 1908）が副葬されており、その上には脚を打ち欠いた美濃産の盤（1899）が被せられていた。銭貨は、すべて

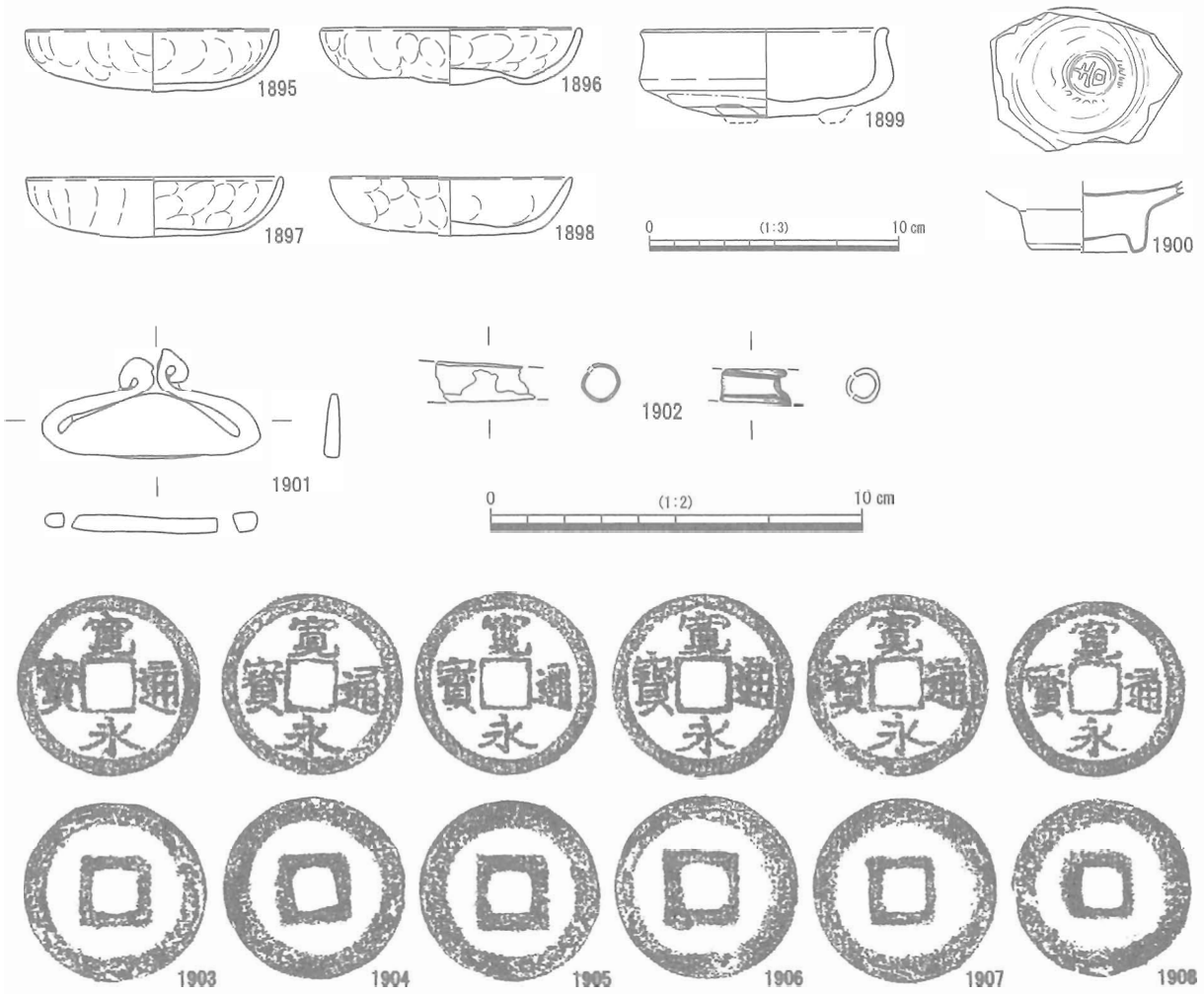


図 262　SX3007 出土遺物

古寛永であり、６枚重なった状態で錆着していた。また、墓坑の東側からは、青磁の碗（1900）が出土している。口縁部が欠損し、底部から高台部のみとなっている。出土位置や層位からみて、本遺構に伴うものであることは間違いないが、副葬品ではなく、埋土に混入した遺物の可能性もある。

副葬された美濃産の盤が 17 世紀後半のものであり、貨銭も古寛永のみの銭種構成であることから、埋葬年代は 17 世紀後半とみてよいだろう。

SX3008（図 257・263、図版 23・68）

SX3007 から北東へ 3.7 ｍの場所に、隣接して築かれている荼毘墓である。調査時には西側を大きく掘削しているが、残されている北壁の土層の記録や遺物の分布から、本来は東西 90 ㎝程度の規模であったとみられる。深さは現存で約 20 ㎝あり、北側は調査範囲外のため未調査である。平面形態は、おそらく南北方向に長い楕円形であろう。底面は被熱により広範囲にわたって赤化しており、人骨や炭化物も出土している。

副葬品としては、墓坑の南東側から、銭貨（1915・1916）が２枚出土している。1915 は７㎝程浮いた高さから、1916 は底部から出土している。1915 は文銭、1916 は古寛永であり、いずれも繊維等の付着は認められなかった。墓坑の南西側からは、棺に用いられたとみられる鉄釘（1909）が１点出土している。方頭釘であり、頭部の形状は SX3001 出土のものと類似する。この他に、埋土内から土師質土器

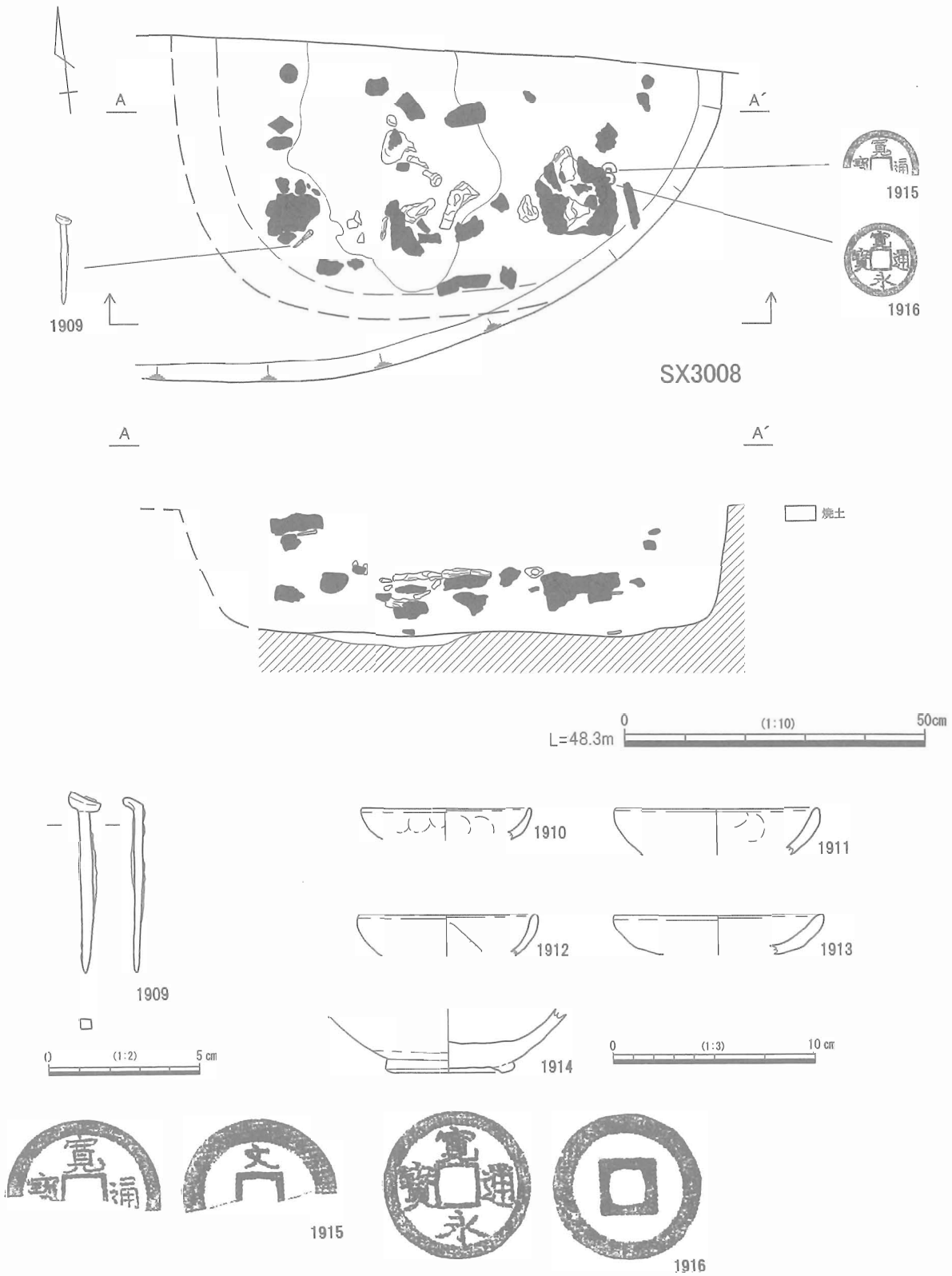


図 263　SX3008 実測図・出土遺物

皿（1910 ～ 1913）や山茶碗（1914）なども出土しているが、いずれも小破片の状態であり、副葬品ではなく埋土に混入した遺物とみてよい。

埋葬年代は、古寛永と文銭という銭種構成から、17 世紀後半を中心とする時期であると推測される。

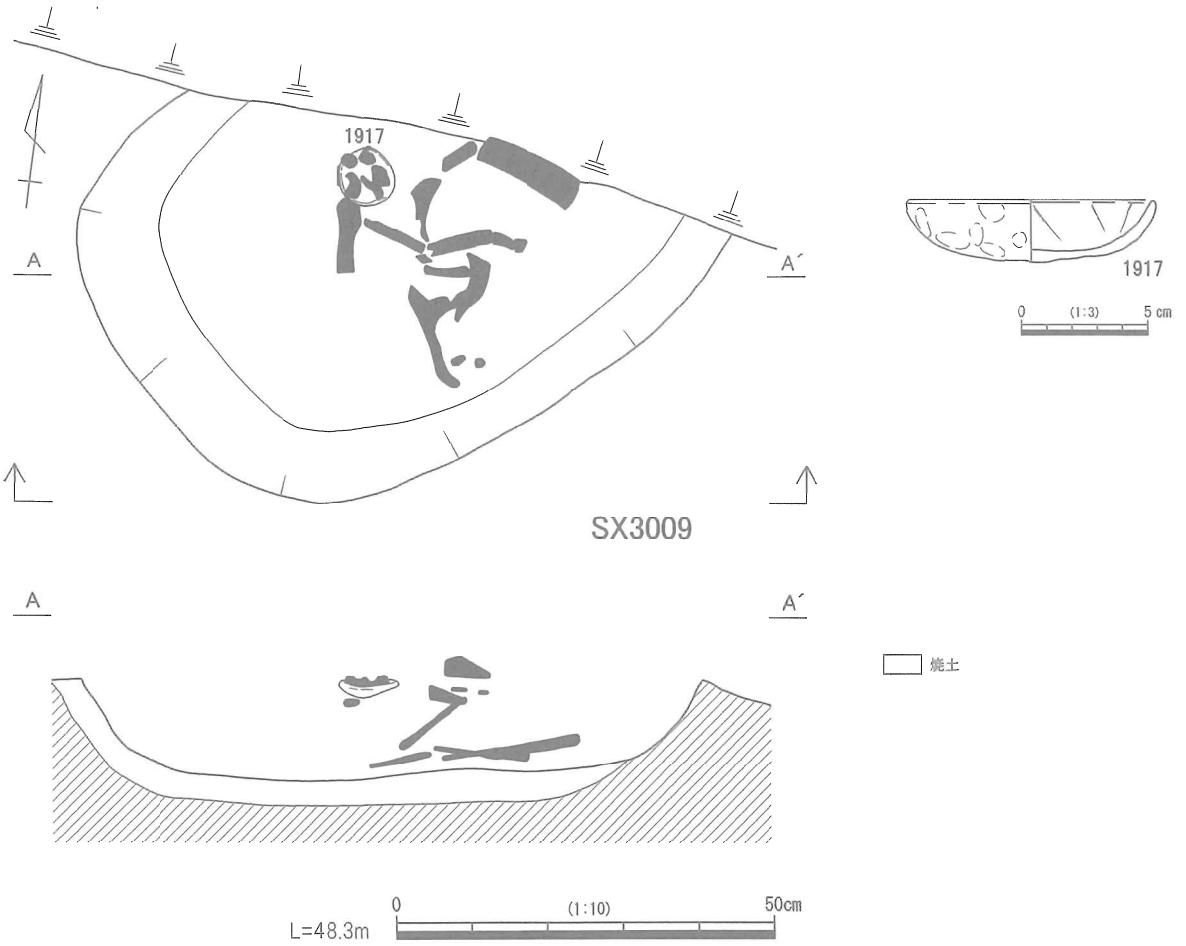


図 264　SX3009 実測図・出土遺物

SX3009（図 257・264、図版 23・66）

SX3007 の南 1.5 mに隣接する荼毘墓である。北側がトレンチにより失われているが、幅 60 cm・長さ 90 cm程度の隅丸長方形の墓坑であると推測される。長軸の方向は、基本的に南北を意識しているとみられるが、東に大きく傾いている。底面と側面は被熱によって赤化しており、炭化物が多量に出土しているが、人骨は遺存していなかった。

副葬品は、土師質土器皿が 1 点のみである。土師質土器皿（1917）は、底面より 10 cm程高い位置から、口縁を上に向けた状態で出土している。内外面の大部分が被熱によって変色しており、煤も広範囲に付着する。遺体とともに、荼毘に付されたものとみてよい。

遺物が土師質土器皿 1 点のみであるため、年代の特定は困難ではあるが、周辺の埋葬遺構の年代から 17 世紀代である可能性が高いと推測される。

SX3003（図 257・265、図版 23・26・68）

SX3009 から西へ約 50 m離れた場所に位置する、荼毘墓である。南北に長軸をもつ長径 1.1 m・短径 45 cmの楕円形で、深さは 25 cm程残存する。底面は被熱により赤化しており、埋土には焼土ブロックと炭化物が多量に含まれていた。人骨については、検出されなかった。

副葬品は、土師質土器皿と銭貨が出土している。土師質土器皿（1918・1919）は、割れてはいるが、墓坑中央から口を伏せた形で出土している。被熱の痕跡が認められないため、遺体が荼毘に付された後

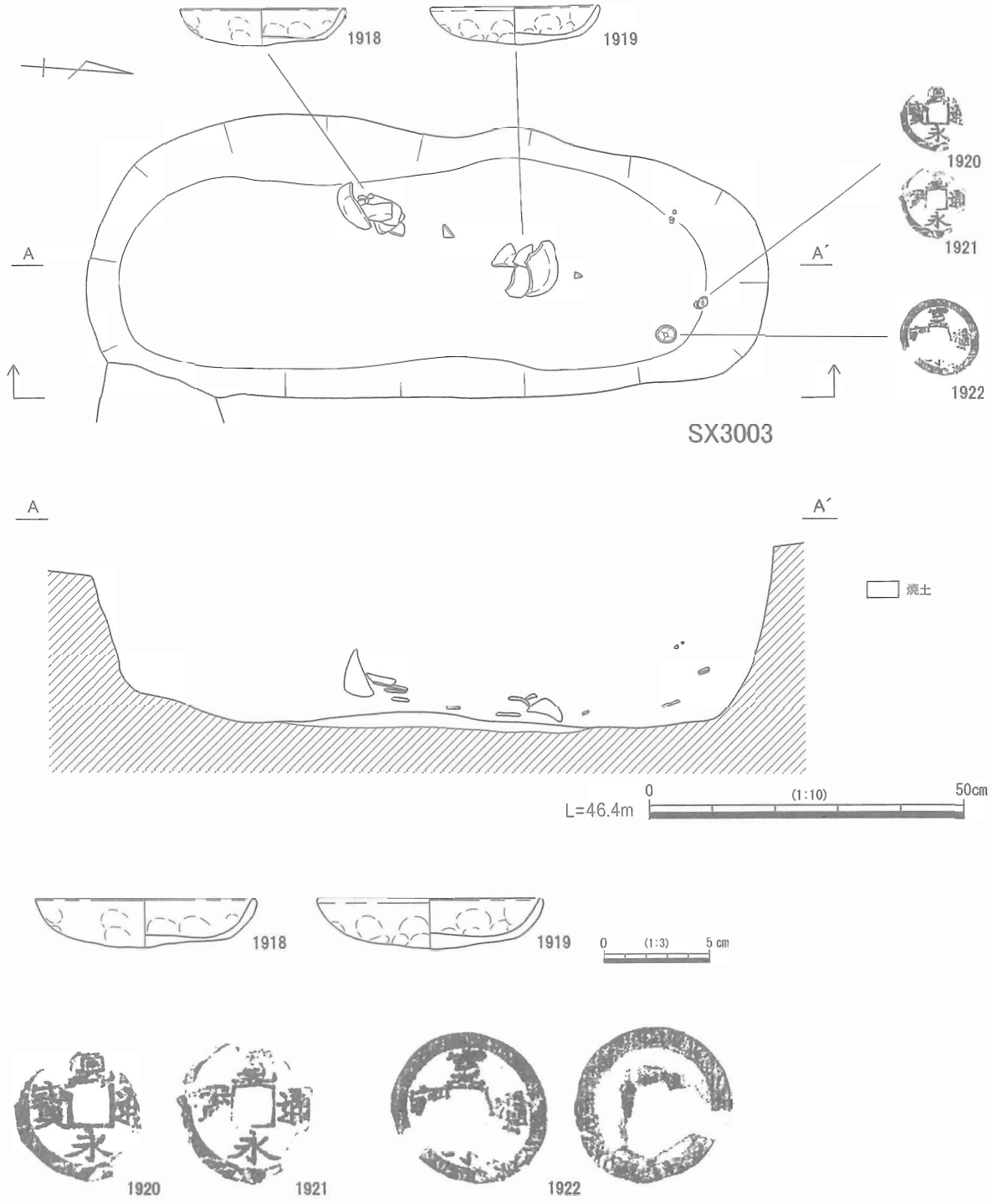


図 265　SX3003 実測図・出土遺物

に供献されたものとみられる。銭貨（1920 ～ 1922）はすべて古寛永で、墓坑の北端から出土している。いずれも劣化が著しく、被熱の痕跡が確認できることから、遺体とともに荼毘に付したものと考えられる。1920 と 1921 は、２枚重なった状態で銹着している。これ以外には、細片になった銭貨も２点出土している。

埋葬年代は、銭種不明の小破片を除き、すべて古寛永で構成されていることから、17 世紀中頃から後半にかけての時期と推測される。

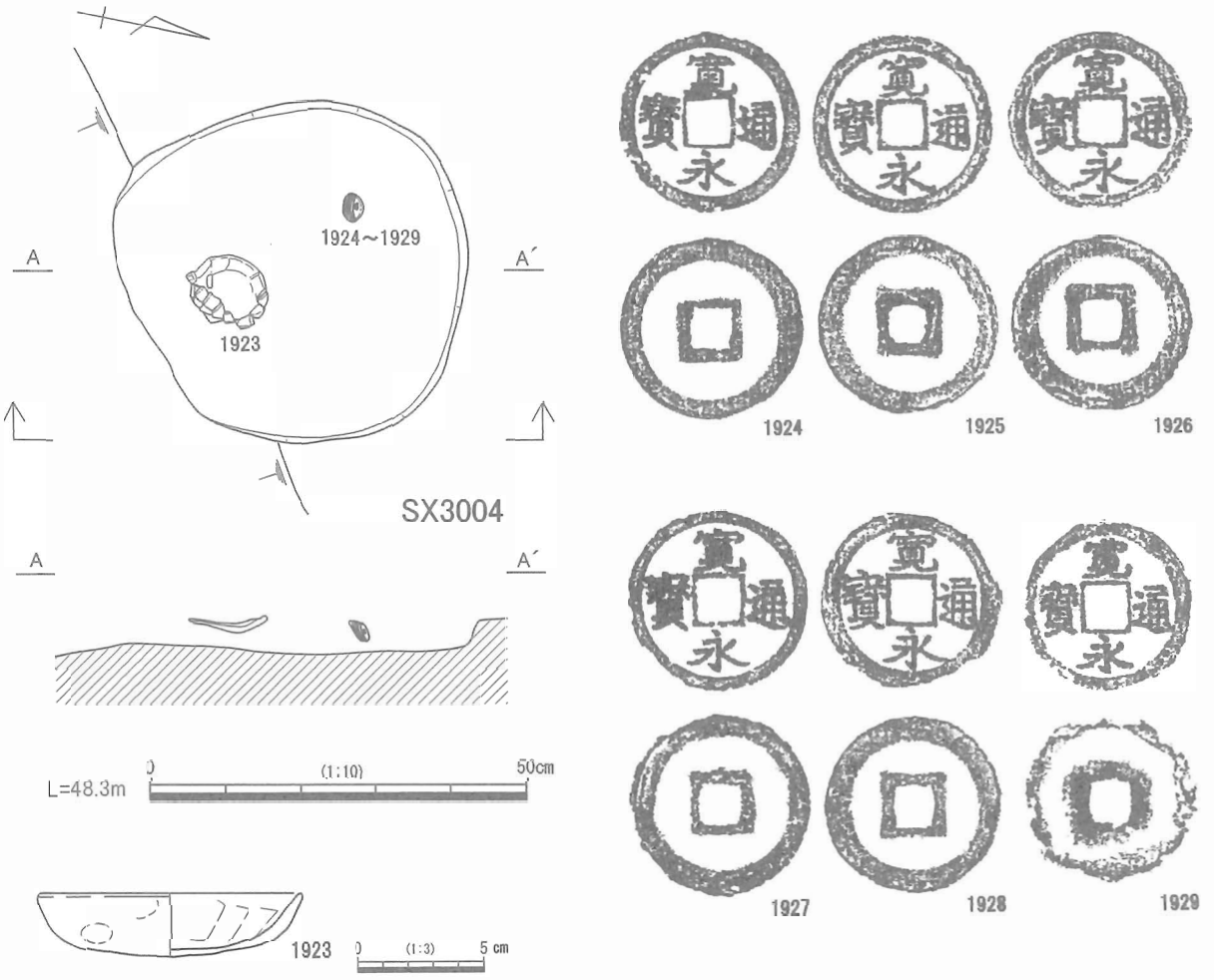


図 266　SX3004 実測図・出土遺物

SX3004（図 257・266、図版 26・66・68）

SX3003 の 4 m南東に位置する埋葬遺構である。底部の一部がかろうじて残存する程度であるため、墓坑の形状や規模については特定できないが、平面形は円形または楕円形と推測される。底面や側面に被熱の痕跡は認められておらず、埋土中にも焼土や炭化物は検出されていない。

副葬品としては、土師質土器皿（1923）と銭貨（1924 ～ 1929）が出土している。土師質土器皿は口縁を上にして埋納されている。銭貨はすべて古寛永であり、6 枚重なった状態で錆着していた。藁紐等は出土していないが、孔が通った状態で横にして置かれており、緡銭であった可能性が高い。

埋葬年代は、古寛永のみの銭種構成から、17 世紀中頃から後半にかけての時期であると推測される。

SX3005（図 257・267、図版 23・26・66）

3 区の南東部に単独で検出されている荼毘墓である。南北方向に長軸をもつ、長さ 1.3 m・幅 90 cm の隅丸長方形で、深さは 10 cm程残存する。底面は被熱により広範囲にわたって赤化している。底面付近では、多量の炭化物とともに、人骨も出土している。

副葬品は、墓坑の北側で土師質土器皿（1930・1931）が 2 枚出土している。いずれも口縁部を下にして埋納されていた。この他に、棺に用いたとみられる鉄釘（1932・1933）が 2 点出土しており、1933 には木質も残存していた。いずれも方頭釘で、比較的大型のものである。

年代については不明瞭ではあるが、中屋遺跡における他の荼毘墓と同様に、17 世紀中頃から 18 世紀にかけての時期である可能性が高い。

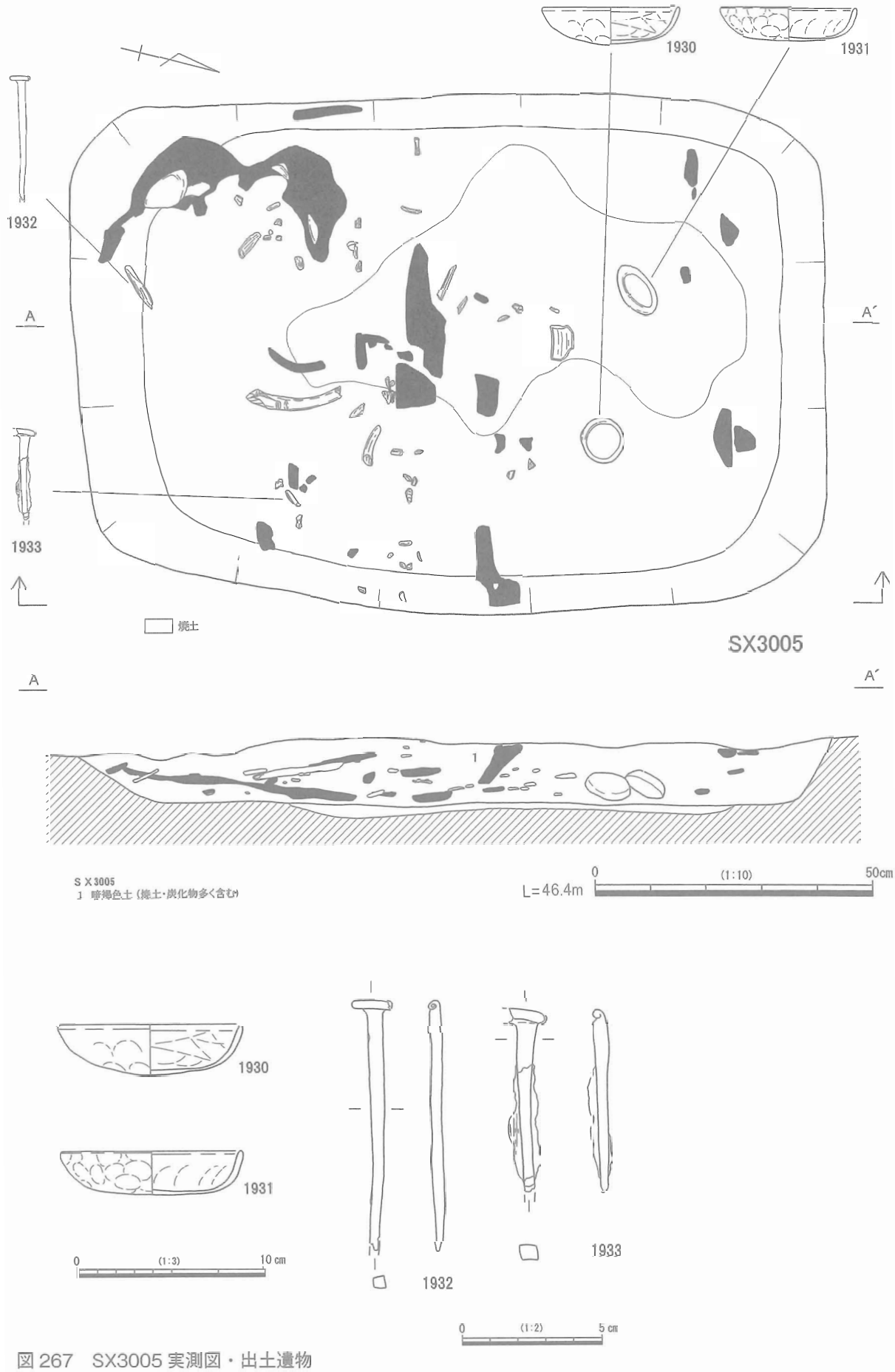


図 267　SX3005 実測図・出土遺物

表 24　埋葬遺構出土 土器・陶磁器観察表

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1785	SX1005		土師質土器	皿		非ロクロ	10.65	5.9	3.0		3/4		灰白	
1798	SX1007		土師質土器	皿		ロクロ	11.65	5.5	3.25		3/4		浅黄橙	
1805	SX1008		土師質土器	皿		非ロクロ	9.8	7.1	2.0		口縁部 1/4 欠損		灰白	
1806	SX1008		土師質土器	皿		非ロクロ	10.2	6.2	2.4		完形		浅黄橙	
1807	SX1008		土師質土器	皿		非ロクロ	9.8	6.0	2.4		完形		浅黄橙	
1808	SX1008		瓦質土器	香炉							体部 1/10		黄灰	
1809	SX1008		土師器	甕			(20.6)				口縁部 1/16		にぶい橙	
1816	SX2004		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)				口縁部 1/3		灰白	
1817	SX2004		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁部 1/10		浅黄橙	
1850	SX2009		土師質土器	皿		非ロクロ	(12.1)	(9.5)	(2.7)		口縁～底部 1/5		灰白	
1870	SX3001		土師質土器	皿		非ロクロ	10.2	6.6	2.7		完形		浅橙	
1871	SX3001		土師質土器	皿		非ロクロ	10.7	7.8	2.3		完形		灰白	
1872	SX3001		土師質土器	皿		非ロクロ	10.0	7.7	2.2		完形		灰白	
1877	SX3002		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)	7.3	2.2		1/2		灰白	
1878	SX3002		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.35)	6.6	2.55		1/2		灰白	
1879	SX3002		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)	7.1	2.7		1/2		灰白	
1880	SX3002		土師質土器	皿		非ロクロ	10.6	6.7	2.45		1/2		灰白	
1881	SX3002		土師質土器	皿		非ロクロ	9.7	7.7	1.8		1/2		灰白	
1895	SX3007		土師質土器	皿		非ロクロ	9.95	7.65	2.5		ほぼ完形		灰白	
1896	SX3007		土師質土器	皿		非ロクロ	10.3	6.6	2.2		ほぼ完形		浅黄橙	
1897	SX3007		土師質土器	皿		非ロクロ	10.15	7.0	2.4		口縁部一部欠損		灰白	
1898	SX3007		土師質土器	皿		非ロクロ	9.6	7.25	2.3		ほぼ完形		灰白	
1899	SX3007		近世陶器	盤	美濃	登３～４	9.45	4.15			高台部欠損	鉄釉	黒褐／淡黄	
1900	SX3007		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	Ｃ２類か				4.2	底部のみ	青磁	灰オリーブ／灰白	雷文「吉」
1910	SX3008		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.4)				口縁部 1/14		灰白	
1911	SX3008		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.0)				口縁部 1/14		灰黄褐	スス付着
1912	SX3008		土師質土器	皿		非ロクロ	(8.8)				口縁部 1/12		灰白	
1913	SX3008		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.4)				口縁部 1/12		灰白	内面スス付着
1914	SX3008		山茶碗	碗	湖西湖西	Ⅲ-1				5.3	体部～底部	内面・目込釉	灰白	
1917	SX3009		土師質土器	皿		非ロクロ	9.7	6.25	2.45		5/6		灰白	内外面スス付着
1918	SX3003		土師質土器	皿		非ロクロ	10.35	7.6	2.3		ほぼ完形		浅黄橙	
1919	SX3003		土師質土器	皿		非ロクロ	10.55	7.65	2.35		ほぼ完形		浅黄橙	
1923	SX3004		土師質土器	皿		非ロクロ	(10.3)	(7.9)	2.5		口縁～底部 1/3		浅黄橙	
1930	SX3005		土師質土器	皿		非ロクロ	9.65	6.8	2.7		ほぼ完形		灰白	
1931	SX3005		土師質土器	皿		非ロクロ	9.5	7.0	2.35		完形		灰白	

表 25　埋葬遺構出土 銭貨観察表

No.	遺構名	銭名	銭種	銭経（cm）	内径（cm）	孔（cm）	重量（g）	備考
1788	SX1005	寛永通寶	古寛永	2.35	1.90	0.55	3	布付着
1789	SX1005	寛永通寶	古寛永	2.50	2.00	0.55	3	
1790	SX1005	寛永通寶	古寛永	2.40	2.00	0.5	3	
1791	SX1005	寛永通寶	古寛永	2.40	1.90	0.5	2	布目付着
1792	SX1006	咸平元寶		2.45	1.95	0.65	1	一部欠損
1793	SX1006	元符通寶		2.40	1.80	0.6	3	
1794	SX1006	永楽通寶		2.50	2.10	0.55	3	
1795	SX1006	天聖元寶		2.60	2.05	0.65	3	
1796	SX1006	天聖元寶	模鋳銭	2.40	2.00	0.6	2	
1797	SX1006	景徳元寶	模鋳銭	2.45	2.10	0.65	2	
1799	SX1007	元豊通寶	模鋳銭	2.45	1.80	0.6	3	銅紐付着
1800	SX1007	永楽通寶	本銭	2.50	2.00	0.5	3	
1801	SX1007	天聖元寶		2.50	1.95	0.6	3	
1802	SX1007	元祐通寶		2.45	2.10	0.65	3	
1803	SX1007	天聖元寶	模鋳銭	2.35	1.95	0.6	4	
1804	SX1007	元符通寶	模鋳銭	2.40	1.85	0.6	3	
1810	SX1008	永楽通寶	本銭	2.50	2.05	0.5	2	
1811	SX1008	皇宋通寶	模鋳銭	2.55	2.10	0.8	2	
1812	SX1008	元祐通寶		2.45	2.05	0.65	3	
1813	SX1008	聖宋元寶		2.45	2.00	0.55	4	
1814	SX1008	元豊通寶	模鋳銭	2.45	1.85	0.65	3	
1815	SX1008	皇宋通寶	模鋳銭	2.45	1.95	0.65	3	
1820	SX2004	寛永通寶	古寛永	2.50	2.00	0.45	4	
1821	SX2004	寛永通寶	古寛永	2.55	2.00	0.45	3	
1822	SX2004	寛永通寶	古寛永	2.50	1.95	0.5	4	
1823	SX2004	寛永通寶	古寛永	2.55	2.05	0.55	3	
1824	SX2004	寛永通寶	古寛永	2.60	1.95	0.45	3	
1825	SX2004	寛永通寶	古寛永	2.45	2.00	0.6	1	一部欠損
1830	SX2005	寛永通寶	文銭	2.50	2.00	0.6	2	銅紐付着
1831	SX2005	寛永通寶	鉄銭	2.50	–	–	2	有機物付着
1832	SX2005	寛永通寶	新寛永	2.50	1.95	0.55	2	
1833	SX2005	寛永通寶	古寛永	2.40	2.00	0.5	4	布付着
1834	SX2005	寛永通寶	鉄銭	–	–	–	–	破片
1835	SX2006	寛永通寶	新寛永	2.35	1.90	0.65	2	
1836	SX2006	寛永通寶	新寛永	2.35	1.95	0.55	3	
1837	SX2006	寛永通寶	文銭	2.60	2.05	0.55	3	大きく変形
1838	SX2006	寛永通寶	新寛永	–	–	–	1	周囲欠損
1843	SX2008	永楽通寶		2.45	2.00	0.55	3	一部欠損
1844	SX2008	開元通寶		2.45	2.00	0.55	3	一部欠損
1845	SX2008	熙寧元寶		–	–	0.7	1	周囲欠損
1846	SX2008	永楽通寶		–	–	0.55	1	一部欠損
1847	SX2008	寛徳通寶		–	–	–	3	1/2 残存
1848	SX2008	洪武通寶		–	–	–	–	1/3 残存
1849	SX2008	洪武通寶		–	–	0.55	2	歯車状の刻み
1851	SX2009	熙寧元寶		2.35	1.8	0.65	2	
1852	SX2009	嘉祐通寶		2.45	2.1	0.65	4	
1853	SX2009	嘉祐元寶		2.35	1.8	0.6	3	
1854	SX2009	元豊通寶		2.35	1.85	0.65	3	
1855	SX2009	紹聖元寶		2.30	1.75	0.60	2	
1856	SX2009	元寶通寶		2.40	1.90	0.65	2	銅紐付着
1857	SX2009	熙寧元寶		2.50	2.05	0.70	3	
1858	SX2009	元豊通寶		2.40	1.95	0.65	4	
1859	SX2009	寛永通寶	古寛永	2.35	1.95	0.50	3	
1860	SX2009	元豊通寶		2.40	1.90	0.70	3	
1861	SX2009	元豊通寶		2.45	2.05	0.65	3	
1862	SX2009	至和元寶		2.45	1.95	0.70	3	
1863	SX2009	熙寧元寶		2.40	1.95	0.65	2	
1864	SX2011	開元通寶	本銭	2.45	2.00	0.65	3	
1865	SX2011	永楽通寶	本銭	2.45	2.00	0.55	3	
1866	SX2011	永楽通寶	本銭	2.45	2.05	0.60	3	
1867	SX2011	景徳元寶		2.40	2.00	0.60	3	
1868	SX2011	皇宋通寶	模鋳銭	2.40	2.05	0.70	2	
1869	SX2011	乾元重寶	模鋳銭	2.35	2.05	0.65	2	
1876	SX3001	寛永通寶	古寛永	2.50	2.00	0.60	1	繊維付着
1883	SX3002	寛永通寶	古寛永	2.35	1.85	0.50	2	
1884	SX3002	寛永通寶	古寛永	2.40	2.00	0.50	4	
1885	SX3002	寛永通寶	古寛永	2.40	1.95	0.50	2	
1886	SX3002	寛永通寶	古寛永	2.30	1.90	0.55	2	
1887	SX3002	寛永通寶	古寛永	2.30	2.00	0.50	2	
1888	SX3002	寛永通寶	古寛永	2.50	1.90	0.50	3	
1889	SX3006	寛永通寶	古寛永	2.45	1.95	0.50	3	繊維付着
1890	SX3006	寛永通寶	古寛永	2.50	2.00	0.55	3	
1891	SX3006	寛永通寶	古寛永	2.45	2.00	0.60	3	
1892	SX3006	寛永通寶	古寛永	2.45	2.00	0.50	2	
1893	SX3006	寛永通寶	古寛永	2.45	1.95	0.50	3	
1894	SX3006	寛永通寶	古寛永	2.40	1.90	0.50	3	繊維付着
1903	SX3007	寛永通寶	古寛永	2.45	2.00	0.60	3	
1904	SX3007	寛永通寶	古寛永	2.45	2.00	0.55	4	
1905	SX3007	寛永通寶	古寛永	2.45	2.00	0.55	4	
1906	SX3007	寛永通寶	古寛永	2.50	2.00	0.60	3	
1907	SX3007	寛永通寶	古寛永	2.50	2.00	0.55	3	
1908	SX3007	寛永通寶	古寛永	2.40	1.95	0.50	3	
1915	SX3008	寛永通寶	文銭	–	–	0.50	1	下半欠損
1916	SX3008	寛永通寶	古寛永	2.50	2.00	0.55	2	
1920	SX3003	寛永通寶	古寛永	–	–	0.60	1	周囲欠損
1921	SX3003	寛永通寶	古寛永	–	–	0.60	1	周囲欠損
1922	SX3003	寛永通寶	古寛永	2.50	1.95	–	1	一部欠損・変形
1924	SX3004	寛永通寶	古寛永	2.45	1.95	0.55	3	
1925	SX3004	寛永通寶	古寛永	2.40	1.95	0.5	3	
1926	SX3004	寛永通寶	古寛永	2.40	2.00	0.55	3	
1927	SX3004	寛永通寶	古寛永	2.45	2.05	0.55	2	
1928	SX3004	寛永通寶	古寛永	2.45	1.90	0.55	4	
1929	SX3004	寛永通寶	古寛永	2.25	1.90	0.55	2	

10. 包含層・攪乱出土遺物

ここでは、包含層及び攪乱から出土した多量の出土遺物のうち、特徴的なものを図示する。

山茶碗（図 268、図版 32・69）

1934 ～ 1952 は山茶碗類である。1951 が東遠江産である以外は全て渥美湖西産である。

1934 はⅠ－１期の山茶碗で、高台も高く体部から口縁部にかけての湾曲が顕著である。また口縁部には灰釉が漬け掛けされている。1935 ～ 1937・1939 はⅠ－２期の山茶碗である。1935・1937 は口縁

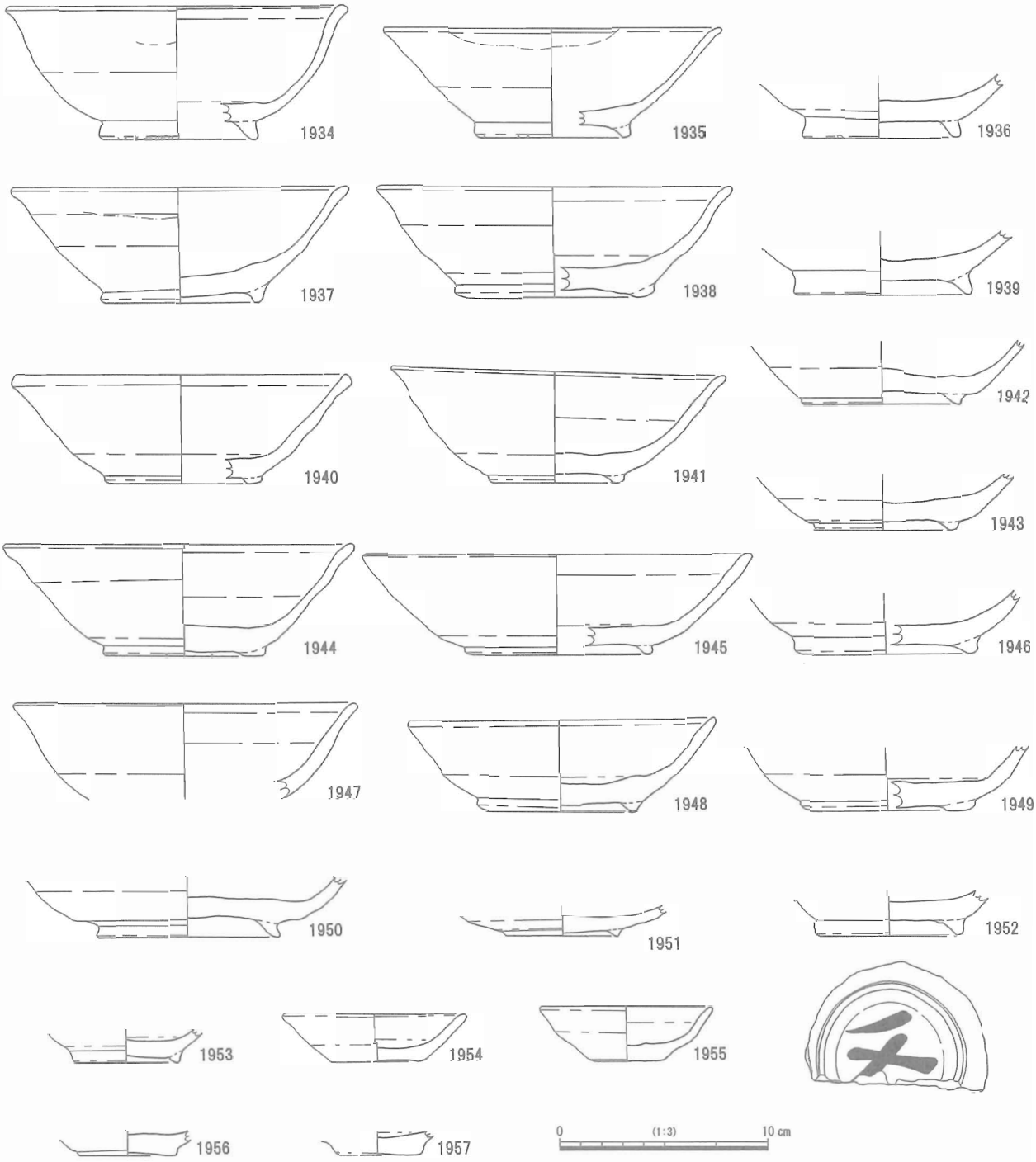


図 268　包含層・攪乱出土遺物（１）

部に三方の灰釉漬掛けが観察され、体部から口縁部にかけて直線的に開く特徴がある。1938・1940～1947・1949・1950はⅢ－1期の山茶碗である。器壁が厚くなると同時に高台の省力化が顕著となり、かなり低いものとなる。1940のように口縁端部が肥厚するものもある。1945は内面に煤が付着しており、灯明具への使用を窺わせる。1948はⅢ－2期の山茶碗で、Ⅲ－1期の製品に比べ、口径は小さくなり、高台も低くなる。

1951は東遠江産Ⅲ－1期の山茶碗である。青灰色に焼成され、高台は断面三角形となる特徴的なものである。当遺跡では東遠江産の製品はほとんど出土しておらず、その流通圏から遠く外れていることが窺われる。

1953はⅠ－2期に位置づけられる小碗である。1954～1957は小皿で、1954・1955は器高が4㎝前後と高く、Ⅱ期の製品とみられる。1956・1957は底部のみであるため明確でないが、底部から体部の様子からかなり扁平になることが想定されるため、Ⅲ－2期頃の製品と思われる。

1952は墨書土器である。Ⅱ期の山茶碗で、「又」と読める。

片口鉢・甕・壷（図269、図版31）

1958・1959は常滑産の片口鉢である。1958は甕系の片口鉢で、口径15.8㎝に復元される小型の製品である。底部には窯屑が付着したままになっている。常滑5～6a型式に位置づけられよう。1959は山茶碗系の片口鉢で、常滑5型式頃のものとみられる。

1960は渥美窯産の甕の口縁部破片で、自然釉が内外面に観察されるⅠ期の製品であろう。1961・1962は常滑産の甕の口縁部破片である。口縁部が折り返される1961は常滑10型式に位置づけられる。口縁上部外側に突帯を持つ1962は、かなり軟質に焼成される17世紀頃の製品であろう。

1963は渥美窯産の壷で、肩部に線刻文が施される。文様の詳細は明確でないが、井桁状の線刻がみられる。1964は常滑産の壷で、口縁が外に折り返される常滑10型式に位置づけられる遺物である。

土師質土器皿（図269～271、図版32・69・70）

1965～1985・1991～1997は土師質土器の皿である。

1965・1966はロクロ成形品で1965は器高が低く16世紀中～後葉に位置づけられよう。1966は胎土が橙色を呈し、器高が高く器壁が厚手である。17世紀代の製品と考えられる。

1967～1985は、非ロクロ成形の土師質土器皿である。1967～1969は厚手で、底部外面は指頭が残るオサエ調整、口縁部は横ナデ調整が施される13世紀代の製品であろう。

1970～1985は薄手のつくりで、胎土は灰白色で緻密となるもので、口縁端部外側にナデによる面を作り出す特徴を持つ。16世紀中～後葉の製品であろう。1973～1985はやはり灰白色で緻密な胎土を持ち、外面は指頭の残るオサエ調整、内面はナデ調整またはヘラ状工具による調整が施されるものである。1973～1978のように体部から口縁にかけて外傾させるもの、1979～1982のように浅いもの、1983～1985のように口縁を上方に立ち上げるものがある。16世紀後葉～17世紀代にかけての製品であろう。

1991～1997は、1973～1985の皿と類似するが、胎土は橙色に近く、器壁が薄くなるもので、17～18世紀代の製品とみられる。1995～1997のように口径8㎝以下となるような小型品もある。

土師質土器釜・鍋（図270・271、図版32）

1986～1990・1998～2007は土師質土器の鍋で、2001は釜である。1986・1987は伊勢鍋である。ともに使用による被熱が顕著であり、体部～口縁部外面には煤が多く付着し、内面にも内容物の痕跡とみられる変色が観察される。13世紀代のものであろう。

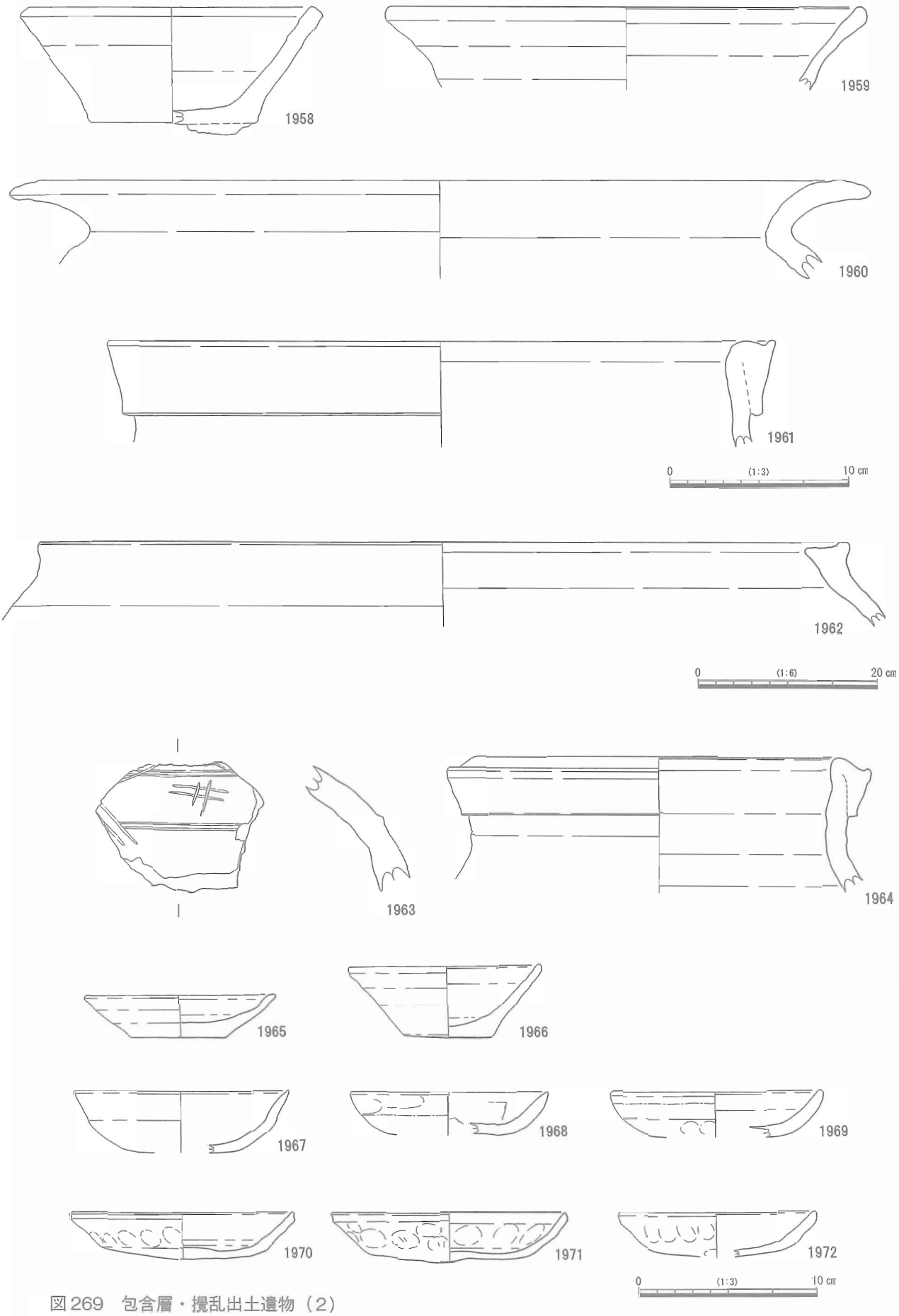


図269　包含層・攪乱出土遺物（2）

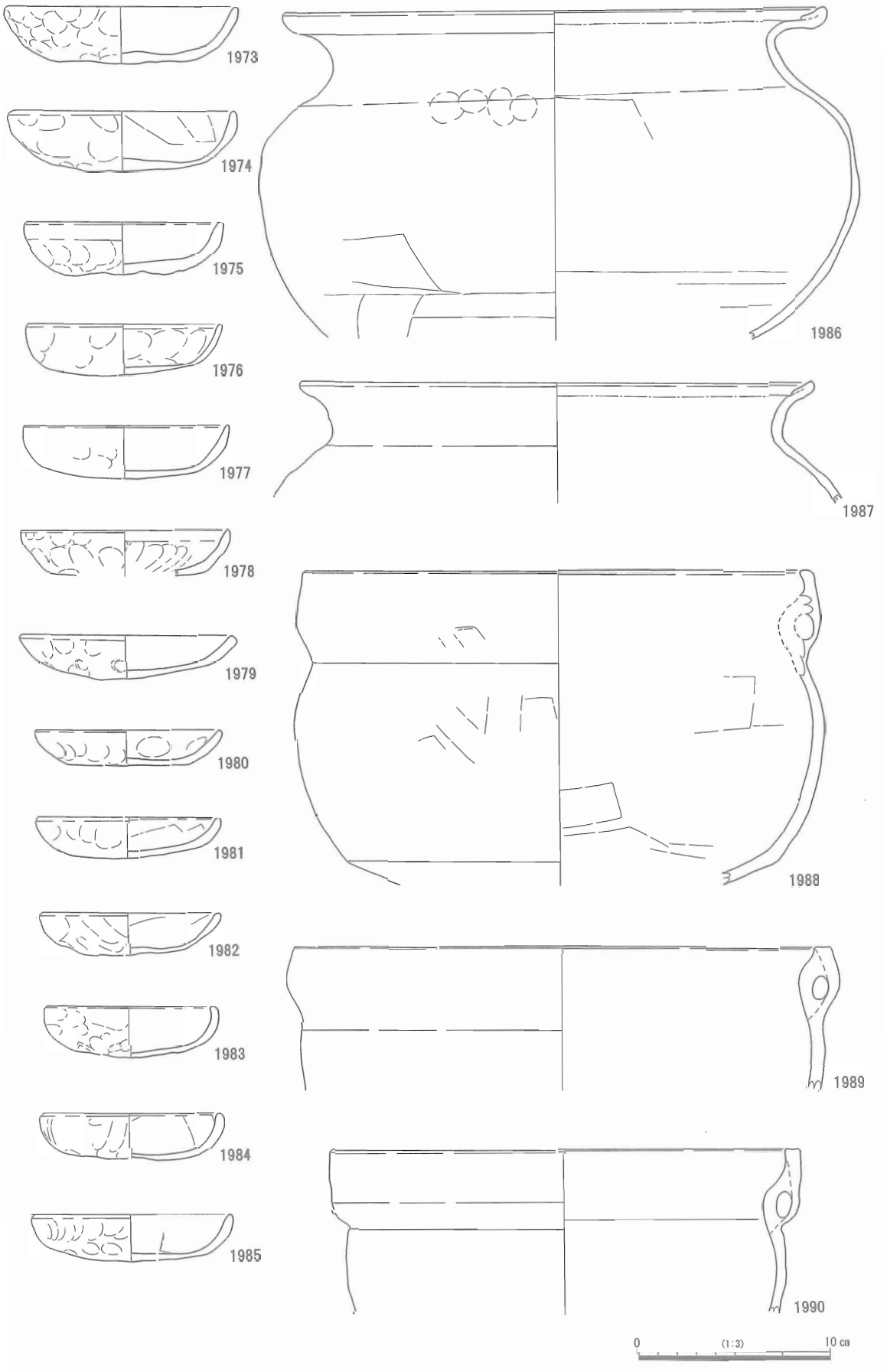


図 270　包含層・攪乱出土遺物（3）

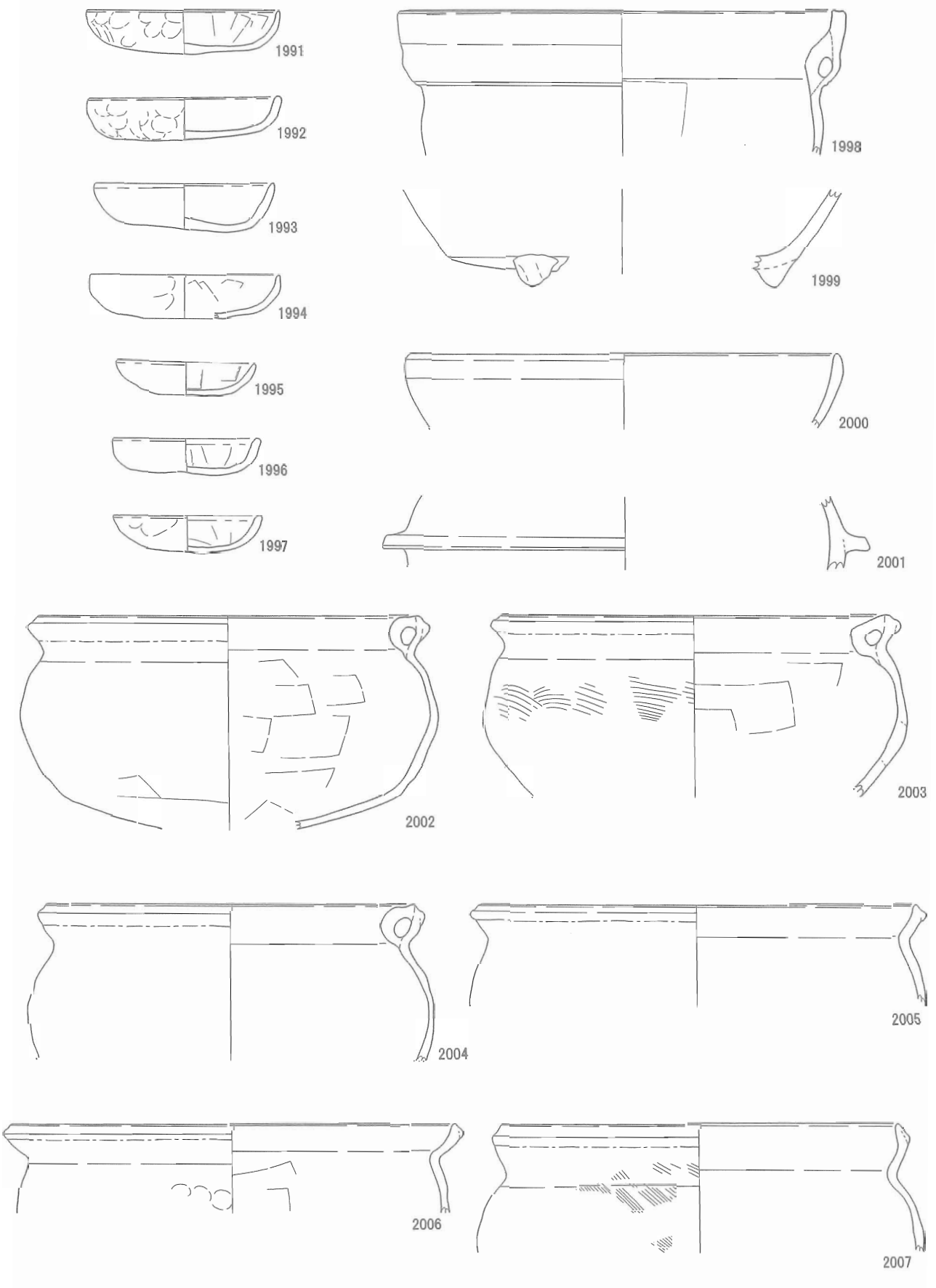


図 271　包含層・攪乱出土遺物（4）

1988 ～ 1990 は内彎形内耳鍋の体部及び口縁部破片である。1989 は口縁部が若干短いもので、古手に位置づけられる可能性があるが、概ね 16 世紀代の範疇で捉えられるものであろう。1999 は内彎形内耳鍋の底部で、脚が取り付けられる。おそらく三方に取り付けられていたのだろう。2000 は半球形内耳鍋の口縁部破片、2001 は羽釜の体部に取り付けられた羽部の破片である。2002 ～ 2007 はくの字形内耳鍋である。体部外面には使用によって煤が多く付着し、わずかにハケ調整が観察される。2002 ～ 2004 には内耳が残存しているが、目立った使用痕はない。15 世紀中葉～ 16 世紀代にかけての製品であろう。

貿易陶磁（図 272、図版 33）

2008 ～ 2021 は貿易陶磁である。

2008 ～ 2017 は青磁碗である。2008 は底部内面に草花文とみられる文様をヘラ彫りするＡ２類の青磁碗であろう。2009 ～ 2017 は体部外面に鎬蓮弁文が施されるＢ１類に分類される青磁碗である。2018 は底部のみで判然としないが、青磁折縁皿であろう。2019 は青磁盤で、口縁部が欠けているが、小型品とみられる。体部外面に蓮弁文が施されるもので、SD6002 出土の 881（図 108）とは直接接合はしないが、同一個体とみられる。

2020・2021 は白磁碗である。2020 は口縁端部に釉が掛からないⅨ類に分類されるものである。2021 は底部の破片で判然としないが、Ｖ類の碗の可能性が高い。

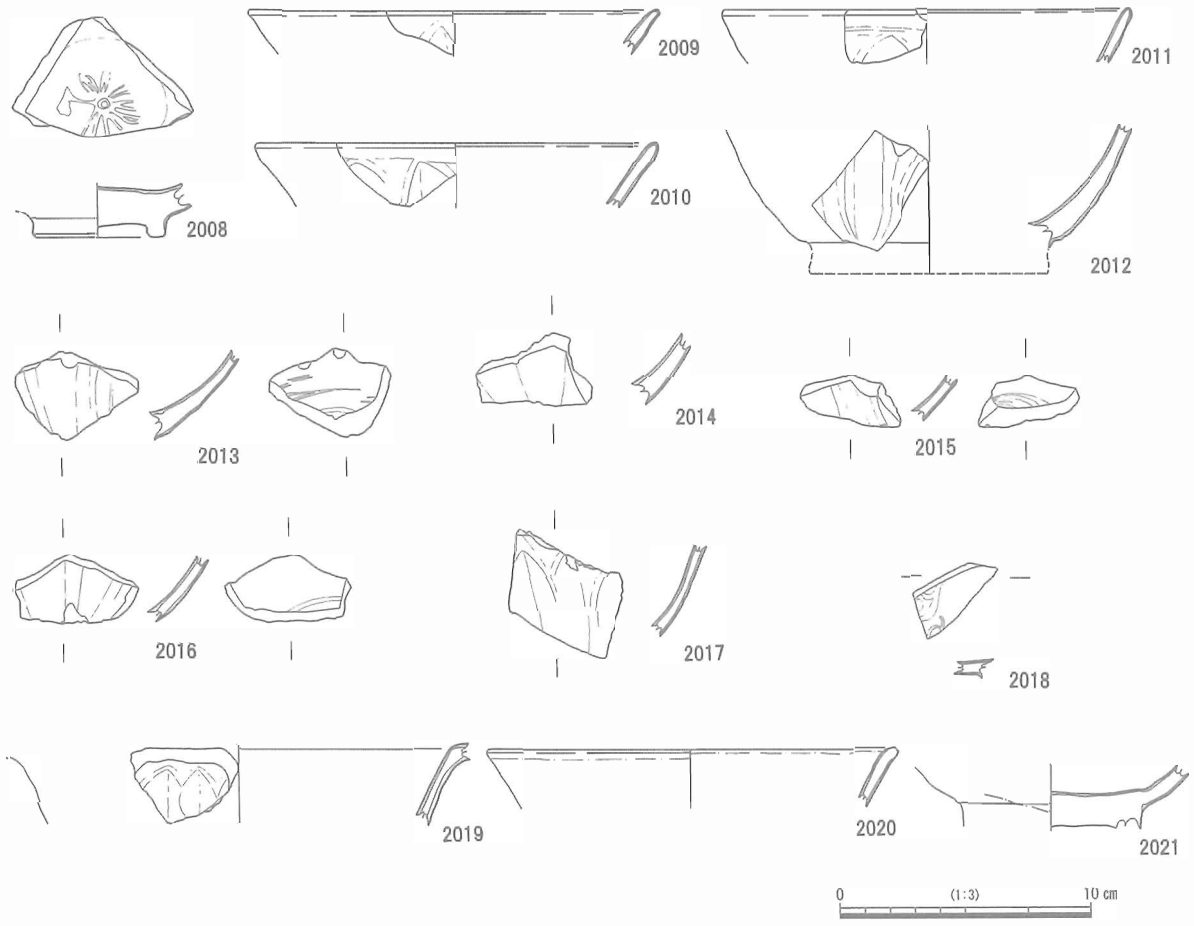


図 272　包含層・攪乱出土遺物（５）

瀬戸美濃系施釉陶器（図 273、図版 32・70）

2022 ～ 2037 は瀬戸美濃系施釉陶器である。2024・2028・2033 が初山窯、2031・2034 が志戸呂窯の製品である以外は瀬戸美濃窯の製品である。

2022 ～ 2025 は天目茶碗で、2022 は古瀬戸後Ⅰ期、2025 は大窯第１段階、2023 は大窯第２段階、2024 は大窯第３段階並行の初山窯の製品である。2025 は底部から体部にかけての内面に茶筅によるとみられる細かい傷が無数に観察される。

2026 ～ 2029 は皿類である。2026 は古瀬戸後Ⅰ期の灰釉縁釉小皿、2027 は大窯第２段階の鉄釉稜皿、2028 は初山窯産の鉄釉内禿皿、2029 は古瀬戸後Ⅰ期の灰釉豆皿である。2028 は底部内外面に重ね焼きの痕跡が付着している。2030 は古瀬戸後Ⅱ期の灰釉折縁深皿の口縁部破片で、二次焼成が顕著である。

2031 ～ 2034 は擂鉢で、2031･2034 は古瀬戸後Ⅳ期並行の古志戸呂製品、2032 は大窯第２段階の製品、2033 は初山窯製品である。古志戸呂製品は軟質に焼成されており、摩滅が著しい。

2035 ～ 2037 は壷瓶類である。いずれも底部破片で、2035 は古瀬戸前Ⅲ期の鉄釉口広有耳壷、2036 は古瀬戸前Ⅲ～Ⅳ期の灰釉瓶子、2037 は古志戸呂製品の鉄釉瓶子である。

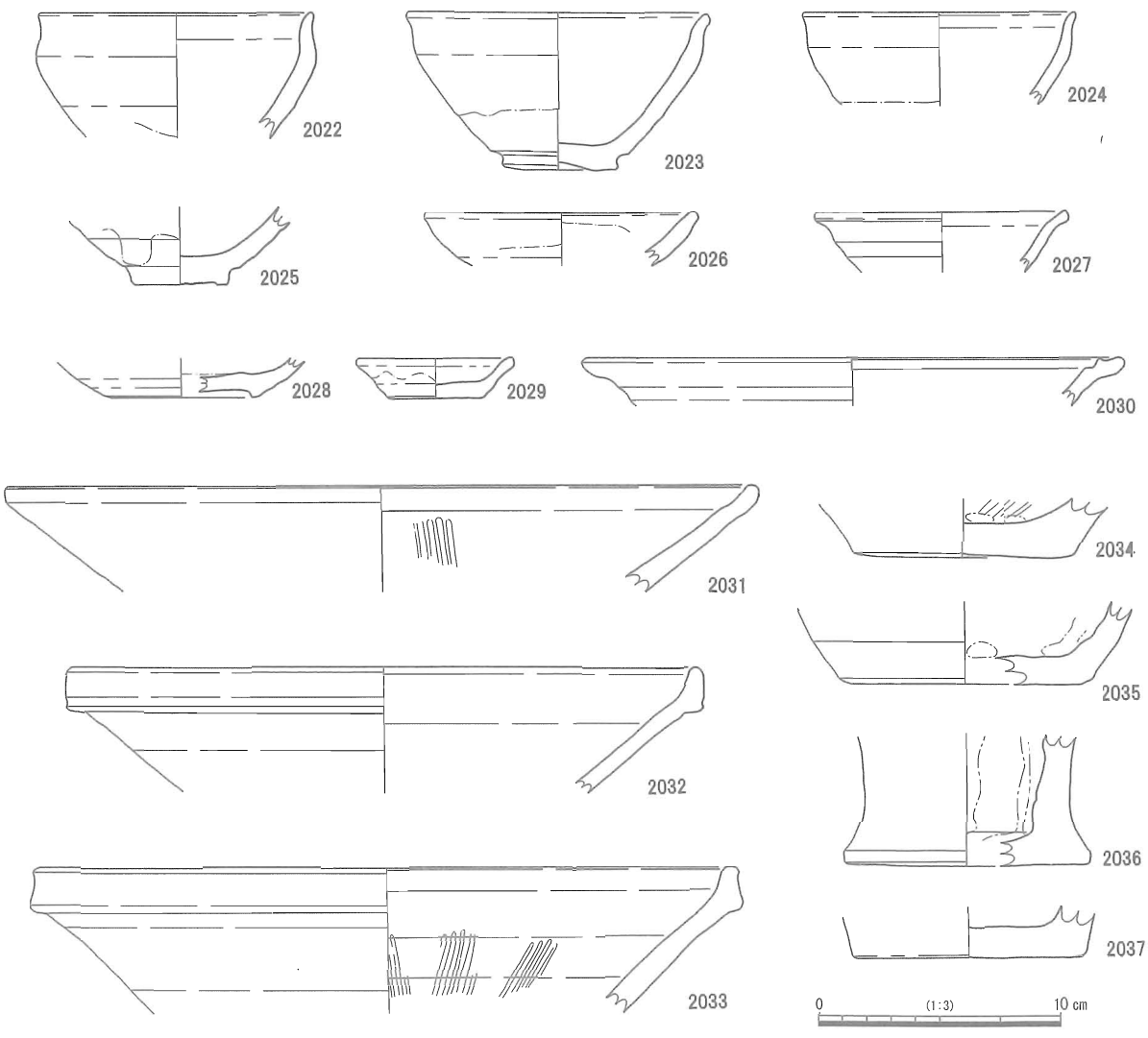


図 273　包含層・攪乱出土遺物（６）

近世陶磁器（図 274 ～ 276、図版 33・70）

2038 ～ 2077 は近世陶磁器である。大半は瀬戸美濃製品であるが、肥前産の磁器も少数ながら見受けられる。2038 ～ 2048 は碗類である。2038 は登窯５～６小期の美濃窯の尾呂茶碗である。2039 ～ 2041 は腰錆茶碗で、2039 は登窯５～６小期、2040 は登窯６小期、2041 は登窯８小期に位置づけられる、いずれも瀬戸窯の製品である。2042 は登窯８小期の糸目茶碗、2043・2044 は登窯６～７小期の御室茶碗である。2046 ～ 2047 は小中で、2046 と 2047 は小碗である。いずれも登窯８～９小期の瀬戸窯の製品であろう。

2048 は肥前産の磁器碗の底部破片で、18 世紀中頃のものであろう。2049 は 17 世紀後葉～ 18 世紀前葉頃の肥前産小坏であろう。

2050 ～ 2056 は皿類である。2050･2051 は登窯４小期の灰釉丸皿、2052 は登窯４小期の志野皿である。2053 は登窯８～９小期の梅文皿、2055 は登窯８～９小期の染付皿、2056 は登窯 11 小期の染付磁器皿

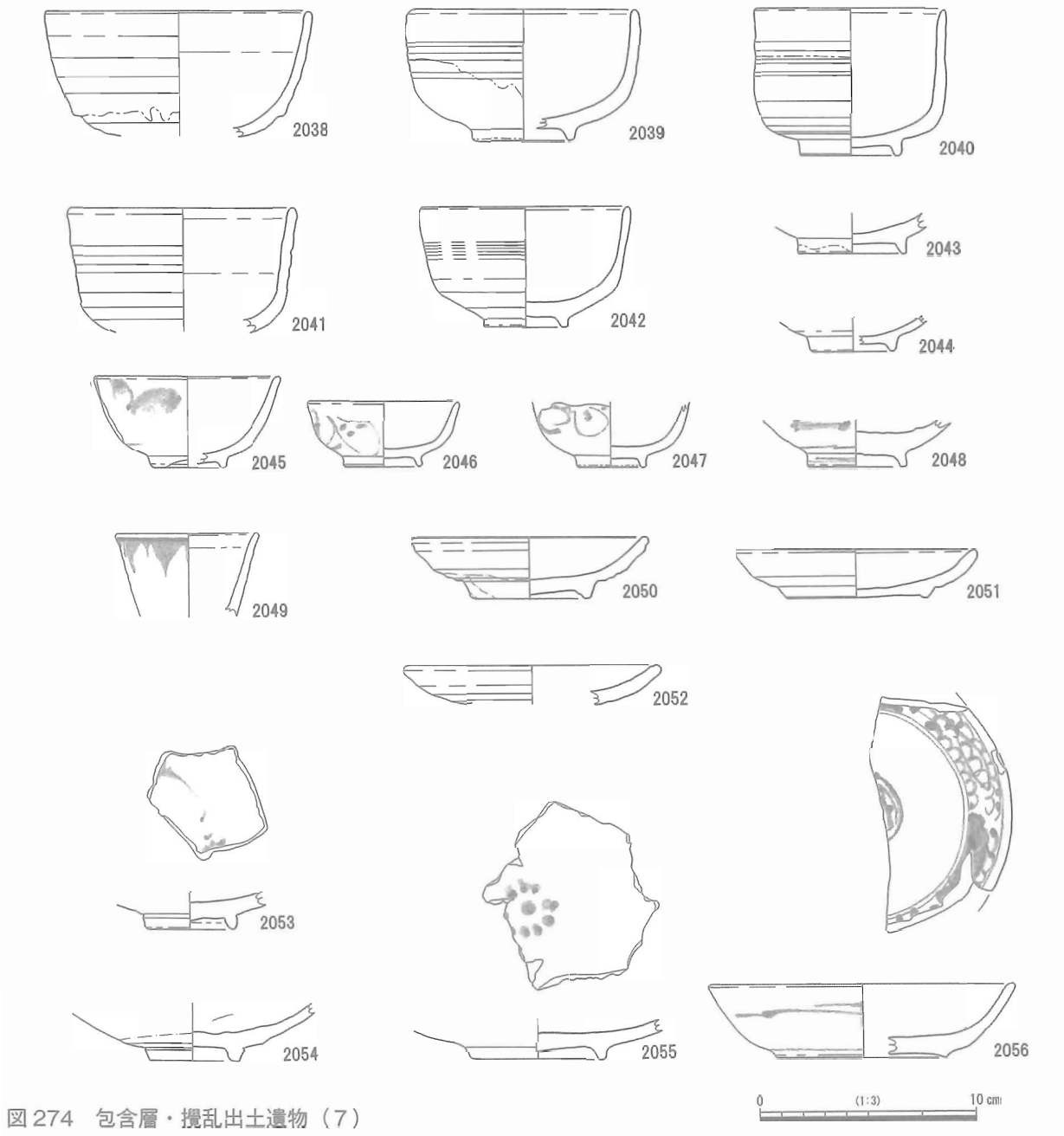


図 274　包含層・攪乱出土遺物（７）

である。2054 は肥前産の染付皿で、17 世紀後葉～ 18 世紀前葉の製品であろう。

2057 ～ 2062 は片口である。2057 は小型品で、登窯７小期の製品であろう。2058 は登窯８小期頃の製品の底部破片であるが、底部外面に判読不明の墨書が認められる。2059、2061 の口縁部破片は登窯６～７小期のものであろう。2060 と 2062 は同一個体で、登窯８小期の美濃窯の製品である。

2063 は登窯８～９小期の灰釉有耳壷の底部破片、2064 は登窯８小期の黄瀬戸鉢、2065 は登窯 11 小期の灰釉練鉢である。2066 は登窯７～８小期に位置づけられる鉄釉小壷であるが、底部外面に「きん□介」と判読できそうな墨書がある。

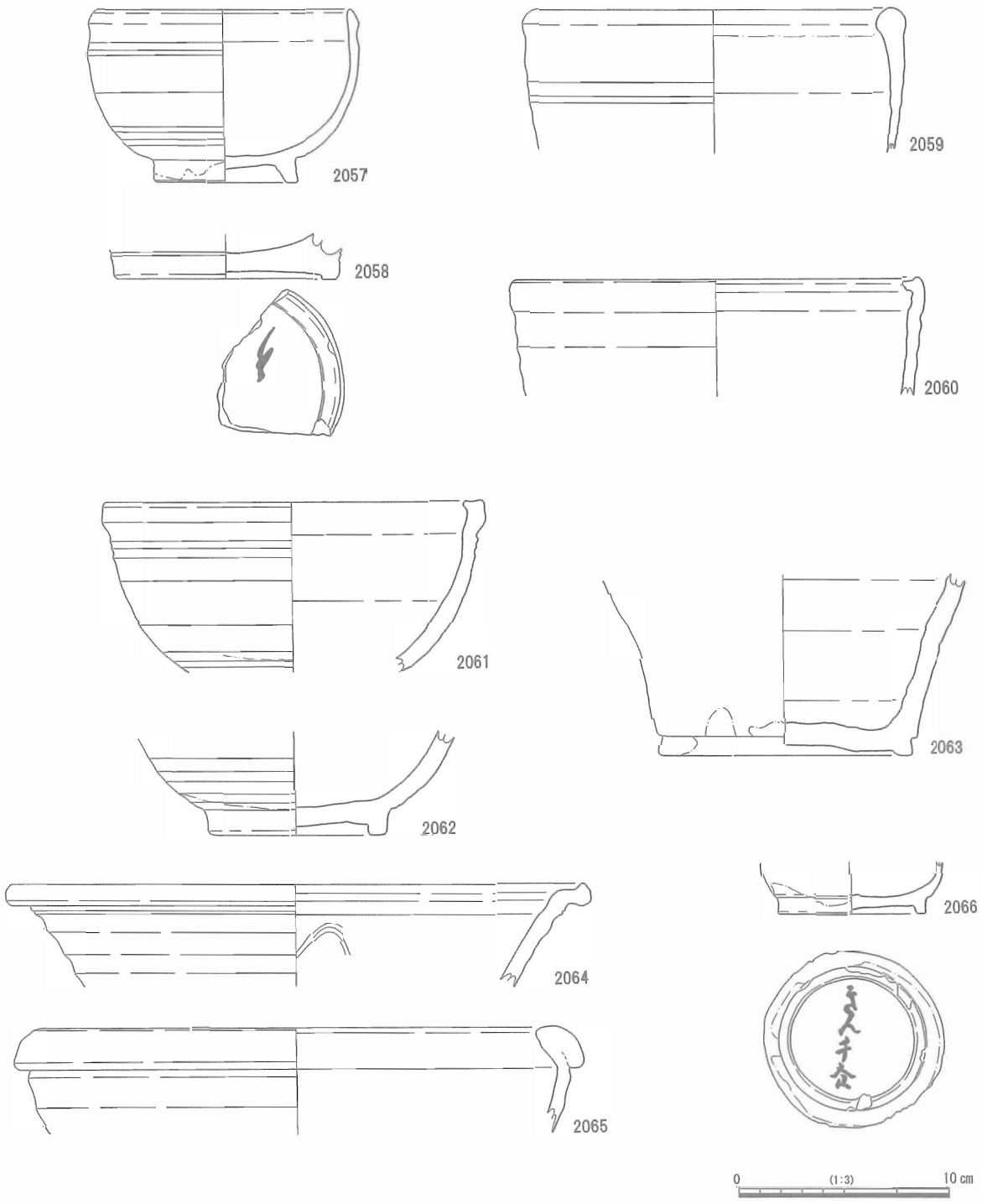


図 275　包含層・攪乱出土遺物（8）

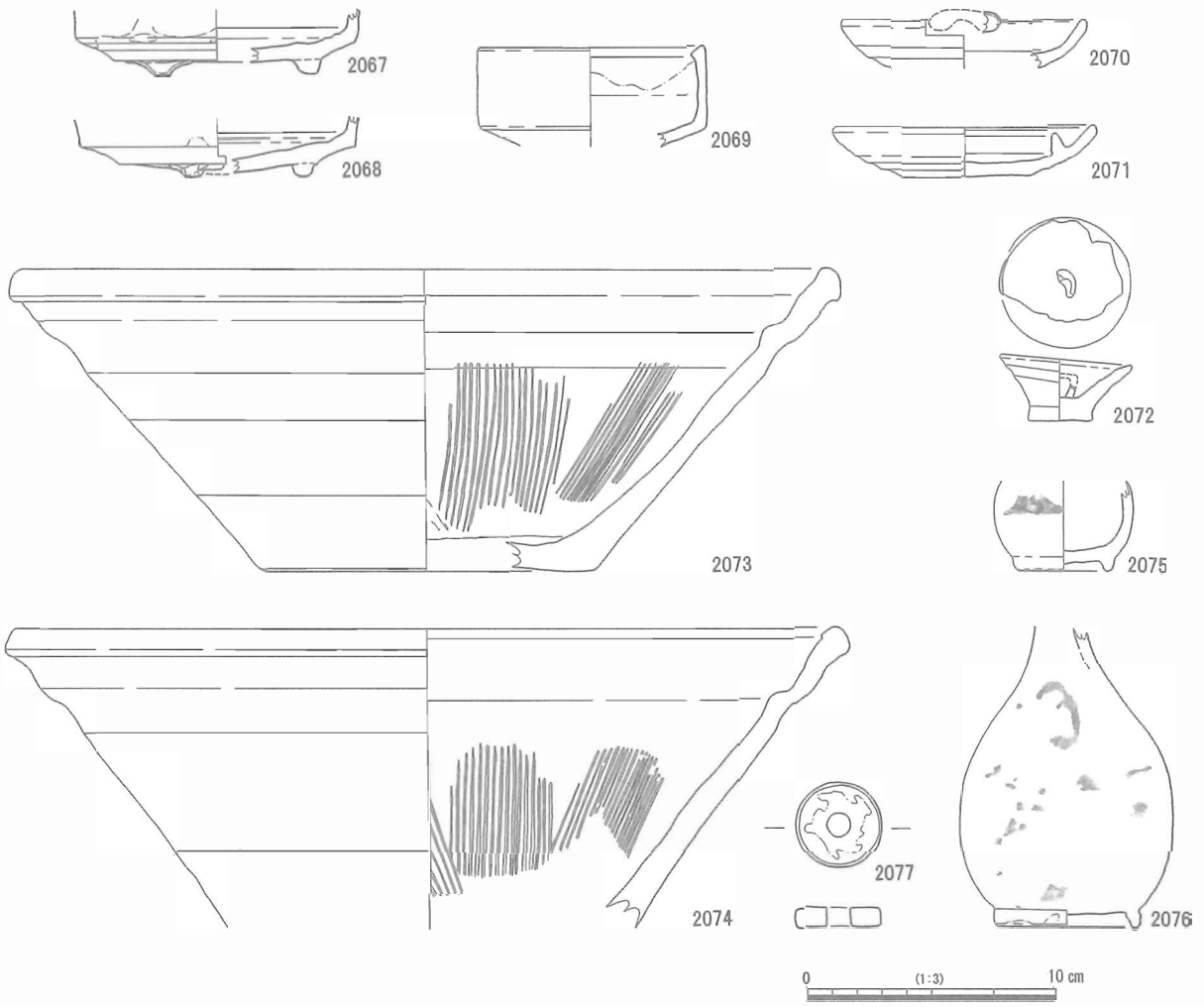


図 276　包含層・攪乱出土遺物（9）

2067 ～ 2069 は香炉で、2067 は登窯 6 小期、2068 は登窯 7 小期、2069 は登窯 8 小期に位置づけられよう。2070・2071 は灯明皿で、2070 は登窯 7 小期、2071 は登窯 9 ～ 10 小期の製品であろう。同じく灯明具である 2072 の秉燭は登窯 10 ～ 11 小期のものであろう。2073・2074 の擂鉢は、2073 が登窯 8 小期、2074 が登窯 9 小期に位置づけられる製品である。

2075 は肥前産の御神酒徳利で、鶴首瓶とも呼ばれる 18 世紀後葉～ 19 世紀前葉頃のものであろう。2076 は瀬戸窯の登窯 8 ～ 9 小期頃に位置づけられる小瓶である。2077 は磁器戸車で、肥前産とみられる。

瓦（図 277・278）

2078 ～ 2094 は瓦である。2078 ～ 2086 は丸瓦である。いずれも凸面はナデ調整が施され、凹面には布目と吊り紐痕が確認される。2078 は狭端部の破片で、凹面の狭端には面取り調整が施されている。布に隠れている長さを 1 とした時の、布から出た部分の吊り紐の比率は 0.8 となっている。2078 と 2079 には釘穴が認められる。2084 は布目が他の丸瓦に比べて粗く、有段式である可能性が高い。2080 と 2086 は広端部の破片であり、広端面には離れ砂の付着が認められる。2081 ～ 2083 は側端部の破片である。いずれも凹面の側端には、幅の広い面取り調整が施されている。2082 には被熱の痕跡が顕著に認められる。

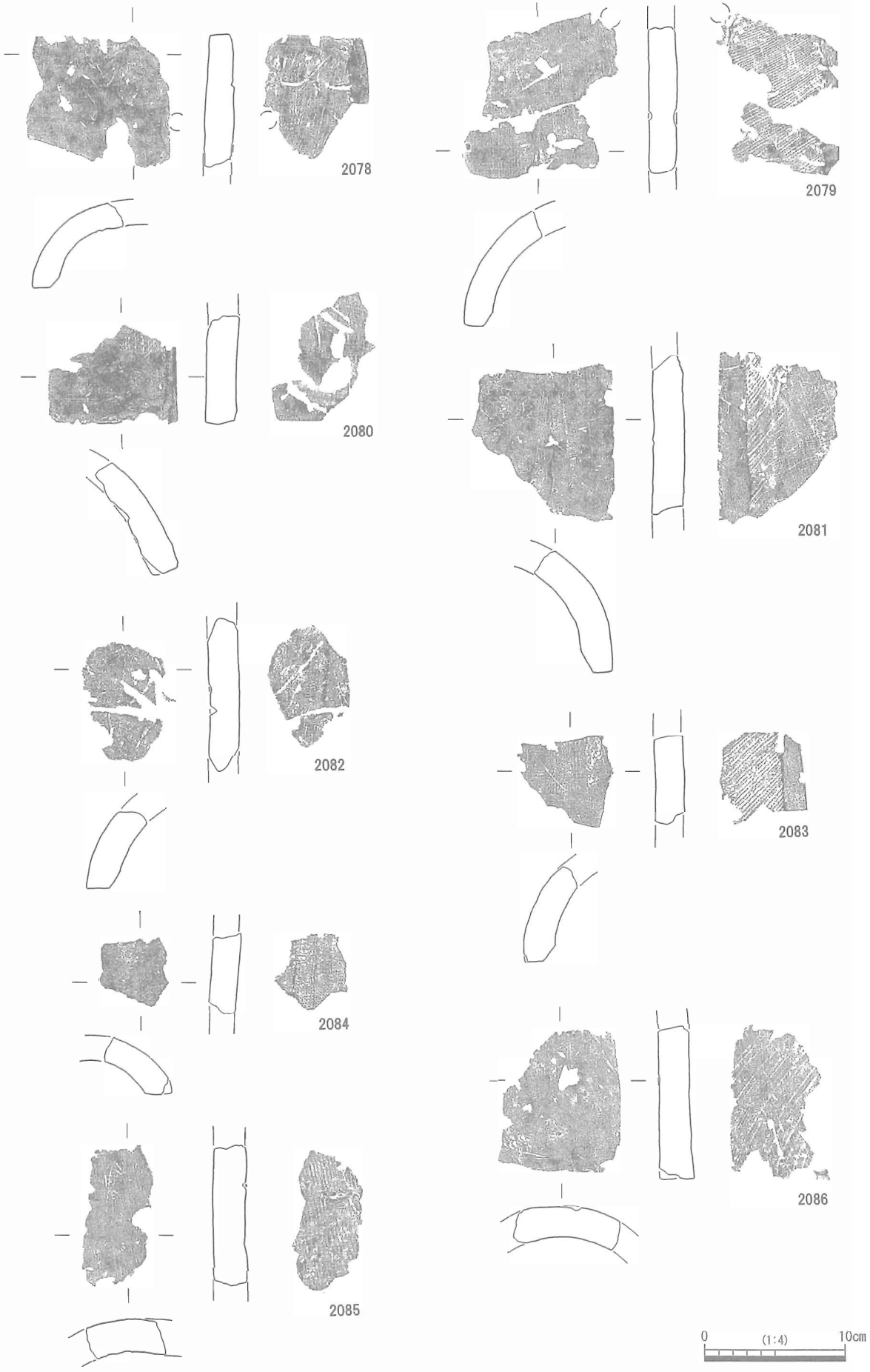


図 277　包含層・攪乱出土瓦（1）

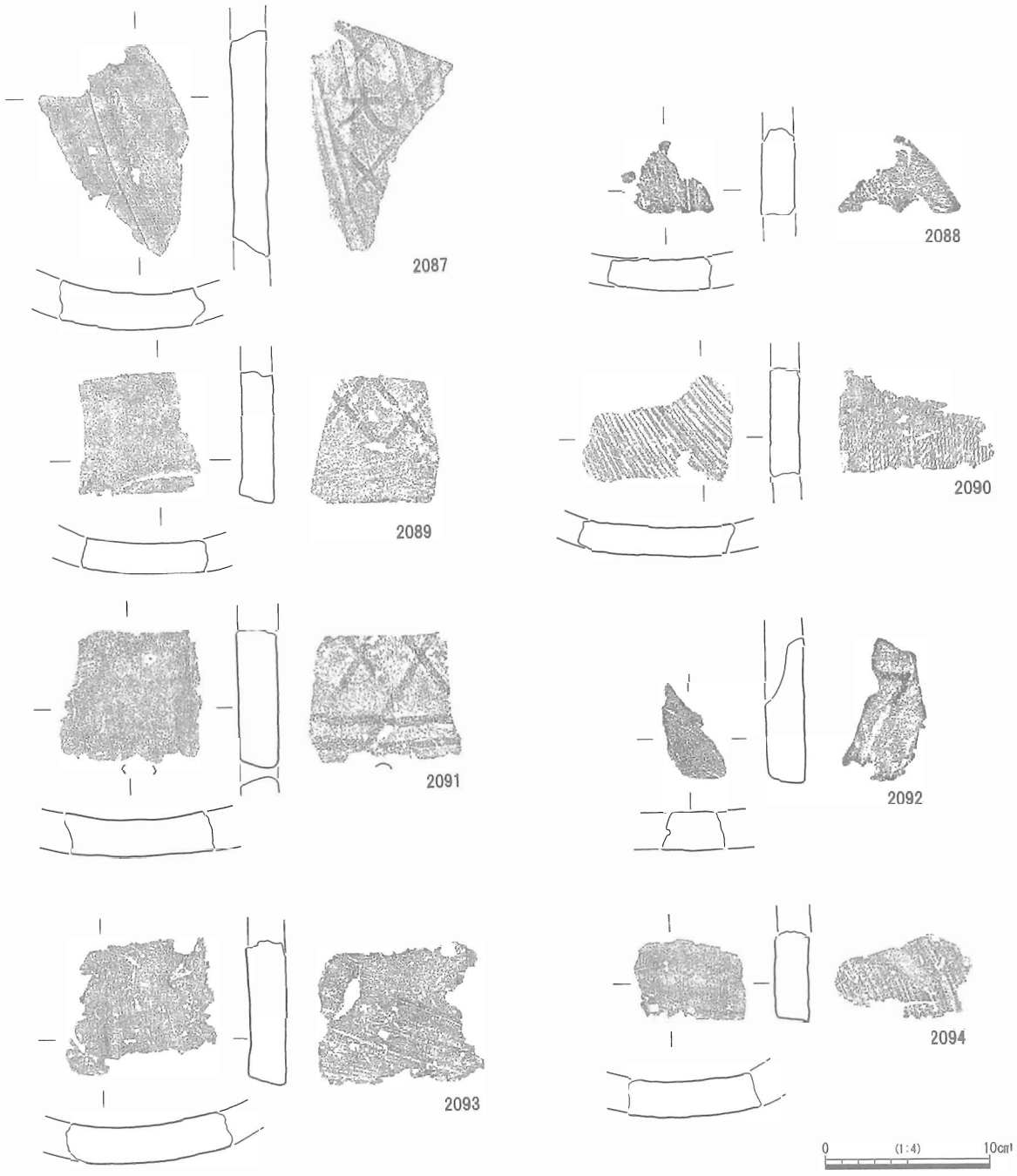


図 278　包含層・攪乱出土瓦（２）

2087 ～ 2094 は平瓦である。2090 は全体的に薄手のつくりであり、凸面には細かい縄叩きが施される。凹凸面ともに離れ砂の使用は認められず、凹面には糸切り痕が明瞭に残る。2088 は表面の摩滅が著しく、やや不明瞭ではあるが、2090 と同様に縄目叩きが施されているものとみられる。2087 と 2089 は、縦長斜格子の叩き目を残すもので、2087 には「大」の字が認められる。ともに凸面には、離れ砂の付着が認められる。2087 の凹面には布目が残り、離れ砂は付着していない。2089 は広端部の破片であり、広端面にも離れ砂の付着が認められる。2091・2092 は凸面に縦長斜格子＋横線の叩き目を残すもので、凹凸面には離れ砂が付着する。2093 と 2094 は凸面に明瞭な叩き目がみられず、凹凸面には離れ砂が付着する。いずれも広端部破片で、2094 には釘穴がみられる。

土製品（図 279、図版 33）

2095 ～ 2099 は土製品である。2095 は招き猫、2096 は地蔵菩薩像とみられ、型押しの土製品である。2097 と 2098 は内面に布目が観察される中空となる製品で、不明瞭ながら 2098 は顔の一部で鼻と口を表現したものであろう。2099 は動物等の脚部であろうか。これらは遺構外から出土しているが、近世墓に副葬されたものの一部である可能性が高い。

石製品（図 279、図版 32）

2100 ～ 2102 は石製品である。2100 は茶臼下部の端部破片である。2101 と 2102 は砥石で、大型の 2101 は砂岩製でやや粗く、持ち砥石とみられる 2102 は凝灰岩製で目がやや細かい。

金属製品（図 280 ～ 281、図版 83）

2103 ～ 2142 は銭貨である。遺構外から出土しているが、重なる状態で出土したものについては、本来墓に副葬された六道銭と考えられる。

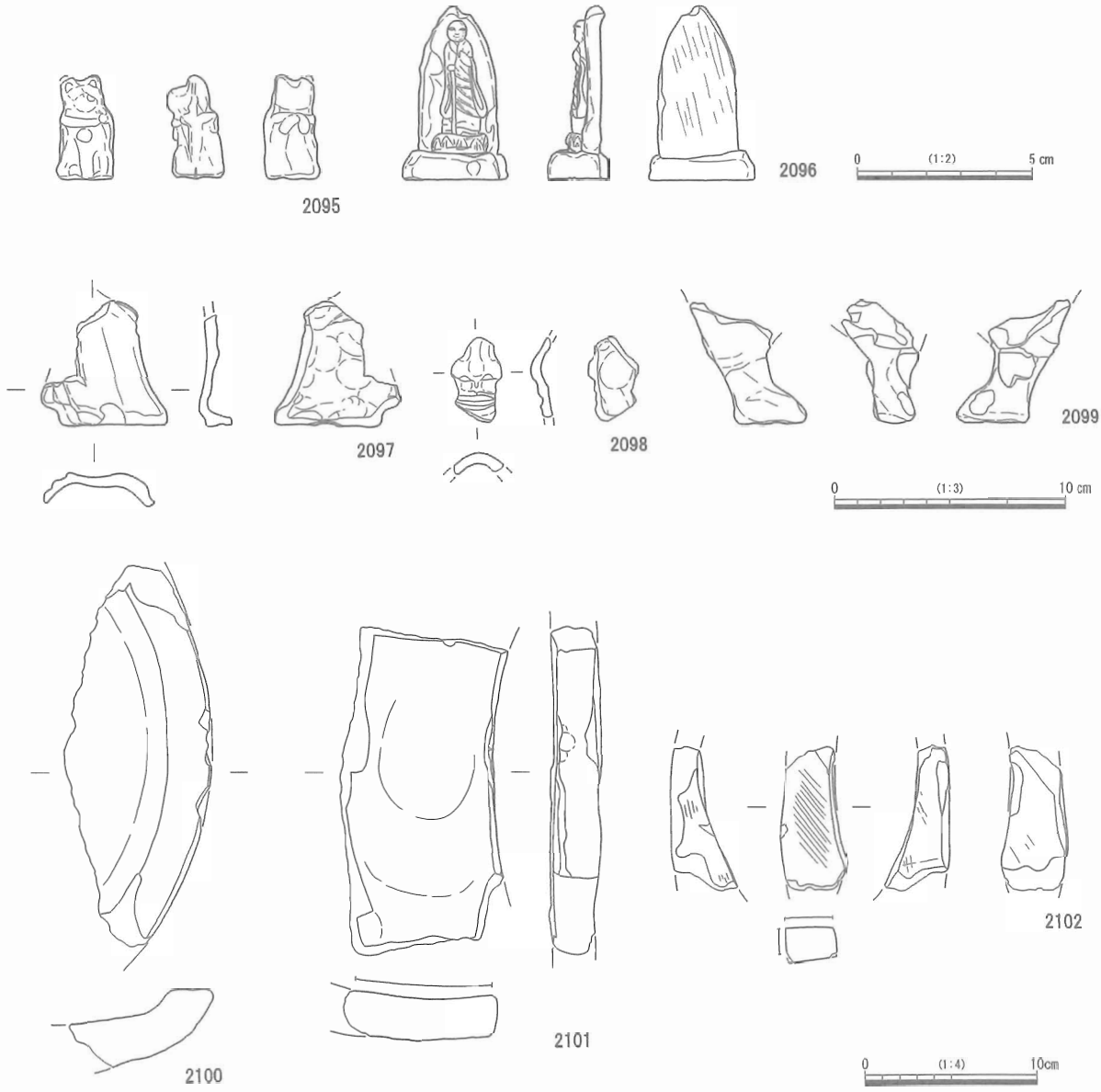


図 279　包含層・攪乱出土土製品・石製品

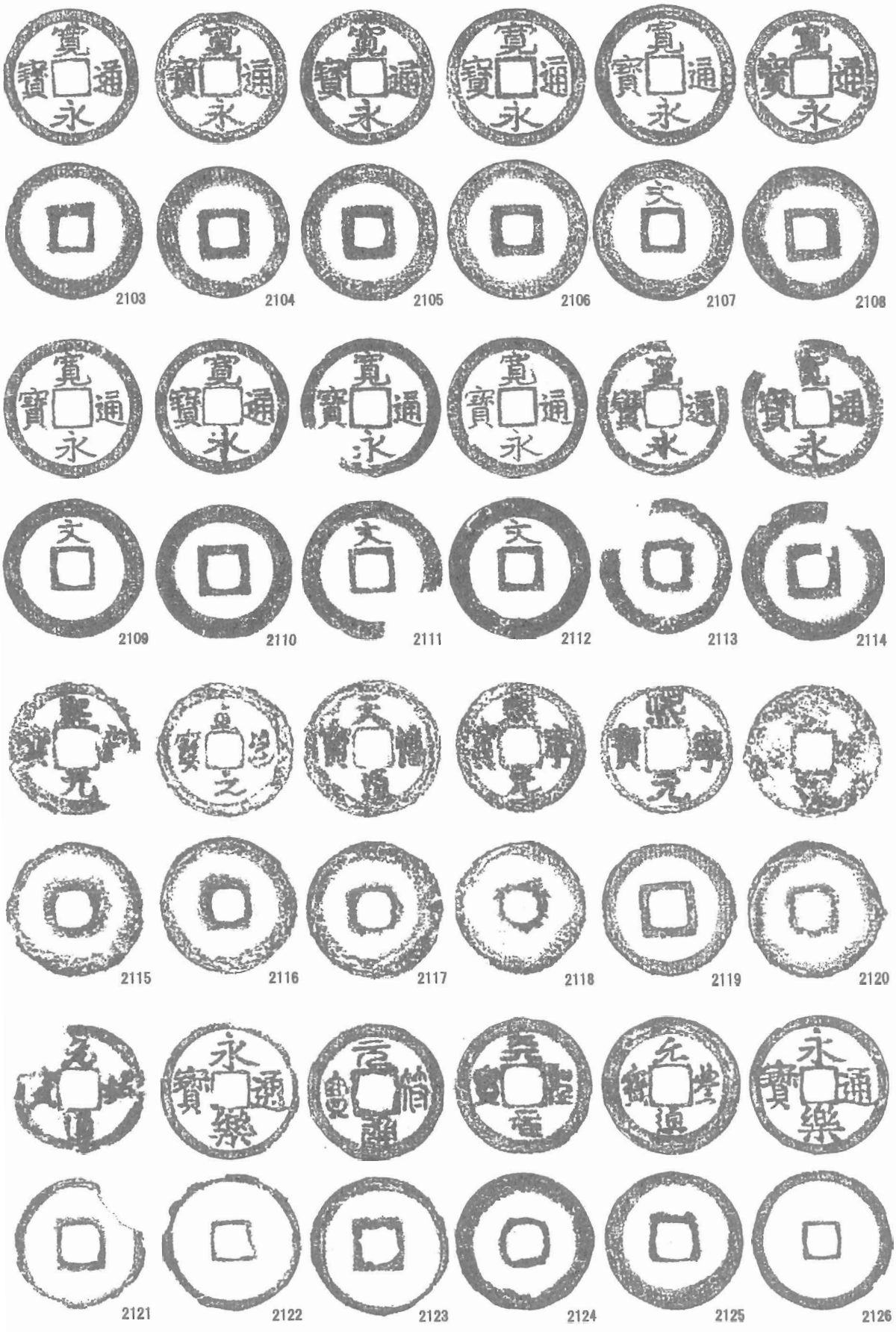


図 280　包含層・攪乱出土銭貨（1）

2103 ～ 2108 は近世墓が集中する３区の残存土塁付近で６枚重なって出土したものである。2107 が背文の入る新寛永である以外は古寛永である。2109 ～ 2114 も３区残存土塁付近で集中して出土している。2110･2113･2114 は古寛永、2109･2111･2112 は背文の入る新寛永である。木片が伴出していることから、棺や容器などの木製品を伴っていたのであろう。

2115 ～ 2120 は確認調査時に５区Ｈ１区西端付近で６枚重なって出土している。2115・2118・2119 は熙寧元宝、2116 は至道元宝、2117 は天禧通宝、2120 は文字が判読できず、不明である。いずれも被熱の痕跡が確認されることから、中世に帰属する火葬墓に伴う遺物と判断される。

2121 ～ 2126 は６区Ｉ 14 区で６枚重なって出土している。2121 は元祐通宝、2122･2126 は永楽通宝、2123 は元符通宝、2124 は天聖元宝、2125 は元豊通宝である。Ⅲ群の掘立柱建物群付近であり、年代的にもほぼ合致することから、屋敷墓に伴う副葬品であった可能性が高い。

2127 ～ 2131 は出土地点不明ながら５枚重なって出土しており、2132 が新寛永である以外は古寛永で

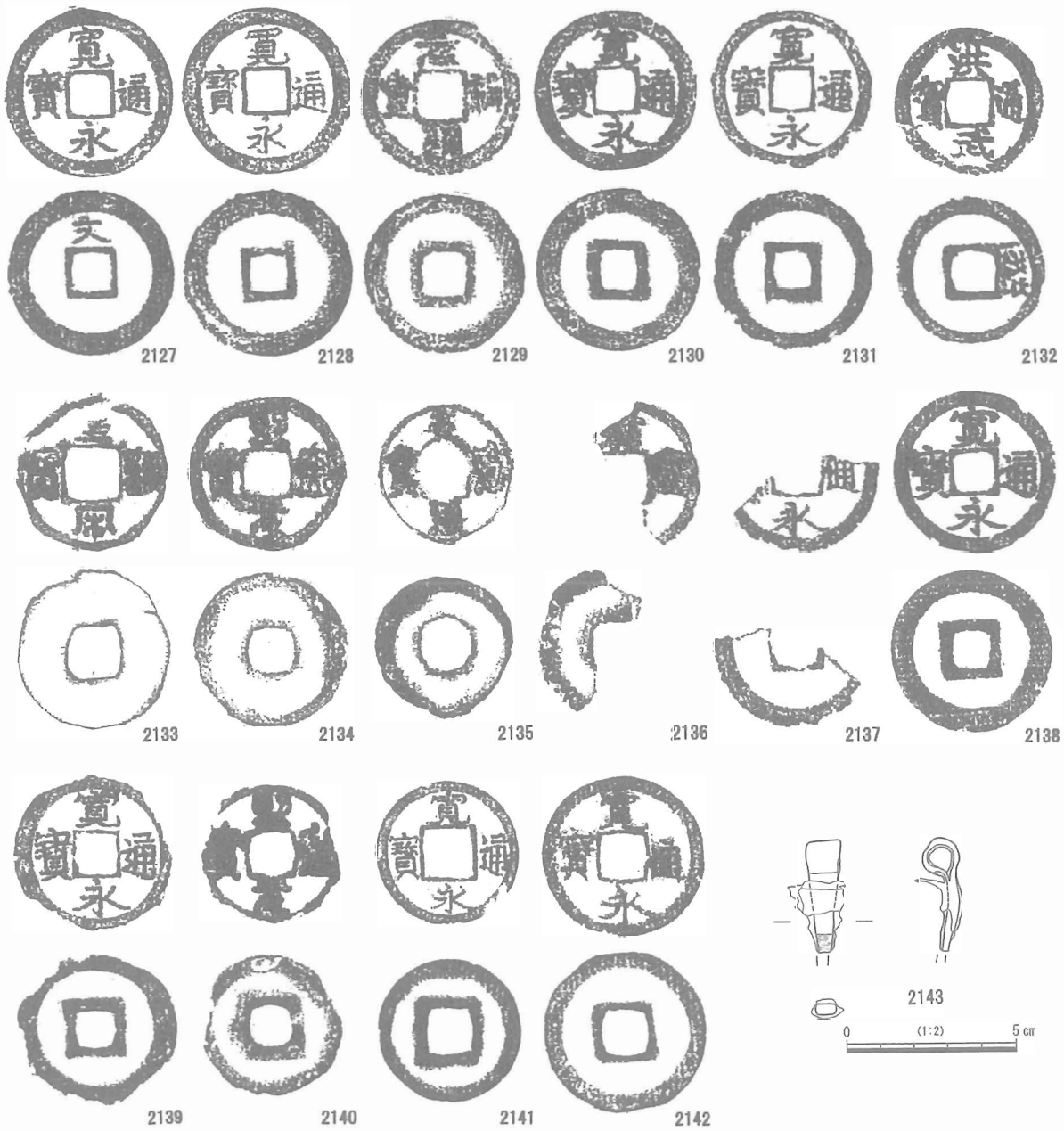


図 281　包含層・攪乱出土銭貨（２）、鉄製品

構成される近世墓に伴うものであろう。

2132 ～ 2136 は 3 区攪乱でまとまって出土している。2132 は背に「一銭」と鋳出される洪武通宝、2133 は皇宋通宝、2134 は熙寧元宝、2135 は天聖元宝、2136 は不明である。出土状況は不明ながら中世墓に伴ったものとみられる。

2137 ～ 2142 は単独で包含層あるいは攪乱より出土した銭貨で、2137・2141・2142 は新寛永、2138・3139 は古寛永である。3140 は熙寧元宝で、被熱の痕跡が認められる。

2143 は鉄製品であるが、用途は不明である。基部に木質が残るため、何らかの木製品の金具と考えられる。

表 27　包含層攪乱出土 土器・陶磁器観察表（1）

No.	遺構名	グリッド	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
1934	表採	土壇付近	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－1	(15.5)		(5.4)	(7.0)	口縁～底部 1/5	自然釉	灰白	
1935	攪乱		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2	(16.2)		(5.3)	(6.8)	口縁～体部 1/4	自然釉	灰白	
1936	表採	土壇付近	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2				7.1	底部 1/5		灰白	
1937	包含層	I27-NW	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2	(15.95)		5.55	6.9	3/4	内面・自然釉	灰白	
1938	包含層	G18-NW	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	(16.7)		(5.35)	(8.0)	口縁～底部 1/3		灰白	
1939	表採	土壇付近	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅰ－2				8.1	底部 5/6	内面・自然釉	灰白	
1940	攪乱	F34-SW	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	(15.8)		(5.25)	(6.0)	口縁～底部 1/4		灰白	
1941	攪乱	F34-SW	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	(16.0)		5.35	5.8	1/4		灰黄	
1942	攪乱	F34-SW	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				7.5	体部～底部 3/4	内面・自然釉	灰白	
1943	包含層	G3-SE	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(6.4)	底部 1/2		灰白	
1944	攪乱	F34-SW	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	16.5		5.4	7.5	1/4		にぶい黄橙	F33-SE と接合
1945	攪乱		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	(18.4)		(4.8)	(8.2)	口縁～底部 1/4		灰白	内外面に煤付着
1946	包含層	D32-NE	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(8.0)	底部 1/3		灰白	
1947	包含層	G25-SW	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1	(16.0)				口縁～体部 1/6		灰白	
1948	表採	B8-SE	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－2	14.6		4.4	6.8	4/5	外面・自然釉	灰白	
1949	表採	土壇付近	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(5.6)	底部 1/2	内面・自然釉	灰白	
1950	包含層	F11-NE	山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅲ－1				(8.2)	底部 1/2	内面・自然釉	灰黄	
1951	攪乱（大溝上）		山茶碗	碗	東濃	Ⅲ－1				5.3	底部のみ	自然釉	灰黄褐	
1952	攪乱		山茶碗	碗	湿美湖西	Ⅱ				6.6	底部 1/2		灰白	墨書「又」
1953	攪乱	F34-SW	山茶碗	小碗	湿美湖西	Ⅰ－2				4.9	底部		灰白	
1954	包含層	I27-NW	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ	8.5	4.3	2.35		4/5		灰白	
1955	包含層	I27-NW	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅱ	8.2	3.7	2.6		4/5	自然釉	灰白	
1956	表採	土壇付近	山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		4.7			底部		灰	
1957	攪乱		山茶碗	小皿	湿美湖西	Ⅲ－2		(4.2)			底部		灰黄	
1958	包含層	F33-NE	中世陶器	片口鉢	常滑	5～6a 型式	(15.8)	(9.2)	(6.5)		口縁～底部 1/4	灰釉	にぶい赤褐 / 褐灰	
1959	包含層	H25-SW	中世陶器	片口鉢	常滑	5 型式	(26.4)				口縁部 1/8	内面・自然釉	灰白	
1960	包含層		中世陶器	甕	湿美	Ⅰ期	(45.0)				口縁部 1/10	灰釉	暗オリーブ / 灰白	
1961	攪乱		中世陶器	甕	常滑	10 型式	(37.2)				口縁部 1/8		にぶい褐	
1962	大溝内攪乱		中世陶器	甕	常滑		(90.4)				口縁部 1/8		橙 / 浅黄橙	
1963	攪乱		中世陶器	壺	湿美						体部片	灰釉	灰オリーブ / 灰白	井桁状線刻
1964	表採	土壇付近	中世陶器	壺	常滑	10 型式	(20.4)				口縁部 1/4		にぶい赤褐 / 灰黄	
1965	表採		土師質土器	Ⅲ		ロクロ	(10.25)	5.2	2.45		1/6		浅黄	
1966	包含層		土師質土器	Ⅲ		ロクロ	(10.5)	5.1	4.0		4/5		浅黄橙	
1967	包含層	D6-NE	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(11.9)	(6.7)	(3.4)		口縁～底部 1/10		浅黄橙	
1968	包含層	F33-SE	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(11.0)	(5.4)	(2.4)		口縁～底部 1/4		灰白	
1969	包含層	B3-NW	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(14.3)				口縁部 1/6		浅黄橙	
1970	攪乱		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	12.3	9.0	2.6		口縁部 1/2 欠損		灰白	
1971	包含層	H18-NW	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	13.0	8.2	2.75		1/2		灰白	
1972	包含層	F12-NW	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.9)	(7.0)	(2.5)		口縁～底部 1/4		灰白	
1973	攪乱		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(11.8)	(6.25)	(2.95)		1/3		浅黄	
1974	確認調査		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	11.35	5.8	3.15		2/3		灰白	
1975	包含層	土壇付近	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	10.1	4.85	2.75		口縁一部欠損		灰白	
1976	表採	土壇付近	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	10.0	7.7	2.65		ほぼ完形		灰白	
1977	包含層	土壇付近	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	10.55	8.35	2.7		口縁一部欠損		灰白	
1978	表採	土壇付近	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.7)				口縁部 1/2		灰白	
1979	表土		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	10.8	7.3	2.3		完形		灰白	
1980	攪乱		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(9.5)	(6.5)	(1.85)		1/3		灰白	
1981	包含層	C19-SW	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	9.4	7.0	2.1		2/3		浅黄橙	
1982	攪乱		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	9.0	5.3	2.2		4/5		橙	外面に煤付着
1983	包含層	E7-NE	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(8.5)	(7.2)	2.65		2/3		灰白	
1984	包含層	E7-NE	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	9.0	6.55	2.3		完形		浅黄橙	
1985	攪乱		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	10.0	8.6	2.5		ほぼ完形		浅黄	
1986	表土	C6-SE	土師質土器	伊勢鍋			27.75				口縁～体部 7/8		浅黄橙	内外面に煤付着
1987	攪乱	F34-SW	土師質土器	伊勢鍋			(26.6)				口縁～頸部 1/4		にぶい黄橙	外面に煤付着
1988	攪乱		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(25.8)				口縁～体部 1/4		灰白	外面に煤付着
1989	攪乱		土師質土器	内耳鍋		内彎形	(27.8)				口縁部 1/4		にぶい橙	内外面に煤付着
1990	包含層	E33-SW	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(24.2)				口縁部 1/3		浅黄橙	外面に煤付着
1991	包含層		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	10.5	5.7	2.4		完形		灰白	内外面に煤付着
1992	包含層	土壇付近	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	10.15	7.8	2.35		口縁一部欠損		灰白	
1993	表採	土壇付近	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(9.7)		2.5		1/3		浅黄橙	
1994	包含層		土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	(10.3)	(7.4)	(2.4)		口縁～底部 1/2		灰白	
1995	包含層	E30-NW	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	7.4	3.5	1.7		完形		にぶい黄橙	
1996	包含層	D32-SW	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	7.8	6.1	1.85		ほぼ完形		灰白	
1997	包含層	D32-SW	土師質土器	Ⅲ		非ロクロ	8.05	5.35	1.9		完形		浅黄橙	
1998	包含層	E33-SW	土師質土器	内耳鍋		内彎形	(23.1)				口縁部 1/5		浅黄橙	外面に煤付着
1999	包含層	G12-NE	土師質土器	内耳鍋		内彎形		(19.2)			底部 1/8		灰白	外面に煤付着

表26　包含層攪乱出土 土器・陶磁器観察表（2）

No.	遺構名	層位	種類	器種	産地	分類・様式	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	高台径（cm）	残存率	釉薬	色調	備考
2000	裹採	土壘付近	土師質土器	内耳鍋		半球形	(23.3)				口縁部 1/18		淡黄	
2001	攪乱		土師質土器	羽釜							羽部 1/10		灰白	
2002	攪乱		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.8)				口縁～体部 1/2		灰白	外面に煤付着
2003	包含層	D29-SW	土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.6)				口縁～体部 1/4		灰白	外面に煤付着
2004	攪乱		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(20.0)				口縁～体部 1/3		灰白	外面に煤付着
2005	攪乱		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(23.8)				口縁部 1/5		灰白	外面に煤付着
2006	攪乱		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(24.0)				口縁部 1/6		灰白	外面に煤付着
2007	攪乱		土師質土器	内耳鍋		くの字形	(21.6)				口縁部 1/10		浅黄橙	外面に煤付着
2008	大溝内攪乱		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	A2 類				(4.6)	底部 1/2	青磁	オリーブ灰 / 灰白	草花文
2009	包含層	I21-NW	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類	(16.2)				口縁部 1/20	青磁	オリーブ黄 / 灰白	鎬連弁文
2010	包含層	H26-NW	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類	(15.8)				口縁部 1/9	青磁	明緑灰 / 灰白	鎬連弁文
2011	包含層	G16-NW	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類	(16.0)				口縁部 1/16	青磁	明緑灰 / 灰白	鎬連弁文
2012	裹採	土壘付近	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部 1/6	青磁	オリーブ灰	鎬連弁文
2013	包含層	H21-NW	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部片	青磁	灰オリーブ / 灰白	鎬連弁文
2014	包含層	G21-SE	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部片	青磁	オリーブ黄 / 灰白	鎬連弁文
2015	攪乱		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部片	青磁	灰オリーブ / 灰白	鎬連弁文
2016	攪乱		貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部片	青磁	明緑灰 / 灰白	鎬連弁文
2017	包含層	H21-NW	貿易陶磁	青磁碗	龍泉窯系	B1 類					体部片	青磁	オリーブ黄 / 灰白	鎬連弁文
2018	包含層	G34-SE	貿易陶磁	青磁皿	龍泉窯系						底部片	青磁	明オリーブ灰 / 灰白	無文折縁皿
2019	攪乱		貿易陶磁	青磁盤		Ⅲ類					体部片	青磁	明緑灰 / 灰白	
2020	包含層	H20-SE	貿易陶磁	白磁碗		Ⅸ類	(16.0)				口縁部 1/8	白磁	灰白	
2021	包含層	H26-NW	貿易陶磁	白磁碗		Ⅴ類か					底部片	白磁	灰白	
2022	包含層		施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	後期Ⅰ	(11.2)				口縁～体部 1/12	鉄釉	黒 / 灰白	
2023	攪乱		施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	大窯 2	(12.25)		6.5	3.05	1/2	鉄釉	にぶい赤褐 / 灰白	
2024	裹採	土壘付近	施釉陶器	天目茶碗	初山		(11.1)				口縁～体部 1/8	鉄釉	褐 / 灰	
2025	包含層		施釉陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	大窯 1				3.8	底部	鉄釉	黒 / 淡黄	
2026	包含層	H26-NE	施釉陶器	緑釉小皿	瀬戸美濃	後期Ⅰ	(11.0)				口縁～体部 1/8	灰釉	灰オリーブ / 灰白	
2027	裹採	土壘付近	施釉陶器	稜皿	瀬戸美濃	大窯 2	(10.3)				口縁部 1/6	鉄釉	にぶい褐	
2028	攪乱		施釉陶器	内禿皿	初山					(5.8)	底部 1/4	鉄釉	にぶい赤褐 / 灰黄	
2029	包含層		施釉陶器	豆皿	瀬戸美濃	後期Ⅰ	(6.4)	(4.1)	(1.6)		1/2	灰釉	オリーブ黄 / 灰白	
2030	包含層	H25-SE	施釉陶器	折縁深皿	瀬戸美濃	後期Ⅱ	(21.8)				口縁部 1/10	灰釉	淡黄 / 灰白	
2031	裹採	土壘付近	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂	後期Ⅳ並行	(30.9)				口縁部 1/7		浅黄橙	
2032	包含層	G21-SW	施釉陶器	擂鉢	瀬戸美濃	大窯 2	(25.7)				口縁部 1/4		灰赤 / 灰白	
2033	攪乱		施釉陶器	擂鉢	初山		(28.4)				口縁部 1/6		褐灰 / にぶい黄橙	
2034	裹採	土壘付近	施釉陶器	擂鉢	古志戸呂	後期Ⅳ並行		(9.2)			底部 1/2		灰白	
2035	確認トレンチ		施釉陶器	口広有耳壺	瀬戸美濃	前期Ⅲ		(10.5)			底部 1/4	鉄釉	にぶい赤褐 / 灰白	
2036	裹採	土壘付近	施釉陶器	瓶子Ⅰ類	瀬戸美濃	前期Ⅲ～Ⅳ		(10.1)			底部 1/4	灰釉	灰オリーブ / 灰白	
2037	裹採	土壘付近	施釉陶器	瓶子	古志戸呂	後期Ⅳ並行		(9.6)			底部 1/3	鉄釉	浅黄橙	
2038	裹採	土壘付近	近世陶器	尾呂茶碗	美濃	登 5 ～ 6	(12.0)				口縁～体部 1/6	灰釉と鉄釉	灰オリーブ / 灰白	
2039	大溝内攪乱		近世陶器	腰錆茶碗	瀬戸	登 5 ～ 6	(10.1)		(6.05)	(4.1)	口縁～底部 1/4	灰釉と鉄釉	灰白・赤黒 / 灰白	
2040	裹採	土壘付近	近世陶器	腰錆茶碗	瀬戸	登 6	(8.4)		(6.8)	(4.4)	1/2	灰釉と鉄釉	浅黄・暗赤褐 / 灰白	
2041	裹採	土壘付近	近世陶器	腰錆茶碗	瀬戸	登 8	(10.1)				口縁～体部 1/5	灰釉	灰黄	
2042	裹採	土壘付近	近世陶器	糸目茶碗	瀬戸	登 8	(9.4)		(5.5)	(3.8)	1/3	灰釉と鉄釉	灰白・黒褐 / 灰白	
2043	攪乱		近世陶器	御室茶碗	瀬戸	登 6 ～ 7				(4.9)	底部 1/4	灰釉	灰白	
2044	裹採	土壘付近	近世陶器	御室茶碗	瀬戸	登 6 ～ 7				(3.6)	底部 1/3	灰釉	浅黄 / 灰白	
2045	裹採	土壘付近	近世陶器	小中	瀬戸	登 8 ～ 9	(8.4)		4.15	(3.2)	口縁～底部 1/4		灰白	
2046	裹採	土壘付近	近世陶器	小中小碗	瀬戸	登 8 ～ 9	6.7		3.0	3.3	4/5		灰白	
2047	大溝内攪乱		近世陶器	小中小碗	瀬戸	登 8 ～ 9				2.9	体部～底部		灰白	
2048	裹採	土壘付近	近世磁器	碗	肥前					4.15	底部		灰白	
2049	裹採	土壘付近	近世磁器	小坏	肥前		(6.3)				口縁～体部 1/3		灰白	
2050	裹採	土壘付近	近世陶器	丸皿	美濃	登 4	(10.4)		(2.75)	(5.0)	口縁～底部 1/2	灰釉	にぶい黄	
2051	裹土		近世陶器	志野皿	瀬戸	登 4	11.0		2.2	6.4	完形		淡黄	
2052	裹採	土壘付近	近世陶器	丸皿	美濃	登 4	(11.3)				口縁～体部 1/4	灰釉	灰黄	
2053	裹採	土壘付近	近世陶器	梅文皿	瀬戸	登 8 ～ 9				(3.8)	底部 1/2		灰白	
2054	裹採	土壘付近	近世磁器	染付皿	肥前					4.05	底部		灰白	
2055	裹採	土壘付近	近世陶器	染付皿	瀬戸	登 8 ～ 9				(5.8)	底部 1/2		灰白	
2056	裹採	土壘付近	近世陶器	染付磁器皿	美濃	登 11	(13.7)		(3.35)	(7.7)	口縁～体部 1/3		灰白	
2057	包含層	E33-NE	近世陶器	片口	瀬戸	登 7	(12.0)		8.15	6.6	3/4	灰釉	オリーブ褐 / 淡黄	
2058	攪乱		近世陶器	片口	美濃	登 8				(10.3)	底部 1/4	灰釉	にぶい黄 / 淡黄	墨書
2059	大溝内攪乱		近世陶器	片口	美濃	登 6 ～ 7	(16.7)				口縁部 1/3	灰釉	明黄褐 / 灰白	
2060	裹採	土壘付近	近世陶器	片口	美濃	登 6 ～ 7	(19.0)				口縁部 1/12	灰釉	オリーブ黄 / 黄灰	
2061	攪乱		近世陶器	片口	美濃	登 8	(17.7)				口縁～体部 1/4	灰釉	にぶい黄 / 灰白	
2062	大溝内攪乱		近世陶器	片口	美濃	登 8				(7.2)	体部～底部 1/2	灰釉	にぶい黄 / 灰白	
2063	大溝内攪乱		近世陶器	有耳壺	美濃	登 8 ～ 9				11.55	体部～底部	灰釉	明黄褐 / 灰白	
2064	裹採	土壘付近	近世陶器	黄瀬戸鉢	美濃	登 8	(26.9)				口縁部 1/10	灰釉	浅黄	
2065	裹採	土壘付近	近世陶器	練鉢	瀬戸	登 11	(24.0)				口縁部 1/16	灰釉	灰白 / 淡黄	
2066	包含層	E29-SE	近世陶器	小壺	美濃	登 7 ～ 8				6.8	底部	鉄釉	オリーブ褐 / 黄橙	墨書
2067	裹採	土壘付近	近世陶器	筒形香炉	美濃	登 6		(8.3)			底部 1/5	灰釉	灰黄	
2068	攪乱		近世陶器	筒形香炉	美濃	登 7		(7.9)			底部 1/4	灰釉	浅黄 / 灰白	
2069	裹採	土壘付近	近世陶器	筒形香炉	美濃	登 8	(8.9)				口縁～体部 1/6		灰白 / 灰黄	
2070	裹採	土壘付近	近世陶器	灯明皿	美濃	登 7	(9.6)				口縁～体部 1/11	灰釉	にぶい黄 / 灰黄	
2071	裹採	土壘付近	近世陶器	灯明皿	美濃	登 9 ～ 10	(10.3)	(5.0)	(2.0)		1/4	鉄釉	灰白	
2072	裹採	土壘付近	近世陶器	乗燭	瀬戸	登 10 ～ 11	(5.15)	2.4	2.45		1/4	灰釉	灰白	
2073	大溝内攪乱		近世陶器	擂鉢	瀬戸	登 8	(32.3)	(13.5)	(12.1)		口縁～底部 1/5		暗赤褐 / 灰白	
2074	大溝内攪乱		近世陶器	擂鉢	瀬戸	登 9	(32.8)				口縁～体部 1/6		暗赤褐 / 灰白	
2075	排土		近世磁器	神酒徳利	肥前					(3.6)	体部～底部 1/2		灰白	
2076	攪乱		近世陶器	小瓶	瀬戸	登 8 ～ 9				5.6	体部～底部		灰白	
2077	攪乱		磁器製品	戸車	肥前		幅 (3.4)	厚さ 0.75			完形		灰白	
2143	包含層	土壘付近	金属製品	不明			長 3.35							
2095	攪乱		土製品	招き猫									にぶい橙	
2096	大溝内攪乱		土製品	地蔵菩薩			高さ 4.95						灰白	
2097	包含層	F32-NW	土製品	人形									浅黄橙	
2098	包含層		土製品	人形			現存長 3.6						浅黄橙	
2099	包含層	F32-SW	土製品	動物									にぶい黄橙	現存高 5.25
2100	攪乱		石製品	茶臼			長 21.9	幅 8.3	厚さ 4.5					
2101	攪乱	E34-NW	石製品	砥石			長 18.85	幅 8.75	厚さ 2.9					
2102	攪乱		石製品	砥石			長 8.3	幅 3.05	厚さ 2.05					

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第234集
中屋遺跡
第二東名No.130地点
第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
浜松市－2
（第1分冊）
平成22年12月24日
編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422－8002　静岡市駿河区谷田23－20
TEL（054）262－4261
印刷・製本　松本印刷株式会社
〒421－0303　榛原郡吉田町片岡2210
TEL（0548）32－0851（代）